

今昔夢想

藥丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある平凡なオタク社会人が奇妙な夢から覚めてみれば、何故だか男の娘となって古代中国へと飛ばされていた。

そんな超展開から始まるダイジェストストーリー。

目次

1.	転生	1
2.	第一村人に発見される	10
3.	記憶喪失を演じるのは難しい	21
4.	初日の終わり	36
5.	始動	45
6.	始まったと思っただら終わった	64
7.	やり直しという強み	78
8.	本領の発揮	92
9.	不足ばかり	108
10.	夢の始まり	128
1.	苦く響く勝利の歌	141
2.	霸王との決着	157
3.	祝宴	173
4.	唐突な出会い	187
5.	一時の別れ	202
6.	後悔は先に立たない	212
7.	彼女が死に至る経緯	226
8.	そして彼女は眠るのだった	237
9.	残された者達	250
0.	一つの時代の終わり	262
1.	歴史を駆ける不老不死	273
2.	次の時代へ	285

3 4.	望まぬ再会	452	4 6.	今回はどこに？	625
3 3.	真実と苦悩	442	609		
3 2.	宮中の惨劇	426	4 5.	そして彼女は笑うのだった	595
3 1.	潮流に乗る者達	413	4 4.	二度目の顔合わせ	581
3 0.	強者の憂鬱	398	4 3.	望まぬ決戦	569
2 9.	光陰矢のごとし	386	4 2.	天罰	557
2 8.	実技訓練開始	368	4 1.	そして戦場へ	544
2 7.	英傑の誕生	355	4 0.	一日休戦	531
340			3 9.	相手もまた傑物	518
2 6.	遠くの豪族より近くの平民	325	3 8.	聞かないから答えない	503
2 5.	再会	310	3 7.	成長の証明	488
2 4.	管理者の役割	300	3 6.	白の異常性	470
2 3.	そして世界は動き出す		3 5.	想定通りにはいかない	

47.	精密検査	—
48.	少女の焦燥	—
49.	交わす剣、交わる記憶	—
50.	白き御伽噺	—
51.	運命とは	—
52.	強くなり、弱くなる	—
53.	つまみ食いの代償	—
54.	唐突な邂逅	—
55.	理を知る女	—
56.	立て直す為に打ち壊す	—
57.	手にした物	—
58.	名付け	—
59.	歌姫三姉妹	—

835 820 802 788 773 756 739 721 705 688 669 653 640

60.	最良の日	—
61.	最高の舞台	—
62.	作られた窮地	—
63.	感情の発露	—
64.	最後の休息	—
65.	はじめてのおめかし	—
66.	仕事人間の休日	—
67.	欠けたるものの無い素晴らしき	—
日々	—	—
68.	天意、失意、決意	—
69.	最後の晚餐	—
70.	愛するいつもの光景	—
71.	出陣式	—

1002 991 978 962 947 931 920 908 893 880 864 849

8 1.	お別れと第三の事件	1138
8 0.	出会いは続く	1124
7 9.	劉玄徳の始まり	1113
1102		
7 8.	そして彼女は語るのだった	1087
7 7.	長期滞在の始まり	1073
7 6.	第一村人発見	1062
7 5.	惜別	1045
1045		
7 4.	そして彼女は負けるのだった	1025
7 3.	天意の証明	1014
1014		
7 2.	軍師はとにかく眠りが欲しい	

9 3.	噂の真相	1290
9 2.	軍師二人	1277
9 1.	心技体	1265
9 0.	趙雲の槍	1255
8 9.	旧友との再会	1242
8 8.	桃園の誓い	1229
8 7.	桃花村の価値	1216
8 6.	家宝相続	1202
1189		
8 5.	変わり続ける変わらぬ故郷	1175
8 4.	知識と経験	1162
8 3.	運命の出会い	1151
8 2.	引き伸ばした門出	

9 4. 天涯孤独

9 5. 天の御遣い

13171304

1. 転生

俺は今、ノートPCの前にいる。

PCの前にいる、この言葉だけを切り取るならば、それは俺にとって馴染み深い風景と言える。

家にいる時も、仕事の時も、住所は違えど俺が一日の大半を過ごす場所だから。けれどそこ以外を見てみれば、異常しかない。

PCと机と椅子と俺以外、何もかもが真っ白で、天井、床、壁は影も形もないときた。うん、非常に分かりやすい夢の類ですわ。

「けどお、夢じゃないんだなああ〜」
うえ?!

「あはっ、変な声!」

確かに奇妙な声が出てしまったが……。

夢の類と分かって気を抜いた瞬間に声をかけられて驚かない人間は恐らくいない。だから奇声は不可抗力である!

「あははっ、ごっつめ〜ん!」

どうやら声は目の前のノートPCから聞こえてくるようだ。更に言うなら、ディスプレイに映し出された俺の大好きなアニメキャラからである。

……妄想が行き過ぎてこんな奇妙な夢を見ているのだろうか？

俺はしばらく仕事を休まないといけないのかもしれない。

「大丈夫、あなたはおかしくなってないよ！ アニメキャラの姿をしてるのはねえ、あなたに取り入る為の手段としてやっているだけなんだよ！」

俺の好きなキャラクターが、デスクトップ上でこちらに向かって手を振りながら喋っている。

これだけ切り取ればちよつとした感動の光景である。

だがあまりに台詞が明け透けすぎないだろうか？

声も口調も仕草も完璧だが、あのキャラクターは取り入る為、なんて言い回しはしない。
い。

「では無事ファーストコンタクトを取れたという事で、説明に入らせてもらいます」
つておい！ しまいには口調すら模倣しなくなっちゃったよ！

「ここは事務手続きみたいなものですし、真面目にしないと怒られるのですが……けど君が言うのならしょうがないな！」

あつ、気を遣わせちゃってなんかすんません。

あー、こりや夢確定ですわ。精神科に相談しに行かなきゃならん類の夢ですわ。

「とはいえ話す事なんてあんまりないんだけどね！」

まず一つ！君が戦国時代に行ったとして、誰になつたら最後まで生きていけると思う？」

はあ、これまた突飛な質問。あれですか？ネット小説なんかにある転生の前振りつてやつですか？

「質問を許した覚えはないよ！　けど今から許しちゃう！　そうなんだよね、転生なんだよね、それ以上は詳しく言えないから聞かないでね！」

あつはい、答えてもらつてありがとうございます。

「さあさつさと答えを捻り出すのだ！」

あつ、歴史的事実とか色々加味してもらつて、伝説とか、逸話とか知つてると補正がかかりやすいよ！」

いや、補正つて何だよ。ゲームかなにかか？

行くのはリアル戦国じゃなくて無双やBSR的なとこなの？

「具体的には言えないんだよ！　……どつかの馬鹿がクイズ形式で答えちゃつてさ、識の間でそれが流行っちゃつたんだよね。それで、明確な基準が決められちゃつて、面倒が増えたんだわ。マジやつてらんない。でもサービスとしてちよくちよく独り言挟む

から、それでよろしく」

急に疲れきったOLっぽい感じに。

あの、キャラのイメージ崩れるんで、マジでやめていただけませんかね。

「あはっ！ ごめんねえ！ というわけで決めちゃってー！」

でも二つ注意！ 貴方が日本人だから、ローカライズする為に日本の強い男の人で決めない駄目なの！

ジャンヌダルクとか言われても困っちゃやう！

あと神話とか混じっちゃ駄目！

イザナギだ……とか言われてもついていけないの！」

そうですか、わかりました。

……転生系物語は好きだけど、めちやくちやな導入だな。夢にしたって適當すぎる。俺の妄想力って案外残念仕様だったんだな。

「色々調べるためにPCも用意してあるから活用してね！ あつ、戦国時代を強調しちゃったけど、実際に室町時代に飛ばされるわけでもないからね！」

おつ、そうなのか、勘違いしかけてたわ。重要な情報ありがとう。

しかし逸話があっても伝説となるとなあ。あんまし最近の人だと駄目そうだな。

……イチローの逸話だったら行ける？

「貴方がその人の逸話を深く知って信じている程、更にその逸話を知っている人、信じている人が多ければ多いほど補正がかかるの！」

んーそうなると完全にネタだし無理そうだな。

「後ね、いつまでも悩めるほど私は暇じゃないから制限時間をつけるの！制限時間は30分！精一杯の譲歩だから了承してね！」

マジか！人生を左右する時間として30分は短すぎやしないか？！

「早く決めると良い事あるかも？ それじゃあスタート！」

良い事あんの？ なら上杉謙信で。

「はやいー！」

知ってる事が補正に繋がるなら、謙信公のお膝元に生まれてる訳だし、実は確定なんだよね。知り尽くしてると言っても過言ではないし。

武略も経済も統率も宗教も出来る万能な人だし、中身が俺でもどうにか生き残る事は出来るでしょ。

「迷いが無いようなら確定！それじゃあさっきの制限時間プラス30分を知識の収集時間としてプレゼント！ここで得た知識は転生しても残り続けるから、効率良く調べてね！」

えっ、それ超重要情報じゃん。

「うん、だからちよつぱやで決めた君は超有利！ 誰に対して有利って事はないけどね！」

ん？その言い方だと、俺以外に転生者はいないのか？

「うんうん、いないよー。それじゃあ時間も無駄に出来ないし、残り59分でスタート！ 理解しなくても、とりあえず目に入れるだけで全然構わないからね！」

急な展開にちよつとわくわくしてきた。俺の妄想力、見直したぜ。

真つ先に調べるべきは医食住だろう。

戦い方に関しては上杉謙信の補正があるだろうから後回しでもかまわない。まあ補正つてのがどこまでかかるか分からないから、後回しにするだけで全く調べないって訳にはいかないだろうけど。

ググル大先生を開いて、真つ先に検索をかけたのは音楽である。一応耳に入れても記憶されるかもしれないので、音楽の原点と言われているクラシックのメドレーを流す。

音楽を聴きながら心を落ち着けて、いざ検索。

医については何が何に作用してという学術的な部分を省いて、実用的な部分だけを抜き出していく。家庭の医学、薬学、整体、効率的なトレーニングといった部分だ。

リンクで飛び、タブを大量に使いつつ、文字をぎりぎり目で追える速度でスクロール

しつつ、出来る限り効率的に調べたのだが、時間の半分近くを使ってしまった。が、生きるという点でもっとも大事な部分だ。おろそかに出来ない。

食。料理としての食より、農業について調べる。稲、小麦、野菜の育成方法、醤油味噌の作り方、虫害の回避法、肥料の作り方等である。作物に関しては医学について触れて知った栄養価が高く、作り易そうな物をいくつかピックアップ。それ以上となると時間が足りない。

住。日曜大工とサバイバル術的な物を調べる。コンクリ、石鹸、船、コンパス、武器、火薬等々。製作方法を知っていて決して損はない物を思いつく限り検索する。

他に良い知識はないかと頭を捻りつつ、適当に思いついたものを検索しては読み飛ばして行く。戦術戦略論であったり、政経であったり、人心掌握術であったり。中には必要なの？ と思うものもあったが、とにかく詰めに詰め込んでいけば。

「しゅーりょーりょー！ 時間いっぱいだよーいー！」
ふう、つかりたー。

俺はぐったりとした体を背もたれに預け、真つ白な天を仰いだ。

「すっごい集中力だったね！ それじゃあ君にこれから転生をしてもらいます！ 用意はいいですか？」

えっ、ちょっと早すぎませんか?!

「言ったでしよ、時間いっぱいだった！ それだけ君の時間として融通したって事なんだからね！」

あ、マジすか、あざっす。この恩は一生忘れません。

「いいよいいよ、無理だろうけど全然忘れてもらって構わないよ！ それじゃあどういう形で向こうに飛ぶか分からないけど、お達者で！」

最後の独り言だけど、君には果たさなきやいけない使命があるから。それを果たさない限り外史に縛られ続けるのでよろしく。それ以外は好き勝手に生きるといいよ」

えっ、なにそれ？ちよちよちよ！そこんとこ詳っ!!

PCが消え去り、直後に浮遊感。

驚きのあまり意識に空白が生まれ、妙に冷静になる。

こういう展開はアニメでよく見たなあ、ギャグアニメなんかでき、キャラクターが崖なんかから飛び出して、空中を走る真似をするんだよ。それで、

……

……

ぎやあああつあああああつ!!!

古典的なノリである。お約束が大好きな俺が生み出した夢なのだ、こういう終わり方

は非常に正しいと言える。

しかし正しいからと言って受け入れられるかどうかは別である。

まさか高所から落ち続けるというのがこれほど怖いとは。

ギャグ担当のキヤラ達よ、気軽に笑ってすまんかった。

2. 第一村人に発見される

ひゅー、ばしやり。

落下後着水。

あまりに長く続く落下に意識を遮断して耐えていた俺に、その変化は急激過ぎた。

「ちよ、まー！」

溺れる!!

咄嗟の防衛本能なのだろう、手足が勝手に暴れだす。が、周囲には藁もない様で、水の中特有の動きにくさを実感するだけに終わる。

それは更なる焦燥を生む結果となった。

「誰か、たすけ！」

目を開けようとして、目に激痛が走る。

ざらりとした水が目に入った結果だと頭の隅ではわかるのだが、行動に直結させる余裕がなく更なる焦りが募る。

「大きな音がしたと思ってきてみりあ、あんた、そこで何をしよるんじや?」

しゃがれた酷く冷淡な声が聞こえた。

「溺れて！助けて！」

「そんな浅い小川で溺れるわけがなかるうに」

「はい？」

お婆さんの呆れを多分に含んだ声に、冷静になる。

一旦冷静になつてみれば目を閉じていても色々と分かつてくる。

ゆつくりとした水の流れがある事からここが川である事、自分が寝転んだ状態で川に浸かっている事、川の深さが座つた状態で胸に届かないぐらいしかない事、とても澄んだ水の匂いである事等。

命の危険はなさそうとわかり、心底ほつとする。

落ち着きを取り戻した俺は手で顔を丁寧に拭い、ゆつくりと目を開いた。

目に飛び込んだできたのは木々を背景にした老婆の姿。

下を見れば、泥で少しだけ濁つた水に浸かる自分の姿。

そして周囲を見渡せば、そこは見知らぬ森の中だと気づかされた。

……一先ずの状況は把握できた。

先ほどの目の激痛は、俺が着水した時に巻き上がった泥が目に入ったからだろうとか。

水温の冷たさとぬるさの微妙な加減から、今の季節が春か秋なのだろうとか。

木漏れ日の光の強さから今が朝から昼にかけての時間なのだろうとか。

落ち着けば余裕が出来る、状況が理解できれば余裕が出来る。

余裕が生まれれば、現状がどこまで異常極まっているのかを理解できてしまう。

俺は何故知らない場所において、川なんぞに放り込まれている？

「つあ」

何もかもがわからないという未知への恐怖に吞まれる寸前。

「あんたの事情は分からんが、ともかく川から上がったらどうじゃ？」

というお婆さんの至極真つ当な言葉に救われた。

そうだ、風邪を引いてしまう。急いで川から出なければ、と常識に縋って無理やり意

識を逸らす。

すぐさま川から上がり、お婆さんに礼を言う。

「ありがとうございます、色々な意味で助かりました」

「わたしは何もしたらんが……まあ無事みたいで何より。しかし、何があってそんな小

川で焦ってたんじゃ？」

お婆さんはなんとも言い難いような表情をしつつ、聞いてきた。

それは誰より俺が聞きたい事である。何がなんだか、一つもわからん。

とりあえず正直に言うしかない。

「いえ、すみません、何もわからないんです。何でここにいるのか、ここがどこなのかすらも」

言葉にして、再び不安感がよみがえって来る。

それが表情に出たのだろう。

「ふうむ、嘘を言っているわけじゃなさそうじゃな。転んだ拍子に小川に落ちて、川底の石にでも頭をぶつけたのかも知れんのかな」

お婆さんは氣遣うように呟く。

頭をぶつけて、日本人としての記憶だけが残ってる？なんだそれ？小説かなにかかよ……。

そこで俺の脳内に一つの憶測が生まれた。あの奇妙な夢が夢ではないという、荒唐無稽な憶測が。

それを確かめる為、小川を覗き込む。泥も底に戻っており、綺麗に澄んだ水面には俺の姿が鮮明に写った。

それは見知らぬ顔で、しかも、美少女の物だった。

……別角度の驚愕の事実が浮かび上がってきたが、黙殺する。黙殺する。黙殺する。大事な事で重大な事なので三度念じた。

頭を舐り、傷がないかを確認。たんこぶ一つないようだ。

次いで服を見る。真つ白な袈裟のような服を着ているようだ。

服がさごそと探り、手持ちの道具はないかを確認。さりげなく下半身のチェックして……超絶安心。

周囲と川の中を見渡し、俺の物と思わしき物は無いか確認。何も無い。

少し跳んだり腕を伸ばしてみたり、身体を動かす。軽い動作確認ではあったが、それでもこの身体が驚くほどに滑らかに、力強く動く事はわかった。

以上の事を踏まえて、俺は本当に転生したのだと気付かされた。

全部夢であるという一縷の望みは残されているが、感覚や感情があまりにリアルである今、それに縋って行動するのは危険だろう。

「マジでか、なんで俺なんだよ……」

「大丈夫かい？何か思い出したかい？」

心配そうに聞いてくるお婆さん。本当の本当に困っていると理解してもらえたらしい。

「いえ、さっぱりです。怪我とかは無いですけど、手持ちの物も記憶もないみたいで、どうにも完全に無事とは言えないみたいですね」

ハハハ、と乾いた笑いが出てくる。

「ふむ、ともかくそのままではまずいじやろ。一先ずはうちに来なさい」

「えっ、いいんですか？」

「まあ多少の打算是あるしの。じゃが連れて行く前にちよつと確認させてもらいたいんじゃないが…手を出示してもらえるかの？」

「ええ、それぐらいでしたら」

俺は素直に手を見せる。

「ふむふむ、やはりたこ一つできたらん綺麗な手じゃの。それに剣も佩いていないようじゃし……大丈夫じゃろ」

ああ、確かに手を見ればある程度どういふ生活をしていたのかわかるか。

綺麗な手というのは労働者階級ではあり得ない事であり、それだけで身分が高いという証になる。

お婆さんが言つた打算というのは、おそらくそこだろう。

だとしたら、ここは素直に従つた方が収まりが良いか。

もし何かあつたとしても、身体の調子から多少の困難ならどうにか出来るという確信がある。

「私の家はすぐ近くじゃ。ついて来なされ」

そうして俺はかくしやくとしたお婆さんの後をついて行くのであつた。

お婆さんの家は小川から歩いて一分という本当にすぐ近くにあった。

「今息子をつれてくるから、中に入って待つておくれ。何も無い所じゃが、寛いでおくれよ。ああ、濡れた服じゃが、外に干し竿があるからそこに吊るしておくとい。その後は中に置いてある麻服を適当に着ておくれ」

「えっ、あ、はい。お気遣いありがとうございます」

「わたしのお古で悪いが我慢しておくれ。それじゃあ行つてくるよ」

去つていくお婆さんを見送り、住居に目をやる。

……俺は驚いていた。

教科書で見たままの竪穴式住居が鎮座ましましておられる。

とりあえず中に入つてみる。

台所的なものがあつたり、竈があつたり、寝床的な所があつたり、藁で編まれた衣装ケースがあつたりと生活感バリバリである。未だこの建物が現役であると容易に知れる。

「戦国時代じゃないとは言つてたけどよ……まさかそれよりずっと前とは、竪穴式住居が現役だったのつていつまでだ？ 平安時代には寝殿造とか、板屋になつてたよないや、地方だったらもつと後まで現役だつて？」

時代の考察がしにくい。

色々な事に頭を悩ませつつ、お婆さんの言うとおり服を着替え、外に濡れた服を干していく。

「……これはもうあーだこーだ一人で悩むより、帰ってきたお婆さんに聞こう」
再び中に入り、藁で編まれたござに座り込む。

「ふう、気温も結構暖かいし、風邪は大丈夫そうだな。あーやつと落ち着けた」
一人になって落ち着いた所で、自分の身について考えてみる。

川で確かめたのはかなり大雑把だったし、冷静になって現状をある程度受け止めた今なら、何か新たな発見があるかもしれない。

色々確認していこう。

まずは俺の外見について。

非常に受け入れ難い問題であるが、避けようのない問題なので真つ先に処理しておきたい。

今の俺の容姿を簡潔に表すなら、恐ろしいまでの美少女顔である。ちなみに上はないし下はある。あくまで美少女顔なだけだ。

しかし何故上杉謙信を要望してこの容姿なのだろう？

上杉謙信ではない、という事はないと思う。夢での出来事、白を基調とした袈裟、驚くほど軽妙な身体というのは分かり易い要素だろう。

何か容姿について補正がかかる様な逸話でもあっただろうか？

……

…

「あつ、あつたわ」

恐らく上杉謙信女性説の作用ではなからうか。

戦国BASAR〇でもその片鱗は描かれており、かのキャラは女性か男性か敢えてはつきりと示唆せず、中性的な声と容姿にされていた。

「マジか、あんな眉唾伝説でここまでの補正がかかつちやうの？ 逸話補正やべえな」

一応、納得できた。

俺はしっかりと上杉謙信として転生しているようだ。

「頭の中身はどうかね？」

俺が前世でどういった人生を歩んだのか、二つの事柄以外はしっかりと覚えてる。

どういう最後を迎えて、なんとと言う名前だったのか以外は。

新しい人生を送らせる上で、不都合だったからだろうか……思ったより喪失感があった。たかが名前、覚えていても困るだけの最期だろうに。

少し感傷に浸る。

「後で名前考えないとな」

少しずれた答えをわざと溢し、切り替える。

「二時間で精一杯調べた事は覚えてるのかね」

流し読み、斜め読み、飛ばし読みだった筈だが、PCで調べた内容は細部までしっかりと頭に入っていた。

良かったと深く安堵する。この環境を見るに、俺の知識はどれもこれも値千金だ。

上手く使いこなせれば、村民として暮らすにしろ、どこかに仕えるにしろ、王として立つにしろ、不足無くこなせるだろう。

だがしかし、この世界についての知識だけはまるつきり存在していないのは気がかりだ。

「自分のスタートラインがわからんというのは厄介だな」

俺という存在が唐突に現れたのなら良い。

生活環境から察するに、戸籍管理はまだまだ杜撰な時代だろう。人が一人増えた所で大した騒ぎにはならないと思われる。役に立つ所を見せればどんな場所でもすぐに馴染めるだろう。

だが川に落ちた衝撃で前世の記憶に目覚め、今世の記憶が上書きされてしまった。となるとかなり厄介だ。

社会的立場、人間関係のしがらみというのはチートを振りかざしてどうにかなるもの

ではない。不安定な状況下でいきなりチート無双なんかして軋轢を生みまくれば、最悪の場合は延々と命を狙われるか、籠の中の鳥として生涯飼い殺されるなんて事態になりかねない。

「とはいえ、調べる手段も限られるだろうしなあ。ともかく、今は目の前の事に集中だな」

自身に過去があつたとして、もし重要な立場にあれば向こうから接触してくるだろう。

こつちからは動く機会があればその時に、ぐらゐの感覚で行こう。
そう心に決めた。

3. 記憶喪失を演じるのは難しい

考え事がある程度まとまった所で婆さんと男性が家に入ってきた。俺は立ち上がって二人を出迎える。

男性は恐らく先ほど言っていた息子さんなのだろう。見た目20代後半といった所か。がっちりとした体格と理知的な瞳をしているのが印象的な人だ。「すみません、外に出ておりまして、来るのが遅れてしまいました」

男性が謝罪の言葉を言ってきたので、

「いえ、急にやってきた私に問題がありますので、お気になさらず」とりあえず物腰柔らかくおもねっておこう。

さて立ち話もなんだという事で、俺達は床に腰を下ろした。

俺と向き合う形で二人は座り、早速とばかりに男性が口火を切る。

「私はこの一帯を治めております、姓を曹、名を参と申します」

ああ、息子さんが村長さんだったのか。こりや色々手間が省ける。

しかし村長さん、やたら丁寧に喋りますね。

「わたしの名前も言っていなかったね、黄だよ」

うん、名前的にここは中国で確定かな。

「私も名を返したいのですが、それすらも失われているようで、申し訳ありません」

「母からどうやら記憶喪失であると聞き及んでおります、決して謝られる事ではありません。ですが確認したい事もありますので、色々質問をさせて頂いても構いませんか？」

「ええ、私も色々と聞かれた方が記憶を思い出すきっかけになるかも知れませんので是非ともお願いします。それと、そこまで形式ばった喋り方だと緊張してしまうので、崩していただけると助かるのですが」

「そうですか、では少しだけお言葉に甘えさせてもらいます」

にこりと人好きのする笑顔を見せる曹参さん。何だか雰囲気も少し柔らかくなった気がする。

とはいえ、目の奥はそれほど笑っていないのだが。

「気付けば家の裏の小川の中におられたという事ですが、経緯などは一切覚えておられませんか？」

「はい、記憶もはっきりしませんし、持ち物も着ている服以外にはありませんでした。服は今裏手にあつた物干し竿にかけてあります」

「そうですか、一応何かの手掛かりになるかもしれませんので、後で服の確認をさせてく

ださい。

それでは次に、怪我等はなされていませんか？」

「外傷は全くありませんし、痛みなども今のところはありませぬね」

「それは不幸中の幸いです。では覚えていた事は何かありますか？」

「言葉……ぐらいですかね。ここがどこの国なのかすらわかっていません」

その言葉すら何故しやべれているのかわからない始末である。

なんだろう、あのアニメキャラクターがそういう能力でもプレゼントしてくれたのだろうか？

文字は未だ見ていないが、それも理解できると楽なだけだなあ。

「それはまた難儀じやのう……」

お婆さんの言葉と眼差しには深い同情の色があった。どうやらお婆さんは俺の事を信じてくれているようだ。

見目麗しく、華奢で、手も綺麗な見た目完璧な美少女が困り顔を晒す。それだけで何とも保護欲が湧くよね。

それにそんな上玉の子がわざわざ自分達を騙すメリットがない、と見ているのかも知れない。

だが同情顔のお婆さんに対して曹参さんは難しい顔をして少しだけ下を向いている。

なにやら自分の思考に沈んでいるよう？

しばらくして顔を上げた曹参さんは、

「……どうにもちぐはぐな話ですね。記憶を失っておられる割にはとても理性的な部分
が気になります、ですが嘘を言っておられるような不実な様子も見られません」

探る様に、瞳に強い意志を乗せて見つめてきた。

「足どころか腰がつく小川で溺れかけるといふ醜態を一度晒していますので、慌てる事
だけはしないようにとどうにか取り繕っているのです」

俺は困ったような微笑で見返す。それ以外の対応が出来ない。

「そうなのですか？」

曹参さんはお婆さんの方向を向き、問いかける。

「ああ、演技じゃなく、本当に溺れそうじゃったのう」

お婆さんのしみじみとした言い方に醜態を思い出し、気恥ずかしくなって顔を背けて
しまう。

その様子を見てお婆さんはかかっと快活に笑った。

曹参さんは困ったような微笑を浮かべる。

「ふむ、聞きたい事は聞きましたので、後は着ていたという服を見てこようと思います」
そう言つて曹参さんは立ち上がって外へ。

ものの数分で戻ってきた曹参さんは再び難しげな顔。

「……ふむ、外に干してあった衣服が手がかりとして、ある程度の状況整理と、無理やりですが一応筋が通った仮説を立てられそうです。

眩いまでに白くとても丈夫な生地、縫合は恐ろしく繊細で解れの一つも無く、飾り気は少ないですが細部の意匠などは丁寧に作り込まれていました。

この辺りで一番大きな都市である沛県にも、貴方が着ていた服を持ちえる人間はいません。あの様な代物、首都咸陽に住まう大商人や上流階級の貴人ではか手にはできないでしょう。

です。ですので咸陽から来たという可能性が最も高いと思われます。ですがここは交易で良く使われるような整備された道から大きく外れています。あのような服が所持できる裕福な商人や身分の高い方が、たまたまこの村にやってくるという事は有り得ないのです。

結論、交易路から外れる道を通らざるを得なかった身分の高い人物では？ という推測が一番可能性が高いと思われれます。

何も持つておられなかったと言う話ですので、道中盗賊に教われたか、はたまた夜逃げの最中だったのか、詳しい理由まではわかりません。

ですがこの憶測が当たっているのなら、沛県にいる咸陽に詳しい役人や商人の伝手を

頼ればある程度の見当はつく事でしょう」

「すごいなこの村長さん、干していた服を見ただけで、そこまで色々考えてたのか。やたら丁寧に喋っていたのも、俺の身分が高い可能性を考慮してたのね。」

「何もかもが分からない状態でしたので、そうした指針となる言葉をもらえたのは非常に嬉しいです。」

「しかしすごいですね。曹参殿は非常に聡明であられる上、広い人脈をお持ちとは」

「ほほ、息子の聡明さに驚いておられるな！ わたしの息子は沛県で役人をおつた俊英なんじゃよ！」

「とても嬉しそうなお婆さんの声がかットイン。」

「役人ってすごいのだらうけど、沛県ってどのレベルの都市なのだらうね？」

「首を傾げてながら微笑んでいると、」

「役人といっても下級役人で、沛県での反乱の余波を恐れて村に逃げ帰った軟弱者ですよ。一応その経歴を買ってもらい、周囲一帯の顔役をやらせてもらっています、人の上に立つ器ではありません」

「お婆さんの息子自慢を、曹参さんは苦笑いで否定した。」

「逃げ帰ったなどと言わんでおくれ。村に戻らなければ殺されていたかも知れんのじゃから……」

……なにやら事情があるらしい。

曹参さんの口は堅そうなので、お婆さんをちよつと揺らしてみると、憤懣やるかたないとはかりに言葉が溢れる。

曹参さんは必死に止めようとしているが、老人のヒステリーには敵わない。

どうやら曹参さんが役人として勤めていた都市でクーデターが起きたようだ。

そのクーデターを成功させた人物は曹参さんの顔見知りの上司で、その上司さんに都市で一番高いポストに据えられた人物もこれまた知り合いの人であるらしい。

お婆さんがなにより許せないのは、二人とも曹参さんの実直さを知っていながら、村に追いやつた事だと言う。

ただ働いていただけとはいえ、一応国側についていた曹参さんを見せしめにする事も無く見逃したんだから、温情があつたと言えるんじゃないだろうか？

ともかく曹参さんの事情はわかつたのだが、お婆さんの不満は尽きないらしく、役人や国に対する罵詈雑言がひたすら続く。

曹参さんは深いため息をついて、止めるのを諦めてこちらに向き直ってきた。

「どうか、どうかこの事は内密に願います」

深く深く俺に頭を下げる曹参さん。

何で謝るんだろう？ と疑問に思い、ああそうかと思ひ至る。

俺は身分の高い人間である可能性が高いつて思われてるんだよな。俺が記憶を取り戻してそれが中央に漏れるのではと思ってるのか。

どうやらお婆さんもその事に思い至ったらしく、口を噤んで青い顔をしている。

「私はお婆さんに助けられた身ですから、不利になるような事は決して漏らしません。ですから頭を上げてください」

はつきりとした口調で約束すれば、少し空気が弛緩したのがわかった。

「ありがとうございます。その代わりという訳ではありませんが、この村には記憶が戻るまで幾ら居ていただいても構いません。」

今は麦の収穫が終わったばかり、住人全員で脱穀作業にかかりきりなので大した援助は出来ませんが、落ち着き次第出来る限りの援助もさせてもらいます」

「えっ！ いえいえ！ 滞在の許可は非常に嬉しいのですが、援助までしていただくのは心苦しいです」

「ご遠慮なさらず。出来る限りとは言いましたが、私に出来る援助などここを住居として提供する事と、都市部との定期的なやり取りに一言添える事ぐらいですから」

「ここを提供して……ここはお婆さんが住んでおられるのでは？」

「母には本宅に戻ってもらうので、お気になさらないでください」

「わたしはここを出る気は無いよ。持て成すならお嬢ちゃんを本宅に呼べばいいじゃ

ろ。あの家に帰るのはまだ辛いじゃよ」

「年頃の娘さんなんだから、客人として迎えるのも問題があるんだ。父さんの事を引き摺っているのはわかるけど、少しかだけ我慢してくれないか？」

「あつ、事情がおりなんでしたら、お気になさらず。私男なんで、本宅でも構いませんし、ここでお婆さんと一緒に暮らすのも全然苦じゃありませんよ？」

「ほら、嘘までつかせて気を遣わせてしまったじゃないか」

「いえ、嘘じゃないんですが……」

「わたしと一緒に住むのは苦じゃないと言ってくれておるよ。右も左もわからんじやろうし、世話役も必要じゃろ？ わたしが責任を持って世話をしようじゃないか」

俺が女じゃないって所はスルーしちゃうのね。

「う、む。……本当によろしいのですか？」

「ええ、お婆さんさえよろしければ是非」

「決まりじゃ！ 娘は育てた事がなかったからね、今から楽しみじゃよ」

呵々大笑と朗らかに笑うお婆さんに釣られて俺も微笑む。

しかし性別を打ち明けるタイミングが無い。

あの、と無理やり挟み込もうとしたタイミングで曹参さんの補足が入った。

「記憶が戻るか、私の伝手で貴女の事が分かりましたら、信用の置ける行商隊などを紹介

して故郷に送るよう手配させてもらいます」

「…何から何までお世話をかけます。何か手伝える事がありましたら、家事でも畑仕事でも何でも手伝いますので、言ってください」

「いえ、それは……」

「記憶が戻らない可能性もあります、見つかった私の家が大した家柄ではなくてお礼が出来ない可能性もあります。是非とも何か手伝わせてください」

「……いつて頭を下げれば折れざるを得まい。」

「……そう、ですね。刺激がある事で何か思い出すかも知れません。では数日母についていただいで、色々を見て回ってください。その中でご自身で出来そうな事を探していただきたく思います」

「はい、お心遣い感謝します。それと、出来ましたら色々とお話を聞かせてもらいのです。何か思い出すきっかけになるかも知れないので、お願いします」

「ああ、これは申し訳ない。本来ならそちらを真つ先に話さなければいけないのに、大分脱線してしまいました」

「すまないねえ、こりやわたしが悪いね。家族の話になるとつい口を出してしまうんじゃない」

「お気になさらず。それで色々話を聞かせてもらいたいのですが、変な事、失礼な事を

聞くかもしれませんが、記憶が無い故仕方なしと流していただけると助かります」

「はい、どのような事を聞かれても裡に秘めましょう」

「ではこの国の事を大まかで構いませんので、教えていただけますか？」

そうして俺は曹参さんに様々な事を聞いていった。

お婆さんの国に対する苦言から吹っ切れたのか、結構ぶつちやけた事も答えてくれて非常に助かる。

ついつい聞き過ぎてしまつて長い時間拘束してしまつたが、曹参さんもお婆さんも嫌な顔せず丁寧に答えてくれた。

「聞きたい事は、大体聞き終わりました。また気になる事が出来たら聞いても良いですか？」

「ええ、私が知っている事でしたら何でもお教えいたしましょう。」

それではもう日も暮れる時間です。私は一度本宅に戻つて、必要になりそうな物を持ってまたこちらに来ようと思います。母さん、今日はここでご飯をもらおうと思つてるんだけど良いかな？」

「ああ、全然構わないよ。ここ最近忙しくて、家族で揃つて食事も出来なかつたから嬉し

いよ。お嬢ちゃんも構わないかい？」

「ええ、勿論です」

……あつ、話を聞くのに夢中になって俺が男なの説明できてないわ。

「あのっ」

「では急いで行つてきますので！」

ああつ、行つてしまった。

「それじゃあわたしは夕餉の準備でもしようかねえ」

「あつ、手伝いますよ！」

「ええからええから、お嬢ちゃんは座つとき。色々話を聞いてたから考えをまとめるなりしたいじゃろ？ 後は考え事ついでに仮の名前なんかも考えてくれると助かるのう」

「あー確かに呼び名が無いと不便ですよ。でもそれらしい名前なんていきなり思いつけないですよ」

「名前なんて住んでいる場所、職種、立場なんかで適当に決めているもんさね。例えばあなたは白い服を着てたから白、なんて具合にね」

お婆さんは料理の準備に取り掛かりながら、かなり適当っぽく言う。

俺の負担にならないよう軽く言ってくれているようだ。んー仮名だし、変な意味がなければそれでいいかな。

「他に候補も思いつかないですし、白と書いて「はく」に決めちゃいます」

「即決じゃの。まああんたがそれでいいなら構わんのじゃが。」

それじゃあ私は火の加減に集中するよ。白は息子が来るまで適当に考えをまとめる
と、「い」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

さて村長に聞いた質問を整理しよう。

Q、まずここは何処なのでしょう。

A、秦の泗水郡の沛県という場所です。沛県は交通の要衝で、城壁もある立派な都市
ですよ。

一番最初にした質問がもう核心でした。

国名を聞いてここが古代中国だと確信。

識さんよ、確かに室町時代じゃないとは聞いたけどさ。

それに秦ですよ、そして貴方の名前ってそうさんでしたよね？

Q、お名前の字を教えてください。

A、曹参と書きます。

良かった。文字もちゃんと読めるよ！

Q、沛県でクーデターを起こした人と、トップについた人の名前を教えてください。

A、反乱を起こした人物は役人である蕭何、県令についた人物は劉邦と言います。

Q、正直この国の事どう思っていますか。

A、このままではいけない、正さなければいけないと思っています。

二個目の質問からはもうただの確認になってたわ。

古代中国の秦末期に来て、劉邦に伝のある曹参と知り合う。

つまり、これが俺の使命って事なんだろうね。

にしても劉邦と来たか……四面楚歌を習った時にちよつと調べたぐらいだなあ。今では劉邦の略歴とその周辺人物の簡単なプロフィールぐらいしか記憶にない。

その後は国情を詳しく聞いたり、知っておくべき常識を聞いたり、自身の知識との相違がないかを調べていく。

結果、魔法や超能力が飛び交うファンタジー要素などなにもない、普通の古代中国だと分かった。

一応呪術や祈祷といった物はあるらしいが、眉唾物なので別段注意しなくてもいいだろう。

考え事をまとめて理解した事、それはすぐにも覚悟を決めなければいけないって事だ。

ここまでお膳立てされているとなれば、争いはすぐさまやつてくるだろう。

そして戦いとなった時、戦国武将に転生した俺に求められるのは人をこの手で殺し、人を殺す戦略を練る事だ。

俺はそれをなす為の力を既に持っていて、力を振るわなければいけない使命とやらもある。

後は覚悟を決めるだけだ。

4. 初日の終わり

しばらく考察に耽って瞑目していると、声が聞こえてきた。

「曹参です、中に入ってもよろしいですか？」

おお、一声かけるとは紳士的。

「大丈夫ですよー」

「失礼します。母さん、兔を貰ってきたんだけど、捌く道具はあるかい？」

「裏庭に全部用意してあるよ」

「そっか、それじゃあ母さん、捌いてくるから料理の準備を進めてくれ。後、寝具はここに置いておくから、空いた時間に準備してあげて」

「任せんさい。兔肉は臭みもくせも少ないから、香草を少し使ったお汁にしようかね」

二人の声ははしゃいでいる。お肉つてのはやっぱり贅沢品なんだろうなあ。

歓迎会つて事で特別に用意してくれたんだらうね、なんとも嬉しいね。

再び外に出て行く曹参さんの背を見て思い付いた。

捌く工程を見せてもらおう。

「曹参さん！ 兔を捌く様子を見せてくださいー！」

曹参さんは振り向き、少し思案するようにしていたが、一つ頷き、

「見て楽しい物ではありませんが、記憶を取り戻すきっかけの一つになるかもしれないね」

そうして俺は兎以外の動物の捌き方も同時に教えてもらい、実際に少し手伝わせてもらった。

初めての経験に、手が震えてしまった。

だが、これは間違いなく必要な経験だった。

「兎ってこんなに美味しいんですね」

「そうだねえ。他の動物に比べて癖も臭いもないし、食べると元気が出るから最高の食材だねえ」

捌かれた兎をフルに使い、兎肉入り香草スープ、兎出汁のお粥、ホルモン野菜炒めへと調理された。

うん、ちよつと薄味だけど美味しい。

「最後の方は白さんも料理を手伝っていたみたいですが、大丈夫でしたか？」

「最初だけ包丁の重さにもたついておったが、そこに慣れれば包丁の使い方はそれらし

かったよ」

振り下ろせば骨すら簡単に断てそうな大振りの包丁だったが、重くてもたついていた訳じゃない。

その逆、予想よりも酷く軽かったから戸惑ってしまったのだ。けれどそんな事を言つて混乱させても仕方ないだろう。

「包丁が使えればお婆さんの料理の手伝いも出来ますよね、次から頑張ります！」
とりあえずここも好感度上げに徹しておこう。

そうして和やかに会話が進んで行く。

そして料理が全て平らげ、食後のお水を飲んでリラックスしている最中の事、曹参さんが小声で話しかけてきた。

小声でという事は、洗い物を済ませているお婆さんには聞かせたくないんだろう。

あ、洗い物の手伝いは素気無く断られたよ。今日いっぱいには客人待遇らしい。

「実は明日沛県の役人が我が家にやつてくるのですが、母は先ほどの様子から見て取れるように、役人を酷く嫌っているので会わせたくないのです。出来ましたら明日は母が本宅に来ないよう気にかけてはもらえないでしょうか？」

ふむ、確かにあの劍幕を考えると、誰彼構わず突つかかつていきそうだ。

お世話になるし、悪い人じゃないし、お役所に逆らって斬首とかは避けてもらいたい。「はい、わかりました。悪巧みでないのでしたら協力させてもらいます」

「治安や収穫高等の確認だけの筈なのでご安心を。しかし、いきなりこんな頼み事をししてしまつて申し訳ないです」

「曹参さんも私にとつては大恩人ですから、この程度の頼み事ならいくらでも手伝います。けど、どうしても引き止められないつて事もあるかも知れないので、そこはご了承願います」

「ええ、もし来られてもちよつと面倒というだけです、気負わなくて大丈夫です。それに母は余程の事がないと本宅には立ち寄りませんし、勘の良い人ですから下手な事をする逆で勘付きます。ですから、それとなく注意していただくだけで構いません」

「はい、承りました」

その後、洗い物を終えたお婆さんも交えて会話が続く。

二人の思い出話で会話に花が咲く。

なんととも和やかで穏やかな空気。

だがそれもずつと続けていられる訳は無く。

「おや、楽しくて気付きませんでした、もう外が暗いですね。この辺りでお暇しないと

明日に響きかねません。

母さん、明日は村の会合が本宅であるから、白さんの事を頼んだ」

「ああ、麦の予想取れ高が上がってくる日だったね。まあお嬢ちゃんには麦の脱穀を手伝ってもらおうと思ってるから、心配せずとも大丈夫だよ」

そういう話で誤魔化すのね。

もしくはちゃんと代表者を集めた上でなにかするのかな？

「今日は色々ありますがどうございしました」

「いえいえ、困った時はお互い様です。では白さん、母さん、おやすみなさい」

曹参さんは笑顔で家を出て行った。

「それじゃあお婆さん、寝る準備をしましょうか」

「……」

「お婆さん？」

気のせいか、お婆さんの目じりに涙が？

「あ、ああ、そうだね、今日は色々ありすぎたから疲れてるじやろ？ 早く寝てしまおう」

どうしたんだろ？

気になりつつも、こちらから聞ける雰囲気ではない。

とりあえず寝る準備を終わらせる。

「それじゃあ火を消すよ」

ジュツツつという音と共に真つ暗になる。

本当に何も見えなくなつてしまったので、さつきと布団に入り込む。するとしばらくして、お婆さんが話しかけてきた。

「今日は本当に、ありがとう」

ん？俺つてお礼を言われるような事をしただろうか？

「今日は私がお世話になりつばなしだったと思うんですが？」

「白がいてくれたおかげで、久方ぶりに息子と話し、笑い合えたんじや。感謝してもしきれん」

「えつ、お二人ともとても仲が良く見えたんですが、喧嘩でもされてました？」

「いいや、しとらんよ。けど、面と向かつて話したのは二ヶ月ほど前になるかねえ」

「それはまた、結構な期間ですな」

「その頃に夫を亡くしてねえ。夫との思い出に溢れた本宅にいるのが辛くなつて、ここに逃げてきたんじや」

「そういう経緯があつたんですね、けど曹参さんは会いに来てくれなかつたんですか？」

「あの子も村長と顔役の仕事が忙しくて、どうにも時機が合わなかつたんじやろな。と、今の私なら考えれる」

「考えられる?」

「一人になって自分の殻に閉じこもって、考えが凝り固まっておったんじやろうな。息子は愛想をつかしたなどと考えて、一人で勝手に気まずさを感じておった」

「えっ? お婆さんそんな素振り全然してませんでしたよ?」

「白が間にいてくれたおかげで、冷静に自分と息子を見れた。そうして見れば息子は以前と変わりなく、むしろ昔以上にわたしを気遣い、心配をしてくれていたのだと気付けたんじや。」

白が色々聞いてくれるから自然と思い出話に花が咲かせ、息子との時間を埋めることもできた。

そもそも白がきつかけになつてくれなければ、私の老い先短い人生を考えるなら、息子と話す機会すら無く孤独に死んでいたかも知れん」

「さすがにそこまでは……」

「無いかも知れん、が、なんにしる助けられたのは事実じや。白は私の唯一の思い残しを取り払ってくれた。だから、ありがとうじやよ」

「私自身が何をしたという訳ではないみたいですが、お礼、受け取らせてもらいます」

「ああ、白は勝手に感謝されれば良い」

「ふふつ、なんですかそれ」

「それじゃあ、もう寝るよ。今日は色々ありすぎて疲れたわい……」
「そうですね、おやすみなさい。明日もよろしくお願いします」

……

……

……

「あれ、お婆さん？ えつ、ちよつと死ぬ間際っぽい会話だなあと思つてたけど、あれフラグだったの?!」

ぐーっ すびーっ

「あつ、肩透かしパターンね。良かった、超良かった」

起こした体を再び布団に潜り込ませ、一息つく。

まだ眠る気は無かったが、やたら目が冴えてしまった。

「丁度いいか」

色々考える事は多い、睡魔を待つ分には尽きる事はないだろう。

明日は何をやるうか。

劉邦とは何時、どういう形で関わるのかな。

重たそうな中華包丁があまりに軽かったな。

動物を捌くのは思ったより抵抗なかったな。

人を殺す事にも抵抗が無かったりするのかな。

お婆さんの感謝が嬉しかったな。

ここは一人一人感情を持って生きている現実なんだなあ。

だったらやっぱり人を殺すのは抵抗あるなあ。

けど殺されるのは絶対嫌だ：

とにかく生きよう……

頑張ろう……

つらつらと取り留めの無い事を考え続けていけば、自然とまぶたが落ちてきて、視界も意識も暗闇に落ちていくのだった。

5. 始動

「ああ、わざわざありがとうございます。ご飯は食べていくかい？ そうなのかい？ なんじゃあ、慌しいねえ。あんまり無理するんじゃないよ。それじゃあね」

外からお婆さんの威勢の良い声と困ったような男性の微かな声が聞こえてくる。

まだ少し眠いここはよそ様の家である、二度寝の誘惑に負けてはいけない。

寝ぼけ眼を擦りながら、入り口に目を向けると、お婆さんと目が合った。

「こりやすまないねえ、起こしてしまつたかい？」

戻ってきたお婆さんは申し訳なさそうに言うが、入り口から見える外は微かに明るい。現代人にとつて起きるには早過ぎる時間なのだろうが、光源の乏しいこの時代の人だつたら、太陽を目いっぱい利用するためにこの時間から活動していてもおかしくない。

ならこのサイクルに慣れなきやならない。気合を入れて身体を起こす。

「丁度目が覚めました。さつき男性の声が聞こえましたけど、曹参さんですか？」

「ああそうだよ。朝から息子が鶏と卵を持って来てくれてねえ。色々嬉しくて声が大きくなつてしまつたようじゃな」

「そうでしたか、それは嬉しいですね」

満面の笑みのお婆さんにこちらも笑顔を返し、思いつきり伸びをする。

「んーっ、それじゃ朝食のお手伝いしますね!」

「いいのかい? 考え事であまり眠れてないなら、もう少し寝ていてもいいんじゃない?」

「いえ、色々と慣れていきたいので、是非手伝わせてください」

「そうかい、助かるねえ。朝真つ先にする仕事は裏の小川から水を汲んで、大甕を満たす事だね。朝一番じゃないと大きな動物と出会う可能性が出てくる、出来るだけ早く汲まなきゃならん。これが一日の中で一番の重労働になる。それから火を起こして朝食の準備だね」

お婆さんが色々説明しながらやる事を教えてくれる。これが本当に助かる。

「分かりました。それじゃあ私が水を汲んでくるので、お婆さんは火を起こしてくれませんか? 多分そっちの方が効率的ですよ」

「確かにそうじゃが、白よ、水というのは思うよりも重たいんじゃないよ。あんたの細っこい腕と足じゃあどれだけ時間がかかるか……」

「大丈夫ですよ」

そう言つて俺はキッチンスペース横に置かれた大甕の傍に行く。大甕の大きさは高さ1mと少し、幅1m弱ぐらいのかなりしつかりとした作りの物。

その隣に木で作られた手桶が2つある。高さ50cm弱幅40cmちよつとと、これまたがっしりしつかりとした物だ。

おそらくこの手桶で俺が落ちていた小川から水を汲んでくるんだらうけど……手桶に水を満杯にして往復なんてしたら、大の男ですらへとへとになるだらう重労働だ。

けどね、

「それじゃあ行つてきます」

俺は手桶じゃなく、大甕を持ち上げる。

3桁kgは余裕でありそんな大甕がちよつと重いかな？ ぐらいの感覚で持ち上げるこの身体のチートスペックよ。

傍でお婆さんがあんぐりと口を開けている。

うん、驚かせて申し訳ない。正直冗談だったんだよ。

浮かせるぐらいは出来るかな？ と思つて、重さを確かめる為に触つてみたら、持ち上げられちやつたんだよね。

これ、もう突つ走るしかないよね？

「裏の小川からでいいんですよね？」

「あ、ああ」

そしてそのまま水を入れてくるのであつた。

やはり水を入れるとかなり重くなる。

が、持てない程ではなかったので一安心である。

甕を落とさない様に水を零さない様にゆっくり歩いて戻る。

「入りますよー」

一声かけて家に入ると、お婆さんは口を開けたままの姿で固まっていた。

「よつこいしよ」

と定番の掛け声と共に甕を下ろし、お婆さんの指示をもらう。

「水汲みが終わったんですけど、次はどうしましょう?」

はつとした顔のお婆さん。うんうん、ちゃんと瞳に光が戻った。

「……うん、考えるのは後にしようそうしよう。何時の間にもやら水が満杯になっておる

し、火を起こすか鶏を捌くでしょう」

多分火を起こす方が大変だし、そつちをやればお婆さんの負担は軽くなる。

けど、少し考えていた事がある。

「昨日曹参さんに説明してもらった事を実践したいので、一人で鶏を捌こうと思います」

「大丈夫かい?」

「これも訓練ですよ、もし分からなければすぐに聞きに来ます」

「そうかい、なら頼もうかね。火起しはまた次に教えよう。それじゃあ火を起こすにも時間がかかる、ゆっくりでやっておいで」

「はっ」

俺は鶏二羽を持って裏庭に行く。

小さい納屋つぽいものがあり、そこには道具が全て揃っていた。

俺は小さく深呼吸をする。

気絶している鶏を二羽とも吊るし、しばらく待つ。

血が頭に下りた事を確認し、包丁を手取る。

わざと力を込めず、包丁を押し付ける。

今の俺が力を入れて包丁を引けば、いとも簡単に首は落ちるだろうが、それでは駄目だ。

暴れる鶏を手で押さえつけ、がりごとと首根を押し潰す。

一匹目の鶏の首が落ちる。

二匹目の鶏も同様に取り掛かる。

首を落としてしばらくは血が抜けるの見つめる。

その後は羽を筆り、内臓を丁寧処理する。

こうして鶏の下処理は終了である。

綺麗に手を洗いながら、一息をつく。

なんで俺が鶏を進んで捌こうとしたのか、分かる人は簡単に分かるだろう。人を殺す為の準備である。

こんな事で準備になるのかよと思うが、少なくとも、暴れる鶏を押さえている時にこみ上げてくる物はあった。だから無駄ではないと思う。想像は耐性を作る。

目を閉じ、人を思い浮かべ、手に残った首を切り、内臓を取り出した感触をその想像に当てはめる。

再び、こみ上げる物がある。

「ぐうっ」

けれど胃は空っぽで、こみ上げてきたのは液体だけだった。

口に広がった酸っぱい液体を吐き捨て、深呼吸。

これ以上は朝食を食べるのに支障を来たす。

お婆さんの所に鶏を持って行こう。

「おお、綺麗に処理できているねえ。丁度火も安定してきたから、調理を始めるかね」

料理の大部分はお婆さんに任せる。

というか手伝いを申し出ても全く任せてくれない。

まあ絶賛記憶喪失中で、しかも料理を全くした事がなさそうな手をしてるし、仕方ないね。

とりあえず邪魔にならない所で見ながら、調理方法と食材の説明をしてもらおう。料理はほどなく出来上がった。

「それじゃあ頂こうかね」

「はい、いただきます」

いただきますの言葉に普段には無かった重みがあったと思う。頂いた鶏のスープと卵と鶏のおじやは心底美味しかったです。

「ごちそうさまでした。」

「それじゃあ朝食を食べ終わったら、脱穀の手伝いにでも行こうか」

木の食器を洗って一息ついていたら時、お婆さんがそう言った。

勿論お手伝いはやぶさかではない。

お婆さんは立ち上がり、壁にあった木の棒を持って外に向かう。

「はい、行きましょう」

そうして連れられて行った場所にはもう数人の人が集まっていた。

「黄さん、おはようございます」

気付いた人が真つ先にお婆さんに声をかけてくる、人望あるね。

「ああ、おはようさん。今日は私の所の客人が手伝つてくれる事になってね」

「白と言います。今日はよろしくお願いします」

一歩進み出て、先制ご挨拶。

「おお、そうなのかい？ よろしくねえ」

「えらい別嬪さんだねえ。脱穀は大変だけど、頑張りましょうねえ」

おお、好意的に受け入れられている。さすがの村長母パワーだね。

軽く雑談をしていると更に人が集まってきて、老若男女数十人程やって来た所で開始の合図がかかった。

お婆さんが大きな蔵のような建物に近づいていき、エジプト錠のかかった扉を開ける。お婆さんが持っていた木の棒は鍵だったらしい。

中には収穫された麦が山のように積んであった。それを両手いっぱい持って外に出る。

何度か往復して地面に麦を穂先を揃えて敷き詰める。

建物の中にあつた長い木の棒とヌンチャクのような二本の短い木の棒が蔓で繋がつた物を持つてくる。

そして長い棒で地面に敷き詰めた麦を叩く。

ある程度叩いたら、ヌンチャクつぽい木の棒、扱ぎ箸というそれで麦を扱いていく。地味ですげー大変な作業である。

作業は一時間ほど行われ、長めの休憩が宣言された。

ほとんどの人は手をぷらぷらと振っている。あれ、相当に握力要るもんね。あまりに地味で苦勞する作業の中で、俺はもうやっちゃう決心をしていた。

千歯扱ぎを作ろう、と。

「あの、木を切る道具を貸してもらえませんか？」

「扱ぎ箸を作るために蔵の中に置いとるが、どうするんじや？」

「脱穀の道具を作ろうと思います」

「道具？何か思いついたんかい？」

「はい、後木と竹も使いたいんですが……」

「んーあるにはあるけどねえ……」

「決して無駄にはしませんから！」

お婆さんの目をしっかりと見て、懇願する。

「まあ、いいかのう。いきなり辛い作業をやらせてしまったし、お詫びじやの」

「ありがとうございます。早速かからせてもらいますね」

長さ1m直径20cmほどの丸太に長さ2mほどの乾いた竹、手斧がある。
うん、十分だ。

まずは竹を切って行こう。

節の部分を切れば、長さは十分。節の仕切りを取り除き、後は細くなりすぎない様気をつけつつ、縦に何度も割っていく。

出来た長方形の竹を、今度は笹の葉の様な形に整えていく。

よし、これで歯の部分は完成。

次いで丸太を縦に一刀両断する。うん、綺麗に真つ二つである。さすがチートスペックだ。

もう二回縦に切れば、平坦な板が出来上がった。

いえす、これにて完成。

本来は歯を金属にして、歯を木に打ちつけて固定するのが一番なのだろうが、青銅なり鉄なりを使うには実績がある。

俺は道具を持ってお婆さんの元に戻ってきた。

「なんだい、もう出来たのかい?」

「ええ、形だけですけどね。これが上手く行ったらちゃんと完成させましょう」

そうやって俺は道具を準備する。

土と石を盛って30cmぐらいの台を作り、その上に板を置く。

板の上に乗って土台がしつかりしているか確認をし、板が地面と平行になるよう調整する。

そして板の上に歯となる竹を並べていく。並べ終えたらその上に板を載せて、最後に適当な二人に板の両端をしつかりと押さえてもらうよう頼み、俺が麦を持って板に乗つれば準備完了である。

後は板から飛び出た竹の歯の間に穂先を通し、下から上に引けば……

パラパラパラ

三度ほど引けば麦からは穂が綺麗に取れている。

おお、簡易型とはいえ取れるもんだな！

「おおおー」

と周囲がどよめいた。

気付けば脱穀作業をしていた全員が俺の周囲にやってきていた。

皆興奮しているようで、子供達からはやりたいコールが起きている。

「これは便利だねえ、扱ぎ箸よりずっと楽で速い。作り方も簡単そうだ。白や、すごい物を作ったねえ」

「思い付きだったんですが、上手く行きました。この竹の部分を金属にして、それをしつ

かり木で枠組みを作ってくつつければ、もつと楽になりますよね」

「木組みの台は作れるだろうが、銅は貴重品だから無理じゃな。しかし竹でも十分に使えそうじゃないか。白や、木材も竹も使って良いから、これをもつと作ってくれないかい？」

「お安い御用で」

手斧は一つしかないのです、その後俺はひたすらに木と竹を切っていくのであった。

「皆、お疲れ様」

お昼過ぎ、作業を休憩して雑談に耽っている所に曹参さんがやってきた。

皆笑顔で出迎えているところを見ると、相当慕われているのが分かる。

曹参さんは皆に挨拶を返しつつ、最後に私とお婆さんの二人の前にやってきた。

「母さん、白さん、お疲れ様です」

「お疲れ様。朝はありがとうねえ、差し入れ随分と助かったよ」

「鶏本当に美味しかったです。ありがとうございました」

「ここしばらく親孝行が出来てなかったから、むしろこれぐらいでしか感謝を返せずに

申し訳ないぐらいですよ」

「すみません、親孝行なのにご相伴に与ってしまつて」

「あつ、いえ、白さんにはすぐく助けられましたから、気にせず頂いてください」
別に助けた覚えは……つて、お婆さんと同じ理由かな？

「しかし急にどうしたんじや？ 確か会合があつたじやろ？」

「その、実はね、やってきた人物が母さんに会いたいと言つてて」

「歯切れが悪いのう」

「ここでは言いにくいんだ、本宅まで来て欲しいんだけど……」

「本宅に……」

お婆さんの目に複雑な色が雜じつた。

少し思い悩むように目を瞑り、唸る。

しばらくして開かれた目には、決意の色があつた。

「それは、相当な大事な事なんだね？」

「ああ、お願いだ」

「はあ、分かつたよ。皆！ ちよつと私は用事で出るから、仕事の続きを頼んだよ！」

はーい、とあちこちで声上がる。

同時に休憩を切り上げる雰囲気の流れ、準備が始まる。

「お手数ですが、白さんにもついてきてもらいたいです。知人は非常に顔の広い人なので、白さんについて何か気付く事があるかも知れません」

何やら事がとんとん拍子に進むな。

「そうなのですか、ではついて行かせてください」

流れるように進む事態にテンションが上がり、自然と明るい笑顔が浮かぶ。

曹参さんは照れたように視線を逸らし、ふと表情が変わった。

「あの、白さんの近くにあるそれらの道具はなんでしよう？」

視線の先には作ったばかりの脱穀道具。

「ああ、それは白が作ってくれた脱穀道具じゃよ」

そう言ってお婆さんは麦を持ち、喜々として使い方を実践してくれる。

「なんと、これはすごい発明ですよ！」

「もつとしつかりとした歯と土台が作ればもつと楽なんですけどね」

「……白さんはすごいお人なのですね」

評価がうなぎ登りだ。さっさと使つとくものだね、知識チート。

一緒に仕事をした皆と惜しまれつつも別れ、曹参さんの家まで歩く。

歩いている間に千歯扱ぎもどきについて聞かれる。

俺が思いついたわけではないが、ここはもう開き直つてしまおう！

「扱ぎ箸の閉じた状態をいっぱい作れないかなって発想だけです。そんなに難しい物

じゃないですよ?」

「確かに機構としては非常に簡易ですよ。何故私達はこんな簡単な形に行き着く事が出来なかつたのか……」

「人は新しい物が好きな癖、目の前の形という物を変えたがらんからのう。今日はそれをはつきりとした形で認識させられたわ」

「あの発明は農民の生活を一変させるものです。本当に、どうしようか……」

「公開すればいいですよ。それが世の為人の為という物です」

「いいのですか?物として売り出すか、国に献上品として差し出せば、白さんの地位は一生安泰ですよ?」

「一時間の作業の中で生まれた発想です。どうせ誰かがすぐにも思いついていましたよ。そんな物に縋って生きるのもどうかと思いますしね」

「白さんは大きい人ですな」

「あつ、けど発想した人間の権利を保障しないと将来的にまずいか」

「権利、ですか」

「権利を守り、利用する枠組みを国が作らないと、発想や閃きつて世に出てきませんしね」

「……白さんは、本当に記憶喪失なのですか?国の政策にまで明るとは……」

あつ、警戒された？ これは喋り過ぎたかも知れないな。

「記憶を失う前は学問を極めた仙人でもやってたんですかね？」

冗談っぽく茶化せば何とかありませんか？

「仙人……私はそれが真実かもしれないと、半ば思っておるよ」

「えっ？」

俺と曹参さんは同時にお婆さんを見つめる。

「いや、馬鹿げた事を言つたよ。冗談じゃ冗談。ほら、急ごう、客人を待たせとるんじゃ

ろ？」

「いきなりどうしたんだよ？ ちょっと、母さん?！」

お婆さんはスタスタと早足で行つてしまった。

大甕を平気な顔で持ち上げてた所も見られてたし、お婆さんからしたら冗談には聞かえなかつたんだろうな。

そして程なく、やたらめつたら大きいお屋敷までやつてきた。

今まであつた竪穴式住居ではなく、平屋型の住居である。

周囲一帯を囲む塀があり、敷地内には大きな土蔵が幾つもある。

大きな蔵には収穫され、粃が剥かれた状態の米や小麦が入っているらしい。

つまり曹参さん一家はただの村長一家ではなく、豪農的な立ち位置っぽい。

「ふあー、大きい建物ですねえ」

「客人は客間かい？」

「ああ、待つててもらっているよ」

「ふう、客間なら大丈夫かね。それじゃあ作業も残つとるし、早く終わらせよう」

お婆さん的には作業云々より、家自体に長居したくないんだろうな。

「それじゃあ行こう。それと、前もって言っておきたい事があるんだ」

曹参さんが前を歩きながら、言いにくそうに切り出した。

「誰がいてもどんな内容の話でも騒がず、一先ずは最後まで話を聞いて欲しい」

「そこまで念を押す何かを誰かと話すんだね。ちゃんと心積もりはしておくよ」

「私は状況も良く分かってませんので、聞き手に徹します」

「ありがとうございます」

そうして一つの部屋の前で足を止めた。

「劉邦様、母を連れてきました」

「?!」

お婆さんが驚いた様子を見せるが、先ほど約束をした手前、そのまま声を荒げる事はしなかった。

けど、分かりやすいぐらいに不機嫌な表情と雰囲気振りまいている。

「おお、わざわざすまない。というか、早く入ってこいよ。ここはお前の家だ、何を気遣う必要がある」

ここにきて少しの違和感。

「そういう訳にも行きません。それでは失礼します」

「……」

「失礼します」

お婆さんは無言で、私は一応一言かけて頭を下げ入室する。

頭を上げれば、目の前に美女が一人いる。

十畳ほどの広い部屋の中央には大きな丸机が置いてあり、その奥に美女がいる。

左手に曹参さん、右手にお婆さん、奥に美女がいる。

何度だって繰り返す。

部屋の中には俺、お婆さん、曹参さん、ほりの深い顔立ちで、柳眉と赤茶けた艶やかな髪が特徴の、とても美しい女性しかいない。

あれ？ 劉邦さんは？ なんてきよるきよると周囲を見渡して現実逃避をしていた

俺は、美女の放った一言に現実を突きつけられる。

「初めまして。私は劉邦と言う者だ。いきなり呼びつけてしまって申し訳ない」

ああ、やはり聞き間違えではなかったようだ。

……

ああもう！　なにがどうなつてんだよ！　史実物だと思つたら恋姫無双だったのかよ?!

歴史を多少なりとも知つていふという大きな武器が失われる恐怖と不安に、頭がぐるぐるとし始める。

が、もしかしたら歴史のあれやこれやなんだかんだで、劉邦が男とされただけなのかも知れない。と気付いて少し落ち着く。

色々と生まれる矛盾を一切無視しての、無理やりの納得ではあつたが心に余裕は生まれず。

そして一つ確信したことがある。

転生時に言われた俺の使命とはきつと、この人を皇帝にする事に違いない。

ここに至るまでの妙な流れの良さに、それだけは理解できた。

ならここはいつちよ、この人について見極めようか。

6. 始まったと思ったら終わった

「いやはや、家長を差し置いて上座に座って申し訳ない。ただの客人として来たんだが、曹参が堅くてなあ」

「貴女はこの沛県で一番の権力者なんですから。この待遇ですら相当失礼に当たる物なんですよ?」

「はいはい、讓歩ありがとよ。まあとりあえず皆座つてくれ」

曹参さんと気安い感じで会話をする劉邦さんに、俺とお婆さんは目を丸くしてしまっている。

お婆さんは噂で聞いていた話と目の前の二人の様子が一致しない事に、俺は劉邦さんが目も覚めるような美女である事に驚いていた。

「しかし、二人は何をそんなに目を丸くしてるんだ? まだ驚くような話はしてないが……」

「劉邦様が来られるという事をそもそも話せていません」

「ふむ、そこからか。しかし曹参、そこのお嬢ちゃんはなんだ? どうして連れて来た?」

「劉邦殿に見てもらおうと思ひまして」

「あん？　どういう事だ？」

「この人は白さんと言いまして、昨日母さんが見つけた記憶喪失の少女です」

「ほう、それで？」

「私にはどうにも見透かす事が出来ませんでした。ですので、人を見る目を持った劉邦殿に見ていただくこうと思いまして」

「見た感じ良い奴だと思いが？」

「それだけだと不安なので、もっとちゃんと見ていただきたいのですが？」

「はあ、分かったよ、請け負おうじゃないか。それじゃあ白とやら、少しいいかい？」

「はい、勿論構いません」

「そうか、それじゃあ曹参、そっちは母殿に事情の説明をしておいてくれ」

「任せました」

そうして曹参さんはお婆さんの隣に言つて説明を始め、俺は劉邦さんに近付いて対面する形に。

「それじゃああまり意識せず、普通に会話をしてくれると助かる。聞きたい事があれば聞いてくれて構わないし、話にくい事は話さなくてもいいからな」

「はい、わかりました」

「まずは自己紹介と行こう。私は劉邦、一年前に沛県の県令についた者だ」

「私は白と言います。昨日お婆さんの家の裏の小川で溺れている所を発見され、記憶喪失になっている事に気付き、そのままお世話になって怪しい者です。白と言うのは、私が着ていた白い服から取った仮名です」

「中々波乱万丈な人生だな。記憶喪失と言ったが、何も覚えてないのか?」

「私自身の事、川で溺れていた経緯、この国の事、何も分かりませんでした」

「嘘じゃあない、か。昨日今日と曹参の母殿と一緒に過ごしていた様だが、どうだった? どう思った?」

「とても充実していましたよ。本当にお婆さんには感謝してもしきれません。怪しい私を拾ってくれたのもそうですし、色々お世話を焼いてくれました。この恩は必ず返します」

「本心だな。なんだ、記憶も心根も本当に真つ白じゃないか」

「……わかるんですか?」

「なんとなくではあるけどな。それじゃあ記憶喪失の相手にこれ以上聞く事もないって事で、お嬢ちゃんから聞きたい事はあるか?」

「聞きたい事言いたい事それぞれ一個ずつあります。聞きたい事は反乱の事ですね、言いたい事は私が少女ではなく」

「劉邦殿、こちらの反乱時の説明と説得は終わりました。そちらはどうです?」

「大体終わったな。この子は記憶も性格も真つ白で間違いない。後は反乱の事について聞かれたんだが……なあ曹参、このお嬢ちゃんと私を引き合わせた理由つてのは人物鑑定するだけつて訳じゃないんだろ？」

「ええ、劉邦殿が見初め、白さんが受けるならばの話ですが、私達の未来に巻き込んでしまおうと思つています」

なんと、巻き込むとはつきりと言うのね。

まあそういうの、嫌いじゃないよ。

「心根は真つ直ぐ、聡明な受け答え、確かに伸び代はある人物だとは思う、が、過去が分からないと言うのはかなりでかい不安要素だ。それを払拭する何かがお嬢ちゃんにあるのか？」

「白さんは劉邦殿もおつしやられた通り、非常に聡明で胆力もある人材です。ですがなにより、脱穀の効率を数倍に引き上げる発明をしながら、それを国益の為に公の物としようと云つた点は高く評価されるべき長所でありましょう」

「おいおい、お嬢ちゃんは記憶喪失なんだぜ？そんな事あるはず」

「息子が言っているのは本当です、白は仁智力全てにおいて優れております。わたしもこのような狭い村の中で過ごさせるのは勿体無いと考えておりました」

二人からの熱い持ち上げ。照れるね！

「んー二人のお墨付きって訳か。しかしだ、お嬢ちゃん意志つてのを聞かない訳には
いかない」

ふむ、身内だけじゃなく相手の話もしっかり聞くというのは、偉い身分になるとどう
にも難しくなるっていうのに、平然とやってのけるのね。

為政者として中々素晴らしい素養をお持ちのようですね。

「記憶が戻るまで無理をせず、曹親子のご恩に報いる為に村に残るといのが常道な
でしょう。ですが恩人二人が外を見る事を勧めるならば、劉邦様に付いて行き、外の世
界に目を向ける事こそが正道なのでしょう」

「では？」

「恩義に報いた後、劉邦様のお役に立ちに参上する事をここに誓わせてもらいます」

「本当に良いのか？私の事を現時点ではほとんど知らないだろ？」

「そうですね。けれど貴女が、素性も知れぬ怪しい私を良い人であると断じて受け入れ
てくれる、そんな良い人である事は理解しております」

「頭が回るだけじゃなく、弁までしっかり回るのか。こりや確かに得難い人材だわな。

あい分かった！それじゃあ反乱についてと、これからの事について話させてもらおう
じゃないか。曹参、母殿にはどこまで話した？」

「劉邦殿が私を村に追いやったのではなく、私の意志で村に戻ってきていたという所ま

です」

「なら念の為に導入の部分からしつかり説明しようかね」

話を聞くに、クーデターを企んだのは曹参さんの方で、劉邦さんは事が起こる直前になつて話の全容を聞いたらしい。

そしてその全容とは、曹参さんを中心に手を汚していない役人数人で手を組み、一人の役人を数年をかけてでつち上げる。そして国から派遣された人間をやつちまつて、その作り上げた役人に全ての責任押し付け、人望に厚い劉邦さんがトツプにつくという計画であつた。

お婆さんは目を見開いて驚いている。そりやそうだ、反乱の首謀者が自分の息子だつたんだから。国に忠誠を誓っているなら憤死物じやない？

まあ昨日さんざん国に対して文句言つてたから、それはないんだらうけど。んーしかし気になるね、その作り上げた人物つて誰じやる？

「その虚像として作り上げた人物の名前は何と？」

「蕭何と名をつけました」

マジか?!

「えっと、その蕭何つて、基になつた人とかつていますか？」

「いえ、無辜の民に迷惑をかけてはいけませんから、少なくともこの沛県近郊にはいない姓と名で作りましたよ」

「ああ、そうなんですか。それは一安心です」

うんうん、一安心。

じゃねええええ！三傑の一人が欠けちやつてるよ！めっちゃ重要人物が……
ん？

あれ、この流れはもしかして俺が蕭何ポジって事？

「そして蕭何は姿を眩ませた事にして、国の目を逸らしたって訳だ。その後、県令についた私は悪徳役人の首切りと財産回収、人員の補充に走って」

「私を含めた役人達は、沛県中央に残っては疑いの目を向けられてしまうので、一旦その他大勢の役人のように近くの村や町に左遷させられたように見せ掛けました。そして各地で糧食やその他諸々の必要な物資を集める為に奔走していたという訳です」

「これがここ二年弱をまとめた話になるな」

「二年の出来事なのですか。何か、急いでいるような印象を受けますね」

「そこは、これからやろうとしている事に繋がるな。私達は今出来つつある反秦連合に参加しようと思っている」

「これまた、ぶっちゃけたな。」

「そんな大事な事を言ってしまったって良かったのですか？」

「吹聴しないだろうと信頼しているしな、それに筋を通すなら避けられん話だ。母殿、少し話がしたい」

「何でしようか？」

「その反秦連合に貴女の息子を連れていく。多くの危険に見舞われるだろう、最悪死ぬかもしれない。私はそんな所に貴女の最愛の息子を連れて行かなければいけない」

「筋を通す、ですか。沛県の情報を定期的に持つてこさせてる人間の仕事を奪って無理やりやってきたのは、そう言う事だったんですね。」

「なら私も腹を割らなければいけない。」

母さん、一人になった母さんを残していくのは心苦しいけど、劉邦殿を担ぎ上げた責任を取らなくちゃいけない。だから俺は、村を出る時に父さんと母さんに誓った覚悟を、今度こそ果たしに行く。どうか認めて欲しい」

劉邦さんと曹参さんはそう言つて深く頭を下げた。

「……二人とも顔を上げてください。」

劉邦様、息子が決めた事ですから、わたしに頭を下げる必要はありません。息子を頼みます。

私の最愛の息子よ。貴方が話した覚悟をわたしは今も覚えているよ。それを果たす

というなら、わたしは止めない。しっかりやっておいで」

「しかと承った」

「分かったよ、母さん」

なんというか、すごく良い場面に立ち会えたね！

あつ、空気を読める俺は完全に気配を消して傍観者に徹してたよ。

「それでお嬢ちゃん……お嬢ちゃん？」

おつと、気配を上手く消しすぎた。

「はい、なんででしょう？」

「少し違和感があったんだが……気のせいかな？」

それでお嬢ちゃん、私らはこういう物騒な訳ありなんだわ。さっきの誓い、今なら訂正してもらっても構わないぜ」

「反故にするつもりは全くありませんよ。それに私は強い男なので、戦場に連れて行って欲しくて構いません」

「そうか、その覚悟受け取らせてもらう。だから、そんなに強がらなくても平気だからな。私達が期待しているのは頭の方だから、そういうのは私達に任せろ」

すげー良い笑顔を向けられた。何故なのか。

「と、そろそろ戻らないと門が閉まるな。それでは曹参、母殿、白、今日ここで会えた事

に無上の喜びと感謝を」

劉邦さんはそう言つて立ち上がる。

お婆さんが慌てた様に、

「今朝やつてきて今から帰るなど、そんな無理をなさらず、どうか我が家に泊まつていつてくだされ」

「誘いは有難いんだが、今日は忍びでやつてきて、明日まで空けるといふ訳にも行かないんだ。今帰れば日が暮れる前に沛県に戻れるしな」

「えつ、まさか一人でやつて来たんですか?!」

てつきりお付の者が数人いるかと思つていた。

「今大きな盜賊掃討作戦が行われていてな、一日で済む用事に手を回す余裕がないのさ。下手に数人付けて目立たせるより、一人で馬を走らせた方が色々都合が良いと思つたんだ」

まあ確かに、数がいれば目立つ。

けれどだ、権力者がお忍びで一人で外出。これつてすごいフラグな気がするんだが？

「本当に大丈夫なのですか？」

「ここらは曹参の膝元だから、かなり治安が良い。自衛団もしっかり組織しているし、時折森狩りもしているから、盜賊連中にとつちや近寄り難い場所だ」

「とはいえこんな無茶はもうやめて頂きたい。明日には戻らなくてはいけないというのも理解していますが、そもそもちゃんと時間は取れた筈です」

「時間の有効活用だ。盗賊狩りへの同行を断られて、どうにも暇だったんだよ」

「貴女に暇などあるはずないでしょうが。書類仕事も視察も交渉も、貴女にしか出来ない事は山ほどあるはずです」

「あ、やぶ蛇だった。じゃあ私はもう行くから！」

そうして劉邦さんは慌てた様子で剣を佩き、部屋を出て行った。

なんというか、奔放な人だな。しかし、愛嬌があつて憎めない。

「なんとも嵐のようなお人じゃったな」

「そうですねえ」

「しかし、あの人は大成しおるな」

「あつ、お婆さんもそう思いますか。私もそんな予感がしています」

そう言つてお婆さんと私は笑いあつた。

曹参さんは苦笑いだけど、俺とお婆さんの言に大きく頷いていた。

劉邦さんが去つた後、曹参さんは家で帳簿をつける作業に入り、俺とお婆さんは脱穀作業に戻る事にした。

家を出た時、お婆さんに再びお礼を言われた。

俺がいなければ、お婆さんは家に帰ろうとは思わなかったと。息子さんの覚悟と劉邦さんに対する誤解は宙に浮いたままだっただろうと。

俺は何もしていないけど、とりあえずお礼を受け取り、微笑んでおいた。それ以外出来ぬしね。

その後、家に行つて吹っ切れたのか、作業場に戻る道中も作業場について作業に入つてからも、旦那さんの話を延々聞き続ける羽目になった。

そして日が赤くなり始めた頃、お婆さんが作業の終わりを告げる。

皆が腰を叩いたり伸びをしたりして互いを労いつつ談笑している。

その様子があまりに平和で、すぐそこまでやってきているはずの大乱が遙か遠くに感じられる。

目を細め、大乱の中心人物になる劉邦さんがいるであろう方角を眺める。

あの人は無事に沛県につけただろうか。まあここらは盗賊には美味しい場所じやないっほいし、大丈夫だよな。

などと思つて、視線を切った。

その瞬間、

ひゅーばしやり

落下後着水。

何が起こった?!

昨日感じた物と同じ衝撃が俺を襲う。

「ちよ、ま、溺れる!」

とりあえず落ち着け! 昨日のように小川という可能性がある!

と、落ち着いてみれば、尻が底に着き、水深は胸に届かないと理解出来た。

俺は立ち上がり、深呼吸をして、顔に張り付いた水滴と髪の毛を手で拭った。

視界が開けたのと同時に、人の声が聞こえてきた。

「大きな音がしたと思っけてきてみりあ、あんだ、そこで何をしよるんじや?」

もう、何に驚愕すればいいのかわからなくなつた。

ぽつかりと空いた思考の隙間に、ある言葉がするりと入ってきた。

『最後の独り言だけど、君には果たさなきやいけない使命があるから。それを果たさな
い限り外史に縛られ続けるのでよろしく』

つまり、そういう事なのか？

俺は振り返り、お婆さんと対峙した。

お婆さんは怪訝な表情で俺の事を見ている。

「お婆さん、つかぬ事をお聞きしたいのですが、ここはどこでしょうか？」

「ん、なんじゃよく分からん事を聞くの。ここは沛県近くの村じゃよ」

「そうなのですか、もう一つ聞きたいのですが、私は誰でしょうか？」

「そんなもの知らんよ。なんじゃ？川に落ちた拍子に頭をどつかにぶつけたのかい？」

「かも知れません」

胸に去来するのは悲しみと虚しさだ。

先ほどまでであった笑い声と穏やかな雰囲気との落差に、心が悲鳴を上げる。

さつきまでの出来事は、全て消えてしまった。死んでしまった。

それを理解してしまった。

ああ、全身が濡れそぼっていて助かった。

おかげで溢れる涙を誤魔化せる。

7. やり直しという強み

着水後の流れは省略しよう。

同じ流れになるように頑張った、とだけ言っておく。

同じでなければ、いけない気がしたのだ。

そして、劉邦さんを見送る段階で俺は彼女に声をかけた。

「私も付いて行って構いませんか？」

目と声に力を込めて頼み込む。

「いやしかな、足がないだろ？」

「馬は周辺の村へ麦の取れ高の調査に行かせて全て出払っています。そもそも馬があるならば私が劉邦殿に付いて行ってます」

「そういう訳だから」

「後ろに乗せてもらう事は出来ませんか？私はかなり軽いので不可能じゃないと思います。もし乗せてもらえないのでしたら走っても付いて行きます」

劉邦さんの言葉を切り、俺はそれでも強く懇願する。

「おいおい、急にどうしたんだ？」

村の人達に何かの兆候は無かったか？と聞いたが見事な空振りだった。

そうなるこの村にきっかけがあるとは思えない。

やり直しの発生したあの時、この村が平穩無事だった事からもほぼ確定してもよいだろう。

だったら次の調査対象は劉邦さんだ。

「嫌な予感がするのです。どうしようもなく」

根拠を上手く説明できない自分でもどかしい。

しかしだ、あんな空しさしか得られぬ現象を繰り返してたまるか。かじりついてでも付いて行かせて貰う。

そんな思いを視線に乗せて、俺は懇願する。

「……ふむ、意志は相当固いようだな。分かった、連れて行こう。お嬢ちゃんも軽そうだし、そこまで馬の負担にもならんだろう」

「ありがとうございます。そういう訳で、曹参さん、お婆さん、私は一足先に劉邦さんに付いて行きます。一宿一飯の恩は必ず返しに来ますから」

「あんたが何をそんなに急いでるのかわからんが、必要な事なんだろう？それに恩は返してもらってるから、気にしなさんな」

「いえ、必ず返しますから！」

「そうかい、物好きだねえ。そんなの気にしなくてもいいから、いつでも帰っておいで」
そう言ってお婆さんは穏やかな笑みを浮かべた。

「それじゃあ白さん、私は麦の収穫高を纏めたらそちらに向かいますから、それまで劉邦殿をお願いします」

「おいおい、ここは私にお嬢ちゃんを頼む場面だろう？」

「……それでは、また沛県で会いましょう」

「なんだよ畜生！それじゃあ行くぞ！白！」

俺は劉邦さんに引つ張られて馬上へ。

劉邦さんの前で抱きしめられるような形で収まる。

劉邦さんは馬の負担を考えてかかなりの軽装である。まあつまり、胸が当たって役得なのである。未だに俺を女と思ってるからの所業なのだろう。男とばれたらやばいね。

て、何を浮ついているのか。俺は調査にですね…。

気もそぞろにしている俺とは裏腹に、劉邦さんは、やあ！と掛け声一発。馬は滑る様に走りだした。

しかしすごいね、鎧もなく、股の力だけで安定してるよ。

でもこれは疲れそうだから、機会があればさっさと鎧を開発しよう。

「休みを挟みつつ3時間ほど走るが、辛かったらいつでも言つて構わないからな。無理をされるのが一番迷惑だと心得てくれ」

「はい、分かりました。ご迷惑をおかけします」

「お嬢ちゃんを連れて行くと決めた段階で迷惑は受け入れてるんだが……何故あそこまで強硬だったのか聞いてもいいか？」

「嫌な予感がする、本当にそれだけなんですよ」

「嫌な予感がするたってなあ。」

今走ってるこの道は、あの村を含めた一帯と沛県を結ぶ為だけの道なんだよ。

交易路から離れたここに盗賊が張るとしたら、税を沛県に納めにくる時機しか旨みがない訳だ。だから麦を収穫したばかりの今だと早すぎるんだよ」

「ならば盗賊じゃないという可能性は？」

「んー、少ない可能性も無理やり捻り出すとして、処断した悪徳役人連中が恨み辛みで襲ってくるか、仲間が私の地位を欲しがって裏切るか。それぐらいか？」

「処断した役人連中が襲ってくるって、まだ生きてるんですか？」

「まあ汚職に手を染めてたって言つても大小ある訳だ、罪の大小かまわず首切つてると

誰も付いてこなくなる。だから罪の小さい人間は力を削いで放逐するに止まる。力の削ぎ方は徹底してたから、徒党を組んで反乱つてのはないと思うがね」

「そうですか……仲間が裏切るといふ可能性はどれほどですか？」

「あんまり考えたくないが、上に立つとそこらへんも管理しなきゃならんのかねえ。まあ可能性は薄いと思う。それぞれが望んだ役職につけたし、不満はないはずだ。私の地位を望むたつて、そもそも私を県令に担ぎ上げたのは役人共だしなあ」

「そうですか」

不満を持つてる人間はことごとく力を削いで、身内にはちゃんと褒章をつけてる訳か。

なら恐らく犯人は力を削いだ人間の誰かだよな。

なら手段は？ 傭兵なり盗賊なりを差し向ける？

しかし財産も没収されているという事だし、差し出せる対価がない。

……

……

まだ情報が足りないな。

分かっている事から何か導き出せないだろうか？

とりあえず仮定として、やり直しが発生したのは劉邦さんに何かあったからとする。

そうすると劉邦さんに何かがあったのは日が赤くなりだした頃となる。

「劉邦様、私がないとして、沛県までどれぐらいでつきますか？」

「また話が変わったな、必要な事なのか？」

「ええ」

「……まあ暇だしな、付き合うとしますかね。」

馬の体力も十分に回復しているし、余裕を持って村を出れたからな。休憩を挟みながらでも、日が暮れる前までに着けるとは思うぞ」

「次の質問です。この道で事故に陥りそうな場所がありますか？」

「ないな。山も谷も川もない、あつて丘ぐらいだ。幾つか森を横切る箇所があるから、熊がいたり鹿がいたりするかも知れんが、馬の走る音を聞けば勝手に逃げる」

事故の可能性は低いと。

「この辺りでそれなりの数を捻出できる規模の盗賊、傭兵団があるかどうかを聞かせてください」

「盗賊団が二つあるな。二つとも潰そうとしたが……片方は中々狡猾でな、兵を編成した途端に散ってしまった。結果、一つしか潰す事ができなかった」

狡猾な盗賊団があると。

「次は飛び切り変で不躰な質問をします。劉邦様が大量の賊に一人で囲まれたとしたら

どうしますか?」

「どういう意図なのかさっぱりわからんな。あれか? 散り際と言うのは人の性格の最もたる所が出ると言うから、そういう事として聞いたのか?」

「そうだと思います」

「んー負ける事前提で考えるなら……汚されてまで生きようとも思えないし、潔く死のうとも割り切れないから、多分出来る限りの抵抗をした後に自害する、かな」

「ふむふむ、ありがとうございます。劉邦様の答えは正しく人、という感じで好きです」
「お、そう言ってくれるか。ふふ、私は軍の中でも強い部類に入る、かなり道連れに出来ると思うぞ!」

おぎなりのフォローだったけど、劉邦さんには効果抜群だった様だ。照れ隠しの為か、聞いてもない事まで得意げに答えてくれた。

さておき、聞いた答えから導くに、劉邦さんが襲われたのは沛県の中ではなく、外でという事になるな。

抵抗した事も考えると、ある程度場所も特定できる。

「それでは、劉邦様の武勇というのは如何程かお聞かせください」

「ん? これでも若い頃は侠客として鳴らした人間だぜ? 二十、三十位なら得物を持ってようが一捻りよ」

武力も結構高い、と。

侠客として鳴らしたというぐらいだから、沛県にいた人間ならそれを知っている可能性は高いな。

人を使うなら百人以上になるか。

「最後なんです、今日ここに来る事をどなたかに話されましたか？」

「曹参の所に行くって言うのは、無理やり仕事を分捕った連絡員以外知らないな。騒がれたくないんでそこそこしつかり変装して出てきたから……。」

私の侍従は気付いてるだろう。あと出る時に馬を借りた厩舎役。役所の門番と城壁の門番には身分確認で止められた際に気付かれただろう」

ふむ、色々組み上がってきたな。

後は適当に理由を組み合わせれば……。

「襲われる時間は日暮れ前、場所は沛県に程近い森、主犯は潰し損ねた盗賊団、人数は確実を期す為百人前後、盗賊団を唆したのは武官筋の人間で、門番はその協力者という所ですかね」

盗賊は雇われたのではなく、仲間になった小物の悪人に乗せられたのではないだろうか？という推測だ。

劉邦さんに恨みを抱いていて、盗賊に堕ちる道があるのは、武官筋の悪徳役人だった

者だろう。

武官筋の悪党ならば、門番を仲間につけやすい。門番は兵士だ。武官筋の元上司であるなら、弱みを掴まれている可能性がある。そうなれば裏切りは易い。

そして門番が裏切っているのなら、劉邦さんがたまたま出掛けた日に襲撃される理由が説明できる。

城壁担当の者であるなら、人の出入りという重要情報が手に入れやすく、外とのやり取りも容易い。

密かに門の開閉が行え、門をくぐって安心した所を攫ったりも出来る。

「有り得ない話ではないって感じにはなってきたな。まだ可能性としては薄いが」

そう言うだろうな。俺は襲われるのを知った上で仮説と推論を重ねている訳だし、劉邦さんとは前提にある考え方から違う。俺の論は荒唐無稽に聞こえるだろうな。

「それにその推測が当たっていたとして、私達が絶体絶命なのは明らかだよな」

普通ならそうだろう。けど俺にはチートスペックがある。何とかできる可能性が高い。

それに卑怯な考え方だが、俺は死んでもやり直してしまうのだ。現状での最善は尽くすが、駄目だったら別の手を考えればいい。

ここで本当に重要なのは、劉邦さんがやり直しのキーマンなのかを知る事なんだか

ら。

「大丈夫です、劉邦様は私が守りますから」

「馬鹿、逆だろうが」

そうやって劉邦さんは大きく笑った。

その後は劉邦さんの事、沛県の事、反秦連合の事を聞いた。

特に項羽の事になると劉邦さんは興奮しながら話してくれた。項羽はこの時点で既に英雄の資質を開花させているらしい。

しかし劉邦が項羽を語るを聞くというのは、うん、なんだか胸が熱くなるね。

そうこうしていると、沛県に二番目に近いとされている森に差し掛かった。

さあ、仕掛けるならここだろう。

「ん？何か様子がおかしい？」

そうやって劉邦さんが周囲を見回した瞬間、俺の中の感覚にスイッチが入った。軽い全能感。森の中全てを掌握したような気分陥った。

研ぎ澄まされた感覚が、周囲に散らばった人間の気配と、空気を切り裂く何かを感知する。だがその唐突な切り替わりに動揺してしまった俺は反応が遅れてしまった。

感知した何かは馬に命中。途端に馬が暴れだした。

「いきなり何が?! 鎮ま?!」

劉邦さんの焦燥の声にはっとする。ここは行動する所だ。

動揺を押し殺した俺は困惑する劉邦さんを後ろ手で抱き、馬の背を蹴った。残念だが馬はもう駄目だ。前足の付け根部分に何かの正体である矢が刺さっていた。

「劉邦様、先ほどの話が本当になったようです」

「なっ?!」

着地した直後、追撃の弓矢が放たれる気配がしたので、二度三度と跳び退って回避する。このまま弓を放たれ続けるのも厄介なので、森に入り、木を盾にする。

未だ困惑の中にいる劉邦さんを降ろし、大木と挟んで立つ。

俺は周囲を見渡しながら気配を探る。さつき咄嗟に感じ取れたんだ、落ち着いた今なら切り替えも意図して出来る。

意識を集中すると、どこに人がいるのかがはつきりと分かった。

ははっ、さすがチートスペック。そうおちやらけて心に無理やり余裕を持たせる。

敵戦力は人数はおおよそ百二十人程で、囲まれてはいない。だが沛県への進路を塞ぐ様にして展開している。

それなりの武勇を持つてる相手に、囲い込むには微妙な人数で守備を薄くする作戦は取らないよな。足を奪えたんだ、進路を阻んで持久戦に持ち込んだ方が確実だ。

一人の男が道に出てきて、倒れ臥していた劉邦さんの馬に劍を振り下ろした。

「劉邦！俺の声が聞こえるか?!」

その大声にピクリと反応した劉邦さんが小声で話しかけてくる。

「……何から何までお嬢ちゃんと言った通りだな。あれは小狡い手を使って錢を稼いでいた元武官だ。私が直接しめたから覚えてるよ」

「今移動手段も絶つてやったぞ！観念して出て来い！さすればお前も、お前が抱えて助けた女子も命だけは助けてやるぞ！」

ふむ、見ようによつては確かにそう見えなくもないか。

「それともご自慢の腕っ節で、二百人からなる我等全員を叩きのめしますかな!!」

「相当盛つてますね。本当は百二十人程で、構成は歩兵百に弓手十と騎兵十といった具合です。騎兵は森の出口に待機させていますね」

「私はそこまで分かっているお前が怖いよ」

「気配を探ればそれぐらいは分かります」

「普通はわからない……」

「それでは選ぶ時間をやろう!!命乞いをして生き長らえるか！無謀に戦いを挑んで死に行くのか!!」

「くそう、調子乗って好き勝手言いやがって！何か出来る事はないのか?!」

「……劉邦様、この状況では逃げる事は叶いません。逃げるにも突破するにも、馬があるので森を抜ければすぐに追いつかれます。馬をどうにかしようにも、しつかり隊列を組んでいるので応戦も奪取も困難でしょう」

「なら森の中で歩兵をどうにかして全滅させ、騎兵共もどうにか森の中に引つ張り込まなきやならん訳か。のこのこ出て行つた所で散々な目にあつて死ぬだけだしな」

「……打てる手が一つあります」

「この状況で手があると?!さすがだな!私は森に紛れながら敵を倒していこう、つてぐらしいか思い付かないが」

「逃げながら戦うのは難しいでしょう。地の利は向こうにあるでしょうしね」

「ほう、ならば妙案を聞かせてもらおうか」

「その前にあの一応武官の強さを聞かせてください」

「んー武官だけあつてそこそこ強いぞ。私が少し苦戦するレベルだな、十人いて今の私と互角か?」

予想以上に劉邦さんが強いんだが……。

とりあえずそこから敵の戦力を導き出す。

うん、多分、行ける。

「では作戦を言います」

「おうよ」

「まずは探し物をして……劉邦様には演技を……決して……しないでください」

「ふむふむ、分かったが、本当にそれで行けるのか？」

「上手く行かなければ死ぬだけです。さて、相手の準備も完了したようですね」

「相談の時間を上げたが、もう終わりましたかな。それでは答えを聞かせてもらおう!!」
「都合の良い事を大声でまくしたてる。歩兵の半包囲と弓手の配置が完了したのは向こうでしょうに。それでは劉邦殿、強気に応えてあげて下さい」

「だから視界は木で塞がれてるのに、何でそこまで分かるんだよ……はあ、覚悟を決めた。今はお前を全面的に信じるよ」

「その信頼には必ず報いましょう、では作戦開始です」

一息吸って吐いて、劉邦さんは木から飛び出し、声を上げた。

「この劉邦には志と責任がある！背を向ける恥を晒そうと生きねばならん!!」

そう言って、劉邦さんは俺の手を取って走り出した。

8. 本領の発揮

「この劉邦には志と責任がある！背を向ける恥を晒そうと生きねばならん!!」

劉邦と名乗りを上げた女はそのまま華奢な女の手を引つ張つて走り出した。

俺は思わず舌なめずりをした。

目標が見た目も良く肉付きも良い女で、その連れていた少女もこれまた美しかったからだ。捕まえた後が楽しみで仕方がない。

あの新参の男、名前を何と言ったか……まあ名前なんて重要じゃない。ともかくその新参の男が持ってきた情報に乗っかって良かったと心底思った。

今朝の事である。

あの武力だけは高い新参が、頭に上手い話を持ってきたと言つて来たのが事の始まりだった。

なんでも劉邦という沛県の県令をやっている女が、一人で近くの村に出掛けたと言うのだ。

その時点で相当にうそ臭いのだが、世話をしていた門番からの確かな情報で、新参が

知る劉邦の奔放さなら有り得る事なのだと言説する。

俺は傍で話を聞きながら、新参の話を疑っていた。こいつは俺達を売って、その手柄を持つて役人に舞い戻ろうとしているのでは？と。

頭はうむ、と大仰に一つ頷き、押し黙った。

長く盗賊として生きてきた頭は国中を移動する商人に迫る情報量を持っている。恐らくその情報を整理しているのだろう。

しばらくして頭は新参の話を信じる判断を下し、今出せる中で最大限の戦力を新参に貸す事を決めた。

新参は百人を超える仲間と馬を貸し出されてご満悦の様子。傍に控えていた俺に實際の指揮を預けると言われた時はむすりとしたが、新参のお前にそこまでの権限を与えられるわけないと正論をかざせば、渋々ながら引き下がった。

奴はふてくされたように、早速準備を言うと頭の前から足早に去っていった。

俺は奴に対する疑念が拭えず、頭に本当に大丈夫なのか？と聞く。

頭は本当だった時の旨みを考えれば当然だと言った。しかし、本当にそれだけか？更に突っ込んで聞くと頭は嬉しそうに、

お前が信頼できると思った者で半数を固めて指揮を取れ。馬と弓もお前の指示を聞く奴で組み込め。残りはあの新参を筆頭に消えても良い奴らを入れろ。それで、あいつ

が裏切ったり下手を打つたらさっさと始末して逃げてこい。

なんと頭は裏切られても良いと思ってるようだ。いやむしろそっちの方が、処理の難しい身内の始末ができ、軍の動向も探れるから良いと言う。

そういう考え方もあるのかと感心する。

頭は念のために拠点を移動すると言い、俺にだけ拠点の場所を教えてくれた。

期待されている、ここで活躍すれば褒章もたんまりだろうと否応無しに意気が上がる。俺は頭の日論見を成功させる為、信用の置ける古参連中を誘いに行くのだった。

そうして集めた古参仲間は四十人程。全体の半数を割ってしまうが、倍の相手だろうが処理できるだろう手練を集めた。馬もある、万が一逃げる場合には少数の方が都合が良い、まあ妥当な人数だろう。

襲撃場所として沛県寄りの森を選出。その森の外周から見て回り、待ち伏せ等の罠が張られていないかを慎重に確認。

何も無いようなので森の中を探索する。

森の中には山も谷もなく、人が潜める場所はない。

ここまでくると新参の話が真実味を増す。

軍が後からやってくる可能性もあるにはあるが、森を包囲するにはかなりの人員を割

かなければいけない。今慌しく動いている軍にそんな余裕はないだろう。新参が俺達を騙そうとしているという線は消していいか、と判断する。

襲撃に都合の良い場所に潜み、新参の奴らの後方でしばらく様子を伺っていると、馬が一頭だけ走ってきた。

情報は本当だったのかと改めて内心で驚きつつ、俺は矢を番えて、放つ。

矢は馬の足付け根部分に上手く当たり、馬は転倒。しかし乗り手はすぐに跳び退り、道のすぐ脇に避難した。

……凄まじいな。

暴れる馬の背を蹴った判断力と軽業。着地する隙をつくように他の弓手がすぐさま追撃をしたのだが、的確にその全ての矢を避けた身体能力。弓手の射線を把握し、それを完全に塞ぐ木を選んで隠れる察知能力。

大した根拠もないのに無駄に傲岸不遜な新参が、劉邦に対するならば百人は欲しい、と強く推した理由が垣間見えた。

そして新参が馬鹿みたいに自分の正体をばらして時間を稼いでいる隙に、俺達は沛県を阻むようにじわりじわりと展開を始める。あんな化け物染みた反応を見せる相手に隙を晒す訳にはいかない、ここは半包围に留めて様子を伺う。

「この劉邦には志と責任がある！背を向ける恥を晒してでも生きねばならん!!」

逃げ出す前の啖呵は本物の覇気を持っていた。

そんな中身も伴った美人と、情報にはなかった美少女が森の中へと逃げ出す。

少女の方は相当にどんくさいようで、時折こけかけたりもしているようだ。

……さてどうするか。

後々の利用価値を思うなら殺す訳にも行かない。

出来るのなら弓か剣で手足を狙い、動けないようにするのが最上だ。

しかし剣を振るうにも近付かなければいけない。少女と言う足手まといがいる今、追いつくのは簡単だが、手痛い反撃を食らう事は明白。

数で押せば制圧は出来るが、切り込む人間はただでは済まないと誰もが分かっているし、手加減ができないだろうから殺してしまうかも、と二の足を踏んでしまっている。

ならば弓なのだが、殺さないようにと狙いを定めようにも、森の中で動いているとあって非常に狙いにくい。そもそもあの反射神経があれば剣で切り払う事も出来るのではないだろうか。

試しに一射してみる。振り返ることすらせずに避けられた。

おいおい、後ろに目でもあるのかよ。これは矢の無駄になる。精神を削る目的で時たま射る程度に留めよう。

圧倒的に有利でありながら膠着状態。

だがそれでいい。先に疲れ臥すのは確実に向こうである。今は手を出さずに追い詰め続けるだけでいい。

新参すらもそれを理解して突出を自重している。

はてさて、いつまで追いかけてつこが続くのやら。

時たま矢を仕掛けたり、包围しようとして動いて見せたり、氣勢を上げたり、三十分も揺さぶれば……木々が少し拓けた場所で、少女がついに倒れ込んだ。

劉邦が少女を起こそうとするが、どうにも動けないようだ。三十分も極限状態に置かれたのだ、心身ともに疲労困憊だろう。

劉邦は少女を起こすのを諦め、一際大きな木の傍まで少女を抱いて移動し、木と少女を背にして前に出た。

剣を抜き、構える姿は堂に入っている。その姿に呼応する様に新参が前に出た。

奴に目を引かせている隙に包围を進める。少女ほどではないにしろ、劉邦も疲れを隠しきれていない。もはや薄い囲いでも突破する力は残っていないだろう。

「おやおや、逃走劇もここで終わりですかな？」

「この娘を置いていく事は出来ぬからな」

「どのような身分の娘かは知りませんが、その娘を捨てていけば逃げ切れたかも知れませぬぞ」

「はん！思つてもいない事をぬかすな。森の外に馬をそれなりの数待機させているのだらう？それに二百には届かんが、百と少しか？お仲間も随分といるようではないか」

ほう、逃げている最中にそこまで掴んだのか。本当に侮れん奴だ。

「そこまで理解されているのなら、投降しては如何か？さすがの貴方もこの数の手練を相手にするのは不可能でしょう？」

取つてつけたような敬語とねつとりと湿り気を感じるような声が気持ち悪い。身内とはいえ、心底気に食わない奴だ。

「……劉邦様、私を置いて逃げてくださいます」

「それは出来ぬ!!」

「ならば、私を殺してください。あのような者達の慰み者として生きるぐらいなら、貴女の手にかかつて死ぬ方が私にとってには救いです」

少女は劉邦の服の袖を強く握り締め、訴えた。

くそ、この流れは良くない。

「白……分かった、私もお前が他の人間の手にかかると思うと腸が煮えくり返る」
これをさせない為に新参に散々挑発させていたというのに……。

残しておいた矢にとっておきである麻痺毒を塗り、すぐに番えて放つ。他の弓手も続々と矢を放つが、

「ちっー！」

やはり剣で切り払われる。

だがこれで、

「ええい鬱陶しいー！」

新参共が近づくと為の目眩ましにはなったようだ。

乱戦になれば弓の出番はない。ゆっくりと観察に回ろう。と思っていたのだが、

「私と白に近付くな！」

不用意に切りかかった四人が一振りで胴を真つ二つに切られ、

「下がれ下郎があああつ!!!」

圧力すら感じる咆哮によって完全に流れが絶たれてしまった。

遠くにいた俺ですら鬼気に吞まれて身体が震え、呼吸が止まった。近くにいた奴らの中には意識を飛ばしてしまった者もいるようだ。

「はあはあ、すまない白、ここまでだ」

だがそれまでだ。劉邦から覇気が消え、血塗れた劍の切っ先が微かに震えていた。随分と驚かせてくれたが、あれは最後の力を振り絞った悪あがきだったらしい。

それに目敏く気付いた古参連中は早速立ち直りつつある。だが新参共はまだ意識をやっているらしい。

ちっ。

奴らの気の弱さと、微妙に奴らが射線に被って狙いがつけられない事に強めの舌打ちが出る。

用心の為、古参の歩兵連中を完全に下げていたのが裏目に出たな。

「謝らないでくださいまし劉邦様、最後に貴女の雄姿が見れて私は満足しております」

「本当にすまない、白。私もすぐ後を追う」

そう言つて少女は震える身体を晒し、微笑んだ。

劉邦は少女に向き直り、劍を突き出した。

少女は貫かれ、血が吹き出る。

ゆっくりと倒れる少女。

劉邦は少女を抱き止め、静かに地面に横たえた。

劉邦は遺体に背を向け、高らかに声を上げた。

「この命、志と責任の為に使うと誓った。だが私が仲間の躓きになってしまふのなら、今

「ここで散らしてしまおうではないか！」

劉邦は血に濡れた剣を逆手に持ち、自分の腹に勢い良く突き刺した。膝をつき、うつ伏せに倒れる劉邦。

皆が動けず、その自害をただ眺めているだけだった。

他の奴らが動けなかった理由は分からない。

だが俺は、そのあまりに美しい有り様に、完全に吞まれていたのだ。

奇妙な余韻に吞まれて、どれだけの時間が経ったのかわからない。

とはいえ、そこまで長時間ではないだろう。頭を振って意識を覚醒させ、視線を二人の方に向けてと……再び俺達の時間が止まった。

「あれ、私……劉邦様に……」

いつの間にか少女が体を起こし、刺されたはずの箇所を触りながら首を傾げていたのだ。

夥しい血に塗れながら、少女は平然としている。

その差異からくる違和感は、少女の姿を不気味なものにしていた。

「そうだ、劉邦様？」

少女は傍に倒れている劉邦に気付き、すぐさまその身体を揺さぶった。

「劉邦様？」

しばらく揺すり続けて、息絶えているのを理解した少女は、

「ああ、ああああああああああああああああ！」

魂が裂ける様な悲鳴を上げた。

その声に心胆が震える。

「貴様らが、劉邦様をつ!!」

気品があり、か弱いだけの少女が、“何か”に豹変した瞬間だった。

少女は目の前に立つ新参者達を睨み付け、憎悪を叩き付けた。それは劉邦の覇気とは別の迫力を伴って周囲を飲み込み、縛った。

ゆっくりと立ち上がり、劉邦に切られた誰かが持つていた剣を拾い上げる。

目の前の少女が分かりやすい脅威を持った所で、目が醒めたのか、それとも恐怖が振り切ったのか、意識を取り戻した新参の一人が悲鳴のような大声を上げた。

狙ったのかは分からないが、それは少女の不気味な雰囲気を払うのに一役買った。身体を縛る何かを完全に払拭出来たとは言いが、多少動けるようにはなったようだ。

「おいおいお嬢ちゃん、そんな細っこい身体で剣が振るえる訳ないだろう？劉邦も死んだら、もう大人しく俺らに付いて来な」

動けるようになったらまず口を動かすというのが如何にも奴らしい。しかし軽口が

少し震えている。恐怖を誤魔化しきれていないのが丸分かりだ。

少女はゆっくりと歩を進めながら、呟く様に答えを返した。

それは囁く程度の音量であつたはずなのに、遠く離れている俺の耳にしつかりと届いた。

「他の者も憎い、だけど殊更貴様が憎い。劉邦様の温情で見逃されておきながら、仇を返した貴様だけは絶対に……許さない」

「ははっ、劉邦の奴に俺の事を聞いたのか？まあ聞けよ、俺はあいつが憎かつたが、それでもやっぱり生かしてくれた事には多少なりの恩を感じてたんだぜ？殺すつもりはなかつたんだ、本当だつて」

奴の口上は止まらない。

目の前にいるのは見掛けただけの少女なのに、大の男が何をそんなに震えながら多弁を弄しているのか。

それはこの空気の中にいる人間にしか分からないだろう。

「だからな、あいつが大事にしていたお嬢ちゃんの待遇を良くするぐらいの事はするぜ？そうだよ、元々憎かつたのはあいつだけだ、お嬢ちゃんは客人として持て成すからよ、だから、ちよつと話し合おうぜ!!」

混乱と焦燥から支離滅裂に言葉を走らせる奴に、少女は一切の反応を返さず、歩を進

める。

気のせいだとはわかる、が、少女が一步進む毎に、何かの呪縛がきつく身体を縛るよ
うに感じる。

少女をなんとかしなければと、さつきから弓に矢を番えようとしているのだが、こ
うも手が震えてしまつては逆に危ない。

湧き上がる恐怖に情けなさを感じるが、その情けなさが俺を助けた事をこの後思い知
らされる。

「おい、お嬢ちゃん、だから、止まれよ……止まれ……止まれえええつ！」
ふらふら揺れながら、ゆつくりと歩を進めていた少女があと数歩の所に迫つた時、新
参の何かがとうとう切れた。

雄叫びを上げて少女に切りかかる。

そこからは俺の正気を疑われても仕方ない光景の大盤振る舞いだった。

少女の手がぶれたと思つたら、新参の首が飛んでいた。

俺の口からも、周囲にいた連中の口からも、は？という声が零れた。

持ち込んだ計画が上手く運び、もう一步で成功という所まで漕ぎ着けた男の人生は、

呆気なく終わりを迎えた。

驚愕は続く。

あまりの驚きに目を剥いていた俺達の前から少女の姿が消えた。次の瞬間、新参の後ろに付いていた五人の首が落ちた。

首がなくなり、血を噴出しながら倒れる身体。その血しぶきの向こう、少女はいつの間にか劉邦のすぐ傍に立っていた。

いつ動いたのか分からない。

弓を使っているだけあって、俺の目はかなり良い。だが自慢の俺の目は、今全く機能していない。

「貴方達はどうします？直接の原因は殺しましたから、私の復讐心は最低限収まりました。いずれ貴方達にもけじめをつけて頂きますが、それよりも今は劉邦様の埋葬してあげたいのです。

ですが、私の復讐心を満たすお手伝いをして頂けると言うのなら、さほど時間もかかりませんし、先にお相手いたしますよ？」

先ほどの憎悪に満ちた声から一転、少女は底冷えするような平坦な声で語りかけてくる。

逃げたい、と心底から思った。

が、動けないのだ、少女の瞳と声が周囲を凍らせている。

「この化け物めっ!!」

俺の隣にいた、古参仲間である弓手が悪態を吐きながら矢を放った。

弓に関する勘は俺以上にある人物であり、矢は真つ直ぐに少女の皮を被った何かに飛んでいく。

そいつの悲劇は、団一番の弓の腕前を誇っていた事と、弓以外の勘が壊滅的に悪かった事だ。

少女は飛んできた矢を平然と素手で掴む。

驚くべき光景だが、少女ならそれぐらいしてもおかしくないと、思考が麻痺していた。

「貴方の答えはこれですか」

そう言つて少女は地面から何かを拾うと、軽い投擲動作でそれを放った。

放つたと思つた瞬間、隣から聞いた事の無い鈍い音がし、少し遅れて後ろから異音が響いた。

恐る恐る隣を見ると、頭を無くした仲間の姿。振り返れば拳程度の血塗れの石が木にめり込んでいる。

その光景を見て、少女は鬼になつたのだと知つた。

「やっ」

少女はとても軽い声を出して、

「他の皆様方も、彼と同じ答えと受け取ってよろしいですか？」

と問うて来た。

その言葉の回答は行動ですぐさま返された。

恥も外聞もなく、誰もが叫び声を上げ、助けを乞いながら少女に背を向けて逃げ出した。勿論俺もだ。

微かに残った理性で、古参の連中にだけわかる符丁で合図を出した。

森を抜けた所で集合し、次は笛を吹いて、騎兵を呼び出す。

すぐさま騎兵はやってきた。

俺は騎兵十名の中で確かな腕を持つ2人を選び、森と沛県の間を見張るよう指示を出す。

事情は話さない。あれは自分の目で見なきゃ信じれない代物だ。その代わりに森には近づかないように、何か出てきても決して手を出さないように、日が完全に沈む頃に撤退して情報を持ち帰るように、と強く念を押す。

最低限の役目を果たした俺は、震える足と心を叱咤して、すぐさまその場を離れるのだった。

9. 不足ばかり

こうして俺の初めてとなる実戦が終了した。

辛くも危機を脱した俺達は森を抜ける為に歩いていった。

「いやー、全て白の言うとおりにになったなー。私は今日本物の神算鬼謀という物を見た！いや、気絶してたから見てはいないんだけど……ともかくあんなに不利な状況を引つ繰り返すとはな！」

なんともホクホク顔で俺を褒めてくれるのだが、先ほどの戦闘は誤算ばかりで褒められた物じゃない。

凄まじい精度の気配察知で人員もきちん把握し切れていたのに、誤算など持つての外と言える。

貰った恩恵を扱いきれていない事に唇を噛まずにはいられない。

とはいえ、売り込むべき相手に自分の卑下を晒しても仕方ないので、曖昧に受けつつ過大評価にならないように返しておこう。

「一か八かの不確かな場面が幾つかありました。今後の課題とします」

「そこまで危うい場面あったか？まあなんにしろ、お前はよくやってくれたよ」

「お褒めに与り光栄です」

「それにしても門兵だっけか？まだ裏切り者がいたとはなあ、かなりの数処理したと思つていたんだが」

「表層の者は片付けられても、潜在的な裏切り者は始末しにくいものですから、仕方ありません」

「潜在的裏切り者？」

「不満を溜めている者や日和見主義者なんかですね。きつかけが起きなければ何も事を起こさない者達ですよ」

「ふむ、確かにそういう輩は問題が起きた後でしか処理できないな。私の足元もまだまだ磐石とは言い難い。」

「すぐさまで悪いのだが、またお前の智謀を借りねばならないな」

劉邦様はキメ顔で言ってきた。

「ええ、承りました。考えをまとめたので少し黙考させていただきます」

「森を抜けるにも時間はかかる、ゆっくりと考えてくれて構わないぞ。一応森を抜ける前に声をかけよう」

「はい、お願いしますね」

時間はあるようなので、先ほどの作戦について反芻し、反省しよう。作戦の概要と骨子について簡潔にまとめる。

概要とは、俺の持つギャップを最大限活用しようという事だった。

俺は細っこい美少女然とした外見をしているが、内に秘めた力は尋常ではない。水の入った大甕を軽々持ち上げる事が出来てしまう程だ。

その見た目からは想像もできない異常を利用して、不気味な状況、有り得ない事態を演出し、敵を怖気づかして撤退させよう！というのが作戦の肝だった。

作戦の実行項目は六つ。

1、走り回って敵の情報を集めつつ、俺と劉邦様が疲労困憊であり、俺の方は相当にどんくさいと思わせる。

2、走り回る中で適度に拓けた場所、血糊として使う小動物を探す。

3、拓けた場所で劉邦様が俺を殺す振りをして脇に挟んだ小動物を刺し殺す。

4、次いで劉邦様が自害するふりをする、そして俺が起き上がり、不気味な演出。

5、俺がチートスペックを発揮して数人を手に掛ける。

6、皆逃げ出せば最上、戦いとなった場合は俺に意識を集中させて、劉邦様から意識が逸れていれば大成功。

という流れである。

大まかには上手く行つたが、細かく見れば誤算、読みきれなかった部分が結構ある。

第1の誤算、血糊。

森の中からそこら中に動物がいると思ひ込んでいた。だがあれだけの人がいて動物が逃げない筈がない訳で、さらに俺達が到着する前に盗賊の方も周囲を見て回つてい
るだろう訳で。

兎をなんとか1匹確保できたのは正に行幸だった。

第2の誤算、敵の行動力。

敵が俺の思惑通りに持久戦を選択したから、油断が生まれたのかも知れない。

敵が劉邦様の自決前に動き出すとは思つていなかったのだ。

確かに生きていれば利用価値はある。だが何人何十人か道連れにされる可能性と、捕まえても自決する可能性を考慮するなら、命を惜しんで待つだろうと思つたのだ。

計画が大きくずれる前に、劉邦様が力づくで悪い流れを断ち切つてくれたのは本当に助かった。しかも素晴らしい覇気も見せてくれたし、これはもう様付けで呼ぶのには非
は無い。

第3の誤算、俺の心。

これが最大の誤算である。

殺す覚悟とか上から目線で生意気言ってたが、殺される覚悟って奴は考えの外だったと気付かされた。

劉邦様が間近に迫った4人を殺し、その血風を浴びた瞬間、複雑な何かが這い上がってきた。

自分が呆然としている間に殺されていたかもしれないんだよな、俺が殺された時にやり直しが発生するのは実はわからないんだよな、やり直せたとして再び過去を殺してしまうな、斬られると壮絶に痛いんだろな、運悪く助かって捕らわれてたらどうなっていたんだ、等等等等。這い上がってきた感情が様々な言葉へと変換され、理解が及ぶ。恐怖が、頭から背筋を通して全身を凍らせる。

だがとにかく演技を続けなければと、唇を強く噛んで恐怖を無理やり押し込み、凍える身体を叱咤してなんとか危機的状况を乗り切ったが……

未だ消化しきれぬ感情が胸の内を這いずり回っている。

この事態が落ち着き次第、正面から向き合わないといけない。すごく、怖い。

第4の誤算、俺の体。

俺の予想を大幅に超えていた事に遅れて気付いたのが、誤算といえど誤算だ。

俺の傍には常に誰かいて、チートスペックの確認をしたいと思いつつも時間が取れなかった。

だがどうか時間を捻出して確認が出来ていれば、劉邦様を守りつつ賊と戦うのは難しい！策を弄さねば！なんて無駄な右往左往をせずに済んだのだ。

死の恐怖が反転し、生への渴望によつて完全にリミッターが外れた俺は最早なんというか、リアル無双状態？とも言うべき逸脱を見せた。それなりの練度を見せた盗賊達の目すら置き去りにして動き、大の男五人の首を手応えを感じさせぬまま一閃し、適当に投げた石飛礫で人の頭を破裂させた。

とんだ化け物ぶりである。

ついでに惨劇の真つ只中での劉邦様について触れておくと、事の次第を見ていないしあまり憶えてもないそうさ。

最後の演技の直前、大量の矢を切り払い、4人の胴体をぶった切り、覇気に乗せた咆哮を行った時に集中力と底力を使い果たし、疲労困憊になって意識を半ば飛ばしてしまつたとの事。なんとというか本当にすごいお人である。

その後は惨状の中で寝かせるのも……と思ひ、劉邦様の剣を回収した後、劉邦様の意

識が戻る前に襲撃ポイント付近の森道まで移動させておいた。

だから劉邦様は俺が機転であの場を凌いだと勘違いしている。

うーん、勘違いは早めに正したいけど、言い募っても信じてくれないパターンだよね。

さて反省はここらで切り上げよう。下手に考えたとスパイラルってしまおうしね。

とりあえずこれからやるべき事を考えなければ、

「木がまばらになつてきた、もう少しで森を抜けるぞ」

ありやりや、ちよつと反省に耽り過ぎたみたいだ。

俺は内から外に意識を切り替える。

と、100m程先の所で気配を感じ。

「……この早さは馬か？」

「ん？どうした？」

「騎手ありで馬が一頭走つてきます。やつてくる方角からして、盗賊の一味かと思われ
ます」

盗賊達の中でも手練の集団が去っていった方角からやつてきている事を考えると、奴
らの仲間である可能性はかなり高いのだが、

「ふむ、しかし何故一人で来るんだ？」

「そこですよね。斥候というのが一番分かりやすい理由ですが……にしては無用心に近づき過ぎています」

俺達は森道脇に身を潜めて様子を窺う。

馬は森の手前で止まり、右往左往。どうやら森の中を窺っているようだ。

向こうから見えないよう慎重に顔を出し、相手の姿を見る。ふむ、腰にある立派な剣、盗賊で間違いないようだ。

「周囲にはあの一頭以外の気配はなさそうなので、踏み込んでくるならちやっちやと捕まえましょう」

「出来るならそうしたいが、私はまだ疲労が抜けきれてなくてだな」

「丁度良い機会です、貴方を抱いて馬を飛び降りた身体能力が紛い物ではなかった事、今ここで証明しましょう」

少し待っていると、騎兵は意を決したように森の中に入ってきた。

周囲を見回しながら、ゆっくりと歩を進めてくる。

「あつ、そういえば、馬つてどう静めればいんでしょう？」

「ん？そんなの適当に気を当ててやれば良いだろう？」

そんな訳ない、と言いつ切れないのでこの時代の英傑なんだよな……。

「それじゃあ騎手をどけた後の馬は劉邦様に任せますね」

「それぐらいならば任せよう」

「では」

足元に転がっている小さめの石を拾い上げる。

「三、二、一」

劉邦様にだけ聞こえるように小さく呟き、

「行きます」

敵が通り過ぎたタイミングで道を挟んだ向こう側の木に石を当てる。

ガコンと重い音が響いた瞬間、敵がそちらの方へ顔を向け、腰の剣を抜く為に綱を手放した。

木の陰から飛び出し、ジャンプ。

盗賊がようやくこちらの気配を察知して振り返ろうとするが、もう遅い。

体重を乗せただけのドロップキックが盗賊の肩口に吸い込まれ、その衝撃によつて盗賊は落馬。

俺は蹴った反動を利用して空中でぐるりと身を捻り、地面に着地する。

劉邦様は馬が暴れだす前に颯爽と馬の目前に立ち、覇気を当てて瞬時に馬の支配権を握ってしまった。

どちらもそこそこ人間業じゃない気がする。

俺は落馬して呻いて仰向きに倒れている盗賊にゆっくりと近付く。

警戒していたのだが、その必要が無い事に気付いた。男の両腕が折れ曲がっていたからだ。

やりすぎたかなあとも思うのだが、出来る限り穏便に済ませた方だから許してくれ、とも思う。

もし手つ取り早いからと石を直接当てていたら……。

石を当てた木を見てみれば、木の中ほどに二十cm弱の歪な亀裂が生まれていた。

掌に収まるサイズの石を軽く投げただけであの威力。あれが身体はどこかしらに当たっていたら、確実に死んでるよね。

初撃に体重を乗せてぶつかるだけのドロップキック崩れを選択して本当に良かった。

「では尋問のお時間です」

いてえいてえよおと悲痛な声を上げる男に、出来る限りの優しい声音で告げる。

男の顔色が青色から白色に変化した。

馬を従えて隣にやってきていた劉邦様も少し顔色を悪くした。

何故なのか？

「前提の確認と簡単な質問から始めましょう。」

前提としまして、私の質問に素直に答えていただけると、希望と安息を差し上げます。

嘘や沈黙はそちらの為にはならないとはつきり言っておきます。

では最初の質問、貴方がどういった役割を与えられているのかを教えてください」
淡々と言いつ切り、様子を窺う。

男は怯えた様に、

「どうか命だけは助けてください！何がどうしてこうなっているのかわかりませんが、
ともかく謝りますから！どうか命だけは!!」

と言つてきた。見事な命乞いである。

「何がどうしてと言われましても、貴方のお仲間が私達を襲った責を取つていただき
いただけですよ。そしてその怪我は、貴方が上手く受身を取れなかっただけで、私達に責
任はありませんよ？」

どさくさに紛れて怪我に対する責任放棄を宣言しておく。

「な、仲間？何の事です？お、俺はたまたまここを通りかかっただけで」

「嘘ですね。貴方、正規の兵でもないのに随分立派な山刀を所持していますね？そんな
良い得物を持つていながら、賊が逃げた方向から無事にやってきている時点で関わりが
ないとは言わせませんよ」

「ぐつ、それは……」

「まあいいです、ともかく嘘をついた代償を払っていただきます」

言葉を遮り、一方的にまくし立てて何も言わせず、さっさと刑を執行する。

「ひっ」

男は身を振る様にして何とか距離を取ろうとする。

「だけど初犯なので、警告だけにしましょう」

私は笑顔でそう言い、近くにあつた拳より一回り大きな石を掴む。

そして適度に離れている木を指差し、男に対して再びにつこりと微笑む。

少し力を入れて投擲。

ギユンという音の直後、石の碎け散る音と木が折れる大音が響いた。

俺が指差していた立派に育っていた木は、完全に折れてしまっていた。

「次は貴方の胴体があなりますので、ご注意を」

ゆっくりと手を伸ばして、木に比べて随分と細いそのお腹を、ぼんぼんと優しく触つてあげる。

男はがちがちと歯の根が合わないご様子。ついでに劉邦様の歯の根も合っていない様子。

武力の示威と美少女面のボディタッチ。飴と鞭作戦は完璧に決まったというのに、何故二人ともそんなに顔を白くして震えているのか？もしかして寒いのかな？ならちやつちやと終わらせる事を優先しよう。

「質問を繰り返します。貴方の役割はなんですか？」

「か、監視の為に、の、残されました」

「下手な敬語は要りませんよ。何故貴方はここまで来たのですか？状況を知らされていなかったのですか？」

「た、隊長に、監視するだけと言われた、けど、理由は知らされなくて、どうしても気になつて」

「監視をする人間は貴方だけですか？」

「いや、もう一人いる。本道が見れる位置に待機してる」

「その人物がいる場所の詳細は？どうしてこちらに来なかつたのですか？」

「東に、馬を走らせてすぐの場所だ、道から見える距離だ。あいつは臆病だから、命令を破るのが怖い、隊長が取り乱していたのが怖いとついて来なかつた。なあ、お願いだ、身体だけでも起こさせてくれ、この体勢は腕が痛いんだよお」

「……いいですよ。正直に話しているようですし、それぐらいは。ああ、一応言っておきますが、いらぬ事を仕出かせば」

「しねえって、絶対にそんな事はしでかさねえ！」

なんとも必死な懇願だったので、身体を起ここして木にもたれ掛かるようにしてあげる。

そしてちよつと試したい事があつたので、起こすついでに首の後ろのつぼを気を巡らして押してみる。

「おお、随分楽になつた………いやこれ、痛みが、小さくなつてる?」

まじか。試しにやってみたつてレベルの気によるツボ押しだったんだが、実感できるほどに効果が現れるとは。

医術を調べた時に出てきた胡乱げな東洋医学の記事、気という物を見せてくれた劉邦様、ありがとう!

「正直者には希望と安息をと、最初に言つたではないですか」

当然の事です、とばかりににこりと微笑みかける。

盗賊は救いの女神に助けられた、という顔をしているが、これ明らかなマツチポンプです。

その後、男が情報を漏らす度に徐々に強くツボを圧して痛みを消してあげる。

そうすると彼は自身の知る事をすんなりと吐き出してくれた。

一味の構成員の数、目ぼしい人物の詳細、複数ある拠点の位置、襲撃スケジュール、賊同士の合言葉等々。非常に有益な情報をもたらしてくれた彼に感謝。

そろそろ聞く事も尽きてきたかな?と思つたとき、劉邦様が後ろで動く気配がした。

俺はそれを軽く手を振って抑える。これは最後まで、俺がやらなきゃいけない。

「団についてはこれぐらいですかね。ついで、貴方が何故盗賊になったのか、教えていただけますか？」

「白、それはっ」

俺を止めようと劉邦様が声をかける。

が、再び俺は手を軽く振る。

それを見て劉邦様は口を噤んでくれた。

「そんなの、普通の理由さ、どこにでもある普通のくそつたれた理由よ」

男の口から出たのは怨嗟の言葉だった。

一人から奪わないと生きていけないという地獄のような現実に対する、恨みの声だった。

腐りきった国や都市の上役に、奪われるばかりで立ち上がらない民に、こんな世の中に産み落とした両親に、恩を仇で返すしかない自分自身に、その憎悪は向けられていた。

自身の裡を吐き出した男は、涙を流していた。

その涙に込められた意味は分からない。

国や都市の役人連中に対する悔しさが蘇ったのか、振り返って思い知った自分の情けなさかにか、はたまた両親や故郷に対する郷愁か。

「そうでしたか、貴方の思い、受け取りました」

俺はしつかりと頷いて、にこりと微笑んだ。

男は俺の笑みを見て、目を瞑り、更に深い涙を流した。

俺はより一層強くツボ刺激し、痛覚どころか触覚さえ消し去る。

「では、おやすみなさい」

俺は忍ばせておいた包丁を取り出し、男の首の横、頸動脈を静かに一閃。

勢い良く血が噴き出すが、感覚を断っているから男は気付けない。

血の勢いは徐々に落ちていき、やがて血の流出は止まった。

彼を殺さないという選択肢はもとより無かった。

仲間のところに戻られても困るし、町や村に戻ろうにも盗賊は死罪確定という話だ。

彼には救いなど無かったのである。

脈を計り、完全に男が死んだ事を確認して、血が付かないように気を付けつつ男の死体を木の裏に運ぶ。

道から見えないかを今一度確認して、馬を引く劉邦様の所に向かう。

「……情報を引き出した手腕は見事の一言だが、殺す相手の感情に必要以上に触れるのは感心できない。そもそもお前が手を汚す必要など」

「いえ」

俺は劉邦様の言葉を遮る。

その先に続く優しい言葉を聞くわけにはいかない。

「劉邦様に仕えるならば私も為政者の一員です。であるならば彼らの現状と言うものも聞いておかなければいけませんでした。」

そして何より、今の私には必要な事でしたから」

人を殺すという事実冷静に正面から向き合う、それは理性と感情が揺れている今だからこそ出来る事だと思う。

今を逃せばきつと、情弱な俺は人を手に掛けずとも何とかなると、先延ばしにしてしまうだろう。むしろ殺さない事は正しいんだと、考えを正当化させて凝り固まらせてしまおうがする。

人を殺さない。それは人として絶対的に正しい事だ。

けれど戦時にあつて、そんな考え方をしているは、自身どころか周囲まで巻き込んで最悪の結果をもたらしかねない。

だから今の内に、手を汚す事を躊躇わないようにしなくてはいけない。

ああでも、覚悟はしていたつもりだけど、これは、

「慣れなきやいけませんね」

お腹の中がぐるぐるする。

感情が、胃液が、爆発しそうなのを必死に抑え込んで、劉邦様に向き直る。

笑顔の一つでも浮かべて平静を装いたかったが、失敗する確信があったので、無表情に努める。

「……頭ごなしに言ってしまった。白が必要だったと言うならば、そうなんだろうな」

劉邦様はそんな様子の俺を静かに肯定してくれた。

そして頭に手を伸ばし、優しく撫でてくれる。

恐ろしく気恥ずかしいが、その手の温かさを嬉しく感じてしまい、

「すみません、もう少しだけ、そうしててください」

色々な物を耐え切る事の出来なかつた俺は、無様にも顔を俯かせ、劉邦様の温もりに縋ってしまうのだった。

「もう、大丈夫です」

「ん、そうか」

5分ほど沈黙の中で撫でられ続け、俺はどうにか落ち着く事が出来た。

「ありがとうございます」

非常に気恥ずかしいが、素直に感謝を伝える。

素直に感謝がいえないほど子供でもない。まあ顔は背けながらだけでも。

「感謝される事じゃない」

鷹揚に受け取ってもらえると思った感謝の言葉は、重たい口調で返された。えっ、と驚き、顔を上げる。

劉邦様は唇を噛んで、眉間にしわを寄せ、目を潤ませていた。

悔しそうな、情けなさそうな、泣きそうな、そんな複雑な表情。

「すまない、本当にすまない」

おいおい、何故今度は劉邦様の方が泣きそうになつてゐる訳?!

「あの、劉邦様? どうかされましたか?」

突然の出来事におろおろして原因を聞くしかない俺。

「いや、すまない、ちよつと反省する時間をくれ。そうだ、そろそろ移動しなくてはいけないだろ。馬も手に入れた事だし、沛県へ急ごう」

「……はい、わかりました」

原因は分からないが、劉邦様がそういうのなら従うしかない。

颯爽と馬に乗り、手を伸ばしてくれる劉邦様。その手をしっかりと掴み、引き上げてもらい、また抱きかかえられる。心なしか、襲撃前よりも強く抱きしめられてる気がする。

る。

やはりなんだかおかしい。

「あの、劉邦様」

「ん？なんだ？」

何故か体重を少し掛けられ、密着されて、耳元で囁く様に尋ねられた。

素晴らしい肉感とか、甘い匂いとか、柔らかい声音に、頭がのぼせてしまい、疑問譜が解けてしまった。

「あの、まだ監視があるのかもしれないので、慎重に進みましょう」

当たり障りの無い事務会話でお茶を濁す。

とはいえ大事な事でもある。

「ああ、承知した」

そうして馬をゆっくりと歩かせる。

ぱかりぱかりと馬の歩く音と、心臓の音だけがする。

俺のだけじゃなく、未だ密着した劉邦様の心音も重なって聞こえる。

そのまま馬が森を抜ける直前まで、俺と劉邦様は心音だけをやり取りしていた。

未だ予断を許さない状況下にある筈なのに、あまりの心地よさに溺れてしまいそうだった。

10. 夢の始まり

木の密度が薄くなり始めるあたりで馬を止め、盗賊が話していた監視の相方の動向を探りに行く。

俺だけ馬を降り、木に隠れて慎重に移動しながら、森の外周部へ到達。

森の中特有の薄暗さから一転、夕日の眩い赤さに視界が焼かれる。ゆっくりと瞬かせ、目を慣らす。

そして目が慣れるのを確認し、外を見渡し、気を巡らして監視を探す。

……

うん、どうやら既にはいないようだ。

隠れている可能性もあるが、馬を連れている状態で俺のチートスペックから隠れ果せるのは難しいし、あの盗賊から引き出した情報に、日が暮れる前に撤収する指示を受けていたとの事なので、もう一人は帰還したと判断してしまつて良いだろう。

俺は待たせていた劉邦様の所まで戻り、その旨を告げる。

「そうか、ありがとう」

とても綺麗な笑顔でお礼を言われました。

思わず見惚れてしまう。

「ん？どうかしたか？」

声を掛けられて、ようやく手が伸ばされている事に気付く。

「あつ、すみません」

慌てて手を取り、引き上げてもらい、再び馬上の人へ。

「では沛県へ向かいますよう。ああ、忘れない内に聞いておきたい事があります。内通者がいると思わしき門は避けて別口から戻りたいのですが、何か心当たり等はありませんか？」

「ふむ、ならば北門から入ろうか。あそこは私が県令になる前から使っている場所で信用の置ける顔見知りも多い」

「それは素晴らしい。人が使えるならば、ちよつとした小細工も可能ですね」

「またその知略を見せてくれるのか。楽しみだ」

「知略と言う程の物ではないのですが……ともかく急ぎませう、時はあればあるだけ利になります」

「おうよ、はいやあー！」

号と共に勢い良く走り出す馬。急発進によるGでおっぽいに埋没する俺。

突然やってきた幸せに、仕える主に欲情しちや駄目だろ！と奮起し、凄まじい精神力

を發揮させて身体の体勢を持ち直す。

「ふう」

劉邦様に気付かれないように、小さく息を吐いて、空を仰いだ。

心を落ち着ける為に見上げた空には、一番星が煌いていた。

「あつ」

心が震え、身体が震えた。

「どうした？震えているぞ、寒いのか？」

思わず零れた言葉を劉邦様が拾ってしまふ。

「あ、いえ、何でもありません。大丈夫です」

慌てて言い募る。さつきから慌てすぎである。

「??」 そうか。

慣れない馬上、血塗れた衣、色々辛いかもしれないが、あと三十分はこのままだ。我

慢してくれ」

「はい、お気遣いありがとうございます」

お礼の言葉を返し、俺は再び空を見上げる。

空は雲に映える赤色と、星が瞬く夜色で割れていた。

その有様があまりに美しすぎて心が震える。

そして、

『俺は夕方を越えた』

小川に引き戻される事なく、夕方の時間を無事に越えることが出来た。

その実感がやってきて、心身共に震えたのだ。

『やっぱりこの人が俺にとっての鍵』

劉邦様の顔をちらりと見やる。

軽く盗み見ようとしたら、ばつちり視線が合った。

にっこりと微笑まれたので、俺もにっこりと微笑んでおく。

なんか劉邦様のガードがすげー下がってる気がします。

……

ともかく、劉邦様が俺にとつてのキーパーソンという事は確定した。

この人が皇帝になるまで付き添い、この人の血筋を守る。そういう要所を押さえつ

つ、その他も史実の道を極端に外れなければ時が巻き戻される事もないだろう。

「なあ、白」

考え事がまとまった所で、劉邦様に話しかけられた。

「なんですか？」

後ろを振り向こうとして、止められる。

「そのまま聞いて欲しい」

なにやら真剣なご様子。

「わかりました」

「私は白を見誤り続けていた」

ふむ、見誤るとききましたか。

まあ無理もない、こんなアンバランスな存在はそういないからね。

「曹参から、お前が記憶を失っている事、ある一定以上の教養を身につけている事、曹参の母の心を救った人間である事は事前に聞いていた。その情報を得た上で、会って、あまりの華奢さに不安を抱いた。」

この時点でお前の事を守るべき存在だと、勝手に認識してしまった。

そして先ほど、白は私を救ってくれた。ぼんやりとしか覚えていないが、並大抵の武力、度胸、知恵ではあの絶望的な状況をひっくり返すのは不可能だったと理解している。

さらにお前は盗賊を見事に捕らえ、情報をするすると引き出した。

そこで白へ評価が引つ繰り返り、楽毅や呉起に劣らぬ人物を見出したのだと、舞い上がってしまった。

こうして私はお前を完全に見誤った。

人を殺す策を出させ、精神が磨耗する尋問をさせ、人を手ずから殺させたのに、それ

があたかも正しかったと思つてしまった。

そしてそれが間違ひだったと、白の能面のような顔を見て、震え続けるお前に触れて、ようやく気付けた。

ああくそつ！お前の心根が真つ直ぐで真つ白な娘なんだと、直接言葉を交わして理解していた筈なのにだ！」

ぐつ、すげー大事な話だったのに、最後の娘っこ発言で俺の中の雰囲気が出無しになつちやたよ！

ま、まあ娘っこ発言は横に置いて、大事な話なんだからしつかり答えよう。

「そこまで私を慮つていただいて嬉しいのですが、私も覚悟があつてついて来ました。人を殺した事に一切の後悔はありませんし、この責任は私が取るものです」

罪悪感や嫌悪感で潰れそうにはなつた、けれど後悔はしていない。

これはちゃんと言つておかないと。

「お前の言葉には一切の嘘も強がりもないのだと、震えの止まつた声と背中から伝わつた。

だからこそお前の人の死を悼む優しい弱さを挫いた私は、謝らなければいけない。

白、本当にすまない。贖えるならば、私はなんだつてしてみせよう」

背中に熱い物を感じる。

えつ、まじ？これどうすればいいの？

ちよ、ちよっと冷静に考えてみようぜ。

……さつきの会話、要約すると

拾い物が予想以上だったから喜び浮かれてしまった。

俺がヴァージンと知っていたのに無茶をさせてしまって申し訳ない。

これだけの事だよな。

一つ目の要素は為政者として当然の事だ。優秀な者を引き入れたのなら、あれやこれや考えて浮かれてしまうのはある程度致し方ない。

しかし二つ目の要素こそが問題だ。

部下を見誤り、筋の通らない事をさせてしまったという後悔と、見た目詐欺の俺に辛い役割を背負わせてしまったという罪悪感を抱いてしまった。

物事に他者への感情が絡む、これはとても面倒になる典型的なパターンだ。

さて、どうしよう。

さつきも言ったとおり、人を殺した精神的動揺は拭いきれていない。

けれど劉邦様に気持ちいを落ち着かせてもらい、今も傍にいてくれるおかげで、ゆつくりとはあるが命の重さを飲み込んでいる。

だからここは、俺の気持ちの整理はついていません、本当に気にしないでください。と

言うのが状況的にも俺の心情的にも正しい。

けれどその言い分はきつと通らない。劉邦様は後悔と罪悪感を混濁化させてしまっている。

一つ一つでも厄介なのに、混ざってしまえば更に手がつけられない。こうなると気にするなど伝えた所で、ただ気休めに言っているのだと曲解してしまうのは簡単に想像がつく。

今更ではあるが、人殺しを後悔していないと伝えたのは悪手だったな。劉邦様の負い目を実感させ、結果泣かせるまで追い詰めてしまった。

とりあえずこういう場合は、

「劉邦様、私は強いです」

感情に理性で勝った試しがない、なのでこうなったら雰囲気で曖昧にそれらしい事を言うのが一番だ。

後で思い返したときにあーっ！となる程度の被害で済む事が多い。

だから強めに切り出す。

「それは私も大いに認めるが・・・」

「大軍に対して単騎駆けして生還して見せませす、軍を指揮して寡兵で大軍を蹴散らして見せませす、内政を任せていただけなら食糧難を十年以内に無くして見せませす、あらゆ

る犯罪を大いに減らして見せます。

戦いにあつては呉起、楽毅となり、支えるにあつては管仲、太公望となりましょう」
「ふふ、記憶喪失の娘が、そこまで豪語するか。と、すまん、これは嘲笑ではないのだ。
なんだかお前は、それを本当にやってみてしまひそうでな」

「わかつていますよ。ただの民が吐いて良い言葉ではないですし。

けれど私のものは決して大言壮語ではありません。私にはそれを成せる力がある。
だからここでそれを証明して見せます」

「自身は秦の英雄と周の偉人に比類する。そんな虚言、誰が言おうと信じるに値しない
だろう。」

けれども証明など見るまでもなく、私は白を信じるよ」

「いいえ、その信頼の言葉は受け取れません。」

そこには私に対する罪悪感が多分に含まれていますから。

だから、ここで私の力を正面から信じてもらいます。

力は程ほどには見せたので、今度は知を言って聞かせましょう」

「罪悪感から出た言葉か。お前は心の中すら見通すのだな。」

音も無く疾く走り、目に見えぬを察し、私を軽々と抱いて跳び、軽い跳躍で馬を越し、
拳大の石を腕の力だけで投げて木を押し折る。

百を超える賊を手玉に取り、気の使い方を知り、人から痛みを取り払い、盗賊の心を慰撫して見せた。

何から何まで私には成せぬ事だ。それでもなお、程ほどと言うのか？」

「程々です。先ほどの戦いで私は自分の身体を理解しました、上限は見せたよりもっと高いですよ。」

「確かもう三十分もすれば沛県に着くのですよね？」

「ああ、それぐらいだな」

「でしたらその間に、曹参殿から聞いたこの国の現状等元に、私が思い付いた策略、政策を語りましょう」

「思い付き、か。それで私に知と言う物を知らしめてくれるのならば、喜んで聞かせてもらおう」

「ええ、では、まずは戦事から語りましょう」

「……と、城壁が見え始めましたね。劉邦様、あれが沛県ですよ？そろそろ馬の速度を落とさないと、門兵にいらぬ警戒心を抱かせてしまうと思うのですが」

「……」

「あの、劉邦様？」

「……私は、夢を見ていた」

馬の速度をゆっくりと落としながら、少しぼうとした声で劉邦様は答えた。

「大軍を寡兵で打ち破る私、白、曹參、ロワンがいた。

見渡す限り豊穡の畑の中を呂雉と我が子供達が大笑いあつて作業をしていた。榮えに榮えた沛県には民と商人が活気に溢れたやりとりをしていた。

白よ、お前は私に知をみせると言つたのに、夢を見させてしまったぞ？」

「それは決して夢幻ではありませんよ」

「ああ、私は今はつきりと理解した。お前の言は全てが本当だったと。

けれど私には分からない事がある。

これ程の力と知識があるならば、お前が王になれば良いのではないか？

私は力を惜しまんぞ？」

そうなりかねないと思つていたので、一応返答は考えてある。

「それは出来ません」

「何故だ？私にあつて白にないものなど……地位か？ああいや、そうか、記憶か」

「そうです、私にないものは記憶ですよ。

私の記憶にない過去は、他者にとっておぞましい物であるかも知れません。

記憶が突如として戻り、記憶を優先して何処かへ行ってしまいかも知れませんが、記憶が戻った私は人格も才覚も変容してしまうかも知れません。

何かの病気で記憶が失われたのならば、再発して全てを忘れてしまいかも知れませんが。

そんな私が人の上に立つてはいけません。

誰かを支えるなどと言ってさえ良いのかすら分からないのですよ」

「白があまりに活躍するから、大した事じゃないと勘違いしてしまいそうになるが、そうだったな。

人の上に立てないのは理解した。

けれど人を支える事など出来ないとは言わないで欲しい。

白の過去が凄惨な物であったとしても、何処かへ言ってしまいう宿命を背負っていたとしても、私の事を忘れてしまったとしても、人が変わってしまったとしても、才を失ったとしても。

命の恩人で、優しさを殺してしまった相手で、夢を見させてくれた人よ。私はお前を人としてどうしようもなく好いてしまった。

だから白、改めて頼む。傍にいて私の事を支えてはくれないか？」

「……嬉しい言葉です。」

ならば貴方が私を好いてくれている間、私が貴方の涙の温かさを覚えている間、私は貴方をしかと支えてみせます」

「そうか、支えてくれると約束してくれるのか。」

白とならば、どこまでも行けそうだし、何でも出来そうだ」

「劉邦様は出会った時のように、豪放磊落、泰然自若とさえしていただくれば……そうですね、この国の王にして差し上げますよ」

「ふっ、調子の良い事を言う。」

では我が太公望よ、まずは裏切り者と盗賊の処断を任せる。やれるか？」

「愚問ですね。策はもう用意しております」

劉邦様の氣遣いに、強く答える。

「そうか。では行くぞー」

応えた劉邦様の言葉には覇気が満ち溢れていた。

どうやら、氣を持ち直してくれたようだ。

こうして精一杯のお芝居を終えた俺は、劉邦様に氣付かれぬよう手の汗を服で拭う。

あーうん、調子に乗りすぎたわ。

これ今日の夜に思い出して恥ずか死ぬパターンだ。

11・ 苦く響く勝利の歌

数十万の人間が歌っている。

誰も彼もが力を抜く事無く声を張り上げている。

四面楚歌、その歴史的な場面に俺はいる。

敬愛する劉邦様が王となり、分裂して争っていた国内が平定され、平和が訪れる決定的な瞬間。

ここで一つの国の命運が終わり、400年続く大国の全てがここから始まるのだ。

仲間全員の苦勞が報われる喜ぶべき時がきた。

けれども俺に純粹な喜びの気持ちはなく、苦々しい表情で歴史的瞬間を迎えようとしていた。

少し昔語りをしたい。

何故こうなってしまったのか、それを今一度確認したい。

盗賊を撃退した後の生活は正しく多忙を極めると言っても過言ではない日々だった。

逃げた盗賊が劉邦様の死をボスに伝え、その情報にまんまと踊らされた盗賊団は沛県に進攻を開始した。

だが劉邦様の伝を頼って裏切り者達の目を掻い潜って戻った俺達は、沛県に残された少数の兵を纏め上げ、盗賊団を逆に討ち取る事に成功した。

その際、周勃、夏侯嬰、ハンカイと言った後々まで連れ添う将達と出会えた。

誰も彼も気も腕も良い人達で、俺はすんなり彼らの輪の中に入る事が出来た。

俺が蕭何の名を継ぐ者であると言ったのも大きかったかもしれない。

そうして俺達は兼ねてからの指針であった反秦連合へ参戦。

軍としては少数ながら、その働きは凄まじく、内外の評価は高まるばかり。劉邦様の無類の人誑し、もとい人柄に触れてどんどん人材が集まってきた。

その中にはかの有名な張良も……いなかった。

うっわやべえマジどうしようと思いつつ、彼の椅子を空けたまま俺がどうかその役割を演じつつ、ついに鴻門の会の場面まで来てしまっていた。

この鴻門の会の前後にて、俺を後々まで追い詰める二つの悩み事に出会う事になる。

その一、蕭何、張良、韓信がいなかった事。
もうね、まじどうしろと。

彼らと協力すれば、俺というプラスアルファもあるから項羽なんて楽勝だよね！とか鼻歌交じりでほざいていた昔の俺の頬を思いつき叩いて、夢から醒めてさっさと働けと言いたい。

俺はいつか来るであろうと信じて作った伝説の三傑の役割に振り回されながら、どうにかこうにか三役をこなし続けた。

寝食所か生活の大部分を惜しんで働き続けても、回避したかった歴史は回避できず、それ以上の結果を出せたであろう歴史を改変する事も出来ず、ただ歴史の通りに動かすだけで精一杯だった。

三傑以外の優秀な人材である陳平や項伯が早々に来てくれなかったらと思うと恐ろしい。

その二。

項羽がマジで完全無欠の霸王だった事。

見目麗しくカリスマ性に溢れ、超人的なレベルで文武両道、高潔で公平無私、策略謀略に通じ、外交手腕に長けている。

性格についても超絶武力特化の暴君（身内にだけ優しかつたらしい）のイメージからはかけ離れた特級の人格者と来ている。

とはいえその桁外れのステータス自体が俺を悩ませたのではなく、いや、超スペック公式チートも十二分に俺を悩ませたが、大事なのはそこじゃない。

そんな人間を敵にしなければいけなかった事こそが最大の難事だったのだ。

鴻門の会の際、俺達は初めて顔を合わせる事になった。

門の奪取についての釈明の為ではなく、褒章の為に劉邦様が呼び出されたのだ。

項羽はそのカリスマ性と手腕によって既に反秦連合の全てを手中に収めていた。

懐王の代理人という立場まで上り詰めた彼は、秦からの誘惑を跳ね除けた劉邦様を賞賛し、直接褒章の授与をしたいと言ってきたのだ。

もうこの時点で色々おかしい。

門奪取で怒り狂うんじゃないのかよ…とか、王の代理人ってお前だけじゃ上り詰めてんだよ…とか、秦宰相からの甘言はすっかり防諜していたのに筒抜けじゃねえかよ…とか、突っ込みみたい所満載である。

そういった訳もあり、こりや劉邦様だけに行かせられねえ！と俺ものこのこ褒章の場に付いて行つた次第である。

それがいけなかつた。

恐らくだが、俺は素直に座して待つていれば歴史の通りになつたのだ。

項羽は褒章を与え、劉邦様がそれを受け取れば、門を取られて手柄を横取りされたと思つている項羽側近の武官連中は劉邦様に妬み嫉みを募らせていただろう。

劉邦様に会い、その人誑しぶりをみれば軍師達は危惧を抱いただろう。

そうなれば項羽の思いとは関係無しに、俺達と項羽は対決せざるを得ない状況に陥つていた事は想像に難くない。

何も知らない俺は、向こうが向かつてくるならやつてやるぜ！と即座に敵対行動を受け入れ、外道と呼ばれるような手段を何の躊躇いも持たずに用いていたに違いないのだ。

だが俺はかの完全無欠の王と会話をしてしまった。

項羽の実態を探ろうと話しかけてしまったのだ。

するとどうだ、完全無欠の男は周囲が作り上げた虚像ではないのだとすぐに気付いた。

目の前にいる人物は自分と同等のスペックを持っていて、しかも思考思想は公正であり善良であり柔軟、精神は成熟してると噂以上の超スペックに気づいてしまう。

俺の中に別の指針、いや、夢と言った方が良い何かが生まれた。

この人と劉邦様が組めば最強じゃね？中国を飛び出して治められるぜ？と。

俺はその欲を実現させようと、弁舌を回した。

劉邦様に、項羽に、項羽の側近に、外を警護している雑兵にまで聞こえるように朗々と希望を謳い上げた。

国内だけでなく、世界に視野を向ける発言もした。普通であるなら理解できないされない類の夢物語語である。けれどもそれを理解する頭脳と受け入れる器量を項羽が見せ、俺の言葉には更なる熱が入った。

最後には、彼から手を握りしめられ、君は私と対等の人間であり友であると称えられるまでの関係を構築してみせた。

明日また語り合おうとその場は別れ、帰り道に劉邦様と新しい道について興奮しながら話を広げ、寝所について寝てしまえば、朝がきた。

鴻門の会が起きる朝がきた。

何が起こったのだ、何故巻き戻ったのだ？もしやあの弁論で誰かの恨みを買って寝ている間に殺されたのか？

俺はそれを確かめる為、もう一度訴えかけた。

受け入れられ、また明日だ、と別れる所まではほとんど変わりはない。そして帰り際、劉邦様と別れて寢所に入るフリをして、そのまま劉邦様の寢所である天幕まで行き、密かな警護にあたった。

そして数時間後、何も起きなかったにも関わらず、夜から朝に一瞬で切り替わり、俺は寢床に臥していた。

仲間が死んだ訳でもないのに巻き戻しが起こるのはこれが初めての経験だった。俺はここで改めてループという物について考えさせられるのだった。

ループの原因を探る為に、手を変え品を変え行動に移してもみたが……何もかもが駄目だった。

それでもなお、あれこれと試し続ける。

十数度繰り返し、決定的な原因が分かりきっても、試し続けた。

けれど数十度目のループが起こり、これ以上何も変える事がないという所で、俺は諦

めた。

歴史の流れが望まない展開は許されない。
そんな救いようなない正解を受け入れた。

この巻き戻しは俺の心を折った。再起不能になるのではないかと危惧するレベルで。
呆然とする中、考えはどんどんいらぬ方向へ進む。

俺がどんなに頑張っても正史以上にも以下にもならないのは強制力が働いている所
為なのでは？

三傑がいけないのではなく、俺と言う存在がここに介入したから消されたのではないか
？

なんて最早どう処理すれば良いのか分からない疑問の群れが大挙するが、俺はそれを
解決する事を諦めた。

俺は歴史を作る人物ではなく、調整するだけの存在なのだと言っ切った。

その後の流れは正史と同じだ。

項羽の軍師と将を焚きつけ、劉邦様が命を狙われるように仕向け、宴の途中でハンカ
イさんと呼びに行き、全てをご破算にした。

様々な希望を捨て、絶望を受け入れて行動した数時間後、次の日は平然とやってきた。折れた心が、その修復すら諦めた瞬間である。

それから俺は友と呼び合う仲間になった人間をひたすら貶める日々が続いた。そうでもしなければあの完全無欠の王には勝てない。

兵を虐殺した、論功行賞を行わない、優秀な将も軍師も追いやった等々等々。

劉邦様を讃え、項羽を貶す。あからさまではあるが、改めて鍛えに鍛えた諜報機関を通じて民草に情報操作を行えば、容易く偽報は広まった。

後の歴史に残るであろう彼の悪事など、全てが全て俺の創作である。

だから表向き情報機関の長として指示を出していた張良の評判は、項羽軍の中では憎しみの対象として最低最悪のものになっている。

ああ、劉邦軍の三傑は実在した事になっている。韓信、張良、蕭何という架空の人物は未だ現役で活動中だ。

もし白という人物がこなしていると知れたら、俺に功と憎しみが集まり過ぎて後々面倒になる。

架空の人物であれば、集まりすぎた功を削ぐのに躊躇いも手間も無くて非常に楽だ。

だが大々的な情報戦略を容赦なく使つても彼は手強く、大敗を喫する事もままあつた。けれども首の皮一枚でなんとか凌ぎつつ、この四面楚歌の舞台まで漕ぎ着ける事ができた。

と、ここまで話せば、俺が勝利を目前にして喜びを表さないのも分かつてくれるだろうか。

志を一致させて夢を語らつた友を裏切り続け、三人の偉人を消して架空の存在とし、その上で舞台に立たなければいけない重責と悲哀。

例えここで勝利したとしても、一生晴れる事のない咎が俺にはついて回る。

はあ、何故歴史的な大勝利を取めた俺が、悲劇のヒロイン面をしているのだろうか。

一人三役がばれない様にと、韓信の時には黒い仮面をつけているのだが、いつもは付けるのも恥ずかしかつたそれが今はとても有難かつた。

そうして俺は苦い表情のまま数十万の軍の先頭で大唱歌を聞いている。

あまりの音の大きさに、背が圧される。

俺はその音に負けぬよう、傍らに控えた連絡役に指示を出す。

「趨勢は決した。俺は単独で夏侯嬰の追撃部隊に合流する。以降の韓信隊の指揮権は周勃へ預け、全軍の総指揮は曹参へ預ける。曹参へは動きあり次第入城しろと伝える！」

「はっ」

連絡役は馬首を返して曹参隊へ駆けていった。

そして隣にいた副官である周勃へ話しかける。

「聞いたな周勃、俺は単独で夏侯隊へと向かう。俺の隊はお前に任せる」

「あー韓信様、奴らは出てきますかね？この状況だと自決してる可能性もありますぜ？」

「かの王は周囲の期待に込えてきた男だ。周囲が望むのが一騎打ちか逃走かはわからんが、このまま無様にやられて終わる筈がない。

そして出てくるならば、俺しか奴を倒せん」

「まあ、そうなりますか。

……

…

くっ。

白、やっぱその人物像は心底似合わんわ。声が高くて違和感しかねえよ、くくっ」

「周勃さん、それ超極秘事項だからね？歌のおかげで周囲には聞こえてないでしょうけ

ど、白と韓信が同一人物ってのがばれると本当に面倒って分かってますよね？

というかそれを言うなら周勃さんの、可能性もありますぜ？なんて不細工な敬語全然似合っていないですから、というか昔から言葉遣い進歩して無さ過ぎ。ハンカイさんを見習うべき」

「すまんすまん、お前と久しぶりの同行、勝利も目前、思わず気が緩んじまったぜ。だからそう責めてくれるな」

にやりと笑う周勃さんはなんとも男前だった。

朴訥としているが、信用の置けるナイスガイなので色々許されてしまう人だ。

「ふん、まあ今は時間もないし許すとしましよう。それじゃあ、後は頼みますよ」

「おう、任せよう」

夏侯嬰隊へと移動した俺は、隊長である夏侯嬰を呼び、追撃の指示を改めて確認していた。

「破られるなら諸侯連合を集めた左翼側となる。今の内に移動し、項羽の首に懸賞を掛けて発破をかけようぞ」

「白さん、やっぱその言葉遣いすっごく違和感あるっす！」

けらけらと笑う彼の名前は夏侯嬰。

劉邦様の初出陣以前から付き従う古參の仲間である。

その働きぶりは三国志の趙雲に似ているが、話して抱くイメージは豊臣秀吉っぽい感じ。しかし動物属性は猿じゃなく犬属性がよく似合う、そんな人物である。

「夏侯嬰も言っちゃうのか。お前ら氣い抜きすぎじゃない?」

「ら、つて事は、先に周勃さんが怒られたんすね?」

「察しの通り。口数少ないくせに、口を開けばからかいの言葉しか言わない。ともかく、お前ら二人ともハンカイさんに締めてもらうからな」

先ほども名前が出てきたハンカイさん。彼も古參仲間の一人だ。とても真面目な人で、我が陣營の風紀委員長的な感じのお人。

「そりやおつかないっすね。それじゃあ張良様の指示通りに動かさせていただきますよつと」

「お前……それも極秘事項だから……」

「あつ、これは本気で間違えたつす。つか名前を別けてる人つて普通いないから、慣れてなくて間違えんすよねえ」

「以降慣れてくれよ。そうじゃなきゃもつと面倒な事態になるんだからさ」

「氣をつけるつす。それじゃあ諸侯に手柄を譲る振りをしつつ、敵と敵の敵の人員を適

当に削らせて、おいしい所だけ韓信様に渡るように算段つける準備にはいるっす」

「いやまあその通りなだけどき、悪意満ち溢れた言い方すんなっての」

「ははっ、すまないっす。」

あの、白さん、最後に一つだけ。あの人は本当の化け物です。白さんでも負けるかも知れませんが、本当に、どうか、重々気をつけて」

「大丈夫大丈夫、あの人の事はお前以上に知ってるさ。」

けどお前らも俺も勝利する運命にある。何も心配すんな」

「なら安心っすね。白さんの言葉に嘘はありませんし」

「お、信頼されてるねえ」

「いつも聞かされていた白さんの数々の大言壮語も、この段階にすれば予知とか予言の類だったって疑うべくもないっす。それじゃあ白さん、ご武運を」

「おう、最後の頑張り果たして来るわ」

歌が二順三順し、兵達のボルテージも最高潮に達していた。

そんな中、左翼軍に最も近い門が開き、そこから黒い集団が凄まじい速度で躍り出てきた。

集団は左翼の諸侯混合軍へ雷の素早さをもって襲来し、彼らを散々に打ちのめした。

その勢いは名の通った将を幾人も屠つてなお止まることなく、包圍網を容易く突破するかに見えた。

とはいえ諸侯もただやられてはいない。

楚軍は精強で知られるが、あの黒き鎧、この強さ、奴らは項羽の近衛隊に違いない。奴らを倒し、項羽を引きずり出せば、地位は望むるより高くなる。

後事は全て漢軍に押し付けければ良い。

そんな考えがあつたのかは分からないが、大將軍が多大な褒章を確約した項羽の首に、諸侯は多大な兵を犠牲にしつつ飛びついた。

大軍としての左翼は形をなさなくついていたが、どの道相手は孤軍であり、これを潰せば終わりとして左翼に配された諸侯は息を巻いた。

こうして城の包圍網は、数千の集団を包圍する形へと変化していた。

右翼と本陣はその様子をただ傍観していたわけではない。

左翼が打ち崩され始めた直後、その他全ての門が開け放たれた。

玉碎覚悟の総攻撃か?!と身構えた全軍だったが、門から続々と出てきたのは武装を解除し、鎧も全て脱ぎ、降参と書かれた大旗を振つた項羽軍だった。

これに対して本軍右翼軍は慎重な対応を取らざるを得ず、左翼への救援を送る事が出来なかつたのだ。

多大な時間を要して全ての対応が終わった頃によくやく、項羽、その家族、数十の近衛兵だけがいなくなっているという事に劉邦軍は気付かされたのだった。

とはいえ、チート持ちの俺には奇策も何もかも通じない。

チートを完全に把握してからは戦場での失態によるループは久しく経験していなかったりする。

混乱極まる左翼側近く、大門の門扉に隠れた人用の出入り口から出てきた数十の影を俺は見逃さなかった。

俺は夏侯嬰隊に混沌とし始めた戦場に対処する案を持たせ、全軍への使いとして追いやった。

単騎となった俺は馬を飛ばし、彼らの後を追うのだった。

12. 霸王との決着

そして烏江の傍、船着場として使われているであろう広く拓けた場所までやって来た所で、俺は彼らに追いついた。

船は無いが、烏江の流れは今現在穏やかで、馬も装備も置いていけば泳いで渡れてしまふ。

烏江の先は項家と縁のある者も多く、これ以上先に行かせる訳にはいかない。

「そこで止まってもらおう」

「誰だ！」

騎兵の一人が誰何の声を上げ、その声に応えようとして。

「ようやく声を掛けてきてくれたね、いつ来るのかとわくわくしていたのだが」

柔らかない男の声。

川の流れる音、風の吹く音、ざわつく兵の声、引きつる女性の声、馬の嘶き、雑多なそれらの音を通り抜け、男の声ははっきりと俺の耳に届いた。

騎兵達が声を受けて二つに割れる。

人垣の道をばかりぱかりとやって来たのは、立派な体躯の黒き馬に跨る優男。

「気付いていましたか、ならば俺はここまで誘導された訳ですかね？」

「いや、気付いていたという訳じゃない。ただ絶対に君は来ると確信していただけさ、全ての決着をつけるために」

「そういう事でしたか。ではここでの幕引きをお望みという事ですね」

「ああ、私の策を破つてここまでやって来た君にこそ、幕を引く役目が与えられてしかるべきだ」

「あのような奇策を短時間に考え、実行に移せる貴方はやはりとんでもない戦巧者です。我らの軍は今も悪戦苦闘していると思います」

「君に破られる程度の浅慮さ。とはいえ、君に褒められるのは嬉しいなあ」

ふふつと心の底から面白いと思っっているような清らかな笑いだつた。

「陛下、何やら親しげですが、こやつは……」

「親しげ、か。こうして対面するのは初めてなのだが、何故かとても親近感がある。まるで互いの夢を語り明かした友のような……」

しかしおかしいな。

赤い汗を流す馬に跨つて戦場を縦横無尽に闊歩し、血風乱れる戦場にあつてなお穢れ無き白き鎧、あの身長を越す大槍を軽々扱い敵をなぎ払う。なにより印象深きは顔を隠す黒き仮面。

彼こそが我が仇敵、韓信以外に有り得んのだが」

「やはり韓信！」

「構えるな。お前達は一騎当千の兵なれど、それでも千を束ねて敵わぬ相手だ」

筋骨隆々の男達が、イケメンの優男に諾々と付き従っているのはとても違和感があるが、目の前の光景は正しいのだ。

瘦身の優男にしか見えないにもかかわらず、彼はこの中国全域、いや、中国の歴史の中で最強と名高い男なのだから。

彼は項羽。劉邦様と覇を競う本物の英雄。

敵とはいえ、思わず敬語になっちゃうよね。

「なあ韓信、私が君にこうも親近感を持っている理由が分かるかい？」

「……ええ、心当たりはあります」

「そうか、私には皆目検討がつかないのだが、君がそれを知っているのなら丁度良い」

「何が丁度良いのです？」

「もし私が勝つたのなら、君からそれを聞き出そう。ふむ、勝つ事に少し意欲が湧いた」

「勝つ意欲が無いとは、霸王とは思えぬ発言ですね」

「もはや私達が勝つ事は無い。ならばと私は生に対する執着を捨てたのさ」

「陛下！その様なお言葉は！」

「不敗の霸王として名実を保っていた私が負ける、それでもう大局は決するのだ。

勢いと物量は全てあちらの有利に傾き、私達はただそれに呑み込まれるのみだ。

私達は一度の敗北で、どうしようもなく負けたのだよ」

「しかし陛下さえご無事であらせられるのならば！」

「例えここにどうか逃げ切れても、烏江を越えて争いを持ち込む事になる。

そうなつてしまえば私を慕っているお前達も、戦火を免れていた親族も勝ち目のない戦いに身を投じざるを得なくなる。

それだけは、認めるわけにはいかん」

「陛下……」

「とはいえ、様々な執着を捨てた私だが、事ここにおいては勝ちたいと思う。

私と初めて剣を交わすに足る人間と対峙し、更に戦う理由も出来たのだから」

「剣を交わしたのは一度だけでしたね、乱戦の中、五合斬り合つて別れてしまった」

「私の剣を三合以上受けたのは生涯で君だけだった。

私と対等に切り結べる相手と一対一で戦う、夢見ていた事がここにきて実現するか。

では早速斬り合おう。お前達、下がっている」

「しかし！」

「頼む、後生だ」

「……はっ」

部下と婦人達は唇をかみ締めてそれに応えた。

猛る身内に怒声ではなく懇願を返す姿に彼の本質が見える。

「待たせたな韓信、馬上で斬り合うのもいいが、どうせなら地につけて戦いたい」

彼はそう言つて馬をおり、剣を抜いて構えた。

「受けましょう」

俺も馬をおり、騎馬戦用の大槍を地面に突き刺し、腰に差していた剣を抜く。

「いざ参る！」

「勝たせてもらおう！」

互いの間にあつた10m程の距離が一瞬で0になる。

勢いを活かしきつた剣速がぶつかり合う。生まれた衝撃で髪の毛が逆立ち、甲高い音に全身の毛が逆立った。

改めて驚く。

このチートスペックの速度と力に真つ向から対抗できる存在がいるとは、彼に出会う

までは思いもよらなかった。

本当に彼は化け物である。

鏑迫り合いは一瞬、互いに剣を引いて跳び退った。

鏑迫り合いの駆け引きを嫌ったのではなく、互いに全力を振るえば剣が持たないと悟ったのだ。

時の大將軍同士の得物だ、技術の粋を集めた最上の一品の筈なのだが、それでも二人の力の前では役者が落ちるらしい。

こうなつては力対力の勝負は出来ない。

「まさか一合で剣の寿命が見えてしまうとは、君こそ時代の寵児よ」

「私も同じ事を思っていました。しかし勝負はこうなつてしまうと」

「剣の損耗を考えての化かし合いになるのかな。まあそれもまた面白い」

「そうですね、では再び、参る」

再び俺は駆け出して攻める事を、彼は不動にて受ける事を選んだ。

この段階にきてしまうと攻守、先手後手による有利不利と言う物はない。

先手を取って攻める方が選択肢は多く、体のどこかに剣が当たれば即勝ちというメリットがある。しかしここでの攻めはリスクが大きい。

俺達の剣はあの一合で消耗している、斬り方を間違えれば、受け方を間違えれば簡単

に折れてしまう程に。

俺達の膂力で剣を振る、ただそれだけで剣の寿命は短くなってしまう。だから避けて剣の消耗を抑える事のできる守り側にもかなりのアドバンテージがある。

これ以降は互いに動きを読み合い、相手に間違いを強要していく勝負になる。読み合いに負ければ剣を叩き折られて徒手空拳というリーチの不利を背負うか、単純に死ぬ。

俺はぎりぎりの剣どころか鞘すら存分に振るい、避けられると分かっても攻撃をし続ける。出来るだけ素早くコンパクトに、小手先を狙って剣の損耗を抑えて戦う。

彼は回避を重視した立ち回りで、時たま鋭い突きで牽制してくる。

当たらぬ剣を振り続けて五分ほど、お互いの呼吸が噛み合ってきて速度と複雑さは増していく一方だ。

攻防の全てに視線、挙動、呼吸、声の虚実を織り交ぜ、正統剣術なんて知ったことかと蹴りも殴りも敢行し、とかく相手のミスを誘う。

そんな数十のやり取りを瞬時に交わしていても、俺達は一切の不正解を引かない。幾重に布石を重ねて追い詰めようが、身を削って行う突飛な奇策を弄そうが、ぎりぎりのラインで生き残る。

互いの剣は刃毀れをしているし、体中に細かい傷が走っている。

それでもなお剣戟は続く。

三十分を越し、一時間に至り、そして、
パキーン

来るべくして来た終焉の音が周囲に木霊した。

彼の剣が根元から折れたのだ。

俺はその致命的な隙を見逃さず、彼の右手首を、返す刀で左手首を深く切りつけた。

血飛沫が舞い、剣の柄が彼の手を離れて地に落ちる。

得物はもうないだろうが、万が一徒手空拳で襲い掛かってくる可能性を考慮し、十歩

分の距離を一足で跳び退る。

だがそんな心配は杞憂だったようだ。

彼は地面に落ちた折れた剣を見つめながら、微笑んでいた。

「大軍指揮も、個人の勇においても全て完敗だ、韓信。

ああしかし、初めての敗北だというのに何故こうも清々しいのか」

「項籍様！」

さわやかに決めているが、彼の両手首からはダクダクと血が流れ続けている。

凄まじいまでの美人がその様子に気付き、叫び声を上げて彼に近づいていく。

自分の上着を脱ぎ、彼の手首に強く強く結びつけ、止血をする。

血に濡れる事も厭わず彼に尽くすのはかの有名な美女、虞美人か。

なんとも凄惨な光景だが、美男美女は絵になる……じゃない。

俺は何を悠長に眺めているのか。

「君の勝ちだな」

俺の勝ち、と素直に喜ぶ事はできない。正直言つて俺達は互角じゃなかった。力も技量も僅かに俺が劣っていた。

この身体のわかりやすい欠点は女性より高く、男性よりも低い身長にある。身長はリーチと体重を生む、それが無い俺は力に劣る。

技量もそうだ、俺は出発点が八、九年前と経験でかなり劣る。彼に比べれば、まだまだ甘い部分が存在しているのは否めない。

そんな俺が勝利できた要因は、もう一つのチートである知識にある。

冶金技術がかの国よりも大分上にあつた。それに尽きる。

俺達の剣は最初の剣戟で大きく損耗していたが、度合いで言うなら彼の剣の方が倍以上酷かつた。

だから彼は受けを選択せざるを得なかつたし、俺は攻める事ができた。

それでもあれだけの長時間いなされたのだから、彼の技量の恐るべき事よ。

「陛下！」

後方で控えていた兵士達が彼の周囲を取り囲む。

数十の憎しみを込めた目で睨まれると、さすがに少し怖い。

俺は後退し、地面に刺していた槍を引き抜いて構える。

「道を開ける、韓信との話はまだ終わっていない」

彼はそう言つて兵と馬を退かせ、貧血からふらつくのだろう、虞美人に肩を借りながら前に出た。

「韓信、剣を交えたよしみ、負けた私への同情、なんでも構わない。最後に願いを聞いてはくれまいか？」

「……お伺いしましょう」

「もうすぐ烏江亭長の命を受けた船がここに来る。それにこやつらを乗せた上で見逃してくれ」

後ろで、彼の隣で息を呑む音がした。

「何を馬鹿な！ 私達は最後まで陛下とご一緒する所存であります！」

涙の混じった懇願だった。

だがそれを彼は無視し、

「韓信、どうか？」

「……承りました。烏江以降に関しても、恭順するならば手厚く迎え入れる事を誓いま

しよう」

「そうか、ああ、これでもう思い残す事はないなあ。」

いや、最後に聞きたい事はあつたが、負けて聞くのはわがままが過ぎるか」

「項羽殿、いや、項籍殿。記憶にも記録にも残っていませんが、私達は昔、間違いなく友達だったのですよ」

「……本当に覚えは無いが、何故か胸にするりと入ってくる答えた、ありがとう韓信」

彼は人好きのする笑顔で答えてくれた。

その笑顔に、俺はどうしようもなく胸を締め付けられる。

彼は次いで兵を呼び寄せた。

皆が馬を降り、彼の周囲に膝をついた。

「最後にお前達にも願いがある、静かに聞いてくれ」

「はっ」

「もう私は助からない。これはもはや確定された事だ。」

それにお前達は付き合うことはない。復讐も絶対にするな。

私が望むのはお前達の幸せだ。

お前達、我が臣民が幸せであるなら、私は安らかに眠れるのだ」

「……わかりました」

兵の誰もが涙を流していた。

負けを悔やむのではなく、彼個人の死を悼んでいる。

本当は自分達も彼と一緒に死にたいのだろう、生き恥を晒してまで生きたくはないの
だろう。

けれども彼がそれを願うならと、唇を噛み締めて耐えているのだ。

彼らは、どれほど篤い信頼関係で結ばれているのか。

「丁度船も着たようだな。立て、そして行け。私の遺志を伝える為に」

船が接岸したのを見計らい、彼は言った。

「はっー！」

「騅も連れて行ってやってくれ。戦場で駆るには最高の馬だ、烏江亭長に駄賃として渡
してくれ」

兵はその言葉を受けて立ち上がり、馬を引いて船へ向かった。迎えの使者が何事かと
船を降りてくるが、兵は彼らを押し戻しながら船へ乗り込んでいった。

彼はその後、家族一人ひとりに話しかけていった。

話し終えた人間は皆、涙を流して船へ向かっていく。

そして最後に、

「ううう、項籍様……」

「虞よ、お前との別れが何より辛い。お前の事が何より気がかりだ。

ああ、しかし、幸せに、幸せになるのだぞ」

肩を貸す虞美人に彼は優しく語りかけた。

彼女は嫌だ嫌だと首を振る。

彼は困ったように笑い、彼女の肩から離れた。

一瞬ふらついたが、すぐに持ち直して彼女の正面に立ち、そのままキスをした。

「私は今幸せにしてもらった。だから次はお前が幸せになれ」

ぎゅつと彼女を抱きしめ、

「お別れだ、虞」

彼は別れを告げた。

彼女はひたすらに涙を流している。

彼は静かに離れ、彼女の背に回り、押した。

彼女は何度も彼を振り返りながら、船に乗り込んでいった。

「これで思い残す事はもうない。彼らが行ったら、首を切ってくれ」

静かな声だった。

船がゆつくりと動き出す。

船に乗った全ての人間が船の縁まで来て、涙を流しながら彼の名前を叫んでいる。その中で一人が、よく通る声で叫んだ。

「韓信殿、陛下を友と呼んだ貴方に全てを託す！そして我々は宣誓する！陛下の死に泥を塗らぬなら、陛下の遺志を守ると！」

「そう劉邦殿と張良の糞野郎に伝えてくれ！」

「……全て任せられよ！」

「そうして船は去っていった。」

「……終わりましたね」

「そうだな。ふう、血が出過ぎた。そろそろ意識が無くなるな」

「最後に何かありますか？」

彼は少し考え込み、そうだな、と答えた。

「劉邦には親族と兵に寛容な処置を願うと、項伯には血を残してくれと。」

この身体には懸賞がかかっているのだったな、出来るなら旧知である呂馬童や項伯の功績にしてやりたい。

そして、張良には……先は部下が失礼したと伝えてくれ」

「気付かれてしまいましたか」

俺は仮面を外し、彼と向かい合う。

「気が抜けたのかい？ 途中で作った声が元に戻っていた。鴻門の会で聞いた声とすぐにわかったよ」

気を抜いてしまったというより、俺は気付いて欲しかったんだろう。

「貴方の人生をめちゃくちゃにしたのは、俺です」

そして貶めて欲しかった。

「ふふつ、私はそれほどまでに強かったという事だろうか？」

「ええ、恐ろしい強敵でした。全ての手を使ってなお、一騎打ちという綱渡りをせざるを得ませんでした」

「ならば良い。互いに認め合える存在がいるというのは、良い物なのだ。」

そして君がいなければ、人生の半分も楽しめずに終わっていた」

俺がいなければ負けを、別れを知らなかったであろう王は、それを教えてくれたと俺に感謝すらしている。

全てを奪った俺に対して、そのような考えを持てる彼のなんたる大器か。

「そろそろ意識が持たん、後は君と劉邦に全て任せる。」

「さいらばだ」

「ええ、また来世でお会いしましょう、項籍殿」

「来世か、もしあるならばきっと面白いに違いないな、韓信……韓信で良いのか？」
「白とお呼びください」

「そうか。では白よ、また来世で会おう」

そうして偉大な王は微笑み、眠るようにして死んだ。

俺は遠く聞こえる蹄を後方に聞きながら、彼の亡骸を抱きしめ、涙を流した。
この時代に来て二度目の涙だった。

13. 祝宴

今俺は宮中にて、勝利の宴に興じていた。

国を挙げての大々的な催しは既にやり終え、今は身内だけを呼んだ少人数のパーティを楽しんでいる。

劉邦様、沛県から付き従つてた仲間、陳平や項伯といったこれまでの戦いにて多大な貢献を上げた者達、その家族。

三十に満たない人数でのささやかな宴だったが、国を挙げて行つた祭りよりもよほど楽しい。

楽しい、というよりは楽なのか。

俺は祭りの最中、韓信と張良の立場を入れ替わり立ち代りこなさなければいけなかった。衣装の早着替え、二人分の演説、キャラを演じ分けながら民衆へパフォーマンスはひたすらに面倒だった。

英雄という偶像は必要とは分かつていても、二度はやりたくないお仕事だった。

一応蕭何も英雄に数えられてはいはいるのだが、綺羅びやかな活躍がないのでいまいち人気も無く、引きこもり設定なので祭りには参加しなかつたという設定。

まあそんなこんなで、項籍殿との一騎打ちから休む事無く仕事をしていた反動と、八年頑張った達成感と、しかしどうしてもちらつく鬱屈とした気持ちを跳ね除けようと、俺は無茶苦茶に羽目を外して宴を楽しむのだった。

自身の活躍、今後の展望を大声で歌い、それを肴に酒を呑んで楽しんでいた宴会も、時が経つにつれて段々と落ち着いていく。今までの苦勞を語り合い、互いを労い合う、とても穏やかな空気が流れ出していた。

そんな和やかな流れの中、劉邦様が顔を赤らめながらこちらにやってきた。

「よー白ー呑んでるかー。ってなんだ、杯が空じゃねえか。のめのめー今日は無礼講だぜー」

なんとも見事な絡み酒である

「白よーついにここまで来たなあ、全部、とは言わんけどお前のおかげだよお。」

あーくそ、でもなんで、お前、いなくなっちゃうんだよお」

けらけら笑っていたのに、一瞬で泣きが入った。

その一言で、周囲がピシリと固まった。

前々から話していた事だ、俺は後事を全て済ませれば国の中枢から退こうと思ってい

る。

「分かつてるんだ、お前が話してくれた通りだ、お前がいなくなった方が国の為には都合いいんだって。けど私はあ」

「約束を違えてすみません。涙の温かさも覚えているのに貴方の傍を離れる私をどうかお許しください」

俺はうなだれかかってくる劉邦様を抱きしめて介抱しつつ、謝った。それぐらいしか俺に出来る事は無い。

「白さん、本当に行つてしまふのですか？」

曹参さんが遠慮がちに尋ねて来た。

「ええ、全て以前話した通りです」

俺は功を積み過ぎ、顔が売れ過ぎた。

三人に分割しているとはいえ、一人三役なんて真似、戦中のごたごたがあつたからこそ通じたわけで、平和な世になれば化けの皮はすぐに剥がれるだろう。

だから論功行賞が終わつた後に、彼らはそれぞれ反乱を企てたとかで討伐されるか、引きこもらせる予定である。

そしてその後は韓信の役割を曹参さん、ハンカイさん、夏侯嬰に、張良の役割を陳平

さんに、蕭何の役割を周勃さんとロワンさんに引き継いでもらう。

一応三人の中でも、顔出しをしていた張良としては生きる道がある。

だが張良はやり過ぎていた。

何をと言え、項籍殿に勝つ為にありとあらゆる手段を用いた事だ。

勝てば官軍とはいえ、彼が正史と違って名が残るレベルで名君だったのが致命的。

張良が被る負の汚泥は膨大になる事は間違いなく、それは確実に今後の統治の邪魔になる。

だから張良も段階を踏みながら仕事を引き継がせていき、遠くない将来隠居する運びとなっている。

表向きの理由としてはそんな所。

実はこれにあと二、三の理由が加わる。

一つ、俺が男だと劉邦様に知られるとまずいから。

実は俺が男だと知っているのは数人のみで、その中に劉邦様は含まれていない。

これは故意にそう仕向けられた事である。

俺が男と知れたら劉邦様は確実に俺を娶るだろう。

呂雉と争う結果ならうと、彼女はそれを躊躇う性分ではない。

もしそうなれば宮中は荒れに荒れる。

帝位継承の問題で荒れるし、呂雉という男の嫉妬にも用心しなくてはならなくなる。

呂雉は妻である劉邦様を支えると言う面では能力的にも人格的にも素晴らしいと言わざるを得ない。

俺が実務面で、彼が家庭面で劉邦様を支えたからこそ偉業は成し得たと言っている。

だけれどもその長所は短所でもある。

彼の家族に対しての情の深さは異常であり、度を越している。

他人に対しての線引きが明確にされていて、家族至上主義を名乗って憚らない。

皆はそんな様を苦笑しながら受け入れているが、劉邦様没後の歴史を少し知っている俺は全然笑えない。

だから俺大好きな劉邦様、嫉妬狂いの呂雉、あと劉邦様と同日に生まれた女性である所の親友ロワンさんは劉邦様寄りなので、この三人には決してばれないように必死で画策した。曹参さん、周勃さん、ハンカイさん、夏侯嬰、陳平、項伯さんに協力してもらい、なんとか今日まで秘密を隠し通す事に成功した。

……いや、隠し通す必要すら無かったのかも知れない。

振り返ってみても、俺が男だと言おうとした所で不思議と邪魔が入っていた。それは恐らく歴史が望む強制力がそれをさせなかったのでは、と今になって考える。

まあ、今それをどうこう考えた所で意味はなく、時機でもない。

二つ、俺が一向に年を取らないから。

初めての出会いから九年、劉邦様の美貌にも僅かながら陰りが見え始めた昨今だが、俺には一向に老化と言う現象がやってこない。

氣を操る人は老化が遅くなるらしいが、それにしたって成長は元より、皺、しみそばかす、関節の不調とも一切無縁と言うのは些か奇異に映る。

これは『外史に縛り続けられる』と神さまっぽいのが言っていた事に關係するのではないかと睨んでいる。

そうなるとだ、俺の使命がいつ果たされた事になるのかが重要になってくる。

項籍殿を切った瞬間から始まり、今まさに老化が始まろうとしているのなら良い。

だが劉邦様が大往生するまで老化が止まりつばなし、となると色々と不都合が出てくる。

こういった理由があり、俺は宮中から出なきやならん訳なのだ。

性急になりすぎないよう最低限の法制度を整えて、以後必要になるだろう色々な指南書を書き残したなら、国中を周って世直しの旅でもしようかと思っている。

謙信が水戸の黄門様をする、なかなか面白いじゃないか。

「白う、行つちや嫌だーあ」

「三十を越しても甘えん坊ですね。大丈夫です、皆が支えてくれますよ」

「その皆の中にお前がいなのが嫌なんだよお」

あの、そろそろ、まじで呂雉の目が釣り上がつてきてるので勘弁してください。

あの人女性だろうが構わず嫉妬して、特に俺に対する嫉妬つてかなりやばいから。

俺が隠居すると宣言するまではかなり本気で粗探してきて、身内相手にガチの防諜しなきゃならんかったんですよ。

「貴方が良き王、良き夫婦、良き母であるなら。

貴方が私の言葉を覚えてくれていているなら。

私はいつでも駆けつけますから」

「ううう、約束だぞ、絶対の絶対を守らなきゃだぞ！」

「はい、絶対に守ります」

「なら安心だな！白の言う事は絶対だ！」

酔っ払い特有の急転直下からの急上昇である。

劉邦様はあははと快活に笑ってみせた。

そしてふと思ひ出したかのように言葉をつなげた。

「ああそうだ白、少し酔いが醒めて思ひ出した。忘れてしまわない内に言つところ。」

お前が今まとめている最初の発布内容に二つ付け加えておいてくれ」

「なんでしよう？他項目との調整と民への認知が難しいものでなければ大丈夫ですが」
「難しいものじゃないさ。色と名前に関するものだ。」

私の家は火徳を尊重する家だな、赤色が好まれていたからその色を国の色としたい。
様々な行事にも赤を使つていきたいのだが、祝いの場ではそこに白を含めた紅白を使
う事を推奨したい」

「色の推奨ですか、うん、理由も分かり易いし、色という身近な物で浸透しやすい。国と
して色を統一する事で団結も生まれやすい。良い案かと思われます。」

白を入れてくれるのは私の色だからですか？」

「うむ、祝いの場になれば、お前の偉業を知らずとも白は尊いと思うだろう？」
「それはなんとも嬉しい計らいですね」

「ふふ、皆で考えたのだ。良い案だろ？」

「ついで名に関するものでな、真名という制度だ」

「ふむ、まな、ですか？」

「真なる名前と書いて真名よ。字よりも重要な、大事な人にだけ呼ばれる名前として広

めようと思う」

「はあ、認知は難しくなさそうですね。名前に関するものですから調整は難しそうですが」

「何、戸籍に乗るものではなく、親しい間柄で呼ぶものだから法的な拘束はないとすればいい」

「そうなんですか？ですが何の為に？」

「白、お前は国中を旅して回ると言っていたな、その際には三役のように偽名を使うと」
「ええ、その方が都合が良いですしね」

「そう言った偽りの名前とは対照的となる物があっても良いのでは、と考えた。」

……というのは建前だな。これは私のわがままで。

偽名を使っている内に白という名前を忘れないで欲しいとか、私達だけが英雄の本当の名前を知っている優越感とか、秘密の名前で呼び合うのは親近感増すし楽しいとか。祝いの白と真名の白で真実に気付く奴がいたら面白いとか。

まあそんなあれやこれやをさ、皆と分ち合いたいんだわ」

劉邦様はもどかしそうにしながら、必死に何かを伝えようとしている。

名前に関するもので何かあつたらうか、名前、名前ねえ。

ん？あー、一つだけ思い当たった。

劉邦様は俺の名前の由来を知っている。白い着物を着ていたから白と適当につけたと。

俺の名前が白と知っているのはここにいるメンバーと、後は曹参さんの故郷にいる数人ぐらい。

そして俺は偽名とはいえ名前をころころと使い分け、そして上げた名声を一切惜しまず、更には効率の為に落とせと言う人間だ。

だから劉邦様は、白という名前もいつか捨ててしまうのでは？と危惧したのではなからうか？

そこまで思い至って、俺が名前に関して無頓着すぎた事に気付いた。

名付けの事情を知らない人間からしたら俺は白以外の何者でもない。

けれど適当につけたと知っている劉邦様や曹参さんからしたら、白という名前は酷く不安定で、宙に浮いたように見えた事だろう。

白という名前にはすぐく愛着がある。九年も呼び続けられてすっかり馴染んでいる。

けれどそれは、別の名を十年呼び続けられたら白という名前を忘れてしまう可能性もあるって事だ。

「真名という制度、どうだろうか？」

そんな可能性に気付いたから、劉邦様は今ここで名前を決定付けする機会をくれた訳

か。

「良いですね、その案まとめさせてもらいます」

「良かった。これは皆に話を通してなかったけど、どうしても付け加えたい条文だったんだ」

「親しい間柄で呼び合う名前つすか？なんか面白そうつすね！」

間近で聞いていた夏侯嬰がノリ良くその話題に飛び乗った。

すると周りで聞き耳を立てていた人物が一斉に話しだす。

「確かに面白いな、うん、自分で決めるのもいいし、人につけてもらうのも良さそうだ」

「俺は……妻の好きな蓮の字でも貰おうか」

「お、奥さん思いの周勃さんらしい選択つすね。俺は……季節とかいいつすね！」

俺達が出会った秋……いや初陣を飾った春の字も捨てがたいつす」

「私は琳の字を貰おうかな、あの字と響きがとても好きなんです」

俺がいなくなるという話題で場が暗くなってしまうたが、和気藹々としだしてとてもほっとした。

「私は皆のお陰で大華を咲かす事ができた、だから華という字を貰う。

なあ白、華を使った名前を何かつけてくれ」

「私が名付けていいので？」

呂雉の目がもう殺人光線を放っていると言われたら信じるレベルに目つき悪いんだけど。

「お前が良いんだ」

ぐつ、そう言われたらしようがない。

名前には無頓着な俺だが、しばし考えよう。

華を入れて考えてくれつつ事は二文字か三文字で、できれば火徳の赤をイメージさせる字を入れた方がいいよな。

なら赤、朱、紅、火、日、緋、灯、夕辺りか？

読み方もちよつと工夫しないと。色系は“か”に繋がる読みが難しい。なら夕の字は使いやすい…ってダメか、建国の祖として見ると夕は終わりをイメージさせて良くないな。

なら、

「灯る華と書いてどうか、ではどうでしょう？」

始まりは貴方を起点とした灯火でしたが、いつしか大火として国を滅ぼし、最後は新たな国を作り上げ大華となった。といった意味合いで「

「とうか、灯華、うん、とても良い名だな。白、お前はこれから私を灯華と呼べ」

「はっ、その名誉有り難く授からせていただきます」

ほっと一息である。

真面目に名前をつけるなんて体験初めてだよ。

「なら私も白さんにつけてもらいましょか」

「曹参さんも？ええ、構いませんが、本当によろしいので？」

「勿論です、お願いします」

「あつ、白からの名付けは私だけの特権にしようと思つてたのに!!」

「ふふ、そう言うだろうと思つて先手を打ちました」

「お前は本当に要領の良い奴だな！曹参だけな、曹参で終わりだから！」

「劉邦様横暴つす！俺も一緒に考えてもらおうと思つたのに!!」

「何を子供のように……」

ええと、曹参さんは琳の字を入れるんですよね？」

「ええ、劉邦様のように名の意味も考えてくれると嬉しいですね」

ぐう、プレッシャーをかけてきたぞ。

えつと、琳って綺麗とか、澄んだ音って意味だったよな。

これも二文字ぐらいにすると……あーなんか一つしか思いつかん。りんって響きが女の子っぽいから、男のりんって言つたら。

「光る琳でこうりんではどうでしょう？」

光臨、光輪と意味を被らせて、曹参さんは劉邦様を見出し、照らした第一の人物だと言う意味を含めました」

「気恥ずかしいですが、中々良いと思います。これからはその意に恥じぬよう努めます」
そう胸を張りつつ、夏侯嬰やハンカイさんに若干のドヤ顔を見せる曹参さん。
なんとも子供っぽい仕草に、笑いが溢れる。

「白さん白さん、後でこっそり名前考えてくださいっす」

こっそり頼みに来る夏侯嬰に気付き、劉邦様が首根っこを掴んで絡みだした。

その様もまた面白く、皆が笑顔を浮かべている。

こうして宴は名付け名乗り合戦のていをなしていくのだが、それもまたとても楽しい。
い。

俺は皆の笑顔を脳に焼付け、この瞬間を絶対に忘れないと心に固く誓うのだった。

14. 唐突な出会い

あの祝宴から二年が経った。

表立った反乱などはほとんど起こらず、統治も国の整備も計画通りにどんどん進んだ。

だからこそ仲間は増え続ける仕事に追われていた。

あれから仲間達と一堂に会する機会を持っていない、仕方ない事とはいえ、かなり残念だ。

俺はひたすら机に向かい、法整備、経理の潤滑化、人事差配、論功行賞の褒美を誰から優先して行うかといった現状に必要な調整を行いつつ、俺がいなくなった後にも必要になるだろう、王位継承、行政、農業、医療、外交等の指南書を書き続けていた。

仲間たちその間それぞれの立場で仕事に励んでいた。

劉邦様は毎日引つ切り無しにやってくる者達と謁見していたし、武将達は再編された部隊の訓練を行い、軍師や政治家といった文官達は俺の手足として各地、各部署へと走り回されていた。

そうやって働き詰めの毎日を二年間送り、ようやく色々な事に目処が立ち始めた今日この頃。

俺は机に向かって作業をしながら感傷にひたっていた。

11年、長かったようで短かった。これまでの期間はまさしく波瀾万丈一気呵成疾風怒濤と言えた。

楽しかったことも多く、苦しかったことも多く、語るには笑みを浮かべながら涙を流さなければいけないだろう。

「白さん、失礼しますよ。医術試験についてお知らせしたい事があるのですが……。」

「つて、また奇妙な事をなさってますね」

「あ、光琳さん、お疲れ様です。これはあれです、ちよつと昔を懐かしんでいたんです」「確かに苦楽共に多大ではありましたが、微笑と苦笑を混じらせながら涙を見せるのはちよつと気持ち悪いですよ」

「あつ、本当に出来てました？自分でも驚きです。」

「それで、何かありましたか？」

「ええ、医術試験で初めての上級合格者が出たと伝えに来たんです」

「おお！それは予想外ですね！医術部門からの上級合格者はあと五年は出ないだろうと諦めていたんですが」

この二年の間にやった政策に、職人認定及び保護政策というのがあり、その中に才能発掘プロジェクトというのがある。正式な名前はもつと複雑だけど、成り上がり認定とか誇り打ち砕き認定とか皆適当な名前をつけていたりする。

ともかく職人認定とは、様々な分野の職人をその腕と知識によつて下級、上級、特級というランクに別けるシステムだ。

認定された者には国からの認定証が送られ、税金が少し安くなるとか、街から街への移動がしやすくなるとか、少しだけ優遇措置が受けられる。まあそつちはおまけで、国に正式に認められるというのが大きい。

そして才能発掘プロジェクトの中に、認定試験で合格まで後一步！という者達だけにこつそりと俺謹製の指南書の書き写しをさせ、それを元に修練を積んで再挑戦して貰おうというものがある。

基本的には独学の者を支援する為の物だったのだが、いつしか指南書欲しさにわざとギリギリで落ちるなんて真似をする者が出てくる始末。

まあ書き写す為の竹簡の用意も、書き写しも自分達でやらせているので、こちらの忙しさが増すわけではないから好きにさせている。

もし書き写した物を市井に売ったと知られたら認定試験が受けられなくなるので、今のところ売られたという報告は受けていない。知識の拡散は望む所だが、劣化コピーか

らの生兵法は怪我しかしないので、ある程度は管理しないといけない。

まあそんなこんなで、試験を受けるのに少額の金銭、物品こそ必要だが、取る事に関してメリツトしかない職人制度は職人にも市井の人々にも多く受け入れられているというのが現状だ。

ゆえに三ヶ月に一度の国家認定試験には多くの人間が試験を受けに来る。

ここ二年の試験成果としては、料理人、鍛冶師、教育者などが今までの積み重ねを活かして、下級は続々、上級もちらほらといった感じで順調に出てきていた。

だが何より重要な医療関係の試験は下級でちらほら、上級はさっぱりと芳しい結果が得られなかった。

怪しい家庭医学、正誤入り乱れた漢方の薬学、効いているのか定かではない気を用いた治療が横行している現在、合格者はかなり少ないと覚悟していたのだが、まさか下級ですら合格できる者が少数だとは計算外だった。

これを機に医療に関して学んでくれれば良いかと長い目で見ようと思っていた矢先の吉報で、喜びは一入である。

「はい、それでですね、その合格者が指南書を書いた人物に会いたいと申し出があったそ

うです。

「訳あつて出来ない」と断つても門の前を頑として動かず、会うまでは帰らないと言ひ張つてまして。

「貴重な医術上級合格者なので強行な対応も難しく、どうしたらいいのか、と今朝門番から奏上がきました」

「それはまた随分威勢の良い人ですねー」

「……よし、会いましょうー」

「良いんですか？今までそういった類の物は断つてきたのに」

「仕事も一段落つきましたし、少し考えがありました」

「ここに直接ではまずいので、資料室にでも通して置いてください」

「わかりました、では呼び入れを許可してきます。私はそのまま仕事に戻りますね」

「わざわざすみません。曹参さんも忙しいでしょうに」

「ははっ、貴方ほどではありませんし、ついでだったので」

「ついでですか？」

「はい、白さんに少しお願いがありました」

「旅に出られる際、その行き先をまず私の故郷にして頂きたいんです」

「それだけでピンときた」

「もしかしてお婆さんの容態が？」

「病気をしたとかそういう訳ではないんですが、身体の弱りを実感する事も多く、寝る時間が日増しに伸びてしまっているからか、どうにも気持ちが悪く弱っているらしいのです。

老衰は仕方ない事と受け入れているとはいえ、やはり寂しいと周囲にはこぼしているようです。

私がいま駆けつけないべきなのでしょうが、半年前に行った時は逆に気を遣われて仕事に戻れと叱咤されてしまいました。また私の仕事も詰めの段階に入りつつあるので、長く場を離れるのが難しいのです。

母が気を置かずに接する事が出来て、長期逗留も可能で、医学の心得があるとなれば、もはや白さん以上の人選はないでしょう。

なので、是非にとお願いに来たのです」

「そうでしたか、わかりました。行き先はまだ決めていませんでしたので、丁度良かったです。

ああしかし、これで出立に必要なものは全て揃ってしまいましたね」

「そうなのですか？」

「ええ、迷っていた最初の行き先が決まり、旅に必要な道連れも出来るかも知れないのです。今こそが好機というものなのでしょう」

だらだらと未練たらしく、仕事を無理やり見つけ出しては出立を引き伸ばしていたが、それももう終わりだ。

そろそろ新しい一步を踏み出さなくては。

「やあやあやあ、ありましたぞ第九資料室。ここにかの神仙と謳われた蕭何様がおられるのかあ。しかし指南書の著者を求めて蕭何様の場所まで連れてこられるとは……まさか蕭何様が著者であらせられるのか？だとしたら蕭何様とはどれだけの偉人なのか。って指南書の著者に会うってだけでも緊張してきてるのに、蕭何様と対面するってどういう事よ。あー手汗がすごい、喉乾いてきた。帰りたい。ってダメダメ落ち着け私。なんの為にここまで来たんだ。ってせつかく作り上げた役人っぽい演技が台無しになってる……」

扉の前でしばらく立ち止まっていたので、どうしたのだろう？と気で聴力を強化して聞き耳を立てていたのだが……なんとも面白い人とわかってしまった。

「すうーはあーよし。」

頼もう！自分は張術と申す者！文官殿に言われてここまで参りました！入室しても宜しいでしょうか！」

聞き耳の内容があまりに面白かったから、反応が少し遅れてしまった。

女性を持つ甲高いソプラノボイスの大声が、強化された耳に直撃した。

「やっちまった」

気の強化を解き、ぐらぐら揺れる三半規管の治療に気を回す。

少しマシになった所で、また小声で何か言っているらしい彼女へ入室の許可を出す。

「入っていいですよ」

「あつ、はい！失礼致しますー！」

ふむ、随分若いな。歳は10代前半か後半に見える。女性の平均身長より小柄で顔立ちも可愛らしい感じなので、年よりも若く見えるという奴かも知れないが。

なんにしろ上級合格者という事でもう少し年嵩だと勝手に思っていた。

「初めまして、私は蕭何と言います。私に用という事をお伺いしましたが、どういったご用件でしょうか？」

ともかくここは先制攻撃で主導権を握ろう。

向こうから無理を言ってきたというスタンスの確認をしつつ、敬語を使って身分を錯誤させてみる。

俺の容姿は大分若く見える、その事について驚くだけなら重畳、もし侮ってくるなら

…ある意味話が早い。

さて、彼女はどう返すだろう？

彼女は俺の顔を見るなり、愕然とした表情を浮かべた。しばし時が止まったかのように彼女は驚いた表情のまま固まっていた。

一分経つてもそれ以上のリアクションがなかったので、俺はあまりの居た堪れなさにこほんどわざとらしく咳をした。

すると彼女はすぐさま気を取り直し、慌てた様子で平伏する。

「あいやこれは申し訳ございませぬ！あまりの美しさに目を奪われてしまい、名乗りと礼儀を欠いた上でご尊顔を拝見し続けるなどという失礼も働いてしまいました！」

「顔を見て呆然とされるのも名乗りが遅れるのも確かに失礼ではありますが、頭を床にこすりつけるほどの悪行ではないですから。」

ともかくそのままでは話し辛いので、私の対面の椅子にかけてください」

「いえいえいえいえ！蕭何様と私如きが同席などと滅相もありませぬ！私は蕭何様に丁重に扱われる身分では決してなく、私なぞこのままで十二分でござりますれば！」

どうもこの娘さんは本気でそう思っているらしく、声は震え、身体もかすかに震えている。

「私も元は下級役人で、今では大役を辞しているので身分はそれほど高くないです

「よ」

「そのような事は関係ありません！ 蕭何様のご活躍は身分に関わらぬものでござりますれば！ 本当に私なぞ地べたで十二分！ というか本当に同席だけは勘弁して下さい！」

あつ、素が出た。

しかしなんだろう、部屋に入ってくるまでは闊達な様子だったのに、部屋に入ってから情緒不安定を疑うレベルで感情の起伏が乱高下してません？

そこまで同席を拒否する理由がさっぱりなだけだ。

「まあ貴方がそこまで言うならそのまま構いません。」

けどそこまで強硬な理由を教えてもらえますか？ 後、演技はもう良いので「ぐっ、さすがです。やはり私如きの演技など見破られていましたか。」

分かりました、全てお話致します」

張術が話す所によると、彼女は気を可視化することが出来るそうなのだ。

部屋に入った時、彼女は魔が差して気の可視化を行ったそうだ。

そうすると眩く光る気に目を焼かれ、またその強大きに恐れ慄いたそうだ。

しかも気には何やら毒々しさや猛々しさが見え隠れしており、気を盗み見たのがバレて不機嫌になったのだと彼女は勘違いしてしまった。

だから彼女は慌てて平伏し、許しを請うたという顛末。

ふむ、どうやら面倒の元は俺の不注意だったらしい。

揺れる三半規管の痛痒と不快さが、治療で高めていた気に少し漏れていたのか。

「そういった理由があったんですね。訳をきちんと話していただけたので、全て不問に付します。」

ですので、席につき、改めての自己紹介をしませんか？」

「ううう、お心遣い感謝します」

そう言って彼女は机を挟んで俺の対面の席についた。

顔を背けながらなのは目が機能しているからだろうか。

「見ない状態への切り替えなどは出来ないのですか？」

「普段であれば可能です。けれど今はどうにも馬鹿になっていまして、顔を背けても蕭何様の方向はずっと眩く映っています」

うーん、これは三半規管の治療を一旦やめた方がいいな。

なるべく気配を殺すようにして……これでどうだ。

「今気を抑えましたが、まだ眩しいですか？」

「あつ、いえ、かなり収まりました。すごいです、あれだけの気力を完璧に制御されているんですね。」

これは改めて、膝を折りたくなる気持ちです」

ありやまたダウンナーになってしまった。

感情の起伏が激しい娘っ子だなあ。

「何か落ち込まれる事がありましたか？」

「……私は今まで気力の量も制御技術も負けた事がなかったのです。

ですが蕭何様の実力の前では私なぞ龍を前にした蜥蜴。

どれだけ自分が増長していたのかを気付かされました」

「あーそうでしたか……とはいえ貴女はまだ若い。鍛錬を続けるならば、いずれ龍と成る事も出来ましょう」

「……実は自分で行う研鑽に限界を感じていたので。ですから恥を捨てて他人に縋ろうとここにやって来た次第なのです」

「……自己流でそこまで鍛え上げた事、自身を高めた誇りを捨てても教えを請いに来た事。共に賞賛に値すると私は思います」

「ありがとうございます。そして私の選択は正しかったと実感しております」

彼女は席を降り、再び平伏した。

「どうか私を弟子にしてください！」

「ええ、良いですよ」

「そこを何とか！どんな試練にも耐えます！言われた事は何でもこなします！ですから

何卒!」

おお、これが噂のお約束というやつか。

「ですから、弟子になるのは良いですよ」

「何卒! つて、はい? えっ、そんなあつきりと。あの、本当に宜しいので?」

「ええ、医術上級合格者であり、気の可視化ができる特別な目を持つ、これだけでもかなり得難い人材と言えます。

私が直々に教えましょう」

「えっ! 本当ですか?! 喜んじやいますよ? 私もう喜んじやいますよ? 今から嘘とか言うの無しですからね!」

「存分にどうぞ」

「よし、確約取れた。あつ、夢じゃないか確認しておこう。……うん、ほっぺ痛い。

それじゃあ喜ぶぞ……すうはあすうはあ。

……やつつたあぁー! ああ! これでまた夢に一步近づいた!!」

その無邪気に喜ぶ姿を見てほっこりして思わず笑みが溢れる。

どうやら旅は退屈しそうにないとわかった事は行幸だった。

「では弟子に最初の試練を与えます」

「おお、是非! 何でも応えてみせますよ!」

「国中を巡る旅に出ます。貴女はそれについて来れますか?」

「なんと! 蕭何様自らが国を周られるのですか! ならばこの一番弟子めがついて行かねばなりませんね!」

私これでも旅慣れておりますゆえ、師匠の助けになるのは間違いありません!」

改めて彼女を旅に誘い、彼女はすんなり快諾した。

座学をせがまれるかと思つたのだが、彼女は随分アクティブな性格らしくてすごく助かる。

「私の仕事は後数日で全て終わります。貴方にはその数日の間に、旅の準備を整えて欲しいのです」

「はい、全て私にお任せくださいませ! 準備を終えたら再び蕭何様を訪ねればよいのですか?」

「ええ、お願いします。もし準備が抜かりなく終わり、私の仕事が終わっていないければ、私の書でも読んで時間を潰してもらおうと思います」

「明日中に準備万全にしてみせましょう、では失礼ですが先に席を立たせてもらいます」私の書、と言つた所で彼女は目をぎらつかせていた。まあ、向上意欲が強いのは良い事だ。

彼女はそのまま部屋を退出しようとするが、俺は一つ気になった事があつたので尋ね

た。

「そういえば、夢に近づくと行ってましたが、貴女の夢とはなんですか？」

「知識の渴望を満たす事です！それに付随して若さを保つ術を研究しています！若いとそれだけ知識の収集効率が上がりますし！！」

「うんうん、分り易くていいと思う」

知識の収集が一番の目的だったんだらうけど、今はその為の手段の方が大事なんだから。とは言わない。

「蕭何様からのお墨付き頂きました！では行って参りますね！」

うん、まあ、総じて悪い子じゃないみたいだし、いいか。

これからの旅が楽しみになってきた。

15. 一時の別れ

三日で全ての準備を終えた俺達は、出立の挨拶周りをしに行った。

周勃さん、夏侯嬰、ハンカイさん、ロワンさんと言った古参仲間から、陳平さん、項伯さんなどの俺の秘密を知る仲間だけに、別れの挨拶と共に手紙と贈り物を渡して回る。

手紙には思い出話や改めてのお礼、役職に対するアドバイスをなんか書き綴り、贈り物には剣などの実用的なものから、子供がいる家庭にはおもちゃを含めた子ども用品などを自作して渡した。

もしこのまま死に別れたとしても後悔がないようにと、俺なりに精一杯のお礼をする。

仲間達も色々と用意してくれていて、お酒や珍味、意匠を凝らした衣服に装飾品、俺達だけにわかる詩するなど、非常に嬉しいサプライズプレゼントをしてくれた。

皆と涙ながらのお別れをして、残るは劉邦様だけとなった。

隣では張術が目を回している。

「いやはや、蕭何様の氣に当てられてから、強い氣を前にすると目が勝手に機能してしまします。」

大乱の英雄方は纏う氣も大きく鮮やかで、師匠の氣を見て触れていなければ、彼らに圧倒されて泡を吹いて倒れていたかもしれない。

そして最後の大トリは劉邦様ですか。

すうはあ、すうはあ……あー深呼吸でも駄目です。扉を挟んでも圧倒的な氣配が伝わってきて、私今ものすごく慄いておりますでござる」

深呼吸をし、心の中をあえて言葉に表現して緊張を緩和させてなお、まだ全身が微妙に震えている。

「そこまで緊張するもんかね？」

俺はここ数日ですっかり敬語をやめていた。ついでに男ということも打ち明けたので、張術相手にはかなりぞんざいな言葉遣いになっている。

「はい、氣の量と質が他の方とは桁が違います。量だけならば師匠に匹敵しますし、私には氣質が七色に映るのですが、とても特殊な色彩をしておられます。」

大体の人間は二、三色、極稀に四色が混じり合う形で個人の色を形成しているのですが、劉邦様は七色全てが混じり合っておられます。

更に驚くべきは色味の調和です。

二色よりも三色、四色を持つ方は傑物が多いのですが、多色が混ざりあえば調和は難しく、いわゆる雑味が増します。それは頑迷さ、奔放さ、傲慢さといった悪い面で現れるのがほとんどなのですが、劉邦様にはそういった氣質の雑味が一切見られません。

七色持ちで見事な調和。彼女が国の頂点に立った理由がよくわかります。色を全色持つていると言う事は、万人を惹き付けて止まないという事ですから。

しかし人が無意識下で感じる好ましい気配を、私は目で捉えてしまいます。そうするとやはり、どうしようもなく萎縮してしまうんですよ。近寄ったら引き込まれてしまいそうと感じてしまったり、巨大な質量を前にすると威圧されてしまうように感じてしまったり」

誰に聞かせるでもない早口での分析は中々に的を射ていた。

「ふう、色々言つて少しだけ落ち着きました。師匠、行きましょう」

その声を受けて俺は扉を数度叩いた。

中から入つて来い！と威勢の良い劉邦様の声が聞こえる。

俺は扉を開け、中に入った。

部屋の中には劉邦様が一人で待ち受けていた。ありや、てつきり呂雉も一緒だと思つたのだが。

「よく来てくれたな」

「お待たせして申し訳ありません」

「ここには堅い呂雉もいないんだ。いつも通りにしてくれ」

「そうですか、助かります。しかし呂雉さんは何処に？」

「まあ適当な用事を押し付けて子供を連れて街に行つてもらつたよ。」

未だお前に思う所があるあいつが一緒にいると気まずいだろう？

……しかしお前の隣にいる娘っ子は呆けてどうしたんだ？」

隣に目をやると、俺と会つた時そのままの張術がいた。

「ああ、この子は気が可視化出来るそうなんですよ。劉邦様の気は扉越しでもとても大きく眩しく映つたらしいので、実物を前にして当てられてしまったんでしょう。」

よっと」

そのままでは会話に支障が出るので、張術に活を入れる。

「はっ、またやってしまった！覚悟していたというのにこの体たらく！張術一生の不覚であります！申し訳ありません！」

平伏しようとする張術を劉邦様は軽く手を降つてやめさせる。

「気に当てられたという事は、気を抑える技術が未熟な私に原因があるのだろうか？ならば謝る必要もあるまい」

「いえ、全ては私の未熟による所であります！」

「ふむ、中々に意固地だな。ともかく平伏は良い。

なによりもまず私はお前と目を見て会話がしたいんだ。

気が眩しいとの事だが、どうにか私を見ることは出来るか？」

「はっ、どうにか。少し目を細めてしまうのをお許し下さい」

「それぐらい非礼にも思わんさ。では落ち着いた所で自己紹介といこうか」

「はっ、数々の失態に対するご寛恕、誠にありがとうございます。

私は張術と申します。故郷は漢中の小さな村出身で、代々薬師を生業とした家に生まれました。そういつた家系に生まれ、特殊な目を持ち、蕭何様の指南書のおかげでなんとか医術上級試験を合格しました。

そうして医術上級試験初の合格者として蕭何様にお目をかけていただき、今ここにいらる次第でございます」

「ふむ、真つ直ぐな目をしているな。

……蕭何の旅に同道する事を許可しよう」

劉邦様のお墨付きゲット、張術は本物の優良物件だったようだ。

「ははっ、有り難き幸せ」

「一先ず張術との話は終わりだ。次いで、蕭何」

「はい」

「お前とはあらゆる事を既に語り尽くし、別れも済ませた。これ以上の語りは不要だ。というか、気を抜くと別れを惜しむ言葉が零れてしまいそうだ。」

だからさっさと物だけ渡す」

そう言つて手渡されたのは一通の手紙。

「私は送別品合戦に出遅れてしまつて、他の奴らにお前の好きそうな物を全部先に用意されてしまった。」

品が被つてしまつては荷物になりかねない。だからこれ一本に絞ることにした。

二年前から夜毎にあーではないこーではないと考へて文字を綴つた、故に込めた思ひは全ての品に勝ると自負する。

受け取つてくれ」

「喜んで受け取らせてもらいます。では私からも」

俺は手紙を大事に懐にしまう。

そしてお返しにと用意していたプレゼントを取りに廊下に行き、置いていた複数枚の銅板を部屋に持ち込む。

劉邦様はなんぞや？と首を傾げていたが、俺は構わず銅板を床に並べた。

「これは……なんと」

「ふわあ、すごい精密な絵ですねえ」

俺自ら鍛造し、磨き上げた銅に、ちゃんと個人が識別できる程に精密な絵を描き込んだ。しかも一枚一枚は独立した人物絵なのだが、集合させると祝宴の様子になるという大作がそこに出来上がっていた。

「あれ、でもこの絵、真ん中辺りが丸く抜けてますね」

「そこにはこれを」

最後のピースとして磨きこまれた銅鏡をぴたりとはめる。

「何故銅鏡を?というかこの絵には蕭何がない?」

「あーそれはですね……」

俺が絵の中にいないのは、あの時目に焼き付けた光景をそのまま描いたからだ。

完成した絵を夏侯嬰に見られ「どうして白さんはいないんすか?」と聞かれたので「俺は作者だから描かないだろ?」と普通に答えたら「白さんは肝心な所で抜けてるっすね。劉邦様が一番欲しいのは白さんの姿っすよ」と呆れ顔で諭された。

全くの正論である。これからさよならする人間の姿こそ収めないでどうすんだよ。

そんな当たり前の事に気付かされたが時既に遅し。綺麗な長方形になるよう計算し

て作ったので、銅板を新しく追加すると不格好になってしまう。

開いたスペースを利用してどうにかするしかないのだが、銅板に描かれた絵は完成されているので、俺を無理やりねじ込もうとすると、談笑に交じりきれず、背中越しに話を聞いている哀れなぼっちが追加されるだけなので、何か工夫しなければいけなかった。

さて何か妙案はないか。と考えた末に、集合写真の休んだ人間が乗る例の枠で誤魔化そうと思いついた。

とはいえ丸く切り抜いた箇所そのまま顔を載せるのはあんまりなので、絵を飾る装飾品として表面を鏡に、そして裏面は俺と劉邦様の絵が描かれているという銅鏡をはめ込むことにした。

裏面に描かれた絵は、最初のループを超えた時の劉邦様と俺が馬上で誓いを立てたシーンである。

普通に見せるには気恥ずかしい絵と誓いの言葉が描かれているので、何も言わずに鏡面部分だけが見えるようにさっさとはめ込んだ訳だ。

「皆の姿を書くのに夢中で自分を入れ損ねてしまったのです。完成した後はその事に気が付き、描き加えようのですが、どう考えても不格好になってしまうので、次善の策としてこの表の絵に不自然とならないよう銅鏡を拵え、その裏に私の絵を入れたのです。」

「絵は私が退室したら見て下さい」

「今見るのは駄目か？すごく見たいんだが……」

「今は少し……張術もいますから」

「そうか、今は我慢しよう。」

……ならばこれでやる事もやったな。

「本当にお別れか」

「ええ、お別れです。ですが一生会えないわけではありません。私達には約束があります、貴女が呼んでくれるなら私はいつでも駆けつけます」

「有難う、その言葉があるだけで万難を排する力と勇気が湧いてくる。」

一時のさよならだ、白」

「ええ、一時のさよならです、灯華様」

俺達はしばし見つめ合う。これ以上は名残惜しさが勝ってしまう、という限界まで見つめ、背を向けた。

俺と張術は静かに退室しようとして、

「あつ張術、少し待て、お前ともう少しだけ話がしたい。白はそのまま部屋を出ろ。立ち聞きは許さん」

びつくうとうと張術の身体が跳ねた。

「あの、私に何か…?」

「良いから良いから、一分もかからんよ」

俺はその様子に少し不安を覚えつつも、そつと部屋を抜けて部屋から距離をとった。

そして本当に一分かそこらで張術は出てきた。

が、なんかすげー震えてるんだが?

「張術、なんかあつたのか?」

「いえ、何も、何もありませんでしたとも……」

「いや、その様子で何も無かったとは」

「本当になんでもありませんから!ただ、蕭何様は愛されておいでだなーと」

「ああ、あの人、未だに俺を娘っ子だと思ってるから、すげー過保護なんだよな。大事に

するように、とでも釘を差されたか?」

「そういう意味ではない嚴重な釘刺しはありましたが……まあともかく何はともあれ!

旅の始まりですな!」

「ああそうだな」

何かぼかさされた感じだが、まあいいか。

こうして俺達の旅は始まるのだった。

16. 後悔は先に立たない

劉邦様の下から旅立って四ヶ月、俺達はようやく沛県近くの村に辿り着くことが出来た。

一直線かつ馬を気で治療しつつ行けば一ヶ月とかからずにお婆さんの元に行けたのだが、お婆さんも体調を崩している訳ではないとの事だったので、あまり急がず二ヶ月を目安に旅して行こう！と決めた。

だがどう思ってしまったのが良くなかったのだと後々気づいた。

後悔は先に立たないのだ。

決して遠回りをした訳ではない。

時間と機会を有効活用しようと思い、一泊する町村では張術の教育も兼ねて夕方から夜まで無料の診察なんかをやって経験を積ませ、有望そうな若者がいれば声をかけて認定試験の受験料を渡して後進の育成に励み、不作の村には近くの街にいる長を通じてお上に免税を働きかけたりしていただけだ。

あくまでも夕から夜に生じる暇な時間の有効活用、買い付けなどで立ち寄った村での

簡単な勧誘、次の行き先でのついでの言付けだった筈のそれらが、いつしか意味を持ち始めた。

俺達の知らない所で、貧窮する村々を救う二人の正義の味方が長安から遣わされた！との噂となつて急速な広がりを見せていたのだ。

その早さは俺達をとうに追い越し、先々の村に伝わってしまった。

とりあえず二人組の見目麗しい女性が来たら歓待なり何なりして全力で引き留めろ！そしたら怪我の治療から困窮の救済から色々やってくれるぞ！

そんな共通認識が先に行く村の人々に植え付けられているとは露とも知らず、行つてみたらどの村も歓迎してくれてるなあ、無碍に出来ないなあなどと、俺達はまんまと足止めを受けてしまった訳だ。

ちよつと俺達ゆっくりし過ぎじゃね？と二ヶ月経つて行程が半分しか消化されていなくという驚愕の事実気づいた時、光琳さんの言葉を思い出して焦りに焦った。

しかし行く先々で心臓の弱い娘が…とか、三日前に倒れて以来意識不明の父が…とか、飢饉で来月には子供を売らなきゃ…とか言われたら、ねえ？

そうした理由があり、のんびり余裕を持った二ヶ月の旅が、騒がしく慌ただしい四ヶ

月の治療行脚となつてしまつた訳である。

予定の倍の時間をかけ、どうにかこうにか俺にとつての始まりの村まで辿り着き、お婆さんが元気に出迎えてくれた時は心底安心したよ。

とはいえ、闊達に笑うお婆さんは二年前に見た時よりも確実に細くなつていて、気も淀んでいた。

もしもう二、三ヶ月遅れていたら、何らかの病にかかつて身罷つていたかも知れない。

村長宅にて一夜を過ごし、久しぶりに静かに微睡める気持ちの良い朝を迎える事ができた。

これだけの事がなんと幸せなのか、強く実感する。

これまでであれば早朝だろうと構わず、俺の部屋の前には何らかの事情を抱えた人が行列をなしていた。

戸の前に立たれると気配で目が覚めてしまうので、ゆつくりと起きるといふ事が出来なかつたのだ。

けれどここではしばらく腰を落ち着けると宣言していたので、朝から早速！という人はいなかつたのが幸いだつた。

俺は久しぶりに二度寝の惰眠を貪った後、お婆さんが用意してくれていた手料理を食べ終え、これからの予定を立て始めた。

張術を呼び、地図を広げ、次何処に向かうかを話し合う。

目的地であった沖県には来れたので、お婆さんの様子を曹参さんに伝える為に一旦引き返そうか、という話も出たのだが、そうするとこの村以降で今か今かと待ち構えている人達から要らぬ反感と軋轢を生んでしまおうとお婆さんをお願いされてしまった。

確かに、と考えこんでしまう。

例えば悪質なインフルエンザが流行していたと仮定する。しかし政府の作った薬で予防と治療が可能で、なんと薬は配給所で並べば無料で貰えるらしい。

これで助かるんだと意気揚々と配給所で行列に並んでいたら、目の前で配布の終了宣言された。

さて、ワクチンを貰えなかった人達はどう思うだろう、どう行動するだろうか？

命のかかった場面だ、大人しく引き下がるとは思えない。薬を配給していた人と、目の前で配給を受けられた人を逆恨みし、強奪、暴動などを起こしてしまうのではなからうか。

どうやら滞在させてもらったお礼に一日で出来る事をしていただけ、それほど大した事をしていない、という認識は改めた方が良くようだ。

ならばいつそ本拠を沛県に置いて長期滞在しよう。

俺らから出向くのではなく、腰を落ち着けて治療と嘆願を受け付けようという魂胆。旅は続けたいので、一年、二年限定と銘打っていれば何とかなるだろ。

そう方針を固め、張術とお婆さんに話すと、それが良いと賛同を得る事ができた。

沛県の役所の一角を借り受け、治療所兼相談所として使わせてもらう運びになり、更にそこで噂の二人組が治療と相談を受け付けていると大々的に発表した。

するとその反響は凄まじく、来るわ来るわ人の波。

とはいえ今までは何の防波堤もない状態で人波に揉まれながらの作業だったが、ここはかなり大きい役所なので、壁も人員もあって俺としては大分やりやすかった。

サイクルとしては五日をそこで寝泊まりし、二日はお婆さんの所でゆっくりするとうもの。時たま治療に来られない人達の元へと遠出したりなんかして、気付いたら二年の期限がすぐそこまで迫っていた。

俺は期限の延長はせず、次の逗留ポイントとして南の長沙を目指すとさっさと決めて

いた。

理由は三つ。

一つ目はこの近隣の相談がほぼ無くなったから。

国の政策が地方にも影響を及ぼし始めたのが大きい。

相談の内容はほとんど飢饉、農業、商売に関するものだったので、国の飢饉対策の徹底と、俺の指南書による農業改革と、国の商業優遇政策ががつつり問題を浚っていった形だ。

二つ目は治療院が俺なしでも回せるようになったから。

張術は沛県での二年逗留の間に特級試験を合格してしまった。本当に筋が良く、勤勉な子だよ。

診察や治療に俺の付き添いが必要なくなったお陰で効率は倍になり、余裕が出来ていた。

なので他に有望そうな子をアシスタントとして雇い、教育しただしたのだ。

張術も後輩が出来ると張りも出るし、後進にものを教えるとなると復習になって良い影響を及ぼすだろうと思っていたのだが：予想以上というか、予想外というか、彼女は俺よりもものを教えるのが上手かった。

彼女は一年足らずで下級医術試験合格者を複数育てる事に成功していた。

下級とは言え、村医者としては十二分にやっていけるレベルである。

不確かな知識しか持っていなかった者を一年でそのレベルに引き上げたのだから、張術の教え方がどれだけ上手かったのか分かるうというものだ。

三つ目、最大の理由はお婆さんが亡くなってしまったから。

……手の施しようのない老衰であり、また見事な大往生だった。

つい一ヶ月前、光琳さんが仕事を終わらせたので、大急ぎで村に戻ると連絡があった。俺達一堂は歓迎の為に準備をし、身内だけの宴を行った。

俺が趣味で作った果実酒とこれまた俺が作った創作料理で光琳さんを持って成し、飲めや歌えやで皆大いに楽しんだ。光琳さんは母親を元気な姿で見ることが出来たと喜びと安堵をこぼし、珍しく羽目を外していた。

また大事な記憶の一ページが増えたと喜んでいた、その一週間後の事。

朝、いつも早起きのお婆さんが中々起きてこないのを心配した光琳さんがお婆さんを起こしに行った際、お婆さんが安らかな笑顔を浮かべて亡くなっていたのを発見した。

お婆さんが亡くなったという知らせが周囲を駆け巡ったその日、近隣の村々は悲しみに暮れた。

光琳さんが戦いに赴いてからは近隣の村々を公正かつ親身に治めていたお婆さんは、近隣住民に例外なくとても慕われていたのだ。

彼女の葬儀には多くの人が詰めかけた。

光琳さんはお婆さんが多くの人に惜しまれている光景を見て、そこでようやく一筋の涙を流していた。

どれだけの苦境にあらうと弱音も涙も見せなかった光琳さんが見せた、初めての涙だった。

普通ならばそこでしばらく喪に服して仕事を休むのが常識だったが、彼はすぐさま仕事に戻った。

お婆さんなら、仕事をほっぽり出して何をしてるんじゃないかと怒る事を重々知っていたからだ。

俺はというと、大事な人がいなくなった場所には居辛いという後ろ向きな理由から村には顔を出さなくなっていた。

最初にお婆さんに出会った時、大好きな夫が亡くなった本宅へ近付けなと言っていたのを思い出す。

今ならその気持ち痛みほど分かる。

一ヶ月後、親しい人との初死別になんとか気持ちの整理をつけた俺はお婆さんの墓の前にいた。

共同墓地の一角にぽつんと立つその墓に、お婆さんの好きだった百合の花を供える。隣には張術がいる。

彼女もこの二年間でお婆さんに家族同然でお世話になっていた。娘のように扱われるのも満更ではなかったようで、二人は本物の家族のように見える程親しくなっていた。

俺がこの一ヶ月村に来れなかった分、治療所を休んでいた時は毎日こちらに来てお墓の掃除をしてくれていたようだ。

本当に、よく出来た娘だ。すごく有難かった。

俺はまず一ヶ月顔を見せに来れなかった事を詫び、そしてまたしばらく会えなくなる事も詫びた。そして今までの思い出を語り、最後に深く深く感謝を述べた。

この時、俺はこちらに来て三度目の涙を流した。

お婆さんに別れを告げた後、俺はそのまま長沙に向う。

張術も付いて来たがっていたが、もう彼女に教える事は何も無い。

しかもつい先日、医術特級合格者として、また教育者として都で治療院と医学校を開いて欲しいと劉邦様からの勅令が届いていた。

彼女はそれはもう名残惜しそうにしていたが、勅令とあらばどうしようもない。

俺は昨日の内に、彼女に俺謹製の医療器具を送り、真名の名付けと真名の交換を済ませていた。

実用性抜群の医療器具群よりも真名の名付けを彼女はいたく喜んだ。

「私もようやくやく師匠を真名で呼べるのですね？」

「むしろ真名の交換は遅すぎたぐらいだ」

「いえ、初めに言った通りです。いずれ特級試験を合格したなら、ご褒美は最上の物が良い。それを目指していたからこそ、短時間でここまで至れたのです」

「ご褒美が名前ねえ、本当にそれでいいのか？」

「ええ、名付け以上の贈り物ありませんよ。気にされるのなら、一杯一杯考えて下さい」

「いやまあ実はさ、試験に合格した時から考えていたんだよ。

喜び和むと書いてシーホーと読む。俺がお前に抱いた印象をそのまま当てた。この名前を持って、周囲に喜びと和をもたらし続けられると信じている」

「しーほー、喜和、良い名前です。とっても良い名前です！一生大事にします！」

「おうおう、精一杯考えたんだ、大事にしてやってくれ」

そんなやり取りをして、昨日の別れは締めくくられた。

お婆さんと喜和との別れを済ませたので、何も思い残すこと無く長沙に向かえる。

「いつてらっしやい。白様、都で待ってますね」

「いつてくる。長沙での活動が終われば長安に行く。それまで都の皆を頼むぞ、喜和」

そうして俺達は笑顔で別れた。

長沙までの道のりは順調そのものだった。

ただ長安から沛県に向かう道中でもやっていったボランテニアを長沙に向かう道のりでも行っていたのだが、やはり一人では多少効率下がってしまった。

とはいえ不満点はそれぐらいであり、予定していた到着時間よりも一ヶ月ほど遅れて俺は長沙に辿り着いた。

一人旅、というよりも一人で行動するというのは初めてだったのだが、思うよりも上手く行った。

張術から旅の常識やサバイバル術を学んでいたし、一人という事で軽妙に動けたのも上手く行った要因だろう。

精神的な苦痛もあまりなかった。寂しきは勿論あったが、何だろるか、一人暮らしを始めたばかりの奇妙なハイテンションに似た高揚感が寂しさを消してくれた。

もつと長く続くとホームシックに罹っていたかもしれないが……って、それはないか。俺は唐突な転生という異常事態を経験しても孤独を感じてこなかった精神的不感症人間だしな。

そして長沙に着き、役所に行ってみれば、何故だか待ち構えていた長沙の県令がやってきて、直々に役所近くに用意されていた治療所兼相談所へ案内をしてくれた。

随分と立派な建物だと外から驚き、中に入って既に人員が勢揃いして俺を出迎えたことでもまた驚いた。

どうやら『次は長沙にでも行きます、何かあればそこに連絡下さい』とほいほい劉邦様に手紙を出したのが良くなかったらしい。

一応名前を変えてのお忍び旅なんだけど……。蕭何って分からなくても、国の認めたお偉い人なんだって気を遣われたら意味が薄れちゃうんだよなあ。

県令さんから設備も人員も好きに使ってください、物が足りなければ言ってくださいと畏まった対応をされ、俺は苦笑いでそれに応えるしかなかった。

長沙での活動は何事も無く進んだ。

相談も一年ほどでまばらになり、治療所の人員も漏れ無く医術下級合格者に育て上げた。

一年以降俺はかなり暇になってしまったので、出張治療に精を出す事にした。ついでとばかりに海に行きバカンスを楽しんだりもしつつ、寄った海辺の村に塩の精製、船の造り方、各種漁業方法の伝授なんかもしておいた。

そうして二年、見所のある子が上級認定試験を合格したので、そろそろこの場所も移動しようと思っている。

これから長安に戻りますよ。と手紙を出して一ヶ月。便りが長安に届きそうなタイミングでその噂は飛び込んできた。

国と匈奴が戦争を起こしたと、それが二ヶ月前の事だったと。

有り得ない! どうして?! という疑問と、やってしまった! という後悔と不安で頭が真つ白になる。

取る物も取り敢えず、俺は最低限の旅支度を済ませて長沙を発った。

申し訳ないと思いつながら馬を使い潰しては村から村へ。

寝食すら惜み、本来なら三ヶ月く四ヶ月を見越す道中を一ヶ月で駆け抜け、長安に辿

り着いた時にはしかし、全てが終わってしまっていた。
本当に、後悔は先に立たないのだ。

17. 彼女が死に至る経緯

太陽が頂点に燦然と輝く頃に長安へと着いた俺は、活気が最高潮となっている長安を走り抜けていた。

行き交う人々は戦勝ムードに沸き立ち、口々に劉邦様万歳、漢万歳とそこかしこから灯華様を称える声が聞こえてきた。

だが俺の不安は増すばかりである。

城の門番に許可証を投げ渡し、戦功の自慢が交錯する城内を駆け抜け、嚴重に守られた悲壮感漂う後宮へ足を踏み入れ、灯火が消えたように薄暗い灯華様の部屋にノックも無しに侵入し、俺は生きてきた中で最大の後悔に苛まれた。

「おいおい、久しぶりにあったのに、何て酷い顔をしているんだ」

「馬鹿な事を言わないで下さい。貴女の方が……ああ、こんなにも寝られてしまって、どうしてこんな……」

「ははっ、お前がそこまで取り乱す姿は初めてみたなあ」

「貴女の事以外なら、私はここまで取り乱しはしなかったでしょう」

力なく横たわり、酷く寒れた灯華様の姿を見て、俺はその場で崩れ落ちてしまった。一目見ただけで、彼女の命がそう長くない事が見て取れてしまう。

気脈は滅茶苦茶で、淀みは全身に及んでいる。

這いずるように灯華様に近寄り、無駄だと分かっている触診をして、絶望は更に深くなった。

これはもうどうしようもなく手遅れだ。

俺が打ち拉がれていると、部屋の外が騒がしくなってきた。

「我が君の元に賊の侵入を許すとは！何かあれば衛兵共の首を全て晒してやる！ええい、急げ急げ!!」

「しかし呂雉様、相手は張良様だったという報告も」

「知った事か！大事な時にこそおらん奴など切り捨ててしまえ！」

呂雉の言い放った言葉が胸に深く突き刺さった。

ボタンと扉が開け放たれ、ドタドタと数人の男女が入ってきた。

「やはり張良様であられましたか！」

「張良！……は後宮で、大戦の英雄であろうと許可無く立ち入って良い場所ではない！」
微かに喜色を見せるかつての部下達と、顔を真っ赤に染めて怒る呂雉。

そして俺の悲嘆に暮れた姿に全てを察した張術がいた。

「呂雉様、劉邦様のお身体は大声すら途轍もない苦痛となるのです。どうか気を静めてくださいませ」

「ぐっ、わかった。…ごめんなあ我が君、身体は大丈夫か？痛くないか？苦しくないか？欲しい物があつたら何でも持つてくるよ、どうだい？」

怒髪天から一転して涙目になって灯華様を心配する呂雉。

急転直下の態度だが、灯華様至上主義の彼にとつてはこれが常だった。

「大丈夫だよ、私はそこまでやわじゃないさ。だけどそうだな、お前の淹れた茶が飲みたいな」

「分かった、すぐに最高のものを持つてくるよ」

灯華様からの頼みには全力を尽くす男である。

呂雉は後ろに控えていた近衛兵達を押しつけ、厨房へと走っていった。

「……これでしばらく時間が稼げるな。おい、お前達も戻って良い。私は張良と話がある」

「はっ、失礼します」

近衛兵達は頼みますという目で俺を見、部屋を退出していった。

だが、その信頼には応えられそうにないのだ。

「ふう、これで大分静かになった。白、すまんが話の前に準備がある。お前も少しだけ部

屋を出てくれないか？」

「分かりました。ですがその前に」

俺は灯華様の肩に手をやり、全力で気を操り、灯華様の気と同調させていく。

そして痛みを感じない範囲で気脈を広げ、細胞を活性化させる。

「これが私の出来る精一杯です」

「おお、大分楽になった。さすが白だな」

「ふふっ、やっぱり師匠の腕にはまだまだ追いつけませんね。では私は灯華様のお手伝いをします。その間に師匠は顔でも洗ってきて下さい」

「顔を？」

「準備は丁度それぐらいに終わるでしょうし、何より師匠の顔、かなり酷いですよ？ 大事なお話があるんですから、ちゃんと身綺麗にして、気持ちを引き締めて来てください」

「そんなにか……分かった、行ってくる」

俺は動揺していたのだろう。だから彼女達が浮かべる微笑の意味に気付かなかった。透き通るほどに綺麗な笑顔など、不自然以外の何物でもないのに。

一番近くに備えられている井戸に向かいながら、気持ちと情報の整理を行っていた。

灯華様が匈奴との戦が原因で亡くなると俺は知っていたのに、それを防ぐ事が出来な

かったという後悔。そして何故止められなかったのかという疑問。

この二つが頭と心の中をぐちゃぐちゃに掻き乱している。

確かにこんな状態じゃあ冷静に話を聞ける筈もない、落ち着くためにも急いで整理をして、頭を冷やさなければ。

今一度考えるに、俺は俺の出来る範囲で匈奴の脅威には全ての手を打っていた。

宥和政策よりも深く彼らを仲間につけておきたかった俺は、融和政策の案を練りに練って光琳さんに渡していた。政策に反発された際の対応、最悪戦争状態に突入した際の戦略も多分に添えてだ。

万が一に備えて軍備の縮小はせず、しかし兵力が威圧にならないようにと、上手く各地に散らして治安に当たらせ、兵力のカモフラージュを行う指示を出していた。

五胡との交易を活発化させ、漢人と彼らを積極的に交わらせて、親五胡、親漢の間を増やす流れも作っていた。

他にも細々とした策も幾重に巡らし、万全を期したとはつきり言える。

逆に南の対策が薄くなってしまったので、俺が直接巡る事になった。

とはいえ早めに南側を安定させ、本題の北側には長期間居残って対応に当たろうという魂胆があったので、この時点では南を巡る事に躊躇いはなかったのだ。

だがそれが裏目に出てしまった。

この時代について概略だけ覚えていて、詳しい年表を覚えていなかった俺は、匈奴の融和政策が上手く行っているという報告に完全に油断をしてしまった。

そしてまんまと油断を突かれ、凄まじい速度で戦端は開かれて終結した。

……俺だけが匈奴の侵攻を予想出来る立場にあったのに。どれだけ事を上手く運ぼうが、歴史の強制力は全てをご破産すると知っていたのに。

俺はそれに直接介入する事すら出来なかった。

井戸の前に着き、釣瓶を落とそうとして、手が開かない事に気づいた。

どうやら悔しさのあまり手を強く握り締めすぎ、硬直してしまったようだ。

俺は手を解しながら、深く深く深呼吸をする。煮詰まった頭が少しだけ冷えた気がした。

後悔の内容は確認できた。今は明確になった後悔を押し殺し、灯華様の事だけを考えた。
ねば。

顔を洗い、部屋に戻ったのなら、中では美しい衣装を纏い、品のある化粧を施した灯

華様が待っていた。

その姿に愕然とする。あれだけ寝れ果てていたのに、今では昔見たままの灯華様がいる。

明らかにおかしいと意識を集中して気を読めば、彼女の丹田から眩いまでの気力が感じ取れた。

馬鹿な、彼女にもうそんな力は……俺ははつとして、喜和を見る。

「喜和、灯華様に何をした!」

「師匠にはやっぱり気付かれてしまいますよね。正直に告白しますと、灯華様には私の家に代々伝わる秘伝の薬を処方しました。」

「気力を爆発的に高める秘薬です。ですが恐ろしく体力を消耗し、常人であれば効果が切れる四時間後に指一本動かさなくなってしまうです。それ以外に副作用と呼べる物がないのがこの薬の凄まじい所なのですが……今の灯華様にとってみれば、効果が切れれば死に至る劇薬です」

「なっ」

「白、喜和を責めないでやってくれ。彼女には私から無理を言ったのだ」

「しかし!」

「白、最後の我俣だ、聞いてくれ」

俺は小さく呻く他なかった。それを言われると、最早何も言えない。

「……分かりました、拝聴しましょう」

「まずはお前の信頼を裏切った事を謝りたい。何かあつたら呼んでくれというお前の約束を無碍にしてみました、本当にすまない」

「許しませんけど、許します。本当に、何があつたと言うのですか」

「それについても私の口から話さなければいけない、はじめだ」

そうして灯華様は匈奴との戦争が如何にして始まったのかを話し始めた。

始まりは唐突な裏切りだったと言う。

融和政策は功を奏し、互いに友好的な関係を築けていたのだが、单于が変わった事で全てがご破算になった。

それまで单于の右腕として融和政策を匈奴にとって受け入れ易い形に調整していた男が突如裏切ったのだ。

融和政策を主導していた单于を殺し、その罪を漢の人間に着せ、漢討つべしと匈奴の民を煽動した。

そんな凶行を知らぬ漢の使節団は無事を重ねた十数度の来訪に油断し切っており、一人を残して皆殺しにされたそうだ。

その唯一の生き残りである韓王信に使者の首を王宮まで届けさせ、匈奴からの宣戦布告はなされた。

猛烈な勢いで進軍する匈奴の兵だったが、万が一と各地に散らせていた兵を即座に集結させて対応。

容易な進軍が出来なくなった匈奴はあつかりと引き、漢と匈奴の緩衝地帯にてしばしの睨み合いが続いた。

最初の宣戦布告で俺に手紙が来ていたなら、ここで戦線に加われただろう。

しかし灯華様はあえてそれをせず、自ら陣頭に立つて戦ったという。

「何故貴女がそんな無茶を！」

「お前や皆が鍛えた兵と、お前が残した策があれば難なく行けると思った。

ならば私が前に出ないでどうする。それぐらいしなくちゃあ白と対等になれないじゃないか。

お前と離れている間にさ、そんな他人任せの自信と、心底くだらない自尊心が生まれていったんだ」

「そのような事はありません、灯華様は白様が離れていても安心できるように頑張るんだと常々おっしゃって」

「喜和！」

「灯華様、最後の最後で悪者ぶらなくて良いのです。甘えて下さい、その方が互いの為になるのですから。」

と、そろそろ秘薬の効果も安定したようですし、お役御免ですね。お邪魔な私は退出します。灯華様に頼まれた事もありますしね」

今更気付いたが、灯華様と喜和は真名で呼び合っている。やり取りを見ている限りかなり親密なようだ。

喜和はおほほと笑って部屋から出て行った。

その様子に俺も灯華様も毒気が抜けたように笑みをこぼした。

「喜和の忠告通り、格好付けるのはやめよう。白に認めて欲しいとか、やれる自信があったとか、そういう感情もあった。けどなにより、一緒にいられないお前に安心してもらいたかったんだ。」

「ただど上手く行かなかった」

睨み合いが続く中、漢軍は灯華様という旗頭が立つ事で士気を向上させ、攻め込むきつかけを得た。

それからは怒涛の快進撃、とはならなかつた。

匈奴と漢の折衝地に住んでいた家族を人質にされていた韓王信が裏切り、灯華様に暗

殺を試みたのだ。

その場で生命を取られる事こそなかったが、襲撃の際に毒を盛られてしまったそう
だ。

それは戦医として付き従っていた喜和ですら正体が掴めない猛毒だった。恐らく蟲
毒などの類で完全な解毒は不可能なものだったのだろう。

薬草を煎じ、気を操り、喜和の持つ秘薬も用いて何とか死は免れた。

しかし後遺症は酷く、立つ事さえままならぬ状態に陥ってしまった。にも関わらず、
彼女は病を隠して先陣に立ち続け、裏切りの单子を討ち取るまでは膝を屈さなかったと
いう。

单子を討ち取った灯華様は、これ以上の争いは無意味だと宣言し、都に凱旋。

凱旋パレードを行い、後宮にたどり着いた所で限界を迎えた彼女は、寝たきりのまま
今を迎えたのだった。

彼女は本物の英雄だった、最後まで俺の敬愛する英傑だったのだ。

18. そして彼女は眠るのだった

俺の敬愛する英雄の語りは終わった。

次いで気になった点を聞いていく。

「何故単于が戦争を仕掛けたのか理由は分かっていますか？」

「捕えた韓王信が裏切った単于から聞いた話では、漢が怖くなったのだと言う」

「怖くなったとは？」

「匈奴が金銭的にも食料的にも豊かになり、文化は華やかになり、人は綺羅びやかになった。

初めは良いとどんどん受け入れていたが、その変化があまりに早く、恐ろしくなったのだと話していたそうだ」

「もしや私の政策が戦争へと繋がったのですか?!」

「……新たに単于となった男の切っ掛けとなったのは間違いない。だが変わらん。

殺された冒頓単于は強く聡い男だった、

その強さ故、もし私達が協調の路線を取らなければ直ぐ様戦争に突入していただろう。

その敏さ故、融和政策がもたらす富が匈奴を豊かにすると理解し、政策を前倒しし、無理押しして周囲との軋轢を生んだ。

どう転んだとしても戦争には突入していた。

それにお前の政策があつたからこそ、冒頓単于は漢に殺されたという偽報は疑われ、敵戦力は十全に集まらず短期間での戦争終結がなされた」

どう転んでも戦争に突入していた、この言葉に俺はいつか感じた恐怖がせり上がってくるのを感じた。

歴史の強制力に打ち拉がれ、無力感に苛まれた鴻門の会を思い出す。

もしや、いやしかし、それではあまりに救われない。

「お前がそこまで悩み抜き、苦しみ抜く表情を見るのは鴻門の会以来だな」

「……さすが灯華様です。正しく鴻門の会について思い出していました。そしてあの時よりも運命を深く恨んでいます」

「気に病むな、とは言えないな。私が蒔いた種だ。

ともかく、これで匈奴との話は終わりだ、次いで白に聞きたい事がある」

「なんででしょうか？」

「国と家族についてだ」

「はい」

「白、私が死んだ後、国はどうなると思う?」

「このまま灯華様の訃報を流せば国は間違はなく荒れます。」

項羽という大英雄を降した英傑だからこそ国の頂点に立つ事を許され、そして人心を数々の政策をもって安寧に導いた名君だからこそ全土の民に認められ、受け入れられました。

旗頭としての功績、王としての功績、この両方を兼ね揃えていたからこそ、反乱もない順風満帆の治世を行えていたのです。

ですが次期皇帝である劉盈様には現在何の実績もありません」

「この場合の最善はなんだ?」

「まずは灯華様の死を徹底的に隠蔽します。」

次いで劉盈様には後見人となる人物をつけます。光琳さんの協力は必須で、周勃さん、夏侯嬰、ハンカイさん等の軍部に強い影響力を持つ人物達の協力も必要です。文官は武力を背景にすれば黙さざるを得ず、一先ずそれで宮中はまとまるでしょう。

そして死を隠せるであろう数年の内に分かり易い大功、内政面では難しいので戦功を立てさせれば劉盈様に対する期待が得られます。

匈奴か南の他民族を大々的に討伐するのがよろしいでしょう。

そして期待感が高まる中で死を公表し、何事も無かったように内政を厚く整えれば、

灯華様の死を乗り越えておられるのだと劉盈様の評価は上がり、人心もすぐさま落ち着くでしょう。

細かい部分は光琳さんと詰めなければいけません、大まかな指針としてはこんなものでしょう」

「ならば劉盈様にもそう話をしよう。聞きたい事は終わった、次は言いたい事だ」

「はい、お聞きしましょう」

「私が死んだら、我が家族には一度見切りをつけてくれ」

「……それは何故ですか？」

「呂雉はお前を嫌っている。娘も息子もその影響でお前を毛嫌いしているのは知っている。是正しなかったが、私は政務もあつて家族と接する時間が足りず、どうしても呂雉の教育方針を挫く事が出来なかった。

自らを嫌っている人間に仕えるのは難しいだろう、だから一度互いに冷静になる期間を設けて欲しいんだ。

そして冷静になった上で、我が家族に見所があるならば、どうかあの子達を頼む」

「……てつきりお前に託したと言われると思っていました」

「約束を違えた上、勝手に無理して勝手に死にそうになって、それで家族を頼むなど、今際の際とはいえ許されないだろう。

本来ならば、私はお前を縛り過ぎた、だからもう私の家族など見捨てて自由に生きろと言わねばならぬ、分かつてるんだよ。

それでも、こうやって無様を晒して頼るほど、家族というものは大切なんだ」

「……分かりました。灯華様が亡くなられた後、ご家族がどう行動するかを見させてもらいます。現状維持がなされるようなら、私は影に日向に彼らを支えましょう。一応死の公表に至るまで計画も光琳さんと一緒に考えます。それぐらいは致しましょう」

「白には助けられてばかりで、その上私からは何も返せなかった。すまない、本当にすまない」

「お世辞でも何でも無く、私も貴女には助けられていました。それに何かを返す必要もありません。

貴女という時間はずっと楽しかった。貴女が英雄として育っていき、王となって国を作り上げる様を誰よりも近くで見れました。

一緒になって作り上げた国が、誰からも歓迎され、喜ばれるのを身近で感じる事も出来ました。

こんな経験が出来た人物など、歴史を見てもそうはいないでしょう。

だからはつきりと言えますよ。私は貴女と出会えて、貴女の下に仕える事が出来て幸せでした」

「……有難う。私も幸せだった。最期にこそ悔いはあつたが、この生涯は史上最高の人生だったと胸を張って言える」

「お別れですぬ」

「お別れだ」

「また次の来世でお会いしましょう」

「来世というものがあるのなら、是非またお前と会いたい。今度は最後まで悔いのない人生にしてみせる」

……もう語る事は何もなかった。

俺は静かに立ち上がり、部屋を出ようとして、不意に手を掴まれた。

「なんだ?」と思つて振り返ると、既に灯華様が眼前に迫つていて、唇に柔らかな感触があつた。

感触はすぐに離れ、悪戯っぽい表情をした灯華様の顔があつた。

「人にうつる物でも、少量では大した毒でもないらしいから安心しろ。へへっ、どうだったよ?」

「そりや驚きましたよ。初めての接吻だったので尚の事」

「また白の初めて貰つちまったな。いやー最後ぐらいはと正直になつて良かった。これでもう何も怖くないな!」

「……ええ、自由奔放で豪放磊落な貴女は、最強です」

「そうだろうか？それじゃあ本当にさようならだ、元気でな、白！」

無邪気な笑顔に涙がこぼれそうになる。けれどここは俺も笑顔でいるべきだろう。

俺は深く深く礼をして、部屋を出た。

少し離れた所に喜和が控えていて、出てきた俺に近寄ってきた。

申し訳無さそうな表情に、彼女が何を言おうとしているか察した。

「白様、今回は私の」

「お前が責任を感じる事は何も無い。

俺が傍にいたとしても灯華様は治せなかった。秘薬にしても、俺が持っていたなら灯

華様のわがままに伝えて使っていただろう」

「……お氣遣い痛み入ります」

「氣遣つてなどいない。本当の事だ」

俺は光琳さんと草案を考えようと、彼の執務室へ歩を進める。

喜和はさつさと歩く俺の三步後ろから付いてくる。

途中、呂雉とすれ違った。歩くこちらを一瞬睨むが、すぐに興味を失ったように灯華

様の部屋に駆けて行った。

心の底から憎む俺に構うより、手元に持つお茶を灯華様に届けて褒められたいのだろ

う。

相も変わらず極端な男である。

「……この後、師匠はどう動かれますか？」

「俺は直接動かん。灯華様には、家族を見極め、見所があるようなら助けてやってくれと言われたからな。彼らがどう動くかを静観する」

「灯華様の死後は国に関わらないという事ですか？」

「そうなるな。宮中が荒れようが俺は介入しない。」

そして灯華様には悪いが、呂雉がいる限り、見所も何も無いんだ。呂雉は間違いなく国を駄目にする」

「この国はどうなると言うのですか？」

「灯華様の後は劉盈様が跡を継ぐ事が確定している。他の人間よりも治世に向いている人格だから一番国を安定させるだろう。」

けれどもさっき言った通り、呂雉によつて宮中は荒れに荒れる。心優しいあの子がその状況を打破する、または耐え忍べるとは思えない。逆に言えば、折れなければ芽はあるという事だがな。

なんにしる奴が実権を握り、灯華様が亡くなられたと発表でもされれば、国は急速に求心力を失つて現状の惰性で国は運営される事になるだろう」

「先程から呂雉様に対して辛辣ではありませんか？優秀な方ですし、家族思いの良い方だと思いませんか？」

「その言葉は何も間違っていない。だが付け加える点がある。

人を支えるのは優秀だが、人の上に立つ器ではない。家族思いというより灯華様至上主義であり、息子も娘も彼女の付属品だと思っている節がある」

「さすがにそんな事は……」

「皆そう言うが、まあ今に分かるさ」

「……そうですか」

「喜和はこれからどうする？」

「灯華様が亡くなられたら、勅命も効力を失いますし、都にいる意味はもう無いんですね。

「医学校ももう私がいなくても大丈夫でしょうし」

「お前は教育に対する天稟がある、そのまま身を引くのは勿体無い気もするな」

「人に物を教えるのは楽しいです。ですが人を育てる楽しさと忙しさにかまけていたから、灯華様を毒からお救いする事が出来なかつたのでは？と夜毎に思うのです。

ですから私は故郷に戻り、そこであらゆる医学を極めようと思います。人材育成も平行的に行おうとは思いますが、片手間になるでしょうね」

「そうか……」

「あの、もし宜しければ、灯華様の頼みが終わったなら、私の故郷に来ませんか？」
「そうだな、俺も灯華様を治せなかつた事には忸怩たる思いがある。」

長安での顛末を見届けたら、喜和の故郷に行つてみるかな」

「では私はすぐにでも漢中に戻り、準備を始めましょう」

「そんな急に戻つても良いのか？この長安での生活も二年余りあつたんだらう？」

「殆ど教師としての生活と、灯華様との話し相手に従事してましたから、実は長安という都市自体には愛着が無いんです。」

医学校は灯華様の一件から主治医として城に詰めるようになった時に引き継ぎを終えてます。

……後、正直ですね、私も灯華様と真名を交わし合つた仲ですから、事の顛末を見守るべきとは思ふのです。ですが、灯華様の死はちよつと私には重すぎるんです。勝手な推測なんですけど、沛県でお婆さんが亡くなった時の白様と同じ気持ちと言えれば分かつて頂けますか？」

「思い出がありすぎるから処理できないんだな。ああ、分かるよ」

「ですので灯華様の最後の演説を聞いたら、今日中に荷物をまとめて、明日明後日にはここを出ようと思います」

「演説？」

「ええ、実は白様が顔を洗いに行かれた後、衣装を整えている最中に申し付けられたのです。」

最後の大演説をするから、王宮と長安の人間を広い場所に集められるだけ集めるよう指示を出してくれ、と。

部屋を退出した後はそれを近衛の方や行きがかる武官文官の方に言って回ったんですよ」

「ああ、そこまで見越していたのか、あの人は。長安の人間を集めての大演説、あの人が本気で語りかければ人心は大いに沸き立つ。そうすれば発覚の時間も大いに稼げるな。」

「なんだ、俺の献策なんていらなかったか」

「あーいえ、白様が思うような策謀の為とかじゃなく、ご自分の為に演説なさるのだと思いますよ。」

灯華様は生粋の寂しがり屋の目立ちたがり屋ですから、人の記憶に残りたいとか、皆に最後は格好いい姿を見せたいとか、そういう単純な理由でやられるんじゃないですかね」

「なんか随分あけすけな言い方だな」

「私と灯華様は真名を交換した親友です。白様よりあの人の心の内を理解しているかも知れませんか?」

「ほう、大きく出たな。これでも灯華様とは十年以上の付き合いなんだが?」

「白様は男で、私は女ですからね。心の内までとなると致し方ないですよ」

「ぐつ、そう言われると弱い」

「ふふ、師匠から一本取っちゃいました。では私は演説の位置取りに行つてきます」

「そうか、俺は曹参さんの部屋に寄つてからそちらに向かおう」

「はい、お待ちしてます」

俺は光琳さんの部屋に赴き、灯華様との会話の内容を話し、またしばらく一緒に働く事を伝えた。

その後、俺達は灯華様の演説を聞くため皇城の広場に向かい、舞台袖になる位置を確保していた喜和に合流した。

灯華様の演説の内容については伏せる。

彼女の言葉を短い言葉でまとめる事が今の俺には出来ない、胸に満ちる万感の思いを裏切る事になりそうだから。

とりあえず彼女の言葉の効力だけ語るなら、もしかしてあの演説で、彼女の家族も良

い方向に向かい、運命を打破してくれるのでは？なんて諦観に死んでいた心が期待してしまう程の演説だったと言っておこう。

押し掛けた万人の心を尽く打ち抜き、彼女は最後の大仕事を見事にやってのけた。

しかして大演説の数日後、歴史は俺の知る所と一切変わる事無く流れ始めるのだった。

19. 残された者達

俺のその後を語る前に、仲間達のその後について少し話をしよう。

とはいえ歴史は正史とあまり変わらずに進行していて、新たに語れる部分は少ないのだが。

まずは呂雉について。

ある意味、劉邦様が無くなった後の国と歴史の中心人物だしな。

だが彼について語ろうにも、俺自身は劉邦様との最期の時以来彼に会っていないので、人から聞いた話、推測をまとめたものになる事をご了承願いたい。

彼は劉邦様の死を隠蔽するようにと曹参さんから指示されていたにも関わらず、彼女の死を大々的に公表し、豪華絢爛な国葬を行った。

見送りが多ければ多いだけ彼女が喜ぶとも思っただろうか？ 全くもって度し難い行動をしてくれたものだ。

そして彼は一年を喪に服しつつ、水面下で活発に動き続けていた。

目的は恵帝支配の安定化……などではなく、劉邦様の残した全てを自身の物にし、劉邦様の威光を妨げる全ての存在を排除したいという狂気に溢れた物だった。

まず彼は恵帝の地位を脅かす存在を表に裏に排除し始めた。その所業は悪鬼羅刹も震え上がる有り様で、誰よりも近くで悪逆非道を見せ付けられた心優しい恵帝は心を病んでしまった。

悍ましい推測を述べさせてもらうなら、呂雉は恵帝の心をわざと病ませたのではないかと俺は邪推している。

劉邦様が発布した法律や政策を病的なまでに守らせ、恵帝自身には何も求めず、わざと凄惨な所業を見せつけた点から、大好きな劉邦様が作った国を好き勝手させないよう、恵帝のやる気を削いで傀儡にしようとしたのでは？と疑っている訳だ。

次いで劉邦様の威光を輝かせる為、その他を貶め始めた。
手始めに俺の功績をぶち壊し始めた。

韓信、張良、蕭何の名声を出来るだけ貶め、俺の書いた指南書等が保管されている資料室を表向きには放火だと言って燃やし、不都合な人間に罪を押し付けて処分した。

指南書は三役が書き記した事になっており、それが在り続ける限り名声を衰えさせる

事が出来ないと思つたようだ。

技術指南書の類は既にレプリカが大陸中に拡散されているのであまり問題はなかつたのだが、新たな法律、政策、またその施行時期などを詳細に詰めた政治に関する書物、思想、王の在り方などを記した君主論などは日の目を見る事無く全て焼失した。

噂では誰かが秘密裏に運びだしたとか、火事の中に突つ込んで回収されたとも言われているが、真実は闇の中だ。

もし火事を避けて無事なら、まともな人の手に渡つて知識が有効活用される事を祈つている。

無くなつたと言えば劉邦様に贈つた銅板と銅鏡も、呂雉と劉邦様が描かれた部分以外は行方が知れないそうだ。

火事騒ぎのどさくさに紛れて誰かが盗み出したらしく、その際に色々と失われたそう
だ。

正直そつちの方が指南書が燃えるよりよほど堪えた。

俺の功績を叩き潰した彼は次いで、曹参さんや周勃さんなど元勲を含めた諸侯から宮中の文官まで、自分の意に沿わない人間の地位を失墜させた。

仲間達が五胡の牽制や地方の不穏分子等の排除に奔走している間に、自身の持つ影響

力、権力をフル活用して、呂雉にとって不都合な人物達の首を一斉にすぐ替えたのだ。仲間達が気付いた時にはもう遅い。空いた席には呂雉の身内と都合の良い人物達がついでにまつており、中央は呂雉の手中に落ちたと言っても過言ではない状況にまで陥ってしまった。

だがいくら根回しをしていたとはいえ、曹参さんや周勃さんを敵に回して生き残れる筈もなく、呂氏は一時隆盛を極めたが、数年後に一族郎党皆殺しとなった。

仲間達の中でも盧縮さん、ハンカイさんが政変に大きく巻き込まれてしまったのは悔やまれてならない。

当然そんな宮中の荒廃は民に漏れ、国は一層信用を無くし、民の活気は急速に失われていった。

劉邦様恩顧の元勳達については多くを語る必要もない。

彼らもまた歴史とそう大差ない流れを辿っていた。ただし歴史よりもだいぶ穏便な形で。

盧縮さんもハンカイさんも正史では失意の中非業の死を遂げているが、彼らの名誉はそれほど落とされる事もなく、普通に生活している。

盧縮さんは匈奴との境界線に近い都市に左遷させられたが、劉邦様を殺した憎き匈奴

を、二度とこの地に踏み込ませるものと決意を新たにしていたそうだ。

ハンカイさんは身内に呂雉の血縁がいて、呂氏皆殺しに巻き込まれそうになったが、仲間の協力を得、名前を変えて生活しているらしい。

曹参さん、周勃さん、夏侯嬰なんかは宮中を安定させた後は引き継ぎを行い、自分の領地を巧みに治めているそうだ。

親しい友人が生き残った、これは俺の知る歴史の相違点として最も喜ぶべき所だろう。

歴史と違う残りの点は、劉邦様が重要だと初期に出した幾つかの発布と政策施行ぐらいか。

真名の浸透、教育の推奨、農業改革、職人制度、政教分離が主な変更点である。

儒教の政治的関与だけはどうにか避けられた。仲間の生存の次に喜ぶべき、大きな変更点だろう。

……何故回想に何とかからしいとか、何とかだったそうだとか、他人事のような語り口になっているのかというのと、呂雉と同様に彼らとも長らく会っていないからである。

呂雉もいなくなり、国はどうか安定した。彼らの忙しなかった時間も落ち着きを取

り戻しているだろう。

だから俺は彼らに会いに行くべきなのだ。会って全てを任せきりになった事を謝るべきなのだ。

しかし、それが容易に出来ない事情があった。

劉邦様の死から二十年近くの月日が経ったのだが、俺の容姿はこの世界に落ちた時のままなのである。

正直、これは奇異過ぎる。

その事については、共に過ごした十年間容姿の変わらず、異常な活躍をしていた俺への何の隔意もなく受け入れてくれたかつての仲間なら、受け入れてくれるかも知れない。

だが、先の政変に全く関わらなかつた負い目があり、会いづらさに輪をかけてしまっていた。

月日が経てば経つだけ、俺の異常さと負い目が首を締めていくというのに、俺は結局二十年もの時間をふいにした。

ああ、このまま会わなくてもいいか、皆元気でやっているとは風のうわさで聞いているし、と心が低い位置に流れ始めた頃に一通の手紙が届いた。

曹参さんから送られてきたその手紙には、仲間がようやく揃えられそうだ、張術と共

に集いに顔を出してはくれないか。という内容が書かれていた。

俺はようやくそこで決意を新たにし、奇異に映り、嫌われても仕方がない。ともかく一度会って、あの時逃げたけじめをつけようと腹をくくった。

張術を呼び、長安に行こうと誘うと彼女は一も二もなく頷いた。

デートに誘ってくれるのは久しぶりだと喜んでくれ、すぐに発とうと言い出した。

『今から出ると到着が早すぎるんだが』と言つても、『良いんです、久しぶりに治療の旅をしましょう!』と押し切られてしまった。

教え子ほっぽりだして良いのだろうか?……また彼らに恨まれてしまうな。

久しぶりの二人旅は順調に進行した。

集合場所のある洛陽まではのんびりと一ヶ月ほどをかけた。

何のハプニングもなく洛陽に着いたおかげで、集いまで十日程間が出来たので、宿屋を借りて期日を待つ事にした。

十日間、第二の首都と呼ばれる洛陽の様子を見て回る。

衣食住はとても安定して見えるし、治安も良さそうだ。

だがなんだろうが、違和感がある。これほど良い生活を送っているというのに、漠然とした不安感が漂っている。

しかし俺はその不安感を探ることはせず、呑気に張術と洛陽の街を観光めぐりするのだった。

答えも、それに対して個人で打つ手がないのも分かっているからだ。

十日後、俺は約束の場所に来たのだが、どうにも入りづらい。

洛陽一の最高級料亭、白龍である。サイドメニュー一品に庶民の三日の食費が飛び、コースを頼むと三ヶ月の食費が飛ぶという訳わからん値段設定のお店である。

庶民の金銭感覚を持っている身からしたら些か鯨張ってしまう。

そして実は高級店は味が好みではないというのもあり、歩が勧めにくい。

一時は宮廷にいた俺だが、宮廷料理は行事の時しか食べなかつた。この時代の料理は調味料を使えば使うほど高級品！という価値観なのだ。

農業改革と職人制度のおかげで、調味料をただ使うのではなく、調味料で素材を活かす方向へ料理の嗜好が向かいつつあるが、今はまだ本流となるには程遠い。

そういう事もあり、俺としてはこういった類の高級店は是非ともお断りしたい。

とはいえそれは小事だ。

店に入りづらいなよりの理由は、なんかお店の周りに敵つい人が多数固めていてとても怖いからである。

店の前で呆然としてみると、ガタイが良すぎるあんちゃんがこちらに寄って来た。

「すいやせん、この店は今日貸し切りでして、他を当たってくださいえ」

物腰は柔らかいが、その風貌は明らかに堅気じゃないんだが……どこのヤクザが詰めてんの。あれ？もしかして店間違えた？

「私達はその店に用があるのです」

張術は颯爽と前に出て、曹参さんの手紙を見せる。するとあんちゃんの顔色が変わり、慌てた様子で振り返り、人垣に向かつて手を振ると人垣がさつと割れた。

「失礼しやした、お若く見えると聞いてはいました、まさかここまでお若い人が医聖張術様とは思ってもよらず。あの、呼ばれたもうお一方は？」

「遅れるそうです。この子は私の助手なのですが、入っても？」

これは俺の名前と年齢が一致なくて起こるだろうトラブルを避ける為の嘘だ。

先ほどの張術の反応を見ても、事前打ち合わせをしていて良かったと思う。

「ええ、構いやせん。中におられる方々も数人の護衛が張り付いてやす。では自分が案内致しやす」

そう言つてあんちゃんは先を歩き出した。

そして奥にある大部屋の前まで連れて来られた。部屋の前には二十人程が待機しており、如何にも腕利きといった風体ばかりが集められている。

「失礼しやす、張術様とお付の方、二名お連れしました」

ガタイの良いあんちゃん部屋の中に向けてそう言う、すぐに許可が出て、俺らを部屋の中へと促す。

部屋に入れば、そこには見知った顔も見知らぬ顔もいた。

顔を見て分かるのは、曹参さん、周勃さん、盧縮さん、ハンカイさん、夏侯嬰、陳平さんだ。

その顔を見て、俺は涙が出そうになった。

あまりの懐かしさに、そして彼らがお爺ちゃんお婆ちゃんになっていく寂しさに。

「……お久しぶりです、お二人共」

そう口火を切ったのは曹参さんだ。

「ええ、曹参さんは二十年、他の皆さんとは三十年近くぶりになりますね」

俺がそう返せば、半分の顔ぶれが、は？という顔をする。

「もうそれほどになりますか、いやはや、私も年を取るわけです」

声は枯れてしまっているが、その丁寧な喋り方は変わらない。その事実にもまた涙が出る。そうなる。

「そうですか、そうですね、光琳さん」

「お祖父様！この者、お祖父様の真名を！」

ああ、気が抜けてつい真名を呼んでしまった。

気色ばんだ彼は曹参さんのお孫さんか。見た目は俺と同じ年ぐらいで、うん、顔立ちは曹参さんによく似ている。

「黙れ曹奇、お前をこの場に居合わせたのは顔見せの為だけだ。私達の会話に入つて来る許可は出しておらん」

おう、急に口調変えられると怖いじゃないか。料亭の周りを囲ませたのは曹参さんだったのか？と勘ぐってしまうレベルの圧を感じたよ。

「し、しかし、お祖父様」

「真名を呼んだと言うが、この人以上に私の真名を呼ぶ資格を持つ人はおらん」

「おいおい、光琳、そこまでにしてやれよ。誰がこいつの容姿を見て、かの神仙と名高き蕭何様と分かるよ」

「そうですよ、と、そうつすよ、光琳さん、大目に見てあげてください。俺達ですらちよつと驚いてるし、お孫さんとなりや受け入れられないのも仕方ないつすよ」

「本当に白殿はおかわりもなく、まるであの時に戻ったかのように感じますからな」

「ええ、白ちゃんを見てると涙が出ちゃいそうになるわよね」

皆が温かい眼をこちらに向けてくれる。俺はこの二十年、なにを勝手にわだかまっていたのか。

お孫さん達が話について行けてないと戸惑いまくっているけど、まあいいかな。

その後、皆のお孫さんの紹介をし合う事になった。

曹参さん、周勃さん、夏侯嬰、陳平は言うに及ばず、政変に巻き込まれた盧縮さんとハンカイさんも実は強い影響力を持っている。

盧縮さんは対匈奴の要衝を纏める重要な立場にいるし、ハンカイさんは逃れた長沙方面で一旗上げ、あれよあれよと豪族に類する立ち位置に就いたらしい。

そんな大戦の、建国の、救国の英雄達の孫が顔見知りになり、結束するというのは非常に強い意味を持つ。

まあ同窓会のついでというのが締まらないけどね。

20. 一つの時代の終わり

さて、顔見せも終わったので、お孫さん達には退室してもらおうかね。

曹参さんがお孫さん達を隣室に促したのだが、曹参さんの孫である曹奇君が納得行かないという表情でこちらを見ていた。

不満が顔に出てしまう若さに微笑ましさを感じつつ、少し困ってしまふ。

このままでは気持よく『後は若い人たちに任せて』が出来ないな。

一向に退室しようとしないう曹奇くんが曹参さんが気付き、窘めようと口を開いた時、横から周勃さんが口を挟んだ。

「曹参とこの坊つちゃん白の事を信用できていないみたいだな。なあ白、ちよつとした余興によ、何か見せてやったらどうだい？」

「ええ、いいですよ。しかし何がいいでしょうね？ 気の扱いとかですか？」

「蕭何殿といえ、様々な学術書を書かれた偉大なお方。ですのでその知を是非とも見せていただきたい」

「具体的には？」

そのやり取りを興味津々に見守る周囲、退室しかけていたお孫さん達も元いた場所に

移動している。

「この国の行末についてお伺いしたい」

「……それは、本気で聞きたいのかい？」

ちらりと周囲を伺うと、先程より爛々と輝いた目が複数光っている。

あの、これって予定調和とかじゃあないよね？

「分かった。この国について語ろう。

まずは結論、漢の命運は長くて百年程だと言っておく。

本来ならば千年続く王朝を築けたが、呂雉が宮中を散々に荒らし、五つの愚挙を働き短命のものとなった。

第一に、劉邦様の死を隠蔽せず、国葬した。

第二に、恵帝の心を病ませた。

第三に、私が残した書を焚書した。

第四に、高官含め多くの人材を粛清した。

第五に、匈奴との交流を断絶させた。

呂雉は自身の愛する人の死が隠蔽される事を嫌い、大々的に国葬した。

これによって偉大な王がいないと知った国民の心は惑い、寄る辺を失った状態となっ

た。

不安感に追い打ちを掛けるように新しく立った恵帝も心を病んで早逝し、国と王室に対する不安感是不信感に変化した。

その後、国が政治をまともに行えれば救いの目はあつたが、多くの臣下を肅清した影響で、国の中枢は空洞化。政策を主導する人間もまともな育っていない状態だ。

私の書を焚書したのも悪手だった。原書が無くなったことで行政の方針はあらぬ方向へ向かい、粗悪な贋作書が蔓延り、改革された農業等にも陰りが生まれ、国の評判と国力を下げた。

更に英雄達が地方に散った事で人材の空洞化は止まらず、地方が力をつける結果になつたのも空洞化加速の要因だな。

真つ先に中央に力を集める時期にこうなってしまうては、反乱の火種が各地にばらまかれたようなものだ。

遠くない将来、均衡は崩れ去り、火種は芽吹いて国を燃やす。

そうなれば今は優秀な単于が討ち取られ、混乱を収束させるために尽力している匈奴も再びの脅威となる。

漢が弱っているとあらば、まとめる長がいなくともすぐさま一致団結するだろう。

交流によって豊かさを知り、戦争によって単于を討たれた彼らはその羨望と憎悪を滾

らせ、なりふり構わず漢の富を奪わんと動き出すぞ」

一氣に語つたが、皆が絶句している。

曹奇君の要望に答えて本気で語つたのだが、もう少しオブラートに包むべきだったか。

「し、しかし、国は現在安定しています。第二の首都と呼ばれるこの洛陽も、活気に満ち溢れているのは見ていて分かりますでしょう？」

「あれは見せかけだ。商業優遇政策により商業区画は活気に満ち溢れている。だが追加で出される筈だった貧富格差を軽減させる政策は依然出されぬまま。これでは過去の王朝と同じ末路を辿る。いずれ国と商人は癒着して墮落し、そして商人と農民との間でどうしようもない溝が深まり……他愛も無い切っ掛けで爆発する」

「は、反乱の種と申されましたが、各地の諸侯にそのような兆候はありません。呂一族を厳しく誅した事が良く働いた証です。そのような馬鹿げた妄想が現実のとなるとは到底思えません」

「反乱の種が芽吹くのは重石となる存在が無くなってからだ。つまりここにいる元勳が亡くなってからの話になる。君の父上は長安で大役を務めているのだろうが、そこで曹参さんの後釜足りうる功績、実績を作ったか？」

天下に響く功績が無ければ、力を持った地方を抑え込むのは不可能。もし事が起こ

り、地方に直接出向いて動こうとも、中央で実績を作れなければ周囲は動かない、結局曹参さんと見比べられ、侮られ、愛想をつかさされ、取って代わられるだろう」

「ち、父上は頑張っておいでで」

「その頑張りには太祖劉邦様の元勳達と比べてどうだ？と聞いている」

「……ならば、これからどうすれば良いと言うのですか！」

「現在均衡が取れるのは、呂雉がどれだけ悪行を重ねようと、臣民に法だけは遵守させた事だ。

これによって民は宮中の争いを遠い物と感じ、臆気になんとかなっているのだろうという幻想を抱いている。

故に今が最後の好機と言える。

今一度、国を作り直す意気込みで事に当たれば、まだ間に合う。

的確な政策を打ち出し、実行し、地方よりもまず中央を育て、影響力を回復させてから地方を潤す政策を施行していく。

言うは単純で簡単だが、行うのは現状で最も難しい事だ。

政策の内容、施行時期、主導する人選、現場との意思疎通手段、様々な事に気を揉んで行わなければいけない。

だがそれを見事積み上げ成し遂げるなら、劉邦様の元勳を超えたと皆が認める所とな

る。そうすれば地方も中央に従い、反乱の芽は摘み取られ、匈奴の攻める隙は消され、漢はむこう五百年の榮華を約束されるだろう」

久々の長尺語りだった、

大まかな指針を偉そうに言っただけだけど、これで良かったのだろうか。周囲の顔を見回すと、お孫さん達は目をキラキラさせ、古参仲間は皆項垂れていた。

なんだ、このテンションの差。正直古参仲間からは逃げたお前が高説垂れんな顔をされると思ったんだが。

「蕭何様の言、全て理にかなっておられます。疑いを持って接した事、ここに深く謝罪します」

曹奇君は素直に頭を下げたので、

「その謝罪を受け、許しましょう。」

貴方は頭を下げましたが、志を高くしました。その志が低きに流れぬ事を期待しています」

「はいー」

それらしい言葉を贈ると、とても良い返事をくれたので俺はひとまず満足です。

お孫さん達はその後、話し合いたい事が出来ましたと言って隣室に移動した。

後は若い人たちに任せて……の良いいリードが出来たとほっと一息をついていると、

「私達は白さんに謝らなければいけない」

と曹参さんが真面目な顔をして切り出した。

何を？と思っていると、

「私達は呂雉について白さんから散々に忠告されていたにも関わらず、貴方の言葉を信じなかった。」

そして白さんが書き残した指南書と劉邦様没後の草案の全てを呂雉に焼かれました。

その後は全てが後手に回り、呂雉に踊らされて、対処できた時には皆で作り上げた国を駄目にしていました。

全て私達の不徳の致す所です。白さん、申し訳ありませんでした」

その言葉を音頭に、皆が頭を下げる。

「やめてください！劉邦様が亡くなられるまで確かに呂雉は仲間でした！仲間を疑えという俺の言葉が受け入れられないのは至極当然の事、皆さんが謝る謂れはないです！むしろ大事な時期に中枢を離れた俺にこそ責がある！」

「白さんが抜けたのは灯華様のご遺志でしょう。それに、一人の人間が抜けて傾く国などあつてはならないのですよ」

「それは……」

「私達は貴方に頼り過ぎていた。貴方が去ってから如実にそれを実感しました。

ですからこれ以上貴方には頼ってはいけないと思ひ、呂雉の対処も政争で荒れた宮中の建て直しも私達でなんとかしようと思ひ、奮闘してきました。

ですが最盛期の賑わいを取り戻せずに二十年も経ってしまった。遅きに失し、老いに負けて息子に仕事を引き継げば、先ほど白さんが仰つた問題を生み出す体たらく。

何もかも私達の力不足です」

「何を馬鹿な事を！貴方達の何が力不足な物か！貴方達の尽力があればこそ国は存続したのです！貴方達こそ救国の英雄だ！そんな、そんな自分達を卑下しないで下さい」

「白さんから言われると、今までの頑張りが報われるようです。しかしそれに甘える訳にもいきません。

課題は見えました、後は老骨に鞭打って邁進しましょう。

ですから、ここで劉邦様と同じ誓いを立てさせて下さい。

白さんは、私達を見守っていて下さい。そして私達亡き後の彼らが信用に足ると思うならば、支えてあげて欲しいのです」

見守れ？

俺にまた蚊帳の外で、あの悔しさを味わえというのか。

そんなの嫌に決まっている！

「私達は愚かでしたが、その愚かしさを子に伝え、戒める事はしてきたつもりです。

劉邦様の時のような無念は決して抱かせません。ですからどうか今一度、私達に機会を下さい」

しかし俺の激高も、その様に頭を下げ、懇願されてやり場を失ってしまう。

くそ、もう一度だけだからな！

「……分かりました。その誓い、信じます。

でも正直に言わせてもらおうなら、もつと無茶を言ってくれた方が、仲間としては嬉しいんですよ？」

「子の将来を見守ってくれ、支えてくれと託すのは、後先短い老いぼれの最大のわがままですよ」

晴れ晴れとした顔でそう言い切られ、毒気が抜けて笑ってしまった。

「ふふつ、すっかりとお祖父ちゃんしているんですね」

その後は色々な事を話した。

それぞれの足跡と近況、家族の事、将来の事、思い出話、日が暮れてもずっと語り明かした。

夜が明け、年寄りにはもう限界という所まで酒を飲み、歌い出し、涙を流すほどはしゃ

いだ。

さあ宴もお開きという所で、気になっていた事を聞いてみた。

劉邦様と俺の描かれた銅鏡、劉邦様と呂雉の銅板、またその他の銅板の行方について聞く。

銅鏡についてはてつきり呂雉に割られていると思ったのだが、劉邦様からの『飾られた場所から動かさずにそのまま残しておけ』との指示を忠犬よろしく守っていたそう
な。

だから銅鏡の裏については知りもしなかったらしい。もし知られていたら割られていたかも知れない。

だがその銅鏡も焚書が行われる当日に窃盜騒ぎが起き、銅板と一緒に持ち去られたそう
うだ。

呂雉と劉邦様の部分だけは、呂雉が持っていたので窃盜から免れたそうだが、その部分も政争のごたごたで紛失してしまつたらしい。

噂は眞実だつたようだ。

窃盜は誰かの指示かと聞いてみても、全員が首を横に振つた。まあ誰かの指示だつたら呂雉が亡くなつた時点で返してゐるわな。

一応それぞれで行方を調べたが、足取りは掴めなかつたそうだ。

「でもいつか見つかると気がするつす。呂雉の野郎の分も合わせてきつと」
一番勘に秀でた夏侯嬰がそう言うと、うん、何故だかそんな気がした。

では話すべきを話し、聞くべきも聞いた、もう終わらせるしかない。

「これでお別れですね」

ああ、おお、ですね、ですなあと皆が淋しげに相槌をうつてくれる。

「では劉邦様にも、かの項羽殿にも言った別れで締めさせてもらいます」

そりゃあいい、いいぜ、頼む、お願いねと了承を貰ったので、大声で音頭を取る。
「では皆さん！また来世でお会いしましょう！」

「「「おお！また来世で！」」」

そうして俺達の宴は終わり、劉邦様の時代はこれにて全てが終了と相成った。
だが歴史は続く。

舞台は次の時代へと移って行くのだった。

21. 歴史を駆ける不老不死

同窓会から数ヶ月、俺は長安へと引越しをしていた。

仲間達の子孫を見守るといふ約束を守る為、そして俺の容姿が変わらなすぎると漢中で怪しまれ始めた為だ。

医聖と呼ばれ、氣を操る達人である張術先生ですら老いの魔の手から逃がれる事が叶わないというのに、隣にいる誰だか分からない女っぽい奴が老化していないのは何故だ？とついに疑われ始めたのだ。

愛する先生が俺を優先して一ヶ月以上も授業に穴を空けた僻みが爆発した結果なのだろうけど、彼らの糾弾は最もだ。

解剖させろ！とか言う声も上がり始めたので、俺は早々に漢中から逃げる準備をし始めた。

解剖させろと言った生徒は喜和直々に漢中から叩き出したのだが、どの道このままではまた同じ声がる、だから俺はさっさと長安へと向かう事にした。

長くを過ごした喜和との別れは寂しかったが、俺がこの異常を抱えている限りいつかは訪れる別れだったのだ。それに対する覚悟はとつくに決めていた。

旅立つ当日、喜和には新調した手術道具一式とアンチエイジングの知識を詰め込んだ本を餞別に贈った。

メスなどは手ずから鍛造した渾身の作品達だったが、喜和にはアンチエイジングの本の方が喜ばれた。

うん、分かっていたけど納得は出来ない。

彼女からも餞別を貰ったのだが、なんと項伯さんの描かれた部分の銅板だった。色々な伝を頼って、先日ついに一枚手に入れたそうだ。

俺の送った餞別が霞むレベルのサプライズプレゼントだった。

早くも一枚だ、なんだかこのまますんなりと全員分の銅版がゲット出来そうな気がしてきた。

旅立ちを前にして高揚を隠せない。本当に良い餞別を貰えた。

俺は改めて礼を言い、別れを切り出す。

これが二人の最後の顔合わせになったとしても後悔が無いよう、お互いに笑顔で言葉を交わす。

「さよなら、俺の最愛の弟子」

「さようなら、私の最愛のお師匠様。いずれ貴方の高みに至り、絶対一人にはさせません。来世など待たなくても良いようにしますから！」

「俺の寂しさを紛らわせてくれたのはいつもお前だった、だから、信じて待っている」
こうして俺は漢中を離れ、長安へと拠点を移したのだった。

喜和との別れから、十年の月日が経った。

劉邦様という綺羅星の下に集い、戦乱を共に駆け抜けた仲間が皆亡くなってしまつた。

勿論彼らの葬式には全て参列した。

関係者としてではなく一般人に混ざつての参列だったのだが、全員が民に惜しまれつつ亡くなつたのを直に感じれた。

死ぬ直前まで国に尽くし、家族に尽くした彼らを救国の英雄と信じぬ者など大陸全土を探してもいないだろう。

皆、立派な最期だったよ。

皆との別れから更に五年が経った。

俺は彼らの墓参りをし、最後に結んだ約束を無事果たす事が出来そうだと伝える。

彼らの子供たちの奮迅ぶりと言つたら凄まじいの一言だった。

特に話をしたお孫さん達は後世に残るぐらいの活躍を残し、国としての形態を守り通

した。

だから俺も思う存分彼らを支えよう！と思っただが……どうやって彼らを支えるのか、という問題が浮き上がってきた。

俺が直接中央に馳せ参じるのも違うだろう、彼らは十分にやっている。そこに俺がこのこ出て行ってどうするのか。

なら次に必要なことを先回りしてやり易くしてやろうと考えた。

中央集権化はうまくいった、だから次は地方の活性化が重要になってくる。なら以前喜和と行った治療と世直しの旅的な事でいいのでは？と思っただが、俺個人が目立つので却下。

俺ではなく官吏の人間が目立たなくては体制が揺らぐし、不老の俺が目立つのは控えなければ。

色々考えた結果、各地を転々として私塾を開き、人材を育てて国を支えようと思いついた。

なんとも遠巻きというか遅蒔きというか、しかし制約の中ではこれ以上の手が思い付かなかったので、とりあえず行動してみた。

五年後、なんとか長安で私塾を開く目処が立った。

利発そうだったり、覇気が微かに感じられたり、貧しくて売られそうになっている子を適当に私塾に誘った。

勿論そのままでは家の事情などで塾に来れやしないので、学が欲しいと希望しても家に縛られそうな子や人には金を払って人生丸ごと買い取った。

かなりの額が飛んで行ったが、盗賊狩りなり村医者なりをすればすぐに回収できる自信はあったのでよしとする。

そして集めた者達には三年間徹底的に学ばせた。

教育に関しては喜和の授業を間近に見ていたので、要領は心得ている。

医学、政治経済学、農学の座学を二日、実践を一日、生徒の望む授業を三日、休みを一日取る。そんな七日間をルーチン化。

成績の良かった者には休みの日にお小遣いを多めに渡して好きに買い物させた。競争力をつけ、実際の経済に触れさせる為だ。

そんな風に微に入り細に入り学ばせれば、職人制度にも官吏登用試験にも上級で合格する子達続出である。

育て上げた十人は全員が得意の分野で評判の良い所に就職する事が出来た。

最後の人間が官吏試験で合格した時には、皆感動して泣いていた。

うんうん、教師冥利に尽きる光景だねえ。

そうして最後の締めである私塾解散の際、俺は生徒達に俺特製の割符を渡して言った。

「就職したら頑張つて仕事に従事しろよ。そんで三年後に俺はまた私塾開くから、見所のある奴に割符を持たせて俺の所に超越せ。年も性別も得意な分野も関係なく有望な奴だったら誰でもいいから。多分次は沛県辺りだからよろしく。あつ、俺のことは秘密な！漏洩厳禁！」

要約すればそんな感じ。育てた恩としては安いと思うし、最悪超越して来なくても構わない。また同じやり方で集めれば良い訳だしな。

三年のインターバルを得た俺は、沛県に向かう前に漢中に向かった。

喜和と行っていた一年に一度だけの手紙のやり取りが、ここ二三年滞っていたので心配になったのだ。

最悪の予想を立て、恐らくそういう事なのだど覚悟を決めて漢中へと進路を取った。

漢中に入り、喜和がやっていた医学院に行ってみると、そこに彼女の姿はなく、学院長は別の人物が務めていた。

確か彼女は喜和が可愛がっていた一番弟子だった筈。

彼女もこちらを覚えていたようで、俺の容姿を見て表情を驚きに染めたが、納得と
いった表情見せた。

彼女に喜和について尋ねると、一枚の手紙を渡された。

クシヤクシヤになっている手紙には、たった三文だけが綴られていた。

『ごめんなさい、今までありがとう、また来世で。喜和より』

震えた筆先で書いたであろうブレた文字に、涙で滲んだ跡まである。手紙がクシヤクシヤだったのは目の前の女性のせいではなく、書いた時の喜和の状態が悪かったのだと理解した。

恐らく喜和は限界まで諦めなかったのだろう。でも本当にどうしようもない最後の最後で、筆を執ったんだろう。

そんな気持ちと姿が手紙から伝わってきて、涙が溢れる。

覚悟はしていた、だが俺を白と呼んでくれる人はこの世界にいなくなってしまったという実感はあまりに重く、飲み込むには複雑過ぎた。

俺が必死に感情と向きあう中、一番弟子の女性が口を開いた。

「先生は貴方に追い付く事に必死で、医を極め、気を極め、それでもなお足りぬと呪術や呪法など外法にまで手を染めました。勿論人道に悖る所業はなされませんでしたが。

しかしそこまでしても貴方に届かなかったと言って、死の直前にその手紙を書かれま

した」

「……そうか、やはりあの子は最後まで諦めていなかったのか」

俺の独白に、一番弟子の女性がきつと俺を睨みつけた。

「……私は貴方が憎いです。」

本来ならば先生は、失意の中で死ぬ謂れなど一切無かった。

大陸の歴史上最も多くの人命を救われた方だ。大陸全ての人間からの敬愛と悲哀を受け、誇り高く見送られるべき方でした。

なのに先生は死の直前まで自室に籠って研究を続け、一人寂しく亡くなられてしまった。

貴方との約束の為に、大叔母は全てを捨てなきやいけなかった！」

彼女の言葉と感情が俺の心を抉る。

それに対して、俺は何も言えなかった。

「……」

「……申し訳ありません。言うべきではない事を、言つてはならぬ方に言つてしまいました。お許しを」

「許すも何も無い。君は間違つた事など言っていない」

「間違いだらけです。」

亡くなった先生の思いよりも、私の感情と主観を話してしまいました。

私よりも余程長く、深く付き添われた方にしてよい発言ではありませんでした。

自身の未熟を恥じ入るばかりです」

本気で反省している様子の彼女にかける言葉がしばらく見つからず、結局俺は気になつた事を聞いた。

「…大叔母と言つていたが、君は喜和の親族なのか？約束について知っているのか？」
「母の母の妹が喜和先生になります。貴方についても、約束についても知っています。」

貴方についてしつこく聞き、色々な推論を並べ立ててたまたま当たりを引き、秘密厳守を前提に貴方について教えてもらいました。

約束については、貴方について教えられた時に惚気として聞きました」

そうか、確かに少し面影があるかも知れない。

俺について知っているのも別に構わない。当事者に語られる以外に信じられる話じゃないし。

「喜和と血の繋がりを持ち、彼女と親しい仲であり、俺についても約束についても知っているのなら、君以上に俺を責める資格を持つ人間は居ない」

「いいえ、貴方を責める資格など誰も持っていません。」

私以上はいないと言いますが、本当にもう駄目だという所で震える手で筆を執り、涙

を流して手紙を書き終えられ、他人に手紙を託さざるを得なかった先生の気持ち、私
は未だ真に理解する事ができていません。

そんな私が先生と貴方についてどうこう言う資格などありませんよ」

「……そうか」

そして気まずい沈黙が二人の間を支配する。

しばらくして、ですが、と彼女は続けた。

「先生の気持ちは、おそらく私の最期の時までわからぬままでしょう。」

ですが私は、私達は、先生の居た場所には今生で辿り着いてみせませぬ。そしてゆくゆ
くは貴方にまで至ってみせる」

「君にはそれが出来るか?」

「私を含め、先生の薫陶を受けた者の誰もが先生ほどの才もなく、時間もありません。」

ですが私達は個人の時間ではなく、連綿と続く人の積み重ねを持って、貴方の居る場
所まで辿り着きます。

先生の約束と覚悟を、失意のまままで終わらせる物ですか」

不老へ至るなど不可能だ、これより二千年先の医学ですら届いていないのだ。だが、

「そうか、喜和の悲願が叶うことを待っているよ」

「ええきつと、いつか必ず果たして見せます」

宣戦布告のような誓いをした彼女の表情は、喜和が最後に見せた挑戦的な笑顔に良く似ていた。

不老は無理かもしれない。けれど彼女は、彼女達は医を更なる高みに導いてくれる事だろう。

そんな確信が芽生えた出会いと別れとなった。

漢中を離れた俺は適当に金と善行と鍛錬を積み立てつつ、沛県に向かった。

沛県に着いた俺は、私塾を開くのに適当な場所を確保し、始まりの村に行った。

行商人以外はほとんど立ち寄る事のない村に來た俺に、村人たちは訝しげな表情を見せる。

誰も俺を知らないという事実には悲しくなるが、やるべき事だけさっさと済ませようと、お婆さんのお墓の前に立った。

語る事は多く、気付けば一日中お墓の前にいた。まだまだ話し足りなかつたが、村に宿泊施設などあるわけもなく、沛県に戻らなくてはいけない。

沛県に戻った俺は適当な仕事をこなしつつ、定期的にお墓に手を合わせに行き、残る期限の一年を待った。

そして私塾解散から二年半、割符を持った生徒がちらほらと集まりだした。

十人に渡した割符、戻ってきたのはなんと十人分。驚きの回収率100%だった。沛県でスカウトした人数を合わせて今回は十五人、しっかり育てていきましよう。

2.2. 次の時代へ

さて、十五人の若人を三年間育て上げ、前回と同じ旨を生徒達に言つて別れる。

別れる文言は前回とほぼ変わらない、ただ集場所が変わるだけだ。今度は長沙付近にしておく。

そうしてまた適当に仕事をしつつ鍛えつつ、村々を渡り歩いて行く。

もう馬とか使わない。時間と力だけは有り余っているので徒歩だ。

しかし病気も筋肉痛とも無縁の俺は、遠回り寄り道をしまくつても二年程度で長沙に辿り着いてしまう。

この一年をどう過ごそう？と考えると、一つ思いつく。

そうだ、町中に場所を確保するのも手続きが面倒になつてきたから、長沙近くの山中に家でも立てよう。農学と畜産の実習が捗るな！と思ひ至り、ここにきてまさかの家造りを始めた。

半年程で完成し、周囲の環境も整えた、牛と豚だつて完備だぜ！と意気揚々と長沙に舞い戻り、スカウトと割符の回収に勤しんだ。

三年間育てた生徒と別れ、三年間適当に過ごし、インターバル終了が近くなれば目的地近辺で学び舎を作り、また新たな生徒達に三年間学ばせる。そんなルーチンを数十回繰り返した。

国中を周り、国中に人材を配り、国中に別荘を作る日々。

代わり映えしなくなった日常にアクビを零す毎日だったのだが、ある日とても面白い子供と出会い、久々に奮闘する事となった。

国がもうどうしようもない所まで腐っており、俺の生徒達だけではもはや太刀打ち出来ないレベルにまで行ってしまった。官吏は悪徳にねじ曲がり、盗賊は跳梁跋扈し、商人は力ある悪者と癒着し、農民は盗賊になるかただ震えるのみ。

そんな世紀末の状況。

儒教を排そうとも、職人を保証しようとも、人材を送ろうとも、国が腐るのを止める事は叶わなかった。

そんな世情も有って俺の生徒はついにゼロ人になってしまった。

最後の生徒達二十人を送り出した時にはもう世紀末は始まっていて、有望そうな奴がいたら手元において使い潰す勢いで育てないと現状が保てなくなっており、割符が機能しなくなったのだ。

街でスカウトしようにも、有望そうな奴は片っ端から何処かに連れ去られているか売られてしまっており、適当に見繕おうにも、皆家に引き籠もつてしまつて交渉に応じてもくれない。

私塾が作れないとなると、次の目的を見失つてしまふ。

あー俺の教師ライフも終了かなーまあもう惰性でやつてた部分あるし丁度いいかなーもう日本にでも行つてみるかーけど使命がなーというか使命ってなんなんだよ！ああもう日本マジで行つてみるか！行けなかつたらその時考えよう！と思ひ立ち、町医者をやつて資金集めをし始めた。

そんな時だった、面白い子供と出会つたのは。

物凄く適当な理由から始めていた町医者だが、診療に関して手を抜いていた訳ではない。ちゃんと良心に基づき経営した。

なので安い、早い、上手い、お医者様が美しいの四拍子が揃つた診療所だと周囲に認められ、評判も着実に広がつていた。

ある日その評判を聞きつけ、重病で診療所までこれない息子の為に出張医を頼みたいという親御さんがやつてきた。

聞けば劉の名を持つ貴族らしいのだがどうにも貧乏らしく、安いとの評判を聞きつけて直々にウチを訪れたらしい。

このまま居ても爺婆の世間話に付き合わされるだけだし、貴族なのに物腰の柔らかい人達に興味を持ったので彼らの家までお邪魔する事にした。

そこそこ大きいのが、管理が出来ていないのか所々に破損が目立つ家につき、中に通される。

中も外と同様の有り様で、破損部には板が上から貼り付けられたり、布で隠されていたりと、中々見応えのある応急処置が施されていた。

息子さんの部屋に通された。するとそこは意外にも綺麗に整えられており、布団もとても清潔だった。

なんだかアンバランスな家だなーと思いつつ、息子さんの診療に入る。

感染症などではなく風邪を拗らせただけのようだが、念には念を入れて療法する。合併症を引き起こし、肺炎なんかを発症させては命に関わる。

俺は漢方を処方し、気を使って整調する。体温が適温を維持できるよう、家にある物を使わせてもらい、色々と手を尽くした。

その時に積極的に動いてくれたのが、病気の子の弟である劉秀という五歳の子だった。

風邪がうつつてはいけなからとやめさせようとしたのだが、先生の治療が見たい！と目をキラキラさせて聞かなかつたので、仕方なく色々手伝ってもらった。

やる事なす事に、それは何？今何をしているの？と聞いてきて、俺は一々それに答えてあげた。

教師生活を百年以上続けてきたせいで、解説しながら作業をするのが癖になっていたのだ。

彼の知的好奇心は留まる事を知らなかったが、治療が終われば質問タイムは強制終了である。

しょんぼりしていたが、お兄ちゃんの様子を見る為にまた明日も来る、その時にまた色々話そう。と言うと飛び跳ねて喜んでくれた。

翌日の午後、俺は劉家にお邪魔していた。

出迎えてくれたのは劉秀くんのみだった、どうやら両親はとても忙しいらしい。

おいおい、このご時世に子供一人残すって。

劉秀くんから「仕方ないです、それにここは貧乏だと周囲に知れ渡っていますから」と五歳が言うレベルじゃないセリフを頂いた。

お兄ちゃんの様態も順調な経過を見せているので、特に何かする事も無い。新しい薬を処方したぐらいだ。

その後は劉秀くんと気になった事を互いに話し合っていた。

劉秀くんは自分が日頃から疑問に思っていた世情から漢方の事まで色々聞いてき

て、俺は劉秀くんの家について聞いた。

彼の家は侯家の流れにあるかなり上位の爵位持ちだった。何故こんな赤貧暮らししてんの？と聞けば、政変に巻き込まれそうだから貧乏な振りをして周囲を欺き、将来の為に金を隠し貯めしていると返ってきた。

それをちゃんと説明できるとは子供らしからぬ見識だ。でもそれって付き合い二日目の俺に話してよかつたの？もしかして俺のこと試してるの？

けどその後、攫われたりしないように家に引き籠もりっぱなしでとても窮屈、久々の会話で色々話しちゃつたと子供らしい一面を見せてくれた。

俺を試していた訳ではなく、子供らしい無防備さゆえ色々話したらしい。

とまあそんな感じで色々な事を話した。

人の不幸を聞いてこういう感情を抱くのは不謹慎かもしれないが、正直に言うと、これは面白そうだと思うた。

俺はその後、良かったら君の家庭教師がしたいと申し出た。彼は喜んで！と答えてくれた。

彼の両親が帰宅した際に、泊まり込みで劉秀君の家庭教師をしても良いか？と劉秀君と一緒に頼み込んだ。

とても訝しんだご両親だったが最終的に『我が子の久々の我儘だし』と聞き入れてく

れた。

自分達の状況もしっかり話してくれて、危ういお家事情がありますが構いませんかと誠実な対応をしてくれたので、その誠意にはしっかり応える約束をした。

幾つか空いていた無事な部屋を借りて彼の家に泊まり込み、午前中は診療所に行き、それ以外の時間は全て劉秀くんの授業に当てた。

授業は武技から勉強から俺が教えられる全てを教え、彼はその全てを吸収した。

途中からは彼の兄と、養子である女の子、従兄弟君も含めて物を教えた。

お兄ちゃんの方は武技と興味のある事以外は欠席して街に遊びに行っていたが、興味のある分野においては抜きん出ている。

後の二人はとても真面目で、劉秀くんより飲み込みは遅かったが、それでも他の子よりは余程優秀で、中々教え応えがあった。

俺は八年ほど彼らの家庭教師をした。

教えられる事は教えだし、俺がいなくなつた後必要になりそうな様々な事は本にまとめた。

そしてそろそろ潮時だ、俺の不老が疑われ始める限界の時期が来た。

日本旅行の資金も十分に貯まったので、俺は彼らに別れる旨を告げた。

全員が泣いて引き止めてくれたが、仕方ない事なんだと言って、大量の教科書とヤバい道を渡って手に入れた玉鋼を鍛造した特別製の刀剣をプレゼントして旅に出た。

のだが、旅を出た直後に彼の家が侯位を剥奪されたと聞いた。

どういうこつちやとかつての伝を使つて調べてみれば、劉家が皇位を禅譲し、漢が終わつていた。

あちやーちよつと授業に熱を入れすぎて世情に触れてなかつた、と後悔。

とはいえ正直な所、漢が終わつたことについては少し寂しい以上の感慨はない。俺は国ではなく、国を作つた彼女と彼らにこそ思い入れがあり、そして皆との約束はこの二百年で十分に果たしたと思つてゐるからだ。

しかしそんなこんなの状況を知り、日本に行く気満々だった俺は足を止めた。

漢はもう仕方がないとなんとか諦められる、だが最後になるかも知れない生徒が特級の苦境に立たされてゐる状況を見過ごすのはなんとも後味が悪い。そういえば、もしかしたらこれこそ使命かもしれぬ。

そう思つた俺は身を翻して彼らを助ける事にした。

のだが、なんと劉秀は親の伝を頼つてどこぞの役人の元にお勤めに行つたらしい。

と思いきや、それは親を納得させる為の嘘で、実は俺の後を追うように大陸を見て回

る旅に出たという。

色々な急展開に目が回りそうだったが、ともかくやる気に満ち溢れていた俺は残っていた生徒三人に指示を出した。

お兄ちゃんには仲間作りを、養子ちゃんには金策を、従兄弟君には劉秀を探しに行ってもらった。

あれよあれよと兵を集めて資金源を作り上げ、従兄弟君が劉秀を連れて戻ってきた三年の間に、向こう十年は戦える立派な軍隊と物資が出来上がっていた。

戸惑う劉秀に、お膳立てはした、さあやれ！と言つてあげたら、彼はさくつと漢を立て直した。

俺も多少手助けしたが、彼は俺の教育と大陸を旅した経験で項羽殿並のチートキャラへと成長していたのだ。

抵抗勢力に多少手こずらされる事はあったが、劉邦様のような大英雄級の敵もいなかったもので、驚異的な速度で国は攻略された。

俺はその様子を見て満足し、褒章と士官の話を蹴つ飛ばして再び旅に出た。

俺は再び教育と自己鍛錬の旅をしながら、賑わう国を周行する。

劉秀という人材が生まれるこの国はやはり面白い、離れるのはもう少し後にしよう。

しかしあれだ、国の終焉と建国に二度も居合わせたのは歴史上俺だけだろうな！。

なんて深い満足感を感じながら、月日は過ぎていくのだった。

さて、再び二百年の時が経った。

光武帝との邂逅も使命では無かったようで、俺は依然不老のままである。

俺はまたおざなりになりかけている教育を続けながら国をぐるぐる回っていた。

この二百年は劉秀のような優秀な人材にも巡り会わず、ただただ人に物を教え、鍛錬し、趣味に没頭する日々だった。

ここまで来ると気が狂いそうな代わり映えのなさだが、一つの大きな楽しみがあったのでここまでやってこれた。

それは三国時代の到来である。

いやー生劉邦様も衝撃だったけど、生劉備や生曹操に会えるなら百年ぐらい余裕で待てる。

……うん、生光武帝も嬉しかったよ？光武帝と周囲から呼ばれ始めてようやく気が付いたんだけどさ。

わくわくしながら待つ事数年、俺はようやく三国志に触れた。

割符を持ってきた生徒に盧植という女の子がいたのだ。

詳しくは覚えてないけど、彼女は劉備の先生だった筈！

うおーと意欲に燃えた俺は、この世代の生徒に対しても熱心に教育を施した。盧植だけ見るのは不公平になるし、彼女の為にもならないからな。

後、俺はこれを機に一旦教育家業をやめて三国時代を満喫しようと思ってるから、殊更熱を入れて授業を行う。

しかしそんな理由は無くても、生徒は十人ちよつといたのだが、皆とても可愛い女の子達ですごい優秀な娘達だったから、熱が入りやすかった事は否めない。

司馬徽という生徒は想像力と理解力に秀でていたし、皇甫嵩は戦術論に強く、司馬防は公正明大で政経に長け、丁原は戦闘戦術論が良く伸び、張昭は政治力に特化し、馬騰は外交手腕と動物の世話が上手く、袁隗は政治力と謀略に特筆すべき点があった。

何人が聞いた事のあるような名前がちらほらあるが……しかし三国志に限らず古代中国の有名人って姓名被りまくってるから、気のせいって線もかなり濃厚なんだよなあ。

まあ置いとこう、俺が授業する上では何の関係もない事だ。

ともかく前世の知識としては盧植が来たことに驚いて、現世の知識としては末子とはいえ飛ぶ鳥を落とす勢いの汝南袁氏までウチへ来た事に驚きを隠せなかった。

一度リセットされたとはいえ、二百年も続く割符システムの凄まじき所は、どういつ

た流れかはわからないけどかなり高位の爵位持ちであつたり大豪族であつたりと縁が結べてしまう所だよな。

まあ家柄に躊躇つたりはしないけどね。牛の世話だつてさせるし、ゲンコツだつて落とします。

そんなこんなで三年間、得意分野を伸ばす形で貴賤無くみっちり教えてやりましたよ。

そうして私塾最後の日、俺は割符を渡さず、普通に卒業式だけをした。

最初は家柄の関係で仲の悪かった娘達もいたのだが、最後は皆抱き合つて泣いている。

うんうん、仲良きは美しきかな。久々に情熱を傾けたからか、ちよつとウルリときた。

最後の生徒達も手を振つて送り出し、早速旅の用意を済ませる。

薬、旅具、武器等を鞆に入れて背負い、さあ何処に行こうか？と思つてみると、目の前が見慣れぬ草原風景に切り替わつた。

はい？何が起きた？

そんな当然の戸惑いはすぐに消え去つた、俺はこんな状況を幾度も経験している。

長らく経験していなかった巻き戻しの感覚に似ていると気が付いた時点で、戸惑いは胸を締め付ける不安感に変化した。

くそ、何の因果で巻き戻った、生徒関連か？しかし私塾を解散するまで巻き戻らなかった意味が分からん。

一人で頭を抱えていると、目の前から特異な気配を感じ、反射的にバックステップをして二十歩分距離を取る。周囲を見回すが、届く範囲に隠れる場所はない。俺は巻き戻っても何故か背負ったままだった荷物を下ろして傍に置き、草が茂る地面に伏せて極力気配を殺す事にした。

そして前を注視した途端に、五人の人間が唐突に現れた。

おいおい、ここまで露骨なファンタジー展開初めてだぞ！

俺は意表を突かれたが、すぐに気を引き締めてあちらの動向を伺う。

待ちの間に密かに所持品を探り、腰に括りつけてあった愛用の刀に変化がないこと、愛用していた旅行用リュックには先程用意していた物が全てある事を確認する。

「あら、今回は珍しいパターンねえ」

「そうであるな、五人が揃って同じ場所に舞い降りるとは初回以来じゃな」

「そうですね、ですが珍しいパターンならとりあえずは喜ぶべき事です。収束率が上がる可能性に芽が出てきた証かも知れません」

「だといいがな、もうそろそろ肩透かしのぬか喜びはしたくない」

「……」

五人の内四人は普通に会話をしている。

俺はパターンという言葉に驚きを隠せなかったのだが……もつと驚き、動揺を隠せなかったのは、五人の内ただ一人の女性と目がバッチリあつていた事だ。

俺の隠形は目の前についても意識しなければ目に映らないレベルに達している。

それを平然と見抜くとは、あいつ何者だよ。

警戒レベルを最大限まで引き上げ、俺は様子見をやめて立ち上がる。

すると四人はようやく俺に気づき、こちらを見て構えた。

ピンツと空気が張り詰める。俺もいつでも剣を抜けるよう構え、疑問を飛ばす。

「俺にはあんたらが唐突に目の前に現れたように見えたんだが、気のせいかい？ あんたら何者よ？」

「……俺にはお前こそ唐突に現れたように見えた、お前何者だ？」

「こちらが先に聞いたんだが、まあいい。俺はただの旅人さ、妙な気配を感じたから気配を消して伏せてただけだ。まあそつちのお嬢ちゃんにはバレてみたいだけだな」

「ただの旅人ねえ。私達にバレない隠形をする人なんて早々いないんだけど。けど管轄ちゃんには見えてたのね、さすが預言者だわあ」

「……」

「管輅、先程から何故何も喋らないのです？ 貴方がさっさと彼女の存在を教えていたら、私達も不用意な発言はしなかったものを」

「ともかく、発言を聞かれたのなら殺すしかないな」

「やめんか、命は取らずとも記憶だけ消すなど手段はある。若者がそう短絡的ではないか
んぞ」

何だろうか、彼らの間には微妙な温度差みたいな物がある。

だがまあ俺と敵対するのは変わらないみたいだし、さっさと先制攻撃を仕掛けて無力化しよう。

しかしいざ仕掛けようとした所で、一言も喋らずにいた管輅と呼ばれた女性がこちらを指差した。

機先を制された形になり、動き出しが止まってしまった。

えっ、なに、もしかしてビームとか出す？ ファンタジーの住人ばいあいつらならやりかねないな、注意しよう。

俺は攻める選択肢を捨て、後手に集中する。

俺が注視する中、女性はやつくりと口を開き、こう言った。

「私達の王子様、ようやく見つけたわ」

23. そして世界は動き出す

時が止まったような錯覚を覚えた。

それは俺だけに留まらず、向こうの四人も同じだったようで、何とも言えない沈黙が周囲を包む。

長く艶やかな黒髪と美しい青い目が印象的な美女は俺を見てニコニコしっぱなしで、続きを語ってくれそうな雰囲気はない。

「ここは俺が切り出すべきなのだろうか？」

「あー管輅さん？俺があんたらの王子様っていうのはどういう意味だ？説明してもらえと非常に助かるんだが」

俺の切り出しに向こうの四人の時も動き出したようで、

「そうです管輅、一人で納得していないで説明をしてください！」

「うるさい于吉、今私は彼の未来を見ているの、邪魔をしないでくれるかしら」

「ぐっ、し、しかし」

「お願い管輅ちゃん、私達にも分かるように説明してくれないかしらん？」

「……もう、分かったわ、ちゃんと説明するから」

なんかイケメン眼鏡と禪マツチヨの扱いが明らかに違うな。

「でも、先にどちららに対して説明をするべきなのかしら？」

こてんを首を傾げ、俺と四人に視線を彷徨わせる管輅。

色々気になるが、ここは大人の余裕を見せよう。

「人数はそちらさんのが多いし、お先にどーぞ。けど気にはなるから会話だけ聞いてていいか？」

「ええ、貴方も当事者なのだし当然よ。気になった事は後でまとめて聞いて頂戴。でもその前に」

管輅がこちらに近付いて来る。一瞬身構えるが、あまりの無防備っぷりに警戒を解く。

そして俺の目の前までやって来て、

「初めまして、私は管輅、しがない占い師をしているわ。どうぞよろしく」

俺に対して握手を求めるように手を伸ばしてきた。特に嫌な予感もしなかったので、素直に手を握る。

「俺は……蕭何と言う。よろしく」

軽くシエイクハンドをしたのだが、何だろうか、あまりに懐かしいやり取りで涙が出そうになった。

「唐突な申し出をするのだけど、貴方の過去を見させてもらっても構わないかしら？ 貴方が救世主であるという確信を得る為に是非お願いしたいの」

上目遣いでそう尋ねてくる。

救世主だとか、未来視過去視だとか、もはや何が何やら分からないが、ここまで来て拒否もないだろう。

振り返って見ても、俺は恥ずかしい過去など歩んではない。ならば快く応じてやる。

「ああ、それで物事が円滑に進むのならば是非どうぞ」

「ありがとう。本来なら未来視同様過去視も離れていようと見れるの、だけど貴方は離れていると過去視が出来ないみたい。だから手を掴んだままで失礼するわね。人の人生を見るのはどれだけ長くとも五分はかからないから、少しの間我慢してくれるかしら？」

「よく分からんが分かった。大人しくしているよ」

彼女は俺の手を両手で包み、目を瞑ってしまった。

残された俺と四人は手持ち無沙汰で、なんとも言えない空気が周囲を漂っていた。

時間を有効活用するなら、ここで四人に話しかけて情報を手に入れるべきなのだろうが、目の前に居る彼女の妨げになっても困る。

向こうさんもそれを気にしてこちらに話しかけてこないのだろうか、ここはひたすら待ちだな。

…待つ。

…待つ。

………待つ。

つて、ちよつと長すぎやしませんか？

アンタどれだけ長くても五分つて言つてませんでした？ かれこれ三十分ぐらい経つてるんだけど。

ほら、向こうもそわそわしだした。髪の毛逆立ててる目付きの悪い奴なんて露骨に貧乏揺すりして限界アピールしてるんだが！

少し言つてやろう！と思つて彼女に視線をやると、彼女は一筋の涙を流していた。

突然の落涙にぎよつとする。

丁度のタイミングで彼女が目を開け、こちらに視線を向ける。俺は涙に驚いて彼女の顔を凝視していたから視線がぶつかつた。

彼女の瞳には強い強い意志の光が見て取れた。

「やはり貴方こそ私達の救世主、白馬に乗った王子様でした」

「どうしてそういうファンシーな結論に至つたのか俺にはわからんが……どこまで見た

？」

「貴方が川に落ちる所から」

「識とか言う奴に会った直後か、だったら四百年プラス繰り返しの分もあつて長かつただろう？」

「はい、とても長くて重い、凄まじい記憶でした。私達よりも余程波瀾万丈で、強い諦観と倦怠の人生を突き進んでこられたのですね」

「どうやら彼女は俺の全てを見たらしい。口調が変わったのが少し気になるが、突っ込んで良い所なのか判断に困る。」

「ともかく、俺の過去を見た上で好意的な反応をしてくるという事は、彼女は味方と確定して良さそうだ。」

「……おい、あいつは今、識に会ったと言ったのか？」

「確かにそう言ってたわねん。識様の存在を知っているとすると、あの子は完全に管理者サイドの間。しかも会ったと言うなら私達よりも上位権限者なのかも知れないわねえ」

「向こうも管輅の様子と俺の発言から、俺への警戒を取りやめたっぽい。」

「ふう、と人心地ついていると、管輅が俺の手を握ったまま四人の元へ歩き出した。」

「目の前まで来たのだが、彼女は俺の手を離してくれない。……まあいいか、役得だし。」

「それじゃあこの方の説明と、彼の未来を見た時の光景を説明するわね」

俺を含め全員が固唾を呑み、管輅の言葉を聞く姿勢となった。

「蕭何様に先んじてお願いがあります。貴方には訳の分からないであろう言葉が続くと思いますが、後で全て説明しますので、まずはどうか聞く事に徹して頂きたいのです」

「おーけーわかった、話の腰はおらない。静聴させてもらうよ」

「助かります。そして管理者四人にも頼みます。驚愕や疑問はあるでしょうが、さっさと蕭何様に対して納得してもらい、先ほどの非礼を詫びてもらいたいので、建設的な質疑以外はしないで下さいね」

「ちっ、一々刺のある言い方をする。分かっている、もしも彼女が俺達の救世主というのなら、頭を地につけて謝罪しよう」

……彼女って。いや、ここで突っ込んだら泥沼のやり取りになる。我慢だ我慢。

激高した表情で口を開きかけていた管輅だったが、俺の様子を見て口を噤んでくれた。

「貴方は本当に……後で覚えていなさいよ……」

ふう、ともかく、要約して話を進めるわ。

彼！は劉邦の時代に降り、韓信、張良、蕭何の役割をこなして漢建国に携わり、国を

安定させる為に後の二百年間を医学の進歩と人材育成に尽力。

その後、光武帝の教師をして彼の成長に寄与し、軍や資金を作り上げて彼の覇道を助けた。漢再興の手助けをした後は再び人材育成に二百年を費やした。

そして三国志突入直前に盧植を育て上げ、その直後にこちらに転移してきた。

これが極限まで端折った彼の来歴。

次いで私が見た彼の未来について話すわね。彼の未来はノイズが多くて詳細が分かるものは少なかった。

けれどその中に、私達の待ち望んでいた存在が映っていたわ」

「まさかー」

「ええ、劉備玄德と呼ばれている少女がそこにはいたわ」

息を呑む音が聞こえた。

「これまで私達が血眼になって探していた最後のピースがこの外史に登場した。

これは彼の来歴と未来視からの推測のんだけど、蕭何様が積み上げた四百年があつたからこそ、彼女は舞台上に登場できたのではないかしら。

何らかの原因でこの外史の土台である歴史に欠損が生じてしまい、劉備は舞台上に登場できなくなってしまった。それに気付いた識様が問題解決の為に蕭何様を呼び、歴史を修復させたのでは？と私は考えるわ」

今度は俺が息を呑む番だ。

長年の謎が解ける感覚に、背筋が震えた。

「それが本当なら、彼女、ではなく彼はまさしく私達にとつての救世主ですね」

「あくまで推論に過ぎないけれど、そう外れていないと思うわ。」

そして蕭何様の役割なのだけど、私達とは少し違う割り当てがあるかも知れない。

私が見た光景で、蕭何様は表舞台で多くの人と関わりを持つていた。だから恐らくなのだけど、蕭何様は北郷一刀と同じ観測者の役割を持つているのだと思う」

……北郷一刀、ね。

消えかけている遠い記憶にちりちりと反応するその名前、この状況。

思い出すべきなのだろうか。いや、今は話を聞く事に集中しなくては。

「ぬう、どれも吉報に近い知らせではあるが、些か処理が追い付かん。それに蕭何殿についても気になるな、推論ばかりで彼が本当に管理者なのか判断がつかん」

「確かに識様からも情報が降りて来ないのは気になる所ねん」

「情報が降りてこようがきまいが関係ないわ。彼は間違いなく物語のキーパーソンであり、仲間よ」

「あらく、いつも冷静な管輅ちゃんらしくらぬ強情さねえ。も・し・か・し・て?」

「違う!そんなんじゃない!……失礼。蕭何様、貴方の悲願はなんですか?」

「悲願？んー今の所三国志の英雄達を見たいつて願望はあるけど、悲願とは言わないよな。」

ならあれだ、識が言つてた使命つてのをさっさと終わらせて、普通の生活を送りたいつてのが悲願かな」

「やはり私達は仲間です。私達も延々と続くループを終わらせる為に尽力しているのですから」

「ああ、そうなんだ、だったら確かに手に手を取り合える仲間つて言つても良いな」

「あらあら、既に手に手を取り合つてるのに、今更何を言つてるのかしらねえ」

「貂蟬何を言つて！…あつ、こ、これは流れで、離すのを忘れていただけで！」

「からかつてごめんなさいねえん。あんまりに可愛かったから、ついねえ」

「ぐっ…私もちよつと変に熱くなつたわ。今までのやり取りは忘れてちようだい。」

とにかく！これで彼と劉備についての説明と報告は終わりよ。私はこれから皆の未来を見るから、その間に蕭何様と自己紹介を済ませてちようだい、説明も任せるわ。後は左慈、きちんと彼に謝りなさいよ」

「わかつている。二言はない」

そう言つて管輅は手を離し、皆と少し距離を取つた。

「それじゃあ集中したいから少し離れるわね、卑弥呼から来て頂戴」

その声を受けて弥生式キン肉マンが管輅の元へ歩いて行った。

「逃げちゃったわあ、ほんとに管輅ちゃん、急に乙女になったわねん」

よく分からんが、貂蟬と呼ばれた筋肉特盛りビキニが乙女を語るのには納得がいかなー。

24. 管理者の役割

では、とイケメン眼鏡が話しかけてきた。まあこの中では彼が一番普通に話しやすい。

「まずは名前の交換、と行きたいのですが、いい加減疑問の解決も行いたいでしょう。ですので説明を先に済ませようと思うのですが構いませんか？」

「ああ、頼むよ」

「では疑問がありましたら、都度質問して下さい。こちらも気になった事があれば聞きます。」

早速こちらからの質問で申し訳無いのですが、蕭何殿は識、管理者についてどこまでご存知ですか？」

「んー何も知らないと言つて良いレベルだな、識と会つて話したのは四百年前の一度きりだし。」

今から遙か未来の日本でサラリーマンをしていた俺が何故だか別人に転生する。何故かは話せないが二千年後の知識を詰め込めたから頑張つて生きろ。使命を果たさなければ外史に縛られるから。つてぶつ飛んだ内容を聞かされただけだ。

使命なんかに対する説明は一切なく、転生してから四百年余り、俺はずっと大陸中を彷徨ってここまで来た訳だ」

「そう、ですか、本当に何も知らない状態なんですね……。」

ならばどこまで説明しても良いのか線引が難しい所です。話してはいけない事を話してしまおうと、どうなってしまうのか想像がつきません」

「どうなるのか想像できないって?」

「最悪存在が消される可能性もあり、逆に何のお咎めもない可能性もあります」

「マジで?! 極端だな!」

「貴方は重要なファクターのようなので、存在抹消などの厳罰はされなideしう。せいぜいが記憶を真つ更にされるぐらいでしょうか。でも抹消も有り得なくはないので、全てをありのままに話す事はやめましょう」

「おーけー、わかったよ」

「説明しにくい物は例え話などにして誤魔化しの利く形を探りながら、出来るだけの説明をしようと思います」

「気遣い感謝するよ」

「では単語の説明から致しましょう。」

今まで上がったものは、外史、収束率、管理者、観測者、識ですかね。

まずは外史について説明します。

外史とは世界線の——、アーカ——。……やはり伝えられないみたいですね」

「おまつ！あんだけ脅しておいて何平然と試してんだ！」

「大事な確認ですよ、では舞台を例えにして話しましょう。

外史とは演目の決められた物語、収束率は物語の完遂率、管理者とは大道具や黒子などの裏方、観測者は主演、識は舞台を行う為の劇場のオーナーと言う所ですか。

この中で最も大切なのは収束率です。収束率は物事を確定させ、演目を完結に導く事で上昇します。収束率が100%にならないければ、公演は失敗したと見做され、舞台は続ける事が出来なくなつて消え去ります」

「消え去るつて、どうなるんだ？」

「文字通りです、外史は消滅して無に帰します。そして管理者は役立たずの烙印を押されて消されます」

「そんな理不尽な！」

「確かにそこだけ見れば理不尽な話です、ですが説明できない部分に該当するのですが、これは妥当な処理なのです。

そもそも物語が完結しない確率はかなり低いんですよ」

「しかし今回はかなり危なかったんじゃないか?」

「今回のような事例は非常に珍しいのです。原因がわからないミスなど私達管理者一同が聞いた事もないハプニングでした。本来舞台を貸し出した後は劇団が消失しようとして関わりを持たない識が、強引なやり方でフォローを寄越す程の珍事です。

識と蕭何殿のフォローがなければ、この外史そのものが無くなっていたでしょう。貴方はまさしく救世主なのです。管輅からしたら、希望の見えない未来を切り裂いた白馬の王子様に見えたでしょうね」

「マジでか」

「マジです。現在の状況にも触れますが、収束率は凡そ六割に達しています。これは本当に限界だったのです。

管輅の未来視で残りの四割は役者が足りないのでも埋めれない事は分かっています。だからどう誤魔化すかに私達は腐心し、苦心し続けました。

舞台の一演目はおよそ五十年前後、新要素を一つだけ織り交ぜ、欠けた役者を別の人間で補い、“ほぼ”同演目の公演を繰り返して、徐々に収束率を上げて行きました。

きつと異常に気付いた識が助けてくれると祈りながらの作業は、恐ろしく心を摩耗させましたよ」

「管輅も言っていたが、演目を繰り返すって事は……」

「ええ、私達は貴方とは違った形で四百年を歩んでいたのです」

「そうなのか、管輅は俺の事については分からなかったのか？」

「未来視過去視を持つ管輅も、さすがに世界線を越えた事象まで把握できるわけではありません。」

なので恐らく、蕭何殿が全ての事象を確定させるまでは世界が切り離された状態だったのでしょうか。

先ほど管輅が盧植を育て上げた後に貴方は転移してきましたと言っていました、正しいですか？」

「ああ、私塾を解散した直後だったな」

「そうですね、ならばやはり正しいと思われる。演目開始時、既に盧植は要職についてしばらく経っている筈なので、私塾解散直後とは恐らく十年単位で誤差が出ています。」

この大幅なズレは……イメージ的な説明になりますが、欠損部分を範囲指定して、修復した歴史を直接貼り付けた。問題なく動いたので接続部分の不自然さはそのままされた、といった感じでしょうか」

「イメージ的にさつきより多少は分り易い。しかし世界の統合なんて出来るのか？」

「そのような無茶が出来るのが識という存在なのです。とはいえ行うにはかなりの制限を受けますし、乱用は出来ないようになっていきますがね」

「それじゃあ次は人物について聞きたい」

「では引き続き舞台を引き合いにして説明します。」

この外史には大勢の役者が配役を与えられて舞台が出来上がっています。

そして与えられた配役は変わりませんが、演目毎に立ち位置、役割は変化します。新たに加わった劉備玄德も他陣営のトップから鑑みるに、ヒーローを支えるヒロイン、またはヒーローに立ち塞がるラスボスの役割を演じると思います。

演目が変わっても役割が変化しないのは北郷一刀だけですね」

「それまた何でだ？」

「それは物語の前提に、北郷一刀が二千年後の日本から三国志時代に連れて来られる、という内容が組み込まれている為です」

「ふむ、不変の立ち位置があるからこそ、観測者と呼ばれているのか」

「まさしくその通りです。貴方にもその可能性があるらしいのですが、管轄にも分からなかったとなれば、私達にも分かりません」

「俺が観測者だった場合、何か行動に変化があったりするのかな？」

「私達が動きやすくなる、という以上はないに思います。」

私達管理者も入れ替わり立ち代わり敵を演じ、味方を演じ、中立を演じ、裏方で働い

たりしているのですが、三国の中に入り込める役を持った人間が居ないので、動くにあたって実質的な制限が掛かった状況です。

だから役に縛られず自由に動き回れる観測者は便利な駒…もとい心強い仲間と言えます」

「…言い換えても遅いから」

「…では以上を踏まえて、自己紹介と行きましょう。

私は于吉という三国志の人間の配役をもらいました」

「ちよいと待ってくれ、あんたら管理者にも役つてのが必要なのか？後、持つてる知識ってどうなってるの？」

「役を与えられて初めて舞台上上がる資格を得る、これは管理者であろうと例外ではありません。

与えられた役が持つ力を引き継ぎ、役が持つ仕事も行いつつ、管理者の役割もこなさなければいけない、私達管理者の辛い所です。

管理者知識以外はセーブされています。北郷一刀に合わされているのでしようが、大體日本の学生が持っているだろう知識はありますね。

では自己紹介の続きです。

于吉には道士、医師、人心を惑わす妖術使い、祈祷師、悪霊という配役による逸話補正が有ります。

これによつて私は気を巧みに扱え、医学と薬学に聡く、催眠を得意とし、天候をある程度操り、悪意を飛ばす事が出来ます。

役の逸話も相まつて、役割はもつぱら悪役ですね、基本的に北郷一刀と対立し、彼を盛り立てるのが私の仕事です。人を兎や鼠に変えたり、超常の存在を復活させたりと突飛な仕事をしてきました」

「逸話補正、久々に聞いたな。しかし、多才だがなんとも言えない役割だなあ」
「私もそう思います。では次に貂蟬、貴方が自己紹介なさい」

「はいはい、長尺の説明ありがとねん于吉ちゃん。

次はわたし、貂蟬についてのご説明。

補正は美貌、謀略、導き手、正体不明ね。逸話が少ないけどインパクトがあるでしょう？だから補正は極端に偏つちやつて、絶世の美女で傾国の悪女になつちやつたわあ。

役割は北郷一刀側の裏方かしらね。表には出れるけれど、正体を明かせないから輪に溶け込む程度しか出来ないわ。私としてはもっと皆の傍にいたいのに、運命は残酷だわあん」

「次は俺か。俺は左慈、道士だ。幻術、変化、気術、転送の逸話補正がある。

氣を操る全般の技術、人の認識を操る幻術、身のこなしには自信がある。役割としては基本的に敵役だ。

：最初の無礼、ここで詫びさせてもらおう。すまなかつた」

おお、予想以上に素直だ。

「別にいいよ、氣が立ってても仕方ない事情つてのはわかつたし。

それじゃあ俺の自己紹介だな。

略歴は管輅が話してくれた通りだな、配役は、多分上杉謙信だ。識に誰に生まれ変わったか？という質問にそう答えたからな。

逸話の補正はどう羅列したら良いのか分からん。上杉謙信だったら学生の知識にあるだろうから、大体そんな感じとと思ってくれ」

「戦の神であり、福の神であり、無病息災の神である毘沙門天の加護を受けたという逸話補正ならば、蕭何殿の八面六臂の活躍にも理解が及びます。それにその姿は女性説ですか？」

「おお、知ってるとは思わなかつた」

「あら素敵！私達お仲間さんだったのねえん！」

「断じて違う！容姿だけ引つ張られたんだ！ちゃんとついてるし女が好きだつての！」

「あらん、それは私も一緒よおん？」

「アンタのは友好の意味だろ？絶対そうだろ？ラブの方は違うだろ？って、この話題はややくしくなるからやめだやめ！」

「ふうむん、仲良くやっていっているようではないか」

「あら卑弥呼、終ったの？」

「結構長かったな」

「未来を詳細に見、どう動くか議論しつつなのでな、時間は取られるものよ。次は于吉、お前が行くと良い」

「では、席を外させてもらいましょう」

「次は私が自己紹介する番か。」

私は卑弥呼。鬼道、扇動者、指導者、占術の逸話補正を持つ。

だが私は何故か日本から引つ張ってこられたのでな、三国志での役割は持たぬのゆえ表舞台にはほとんど出れん。もっぱら裏方仕事をこなしておる。

管輅に彼女の逸話補正と役割も話しておくよう頼まれたので、彼女についても話すぞ。

管輅は占術と預言者の逸話補正を持つ。極端で強力な補正から、未来視と過去視すら可能にする。

とはいえ北郷一刀が来訪する最初の予言を行わなければならず、表舞台で動くにはか

なりの制限がかかる。

仕事が終われば私と二人でペアを組んで歴史の流れを作る裏方仕事をやっている。

私も管轄もお主を好意的に受け入れている、どうぞよしなに頼む」

「これで一通りの説明は終わったかしらん？」

「まあ聞きたい事については……今はもうないな」

「なら私と管轄が立てた今回の計画方針について説明しよう。」

先に言っておくが、今回は憶測が多くなってしまうので、気に留めるといふ程度で聞くといい」

「あら、何時になく弱気な発言ねえ」

「うむ、世界が統合されたばかりだからか、自由に動ける観測者が二人いるからか、どうにも管轄の力が十全に発揮できぬ状況らしいのだ。見える映像は何時にも増して断片的で、不安定な物が多かったみたいでな、それを頭から信じて行動するのは些か不安に過ぎる」

「だが行動の指針は必要だ、話せ」

「うむ、今回は蜀に流れがあるようだな。」

北郷一刀は蜀に拾われ、赤壁の戦いに勝ち、いずれ三国同盟をなす。というのが私、管

略、蕭何殿を通して見た未来視の大まかな流れだ。

皆の未来視を済ませておらぬから詳細はまだ分からんはつきりとは言えんが、恐らく蕭何殿を除いて皆裏方に回ると思われる」

「俺を除いて？」

「蕭何殿は管輅の力を持つてしても確定した未来が相当見辛いらしくてな、呉の人物と居た、赤壁の戦いで蜀と手を結ぶ手助けをした、という事ぐらいしか分からなかったよ
うだ。」

しかもそれすらも変わる可能性が高いという話だから、話半分が良い」

「そんな適当な」

「そうせざるを得ないというのが実情だ。」

ともかく蕭何殿には呉に赴いてもらい、蜀呉が魏に勝つよう働きかけて欲しい。それ以外は人の生死にあまり関わらないのなら好きに動いてくれて構わない」

「随分とアバウトだな」

「蕭何殿程のイイオノコならば、見えぬ事に怯えて無難に事を収めさせようなど逆に悪手になる。ならば自由に動き回ってもらい、貪欲に最善を目指してもらった方が良い結果を招くと私が推した」

「……期待に添えるか分からんが、やれるだけはやろう。しかし人の生死に直接関わら

ないってのはなんだ？」

「自由にくれとくれた手前ではあるのだが、蕭何殿が戦場に出てしまうとそれだけで事が済みかねん。それでは物語が動かんし、収束率の回収効率も悪くなってしまう。

ゆえに人の直接的な殺生は禁じ、更に主要人物には殺生だけでなく生かす事も極力避けてもらいたいのだ」

「ここでの主役は北郷一刀と三国志勢だから、俺が直接手を出すのはご法度って事ね。了解した」

「うむ、よろしく頼むぞ、蕭何殿」

「ああいや、俺の事は白と呼んでくれ。仲間ならそつちで呼んで欲しい」

「ぬ、真名という物か。私達には返せる真名がないが……」

「返すものなんてなくて良い、俺がそうしてもらいたいだけだ」

「分かった、その信頼受け取ろう、やはりお主はイイオノコだ」

「さて、全員の未来視を済ませた訳だけど、やはり白様以外は裏方に徹した方がいいわね。

貂蟬は蜀に、于吉と左慈は魏に、私と卑弥呼は中央でその他勢力を操り、勢力のバランスを取る。ここはいつも通りの仕事内容ね。

白様は単独で呉に入り、富国強兵に励んで下さい。管理者としての仕事などは気にせず、いつも通り呉の人達に教育を施すだけでも十分な働きになると思います」

「分かったよ、なんかあつたら臨機応変にやってみる」

「貴方なら何があつても大丈夫ですよね。」

では、解散！」

管輅の言葉で皆が一斉に目的の場所に飛んで行った。

于吉と左慈は左慈の能力なのか空間転移していったし、貂蟬はぬうんと地を蹴って一瞬で消え去り、卑弥呼が管輅を抱え、これまたぬわあーと気合發揮で地を蹴ってはるか彼方へ飛んで行った。

うーん、あいつら人間じゃねえわ。

俺はいつも通りゆっくりと旅していこう。とりあえずここは中国の中心地点である襄陽近辺らしいので、とりあえず東に向かえばいいらしいが……先に襄陽に寄って情報集めと食事を取りに行こう。

俺は気を溜め、とりや！とジャンプする。

十メートルぐらい飛び上がり、周囲を見渡す。

「お、立派な都市発見！まずはあそこだな」

自由落下に任せてズシンと着地。

立ち上がる土煙を片手で払う。大気を掴んで旋風を巻き起こす事で土煙を晴らす。「うん、十年の誤差というのが怖かったけど、俺自身には特に影響ないみたいだな。訓練の賜物も衰えてなかったし、もう何も怖くない！つと。」

んじゃ、行きますかね」

こうして俺はまた一人、地に足をつけて洋々と歩き出すのだった。

25. 再会

程なくして襄陽についた俺は、十年の誤差を埋める為に情報収集に勤しもうとしたのだが、どうにも街の中が慌ただしい。

何だろう？とそこらへんに居た商人の首根っこを掴んで事情を聞いてみた。

どうやら現在袁家の領地拡大政策に乗って、孫堅という将が率いる軍隊が襄陽に迫っているらしいとの事。

袁家の領地拡大政策ねえ、袁隗ががつつり関わってそうだな。

その後も耳聡そうな商人を捕まえては様々な情報を聞く。

国はもう駄目、収穫物の尽くが不作、税が上がった、盗賊が増えている、州や都市間での争いが頻発している等等、気の滅入るニュースばかり。

以前はこれほど酷くはなかったはずだが……世界が統合された結果だろうか。

聞くことは聞いて買うものも買ったので、金をたんまりと渡して商人に別れを告る。

さて、どうしよう。

さっさと呉の本拠地に向かって地盤を固めるべきか、出張ってきた孫家をここで待つ

べきか。

楽なのは間違いなく待ちだ。だがすぐさま戦闘に入るだろうから、殺生を禁じられた現状では戦場への介入は難しい。

……とりあえず何が起こっても眺めるに留めてれば怒られないかな。

数日後、商人の言っていた通り襄陽は戦場となった。

襄陽を守るは黄祖、攻めるは孫堅。

終始孫堅が優勢に攻め立てていたが、とある計が上手くはまり、一気に形勢が逆転した。

弓手のごく少数が気配を殺して潜み、岩落としの策発動時に孫堅を狙ったのだ。だが岩が落ちる振動の中にあつて狙いは逸れ、孫堅の傍らに控えていた少女の方へ矢は飛んだ。気配を読んだのか直感が働いたのかわからないが、矢に気付いた孫堅は少女の身代わりとなつて矢を受け落馬。そこに岩が落ちてきて孫堅は押しつぶされた。

そこからは敗戦ルートまっしぐらだ。孫家の兵の指示系統は乱れ、撤退を余儀なくされる。

黄祖の兵が軍馬を駆つて近寄つてこようと岩の傍から離れようとしないうちに庇われた少女。それを眼鏡を掛けた同い年ぐらいの女の子が引っぱたいて無理矢理に連れていっ

た。

黄祖の軍勢は撤退する孫家に更なる追い打ちをと彼らの背を追っていった。

がらんとした戦場に降り、無数に落ちている岩石の中からお目当ての岩に近寄る。

そこには右半身を押し潰された女性がいた。

「強欲で胡乱な黄祖の兵隊にも、目敏い奴つてのはいるもんだねえ」

痛みで意識も朦朧として弱っている筈なのに、彼女は異常な威圧感放っていた。

「血反吐を吐き、分かりやすく死にかけの状態になってもそんな威勢の良い事を言えるのか」

「最期ぐらいは格好良く威勢よく、さ。あんたも女なら分かるだろ、この気概」

「女じゃないが、そういう粋は嫌いじゃない。」

しかし人を庇って完全に態勢を崩してたつてのに、あそこから良く動けたな。正直生きているとは思わなかったよ。

「さすが江東の虎だ」

「称賛は受け取るが、何にしろこの通りさ。反射的に動いて右半身を犠牲にしてどうにか即死は免れたが、ここが私の最期だよ。」

まあ粋が分かる奴に看取られるのなら多少は向こうに逝き易くなる。

良かったな小娘、私の首は高いぞ」

言い募られる悪態を聞き流し、俺は傍らにしゃがみ込んで彼女の身体に触った。

あのドサクサで少しでも自身の生存確率を上げる為に行動していたとは、やはり英傑というのどこかぶっ飛んでいる。

押し潰されている為か外から見るに出血は酷くないが……なんにしる普通ならショック死してるし、助かった今も激痛が走り続けて会話どころじゃないだろうに。

俺は気を巡らせて彼女の身体を精査する。

右手足はもう駄目、右肺にも骨が刺さってる、その他の臓器も損傷している、出血も致死量間近。

これはさすがに打つ手が無い。どうしようもないが、痛みだけでもマシにしてやろう。

「小娘、一体何してるん……痛みが消えていく?」

「俺は流しの医者なんだがね、力不足で申し訳ない。多少血流を操作して失血死を遅くして、痛覚を弄って痛みを和らげるのが精一杯だ」

「……そりゃ有難いね、はあ、強がってたが結構限界だったんだよ。なあお前さん、黄祖の関係者じゃあないんだろう?」

痛みが引き、血臭の混じった吐息が少しだけマシになった途端、目をギラつかせて

こつちを見てくる孫堅。

黄祖の兵だよ、と言おうものなら喉に噛み付かれかねない迫力がそこにはあった。

「ん、そうだな、無関係だよ」

「無関係な奴が何故戦場を呑気に闊歩しているのかは分からないが、頼みがある」

「娘を頼むとかは聞かないぞ」

「さすがに出会ったばかりのお前さんに娘を頼むとは言わないさ。」

この岩の下に剣が挟まっちまってる。私達の一族の大事な得物でね、それをどうしても娘に届けたい。今から死力を尽くして岩に隙間を作るからさ、取って娘に届けてくれないかね」

「虎さんよ、この岩がどんだけ重いと思ってるんだ？あんたが幾ら死力を尽くしても僅かにさえ動かんし、剣なんて粉々になってるに決まってるだろ」

「馬鹿を言うな、私達の魂が決して折れないように、剣だつて折れていないに決まってる」

「いやいや、あんたの方こそ馬鹿を言うなという感じなんだが……まあいい、もし剣が折れていなくなったら、あんたの望みは叶えてやるかね」

目の前の岩は凡そ二メートル弱の丸みを帯びた大岩である、重さにしたら十トンはあるだろう。

言葉にしたように、半死半生の人間が底力を絞つても微動だにしないだろうし、それに押し潰された剣が無事であろう筈がない。

俺は気合を入れて、本気で力を込める。そしてどりや！と一気呵成に岩を退かせる。久々の全力に肩が上下する。下を見れば、こちらを驚いた表情で見ている孫堅がいた。

ふふ、してやったぜ。

しかし今度は俺が驚く番だ、彼女の潰れた右腕の先、そこにはどこか見覚えのある剣があつた。

鞘と柄はボロボロになっていたが、真つすぐの状態を維持している事から刀身は無事のようにだ。正直ありえん。

俺はそれを手に取り、これでいいのかと尋ねる。

「ああ、それこそ我らが至高の宝剣、南海霸王だ」

南海霸王……どこか見覚えのある剣で、どうにも聞いた事のあるイントネーション。

「確認の為、抜かしてもらつても良いか？」

「ああ、どこにも傷なんてありはしないと、その目で確認すると良い」

自信満々で言い切る孫権を横目に、するりと剣を抜き、刀身に傷一つない事を確認する。

そしてその刀身を見て確信した。

面白い、本当に面白い。何故俺がハンカイさんに贈った剣がここにあるのだろうか。

入手の詳しい経緯を聞きたいが、彼女に残された時間も少ない。他に聞くべき事がある。

「刀身に傷一つないと確認したよ。それじゃあ約束通り、あんたの最期の頼みは聞き届けよう。」

だが先にどうしても聞きたいことがある。

あんたなんで最後に他人を庇ったんだ？

正直指揮官としては愚かなことをしたと思う。身を庇うほど大事な少女、恐らく娘なのだろうが、彼女を見殺しにしていたのなら大勢は覆らなかつた。黄祖は劉表配下の江夏太守でかなり上質な手柄だ、孫家の更なる躍進に一役買っただろう」

「確かにこの戦場の指揮官としては愚かな判断だつたと認める。けれど孫家の頭領としてなら決して間違つた判断じゃなかつたと胸を張って言える。」

言つとくが情なんかじゃあないよ、あの娘が私以下の素養しか持たないなら、私は娘だろうと見殺しにしていただろうさ。

けどあの娘は私を超える傑物になる。ここで大きな負債を抱えようと、それを飛び越して飛躍する才と魂を持っている。

だから生かした、それが答えさ」

「……答えは受け取った、誰かに何か伝える事はあるか？」

「娘と娘を支える親友には伝える事は伝えた。後はそうだねえ、黄蓋と韓当の奴に謝つておくれ、あいつらだけはまだ娘にや戦場は早いと反対していたからさ。あんたらの言う通りだった、娘達を頼むと伝えておくれ。」

それじゃあ……孫家頭領孫文台、真名を炎蓮がお頼み申す。我が宝剣と伝言、しかと我が娘、我が友に託して頂きたい」

「名はないが、真名を白と言う。その頼みしかと承った。安心して任せよ。」

ふう、それじゃあ最後に、あんたはどうする？連れて行けなくもないぞ」

「呉の土に還りたいのは山々だけど、私の首が無くなっちまったら、背が見える娘を黄祖の兵は延々と追いかけるだろう？」

娘の背が見えなくなるぐらい撤退が早けりや良かったんだが、あの馬鹿娘はギリギリまで私に構いつばなしでさ。」

まあそういう訳で、私はここに残らなきやいけないのさ」

「そうか、ならばこれでお別れだな」

「そうなるね。」

ああしかし、一つ減ったとはいえ、やっぱり後悔だねえ、まだまだ戦いたかったし、最

後まで育て上げ、将来を見たかった」

「……もし次があるなら、後悔無きよう達者に生きろ」

「次があるなら、絶対にやられはしないさ、それじゃあもう、限界だわ。」

「じゃあね、みんな」

「そう言つて目を瞑つた彼女。」

俺はもう一度彼女に触れ、生きながらえるために操つていた血流と気の操作をやめ、それに必要だった痛覚と触覚を完全に消した。

不快げに寄つていた眉間は柔らかなになり、安らかな表情になる。

すぐに吐息は小さくなり、一人の英傑が世を去つた。

顔以外も綺麗に整えてやりたがったが、足音が近付いて来るのを感じて急いでその場を離れる。

娘さん達の元に急ごう。

と、頑張つてしばらく走つてはみたのだが、足はすぐに止まつてしまう。

そこら中に負傷兵が放置されていたのだ。

さすがに見捨てるのは後味が悪すぎるので、息がある者には治療を施して近くの村に連れて行く。何度も往復して生きた兵を全員回収し終えたら、村の人間に金を渡し、村

人の無償治療をして兵の後を頼んだ。

孫軍黄祖軍関係なく治療したので、そのままでは争いに発展する可能性があった。なので兵達の治療中に村と敵には決して悪さをしないようにと釘刺しを行う。

村から村へ移動する度にそんな事をしていたら、途中ではたと気付いた。これは注意されてた事に該当するのか？という疑問に。

人は殺生していないし、主要人物に該当しそうな人物を直接殺したり生かしたりもしていない筈。うん、そんなオーラを持った奴は治療してないから多分きつと恐らくセーフ。

……というか目の前で死にそんな奴が居て、そいつが誰だから助けないとか絶対できん。

孫堅も助かりそうなら助けてしまっていただろう。

回収効率は何をどう行動するとどれだけ変化して、何をどこまで回収できなかつたら演目失敗と見なされるのか、情報が多すぎて処理しきれないからと、その辺りの詳細を詰めなかつた俺の完全なる落ち度である。

演目が失敗してしまえば外史が消失するのだから、本当に注意しなければいけないのは分かっている。

けれど四百年で培った価値観や経験というのはそう容易く変えられない。戦場に入

るまでは駄目だと認識していたはずなのに、怪我人を前にするともはや反射行動のよう
に治療していた。

これは今の内にしつかりと決めてかからなければ、後を引く。

長沙に向かいながら、あーだこーだと悩み抜いた俺は、あと数日で目的地に着くとい
う段階になってようやく線引を決めた。

戦士としても戦医としても戦場には一切近付かない。その代わり村や町、俺の周囲の
治療には全力を尽くす。

どこまでが戦場だとか、俺の周囲とはどこまでを指すのだとか、詳しくを一切決めて
いない何とも中途半端な制約ではあるが、現状俺の精一杯である。

「今度管理者にあつた時、もう少し具体的な話を聞いて優先順位の確認をしないとなあ」
一言呟いて、俺は歩を進めるのだった。

結局孫堅が太守をしていた長沙に着くのに一ヶ月が経っていた。

孫家本隊が帰還してから二週間と少し、大分間が空いてしまった。

俺は面会の手順をどうしようかと頭を悩ませながら、街を歩いて行く。

昼時という一番人が賑わう時間の筈なのだが、城に続く大通りは不穏な雰囲気にかま
れていた。

敗戦の報は足が早い、既に孫堅死亡のニュースが知れ渡っているのだろう。

商業の活気は失われ、道行く人には荷物をまとめた人もおり、そこら中で交わされている会話は明日への不安で一杯だ。

劉邦様が亡くなったあの頃を思い出す。

鬱屈しかけた気持ちを、南海霸王を撫せて落ち着かせる。

今はとにかく城に向かおう。

城下町は沈鬱な雰囲気、音も死んでいたが、城門前はバタバタと非常に慌ただしい。

太守が死んだのだ、慌ただしくない方がおかしいか。

俺は門前に控えていた兵に、流しの医者なのだが雇ってはくれないか？と話しかける。

帰還してしばらく経っているとはいえ、怪我人はまだまだ適切な処置をされていない者も多いだろうし、怪我はなくとも疲労から体調を崩した者もいるだろう。

俺の目論見は当たり、兵は大助かりだと言わんばかりに城内へと連絡員をすぐさま送り、採用するかどうかを聞いてくれた。

程なくして、雇う際の金額と期間の提示と、こちらが用意した薬を使用する事、監視役に兵を一人つける事に納得してくれば採用するとの旨を聞かされる。俺は二つ返

事で条件を飲んだ。

案内役の人がすぐさま飛んできて、荷物もそのままに治療所へ連れて行かれる。正門の反対側、裏門近くに臨時の治療所があった。

そこそこ大きな治療所には、道に長蛇の列が出来る程に患者が詰めかけていた。中に入ってみれば野戦病院のような有り様だ。

長椅子が各所に置かれ、患者がズラリと並ばされている。それを数人の医者と看護師が具合を聞き、薬を処方しては次の患者に、と忙しなく周囲を駆けずり回っていた。

帰還から十日以上過ぎているのに、まだ処置しきれていないのか。

眉を顰める様子みた案内役が「大丈夫そうですか？」と声をかけてきた。「ええ、仕事のしがいがありそうです」と答えると、案内役はほっとした表情になった。

「ではこの治療所の責任者に一度面通しをしてもらいます」と案内役は更に奥へと入っていく。

大人しくついていった先には部屋があり、案内役が扉をノックする。

しかし一切の反応がなかったので、案内役は失礼しますと部屋に入ってしまった。

中には一人の少女がおり、机に向かって何やら書類を作っていた。案内役が失礼しますと声をかけると、少女は俺達の存在にようやく気付いたようで、

「次の精神疾患患者か？すまん、もう少しで指示書が書き上がる、そうしたら対応するゆえ、しばし待ってくれ」

と書類に顔を向けたまま対応してきた。

隣に居た案内役が「すみません、かなり忙しい人なので、少し待っていてくれますか？」と言ってきた。

俺は頷いて答える。

なるほど、確かに彼女程の優秀さであれば、仕事をいくつも掛け持ちしているに違はなく、その証拠に机には竹簡が山のように積まれていた。

「すまん、待たせたな。ああ君、これを程普に……」

顔を上げ、資料を持ち上げた状態で彼女が固まる。俺に気付いたようだ。

「こちらを程普様にですね、承りました。ですがその前に少し失礼します、実は流れの医者という人物が来ていまして、彼女がどれ程の腕前なのか確認する為に面接をお願いしたいのですが」

「せ、せ、先生！何故こちらに?!」

「先生？もしかして張昭様のお知り合いでしたか？」

「あ、ああそうだ。とにかく君はその資料を頼むよ、大事な資料だ、早急に届けてくれたまえ！」

「は、はっ、では失礼します！」

案内役の人は張昭の劍幕に押され、慌てて行つてしまった。うーん、なんか悪い事をしてしまった。

「それで先生、どうしてここに、というか今までどこに……ああ、聞きたい事が多すぎる！」

「落ち着け張昭、逃げたりする訳でもないんだからさ」

「そういつて十年間も姿を眩ませたのは何処の誰ですか?！」

「あーすまん、ちよつと諸事情あつてな。とりあえず、落ち着こう、な?」

「そ、それもそうですね。すう、ふう、すう、ふう」

目の前で落ち着くために深呼吸をしているのは俺の最後の生徒の一人、張昭である。

政治に特化していたが、一芸は道に通じるを地で行く優秀さで必修科目であつた農学も医学も優秀な成績を収めていた彼女なら、勤め先で医者を任されていたとしても不思議ではない。

「ふう、落ち着いた。では先生、色々とお聞きしたい事がありますので、どうか逃げないで頂きたい」

こうして俺からしたら二ヶ月弱ぶり、彼女からしたら十年ぶりの再会と相成つたのである。

26. 遠くの豪族より近くの平民

久しぶりに再会した生徒としばし歓談に耽る。

こんな事している場合ではないのだが、神經質なこの娘っ子は話を聞かねば気になつて仕事が出来ないと言ふ。

本当にそういう質の娘なので、積み重ねた竹簡を減らす作業を問題のない範囲で手伝いながら話を続ける。

「いやー張昭が変わつてなくて先生嬉しかったわ、見てすぐ分かつたしな」

「十を過ぎた時から見た目が変わつていないと喜ばれるこの苛立ち……」

「怒るな怒るな、どうせすぐに成長する。先生が保証するよ」

「……先生がそう言われるなら、信じます」

「俺を信じずとも、成長も老化も止められん、生物としての必定だよ」

「にしては先生のお姿は十年で一切変わつていないように見受けられます」

「まあ、俺は神仙の類だから」

「またそのような冗談を……いやしかし、先生は十年もの間見事な雲隠れの術を披露してくださいましたし、あながち嘘ではないのかも？」

「皮肉たつぷりな返しだな。まあ、あれだ、いつものように旅に出てたんだよ」

「嘘なのが透けて見えるかのよう。ですがまあいいです、それで助かった面もありますから」

「助かった？」

「実はあの後ですね、皆が故郷に急いで帰り、それぞれの子が持つ後ろ盾に先生を売り込み、家や陣営から引き出せる最大の贈答品を持つて再び先生の庵を訪れたのですよ。一人を除いてほとんど同時に皆が集合したのは思わず笑ってしまいました。」

「とはいえ皆が戻ってきた背景を考えれば素直に笑っていられる筈はなく、すぐさま先生を迎える条件を言い合う討論会が始まりました。」

「先生が庵に帰ってくるまでの間に片を付けようと、出し惜しみ一切無しの議論が行われ、それはそれは白熱したのです。ですが遅れてやってきた袁隗に全て持つて行かれました。」

「登用の願いに千の兵を持ち出してくるなんてあの性悪は何を考えているのか！是が非でも欲しい人なのは分かります、ですがやって良い事と悪い事があるでしょうに！ああ、今思い出しても腹立たしい！」

「はあ、そんな事があつたとはな」

「はい、ですが先生は一向に帰つてこず、そのまま解散と相成りました。もし帰つてこら

れていたらあの性悪が連れ去っていたでしょうし、私の腹の虫は多少治まりましたが」
「お前ら、卒業の時は泣いて別れを惜しんでたのに……」

「あんなのその場の雰囲気です。ええ、何かの間違いだったのです」

「女性の切り替えって怖い」

「それで先生、今日はどういったご用件でこちらに来られたのです？ただ医者を開業する為だけではないですよね？」

「んー今言うべきか否か、多分言ったらそれどころじゃなくなるしな。という訳で診療所が落ち着いてから言おう、死者の頼みより生者の救いだ」

「落ち着いてからと言われましても、現在診療所は最大稼働しても患者の対応が間に合っていないません」

「大丈夫、俺がいる」

「……さすがに先生が医学に詳しいとはいえ、お一人では焼け石に水でしょう」

「お前らは里から離れた庵で勉強させてたから、俺が実際に治療している所をあまり見せていかなかったな。」

まあ、見てろって」

竹簡の山も平地になったし、話も頃合いだろうし、そろそろ表の手伝いに行こう。

「そーいや張昭、俺の薬を使っているかい？」

「先生謹製の薬なら私が用意した物より余程上等でしょうし、構いませんよ。一応問わせていただきますが、先生は我らに害意を持つてここに来ましたか？」

「んな馬鹿な、ある訳ないだろ。つて俺が言つても信憑性はないか」

「信じますよ。」

未だ先生には遠く及ばない私ですが、先生の弱点は既に見抜いているのです。

先生は本気で頼まれると弱くて、嘘が本当に下手なんですよ」

「そんな訳ないと思うが……。ああそうだ、表に行くにあたつてなんだが、政務を任せられてるつて事はそれなりに出世してるんだろ？周囲が混乱するからこういうやり取りはやめておこう」

「それもそうですね、ん、んんつ、それじゃあ先生、頼めるかの。つて、先生と呼びながらでは不自然じゃないですか？私、というか私塾の皆にも名前は教えませんでしたよね」

「んーまあ先生は俺以外にいないから呼び名つて必要なかつたしな。んじやとりあえず謙信と呼んでくれ」

「珍しい姓なのですね。しかし、ふふ、私塾の中で先生の名前を手に入れたのは私だけですよね、やったわ、性悪に勝つた！」

「名前を手に入れただけでそんなに喜ぶ物かね、それじゃあ行くか」

「ええ、先生の実践での腕前、見せて頂きます」

二人で部屋を出て、いざ戰場へ。

野戦病院の様相を呈している広間の片隅、俺は鞆から薬と医療器具を並べていく。

「それでは張昭様、申し訳ないのですが、私の補助をお願いしたい」

「ああ、構わんよ。ああそれに様でなくとも構わん。現状私は無冠であるからな」

「わかりました。では張昭殿、この並べた薬と器具、それぞれを右から一番とし、私が言った番号を指示通り下さい」

「ふむ、任せよう。しかしあれじゃな、授業を思い出すの」

「ですね。では施術を開始します」

俺は長く細い鍼と短く太い鍼、傷薬の軟膏が入られた小壺、アルコールの入った霧吹き、清潔な端切れ数枚だけ持って、長椅子の端に座った、左ふくらはぎから血を流している患者に近寄った。

「まずはお前さんからだ、ん？縫合された箇所から血を流してるのか？お前さん一度治療されたすぐ後に無茶したな。張昭様、五番の針と二番の糸をお願いします」

「これじゃな」「はい、ありがとうございます」

「あの、わざわざもう一回縫合するんですか？もう血も止まりかけてるし、正直もう行こ

うかなーと思つてたんですけど……」

「馬鹿言うな、そのまま放置して化膿したら最悪足を切り落とさなきゃならんぞ。とりあえず気で身体を見るから、薬にしろ」

「いや、悪いのは足だけで」

「いいから、お前さんの身体をお前さん以上に分かつてやるつつつてんだから、大人しく言う事を聞け」

「美人なのになんて言い草だよ……分かりましたよお願いします」

俺は彼の心臓に手を当て、気を同調させ、整調させる。また筋肉を弛緩させるために鍼を使つて触覚を少し鈍らせる。

「うお、なんだ、痛みが引いた？」

「ふむ、特に異常ないみたいだな。左足を庇つて右足に疲労が溜まつてるぐらいか。んじやちよつと痛い但我慢しろよ」

端切れで彼の傷口を拭つてから血で濡れた糸を抜き、再び傷口を端切れで拭つて傷薬を塗り、素早く再縫合する。縫合が終わつたら弄つた触覚を元に戻しておく。

「傷口は終了、二日間は無理せず、傷口には絶対触んなよ。三度目は傷口が荒れるから治療が困難になる、次は無いと思え。汚れたら清潔な水で洗い流すか、清潔な布で拭えばいい。んじや後は右足を真つ直ぐ伸ばせ」

「あつ、はい、気をつけます。しかし先生凄腕ですね、前は叫ぶほど痛かった縫い合わせが全く痛くなかったです」

「そうかそうか、それじゃ褒めてくれたおまけをやるう」

素直に足を伸ばした彼のふとももに気を込めた張り手を一発。

パアンと小気味よい音と同時に彼の痛え!という声が周囲に響く。うん、感覚もちやんと戻ってるな。

「何すんだアンタ?!」

思わずといった感じで叫ぶ彼に、

「とりあえず立ってみろ」

むっとした表情で従う彼の表情がすぐに変わる。

「はあ?ん、あれ?」

「右足も大分楽になっただろう?左ふくらはぎも薬がカサブタ代わりになってるから出血の心配はない。それじゃあ走らず無茶せずゆっくり帰れよ」

「あ、ありがとうございます!」

彼はとてもよい笑顔で治療所を出て行った。

うん、良いパワーマンスになってくれてありがとう。

大きな音を立てて注目されたのは、次からの患者を素直に従わせる為にわざと行つ

た。

突然の登場に胡散臭げな目を向けていた人間がいなくなったのを確認して、俺は治療の速度を上げたのだった。

「薬三番三匙、八番一匙、十二番五匙、薬研で混合」

「承った」

薬の処方方を張昭に任せ、俺は患者を見る。

話を聞き、気を使いながらの視診、触診、聴診を行えば九割五分患者の様態が分かる。その時点で漢方の混ぜあわせを指示する。

そして気の正調を手や鍼を使って行い、目に見える傷は軟膏を塗る。

器具を使った診察や外科手術が必要になるレベルの患者は既に治療済みらしく、効率化すれば一人三分もかからないで治療が可能だった。

凡そ一時間、他の医者達の分も合わせて百人程を治療し、患者は目に見えて減った。

昼休憩を終えて戻ってきた医者もいたりして、治療所は完全に落ち着いたと言える。

「謙信殿、先ほどの患者で今日の分は終いじや」

「しかし、まだ数十人程残っています」

「そちらは精神疾患の者になるのでな、謙信殿よりもウチの連中に任せてやりたい」

立ち振舞いに問題もなく、目立つ箇所には傷が無いのでどうしたのだろうか?と思つていたが…彼らはあの撤退戦の生き残りなのか。確かに余所者の俺が出る幕はなさそうだ。

「分かりました、では荷を片付けます。それで張昭殿にお願いなのですが、孫策様、黄蓋殿、韓当殿と私を引き合わせて頂けないでしょうか?」

「ふむ、元より紹介するつもりではあつたが、何故かの?」

「とある方からお渡しする物と言付けを頼まれていました」

「……」ここでは話しにくい事なのか。では竹簡を届ける必要もあつたしの、今から城に向かつてしまおうか。

皆、私はこのまま抜けるが大丈夫か?」

はい、と近くにいたスタッフ達が答える。

「すまんな、では謙信殿、竹簡を運ぶのを手伝つてもらえるかの?」

「喜んで」

俺は竹簡の山を抱え、張昭と彼女の十年間の話などしながら歩を進める。

城内に入ると一気に慌ただしさが増す。邪魔にならないようにと通路の脇を歩きながら、一つ褒めたい事があるのを思い出した。

「しかし張昭殿、精神疾患を良く上に認めさせる事が出来ましたね」

この時代にはPTSDという概念はなく、また蔓延する下地も出来上がっていないので、患者の数自体が少ない。だが少ないだけで確実に存在はしている。

決して放置されて良い問題ではないのだが、精神疾患を認めさせるのは非常に困難だ。

精神疾患ってなんだ？ただの軟弱者だろ？と切り捨てられて終わりだろう。

「我が君である孫堅様が戦場に立たれる方であり、兵卒に対しても気を掛けていらしたからこそじやの。」

最前線を知らず、苦い敗戦も経験せぬ者が最上位者であったり、戦終了後の事まで理解して人材と予算を割ける宰相がおらぬ場所では叶わぬ上奏だったろう。

そして認められてからは兵の戦線復帰率は他所とは比べ物にならない程高くなり、また愛国心も大いに培えた。今では精神疾患の存在と治療の有効性を否定する将はおらぬ。全ては謙信殿の教えの賜物じやな」

「いえ、張昭殿の尽力のおかげでしょう、本当に良くやったな、張昭」

「えっ、あつ、その…ちよつと先生！それ反則です！」

「周りに誰もいなくなつたからな、先生ぶつてみた」

「全くもう……でもここから先は一定階級以上の将しか立ち入れない場所なので、もう

少し先生ぶつても構いませんよ」

「そうなのか、それじゃあお言葉に甘えよう。早速先生からの助言というか客観的な感想なんだが、お前のその口調、なんとも似合わんね」

「ぐつ、こんなナリですから、口調だけでも尊大にしなければ誰も私を大人として見ないんですよ。」

我が君が私の才を見出し、重用してくれなければ、見た目によつて侮られ続ける最低の人生であつたかも知れません」

「人を見た目で判断せず、柔軟な発想で兵を労る。孫堅様は素晴らしい傑物だつたんだな」

「ええ、日輪の如き暖かさと空を翔る大翼の持ち主で在らせられました、本当に、惜しい人を亡くしました」

「……これからどうする？つて聞くのはさすがに駄目か」

「そうですね、仲間として迎え入れなければ出来ない話です。ですが先生がウチに来てくれると言うなら、すぐに手を回して高官として迎え入れると約束しますよ。」

と、私の執務室に着きましたね。竹簡を運んでもらつてありがとうございます」

執務室の戸を開け、中に入る。きちんと整理整頓された部屋とは対照的に、机に置かれた竹簡が雑然と山をなしているのが印象的だつた。

「また増えてる……それじゃあ先生、竹簡はそこらへんに置いてもらって構いませんので」

そう言いながら張昭は戸と窓の戸締まりをしつかり確認して、俺に向き直った。

「それでは、先生の真意を伺っても宜しいですか？」

鋭く、探るような瞳。会話の端々で見せた冷静な瞳をここで露骨に見せる。

「俺の真意は探れなかったか？」

「はい、十年間について、私塾について粉をかけても、問題ない範囲で国の内情を見せても、何も反応してくださいませでした。私ごとではまだまだ先生の真意を読み解く事は出来ませぬ。

ですのでここで切り込みます」

懐を容易く見せるのだな—と思っていたら、そういう意図があつたわけだ。生徒がちやんと成長していると確認できて非常に嬉しい。

「何だ、実は信用されてなかったわけか」

「信用も信頼もしているからこそ、私一人で対応しているのです」

「そうか、もうお前は一人前の政務官なんだなあ。

よし、それじゃあ俺がここに来た理由を答えよう。

一ヶ月前、俺は旅の途中にたまたま襄陽へ立ち寄っていたんだ。美味しいものでも食

べようって感覚だったんだが、そこが急に戦場になった訳だ。

逃げ出そうと思つたら戦闘が突如終わってな、どうしたんだろう？もしかしたら怪我人とかいるかも？という好奇心と使命感で最後に一番騒がしかった所に赴いたのさ。

そしてそこで岩に押し潰された孫堅様に出会った訳だ」

「……嘘は仰られてないようですね」

「俺って表情に出やすいのかな……ともかく、右半身を押し潰された状態だったけど孫堅様は生きておられた」

「孫策様との話と合致しますね」

「そしてその時に二つ頼まれ事をされた、剣と伝言を届けてくれと」

そこまで話して張昭の表情が驚きに染まる。

「頼み事とは孫堅様からだったのですか?!ちよつと先生、なんでそんな重要な事をすぐに話してくれなかったのですか?!」

「すまんな、先に話すと面倒だと思つて話さなかった。あの場では患者の治療が最優先だったんでな」

「長沙太守に関わる案件ですよ?!私としてはそちらの情報を優先して頂きたかった!」

「だが治療をあれ以上遅れさせる訳には行かなかつただろう、俺が診た一人目の患者は処置されぬまま帰ろうとしていた」

「それはそうですが、優先順位というものが！」

「死者よりも生者、遠くにいる人よりも近くにいる人、他人よりも知り合い、俺の中での優先順位に従ったままだ。先に頼まれた事であるとはいえ、頼まれた本人の事情と心情を優先するのは悪い事か？」

「それは……」

「それにお前が治療所に顔を出している時点で差し迫った危急はないと分かっていた、だったら治療に必要な一二時間など誤差だろう？」

「そうとも言えますが……しかし太守と将に関わる事より、兵を優先するなんて常識に欠けます」

「確かに影響力を持った将を優先するのは組織の中にあつては正しい考え方だ。だが今現在俺はその外にいる」

「……先生は本当に振れない人ですね。袁隗に拳骨を落としていたから分かつてはいませんが、良くも悪くも権力を一切気にされない」

「権力に擦り寄る意味がないからな。」

しかし説得を放棄したのはかなり質が悪かった、すまない」

「……こちらも話の腰を折った上に勝手な事情を押し付けてしまいました、申し訳ありません。」

あの、続きをお願いしても構いませんか？」

「ああ、孫策様に剣を、黄蓋様と韓当様には言付けを頼まれたという所からだな」

「言付けは分かります。しかし、南海霸王は巨岩に押し潰されてしまったと孫策様が……」

「それはだな、頼み事を託した直後に孫堅様は亡くなられ、また黄祖軍に戻ってきたので俺は見つからぬよう隠れてやり過ごした。ご遺体は黄祖軍が持っていったが、岩の処理等は日が暮れ始めたので後日に回された。

俺はその隙についてすぐさま岩の下を掘り進め、なんとか剣を回収したわけだ。

これが託された剣になる」

俺は鞆にしまい込まれたボロボロの剣を取り出し、張昭に渡す。

張昭は震える手で剣を受け取り、抜いた。

裝飾は剥げ、柄もガタガタだが、その白刃には些かの傷も曇りもない。

剣をボロボロの鞆に戻し、張昭は剣を抱きしめ、

「お帰りなさいませ、我が君よ」

万感の思いを抱いて涙と言葉をこぼした。

27・英傑の誕生

その後張昭は涙を拭い、皆を集めてくると言つて出て行つた。

その際剣は返された、先生が頼まれた事だからと。

張昭が出て行つた後、一人の若い兵士がやつてきた。将への用事が終わつて持ち場に帰る途中にたまたま張昭と出会い、客間への案内を頼まれたらしい。

大人しく着いて行くと、そこそこ豪華な部屋に通された。

ここでしばしお待ちを、という言葉を残し兵士くんは出て行つた。気配は離れていないから、扉の脇で警護だか見張りだかをしてくるようだ。

うーん、しかしこのままでは暇過ぎる。

外に行つた兵士くんをどうにかこうにか言い包めて部屋に入れ、かばんから自作のボードゲームを取り出して彼と時間を潰した。

二三時間後、扉が叩かれた。

慌てて立ち上がった兵士君が扉を開ける。

そこにはとても良いオーラを発する美しい女性が息を切らせながら立っていた。全速力で走ってきたらしい女性は程普と名乗り、今から自分が案内すると言う。

程普さんを見た兵士くんの顔色が青くなったり赤くなったりしているのを見るに、結構な立場にある人なのだろう。

俺は固まった兵士くんに手を振って別れを告げ、程普さんの後に従うのだった。

しばらく歩き、そこそこ大きな扉の前までやってきた。

ここに皆が集まっているそうだが、その前に荷物を全て預かりたいと言われる。

当然の対応だ。むしろ知り合いとはいえ、張昭が頓着しなかつたのがおかしい。若い兵士くんは張昭が荷物の検めを済ませているものと勘違いしたのだろう。

俺は素直に従い、背負ってきた鞆をおろし、南海霸王を抜き取った後は鞆ごと彼女に渡した。

張昭から事情は聞かされていたようで南海霸王はスルーされたのだが、背負い鞆に隠すようくりつけて忍ばせていた愛用の刀を見て彼女は苦笑を零した。きつと後で張昭と兵士くんは小言を言われるに違いない。

彼女は扉を開き、中に先導してくれる。

いつもは会議室として使っている場所という話だが、大きい長机や椅子は端に寄せられており、かなりの広さを感じさせる。

そして部屋の中央の奥、八人の人間が待機していた。中には勿論張昭もいた。

俺を案内してくれた程普さんは扉の鍵を閉め、八人の中央にいた十二歳程の少女の横に移動し、すぐさま荷物を置いて軽く肩を回していた。うん、それすつごい重いよね。

ともかくこれでお膳立ては済んだのだろうと思ひ、俺は膝をつこうとして止められた。

「膝を付くのはやめて頂きたい。私達は太守であつた母を除けば無位無官に等しく、尚且つ貴方は孫家の恩人です。むしろこちらが膝を屈さねばならないでしょう」

中央の少女は肅々と言葉を述べた。

「此度は孫堅の娘であり、現孫家頭領孫伯符として、感謝よりも先に非礼を詫びなければなりません。恩人を歓待する余裕も権限も現在の私達には無く、この様な急拵えの部屋しか用意が出来ませんでした。平にご容赦下さい」

そう言つてその場にいた全員が頭を下げる。

「頭をお上げ下さい。立場が対等というのなら、そこまで謙らないで頂きたい。むしろ自分は謁見など形式ばつた堅苦しいやり取りがなくほつとしております」

「そう言つて頂けると助かります」

皆が顔を上げるのを確認して、俺は切り出した。

「では私、謙信がこちらに伺つた訳を話させて頂きます。

張昭様からお聞きだとは思うので私の余計な情報は抜かせていただきますが、襄陽で

の戦いの後、私は孫堅様にお会いしました。

その際、この南海霸王を孫策様に、また韓当殿と黄蓋殿に言付けをと頼まりました」
そう言つて俺は南海霸王を孫策に差し出す。

彼女はそれを躊躇うように手を伸ばしては、触れそうになると引つ込めるのを繰り返す。

母の剣を自分が手に取つて良いのか判断が付かないのか、剣と母が巨岩に押し潰された様を思い出したのか、押し潰された剣が無事である筈がないと思つていいのか。彼女の内心は読めない。

周囲はその様子をじつと見守っている。

しかし中々手に取らない彼女に俺はやきもきとしてしまった。

この精彩さを欠いた表情の少女が、あの剛毅な英傑の剣と跡を継ぐに相応しいのかね。

そんな疑問から、俺は彼女にちよつとした発破をかけてみた。

「頼み事を託される条件として自分と孫堅様は一つ賭けをしました」

唐突に話し始めた俺に少女の手がビクツと引かれた。

「貴方は剣を届けてくれと言うが、大人の身の丈を超す巨岩に押し潰された剣が無事である筈がない。と私は言いました。孫策様もあの巨岩を見ましたよね？」

こくりと頷き、顔を俯かせる孫策。

「私が自明の理を言うと、孫堅様はこう仰られました。」

『馬鹿を言うな、私達の魂が決して折れぬように、剣も決して折れていない』と。

一抹の不安も無く、そう快活に言い切られてしまった私は面白くなってしまう。まして、ならばもし剣が無事であるなら、貴方の最後の頼みを聞き入れて彼女達を追いかけましょうと約束をしたのです」

俺は彼女に改めて剣を差し出す。

「そして約束は守られ、剣はここにあります。その上で一つ孫策様にお聞きします。

貴方の魂は折れてしまっていますか？」

彼女は数度呼吸を整えて、小さく呟いた。

「私達の魂は……」

手の震えは止まり、彼女は顔を上げてこちらを睨みつけ、しかと剣を取った。

「私の魂が折れる？馬鹿を言わないで」

彼女はボロボロの鞘からするりと剣を抜き、白刃を掲げた。

「我らが宝剣が折れていないというのに、どうして私の魂が折れようか!!」

掲げた刀身は折れるどころか傷一つ、曇り一つ無い。それを確認した彼女の目からつーつと一筋の涙がこぼれた。

そして涙で濡れるその瞳と表情に、強い色が芽生えたのを俺は確かに見た。

彼女は剣を鞘にしまい、深くお礼をしてくれた。

「母の思いと我らが宝剣、しかと受け取りました。

そしてこの剣が戻ってきた事で孫家としての面目も保たれます。本当にありがとうございます」

「私も孫家頭領にお渡しする事が出来て嬉しく思います」

俺がそう言うと、彼女は顔を赤くしながらも、にっと笑顔をを見せてくれた。

うん、良かった良かった。では、

「次いで伝言なのですが、韓当殿と黄蓋殿は…」

二人の女性が一步前に歩み出てくれた。

「お二方にはただ一言、すまない。」と

それを聞いた二人は目を閉じ、深い深い吐息をついた。

「そして皆様には、娘を頼むと仰られていました」

その言葉を聞いて皆は顔を上げ、

「「任された!!」」

天まで届けと言わんばかりの大声で孫堅殿の遺志に応えた。

「一応こちらに伺った用事は全て終わりました」

「そうなのですか、あの、代官がやってきた後でしたら自分達も自由に動けるようになります。ですのでもう少しここに残って頂ければ多少のお礼は出来ると思うのです」

「のう姫様、何時までしおらしい子猫」

「黄蓋？黄蓋はこの忙しい時期に休暇が欲しいのかしら？」

「ぐぬ、以前より闘気が研ぎ澄まされておる……大殿、姫様は成長しておられますぞ」
黄蓋と呼ばれた女性は変な所で少女の成長を喜んでいる。

他の面子も笑顔がちらほら見える。どうやら皆何がしかの一区切りをつける事が出来たみたいだ。

弛緩した空気の中、張昭が真面目な表情をしたままこちらに寄ってきた。

「確か先生は医者として現在雇われているのでしたよね？」

「うお、ここにも子猫がおるぞ！」

「黙つとれ黄蓋！私は真面目な話をしておる！」

弛緩していた空気に楔を打ち込む張昭。これは何かあると思つた俺は素直に答える。

「確か契約では七日間の従事だった筈です」

「ほ、本当ですか?!毎日怪我して会いに行きますね！」

空気を読んで下さいお願いします。

「孫策様、どうかお身体は大事に。それでどうしました?」

「お金を積みますゆえ、医者との契約を一年伸ばして頂き、それと平行して是非ともここにいる全員に教育を施して欲しいのです」

「えっ、なにそれ?! 私やるよ! 周瑜も一緒に学ばせてもらおう!」

「ひ、姫様が進んで勉強を?! 成長が著し過ぎてむしろ怖い!」

冷静そうな程普さんが怖い。姫さん、あんた普段はどんなキャラなのよ。

「でも今の状況で勉強って……そんな余裕もないし、そもそも必要あるの?」

韓当が疑問を呈する。

「そうじゃの、状況はかなり逼迫しておる」

頷く黄蓋。まあ、ここに来て教育を、と言われても受け入れ難いよな。

「それでもこれは必要な事なのじゃ、私の私財全てを投げ打つてもやる価値がある」

「金などいりません。私は今まで教育を金目的でやった事なんて一度もないのですから。しかし一年でいいのですか?」

「はい、一年しか猶予がありません」

「そうなのですか、とりあえずちゃんと説明して頂けますか?」

「勿論です、先生には全てを曝け出して本気で頼む所存です」

「ここまで来たらなんでも引き受けさせてもらいますけど」

「ふふつ、先生の弱点全開ですね」

「……反論の余地もございませんね」

そして張昭は現在の孫家の事情について話し始めた。

現在孫家はものすごく苦境な立場にある。

袁家の領地拡大計画の一環に應える形で襄陽を攻めた。一応それなりの大義名分は与えられはしたが、侵略行為である事に変わりない。黄祖は劉表配下、劉表は皇帝の配下。攻めた後は当然釈明等々をしなければならぬが、そこは表向き何も関わっていない事になっている袁家からの取りなしが図られ、無罪放免となる手筈だった。

勝つていれば、そうなっていた。

だが蓋を開ければまさかの敗戦。

こうなると袁家の取りなしが期待できない。勿論裏の事情を知るその他味方の目もあるのに完全に切り捨てる訳にはいかず、ある程度のフォローは入れるだろう。

だが決して厚くはない。臣は許されるが孫家は断絶、なんて可能性は低くないのだ。

だから張昭は袁家本流となった袁隗に昔の誼を使って直接連絡を取り、取りなしを頼んだ。

頼みは受け入れられたが、条件として二つが突き付けられた。

一つ、張昭と孫家次女を袁隗の元へ送る事。

二つ、孫家とその臣は袁隗に仕える事。

本当は三つ目に南海霸王の献上があつたのだが、劍は失われたと内外に知れ渡つているので取り消された。

これが受け入れられれば、孫堅の名誉もある程度守つた上で孫家存続も取り計らおうと袁隗は言つてきた。

これだけ見ると随分緩い条件なのだと思うが、飲みやすい二つの条件で孫堅が固めた南部の地盤と育つた人員が反発も無く丸々取り込めるのだから、実は練られた条件なのだと感心する。

次女が人質になるのは、長女は実動隊として操り、まだ6歳と幼い次女を洗脳していつか旗頭につかせて傀儡にする為と張昭は読んでいる。

……裏では際どい事もするし、悪巧みも上手な子だったけど、そこまでするのは謎だなあ。

ともかく飲みやすいとこの二つすぐさま受け入れれば、袁家の飛躍と孫家の飼ひ殺しは確定する。

袁家に足りていなかった武の駒を手中に収め、内政のトップである張昭もカリスマ孫

家の次女も良いように使役できる、没落する家に温情をかけたと更に高まる汝南袁氏の評判、孫堅の固めた地盤を取つ掛かりに揚州への影響力は増しに増す。

いやー策略家としてのあの子の力が存分に発揮されてるね。

俺が何とかするように一筆書いてみる？と聞くと張昭は大きく首を横に振つた。

「そんな事をして私が先生を隠していたとでも思われたら全員の首が飛びます」

「放蕩者の私が一所に留まつて匿われるとか信じないでしょうに」

「何にしても、張昭は私よりも長く先生と過ごしていたんですね、極刑。等と言われますのでご勘弁を」

……そこだけ聞くとヤンデレ発言っぽいけど、多分知識量に差が出るのを嫌つてる感じだろう。

今現在は前頭首孫堅の喪に服したいから時間をくれという奏上が功を奏し、引き継ぎ資料作成と代官としての勤めを果たすならば、一年を猶予として与えると袁隗に約束を取り付けた。

袁家で誰を長沙太守にするか決める猶予が欲しかっただろうから間違いない通る奏上だったとは張昭談。

そうして得たこの一年で個々人のポテンシャルを上げ、もし散り散りになったとして

も埋没して気概を殺されぬよう鍛えて欲しいとの事だ。

埋没して気概を殺されると言った所で各人から否定の声が入るが、まあ一人の恐怖を知らないと思うだろう。

何処か知らない集団の中に放り込まれ、その中で一人になるというのは恐ろしい精神的苦痛がある。短期中期で見ればずっと一人きりでいるよりも余程精神的苦痛を受ける。

そしてその精神的苦痛を取り除く方法は簡単である、相容れぬとしても集団に迎合してしまえば良いのだ。

「今まで気の合う仲間で望みのままに高みを目指していた自分達に、一人きりになる苦痛は耐えられるのか？安易な救いを求めずにいられるのか？袁隗は私達をより扱い易い駒とする為、それぐらいの策謀を数多張つてくるぞ？」

そう張昭が問いかけると、否定の声は先程よりも小さくなった。苦境や困難を知つていても、張昭の言う真の孤独について自分達は知らないと感じたのだ。

そう言う張昭は孤独を知っている。才能があるからと幼いのに寮付きの私塾にやられ、袁家などもある生徒達とどう付き合っているのかかわからず、やった事もない土いじりや家畜の世話等をやらされる日々。子供からすればただの地獄だっただろう。

……こう言う俺がとても酷い事をしていられると思われけど、ちゃんとフォローした

よ。一番扱いづらいであろう袁隗には厳しく接して平等をアピールしたし、学ぶ楽しさをまず教えた。二ヶ月もすれば皆ちやんと笑顔だったから！

しかし、と張昭は続ける。

「今こそ強き信念を持つて個性と力量を磨き上げ、策謀による孤独を跳ね除けるどころか周囲の環境を自分の色に染めて取り込む程の魅力に昇華させれば良いのだ。

私達にはそれが出来る才能と資質があり、先生には私達を磨く腕がある。

きつと出来る、だからやろう」

そう自信を持つて言い切った様は、見た目12歳の張昭をとて大きく見せた。その様子に周囲は飲み込まれ、全員にやってやるぞという気概が生まれていた。

こうして俺の今後一年の方針が決まった。

後の呉の柱石達を育てる日々が始まったのである。

28. 実技訓練開始

俺は張昭からの依頼を受けるにあたり、二つの約束事を結んだ。

俺を役職につけない事、戦場に近付けさせない事。この二つだ。

今回は戦いについてもガンガン教えようと思っっているので、先に予防線を張っておかないと誘いを断る時に面倒だ。

俺の要求に訝しげなメンバーだったが、それぐらいならと約束を結んでくれた。

剣を届けた翌日から訓練をスタートさせる、無駄にする時間は一切ない。

特訓を行うメンバーは十人、孫策、周瑜、黄蓋、程普、韓当、朱治、祖茂、張紘、魯肅、太史慈だ。

才能があり、忠義があり、やる気がある主要なメンバーだけを極限まで鍛えあげるよう頼まれたので、この十人になった。

身体が完全には出来上がっていない娘つこや文官も混じっているが、適宜訓練内容を變えて育成する。

まだ訓練が何なのかも分かっていない六歳の孫権と二歳の孫尚香は張昭が面倒を見

る事になつてゐる。皆が学んでいる横で訓練風景だけ見せ、ときたま俺も混じりつつ対洗脳用の情操教育を施していく予定だ。

俺は午前中に患者を診み、皆はそれぞれ練兵や政務に励む。昼からはそれぞれの仕事の合間をぬつて時間を割り振り、順次訓練を行つていく。そして夜は皆で座学を修める。六日に一度は休ませるが、後はみつちりとルーチンを守らせる。

計画は練られている。さあ、訓練を始めよう。

診察を終えた俺は訓練場へと赴いた。

柔軟をしつつしばし待つてゐると黄蓋と程普の二人が走つてやつてきた。

「すまぬ、抜けてくるのに時間を取られてしもうた」

「ごめんなさいね、二人抜けると引き継ぎが難しくくて」

「ああ、別に構わないよ。仕事の途中で抜けてもらつてゐるわけだし、ここと練兵場は少し離れているしね。

むしろ思つたよりも早くて吃驚したぐらいだよ」

先生をするにあたつて、彼女達とは敬語のやり取りをしないようにした。

互いに変に氣遣つて訓練内容に影を差さないためだ。

「時間厳守の感覚があるのは張昭のおかげね。あの子が日時計を各場所に置き始めてか

らなんだかんだと皆時間を守るようになってきたのよ」

「教えを忠実に守る自慢の教え子だなあ、他の皆もそうだったら嬉しいが。」

それじゃあ早速特訓を始めようか、時間が勿体無い」

「おうともさ。しかし何をやるんじや？学ぶのは気の扱いや医術の実践か？」

「とりあえず柔軟をしながら説明しようか。柔軟については張昭から聞いた？医術を学ばせた時に教えたんだけど」

「聞いておる、兵も含めて皆やっておるぞ」

「そっか、なら練兵の時に一緒にやってるだろうし大丈夫かな。」

それじゃあ今から君達に武術の指導を行う」

「先生さんに武術の指導なんて出来るのかしら？」

「訝しげな視線も理解できるが、ちゃんと出来るよ。」

今執金吾をやっている丁原や三品位の將軍をやっている皇甫嵩にも手解きをしたんだから」

「張昭も言っておったが、眉唾じゃなあ」

「まあ口だけで認められようとは思っていないさ。」

とりあえず最初にやるべきこと、君達の先生をやる上で必要な事を済ませる」

「ふむ、それはなんじや？」

「俺が圧倒的上位者であると身体に刻み込んで、誇りを徹底的に折らせてもらう」
「はい？何を言ってるの？」

「君達は孫堅様に武勇を認められていたらしいね？」

「…ええ、直接お褒めの言葉も頂いたし、自分の腕前についても自負しているわ」
「右に同じじゃな」

「そう、じゃあその腕前を俺に見せてくれ」

「まあ構わないけど…黄蓋と模擬戦でもすればいいの？」

「いや、俺を相手に殺す気で来てくれ」

「は？いやいや、張昭の先生を怪我させる訳にはいかんし、先生は知の人じゃろ？理論とかに基づいた教授を横からするのではないのか？」

「んーなんというか、俺を強いと認識できない時点でお察しなんだよな。言っておくけど、俺は孫堅様よりも圧倒的に強いぞ？」

孫堅よりも強い、それを聞いた彼女達の目が据わる。良い塩梅で挑発が出来たようだ。

「……それはふかしでも言つて良い言葉ではないぞ？」

「愛弟子が言うにな、俺は嘘が苦手なんだそうだ」

「そう、なら存分にやっても良いのね？」

「どうぞ、得物は好きな物を使っていいぞ」

「舐めてるわね」

「次来る朱治と祖茂と韓当にはこんな奴に学ぶことなぞないと言って聞かせねばならぬのう」

練兵した直後で得物は持ったままだ。彼女達は自身の得意とする得物をそのまま抜き、どちらが先に行くかと視線でやり取りをしている。

大丈夫、そんなまだるっこしい事をしなくても、

「二人で来なよ、それでも届かないんだから」

「……ちよつと堪忍袋が切れちゃったわ、黄蓋、私が先に行く」

「ふん、手加減するんじゃないぞ」

「多分無理」

そう言つて彼女は得物の蛇矛を構えて地を蹴った。

が、この時点で駄目過ぎる。その一秒があれば間合いなど一瞬で無くなる。

俺は彼女が地を蹴った瞬間既に間合いに居た。

彼女は目を見開いて驚き、自身が遅きに失した事に気付いたが、最早どうする事もできな

軽く足を掛けてやるだけで彼女は盛大に転がった。

隙だらけだが追撃はしない、ここでダメージを与えてしまうと絶望感が薄れてしまう。なので彼女が起き上がるのを話しながらゆっくりと待つ。

「構えてから地を蹴る、二つの工程を脳内で決めてかかっていたからこうなる。戦いにおける想定は一工程を連続するように行え、それが臨機応変という物だ」

彼女達は大人なので、言葉としてちゃんと伝える。

出来上がった価値観を崩すには正論をどんどん押し付けるに限る。

程普は起き上がり、唇を噛みながら再び構えた。今度は静観の構えのようだ。

「その構えには何の意味があるかちゃんと考えてそうしているか？」

構えとは攻めるにあつては選択肢の強要、守るにあつては相手の攻め手を制限する為の物と言える。

さっきの構え、武器の先端を身体の後ろに隠す形でしかも少し前傾していたね。あれは愚策だ。あれなら上段からの一撃はない、また長物だから切り上げという選択肢もない。ならば斬り払いか突きになる、しかし前傾姿勢で突きは避けられた後の隙が大きい、当たった所で攻撃力過多で無駄が多い。

という訳で君が取る行動は切り払いの可能性大で、精々足、胴、首の狙いで選択肢を強要するしかない。だが大まか狙いが分かっているなら簡単に避けられるし、受けられるし、反撃される。

まああの転びようからすると突進速度には自信があるみたいだったし、いつもは深く考えずとも当ててくれたのかな？」

目つきが段々悪くなっていくね。凶星だったんだろう。

「それじゃあその構えだけど、蛇矛を前に突き出して構えているね。さつき見せた俺の早さを得物の長さで牽制しようとしてるわけだ。だけど持ち手を少し引いている、これで反撃の意志ありって事がわかる。縦に小さく小手先を狙うか突きを放って一撃を加えようという考えだ。

ここまで言っても構えを変えないのは、間合いで有利を取っているから安心してる？ だけどそれは意味が無いんだよ」

俺はゆつくりと近付いていく。

「初撃を交えても実力が分からなかった相手なら反撃の意志は消して見に回るべきだ、中途半端が一番良くない。

さて、ゆつくりと真正面から近付いていくと予想外の行動を取っている訳だけど、どこで攻撃に切り替える？ 攻守の切り替えは戦闘ではとても大事な要素になってくる。さあ今で十歩と少し、まだ見に戻るかい？ それとも決め打ちしているのかな？ そっちの可能性の方が高そうだね。じゃああと一步、君の間合いに入ろう」

彼女は読み通り、突きを放ってきた。腰、腕、肘、手首を連動させた速い突きは他の

人間であれば意表をついた事だろう。けど、

「決断が遅い、攻撃が遅い。常に思考し、相手が行動したら合わせて最善手を打て。

動かない選択を取ったとしても見えぬよう僅かにでも変化をつけるんだ。さっきの一撃ももう少し深く構えていたらもつと速度は出ていただろう？相手がゆっくりと近づいてきたなら、気付かれぬよう徐々に引けばまだマシな結果になっていたかも知れない」

俺は突き出された蛇矛を手の甲で逸し、講義の邪魔をされぬよう柄を握って動けなくする。

「こんな、う、嘘よ」

「俺は嘘が苦手らしいと何度も言っているんだが。さあ、以上の事を踏まえて速度を上げていこう」

蛇矛を放し、俺はまた距離を取る。

「ああ黄蓋、隙あらばどんどん矢を放てよ。二人がかりで良いと言ったろう？」

そう言うのと、黄蓋は唇を噛んでゆっくりと矢をつがえた。多少なりとも実力を認めてくれたわけだ。

「それじゃあどんどんやろう。孫堅様が認めた二人の腕前、存分に教えてくれ」

すると横合いから矢が飛んできた。鏃はないとはいえ、当たれば骨が折れるし、黄蓋

が本気で射れば身体を貫くぐらいできるだろう。

まあ、当たればの話。

腕を狙うように放たれた矢を見ずに掴む。

「腕前は良いが、確実に狙えるならば頭を、次点で動きを制限する下半身を狙え。それが無理なら胴体だ」

掴んだ矢をほいっと投げ返す。投げ返した黄蓋の居る場所の先に色々な武器が置かれていたスペースがあった。

「ああそういうえば、ここには武器も置いてあるんだったな」

俺は武器が置いてある場所に行き、刃が潰された蛇矛を手取る。

「一手お相手願おうかな」

嫌な奴演出は功を奏しているようで、苦虫を噛み潰したような程普は再び蛇矛を構えた。

それじゃあ今度はこちらから行こう。

中段の構えのまま一足飛びで間に飛び込み、払う。程普は二歩退くが、そこにまた突き。更に退いた所で一步踏み込み、身体を大きく捻って切り払う。捻った身体を矢がすり抜けていく。少し体勢的に無理をしたから隙を見て反撃してくるかな？と思っただが、切り払いと矢の射線から逃げるために三步後退しただけで程普は攻めて来なかつ

た。そのまま来たら石突きで鳩尾を狙おうと思つてたんだがな。

そして続く三度の攻めで程普は壁を背にして詰んでしまった。喉元に蛇矛を突きつけられれば勝負あり。

何故程普が避けるしかなかったのか。俺の攻撃速度が早い上に強要する選択肢が常に五手以上あるので、確実に避けるには後ろに退かざるを得なかったからである。

矢による援護を生かせなかったのは、俺が攻撃行動をやめなかったので当たると勝手に確信し、当たつてから行動に移そうとしていたのだろう。

とりあえず長物については切る、払う、突く、これら三元素を極め、戦いの流れを握ればこうなるという手本は見せれたと思うので、次は弓である。

俺は置いてあつた弓と矢筒を拾い、再び定位置につく。

「それじゃあ今度は弓と体術で戦うからよろしく。黄蓋も狙つていくからちやんと避けるよ」

そう言つて彼女に一射する。

意を完全に消した早業だったので、彼女が反応する間もなかった。

彼女の顔スレスレを矢が通過した時、黄蓋は矢が放たれたのだと気付いたようだった。

「今度は当てるぞ、気を抜くな」

そう声をかけた横から程普が突進してくる。後手になると敵わないと悟ったのだらう。

しばらく避けるに徹していると黄蓋と程普の息が噛み合ってきた。本来の調子を取り戻してきたようだ。

ようやくまともに攻めてきたので、選択肢の潰し方を教える。

タイミングを合わせて半歩踏み出す半歩引く、矢を取り出す動作で誘ってみる、砂煙を使う、体術を使う、矢を一本足元に滑らせる等、手札の切り方次第で事前に攻撃を誘導し潰せるのだと身を持って知ってもらおう。

最後はわざと激しく立ち回り、程普と黄蓋を気付かせぬよう一直線に並べ、矢を放つ。思った通りに程普が避けた所で黄蓋に矢が当たり、悲鳴に気を逸らした程普を転ばせて試合終了。

「乱戦になっても自分と敵味方の立ち位置はしっかり把握しよう。最後のあれ、程普なら無理せず受け流せたでしょ？」

「…はい」

俺の実力を認めてくれたのか、彼女達は大人しく返事をしてくれた。

「それじゃあ交代が来るまで続けるぞ、さっさと立ち上がれ」

「……はいー」

自棄っぱちになった二人を走り回らせ、小突き回し、転がせる。

一時間ほどを追い回すと、二人は疲労困憊満身創痕といった有り様でその場に倒れこんだ。

時間的には丁度いい。あと三十分程で次の面子との交代なので、それまでは休ませて仕事に戻らせるつもりだ。

さあ気を使って回復させよう！と思ったら、向こうから韓当、祖茂、朱治がやってきた。

早いなーと思って話を聞くと、今日の部隊は怪我人を集めたりハビリ部隊だったので早めに帰したのだと言う。

今日の仕事はもうないです、と言って気を利かせてくれた三人に感謝する。そういうことならば方針転換だ。

俺は満身創痕で倒れ伏す二人の首筋に触れ、わざと気脈に栓をする。

二人はぐっ、と苦しげな声を上げ、全身から力が抜けるのが見て取れた。

「今体内に巡る気を絞らせた。楽になりたいなら無意識で操っていた気を自覚して自力で克服するしか無いぞ」

疲れきった今だからこそ気を使いこなす最適な訓練が出来る。

健常時に気をカットしても、なんか力が出ないなーという程度の認識ぐらいしか出来ず、実は内臓や不随筋まで気の恩恵を受けているという事が意識しにくい。

ゆえに内臓まで疲れきった今こそが身体と気の関係性、気の恩恵を理解するのに最高の瞬間なのだ。

か細い吐息が恨めしげに漏れるが、死なないようちやんとマージンは取ってるから大丈夫だろう。

俺は二人を訓練場の片隅に寝そべらせておく。

それじゃあ訝しげな三人も転がすとしますかね。

「あの、この惨状は一体……」

一時間半後にやってきた残りの年少組と文官組の五人が、死体のごとく寝そべる武将を見て眉を顰めている。

「武官の誇りというものを叩き折っただけです」

孫策がいるので敬語を混ぜる。

「そうなのですか？」

あの、謙信殿。私もこれからは謙信殿の子弟となりますので、どうぞ楽に喋って下さい」

「あーそれも、そうですね、では訓練の間だけはそうさせて頂きます。うん、それじゃあ皆、これからよろしく」

「はい！」

お、皆元気いいね。先生やる気が出たよ。

「皆はまだ身体が出来上がっていないので、まずは体作りから始めようと思う。」

孫策、周瑜、太史慈、魯肅の年少組は身体を健やかに育つ為の訓練を、文官の張紘には疲労が溜まりにくく、健康を維持しやすい体作りを目指して訓練する。

はい、孫策と太史慈はえーって顔しない。今下手に筋力とかつけると発育が悪くなるぞ。

今は丹念に下地を作って、三ヶ月後を目処に訓練に耐えうる身体を作り上げる。特訓はそれからだな。

文官組の張紘と魯肅も無理のない範囲での鍛錬と護身術を学んでもらう。中央では文官の暗殺なんかも横行しているらしいからしっかりと備えておこう」

そう言つて訓練を開始する。

柔軟をしつかりとして、身体の動かし方、気の巡らし方などをゆつくりと教えていく。それを見ていた先発五人は扱いが違う！不公平だ！と微かな吐息に苦情を乗せて訴えてきた。

まあ半年後には仲間が三人増えるから許してよ。

日が暮れてきた所で一日目の特訓終了。

先発の五人は気脈の正常化が間に合わなかったので治してあげる。とはいえ塞がれていたものが広がっていく感覚が分かっただろうから、次は時間内に金縛りを解く事も出来るだろう。

そして年少組文官組を除いた五人に試練を与える。

今から得物を片時も放すべからず。寝る時もトイレの時も作業中もご飯時もずっと武器を手を持って生活をjする事を命じた。

は？という声j漏れる。

そりゃそんな事をしてれば日常生活に支障をきたす。けれど武器を手足のように扱う為jに必要な行為だ。

「俺のように武器を扱いたいだろ？」

そうニヤニヤとわざといやらしく笑って言ってみせると、彼女達は反骨心丸出しでやってやる！と氣勢を上げた。

「最初は鞆や槍袋に入れていいが、慣れたら取るからよろしく。黄蓋は弓だけじゃなく矢を三本持つ事」

と言うと、こいつ正気かよ?という目で見られた。けれどさつきやるって言ったよね?と返せばぐぬぬっとした表情で黙り込んだ。

「大丈夫大丈夫、死んでないならどんな大怪我しても俺が跡形もなく治してやるから」
そう言う事じゃないという目で見られたが、すぐに何を言っても仕方ないんだという諦観を宿した伏し目とため息に変わった。

ちゃんと効果を説明すると、物をずっと手にする事で理解できる事は思っている以上に多いのだ。

重さとリーチという分かり易い物から、自身の健康状態や武器状態が変化すれば手にした際に僅かな違いが出る事、気の通し易さが断然に違う事、鞘を取ったら怪我をしまくるだろうから武器が凶器になる瞬間を身を持って知れる、これはどうしたら凶器として最大のパフォーマンスが出せるのかを理解させるのに最適だと言い聞かせた。

納得はしてくれたが、嫌なものは嫌だから嫌な顔するのは仕方ないと言われた。うん、正論だわ。

孫策と太史慈が面白そうだからやってみたい!と言ったが、十歳前後の年少組は発展途上の骨格に悪影響が出るから絶対にはやさせない。骨格が出来上がっている大人は整体を行えば短時間で治せるからやらせるのだ。

だからやるなら十八歳になってからと厳命した。ちなみにやらせる五人は現在二十

歳前後である。

反発していた武術指導だが、数回もすれば皆とても素直に従ってくれる。

矜持を完膚なきまでに折り、今一度自分と自分の武器について見つめ直す機会を与え続け、武器を手足のように感じるよう訓練も鞘や槍袷を取る段階に至ってはや一ヶ月が経っていた。

基礎の本質を理解して根本から再び技術を身に付けさせ、無意識下でも怪我をしない武器の扱いを身につけ始めた昨今、皆が皆目覚ましい進歩を遂げていた。

半年間の体作りと基礎技術の向上の後、年長組の訓練に混じった年少組が目を剥いた程である。

孫策が「皆母様のように強くなってる」と素直に放った言葉に、皆確かな達成感と微かな寂寥感を滲ませた。

彼女達は孫策の言葉を嘯み締め、訓練に更なるやる気を漲らせていた。俺は基礎訓練は各自続けるようにと命じ、ついに応用へと入らせる。

苦手武器をひたすらぶつけて活路を如何にして見出すか、多人数での立ち回り方、氣配を殺して相手の不意を打つ奇襲戦法、逃げながらの戦い方など、様々なシチュエーションを想定した実践訓練を行う。

年少組はその実践訓練を見ながらの基礎訓練である。

当然孫策と太史慈がやりたいやりたいと駄々をこねるので、周瑜も含めて時折交じらせてやる。年長組からしたら新兵をどう扱うかや弱卒を見抜く訓練にもなるしね。

そして年少組は上手くいくと簡単に鼻を伸ばすので、そうなると俺直々にコテンパンにして鼻を押し折って差し上げる。

今は自信を折って、実戦で自身の強さがどこまでに至っているのかを理解して欲しい。

武器と体術の基礎を積み、本物の豪傑達の強さを間近に見て知っている自分達は既にそこらへんの武将よりもよほど強いのだと知り、そしてそれでもまだ上に到れるという事実を真摯に受け止めてくれたら本望だ。

こうして昼の実践訓練は確かな成果を取めたのだった。

29. 光陰矢のごとし

日暮れからの座学については語る事は多くない。一年をざっくり表してしまおう。

武術指導による反発は俺を知の人と思っていたからの事であり、元より期待されていた事を期待通りにやれば皆素直に学んでくれた。

勿論訓練初日ははぶーたれていたが、良き将は軍事を後に引かないし、良き大人は憎きからも学ぶ。

それでもぶーたれている人物には『お前達は孫策や孫権にそのような態度を見せて真似をさせたいのか?』と言うと態度を入れ替えてくれた。子供をだしに使う姑息な手段である。

その後のそれらしいハプニングはと言うと、隙をついて寝ようサボろうとする生徒を叩き、探し、叩き、時たま飴を与えて宥めすかしたぐらいか。

内容については張昭が学んだような医農工商を満遍なくという形態は取らず、より実用的な物だけをチョイスして教え込んだ。

算術、戦闘戦術戦略論、要所だけの君主論、敵味方問わない人心掌握術、自己診断と応急処置の方法、謀略策略の仕掛け方守り方、嘘のつき方見抜き方、休息の効率的な取

り方、調理の基礎、薬草の見つけ方など、これから必要になりそうな事をとにかく詰め込んだ。

こういう生活と軍事に絶対役立つ知識は皆貪欲に吸収してくれたのだが、数字が関わると途端に効率が悪くなる。戦闘に関するものならまだ学ぶ意欲を見せるのだが、政務に関わるようなものはもう駄目。

何とか皆を政務がそれなりにこなせるレベルまで持つて行けた。

もつともつと勉強を！とせがんでくれた子もいたのだが、今回は全体の向上を目的にしていたので長所を育てる時間には足りず、彼女達の要望に応える事は出来なかった。

フオローとして教えを請うてきてくれた良い子には、本と試作お菓子を時折プレゼントした。

孫家の幼子二人、孫権と孫尚香は順調に良い子に育つてます。

孫権は鍛錬するには早過ぎるので、フラッシュ暗算などで記憶力強化、対洗脳情操教育で人格の育成も完璧、囚われていても出来る簡単な効果的な運動と柔軟、人の考えの透かし方、休息の取り方、不安の克服方法等、教育の方面で出来る限りを行った。

こうして瞬く間に一年は過ぎていき、最後の期日がやってきた。

文官組である魯肅と張紘ですら武將を倒せぬまでも防御と逃げに徹せば時間を稼げ

るレベルにまで持つて行けた。運動神経はからきしだった、気の運用と読みを主軸に鍛えれば何とかなるものである。

知の方面でも面倒臭がらなければ皆それなりの政務をこなせるレベルに達し、適性のある子はそのまま国の中枢に放り込んで結果を出せるレベルに仕上げた。

たまにいつもの学習ルーチンと勘違いしてぐだぐだする場面もあったが、最終的には十人の強者を育て上げた。ほっと一息である。

そして別れの時、皆はそれぞれに贈り物を渡し合い、今までの全てを忘れぬようにと固く誓いを立て、抱きしめ合っていた。

何処かしらから、ようやく地獄から解放されると咽び泣く声が聞こえてきたが恐らく気のせいだろう。声がした方へ行ってみたが涙ながらに感謝されたし。

俺は贈り物として手作りの和紙に皆を描いた物を人数分用意していた。紙なら折りたためるし、肌身離さず持つていられる。別れの写真は現代でも鉄板の贈り物だしな。皆は手渡された絵の緻密さと、なによりその紙の上質さに驚いていた。

紙は国の専売で和紙を手作りしたとバレると何気にやばいのだが、最近紙の質が著しく落ちてから高品質で長期保存可能な物は自力で用意する他なかったのだ。

まあ、バレなきや問題ない。

名残惜しいが、お別れの時間はやってくる。

豪華絢爛な馬車が到着し、やたら偉そうな人間が一人降りて来た。

袁家の誰々であるうんたらかんたらと従者に長い説明をさせていたが、一同聞いてない。

一応表向き盛大な歓迎を行ったが早々に切り上げさせる。お疲れでしょう、さきつ、館へ！と太守の館へ押し込んだ。

一瞬白けた空気が流れたが、袁家の馬車前までさきつと移動して別れの続きである。

太守を乗せてきた馬車はそのまま孫権と張昭を連れて行く馬車となる。

袁家も乗る馬車に二人を乗せる事で体面上対等であると示し、各位の反発を防ごうという目論見なのだと言張昭は言う。

ずっと疑問だったのだ。『張昭は何故全ては袁隗の陰謀！的な方向へと持つていくんだ？』と聞いてみると、私ならそうするからと簡潔に答えられた。なるほど、同族嫌悪だったらしい。

そして孫権と張昭は涙を流しながら馬車へ乗り込む。

孫策が二人に『自分らしさを決して失わないで、孫権は張昭を良く頼るように、張昭は身体を労るように』と言葉をかける。それに何度も頷く二人。

そうして馬車は程なくして動き出した。

別れは続く。

長沙太守は寄越された馬車に乗ってきたあの偉そうな奴が引き継ぐ事になっている。もはや長沙に孫策と他の面子の居場所はなく、すぐさま袁家勢力下である江夏近辺まで向かうようにとの旨が伝えられた。

南への抑え、長江の守護役、何かあれば中央にも届くベストポジションに置かれた訳だ。

俺は皆が荷の確認と馬への荷積みを行っている最中、彼女らに何度も言い聞かせてきたアドバイスを口酸っぱく繰り返す。

「袁家の者と会う時は心が折れたように従順に振る舞え、落ち目の孫家に付き従ってくれた古参の兵を大事にしろよ」

彼女達はうんざりしたように、

「はいはい、覚悟もしてますし、彼らはもはや私達の家族ですし大丈夫」と返してきた。

「正直お前らは我が強すぎてすぐに地が出そうで怖いんだよ、愛想つかされるなよ」「そういう風に自己を確立させたのは先生ですし、それでどこかに行く兵には見限ってもらって結構」

と強気に返され、俺はもういいと口を閉ざさるを得なかった。

何だかあしらわれてしまった俺は皆から離れ、他に言い忘れ、渡し忘れがないかを考えていた。一度子供達と張昭相手にやらかしているので慎重を期さないと。

頭を捻っているところへ孫策と周瑜がやってきた。

「ん、どうした？忘れ物か？」

「忘れ物と言えば忘れ物かなー」

気心知れた口調で、悪戯げな表情で近寄ってくる孫策。いつぞやのおしとやかな子猫はいなくなつて久しい。

「忘れ物というよりも忘れないための物なのですが」

孫策の影に隠れるようにしていつもおどおどしながら俺と対面していた周瑜ちゃんは何処かに消え、冷静沈着で物怖じしない敏腕秘書みたいな仕上がりになつた齡十三歳の周瑜さんがそう続けた。

人格的に完成した二人を見てみると、遠い昔に何処かで見たような感覚に襲われる。破天荒な主人と生真面目で主人を支える忠臣。遠い遠い記憶にこんなやり取りを見ているような……。

「もう、先生つてばー！」

孫策の声に我に返る。どうやら少し振り返りすぎたらしい。

「また遠い目してましたね」

「すまん、それで何を話してたっけ？」

「先生も一緒に来れないのが残念って話だったんだけど」

「袁隗のお膝元だと見つかる可能性が高くなる。危険だからやめてくれと張昭に釘を差されてるし、仕方ないさ」

「はい、それは仕方ないと諦めています。が、それは話のまくらで、本題は別にあります」
「ほう？」

「ちよつとお願いがあつてね、真名の交換をしておきたいな―つて」

「おいおい、それは皆がもう一度一堂に会する時にしようつて決めただろ」

辛く厳しい訓練の果て、何かご褒美が欲しいと言われた俺は各人の武器を調整した。本当なら自ずから鍛造した物を渡してあげたかったのだが、時間がなかった。

まあ元々良い物だったから彼女達の成長に合わせるだけで十二分に名剣名槍の活躍をすると思う。応急処置で済ませていた南海霸王もしっかりと拵えた。

文官組の二人には材料を厳選した手作りの筆とクッションを贈った。

あー全員プレゼントしたわーと思つていたが、張昭と孫権と孫尚香の物をすっかり忘れていた。相手をする事が皆よりも少なかったとはいえ、大失態である。

孫権と孫尚香は欲しい物がはつきりしていたので、孫権には向こうで暇にならぬよう

各種遊び道具とその説明書、孫尚香には大好きな動物達の絵と説明を載せた図鑑を別れの期日直前に仕上げてプレゼントした。ずっとむくれていた二人の笑顔が見れてほっとしている。

しかし張昭の欲しい物だけは皆目見当がつかなかったので、俺は直球で欲しい物はあるか？と聞いたのだ。

すると彼女は真名が欲しいと言ってきた。

それを聞いた一同は、あつ、それ忘れてた、と言う感じの顔をしていたのが印象的。先生つて一度呼び始めると惰性で呼び続けちゃうよね。

俺としては真名を教えるのに何の躊躇いもないので張昭だけに耳打ちをして教えた。

彼女の雷火という真名も預かり、二人きりの時は真名で呼び合いましたよねと言われるので素直に頷いたりもした。

その様子に釣られてか、皆が真名を交換したいと言いだした。

けどそれで教えてしまうと張昭のプレゼントが色褪せてしまうので、今度皆が集まったら教えると約束をしたのだった。俺としてはこんな些細な約束でも少しは未来の糧になるかなあという思いもあった。

と、そんな顛末があつたので真名の交換は控えていたのだが……

「ふふふつ、今の私には切り札があるのだ！先生が知りたがつてた南海霸王の来歴が昨

日分かったの!」

「二人で頑張つて書庫や家の伝を辿つて調べたんですよ。この竹簡にまとめてあります」

そう言つて二人はじゃーんと言つてそれを差し出してきた。

「俺が気にしてたの覚えていてくれて嬉しいとか、わざわざ調べてくれてありがとうとか言いたいんだけど、交換条件にされちゃうと有り難みが半減する……」

「私も本当なら今までのお礼ですと素直に渡したいんですけどね」

「先生が感謝で物を貰うな贈るな、ただより怖いものはないんだぞつて教えてくれたんじゃないん!」

「巡り巡つて俺が悪いのか?」

かなり嬉しい筈なのだが、微妙に複雑な感情が混ざつてきて自然とため息を吐いてしまった。

ともかく彼女達の好意を拒否するという選択肢はないので竹簡を受け取る。

「俺の真名は白だ」

「私は雪蓮よ!」

「私は冥琳です」

なんとも言えない表情の俺と、してやったり感を滲ませた満面の笑みを浮かべる雪蓮

と冥琳。

「折角預けた真名だ、無事に再会した折には呼んでやってくれ」

「わかったわ、白」

「白さんも再会の日までご無事で」

「おう、それじゃあな。雪蓮、冥琳」

そう言つて脱力気味の俺は、準備が終つている他の面子へ二人の教育について釘を差しておこうと足を向けたのだが、腕を掴まれ止められた。

なんだ？と振り返ると両頬に柔らかい感触がやってきた。

ぱつと離れる二人の小悪魔。

「感謝には物ではなく礼と行為で返せ、だったよね」

「ですので礼と行為を今ここに」

「ありがとうございます」

綺麗に不意打ちを決められてしまった。

彼女達はそのまま自分の馬まで走って行ってしまふ。

俺はそれを呆然と見送るしか出来なかつた。

純粹な好意を嬉しくも思うし、いつかと同じような不意打ちをしてやられ、自身が四

百年前から成長できていないようだと情けなくもなる。

「まさか道具と言葉を使って感情を揺さぶって隙を作り出すとは……。」

周瑜、歴史に違わぬ恐ろしき名軍師よ……。」

と雰囲気を作っていたら、ぱからぱからと複数の馬が近寄ってくる音が。

「のう先生殿、仲睦まじきをこの別れの場で見せつけてくれた意図、是非とも我らにご教授願いたいのがやが？」

「そうよねえ、まだまだ未熟なあの娘達の策略にまんまと嵌められる先生ではないものねえ」

「わざとか?!なら罪だぜっ!ウチの姫様達に何唾つけてくれてんだい、ああん!」

祖茂…お前マジで柄悪いって怖いって。

あーくそ、皆がいるからと気を抜いていた俺が全面的に悪いんだが、恨むぞ冥琳!

その後誤解を解くのに暫しの時間を要し、結局皆と真名を交換する羽目になった。すまん雷火、短い蜜月だった。

しかしなんだかんだと騒がしく、最後まで涙のお別れとはいかないのがなんともこの面子らしい。

俺はまた一人になる寂しさを抱えながら、皆の姿が見えなくなるまでその場に留まり、彼女達を見送ったのだった。

さて、と一言発して切り替える。

俺は俺で旅に出なきやならん。

今度は後の呉国となる場所を回って彼女達の戦力増強に奔走しようと思っている。

袁家縁の者がいる長沙に長居は無用とさつさと抜け出す。

そして晴れ渡る空の下、南に進路を取る。

歩きながら雪蓮と冥琳から渡された竹簡を読む。

中には南海霸王がどういった経緯で孫家に渡ったのか、またその名前の由来などが細かく記されていた。

そしてその経緯の始まりの部分にあった名前を見て俺は満足した。

建国の元勳であり救国の徒である彼の剣と魂は、今もなお折れず曲がらずしっかりと受け継がれているようである。

30. 強者の憂鬱

先生との別れからもう八年が経っていた。

あれから私達は転戦しながら袁家に尽くすという不毛な年月を過ごしていた。

何も成果が無かったわけではない。

行動するからには何かにつけて利益を見出せ。利益は美味しい所だけを頂くのではなく、まずい所も少し得て両得とするなら敵も作らず万事上手くいく。

そう先生から教わった事を実践し、得た物自体はかなり多い。

とはいえ最初は何も出来なかったに等しい。

大々的に動くには権限もなく看板もない。しかし監視の目だけはあったので、準備だけを入念にしていた。

表向きは袁家の温情に感謝し、滅私奉公を体現してひたすら時を待った。

すると四年五年と経つ毎に監視の目が減っていった。

袁隗が袁紹という娘に目をかけ始め、彼女に様々な物を与えた結果、こちらに対する意識が徐々に薄れていったと張昭から聞いた。

袁家のお家事情と監視の目がどうなったのかを慎重に幾度も調査し、私達と同様に監

視が緩められた張昭から行け！という合図が来たらもう止まらない。

袁家から貸し出された兵で不満を抱いている者や優秀な者を少しずつ寝返らせたり、盗賊江賊討伐に赴いた各地で独立した際の流通経路の確保を行ったり、義賊を選別して寝返らせたり支援したり、各地で転戦した時には負傷兵を治療するついでに民も治療して功名を目立たぬよう上げたり、表で出来ない事をやりたい放題してやった。

結果、袁家に隠している兵力は母様が率いていた時よりも増え、袁家の首輪が無ければすぐさま豪商になれる程の人脈及び食料調達経路を獲得し、武漢近辺の長江は支配下に置いたと言っても良い。

……こうして見ると得た物が半端無く多い。もし袁家の枷がなければ今頃袁家と肩を並べていたり？

まあ、さすがにそれはないか。袁家の隆盛に陰りはなく、私達の全てが未だ遠く及ばない領域にかの家はある。

袁隗と袁逢が存命している時点では太刀打ち出来ないと言っており、彼女達の不遇と娘達の不出来が重ならない限り勝負には出れない。

仲間は最上の結果を得た八年と言っている。確かにやれる限界の事をやってきたという自負はある。

だが一点、不満極まる、憤懣極まる事があつた。

戦士として孫家頭領としては非常に充実していた、だが乙女としてこの八年は不毛に過ぎた！

先生はあれから一度も会いに来てくれず、連絡を寄越してもくれなかつた。

それがなによりも辛かつた。

よく分からん奴にへーこら頭を下げるより、五日間昼夜問わず戦い続けた時より、一ヶ月ほぼ馬上にいた日々より、余程堪えた。

会いに来れない事情は十分に理解してはいるが、それでも辛いものは辛いし会いたいのには会いたい。

しかもだ、完全に音信不通ならば思いを募らせるだけで済むのだが、一方通行ではあるが連絡を寄越せる状況に彼がいる事に思い煩つてしまう要因が生まれていた。

彼は張昭や私達の時と同じように私塾を開いて回っているらしい。しかも私達の利になるよう動いてくれているようだ。私が知る中で先生が一勢力に加担するの初めての事、とは張昭談。

うん、嬉しい。

最近やつてきた呂蒙や陸遜などは彼の教えを三年もかけて学んだ子達で、周瑜や魯肃が手放しで褒める優秀さだ。

とても嬉しい。

義賊として活動していた甘寧、蔣欽、周泰が劉表軍に進退窮まる所まで追い詰められていた際、劉表軍の嫌がらせも兼ねて密かに助け出した事があった。

しかし助けたはいいが、その強さと優秀さゆえに目立ち、多くの人間に顔が割れていた彼女達を匿うのは現状厳しい。

どうしようと悩むが、監視の目がまだ幾つか残っていた当時は打つ手がなく、とりあえず先生がいそうな場所に勤で送り込むという暴挙、もとい賭けに出た。

結果なんとか合流できたようで、監視の目が緩んだ頃合いを見計らって送り返されてきた彼女達は驚く程の成長を遂げていた。

色々な意味ですごく嬉しい……のだが！どこかの折で便りの一つぐらい持たせてもいいんじゃないの?!

見つかる可能性を鑑みてやめとこう、便りがないのが無事の証だ。とても思ってたんでしようけどね！こっちは先生からの簡潔極まる紹介状を読む度に落胆してたんだから！

「雪蓮、おい雪蓮、聞いているのか?」

「あら周瑜、何かあった?」

「何かって……戦いの最中なのにぼーっとしてる間抜けがいたから声をかけたのよ」

「こんなの戦いとも言えないでしょ」

「まあ弱い者いじめの類ではあるがな。だが戦場では何かがあるか分からん、油断するな」

私達は今現在、袁家の依頼で江賊の討伐に派遣されている。

略奪殺し何でもあり、近くの商人と繋がりを持っていて人を攫って奴隷に落とすような鬼畜ばかりだ。

商人との繋がりを吐かせた後、見せしめの為に念入りに惨たらしく殺している最中であったりする。

「正しい諫言ね、けどもうすぐ終わりだもの。気を抜いても構わないわ」

「また勘か？」

「これは勘じゃないわ、一番マシだった闘気が消えたのを感じただけ。」

それに油断というなら貴女もよ、私の事真名で呼んだでしょ」

「ぐっ、ぼけっとしていた癖に良く気付く」

仲間内での約束である。皆がもう一度一堂に会するまでは真名を自粛し、外では字も呼ばないようにしていた。

先取りしてしまった先生との約束を仕切り直し、臥薪嘗胆の気持ち忘れぬ為に、先生に真名を呼んでもらうまでは戒めようと皆で決めたのだ。

「あー先生に会いたいなーあ！」

「死体を量産しながら言う台詞か、相当に溜まつてるみたいね」

「戦いで欲求不満を解消するはずが、逆に不満になるう」

「本当にお前は……黄蓋殿や程普殿と肩を並べる力量を身に付けたのに、精神はまだまだお子様だな」

「仕方ないじゃない！まだ初恋も終わらせてないのに大人になんてなれないわよ！」

「意味が分からん」

「私にも訳わかんないわよ、分かるのは先生に惚れ抜くのは仕方ないって事だけ」

「……まあ、それは仕方ないのはよく分かるが」

先生と初めて会った時から、私の胸はずっと踊っていた。

というとし語弊があるか、対面したばかりの時はすごい美人さんだなーと思つたぐらいだったし。

実際は張昭の言っていた事が本当なのかどうかに気を取られていたなあ。

帰還の準備を済ませつつ、私は少し回想に耽る事にした。

確か始まりは息を切らした張昭が私の部屋に飛び込んできてこう言つたんだ、自分の恩師が南海霸王を届けてくれた、至急恩師に会って欲しい。と。

その時の私は身近に大事な人と大事な物が無いという現実を受け入れる事が出来ていなかった。

夢見心地で地に足がついていない自覚はあったので、全てを他人に委ね、私は人形のような日々を過ごしていた。

心の中は空虚で何をするにも気力が湧かず、頭の中では何故生きているのかを問い続ける、そんな廃人同然の私だったが、張昭の言葉を聞いた瞬間に心と頭の中が絶望に染まった。

言い知れぬ感情が胸に渦巻き、襄陽での戦いの記憶が脳内を埋め尽くした。

だが絶望による衝撃で私は生き返る事が出来た。

もし張昭の言葉が嘘であったなら死のうと本気で考える死に行く生者ではあったが、感情は微かに息を吹き返した。

絶望に染まり、恐れる物はもう何もないと変に冷静になった私は、行き先も告げずに走り去ろうとしていた張昭に乾いた声で、分かった、確か会議室が空いてたからそこを使おうと言った。

そ、そうですね、忘れておりました、手配しておきます。と焦った風に返す張昭。

張昭相手にこんなやり取りが出来たのは私の今までの人生でこの時だけ。そして恐らく今後起こり得ない珍事だと思う。

会議室には落ち目の孫家に義理と忠義で残ってくれた忠臣達が揃い踏み、先生を迎える準備を行っていた。

張昭は顔見せ、歓迎の為の準備と単純に思っていたようだが、半数以上は始末の為に準備をしていた。

この時の私達は張昭の恩師という人物を一切信用していなかったからだ。だつてそうだろう。

襄陽にも私達の息のかかった者は少なからずいた。

だから彼らが黄祖軍の目を盗んで母の遺品を持つてくるといふなら分かる。

けれどもたまたま行きがかった張昭の恩師が、孫家の象徴と名高い南海霸王を黄祖軍の目を盗んで持つてくるというのはどう考えても都合が良すぎる。

こちらの手の者からまだ情報が届いていない事も不信感が増す一因になっていた。

張昭は一勢力に加担する人ではないし権力にも興味が無い人だから大丈夫と言っているが、その人について何も知らない私達は劉表の手の者である可能性は高いと考えて強く警戒していた。

張昭の恩師といえど、不純な動機があるのなら即座に切り捨てる。ゆえに音が漏れず、戸に鍵がついている作戦会議室を相対の場を選んだのだから。

準備を終え、程普を迎えに行かせる。

しばらくして戸が叩かれ、二人が入ってきた。

この時私は先ほど言った通り、凄まじい美人が入ってきたなと思っただけだった。

だがその手に持っている剣を見て、胸が震えた。

私は絶望を突き破ろうとしている感情をどうにか宥め、まずは非礼を詫びて下手に出る。

本物だった場合の保険と敵だった場合の出方を窺う為の挨拶だったのだが、先生はとも誠実そうな対応をしてきて何も探れなかった。

その後先生は早速と言わんばかりにポロポロの剣を差し出してきた。

刀身を見ずとも、鞘も柄も辛うじて原型が残っているという具合だったとしても、赤子の頃から見上げ続けた母の剣をこの距離で見間違えう筈がない。

南海霸王を見た瞬間に、母が私を庇って岩に潰された時の絶望感を、周瑜と二人で巨岩を押しした時の無力感を、私に孫家を任せると言われた時の重圧を突き破って感情が蘇ったのを感じた。

二ヶ月煮詰めた絶望が、たった一振りの希望によって払われた。

だが、だからこそすぐさま剣を手を取れなかった。

私が殺したに等しい母様の剣を手にとって良いのか、孫家頭領として務まってもいない私が孫家の宝剣を継いで良いのか、あの剣は外もボロボロだが中はもつと酷いだろう、私が触った瞬間に雲散霧消してしまうのでは。その他諸々の不安が躊躇いを生んでいた。

これでは感情が蘇ったのが良いことなのかも分からなくなる。

そんな私を見かねたのか、先生は母の最期のやり取りを話してくれた。

伝えてくれた言葉も行動もあまりに母様らしくて、私達はここにきてようやく先生が本物であると認める事が出来た。

先生は母とのやり取りを話し終え、貴女の魂は折れているか？と問うてきた。

母の言葉を聞いて、その問いに応えられぬ筈がない。

母は私『達』の魂は折れないと言った、それはどれほどの苦境にあらうと私の魂も折れていないと信じたからだ。私に剣を託したということは、頭領が私に務まると信じたからだ。誰よりも南海霸王を知っている母が剣は折れていないと言い切ったのだ。

ならば何の不安があるというのか。

私は南海霸王を受け取り、抜き放つ。

刀身が鞘を滑る感覚に魂が震え、掲げた白刃が煌めくのを見た時、私は自身が孫家の頭領として生まれ変わったのを感じた。

もし孫家の手の者が後日回収した宝剣だったのなら、私は不安の中で剣を手に取り、これでいいのかという疑問を抱いたまま戦場に出て、若くして死んでしまっていたらう。

血風残る戦場を患者はいないかーと徘徊するような先生が持つてきてくれたからこそ良かったのだ。

先生の来訪で生き返り、先生の言葉で生まれ変わった、これだけでも十二分に惚れる要素だと言える。

だけどその後の生活もまた素晴らしかった。

先生の訓練はとても私達の性に合っていて、とても刺激的でひたすら楽しかった。

命の危険性のない訓練ではあったが、今やっている命の取り合いが兎に感ずる程の密度があった。

母様の代から仕えていた宿将五人と先生の戦闘は今でも脳裏に焼き付いている、あれは攻める側守る側、少数側多数側における戦い方の理想を私に教えてくれた。

私達年少組も交ざっての戦闘では強者との戦い方と身の程という現実を教えてくれた。

その甲斐あって私は未だ本当の命の危険というものに遭った事がない。周囲から見れば危なっかしい場面は幾度かあったらしいが、これ以上は危ないと思つた死線は決して超えなかつたし、事実思い通りにならない戦鬪は無かつた。

油断どうのと周瑜には諭されるが、決して踏み入れぬ基準をしつかり設けているのだから、油断ではないと思うんだけどなあ。

更に更に、苦手な座学ですら楽しくさせてくれたのだから、先生は本当に偉大だ。

学ぶ楽しさをまず教えてくれて、私達の出来る事をそれぞれ教えてくれて、短所すら長所に変えてくれた。

先生の教えがなければ、張紘と共に内政の多くを担っていた張昭が抜けた穴を補えず、袁家からの支援という名の重荷と監視を払うことが出来なかつただろう。そうなつていれば現在行っている飛躍の前準備は遅れ、規模ももつと小さなものになつていた。

また戦術戦略論が無ければもつと多くの仲間が脱落していた、人心掌握術がなければ取り込みは成功しなかつた、嘘と時機を見抜けなければ袁家の食い物にされていた。

先生の教えの何もかもが必要不可欠なものだったと私は確信している。

私は武から、そして周瑜は文から深い薫陶を得ている訳だ。

だからまあ後に仕えると信じていた主君であり、親友の母を目の前で亡くした周瑜も

私と似たような感情の経緯を辿っている訳で、同じように触れられた先生に惹かれるのは仕方ないのだ。

江賊を狩り終えた私達が武漢の屋敷まで戻ると、そこにはなんと張昭が待っていた。

「お帰りなさいませ孫策様。念願が一步近づいた事、知らせに来ましたぞ」

「知らせ？つて今はいいや！ああもう！懐かしいなー！今日は宴確定っ！」

互いに喜びを一通り表し合った私達は、互いに旅と戦いの汚れと疲れを取った後に張昭の歓迎会を開いた。

念願に近づいたという言葉は気になるが、それ以上に八年ぶりに会う戦友との邂逅祝いの方が圧倒的に優先度は高かった。

その日は朝まで飲めや歌えやの大宴会に発展し……翌日は皆酔いつぶれて何も聞けず仕舞いだった。

先生が見たら、お前らしいよ、と笑いながら言うのかな。

張昭の到着から二日後、皆が一堂に会する。だがまだここには先生と孫権が足りていない、真名を呼び合うのはまだ先になるなあ。

張昭の話聞いたが、今年は彼女にとって激動の一年だったようだ。

まず袁隗が何らかの理由で中央にかかりきりになる事が決定した。中央と関わりを

持つ張昭を連れて行くのは危険と判断した袁隗は、彼女を傍から離れさせた。

だが放置するにはまずい有能さが張昭にはあるので、実権を持たぬ幼子である袁術の教師役としてつかせる事にした。

武の駒である私は中央に持つていけないので袁紹に委譲される予定だったのだが、張昭が袁術を唆して私をねだらせた。袁紹はどこぞの落ちぶれた地方豪族が手に入るか否かなど瑣末な問題だと、いとも容易く袁術に私と部隊をそのまま移譲した。

袁隗に事が知れた時は盛大な舌打ちをしただろうが、袁隗が中央を離れるわけにはいかず、納得したやり取りを破棄させるのは同族であつても不和を招く。いや、現状自分達に比類する者は少なく、同族間での友好関係こそを重要視しなければいけない。

そういった様々な要素が絡み、尚且つ八年の忠誠などを鑑みて、ついに張昭と私達が合流する許可が下りたのだった。

孫権だけは合流させてはいけないと厳命されたようだが、ちよつと蜂蜜を垂らせば一年二年で籠絡できそうだと張昭は言う。

張昭が凄腕というのもあるのだろうが、これほど容易く手のひらの上で踊らされる袁術という奴はどれだけアレなのだろうか？少し気になる所である。

ともかく、今の話がここ一年の動向だそうだ。

ああ苦節八年、ようやく後少しで愛しの妹と会える所まで来た。

そして妹と合流できれば枷の拘束力は大いに削がれる。

ならばもう三年もあれば先生に逢い、皆を真名で呼び合う事が出来る！

……駄目だ、待ち遠しくて待ち遠しくて身体のうずうずが止まらない！

「周瑜！見せしめ系盗賊退治に今すぐ向かうわよ！」

「喜びを物騒な行為で表すなこの脳筋め！」

私と周瑜の昔と同じようなやり取りに皆が笑う。

うん、大丈夫、これは絶対に皆無事で揃う。

そんな樂觀が確信できる、とても暖かな空気がそこにはあった。

31. 潮流に乗る者達

張昭と合流して一年、袁術について掴み始め、さあこれからどう調教してやろうと思つていた矢先、何やら大層な噂話が広がつたと思つたら、黄巾賊という輩が跋扈し始めた。

ここ数年唐突な出来事ばかりが起こる。

「ねえ周瑜、これって意図的な物？」

「確証はないが、だろうと思う。国が末期に近づきつつあつたのは間違いないが、終焉までの流れが早くなり過ぎてているし、終わりの過程が整い過ぎている。何者かの意志が介在していると考えるのが妥当だろう」

「そうよねえ、ここ四五年で国の寿命は縮み過ぎだし、国の惨状が民に知れ渡る時期に天の御遣いの予言が広がつて、黄巾賊が唐突に台頭して各地を跋扈し、これ幸いと群雄は武力を持ちはじめた反乱の芽がいつ芽吹くとも知れない。無駄のない崩壊の流れは最早美しいとすら言えるわよね。」

「じゃあさ、この作られた流れに乗るべきだと思う？」

「乗らざるを得ない、と言うべきだな。誰の奸計かはわからんが、緻密に作られた流れは

もはや誰にも止められん。中央の力も弱まり、民の人氣が取れるこの状況は群雄にしてみればただの好機だ、目敏い者なら迷わず流れに乗る。そして乗り遅れば大波に呑まれる」

「むしろ乗り遅れないように気をつけなきやいけない、と。けど私達は首輪付きなのよねえ」

「首輪は後ろ盾とも言える、万が一時流を読み違えた時に灰を被つてもらえるのだと前向きに考えよう。」

それに功名の大半は袁家に取られても、その名前と物資をある程度融通して貰える上、実際に行動して実利を得るのは私達と良い面も多い」

「考え方も行動もこれまでとあまり変わらないわけね」

「そうだな、獲物がありふれた盗賊から国賊認定された贄になっただけだ」

「そう、ならいつもより豪勢な狩りに出かけましょうか。ついでに潮流に引き寄せられた輩を見に行きますか」

「私としてはそちらが本命だな。この時流に乗って羽撃く者こそが戦乱の最後に立つ者達だと私は考える。見極めなければならんだろう」

「この大舞台に上がらない者なんて歯牙にかける価値も無いしね。ふふつ、早く飛翔する群雄達が見たいわ！ 彼ら彼女らの翼は私達よりも高く飛べるのかしら？」

「財力、人材、領土、歴史、全ての要素を兼ね揃えている大翼を持つ者は多い。だが十年も前から飛翔のための用意していた私達には他にない勢いがある。大翼だからこそ初速に劣る彼らを置き去りにすれば、私達の勝ちだ」

「勝算は？」

「この戦いでは間違いなく良き成果をもぎ取れる。借り物とはいえ看板あり、隠し戦力として水軍あり、鍛え上げた精鋭あり、袁隗と張昭殿の伝で中央への足掛かりあり、敵の現れた位置も南陽近郊と悪くなく、作り上げた情報網もしっかり機能している。穴は無いとはつきり言おう」

「なら狩りに行きましょうと言った言葉を言い換えようかしら。」

周瑜、勝ち取りに行くわよ」

「ああ、勝つて全てを得に行こう」

その後、私達は袁術から汝南周辺の賊を打ち払え、といういつもの命を受けた。

始めはまとまりもなかった盗賊共だったのだが、黄色い布を身に付ける輩が始めてからは多少の歯応えがある敵となった。

そして袁術に黄巾賊がついに現れたぞと伝え、不安と期待を煽りに煽る。

袁隗から継いだ領地に国賊が現れた、国や貴族を批判する旨を堂々と発表している、

このままでは袁隗の怒りを買ってしまふぞ。と大げさに怖がらせる。

けれども国賊認定された黄巾賊を誅すればお褒めの言葉どころか感謝の品々が届く筈。と飴を与えれば、袁術は黄巾賊討伐に最大限の援助をすると確約をくれた。

これで孫権との合流も果たせる。先生は……どこにいるのか分からないから合流はまだ先になりそう。

ともかくここで名を挙げて、母と先生には安心してもらいたい。

私達は周瑜の進言もあり、戦功を立てるより情報を収集する事に重きを置いて行動した。

拙速をもって各地を回り、気になる陣営がいる所に馳せ参じては戦闘支援と物資の交換などを行って陣営の柄や能力を計る日々。

勿論賊は苛烈に攻め立て、民には癒しと糧食の施しを行い、私達と袁術の功を積み重ねる事は忘れていない。

そうして名と顔を売る日々が半年程続いた頃、黄巾賊首領討伐の大舞台へ至る事が出来た。

「周瑜、黄蓋、……まで来てどうだった？」

「順調の一言だな。武力も十二分に示したし、民にも軍にも糧食を提供して徳も示した、

そして第二の目的である情報収集と仮想敵の具体化も出来た」

「そうじゃの、完璧という言葉が相応しかろう。じゃが、つまらんかったな」

「つまらないのは策が上手くいった証です、甘受して頂きたい」

「ねえねえ、このまま敵大将の首も取っちゃおう？」

「ここまで大勢が決してしまえば危険も少ない、お前の武威があれば首も取れるかもしれないが……いや、やめておこう。現段階で妬み嫉みに至るのはまずいし、力を出しすぎて目をつけられるのも面白くない。それにここまで来たら、味方が敵になる可能性も否定出来ない」

「そお？ 周瑜がそこまで言うならやめとこうかな。けど目をつけられないように、とというのは少し遅いかも」

「なに？ 目がありそうな場面では抑えていた筈だが……」

「抑えていると感じ取れる傑物が居たというだけよ。あのおチビちゃん、曹操といったかしら？」

「ふむ、あれほどの人物なら裏を感じ取るぐらい出来てしまうじやろうな」

「曹操の所は、将、兵、どれも極限まで鍛えられていたし規律も厳しく守っているようだったわ。曹操自身の覇気も才もとても輝いて見えたし、あれは間違いなく強大な敵になるわね」

「お前が出会った直後に手放してそこまで褒めるからと陳留方面の細作を増員してみたが……なしのつぶてだったよ。」

強力な諜報対策、こちらの力量を看破する能力、才ある主君、付き従う強兵、間違いなく最後まで生き残るな。出来れば事前に情報収集したかったな」

「周泰を送ればどうにかなるかもね。まあ危険の方が大きいからやらせないけど」

「確かに現時点での優先順位を考えると周泰の命とは全く釣り合いが取れん。防諜対策すら完璧だと知れただけでも十分か」

「儂もそう思う、周泰は得難い存在じゃ。と、ゆつくりと空気が変わり始めたな。周瑜よ、此度の戦いはどうするんじや？」

「そうですね、前に出ないならば上の覚えが目出度くなるよう露払いにでも専念しましょう。国は死に体ですが、今回の件を褒賞なしとは行きません。上に媚を売って最後の国財を頂戴するのがここでは賢明でしょう」

「露払いだけなら危険も少ない訳だし、孫権の大将初陣の場にしちゃう？」

「ふむ、確かに良い機会かもしれない……けれど策殿、大将の任が無いからといって無茶はしないと約束して貰えるか？」

「ぐつ、見破られてる……」

「大将首を諦めろと言った時にあっさりと了承した時点で私も黄蓋殿も裏があると察し

たよ」

「ぐぬぬ、まあいいわ。大事な妹の初陣にけちを付けたくないもの、ちゃんと見守ってるわよ」

「策殿が近くにいれば権殿も安心するじやろうし、そうしてくれると助かるんじゃないか……本当に頼んでよいのかの？」

「信用ないなあ、そこまで言われたらさすがにちゃんとお仕事しますう」

「そうふて腐るな。国の威信を貶めたこの戦いは前段階に過ぎない、次に本命たる国崩しの一打が来るに違いない。そうすればこれよりもっと大きな戦場が待ち受けているさ。お前の真なる出番はそこからだよ」

「周瑜がそう言うならそうなるのじやろうな、しかし、そこまで読んでる輩が今どれだけいるものなのやら」

「国が終わる流れにあると知る者は多いですが、それが意図的な物だと気付いている者は少ないでしょう。曹操陣営と天の御遣い陣営ぐらいでは無いかと」

「ああ、天の御遣い君ねえ、彼個人は可愛い優男としか感じなかつたなあ。でもこつちを少なからず気にしていたのはちよつと引つかかるのよね。」

「あつ、でも彼個人は評価しにくいけど、周りは皆が皆ぐつと来るものを持つてたわね」
「脇を固める人材は誰もが確かな天賦を持ち合わせている、と周泰から報告が上がつて

おる。人材集めも天の御遣いという言葉をうまく利用しているのだから、儂はそういう意味でも十分評価と警戒に値すると思うぞ。しかも策殿が気にかける人物が多いというのなら、あやつらもまた一廉の勢力となるのは間違いないだろうな」

「十分あり得るわ。遠目から観察しただけなんだけど、あの子達からも曹操の時のような沸き立つ物を感じたのよね。曹操陣営のような際立つ個から生まれる連携ではなく、群となった時に本領以上を発揮するような集団の怖さを感じたわ。って改めて比べてみると、曹操陣営と御遣い陣営は真逆の印象になるわね」

「そうじゃの、儂らはその真ん中という感じが」

「以前は母様を筆頭とした群の強さが際立ってたけど、今では分断されて個としての強さも鍛えられたものね」

「辛く苦しい飼いだ時代だったが得る物も多かったと、今ならそう思えるな」

「今日の頑張り次第で、皆が一同に集い、互いに辛さを語り合って笑い話に出来る日も近くなる。」

「じゃあそろそろ始まりそうだし、皆準備しましょ！」

「そうじゃの、権殿には儂から言っただけのまま傍につこう」

「私は最後の詰めを確認しに行くとしよう。孫策、くれぐれも」

「もう！ それ以上言うときすがに拗ねるわよ！」

その後の決着と収束は早かった。

黄巾賊は首領を討たれ、急速に規模を縮小。黄色の賊は居なくなり、国の衰退は目に見え、戦いの後に残ったのは勇名を馳せた群雄達だけ。

そんな名を馳せた群雄の一員である私達は、国崩し最後の一撃に向けてしばし力を貯め込む作業に入っていた。

情報収集、人脈の拡大、新兵の鍛錬に明け暮れ、その時に備えて虎視眈々と準備を進めていた。

先生を探すチャンスだったのだが……あの風来坊はどうやら揚州を中心に各地を周って治療を行っているらしい、としか分からなかった。

基本単独行動だから足が早くて捕まらないし、情報を漏らさないよう先生に頼まれているせいで誰も口を割らないのだ。揚州は私達の本拠であり、かなりの影響力を持っていた筈なのに……功德を積みまくって私達の影響力を追い越した先生の凄さに思わず苦笑いが溢れる。

なのでとりあえず今は放置。会いに来てくれるまで待つ！ 決めた！

待つ事に対する鬱憤を賊で晴らしたりなんだりしていると、素敵な招待状が届いた。

中央で奮闘していた袁隗を不法逮捕し、それを皮切りに一気呵成に洛陽を支配下へ置いた董卓に対し、袁紹が怒りの檄文を各陣営に送ったのだ。そして黄巾賊討伐でそれなりに目立っていた私達にも色々と脚色された檄文が届いた訳である。

様々な意味で待ちに待った知らせだった。

勿論元雇い主の不幸であるし、現雇い主の袁術も憤慨している。私達は何の柵もなく反董卓連合軍へ参加するのだった。

これで袁家の柵が一つ取れた訳だ。

私達は反董卓連合に参加するための準備を行いつつ、周泰を袁の本家に送り込んだ。

優秀な仲間が一人減るのは痛手だが、それ以上に知りたい真実があったのだ。それは袁家の注意が全て逸れている今しか探れない秘中の情報。

さて、鬼が出るか蛇が出るか、楽しみである。

準備を済ませ、袁術の軍と合流し、集合先である河内近郊に足を踏み入れた。

河内は地理的に近かったのだが、武漢に控えていた私達と袁術の合流及び袁術の予想以上の気の入れように振り回されて少し遅目の到着になってしまった。

募っている袁隗を救うのだという気負いが戦いを知らないあの子を良くない形で奮起させてしまった。あれもこれもそれもどれも持って行こうと不必要な物まで山と

抱えて行こうとするのを止めるのは骨が折れた。

戦いというものは、という所から話し、理路整然と必要なもの unnecessaryなものを一つ一つ説明してようやく納得させて出発となったのだが……

今度は行軍が遅いもつと速度を上げさせる、あと馬車の中が暇だし揺れるしどうにかしろ！ と来た。

そこその人数を連れての行軍で、無理に急かして体力を消耗させて風邪等の危険を抱え込む可能性がある無茶をさせる場面でもなく、そしてそんなに鍛えられていない袁術軍が大多数、どうして速度など上げらようか。

そして目的地の道中に寄った村の物資を無理やり徴収しようしたり、徴兵しようとしたりするので諫めるのが大変だった。汝南袁氏の影響力がある程度及ぶとはいえ、そんな無茶をしたら袁本家も司隸の諸侯も顔に泥を塗られたと憤慨するのは想像に難くない。

必死に執り成しを図っているとまた行軍が遅くなり、速度を上げると言われる悪循環。

全くもつて首輪付きというのは、無能な上司の出しゃばる場面での面倒事が多すぎて駄目だ。

袁術のやる気を削いだり逸したりさせて上手く操っていた張昭に改めて感謝しな

きやだわ。

とまあそういった訳で、なんだかんだと到着が遅れてしまった次第である。

反董卓連合の集合場所には凄まじい数の天幕が並び立っていた。

これが私達の味方でもあり敵だと思つと、少し圧倒されそうになつてしまふ。

そもそも私達が反董卓連合に参加した真の目的は名という風を得ることである。

政と武の強き両翼は手に入れた、飛ぶ力も十二分に溜め込んだ、後はそれを後押しする風、民意が欲しい。

これまでは名の多くを袁術に渡してきたが、ここからは全てを得に行く。

故に目の前に居る数万数十万に膨れ上がった彼らは私達の目的を阻む敵でもある訳だ。

私は圧倒されてしまった心を叱咤し、むしる壁が高いほうがやる気が出る、全員出し抜いてやる！ と気合を入れて笑みを作る。

この中に私よりも純粋に勝ちたいと思つている人間がどれほど居るといふのか。

孫家頭領の面子、母の悲願、仲間との目標、愛する人への報告、首輪付きの鬱憤、生来の負けず嫌い等等。一つでも思い起こせば怯えなど吹き飛ぶというのに、屈さぬ理由が両手の指で足りない程あるのだ。ならば大軍を前にして笑みを浮かべるなど造作も

無い。

いつでも冷静沈着な周瑜は私の突然の笑みに引いてたけど、大軍に吞まれていた新兵と袁術の兵達には効果があつたようで、その後の準備はとも円滑に進んだ。

3 2. 宮中の惨劇

翌日、檄文を渡した人間の大部分が集まったので初の作戦会議が開かれるとのお達しが届く。

張勳はやる気満々の袁術に兵をまとめるよう命令を受けていたので、苦渋の極みという表情を浮かべながら私に袁術の世話を頼んできた。

諸侯の観察をしたかった私には渡りに船の頼み事だ。

お前が断ったら口実ができるから断れよ！ という張勳の表情を一切気にせず二つ返事で引き受けてやった。

作戦会議が行われるという天幕に案内された私達。

席は袁家の者という事で割りの良い位置。袁術は座るやいなや裾に隠し持っていた蜂蜜をちびちびとやり始めた。袁家ということとで表立つて注意できる者も少なく、身内として諫言できる立場の張勳もいないので、誰もその暴挙を止められない。まあ止めた所で誰にも利点がないので、皆が目線を交わして放置する事が決まった。

ここに来た目的である諸侯観察は良い成果を上げる事はなかった。

初顔は多かったが、それはつまり黄巾党の乱に参加しなかったか活躍出来なかった者達だ。

これがぐつと来ない奴らばかりで全く面白くなかった。

代わりに曹操や天の御遣い達はより輝きを増して見えたので、密かにほつと一息をついた。

強敵が居る事に対する戦好きとしての喜びもあつたのだが……それよりも数が多いだけの雑魚寄せ集め連合で、禁軍を取り込み、優秀な将と軍師を揃えている董卓軍相手に勝てるのか？ という不安に見通しが立った安堵の方が大きかった。

さて、最後の最後に袁紹がやってきた。

作戦会議部屋に最も近い位置の天幕にありながらも最後にやってきたのは箔というものも表したかったのだろう。まあなんとも分かりやすいが、家格的に正しいので誰も何も言えない。

袁紹については前回の戦いで実際の活躍等を見れなかったので一番の楽しみだったのだが……。

これは酷い、という感想しか出て来ない。

何故袁隗は彼女を後継に指名しようとしたのか。

後から張昭に聞いたのだが、袁紹は現実主義者である袁隗が認めざるを得ない程の強

運、天運の持ち主であるらしい。運という本来は不確かである筈の力も実証され続けば、確固たる実力という事か。

袁隗は自身が持ち得ぬ強力な武器を持った彼女を表に立たせ、裏で全てを操る算段だったそうだ。

そう聞けば納得である。都合の良い傀儡ならば操りやすいよう適度に阿呆でなければいけない。

とはいえ今はそれが思い切り裏目に出ている訳だが……。

その後はとにかく酷い流れだった。

誰が総大将をするかというくだらない茶番に半日付き合わされたのだ。

誰もがさっさと袁紹を推して終ってくれと願っているのだが、総大将を推すには一定以上の家格、実績を持つ人物でなければ不利を背負わされる。

この場では五六人ほどか。血筋から劉姓、同塾のよしみから曹操、同家の縁から袁術ぐらいしか推薦人に適した人物いない。

だがこの場で推挙をしてみようと、自分は袁紹よりも下であるという位置づけが済んでしまっているので、皆絶対に推挙はしない。

なのでここは弱小陣営の誰かが生贄になる必要があるのだが……誰か適任はいない

かなーと眺めていると、天の御遣い陣営から声が上がった。

うん、声が上がるとしたらそこだろうとは思っていた。

彼女達の性質から考えても、また軍師の優秀さから見ても声を上げると予想していた。

無駄な時間を過ごしているのが許せないと御遣い君と劉備は考えるだろうし、軍師としてはここで袁紹を推すのは悪い手ではないと考えるだろう。

現在群雄で最有力の袁紹に縁が出来、目をかけられる。これは弱小陣営に大きな転機をもたらすのは想像に難くない。大抵は悪く転ぶが、彼らには流れを転ずる力がある。

今回の件でまず間違いなく彼らの陣営は高く飛ぶ。周囲にいる目先の危険だけしか感じ取れない奴らを大きく突き放し、袁家の背を見るぐらいまで飛べるかも知れない。かくして天の御遣い陣営のお陰で茶番劇は早期に終わりを迎える事が出来た。

若く優秀な彼らには恩を売りやすい今の内にそれなりの便宜、友誼は図る方針ではあった。

だが彼らのお陰で茶番に三日三晩付き合い続けるといふ苦行を回避できたので、軍師達が建てる打算的なものよりは友好的に接しようと心に決めた。

総大将が決まり、役割等も曹操が上手く袁紹に進言してすぐに割り振られ、総大将で

ある袁紹は華麗に前進が信条らしく命令もその通りに発表され、準備が整い次第すぐさまの進軍と相成った。

のんびりとした行軍だった。

董卓軍は精銳ぞろいと噂だが、数はそれほど多くない。要所要所での用兵にならざるを得ないだろうから、戦いは二三箇所でしか起こらないだろう。私なら虎牢関と汜水関で全力を尽くす。それ以外はどうやって負け戦だ。

それが分かっているから曹操、天の御遣い、公孫賛、私達は気楽なものだ。後一勢力、袁紹軍は持ち前の気性から気楽そのものだった。

しかし他勢力の大部分は意識を尖らせ、神経を周囲に張り巡らせていた。

まあこれは仕方ない。膨れ上がった連合軍の多くは黄巾の乱で手柄を取れなかったか様子見をしてしまった者達だ。功を焦っているのだろうし、大軍であり混成軍である連合軍内での動き方が確立していないから気を張っているのだろう。

これは初戦が辛そうだなーと溜息が漏れる。まあ一番辛いのは初戦先陣を切らされる天の御遣い君達か。

先陣は戦士の誉れとは言え、仲間を無為に多く散らすのは誰だって本意じゃない。

まあ彼らだっただけなら上手く切り抜けるだろうし、切り抜けなければそれまでの事。行軍開始前に多少の糧食と装備を支援した分が無駄になるだけで私達としての損害は少な

い。

初戦となる汜水関は混戦になると予想されるし、功に焦る奴らを前に出して数を減らせば虎牢関での出し抜きがしやすくなる、だからここは様子見と皆で決めた。

という訳で、私達の分も御遣い君達には頑張ってもらいたい所である。

汜水関の前に到着し、袁紹がいつも通りの命令を下し、戦闘が始まった。

まあ皆一気呵成とばかりに攻める。先陣を総大将より賜った御遣い陣営を追い越して攻める阿呆もちらほら。

難攻不落と名高い汜水関なのに、連携疎かにして攻めるとか兵を無駄死にさせてると思えないんだけど。

あーほら弓矢の的じゃない。アンタ達攻城戦ってやったこと無いの？ 門前で名乗りとかふざけてるの？ というか攻城兵器持って来てないの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ あつ、死んだ。

このままじゃあまずいかなー前出て動きの流れ作らなきゃかなーと思っていると、勘が冴いた。

少し待ってればあの子達が何か為出かしそう。

先陣を抜かして突貫していった奴らの後方、押し付けられた筈の先陣を掻っ攫われた

形の御遣い軍の動きが少しおかしい。

あれは……追撃を誘ってるのか？ ……ああ、先陣を奪われたのを利用しようというのか！

その機転と、閃いた構想を瞬時に伝達して弱者を装った彼らに敬意を評したい。本当に良い陣営だわ。

さて、一当が失敗した連合軍が目の前にいて、しかも何やら功を焦っていて引く気配がない。

このような状況、猛将と呼ばれる者がどうするか。更に向こうは援軍の当てもない状態である事を加味すれば……。

必死に城壁までの血路を開き、城門付近の堅固な守りに早々に門の破壊を諦めて城壁の攻略に取り掛かろうとしていた先陣の横、先ほどまで鉄壁の守りを誇っていた城門が開き、華の旗が現れた。

呆気にとられる先陣組の横をすりと抜けて後方に控えていた劉備たちに華雄が襲いかかる。

時期の判断も素晴らしいわ、華雄將軍。

城壁に張り付いた兵の注意を引き、先陣を全て食らって連合の勢いを挫きたいので

しよう。

勢いからして、先陣を食い破ったら潔く帰るつもりなのもよく分かるわ。貴女はとも賢明なのね。

けれど容易く食い破れると思ったその獲物はね、牛の皮を被った虎よ？

華雄の思い描いていたであろう大方の理想は叶った。

城壁に張り付いた奴らの注意は華雄の旗にいき、城壁に辿りつけない奴らは華雄の首に色めきだした。

戦場で一瞬の隙を見せるなど愚かに過ぎる、先陣を横取りした者達はそのほとんどが矢の餌食となった。

だが最後の詰めでしくじった。

奇襲という性質上、彼女の隊は少数精鋭での騎馬戦を目的とした編成となっていた。ここでも彼女は何も間違っていない。

ただ一点、奇襲は読まれれば恐ろしく脆いのだ。

そもそも読まれぬ筈の作戦だった。堅固な城壁と城門、必死の抵抗、戦端を開いて間もないという時機。そんな状況下で城門が開いて敵将が突撃を仕掛けてくるなどと誰が読めるといえるのか。

私達の陣営数人と、いつの間にか前衛に数騎の伴を連れ立って先陣の様子を見に来て

いる曹操陣營、そして先陣の後方で美味そうな生贄に見えるよう演技をしていた彼女達だけだろう。

策を読まれ、また網による見事な騎馬対策を見せた劉備達の前に華雄は手傷を負わされ、遁走を余儀なくされた。

こうして汜水関での趨勢は決まった。

勿論その後も関を抜くのは苦勞したし、兵の損耗も連合全体で見れば馬鹿にならない。だが難攻不落と謳われた難関をこれほどの短時間で落とせたのはもはや偉業と言えた。

ともかくこれで連合軍と董卓軍の地力と各陣營の色が分かった。

次の虎牢関は私達が取る！

と息巻いたのは良いが、精銳ぞろいとはいえ私達の部隊は袁術の兵を除けば連合内で少数勢力に過ぎない。

数の必要な攻城戦をどう制し、出し抜けるのかと頭を悩ませていると、斥候が敵は関外にて野戦の準備をしていると報告してきた。

恐らくその報告を聞いて、ぽかんとしなかつた将兵はいないだろう。

周瑜は『関を放棄する理由は数あれど、初めから捨てるなど……援軍も期待できず、後

ろは本拠と後がないと分かつているから、最後までいいは気持ちよく戦いたかったのだろうか？それとも既に洛陽から逃げる準備が出来ている？逃げるとは何処へ？長安か？ならば洛陽は囿？にしては後がなさすぎる、最終的には西涼か羅馬へ逃亡する気か？』などとかなり戸惑っていた。もしこれがあちら側の作戦なら術中に嵌ってしまっている訳だが。

私は思考の海に沈みかけている周瑜の後頭部をはたき、目の前の艱難を打ち破る術を求める。

敵に策があろうがなかろうが、目の前の敵を倒すのは絶対である。ならばそれに集中してもらいたい。

周瑜はすぐさま冷静さを取り戻し、野戦の推移と関を取る時機まで言ってみせた。

その読みと流れは正しく当たると私の勘が告げている。うん、やっぱり私の軍師はこうでなくては。

周瑜の予想通り、数で圧倒された董卓軍は撤退していった。

しかし損耗率は恐らく引き分け。互いに三割を超える辺りだろう。連合と比べて圧倒的寡兵でそこまでの戦果を上げる董卓軍の恐ろしさよ。将と兵の質が恐ろしく高く、そして統率も素晴らしい。

ああ、あの子達欲しかったなあ。と思わず呟いてしまう程の逸材だった董卓軍の二枚看板、万夫不当の豪傑呂布と電光石火の騎將張遼。どちらも喉から手が出るくらいに欲しい人材だったのは間違いない。

特に張遼。馬を持つ事に制限がかけられて騎兵育成が出来ていなかった私達にとつては垂涎の人物。

もし張遼が私達の近くに来ていれば関攻略一番乗りを諦めていたかもしれない。

しかし張遼は曹操の元へ向かってしまった、かの陣営に行ってしまったのならもう打つ手はない、それが天運だったと諦めるほかない。

呂布はそのまま進軍すれば当たったのだが、呂布と風評の二択で揺れる天秤は風評に傾いた。

呂布は単純な強さが特筆しており、私の軍に必要な不可欠という訳ではなかったからだ。結局私達は呂布を避ける順路を取り、城門へ急いだ。呂布は追ってこれない、正面からやってくる多勢を相手にしなければいけないからだ。

呂布軍は正面からやってきた連合軍とぶつかり、見事に彼らの勢いを止めてみせた。自身の軍の五倍はあろう兵力差を止めるとは、なんとという強兵達か。

そして混戦を極める前線で呂布は、正面からやってくる軍勢の中から吸い込まれるように劉備の元へ駆けて行った。

不思議な事ではない。張遼が当たった曹操と呂布を避けた私を除けば連合で強いのは彼女達のいる場所だ。呂布はそれを嗅ぎとつて彼女達を自身が迎え撃つ対象に選んだのだろう。

袁家の雑兵を根こそぎ荒らすよりも、ここで劉備達を打ち取る方が連合軍には痛打になると読んだのだ。

あーそれを一瞬で見抜いて決断するのかーやっぱり欲しかったなーと少し後悔をしながら、私達は虎牢関を一番にくぐり、迅速に制圧をなした。

名將が守る難関を一番で制圧する、これで私達の第一目標は達成した。後は徳で名を高めるぐらいしか出来ないかな？董卓軍の二翼が落ちたのだから、多分もう戦闘はないだろうし。

私の勘は当たり、辿り着いた洛陽はとても静かだった。

檄文で書かれた悪辣非道な様は何処からも窺えず、人々は大人しく日々を過ごしていた。

まああれは袁隗を救う口実みたいな物だしね。しかしこの後は騒がしくなるぞ。

袁家の軍は洛陽に着くと同時に入城、そして袁隗を探しながら董卓を招き入れた宦官達を虐殺していった。

董卓も血眼になつて探したが、董卓を見つけ出す前に袁隗の亡骸が見つかった事で捜索と虐殺が一度打ち切られた。

その捜索には袁家配下の私達も勿論加わつていたのだが、私達は袁術配下の看板を掲げて董卓を捜索する振りをし、精緻な国の全体地図や諸侯の弱みになりそうな機密情報から、公式文書の判や国家認定試験の原本等など、とにかく役に立ちそうなものをありつたけ掻き集めていた。盗人猛々しいとはまさに私達の事である。

それもさすがに袁隗の亡骸が見つかつては打ち切らざるを得ない。

まあ収集は十分に出来たし、血なまぐさい宮中からさつさと抜け出たい。

私達は身に隠せるだけのお宝を忍ばせて宮中から脱し、一路仲間達が陣を張つた場所まで駆ける。

途中何かの勘が囁き、井戸を覗いてみると金色に光るお宝が見えた。

盗人にはお宝から近づいてきてくれるのかな？　なんて馬鹿な事を考えながらお宝を回収。

あつ、これ玉璽だ。至極のお宝ではあるけど良くも悪くも劇薬だよ、これ。扱いに困る物拾つちやつたなあ。

急いでいる筈なのに、その場に居た数人はピシリと固まり、どうしようと思ひ悩む。だが時間がないので問題は後回しにしてしまおうと私が言つと、皆がぶんぶん首を縦に

振った。

陣に急いで戻った私達はお宝を仲間へ託し、宮中に舞い戻った。

袁隗の亡骸が収められた棺の傍で張勳にだっこされて泣き続けている袁術の近くに寄り添い、袁隗の死を悼む列に参列する。

袁隗は袁家だけでなく都の様々な人物に影響を持っていたらしく、彼女の死を悼む列は私の予想を遥かに超えて長大なものになった。

私はここに来て初めて、さすが名門袁家を更に強大にさせた稀代の策略家だと、袁家の人間に対して畏れを感じたのだった。

粛清と葬儀が一段落し、さあ董卓の搜索を再開しようとした所で董卓の首が上がったとの声が上がった。

大急ぎで向かってみれば、むくつけき男の首が見せしめの台に括りつけられていた。

……私の勘が違っていると告げているが、黙殺する。

町人の様子などを見ていて察したのだ。

恐らくだが、董卓はこの流れを作り出した存在に無理やり生贄に選ばれただけの都合の良い駒だったのだろう。

こうして分かりやすい悪役が差し出されて、町人がこいつだー間違いないーと守ろう

とする人物なのだから、私の予想は外れていないと思う。

しかし首が上がったと報告してきたのは劉備の兵からよね？ うん、ならまあ、そういう事なのでしょうね。これも黙殺して今後の交渉材料として取っておきましょう。

ともかくこれで袁家の敵討ちは宮中の人間を袁家が皆殺しにして終わつたし、大義名分だった帝の保護と首都の救出はなつた訳だし、これにて反董卓連合は解散かな。

色々不可解な事件ではあつたが、何かを知り得る宮中の人間は尽く殺されたし、帝は幼くて明瞭な答えは返つてこずだった。つまりこの件の全容を語れる人物はもはやおらず、流れを作り出し、袁隗を捕らえ、董卓を祭り上げた人物や背景は全ては闇の中となつてしまった。

なんともすつきりしない結末である。

そして私の予想通り、連合解散の号が響き、諸侯は自身の所領に帰る事になった。

私達は少し遅れて袁術と共に戻る予定だ。

見送りという名の陣営観察をしていると、帰ろうとしていた劉備達がこちらに気付いてやってきた。

支援に対する礼を言ってきたので、何も知らない顔をして、いいのよー今後共よろし

くーと友好的に接しておいた。

軍師ちゃん二人と御遣い君の探るような目が飛んできたが、そこで何か晒すほど馬鹿じやない。

というか三人共、そんな分かりやすくしてちや駄目よ。

諸侯の見送りを済ませ、私は今回の戦いを振り返る。

失うものは少なく、得たものは多いとても有意義な戦いだつた。

将と兵が成す翼は乱世を羽ばたける事を証明し、難関一番乗りと徳を示して風を得た。

後は飛び立つきっかけを得るだけだ。

それも私達が帰る頃には周泰が持ってきてくれている筈だ。

だから一先ずは武漢に戻り、一転攻勢の準備を整えよう。

33. 眞実と苦惱

南陽に袁術を送り届ける際、私は軍師達からの進言もあり、井戸で拾った劇薬を早々に使った。

袁家は今どたばたとしているだろうから内政に厚く、また袁術の教師もしていて信も厚い張昭を貸し出します、と言つて恩を売りながら毒を忍ばせる。そして頃合いを伺つて張昭に持たせた玉璽を使い、袁術を踊らせ、その隙に独立しようという魂胆である。

私達は武漢へ戻り、兵達を労つて少しばかりの休みを取らせる。

私を含めた主だった将達は会議室に集まり、任務を終えて先に帰つていた周泰の報告を聞く。

「見事な戦功を上げられたと聞き及んでおり」

「前口上はいらないわ。貴女とは久々に合うから長く話したいとは思うんだけど、今は私も皆もちよつと我慢できないみたいなの」

「はっ、それでは端的に申します。袁家は黒でありました」

それを聞いて、私は全身の毛が逆立つのを感じた。複雑な感情が溢れて胸を満たす。周泰が身を竦ませたのを見て、私は齒を強く噛み締めて乱れる感情を抑える。

「ごめんね、周泰、続きを。皆も気を抑えて、周泰が怯えているじゃない」
「む、すまん周泰。予想出来ていた事を聞いて感情を露わにしてしまうとは、まだまだ未熟よな」

「はっ、私と致しましてもこの情報を見た時は血が沸騰すると思いました故。

では簡潔に続きを話させて頂きます。

袁家と劉表の密約が記された印入りの書簡を幾つか見つけました。内容は孫堅様が襄陽を攻めるといふ先触れの報とその報によつて助かったので礼品を渡すというやり取りが残されておりました。

証拠として重要そうな部分の書簡は持つて帰り、その他の情報は私には手に負えないと判断し、再度侵入しやすいう細工を施し戻つて参りました」

「必要以上の情報は知るだけでも身を縛りかねないし、抜き出してきた情報も袁家として今更調べる必要のない物だから事が済むまで見つかることもないだろう。周泰、改めて素晴らしい判断だったぞ」

「ええ、素晴らしい働きだわ、周泰。ともかくこれで十分なきっかけが出来た訳だし、もう仕掛けても良いつて事よね？」

「そうだな、張昭殿に便りを送ろう、早々に傾合いが来たとな。悪いが周泰、早々に動いてくれ」

「はつ、皆様より早くこの地に帰還しておりました故、既に氣力体力も充実しております。最善の結果をお持ち致してみせましょう」

「……周泰さー、先生からどう習ったか知らないけどさー、仕事の話になると急に無表情で口調が堅くなるわよね。それやめない？」

「出来ませぬ！この様こそが必殺仕事人であり、忍道の体現というものですから！」

「いやその説明がいつも分かんないんだけど……まあ、いいわ。それじゃあ頼んだわね」

「はい、頑張ります！……あつ、こほん。はつ、全力を尽くす所存であります」

「もう、絶対に普通の方が可愛いのに……」

密書をしたため、周泰に持たせると、彼女は闇夜に紛れて消えてしまった。

私の感覚にも微かにしか引つかからない隠形に改めて驚きつつ、これなら大丈夫だと安堵する。

さて、張昭に指示を出したならば後はもう待つ事しか出来ない。

彼女が上手く袁術を煽って夢を見させるまで、いつものお仕事を適当にこなすだけだ。

そう考える余裕が出来てしまった。

先ほど抑えた感情がムズムズと胸を刺激する。

ちよつと外に出て風でも浴びよう。でなければ今日は眠れそうにない。

城壁に登り、闇に沈む街と満点の星空の二つが望める場所へ。

何かを考えると頭が茹だつてしまいそうなので、何も考えずぼーつと風景を眺める。しばらく風に吹かれていると、後ろから気配がした。

振り返らずとも誰か分かる。ここは私と彼女のお気に入りの場所だ。

「こんな所でどうしたんだ？」

「んー、どうしても眠れなくてさ。って、周瑜も同じでしょ？」

「まあ、ね」

「なんか色々複雑よねー」

「そうだな」

「ちよつとき、頭の中と心の中を整理させてもらつていい？」

「構わない、というよりも助かるわ。私は変に考えすぎてしまう性質だから、貴女が言葉にしてくれる方がきつと良い」

「ふふつ、周瑜つてそういう所あるわよね。それでそう指摘すると、軍師とは常々考えなければーとか言つちやうの」

「ぐつ、まあ、そういう事もあるかも知れないな」

「あら、突つかかかってこないの？ つまーんなーい」

「いつものやり取りをして落ち着きたいんだろが、お前が本当に不調の時はやり過ぎるからな。さっさと話を進めてくれ」

「そうね、自分勝手に腹の虫を取めようとしちゃってたかも。ごめんね、公瑾」

「愛ゆえにとは分かっているわよ、伯符。という訳で、話を進めて」

「ええ、支離滅裂になっちゃうかも知れないけど、今だけ付き合ってね」

事を簡潔にまとめると、孫家は袁家に嵌められたのだとつくの昔に分かっていたので、袁家の目が逸れる機を私達は待っていた。そして都合良く反董卓連合が起こったので機に乗じて周泰を送り込み、その証拠を探らせたのだ。

見事周泰は仕事を果たし、袁家に残った劉表とのやり取りを記した印入りの手紙を見つけた。証拠は処分されていないと踏んでいた、敵の弱みにも自分の弱みにもなりかねない情報を早々処分するとは思えなかったし。

そして私達の予想は当たり、襄陽の戦いは仕組まれていたという証拠が我らの手の内にある。

というのが顛末だ。

皆の心境は二極だと思う。

怒り。

予想出来ていた事とはいえ、改めてその証拠が出てきて怒りが湧かないはずがない。嵌めた袁家に対して、そして容易く嵌められた自分達の弱さに対して怒りが湧くのはどうしようもない。

しかし十年の時を経て既に覚悟も決まっていた訳で、私の心境で怒りの占める割合は一二割程だ。

希望。

これを切っ掛けに張昭が袁術を唆し、玉璽を持つに相応しい帝だと思込ませて、次代の帝だと僭称させる手筈になっている。袁術軍には自身達が袁家の主流であると情報操作をして勘違いさせているので、恐らくこの計はすんなり通る筈である。

そうなれば私達は彼女達を討つ大義名分を得られる。

十年前に母の汚名を雪ぎ、その後十年間を庇護してくれていた袁家に恩を仇で返した不屈き者である。という誹りは周泰が持つて帰ってきた印入りの書簡が打ち消してくれるだろう。

つまり私達はもう誰にも何も気にすること無く行動する事が出来るのだ。

その期待はこの十年を耐えに耐えた私達にとって身が震える程の希望と言えた。

私にとっても喜びと期待は心境の半分以上を占めている。

恐らく皆はこの二つの感情で沸き立ったのだと思う。

怒りと歓喜のどちらが心のより多くを占めていたかは個人差があるだろうが。

「古参組は歓喜が強い気がするわね。仕組まれていたのは予想出来ていた事だし、十年の苦境から解放されると思えば怒りも吹き飛ぶ。陸遜や呂蒙などの合流組は若さからか怒りが前に出ている印象だったわ。」

しかし我らのお姫様は怒りとも喜びとも違う感情をお持ちのようね？」

「貴方には隠せないわよね」

それは何とも言い難い感情なのだが、恐らく罪悪感という言葉が一番近い。

十年前を振り返らせて欲しい。

この国の古くからの常識で親の罪はそのまま子に引き継がれる。大罪に対しては一族郎党皆殺しという罰もまかり通る現状を考えれば、どれだけその考えが浸透しているか分かるものだ。

とはいえ今でこそ理不尽だと思えるが、十年前の私はそれが当然の事だと受け入れていた。

だが母への強い思いと植え付けられた常識の間で酷く思い悩んでいた時期があったのだが、そんな私に気付いた先生はこんな言葉をかけてくれた。

『親が盗人で子がそれについて知らなければ、子自体は何も悪くはない。もし盗人にな

る教育を施されていたとしても、それは教えた人間こそ糾弾されるべきで、まだ更正の余地のある子には救いがあっても良いじゃないか』

性善説に基づく甘い考えだと多くの人間には言われそうだが、私はこの考えに救われた。

『そもそも孫堅様は孫家頭領として間違つた道は進んでいないだろうに。大きく羽ばたいたために賭けに出たのも、賭けには負けたが自分よりも優れた才能を持つ娘を助けて後へ繋いだのも、頭領としてはそう間違つた判断ではない。だから彼女に批判できる部分があるとしたら、賭けに負けた事、つまり彼女が弱かつたという事についてだけだろうさ』

続いたその言葉は私に前を向いて歩き出す為の原動力、理不尽に対する激情と強さへの深い執念をくれた。

確かに私達親子の現在の評価は反逆罪を起こした馬鹿な頭領とその娘だ。けれどもそんな評価は、母の判断が全て正しかったと示して全部ひっくり返してやる。

そんな思いを抱けたからこそ、幼かつた私でも十年間苦境と重責に抗う事が出来たんだ。

しかし私は、窮地を救ってくれた言葉を裏切るように、袁術に対して親の罪を振りか

ざして断罪しようとしている。

幼い子供を手に掛ける、先生の教えを裏切る、幼い頃の意志に泥を塗る、そんな罪の意識が荆棘となり、身を焼く激情と体を震わす期待に冷たく鋭い棘を刺していた。

そして私はその棘を無い物として振る舞うには未熟で、感情が表に出てしまうのだ。

「私は、孫家の人間として、袁術を殺すべきなのよね」

「疑問としなかつたのは、理性でちゃんと納得しているからでしょう？」

「ええ、だってどう考えても生かす理由が無いもの」

「そう、偽帝として立ったのなら、もう生き残る術はないわ。諸侯としても袁家主流としても絶対に討つべき敵に成り果てる。取り逃したとなればそれだけで咎にすらなりかねない」

「……そう、よね」

「伯符が親の罪云々で悩んでいるのも知っていたし、先生の教えを受けて救われたというのも知っている。けれどこればかりはしようがないのよ」

「利も理もあるんだもの、本来なら上に立つ人間として悩むのも馬鹿らしいとは、ちゃんと理解してるの」

「なら何故戸惑うの？ 確かに幼子を手に掛ける事に気がひけるのは分かる。けれど行

軍で散々に迷惑をかけられたし、その以前も無茶な命令ばかりを押し付けてきた、それで幾人もの兵が潰されたわ。実害が出ているのよ?」

「そうよね、孫家頭領として袁術に報いを与えなきゃいけないのよね」

「……袁家の者が持つ不可思議な魅力というモノにやられた訳ではないわよね?」

「そんなに鋭い目をしなくても大丈夫よ、魅力に囚われたとかでは決して無いわ。……ただどうしても子供は救われるべき存在だって考えが抜けないの」

「甘すぎる考えね」

「そう、よね」

「……ああもう! そんなに辛気くさい顔されると調子が狂う! 分かったわよ、袁術の元へ貴方だけを向かわせるような作戦を立ててみるわ。その後は全部貴女に任せる。どういう選択をしても言い訳が立つよう考えてもあげるから」

「本当?!」

「さつきも言った通り、私だつて幼い子供を手に掛けるような真似は出来ればしたくないわ。それに貴女のその考えは決して消すべきではないと思う。多分そういう甘さも、貴女の魅力だわ」

「公瑾! 愛してるっ!」

「はいはい、私も貴女が大好きよ」

34. 望まぬ再会

一ヶ月後、袁術は帝を僭称し、大陸全土の敵となった。主要な将をほとんど引き連れ、私はいち早く南陽へ押しかけ、張昭と合流する。

張昭の言葉を信じ、袁術の仲間であると招き入れられた私達は、門をくぐった瞬間に動き出し、速やかに南陽を制圧した。

戦闘など起こす間もなく、将官は武装解除をして一箇所に集めて、市民には袁術が偽帝として立ち、私達が大義のために彼女を討つという旨を伝え、更に袁術の悪政から解放放った暁には、税の緩和を約束すると発表して懐柔を行った。

煽動を行える将官を抑え、民の心を掴めば、大部分が普通の民草である兵達は誰も袁術のために立とうとはしなかった。

そして私は袁術と張勳の前に立っている。

周瑜が約束してくれた通り、とある個室に三人きりである。

配下の兵達は未だに二人を賢明に探してくれているが、周瑜が上手く操ってこの近辺には兵が立ち寄らないようにしてくれていた。

「そ、孫策よ、これは冗談よな？ 私達と一緒に大陸を統べるんじゃないよな？」

「いいえ、私は偽帝を僭称し、漢の敵となった貴方達を殺しに来たのよ」

「国に私達を止める力は既にないでしよう、孫策さんはそんな物に今更媚を売ろうというのかしら？ 私達が劉表や袁紹、その他諸侯と縁を結んでいると貴方も知っているでしょう？」

「ええ、張昭から、そう思わせたと聞いているわ」

「思わせた？ ……まさかっ！ 確かに都合が良すぎると思っていたけれど本当に?！」

「ええ、そういう事よ。貴女達の教育係として五年前についた張昭は、一度たりとも私達を裏切らずにいたという事」

「全てはこの時のためかっ！ この恩知らず共め!!」

「のう七乃、この状況は、孫策の言う事は、全て本当なのかや？」

「どうやら本当のようです、全てが全て、こいつらの思うがままですよ」

「な、何故なのじゃ孫策……」

「分かりやすく言うと袁家への復讐よ。私達は十年前に貴女の尊敬する袁隗に騙されて母親を殺され、十年間不当な苦役を負わされていたの。決起するのも当然じゃない？」

「叔母上がそのような事を？」

「美羽様、信じちゃ駄目です、裏切り者の言う事など」

「証拠も無しにこんな事しでかさないわよ。劉表と袁隗が裏で手を組んで孫家を貶めたという証拠はちゃんと押さえているわ。」

だから貴方達の首を上げ、注目を浴びた所で事の真相を公にし、孫家頭領であり私の母であつた孫堅が負つた罪人として汚名を雪ぐの」

「な、なんと……」

「しかし、しかし美羽様は」

「関係ないとは言わないわよね？私達の十年の内半分は、貴方達が奪つていたのでから」
「全ては袁隗様から引き継いだものです！袁隗様もしくは袁家の主流に求めるべき落とし前を美羽様のような幼子に求めるとは、孫家も落ちたものですねっ」

「袁隗は既に死んでるし、袁紹は曹操と決着をつけようと動いてるっぽいし、わざわざそこに出向いてどうこうしようとも思わないわ。曹操がやるなら、袁家はもう勝手に潰れるでしょ。」

それにね、もう事は進んで、偽帝と僭称した貴方達が落とし前を付けなきやいけないの。周囲から見れば私はそれに乗つただけなのよ。復讐云々の種を明かしたのは、納得出来ないまま死んでいくのは嫌だろうという気遣いに過ぎないわ」

「全てお前達が仕組んだというのに、気遣いなどと良く言える!!」

「……七乃、本当にもう駄目なのかや？」

「……これだけ言つても冷静沈着でいられたらもう無理です、これにて一巻の終わりです。ごめんなさい美羽様、私の力不足でした」

「そ、そんなの分からんじやろ！　今まで孫策は色々わがままを聞いてくれた！　今回も見逃してくれるかも知れんぞ。一緒に頼み込んでみよう」

「あははーそうですね、抵抗とか悪あがきも出来なさそうだし、素直に頭下げてみますかー」

「この通りじゃ孫策、見逃してたもー！」

「ああ、美羽様が叩頭する姿は初めて見ました！　冥府の土産としては悪く無いです！

孫策さん、せめて死の瞬間は美羽様とともに何卒ー！」

「馬鹿を言うでない、死ぬ前提では頭の下げ損ではないかやー！」

「ここに来て不敵な損得勘定、さすが美羽様ー！」

「……はあ、気が抜けちゃった。もういいわ」

「い、今なんと？」

「もういいと言つたの、袁術、立つて後ろを向きなさい」

「もういいってあれかの、許してくれるという事かの？」

「いいから、立つて後ろを向きなさい。次はないわよ」

「びい！　いますぐにやるのじゃー！」

私は後ろを向いて立った袁術に剣を一閃する。はらりと落ちる金色の髪。

「おお？ 急に首元が涼しく、頭が軽くなりおった？ むむ？」

「ああ美羽様の美しい御髪が！」

「髪を貴女の首の代わりにしてあげるわ。で、張勳は何を差し出せるのかしら？」

「私も生かしてくれるんですか？」

「袁術に向かう怒りを自身に向かせようと挑発していたようだけど、そういう意図が見えたら怒りも湧かないわ。だから私の気が変わらない内に早くしなさい」

「首の代わり……美羽様から頂いた帽子や装飾品はどうでしょう？ 肌身離さず身に付けていましたよ」

「帽子と装飾品ねえ、少し弱いわ。将官が貴女は死んだと納得するような命に次いで大事なものを差し出しなさい」

「私は美羽様のように長髪ではないですし、私物も美羽様縁の物しか大事なものは持っていませんし……後はおまけに袁家からちよろまかしてきた銅版なぞどうでしょう？」

「なにそれ？」

「美羽様に付いて袁家に出向いた際に、宝物庫に眠っていた物です」

「なんと！ 七乃よ、そんな事をおったのか?!」

「ええ、定期的に少量ずつ金品ちよろまかして蜂蜜に変えてました」

「ならしやうがないというやつじゃの！」

「……貴方達ねえ」

「ともかく、そこで気になってこれだけは私の懐に入れてたんです。とても私に似ている気がしまして……美羽様に頂いた帽子や装飾品に次いで私が肌身離さず持っていたものです」

「ならもうそれでいいわ。じゃあこれを持って貴方達はここで死んだ事にしましょう」

「おお、さすが孫策、話のわかる奴じゃのっ」

「調子に、乗らないの」

「びいいい！ ごめんなさい！」

「二つ誓いなさい」

「何でも誓うから！ 怖いのやめてたも！」

「あの、孫策さん、美羽様の下が限界になる前に止めてあげてはくさいませんか」

「……はあ。今後一切私達の支配下には近寄らない事。どこの勢力にも属さず、二度と兵を起こさない事。この二つは死んでも遵守なさい」

「分かりました、元より私達も貴方達と接触したいと思いませんし、偽帝を僭称した私達に受け入れ所はありません、二人では兵も起こせないでしょう。なんとも優しい誓いですね」

「絶対に守れるよう、簡単な二つに絞ったのよ。もし破るようなら……容易くは殺さないわよ?」

「ぴいっ! 分かったから誓うから守るから! その怖いのをやめてたも〜!」

意図的に用意された包囲網の穴を駆けていく二人の背を見送りながら、私は深いため息をついた。

結局親の罪を振りかざして袁術を追いやった癖に、命を奪わずに逃がしてしまった。子供の頃に得た物を蔑ろにし、孫家頭領に徹しきれなかった、なんとも中途半端過ぎる決断だ。

本当に、自分の甘さがほとほと嫌になる。

そう落ち込んでいる所に、後ろから良く知った気配が近づいてきた。

「結局、殺さず逃したのね」

「……ごめんね周瑜、迷惑かけるわ」

「いいわよ、どう転んでも良いよう準備は整えている。それに孫策が奪った物は遺品として有効そうだし、大分楽に事を進める事が出来るわ」

「という事は兵の取り込みは上手いきそうなのね」

「ええ、既に袁術の兵の大部分は吸収できてるし、遺品を使えば抵抗しそうな輩も大人し

くなるでしょうね」

「ならこれで私達の目標は完遂ね。」

袁術探索中に劉表と袁隗の記録を見つけたと大々的に公表して母様の汚名を雪げる。揚州を平定し、荊州を取るのに十分な兵力も整った。難事は全て片付いたわね」

「ああ、後は小事を片付ければ、私達は晴れて自由になり、揚州へ大手を振って帰れる」
「そうなれば先生にも会えるし、真名も呼び合える！」

折角の門出に頭領が辛気臭い顔をしているのはまずいと、私は大げさに声を上げ、落ち込んでいた気分を無理やり盛り上げる。

周瑜はそんな私を微笑んで見てくれていた。本当に、頭が上がらないわ。

その後私達は二ヶ月南陽の太守代理として逗留し、袁術の不正を炙り出し、溜めていた財を全て民に返し、減税を行う正規の手続きを行った。

そしてこの南陽は袁家の人間に引き渡す予定だ。

南陽は国の中央に近く、物流も盛んなので栄えてはいるが、袁紹陣営の近くであり、私達の本拠とは遠い。なので金財も人材も空っぽにして袁紹に売り払う事にしたのだ。

数度の書簡のやり取りの末、袁紹は地理的な旨味以外が無くなったと知っていようと、南陽郡を高く買ってくれた。

袁紹からしてみれば今回の件は寝耳に水だったろうし、また曹操と事を構えようとしているのに後背を気にしたくはないのだろう。手切れ金をやるし南陽で行った越権も許すから、これで全て水を流せと金額が示していた。

私達はそれをすんなりと受けた。

正直袁紹とは下手に事を構えたくない、彼女達には曹操と存分に潰し合つて欲しいのだ。そして両雄が潰し合っている間に長江から南の全て孫家で頂こうという思惑がある。

孫家としては前頭領の罪を雪いだし、袁隗はもう死んでしまっているし、不当に扱われていた袁術への手打ちも済んでいるので納得している。との旨を正式に伝え、南陽を引き渡すのだった。

そうして私達は袁術旗下として五年を過ごした土地を離れ、南に進路をとった。

新たな本拠地として建業を想定しているのだが、その前に自分達の支配下の地域を巡らなければいけない。

実は私達が袁術に反旗を翻すと同時に、各地に散らした孫家の兵が起こり、荊州南部と揚州を支配下に置いていた。勿論十年間練りに練った作戦である、民の人心掌握は既に完了しており、事は速やかかつ穏やかに行われた。

だが不測の事態もあり得るわけで、支配下に置いた場所の状況を直接確認し、ちゃんと顔を見せて支持を確固たるものにしなければいけない。

そしてもう一つ、南下をする重要な理由があった。

道程で襄陽に寄り、私達は苦い記憶の残るかつての戦場までやって来ていた。

今まで顔向け出来ないと思ひ近寄りもしなかつた場所に、晴れて自由の身になった今ようやく訪れる事ができた。

主要な仲間達全員と共に黙禱を捧げる。

亡き母に伝える事は山ほどあつたけど、あの人は長話が嫌いだつたので、要点だけ伝えて黙禱を終わる。

故人を偲ぶにはかなり短い時間だが、古参の仲間達と私は同時に目を開けていた。

皆母への印象は同じだつたらしく、まだ黙禱を捧げている呂蒙や甘寧達の邪魔をしないよう、私達は声なく笑い合う。母の事で笑顔がこぼれたのは、あれ以来初めての事だつた。

母との挨拶を済ませた私達は、建業に戻る面々と南下をする面々に別れる事に。

防衛のため建業へ先に帰るのは孫権、甘寧、周泰、呂蒙、魯肅、黄蓋となつた。

孫権は旗頭として、甘寧は孫権の親衛隊として、周泰は防諜役として、呂蒙と魯肅は

内政要員として、黄蓋は万が一の軍事指揮を取る役割があった。

ちなみに黄蓋は宿将面子とじゃんけんという先生考案の即決法で勝ち抜いた末の人員入りだ。

その様子を見て、『年齢的にも馬上の旅って辛いものねー』と思わず漏らしてしまい、じゃんけんに参加した黄蓋、程普、韓当等の面子に殺されかけた。割と本気の危機感だった。

あとは張昭なんかも年齢と肉体面を鑑みて帰還組に入れてあげたかったのだが、彼女の持つ知識、立場、家柄、交渉術、医術等は無二のものだ。なので老骨と幼体に鞭打って付いてきてもらわざるを得なかった。

そう謝るように、労るようにして言うと、これまた殺されかけた。私達よりも深い医学知識を持つ張昭が本気を出すと、近付かれた瞬間指一本で制圧されてしまうのだ。

そうしてあれやこれやと騒がしくしつつ、私達は再会を約束して別れたのだった。

南下を再開した私達は、時間をかけて地盤を固めていく。

まずは荊州を縦断して南海まで至る。道中村々の状況を聞いては問題を解決し、また交易路の確保も行う。そのまま揚州南部へ向かい、陸遜や張昭の出身である名家や元より孫家と深い関わりのある家々を訪ねて改めて協力を請うた。揚州北部は本拠近郊と

なるので丁寧にぐるりと周り、念入りに地盤を固めていく。

ついでに先生の足跡を辿ってみたりしたが、長沙に向かったらしいという情報を最後に足跡は途絶えてしまった。入れ違いになってしまったのだろうか。建業に着いたら絶対に捜索隊を組んで見つけ出してやる。

そんな決意を新たにしつつ、二手に分かれてから足掛け半年、私達はついに拠点となる建業へ辿り着いたのだった。

最後は段々と進行速度が上がり、私達よりも十日程早く出立した筈の伝令役に建業直前で追いついてしまったのはご愛嬌。精銳が乗るのに相応しい馬の素養と、精神が体力を上回っている状態が奇跡を起こしてしまった訳である。

そんな訳で、夜半に建業へ着いた私達を出迎えてくれたのは、ぼかーんと呆けた門番だけだった。

当然である、最新の情報が建業には伝わっていないのだから。

彼らが知っている情報は一ヶ月前に出した、『最後の都市の視察が終った、今より急いで帰る。この書簡が届くだろう日から十五日後ぐらいに建業に付く予定』というものでろう。

そして今は書簡が届いて五六日ぐらいしか経っていないと思われる、勿論出迎えの準

備など終えている筈もない訳で。

門番達ははつとした様子ですぐに門を開けてくれたが、なにやら様子がおかしい。なんだろう？と訝しみながら門をくぐった先、その答えはあった。

暗くて見えにくいのが、城まで続く道は綺麗に整えられながらも、その左右には紅白の装飾が散りばめられ、祝いの言葉が書かれた横断幕やのぼりがそこかしこに設置されている。城も遠くから見ても分かるぐらいに様々な飾り付けがされていた。

なんと出迎えどころか祭りの準備をしていてくれたようで、街が祭りの色に染まりつつあった。

……なんだろう、すごく居た堪れない気持ちになつてきた。

後ろに従う仲間を見て、門を通してくれた兵を見て、全員がどうにも気まずいという顔をしているのを確認した。

私は少し考え、決めた。

「皆、私達が今帰ったのは秘密。十日後ぐらいにこっそり城から抜け出して、改めて帰還するつもりですよ」

この提案は皆にすんなり受け入れられ、私達は寝静まる街を隠れながら進み、兵士以外に知られること無く入城するのだった。

我らの城に入った私達はその場で解散し、城に用意された各自の自室に戻ることに。主要な場所とそれぞれの自室の場所だけ聞いて、皆は兵の案内を断つた。勝手に急いで帰ってきて、すぐく気を遣わせて、それでどの面を下げて真夜中に城内を案内させるというのか。

皆気が削がれたようにふらふらと自室に向かつていく。

帰還の宴をする雰囲気でもなく、また騒いで見つかつて私達の存在が露見してしまえば折角歓迎の準備をしてきている民衆の心意気に水を差してしまう。盛り上がれようもなかつた。

五日は自室に籠もる生活をしなくてはいけないのかーと思うと急に眠気が強まり、水浴びは明日でいいやーと私も直接自室へ向かう事にした。周瑜も同じ気分らしく、私の部屋とも近いので一緒に城内を静々と歩く。

なんとも締まらないわねー、なんの為に急いで帰つたのかわからないー、なんて話しながら歩いていて、明かりの点いている部屋が遠目に見えた。

聞いた話だとあそこは我が妹の部屋である筈。

こんな夜遅くにどうしたのだろう？と興味を惹かれ、私は気配を消してこそこそと部屋に近寄つていった。

趣味が悪いな、と笑いながらも周瑜は付いてきた。似た者同士である。

戸の前に近づくと、孫権の艶めかしい声が聞こえてきた。

「ねえ、もう一回だけいいでしょう?」「このままじゃ終われないわ」「負けっぱなしは嫌なの」「お願い、攻め方を変えるから」

相手は、はあ、という溜息の後、カタカタと何かを用意し始めた。

「ありがとう! 大好き!」「次は私から攻めるわ!」

……私は固まった。ギギギと後ろを向くと、周瑜も同じく固まっていた。

ちよつと我が妹よ! いつの間にそんな積極性と経験を?! 相手は、相手は誰なの?!

というか相手の野郎! 私の可愛い妹を抱けるといふのに溜息とかこの野郎!

というかカタカタって何を用意してるの?! 道具、まさか道具を使っちゃうの?!!

もうこれは介入せざるを得ないでしょう! 可愛い妹を取られる不安とか、私だって

まだなのという嫉妬とか、どういう事をしようとしていたのか気になる好奇心とかでは決して無い。

孫家頭領として、姉として、相手の男を見極めなければいけないのだ!

私が再び周瑜の顔を見れば、周瑜は目を合わせて力強く頷いてくれた。うん、我が軍師もやってやれ! と表情で言ってる。これは全力で行かなければなるまいて。いざとなれば剣だって抜いてやるぞ!

「そこまでよっ!」

私はばたんと戸を強く開け放つて、中へ進入する。

そこには二人の美少女がいて……あれ?あれあれ?もう一人の顔、私知ってる気がするんだけど?

「えっ、先生?!」

後ろから覗きこんできた周瑜が驚きの声を上げる。

「お姉様? それに周瑜も?」

「ああ、やつぱりこの気配はお前らだったか。久しぶりだな」

ええ、うん、先生よね、見間違える筈もないし、聞き違える筈もない。姿を見ただけで、声を聞くだけで涙が出そうだ。

けど、でも、ちよつと待つて欲しい。脳内が拒否している。

あー、先生本当に美人、姿が一切変わつてなくてすぐに分かったし、というか変わらなすぎじゃない?

えっ、もしかして妹には女として二つも先を越されたの? 情けなさすぎ無い?

つて、二人の間に大きな象棋盤がある、駒も配置されてるし、あれ、もしかしてさっきの発言と音はこれの事?

あつ、そういえば私急いで帰つてきたから体も髪も服もボロボロ、最近水浴びもそこ

そこだったし臭いも？

これは……やつてしまった？

幾つもの疑問や感情が降って湧き、理解して受け入れていく度に顔色が変わるのが分かる。

出会えた喜びの色、妹に対する怒りの色、誤解を理解した恥じ入る色、そして人前に出られない姿を好きな人に見られた絶望の色へ。

「うあー……っ、こんなの嘘よおお！ 夢に決まつてるうううっ！」

私はこれを夢だと思うことにして、背を向けて部屋から飛び出る。

そして自室を指指して走りだした後ろ、周瑜も追従して走ってくる。周瑜としても好きな人にボロボロの姿を見せるのは嫌だという事だろう。

けれど私と周瑜には決定的な差がある、全身を晒したか否かである。私は後ろを振り向き、周瑜の顔を覗き見る。そこにはただただ嬉しさに緩んだ顔があった。ちくしう、理不尽過ぎる！

そして綺麗に整えられた寝台の中に潜り込み、私は布団を被って呟く。

これは夢だ……けど先生がいたのは夢じゃない方が……でもこんな姿を晒したのは夢であつて欲しい……。と煩悶とする。

ああもう、詰めめ甘さに嫌気がさす。

今まで全部上手くいつていたのに、最後の最後で本当に締まらない。

35. 想定通りにはいかない

戸が開いたと思つたら孫策がいて、そして急に戸は閉められた。ダダダツつと二つの足音が遠ざかっていく。

「なんだったんだ？」

「なんだったんでしよう？」

俺達は二人できよとんと首を傾げるが、考えても分からないので準備していた象棋をする。

パチリパチリと駒を進めながら、途中になつていた話の続きをする。

「さつき孫策が帰つて来るのは十日前後掛かるはずと言つてなかつたか？」

「ええ、私はそのつもりで色々と準備を進めていたのですが……きつと居ても立つてもいられなくて、無理したのでしようね」

「さつきの様子からするとそんな感じだな。まだまだ子供っぽい所は抜けてないみたいだ」

「十年の呪縛が解けるのですからはしゃぐ気持ちも分かります。けれど予定は守つてもらいたいものです」

「準備には後数日かかると言っていたしな」

「はい、今日明日に持て成せと言われても中途半端な歓迎になつてしまいますから。とはいえ、今日は総じて良い日です。先生と再会でき、お姉様も無事で帰つてきてくれました」

「示し合わせた訳でもないのに同日に建業へやつてくるとは思わなんだ。しかしなんと
いうか、孫権、大人になつたな」

「はい、あれから十年も経ちましたし、私も早く大人にならなければいけませんでしたか
ら」

「遊戯の続きを必死にせがんだ時とは印象が全く違うな」

「先生だから甘えてるんですよ。それに私と対等に象棋が打てる人なんていなかったか
ら、歯止めが効かないほどに嬉しかったのもあります」

「まあ人の目のないところだったら存分に甘えてくれよ。うん、象棋はかなり強くなつ
てるな、攻めも良いし、なにより守りが上手い」

「その守りも先生には容易く抜かれてしまいましたけどね。ふふつ、でも先生に褒めら
れたのなら私も一流の象棋打ちとして堂々と胸を張れますね」

「おうよ、後は攻めの一手をもう一步深く踏み込んで打てるようになれば完璧だな」

「性格でしょうか、先手をとり続けるような打ち筋は何度打つても満足の行く形となり

ません」

「そうか、だが戦いを先導するのは兵を指揮する将と王の役目だし、慣れてけよ」

「そう、ですね。お姉様の代わりに戦場に立つ事もあるでしょうし、盤上でもたついでいては話になりません」

「……お前、本当に成長したな。孫策よりも大人になったんじゃないか？」

「いえいえ、お姉様もしっかりと成長しておられますから」

「あれでか？」

「……」

目を逸らした孫権に苦笑をこぼし、それからはしばし象棋に集中する。

時たま指導をしつつ、他愛も無い話をしつつ、穏やかな時間が過ぎていく。

そして終盤、孫権は小さな声で呟いた。

「先生、私は……」

「ん？ どうした？」

「私の打ち方はこれで良いのでしょうか？」

先ほどと違うニュアンスを感じた俺は、盤面に向けていた視線をちらりと孫権に向けた。

彼女はとても静かに盤面を見つめている。

言葉と雰囲気から推測するに、この盤面は彼女そのもので、それを良いのか？ と聞いていたのだと思う。

俺は改めて盤面を眺め、盤上の推移を思い出す。

先手を取って攻めるより、敵の攻勢を的確にいなして守りを重視する戦い方。ハイリスクハイリーンは出来る限り避け、ローリスクローリターンを厭わない姿勢。判断には感性による果断は一切なく、広い視野を持つて情報を吟味して確実性に重きを置く。指導を良く聞き、自身の判断よりも正しいと思えばすぐ実行に移す。

「これの何がいけないのか、逆に俺はわからんぞ」

孫権が何を気にかけているのかは大体ではあるがわかる。

「私も様々な模索を繰り返し、その末に辿り着いた答えだったんです。ですからこれが正しいと思います。鍛えてきました。けれど勝って全てを得る方法を難なくこなすお姉様を見て、揺らいでしまいました。」

ねえ先生、お姉様は私とは違う打ち方をされると思います、そしてその戦いは私よりもずっと先生の懐に近づけるのではないのでしょうか？」

「んーまあ確かに、もつと華やかで緊迫した勝負にはなつたかも知れん」

「やはりそうですか……」

「想像ではあるが、孫策の打ち方だったら相手に多大な出血を強いた後、王と主要な駒の

全てが華々しく散り、そうして最後には空っぽの盤面しか残らんのだろうな。

でもお前の最後の盤面はとても綺麗だ、各々の駒が敵と睨み合ったまま役割を果たしつつ残っている。正直それはすごい事だと思う」

「すごい事、ですか。しかし負けてしまったら意味など」

「意味はある。孫策のやり方では格上だろうと食らいつけるが後がない。負け戦は悲惨なものになるだろうな。けれどお前の負け方はとても綺麗で、次を想像させる戦いだ。盤上ではなく、現実においてはこちらの方が余程厄介だ。

だから断言する、お前のやり方は正しいよ。孫策とお前では性質が違う、孫策は率いる王でお前はまとめる王、孫策は攻める将でお前は守る将なんだ。どちらも必要不可欠で、優劣をつけようとしても局所的なものにしかならん」

俺はそう言い切った。

孫権はしばらく視線を落としていたが、視線を上げて俺の目を見た時、そこには強い光が宿っていた。

「ありがとうございませす、おかげで自信が蘇りました」

「そうか、わがままに付き合っつて一局指した甲斐があつたな」

「ええ、わがままを言つて良かったです。という訳で先生、もう一局お願いしても良いですか？」

「俺も動き回ってここに着いたんだ、さすがにもう寝かしてくれ……」
「ふふつ、冗談です。ですけどまたお付き合ひ願いますね？」

「ああ、しばらくは逗留するつもりだし、また機会もあるだろうさ」
俺はそう言つて孫権の部屋から退出した。

周りの気配を確認、よし、誰もいない。乙女の部屋に夜遅くに人が出入りするのとは外聞が悪すぎるからな。用心用心と。

それじゃあ用意された部屋でお休みさせてもらおう。

翌日の昼過ぎ、部屋でグダグダしていた俺の元に甘寧にやつてきた。

昨日の内に挨拶は済ませているので、おはようとだけ言つて要件を聞く。

将だけを集めて情報交換するので付いてきて欲しいとの事。

んー俺が行つて良いんだらうかね？ 俺を知らない人間も多いだらうし、元教え子が多いとはいえ線引も大事だらうし。

と言うと、甘寧は苦笑しながら、

周瑜様が仰られた通りですね。荊州と揚州の様子を伺う為に各地を回っていた名医を呼び出した、という建前が用意されていますから、ご安心下さい。

と言つた。

昼過ぎまで俺を留めたのはそういう意図があったのか、昨日の今日で素早い根回しだ。きつと俺を囲い込む準備も既に済んでいるんだらうなあ。

そうして会議室に連れて来られた。

室内には見知らぬ顔の将兵が既に十数人の将が集まっていたのだが……なんか既にそこそこ狭い。

本来将を多く集めて話し合いをする場合、ここよりも厳重な防諜対策と警備が敷いてある玉座の間で行うのが普通だ。

俺は隣りにいる甘寧に何故なのかを聞くと、まだ孫策が帰ってきたことは伏されていて、という答えが返ってきた。孫策と孫権の協議の結果、民に気を遣って祭りの準備が整う数日間は箝口令を敷き、隠れながら過ごさらしい。

本当に締まらない奴らだなあと苦笑が漏れる。

そういった訳で玉座の間は使えない。使う許可を出せる人間が帰ってきている事を示唆してしまうし、何か重要な事が起きるのか？ と不安と疑問を抱かせてしまう。

なので次いで防諜対策が施されていて機密情報も話し合えるこの部屋に連れて来られた訳だ。

部屋に入った時、妙な懐かしさを感じた。

なんだろう、と考え、ああそうかと思ひ至る。

広さを確保するために机や椅子は全て端に寄せて積まれて、十人ちよつとの人間が部屋にいるというのは、孫策達と出会った時の光景を思い出させたのだ。

部屋の片隅で甘寧から孫権に関するあれこれを聞いていると、ばたんと戸が開いた。

「皆待たせたわ」

「皆ごめんねー、おばあちゃん達が中々起きなくてさー」

「仕方ないじやろ、どこぞの馬鹿娘が大した理由もないのに決死行と見紛うばかりの無茶をやらかしたんじやから。それと策殿は後で個人授業じやの」

「そんな馬鹿に付き合つた私達の苦労を鑑みて、今日ぐらひは休日にして欲しかったわあ。それと孫策様は後で個人特訓ね」

「くくつ、お前達の様子を見るに、あの時じやんけんて勝つた儂を改めて褒めてやりたいぞ」

孫策と孫権を先頭にして張昭や程普といった懐かしい顔ぶれが続々中に入つてきた。

しかしその半数は非常に気怠げにしている。

衣服や髪が少しだけ乱れていたり、あくびを噛み殺していたり、目の隈などもかなり

酷い、傍目からして眠いのを隠しきれていない。甘寧が言っていた巡回組なのだろうが……しかし孫策と周瑜だけは眠気も見受けられず、ビシツと衣装を着こなしている。

うーん、昨日見せた慌て者ぶりは見間違いだったのかね？

彼女達は各々先に集まっていた将達に謝っていたのだが、何人かが隅っこに居た俺に氣付いた。

皆見事な二度見を披露してくれた。

最初甘寧に目が行き、甘寧遅れてすまんと目で伝え、隣りにいるやつ誰だろうと視線が移動し、なんかどこかで見た事あるなあと首を傾げ、とりあえず頭を下げておこう、さて次に……と視線が移ろうとした所で先生?! と氣付く。大体がこんな感じ。

俺の容姿は一切変わってないから、氣付くまでの感覚がとても短い。

小さく手を振り、とりあえず会議を優先しようとジェスチャーと視線で訴えかける。

わかりました、とほとんどの人間が言外に察したのだが……

「おつ、白せんせいじゃん！ 久しぶり！」

ただ一人それを察する事もせず、更には特級の爆弾を放り込む馬鹿が居た。

「ばっ、祖茂！ アンタそれはっ！」

「……のう」

「おいおいどうしたよ程普？ らしくもなく慌てちゃつてよー。なんだ、お前も白せん

せに会えて嬉しいのか」

「のう、祖茂よ。何故、白様の真名を知っておる？ 何故、親しげに真名を呼んでおる？

ちよつと儂に聞かせてはくれんか」

「そりゃ十年前に聞いたからよ！ お前と権嬢が行つた後で皆一緒に……あつ」

「ほう、そういう事か。皆の者遅れておいてすまんのじゃが、儂が名を呼んだ者以外は退出してくれ」

文官とは思えない圧を伴つた殺気に皆が頷いた。祖茂の話を聞いて自身とは関係ないと悟つた者は逃げるように退出し始めている。

孫軍には中途から入つた甘寧がすつと退出するのに合わせて俺も部屋を出ようとしたのだが、

「一番の当事者が、何処に行こうと言うのです？」

ぐぬぬ、予想通り捕まつてしまった。これは大人しく沙汰を待つしかない。

その後、孫権以外の懐かしい顔ぶれが正座しながら張昭の説教を聞いている。

真名の重要性とか、十年間頑張つてこれた糧が偽物だったのかとか、約束を破る人間は最低だとか、信頼の重要性とか、ぐうの音も出ない正論を滾々と突き付けられ、誰も何も言えずに聞いている。

激して抑えつけるのではなく、静かに的確にこちらの罪悪感を突きまくるような説教は一時間ほど続いた。

最後に、罰として凱旋の祭りが行われるまでは宴無し、酒断ち、真名の呼び合い禁止を宣言。宴無しで全員が、酒断ちで飲兵衛が、真名禁止で孫策周瑜が悲痛なうめき声を上げた。しかもこの罰は張昭も孫権も遵守すると言われてしまったので、抗う事すら出来ずに受け入れざるを得なかった。

更に罪悪感を募らせるとは、張昭の怒りは相当だったんだろいな。

真名が重要だと頭では分かっているんだが、四百年の空白がどうにも感覚をぼやけさせている。

真名超大事、改めて胸に刻まなければ。

説教が終わったので部屋を出て行った者達を呼び戻そうとして外に出ると、何故か皆が直立不動で立っていた。

張昭のあの声を聞くと無意識に背筋が伸びるのだそうだ。……皆何かしら諭されるような事してんだなあ。

ともかくようやくの会議である。

まずは支配下に置いた長江南の大部分を巡回していた孫策達の話。

荊州南部、揚州全域は元より、交州東部までも影響下に置くことに成功したらしい。じわりじわりと交州西部にも影響力を浸透させているようだ。

これにより冬の行動制限が大分緩和された。交州は冬でもそこそ暖かく、作物の収穫が可能であり、海に面しているので塩と塩漬けや干物にされた魚介類が手に入る。他諸侯よりも食糧事情が潤った訳だ。

反乱の兆しもなかったようで、満足の行く収穫を得てこれたそうなの。

次いで孫権達から長江北の様子が報告される。

袁家は身辺整理で忙しく、曹操は北の制圧に成功したが蝗害が酷く、その他諸侯も自領の平定で慌ただしく、まだ戦乱の舞台は幕を開けていないとの事。

ここに来て皆の顔に苦みが交じる。

当初立案されていた作戦を大雑把にまとめると、

1. まごまごしている袁家を壁にして、今の内に地盤を固める。
2. 反董卓連合軍でも力を温存しながら戦っていた曹操は恐らく秋の収穫を待たずに袁家を攻める。

3. 袁家は大打撃を受けるだろうが、兵数の差から決着は付かずに冬が到来。諸侯は冬を耐える為に行動が一切出来なくなる。

4. 中華南部に本拠を置く孫軍は冬であつても比較的行動の制限がない。しかも温暖な気候の交州との交易路が確保出来れば行動は広がる。そして冬の内に可能な限り物資の調達に奔走する。

5. 物資貯め込みが済み次第、春の兆しが見えた瞬間に北上して戦鬪の傷が癒えていないであろう冀州袁家を背後から強襲。出来るならそのまま勢いに任せて曹操を飲み込む。

6. 後は浮足立つた諸侯を順次飲み込めば勝利。

という物だった。しかし曹操領地の大災害によつて作戦は大幅な修正をしなければいけなくなつた訳である。

なんともタイミングが良いというか悪いというか、順当に行つていればこの秋で大陸覇者の結果が出る筈だった。

曹操が袁家を飲み込み、孫家の地盤固めが間に合わなければ曹操の勝ち。

袁家がゴタゴタを早々に片付けて腰を落ち着け、曹操の対処に成功したなら袁家の勝ち。

冬の到来までに両雄の決着が付かず、損害がそれなりに出ていれば孫家の勝ち。

曹操側と袁家側の同盟がなされないならば、このいずれかの結果になつていた事は想像に難くない。

それほどまでに三者の力は突出していた。

だがここで曹操が脱落すると、三者の中でも頭二つ抜けて金、人、名誉を保有する袁家の一人勝ちになってしまう。

そうなってしまうと完全に手が出せなくなるので、孫家は裏から曹操と手を組まなければいけない。

そして袁家を二陣営で挟撃して打倒し、冀州を平定した後に両者の激突となるのだが……そこにたどり着くまでに掛かる時間で他陣営がどこまで巻き返してくるのか予想がつかない。

場が混沌としている間に天の御遣い陣営が盛り返すという事も……ああいや、そうか、すっかり忘れていた。

管輅が言っていたじゃないか、これは天の御遣い達の物語だって。

そうなるとこの混沌とした状況が創り出されたのは世界が望んだ運命なのか、もしくは管理者が手を回したのか。きつとそのどちらかなのだろう。

すんなりとはいかないが、色々と納得はできた。

まだ確定したわけではないが、天の御遣い達も援助して仲を深めておくのが正解か。後で周瑜に言い含めておこう。

情報のやり取りも済み、凱旋パレードの詳細も詰まり、そろそろ会議解散の空気が漂い始めた所で周瑜が最後に、と言った。

「事前に簡単な説明をしていたが、皆の後ろにいる者の紹介を改めてしておきたい」
皆の顔が俺の方を向いた。

「彼の名は謙信と言ひ、治せぬ傷病無しと謳われた名医である。ここに多くの者は顔を見た事すらないだろうが、謙信殿は母が存命だった頃からの付き合いであり、また十年前から現在我らの統治下にある各地を先んじて回り、我らの事を喧伝しながら民を慰撫してくれた大恩人でもある。

今回の視察が何の障害もなく進められ、また統治を受け入れてもらえたのは謙信殿の功績が多大なのは孫策様も大いに認める所である」

熱い持ち上げである。しかしものはい様だな、母が存命の頃からの付き合いって、間違っちゃいないが……。きつと先代からの付き合いという事を盾に色々と封殺したいんだろな。

「彼の仕事はあくまでも医者であり教育者であるが、その知見を頼る為に城へ招く事もあるだろう、皆面通しを済ませておいてくれ」

早々にお前達の地位を脅かす存在ではないと将達に告げてくれたおかげで、こちらを向いた彼らの顔に悪感情は見受けられない。

「では危急の用がなければ再び集まるのは四日後の凱旋になる、それまでは各自好きに過ごせ。解散」

周瑜が解散を告げ、皆すぐに会議室を出て行く。

狭く窓もない部屋にすし詰め、更には会議が長引いたので室温がやばいのだ。

俺もさっさと部屋を出たいが、忘れぬ内に周瑜に御使い陣營の援助を言い含めておきたい。

なので周瑜と孫策の元に向かつていったのだが、

「先生、ちよ、ちよっと止まって！」

孫策に制止の声を上げられた。はて？と首を傾げていると、

「今ちよっと汗があれでちよっと近付かれると！」

あーそうね、これは氣遣いが足りなかった。

「水浴びしてくるから、話があるならそれから！」

「まあ急ぎじゃないし、そういう事なら解散する」

「すみません先生、またこちらから伺わせいただきますので」

「ならそうだな、街で診療所を開く為の場所を確保しているからそこに人を寄越してくれ。開業準備の為に三日は昼夜問わず掛り切りになっているだろうし、好きな時間に来てくれて良い」

「わかりました、出来れば今日の夜にでも伺わせてもらいます」

「南地区の大通りに立て看板を用意するからすぐに分かるはずだ、それじゃあまたな」

そう言つて俺は部屋を出、歓迎のための準備のために真っ直ぐ診療所へ向かうのだった。

「白様、お待ちしていました」

そうして診療所兼自宅に戻ると、そこには管輅が待つていた。

「悪いな、昨日の夜には戻るつもりだったんだが、予定外が」

「孫策が帰ってきたのでしょうか？ 大丈夫です、知っていましたから」

「相変わらずの予知だな。しかしそれでも不義理ではあつた訳だし、謝るべきだろう」

「律儀な人ですね。謝意は白様の手料理で表して下さい」

「分かつた、腰を落ち着けての料理は久々だし、肩慣らしに精一杯振る舞わせてもらうさ、材料は……」

「用意してあります、それと孫策と周瑜が直接やってくるので彼女達の方も用意した方がいいでしょう」

「……このままだと頼り切りになって、墮落してしまいそうだ」

そう苦笑いをしつつ、俺は昨日の段階で合流を果たしていた管轄とのやり取りを振り返るのだった。

36. 白の異常性

俺は孫策の活動を聞き及び、建業に戻る進路を取るだろう時期を予測をして建業に來た。

そうすると建業の門前にて待ち構えていた管輅と合流を果たす事になった。

あれから一切の連絡のなかった管理者勢との唐突な邂逅に驚きつつ、適当な茶屋で話を聞く事に。

話を聞いてみれば、中央での仕事が一段落着いたので、俺の監視、もとい俺と管理者の連絡員として赴いてきたらしい。

その際一切連絡が無かった事に対する弁明も聞いた。

管輅の過去視未来視、卑弥呼の占い、左慈や于吉の術などを用いれば容易に俺と連絡や連携が取れると思っていたのだが、俺には管理者達の能力が効きにくい事が分かった。そうだ。

管輅による過去視は目を見れば発動できる筈なのだが、俺とは接触しなければ見れないし、遠距離からでも発動できた未来視はノイズだらけで使い物にならない。同じように管輅と卑弥呼が持つほぼ必中の占術にも引っかけにくく、居場所が分かっても時間

的な誤差が生まれていて俺はもう移動してしまっている。

こうなると本格的に探すのは時間が掛かり過ぎるので、相談なしに様々な所用を済ませ、確実に網を張れる時を待つ事になった。

そして孫策達が自分達の城を持つタイミングで俺は彼女達と接触するだろうと推測し、つい先日管輅が建業に派遣されてきたらしい。

色々な人を未来視しつつ、ノイズから情報を拾い集め、この日ようやく彼女は俺と合流出来た訳である。

俺に術式が及び難くとも、管理者が傍にいればその存在が媒介になる。なので仕事の終わった管輅がこれからは終始傍についてくれるそうだ。

そうして管理者達の事情を聞き、ついで俺の詳しい動向について聞かれたので、過去視した方が早いだろうと答える。

すると彼女は驚いた表情をしたが、すぐにその顔をほころばせて俺の手を取るのだった。

管輅が俺の過去を見終わる間に、ぎっくりと俺の数年間を総括する。

孫呉の皆と別れてからの俺は医者をして教師をして鍛錬をして目立たない程度に産

業を発展をさせてと、数百年やってきたいつも通りの行動をしていただけだった。

違いと言えば後の呉と言われる地域だけを回っていた事ぐらい……でもないか。

三国知識（ほぼゲーム）にはつきり残っている人物、陸遜や呂蒙が教えを請いに来たのは驚きと喜びがあった。

劉表に対する嫌がらせで助けられ、匿えないから勘で俺の元まで来させられる。そんな理不尽な無理難題を突破してきた甘寧、蔣欽、周泰には驚かされ、和まされた。

とはいえ、違いといえればそれぐらいだ。

ルーチンが崩れるというのは面倒もあるが、それ以上に楽しさや喜びを感じてしまう。トラブルが面白いというのは長く生きた弊害だなあ。

「まあそんなこんなで、俺としては割と楽しい月日だったと思う」

管輅に過去視させていた俺は、孫堅との出会いから今までをそんな言葉で締めくくった。

彼女は朗らかに笑い、

「そうでしたか。白様の行動は私達の方針と違わぬ物でしたし、その上で楽しまれたのであれば重畳です」

と優しく答えてくれた。

「そうか、そう言ってくれると不安が消えていくよ」

「万事上手く進んでいたように見受けられますが、不安がお有りでしたか？」

「正直に話すとき、どこまでやっていいかが分からなかったんだよ。管理者サイドに迷惑かけないか、収束率の上昇を妨げていないだろうか、なんて常に不安に思いながら行動していたよ」

「それは、申し訳ありません。白様に任せていれば間違いないと勝手に判断していました」

「その信頼に応える為、これを機に色々と話し合えたらと思っている」

「はい、勿論です」

「とりあえず先に管理者達の話聞かせてもらいたい。それでその後色々と質問させてもらうよ。あ、先に一応聞いときたいんだけど、俺に対する未来視って今どうなってる？」

「それなのですが、以前と見える物が変わりありません。他の者に対しては多少見える内容も増え、鮮明に見えるようになっていたのですが……」

「あーそうか、うん、見えないなら仕方ないな」

仲間は「ずれ感がふつつつと湧いて出るが、黙殺する。」

「そうですね、ですが白様は未来など見えなくても正しい道を行かれると信じています。では早速管理者達の話を見せてもらいますね」

まずは管輅と卑弥呼の事から。

彼女と卑弥呼のペアは中央で謀略を行い、皇帝、十常侍、大將軍の力を均衡を考えつつゆつくりと剥ぎとり、彼女達の持つ影響力を殺していった。今では禁軍の命令権の所在も分からず、国財の不明瞭な散財は止まらず、優秀な人材の散逸は深刻化し、もはや国の正常化は不可能なレベルに達している。

そうしてあらゆる力は宙に浮き、いつ大爆発してもおかしくないそうだ。

謀略をある程度済ませた管輅は卑弥呼と別れ、始まりの予言を行う前準備に移った。

ほぼ必中の占術を通して自身の影響力を上げ、予言が広まり易い下地を作り、権力者と懇意にして彼らを操り、民草に交じって都合の良い情報を拡散した。

予定通りに十分な準備ができ、管理者の集まりを済ませた後、一つの予言が大陸中を席巻した。

『これより幾ばくか後、東方より飛来する流星に乗って乱世を治める天からの使者が来る。その者は天下泰平をもたらす希望となるだろう』

こんな内容の予言だ。

こうして管輅は面子を潰した国と必中の占術を欲する各有力者から逃げる為に中央を脱し、俺と合流を果たしたのだった。

卑弥呼はまだまだ中央でやる事があるので、残って政治を影から操るようだ。下地は作り終えているので一人でも十分に仕事は出来るとの事。

次に左慈と于吉のペア。

この二人は強大になりやすい曹操に謀略を仕掛け続けているそうだ。

幻術によって姿を騙りながら宦官や周囲の権力者を唆しているので、足は付かないらしい。全くもって羨ましい能力だ。

しかし潰してはいけないので広く薄く仕掛けているのだが、時折二人がかりの策謀を超えて力をつけようとする瞬間があるので常に注意が必要らしい。

まだ軍の体裁すら整っていない内から注力しないとイケないとは、さすが霸王様である。

中央に二人、曹操に二人というバランスは決して間違いはなかったらしい。

彼らは引き続き曹操に張り付いてその他勢力との戦力バランスを取り続けるそうだ。

現在までの各管理者の動向と方針は分かった。

続いて俺についてだ。

「俺はこのまま呉勢を強くすればいいのか？」

「それなのですが、白様は正しい道を行き過ぎたと言いますか……呉の強化は一時止めてもらいたいのです」

「それまた何でだ？」

「現段階で既に呉勢の主要人物達は十二分に強く、これ以上の強化はバランス調整を困難にします。」

また呉勢の主要人物以外の強化は舞台上の人物の役を奪いかねませんので、私塾自体開くのをやめて頂きたいのです」

「なん……だと……ここにきて私塾四百年の歴史に終止符が打たれるのか。」

あの、ちよこつとだけなら？」

「駄目です、一人教えればその者が教師となるのですから。」

孫策と別れてからの二十人で既に過剰であると言わざるを得ません。

そして人数と科目を絞れば良いという話でもありません。

教育を受けた者は教育の重要性を知ります。呉の生徒達は早々に孫策の元に送られ、部隊の運営で忙殺されて教えを広げる事は出来ていないようですが、状況が落ち着けば呉は他国を抜いて教育先進国となるでしょう。

教育先進国化が実現してしまえば勢力バランスは極端に変動し、バランスなどと言つていられる状況ではなくなります」

「もしかして皆の苦勞を水泡に歸してしまふ？」

「このまま行けばそうなります。」

ですが教育の重要性を知るのは呉の忠臣となる者達だけで、民にまでは浸透していません。

占術、未来視の結果、その意識改革に必要な時間内に全てが終わると出ています。

ですから私は民にまで教えを浸透させぬよう釘を差せ！ と急いで送り出されたのです」

「えっ、俺の教育ってそんなレベルでヤバかったの？」

「気付いておられませんでしたか。現在まで国の体裁を保てたのは白様の教えのおかげなんですよ」

「保身の為に六年で十人程度の人員しか育てていなかったんだぞ、それが大勢に影響するとは思えないんだが」

「……恐らく大丈夫だと思えますので、正史への言及も少ししますね。」

外史、物語は殆どの場合、正史の影響を誇張して再現されます。私達の持つ逸話補正を考えて頂ければ分かりやすいかと思われまます」

おお、これはなんとも管理者っぽい知識だな。以前于吉が試した時みたいに聞き取れないという事はなかったので、セーフな知識だったっぽい。

「そして積み重なる屍の隣で役人が悪銭を数えていたなんて表現があるように、正史における後漢の状況は悲惨であったと伝わっています。

そんな惨状が輪をかけて誇張されている、それはどれだけ苛酷な状況だったと思います？」

イマイチ想像が付かないな、安っぽい表現をしてしまうなら、地獄のような光景が広がっていたのだろうか。

彼女は顔を顰め、悲しみが籠もる口調で続けた。

「ループの始まりはいつも酷い状況で、国の体裁を保っていると云える状況ではありませんでした。

村や町中で腐乱死体が転がっているのが普通の光景だったり、治安の良いと言われていた場所でも路地裏に入ればほぼ確実に襲われる、貨幣は中央に集まりすぎて地方の貨幣経済は成立せず、領主は民がどれだけ逼迫してしようと税金をかき増して要求する、豪族は近隣の村々に護衛代を寄越せと言つて勝手に金品食料を要求する、どちらも身も切つて払わなければ人を攫うか見せしめに殺した上で物資を根こそぎ奪う。

悪意が平然とまかり通る状況で、抗う術を持たない民は賊に落ちるか殺されるか黙るかしかなかったのです。

私達が出すまでもなく、天からの使いがその名だけですぐさま人々の希望とな

る、物語の掴みとしては最高の土壤ができていました」

最後の言葉は皮肉っぽく吐き捨てるような語気だった。

しかし続く言葉と表情は少し明るくなった。

「ですがこのループでは、国が多少なりともまともな政治形態を保っていて、人が人でいられる最低限の生活をなんとか過ごしていました。

私達は以前のループとの違いに驚きました。

急いで調べてみると、全ては白様が皇帝を助け、医療と教育を続けて人を育てた結果だったと分かりました。

またそれが劉備玄德を産む要因だったと蜀方面を調査していた貂蟬が突き止めました。

この外史で劉備玄德は実際に皇帝の血を引き、ある程度の善政が敷かれなければ潰れてしまう寒村に生まれ、たまたま村に立ち寄った盧植が見出さなければ芽は摘まれてしまっていたと

どんな偶然の重なりだ！ と考えるが、気付く。恐らくこれは俺を媒介にして識が作り上げた流れなんだろう、と。

俺は俺の思う通りにやってきたが、そう行動する人間を識が選別した結果なんだろう、でなければこうも上手く事が運ぶ筈がない。

全てが掌の上、ねえ。まあそれでショックを受ける程軟弱でも初心でもないけれども。

「俺がやってきた事が無駄ではなかったと分かって良かった。そして管輅が妙に俺を過大評価している理由も」

「過大評価などと…」

「俺のやった事なんて教育と医療行為だけ。そして教育は考えまで染めるよう三年という長期間をかけて十人だけ学ばせて保険を掛けていたし、医療は拠点を転々とした際のおまけで人を育てる事もしなかった。

俺の行動は全て打算の上。だからさ、評価も感謝も偶然を作り出した識に対してした方が良い」

「勿論識様にも感謝はしています、ですがそれを実際に成した白様にも感謝を表すのは当然のことでしょう」

真剣な目をして言う彼女にはこれ以上言っても意味がなさそうだ。

しかし何故こんな話になったんだっけ？

教育の重要性を説かれて、俺はそれほど大それた事はしてないと答えて、管輅が氣を遣つてフォローしてくれて……そこらへんから話が逸れていったような気がする。

ともかく話を戻そう。

「私塾を開いてはいけない理由は分かった。なら俺はこの後どうすればいい？」

他の勢力のところに行くか？」

「いえ、現状でバランスは取れています。ですので白様はこのまま呉の地に残り、医者として活躍して頂くと良いと思います」

「ふむふむ、今後の方針も分かったよ。」

それじゃ俺が気になってた事を幾つか確認したいんだが、いいか？」

「はい、可能なれば全てお答えします」

「俺は人の命を救う事が癖みたいになってる、それで自分は戦場に出向かず、自分の周りの人間だけを癒やすと決めた。これは管輅から見えてどうだ？」

「舞台の主要人物の生死に関わらない、に関する戒めですね。」

良いかと思われれます、主要人物の死はほとんどが戦によるものですから」

ほっと一息である。

「次は舞台上の主要人物つてのは誰を指すか教えてくれ」

「名のある武将、女性化している、美しいか可愛い、一芸にとっても秀でている、これらが揃っていれば大体そうですね」

おお、分り易い。

「次はどうなると舞台が失敗になるかを教えて欲しい」

「成功が北郷一刀の大成となっているので、それが成せぬ状況が失敗ではないでしょうか。」

「こればかりはまだ決定的なミスを犯していないので判りかねます」

「失敗は何度まで許される?」

「それも判断しかねます。演目を無理やり引き伸ばした関係上チャンスはあまり残っていないとも言えますし、イレギュラーに見舞われたのである程度お目こぼしをして頂ける可能性もあります。ですがもう後が無いとなれば、識様が直接忠告してくださいと意思しますので、一度二度ぐらいは大丈夫……だと思いたいですね」

「分らんかー、まあ何にしろ最善を尽くせって事だな。」

「今回は蜀と呉で組んで魏を赤壁で降せば良いんだったか?」

「そうなのですが、様々な人物を未来視した結果、もう少し続きがありそうな気配がありました。もつと時期が近くなればその辺りも鮮明に見えてくると思います」

「ふむふむ、とりあえず目標は変わらずで良い訳だな。しかしあれだなー、足元や目標がはつきりするというのは充実感があっていいな。」

「それじゃあ次は管輅の未来視の精度なんかについて教えてもらいたい」

「言葉だけで実態をお伝えするのを忘れていましたね。」

私の過去視と未来視は全く別系統の力にして、過去視は直接その人物の記憶に触れる力で、未来視はその人物の舞台上の役割を読む力なのです」

「へえ、つまりは台本を読む力って訳だ。だから皆素直に管轄の指示に従ってたのか」「そういう事です。ですがあくまで穴の開いた台本を読むようなものですし、役者のアドリブなどにも対応していませんから、あまり過信するのも良くないです」

「あくまで指標って事か」

それでも便利な能力には違いない。改めて思うが、皆優秀な補正を持っていて羨ましい。

俺の逸話補正も優秀だとは思っただけど、なんというか直接的すぎるんだよなあ。

「んー大体気になっていた事は聞けたかな」

「説明不足のまま送り出してしまい、申し訳ありませんでした」

「いやいや、こればかりは質問しなかった俺が悪い。ちよつと考えれば聞くべき内容はすぐに思い付いただろうしさ」

失敗すると存在が消されるかもしれないと言い聞かされていたのに、詳細を聞かないとか恐ろしい怠慢である。

管轄がいえ、こちらが……とフォローしてくれようとするので、さっさと話題転換する。

「そーいや管輅のこれからって聞いてなかったな、どうするんだ？」

「占い稼業はもう廃止する他ありませんので、白様のお仕事を手伝いながら傍にいられたらと思います」

「そっか、なら看護婦さんをしてもらうかな」

「経験した事のない職種ですが、精一杯やらせていただきます」

「分かった、それじゃあ今後共よろしく頼むよ」

「ええ、不束者ですが、何卒宜しくお願い致します」

37. 成長の証明

昨日を振り返り終わった俺は袖をまくった。

「さて、それじゃあ久々に手料理でも振る舞ってやろうかね」

とりあえず周瑜と孫策が好きだった物を目一杯作ろう。十年前、孫策達に栄養管理の為と言つて毎食俺が作つてやっておろ、彼女達の好きな物は完全に把握している。味覚が変わつてたら知らんけどな。

後、宴は禁止されているので少し豪華な夕食程度に収めるようには気をつけよう。

「白様、私はどうしましょう?」

「別に寛いでてくれて構わんけど」

「ありがとうございます。それと、孫策達と夕飯を一緒に良いかを聞きたいのですが」
「あーそうだな、うーん、別に気にしなくていいんじゃないか。傍にいてるつて事は診療所を手伝つてくれる訳だろ? ならいつかは顔を合わせる事になるんだし」

「そうですか、ではご一緒させてもらいますね」

「先生、居られますか?」

料理も終盤といった所で周瑜の声が玄関から聞こえてきた。

管輅の予言通り、直接来たか。実は百発百中の管輅の予言、俺が絡むと的中率は七割ほどに下がってしまう。なのでちよつと不安だったのだが。

まあともかく今はまだ手を離せないで、管輅に出てもらおう。

「管輅、今手が離せないから出迎え頼む。居間に通したら料理ができるまで適当に待つよう言ってくれ」

「えつと、それは……未来を読むまでもなく厄介事の予感が……」

「何か言ったか？」

「いえ、行つてきますね」

躊躇いがちな管輅は表に向かつていった。

しばらくして診療所の方から大きな声が響き渡り、ドタドタと慌ただしい足音が近づいてきた。

「先生！ あの女なんなの?! どういう関係?! 何時から一緒なの?! というか誰?!」

「何よ！ もしかして私達が大変だった時も二人で愛を深め合つて」

「孫策、そう焦つて聞いても先生も答え難いだろう。取り敢えず落ち着いて、それから尋問だ」

「そ、そうね、ごめん、ちよつと気が動転してたわ」

「という訳で、説明して下さい、先生」

鼻息も荒く、何とも言えぬ迫力を醸し出しながら顔を寄せてくる二人の娘つ子。

「はあ、何が姉上もしっかり成長している、だよ。

分かった、説明するから、取り敢えず飯の仕上げをさせてくれ」

「絶対よ！ 絶対だからね！」

そう言つて孫策は足音荒く居間へ移動していった。

想定外の出来事に感情を露わにする所はまだまだ子供だなあ。でも実際二十そこらの小娘なんだし、身内を相手にする時ぐらいは仕方ないかね。

程なく料理を仕上げた俺は、出来上がったばかりのそれを居間まで運び入れた。

居間には市井の家には相応しくないほど着飾つた孫策と周瑜の姿が妙に浮いている。

後なんだろう、空気が重い。そつぽを向いた孫策に、微かに眉を顰めている周瑜に、無表情の管轄。

何かあつたんだろうか？ 俺は料理を配膳しながら聞いてみる。

「二人共予想より随分早かつたな。まあ料理を温める手間も省けるし、助かつたといえ
ば助かつたんだが」

「民に見つかつてはいけないので、もっと遅くに伺つた方が良いとは分かつていたので

すが、こいつが」

目で孫策の方を流し見るが、彼女はツンケンしながら明後日の方向を向いている。

「楽しみにしてくれていた感じではないのか。なあ孫策、お前何をそう不貞腐れてるんだ？」

「ふん！ 楽しみにしてたわよ！ 先生が思ってる千倍はねっ！」

「正直に言いますと、こちらの女性が気になってるんです。孫策も、私も。色々聞いてみましたが、先生の許可が必要だと言われてしまいました」

「そうか、確かにこの子は出自が特殊だからなあ。しかし、質問に答ええないから不貞腐れていたのか？」

「……違うわよ。その美人さんは先生の弟子とかじゃないんでしょう？」

「違うぞ。なんというか、んー説明に困る立ち位置だなあ。」

「……しかしなあ、それって出来立ての料理を冷ましてまで聞きたいことか？」

「うっ、折角の歓迎を台無しにしてるのは分かってるの、けどどうしても気になるの！」

「焦る気持ちもわかるが孫策、とりあえず一番大事なことを聞いておこう。先生、一つだけ質問宜しいですか？」

「ん、なんだ？」

「その人と先生は恋仲なのですか？」

「いんや、違う。親しくはあるが、付き合っているとかはない。接吻もした事も無いし、肌を晒した事もない」

「あれ？ そうなの？ その人先生に一番近い人よね？」

「まあ、そういう言い方をされればそうだが、どちらかと言えば仲間意識に近い。というか何でそう思った？」

「私達よりも距離感が近かったもの、そりゃ勘ぐつちやうでしょ。けど仲間意識、ね。嘘じゃないみたいだし、その人も納得しているみたいだし……うん、そつかそつか」

「納得したか？」

「ええ。貴女もごめんなさい、不躰に感情をぶつけてしまつて」

「いえ、気にしてませんよ。貴女の気持ちは理解できていますから」

「理解できちやうのね。うん、色々とわかつたわ」

「俺はよく分からんが、両者納得したなら早く食べよう。積もる話も自己紹介も食べながら和気あいあいとやろう。十年ぶりだつていうのに辛気臭い顔をしたくはない」

「ええ分かつたわ。あーもう不貞腐れた表情作るのが大変だつた！」

「さつきからお腹の音を我慢するのが大変でした。しかもこれみんな私達の大好物ですし、覚えていてくれたんですね」

「まあ十年前は毎日作つてたしな。それじゃあ、食べるとしますかね。いただきます」

「いただきます」

その後は夜遅くまで話をした。

十年間の出来事、近況報告、政治経済、今後の事。会話は途切れること無く、本当に十年分の会話をしてしまつたのでは、という程に話し込んでしまつた。

気付けば朝の気配がし始めていて、これには互いに焦つてしまつた。

「若い娘さんを留め過ぎたな」

「会話の殆どはこちらの質問からですし、先生の責任ではありません」

「でも皆に見つかつちや駄目だし、早く戻らないと」

「そうか、まあこれから会話する機会なんて幾らでも作れるし、また色々と話そう」

「ええ、楽しみにしてるから。あつ、ねえ先生。今日の夜つて空いてる？」

「ん、まあ大丈夫だが？」

「そう、じゃあ今日の夜に城まで来て！先生に腕を見てもらいたいのに！」

「おう、分かつたよ。それじゃあ日が暮れたら出向かせてもらうよ」

「ええ、約束よ！それじゃあ待つてるからね」

そう言つて二人は薄暗い空の下、城へと走つていくのであつた。

翌日は予定通り診療所の開業準備を始めたのだが、これが予想以上に早く終わってしまった。

薬や器材などの医者として必要な物は常に持ち運んでいたし、住居も店舗も孫権へ事前に手紙を送って手配してもらっていたので、そのまますぐに使えるレベルに整えられていた。薬などの材料流通ルートも十年の旅の中で既に構築済みだし、建業の南地区にはまともな医師が居ないと確認済みなので面倒なすり合わせもない。

やった事なんて宣伝用に看板と立て看板を新しく作って設置しただけ。午後が丸々空いたので近隣の人に挨拶していたら、簡単な診療と治療をする流れに。

結果、上々の評価をもらったが、開業予定日が繰り上がってしまった。

二三日ゆつくりするつもりだったのだが……まあ旅ばかりをしていて、腰を落ち着ける状態では気持ちが悪く落ち着かないという妙な具合なので、むしろ丁度良かったといえ良かったのか。

とはいえ、挨拶をしにいった人からの口コミ以上の宣伝はしないつもりだ。下手に大きく宣伝すると物珍しさだけで人がやってきて診察の邪魔になりかねない。

挨拶に行つては治療をし、茶を貰つては話をする、そんな和やかなやり取りをしていくと日が暮れ始めた。

俺は老夫婦との会話を切り上げ、診療所に戻る。

そして管理者に合流出来た旨を伝えるために出掛けた管輅のために簡単な料理を作り置きしておく。

蛇足の情報ではあるが、彼女は色々完璧だが、料理だけは駄目なのだそう。

自分の未来がこれ以上ないほど鮮明に見えるし感じれてしまう彼女は、自分があの料理を作ろうと思った時点で作って食べた未来が見えてしまうとと言う。結果それで満足してしまい、二度味わう手間を考えると面倒になって最終的には最低限の味付けで済ませてしまう。けど未来の見えにくい俺が料理を作ると何もかもが未体験でやって来てくれるのでとても嬉しい。なんて事を言っていた。

分かっている、あれはきつと言いつつだ。だって目が泳ぎまくっていたし。

だけどそれに突っ込むと面倒だと思ったので真実は闇の中だ。

そして具沢山のスープを作った後は改めて温めるだけという所まで用意をし、宇吉謹製の人避け効果を持つ呪符を発動し、城へ向かうのだった。

城の門前には兵士が控えており、名を告げるとそのまま鍛錬場へ連れて行かれた。

満面の星がきらめく空の下、そしてこれでもかと篝火の焚かれた鍛錬場は昼のように明るかった。

そこには懐かしい顔ぶれ全員と、会議室に居た十数人の新顔が待ち受けており、既に

多くの人間が戦闘態勢を整えていた。

やる気満々だなーと苦笑していると、周瑜が一步踏み出して迎えてくれた。

「夜分に来て頂きありがとうございます」

「気にするな、夜にもなればやることもない」

「そう言つて頂けると助かります」

「しかしなんだ、随分仰々しい出迎えだな」

「確かに闘気を持つて出迎えるなど無礼千万ではありませんが、皆十年間の集大成を見せるつもりでここに望んでいます。その気概に免じて許してください」

「許すも許さないもないさ。教え子の成長が見れるというのは教師冥利に尽きる」

さて、向こうの準備は万端みたいだし、俺も準備運動でもしようかなあと思っていた所に、新顔の少女が疑問を呈した。

「皆で集まつて鍛錬をすると伺つたので来たのですが、これはどういう事でしょう。昨日の話ではあちらのお方は医者なのですよね？ 怪我を伴うかも知れない訓練をするのでしょうか？ 凱旋が控えているというのにそういった無茶は控えるべきだと思うのですが」

「そうだな、我々も当時は丁奉の疑問をそのまま感じていたよ。ではそうだな、疑問の答えと先生の肩慣らしに丁度良いか。丁奉、謙信殿と打ち合ってみろ」

「はい？」

「きよとんとするのは分かるが、ともかく何も言わず謙信殿に向かつて行け」
「……周瑜様がそう言われるなら」

思い切り不服そうな顔をしながら中央に進み、丁奉は得物を構えた。その構えの自然さから、丁奉の腕前がある程度見て取れる。

しかし十年前の光景を思い出すな。腕前といい、年齢といい、目の前の丁奉は十年前の黄蓋とかと同じぐらいだし。

なんか懐かしくなってきたし、ちよつと色々と教えたくなってきたよ？

「先生、今日ばかりは教導など考えないで頂きたいのです。それと丁奉は芯の強い子ですから、散々に打ち負かしても大丈夫ですよ」

どうやら俺の考えは相変わらず筒抜けらしい。まあそれなら今は身体を温める事を優先しましょうかね。

「参り、ました」

目の前には大の字で寝転がり、息を荒げた丁奉の姿があった。

「ありがとう。丁奉と言ったかな？ 君は筋が良い。何より目と当て感が良いね。遠距離離武器にも適正がありそうだから、黄蓋についてそつち方面も鍛えてみるといい」

「は、はい、ご助言、ありがとうございます、ます」

彼女は辛うじて立ち上がり、そう言つて頭を下げた後、足を引きずるようにして端っこに進み、壁を背にして座り込んでしまった。

やり過ぎてしまっただろうか……まあ皆が後でフォローしてくれる事を期待しよう。

「それでは次は農らか」

「時間が勿体無いから二人で行かせてもらおうわよ」

進み出てきた黄蓋と程普を見て、思わず笑みが溢れてしまう。

身体の成長は勿論だが、内に秘める闘気が全く違っている。弛まぬ鍛錬でしか得る事の出来ない内の充実が簡単に見て取れる。

十年前にフルボッコにした時と同じ面子という事、その成長が戦う前から分かつてしまう事に懐かしさと嬉しさを感じる。

まああれどだ、ここでは再び積み上げた自信を叩き折つてやるのが礼儀という物だろう。

「ああ、十年前と同じく二人一緒に沈めてあげよう」

「ふっ、あの頃の農らと一緒だとは」

「思わないことね！」

そうして二人同時に彼女達は動き出した。

「正直俺は感動しているよ。黄蓋、気を込めながら意を自在に消す、その若さで弓の境地に達しているとは思ひもしなかった。程普、常に七手先まで読み、巧みに流れを誘導するその技は大陸でも五指に入るだろう。意を汲む黄蓋と流れを作る程普の組み合わせは凶悪の一言だった。

本当に、お前達に教える事はもう無いんだなあ」

一戦を終えた俺は弟子の成長に感慨深くなり、思わず本音を吐露してしまった。

目頭が熱くなりそうなので、指で擦って熱を散らす。

「そ、その台詞は、逆の立ち位置になって、言ってもらいたいとう」

「本当に、化物よね、先生って」

丁奉と同じく大の字で寝転がり息を荒げる二人。けれど先ほどと違い、俺も少なからず汗をかいている。

ここ百年ほどでは無かった事だ。素直に二人を賞賛するべきだが、何とも悔しい。最近では現状維持程度に留めいていた鍛錬を改めようと俺は心に決めた。

ともあれ、今はこの熱さを途切れさせる訳にはいかない。

黄蓋と程普が中央から離れ、三人が進み出てきた。

「次は韓当達か？」

「おうともさ！ 本気を出すのは連合以来だし！ 体調は一晩ぐつすりして万全だし！
せんせと待望の再戦だし！ 高まつてるぜえ！」

「祖茂、お前黄蓋達の姿を見てよくそんな元気でいられるな。あつ先生、是非とも手加減
よろしくお願いします」

「しかし韓当、祖茂の気持ちも分からなくはないでしょう？ 気の高まりを抑えきれて
ませんよ」

「……まあ朱治の言う通り、一人の武人として高揚はしているけど、しかしそれとこれと
はなあ」

「おいおい韓当よう！ これで滾らなきや虎の臣下失格だぜ！ そんなじゃ先行かせても
らうかな！」

「ああもうまた一人で突撃してからに、朱治、間隙埋めを頼むよ」
「任された。二人ならきつと先生を抑えられる、その隙を狙い打たせてもらおう」

突破力のある祖茂、鉄壁の守りである韓当、視野の広い朱治、とてもバランスの取れた三人には結構粘られた。だが朱治に細かく礫を飛ばして集中力と体力を使わせて優先的に狙って疲弊させ、朱治が鈍った所で韓当を弾き、祖茂を孤立させて意識を刈り取った。そうすると火力が足りないと悟った二人はなすすべもなく降参した。

自分の長所を伸ばした戦い方に、俺は非常に満足していた。将の戦い方はそのまま部隊の運用に反映される。こいつらの戦い方は尖っているが全体で見れば調和が取れている。

次の面子は以前年少組と呼んでいた子達に途中合流組だ。しかしその中に孫策は居ない。目で周瑜に問いかけるが、彼女は微笑むだけだ。まあ、とんでもない闘気が奥で渦巻いているので趣旨は丸わかりなのだが。

後の事を考えて温存しながら戦おうと思っていたが、若い子達が存外にやるのだ。

武才において軍内屈指の太史慈と甘寧を先鋒に、小回りの聞か蔣欽と周泰を遊撃に、視野の広さと思考の柔軟性のある孫権と周瑜を中央に置いて、変幻自在の戦法でこちらを翻弄してくる。

時には勢揃いで攻め立て、一斉に退いてみたり、孫権が飛び道具を駆使したりと、突撃、迎撃、強襲、反転、誘導、ありとあらゆる手でこちらを揺さぶり、攻撃を往なす。

正しく一心同体、不離一体の攻防に攻めあぐねていたが、負担のきつい前衛組が少しずつ指示についていけなくなり、最後に一か八かの捨て身による波状攻撃を仕掛けてきて、それを避けきって勝負あり。

「全てを使いきった素晴らしい攻防だったな。全く、褒める言葉しか出てこないよ」

「せ、先生は、何故、体力が持つのです、か？ 遅延戦法など、なりふり構わない戦術、を取ったというのに……」

「体力を使わない戦い方もあるという事だ。相手の力を使う合気、動きに合わせた呼吸法、無駄を省いた体術、相手の動きに先んじる反射行動。その他諸々を遺憾なく発揮しただけさ」

「まだまだ私たちは、極めきつてなど、いないのですね」

「おお、だからまだまだ楽しめるぞ」

「まだまだだと良い笑顔で言われましても……しかし、そう言われて喜ぶ変態が次に控えています。」

叩きのめして上げて下さい」

「物騒だな、まあ分かったよ」

いよいよ真打ちの登場である。

38. 聞かないから答えない

鍛錬場の奥、こちらの剣戟など知った事かと、壁に向き合いひたすらに闘気を練っていた孫策がようやくこちらを向いた。

ある種超然とした雰囲気を纏った彼女はゆっくりとこちらに進み出てきた。

「お待たせ」

「全然待つてないさ、楽しんでたぞ？」

「ふふつ、皆の全力を楽しんでたで済ませちゃうんだから、先生つてやっぱり先生よね。でもなんか不思議だわ、先生が汗をかいてるのを見るのは」

「十年前では有り得ない事だったからな、それだけ皆成長していたつて事さ」

「これは単純に先生の力を畏怖するべきなのか、汗をかくなら倒せる可能性はあるのだと喜ぶべきなのか、ちよつと判断に困る所よね」

「なんだそれ、俺も剣で刺されれば死ぬ普通の人間だぞ？」

「普通の事なのに、妙に嘘っぽく感じるのは何故かしらね。ちよつと試してみましようよ」

「お前の剣が届くのなら、お好きに」

「ふふつ、言ったわね。あつ、お願いなんだけど、南海霸王を使わせてもらいたいんだけどいいかしら？」

「いいぞ、あの剣じゃなけりや受け止められんדרו」

「ありがと、鍛錬用の剣なんて一合もたないでしょうし、それじゃあ興が冷めちゃうでしよ？」

「俺も特製の剣を使わせてもらおう」

「ええ、存分に打ち合いましようね！」

力と狂気に酔ったような様子の孫策。昨日の様子からは分からなかったが、すっかり戦闘狂に仕上がっている。

戦い尽くしの十年が彼女をそういう風に育ててしまったのだろう、そうあらねば生きていけなかったのだろう。

仕方のなかった事とはいえ、このまま行けば身の破滅を招きかねない。ここは彼女の先生として再教育してやらねば。

「受け止めてやるさ」

互いに真剣を抜き、鬨気を滾らせ、勝負は始まった。

そして俺は彼女の剣を受け続けた。

気が込められた剣は避けるのが困難だ。寸で避けると刀身から漏れる気に当てられてこちらの気が変調してしまうので、大きく避けなければならず隙になりやすい。なので同等以上の気を込めて打ち合わなければいけない。

だがしかし、彼女の募らせた感情を受け止めると言った手前、気を込めすぎて決着を急いではいけない訳で、同等より少し上を狙って気と剣速を調整しなければいけない制約がある。

これがとてもシビアで集中力と体力を大きく奪っていく。調整とか制約とか上から目線で言っているが、その垣根は言うほど高くも厚くもない。

逸話補正、天賦の才、すこぶる健常な身体、正しい鍛錬、驕りのない精神。これらで構成された孫策は恐らく現時点で大陸五指に入る実力を既に備えている。

俺と彼女の分かりやすい差など経験ぐらいしかないのだ。

しかもこの戦い、経験をさほど必要としない合理を突き詰めたぶつ叩き合いである。フェイントも何もない、速度と力を出し切って急所を狙う単純な殺し合い。

つまり彼女の得意分野である、そんな苦境で微妙な調整をし続けるのは本当に骨が折れる。

「あははっ、今私全力を出せてるわ！ 出し続けて倒せない！」

とても嬉しそうに彼女は笑った。

一秒で六合を交わし続け、そうしてもう十分程戦っている。互いに気力も体力もまだまだ充実しているが、

「付き合ってくれてありがとう、次は先生の土俵で戦いましょう！」

孫策がそう言った直後に戦い方が変わった。緩急を入れ、体術を繰り出し、周囲の物を使う。

素早い状況判断と相手の心理を読む戦いは経験が物を言う、確かに俺の土俵である。整然とした剣戟が、途端にどたばたとしたアクションムービーの様相を呈する。

鍛錬場を縦横無尽に駆け回り、周囲のあらゆるものを巻き込み、俺達は戦い続ける。十年前の孫策が苦手としていた戦い方だ。彼女は天賦の才を存分に発揮しあう事を好み、こういった相手の力を削り、自身の力を相手から眩ませる戦い方を避けていた。

十二分に戦えていると言えるが、しかし先ほどの斬り合いに比べるとやはり練度が劣っている。

だが敢えてそうした戦いを挑んできたのは……。

「先生、私強くなったでしょう！」

その成長ぶりを見て欲しいのだろう、苦手だった物もこれ程までに修めたのだと。

「驚くほど強くなってるよ」

「先生が言っていた通りの訓練を毎日欠かさずやって、実戦では死線のギリギリを潜り続けて、私は誰よりも強くなったわ！」

「成長ぶりを見れば分かるよ」

「無理難題をこなし続けて、いっぱい無茶をして、悪人を殺して、仲間を殺されて、そんな事を繰り返してたら、精神だつて強くなった！」

「そうか」

「私は正しかったんだよね、先生」

「そうだな」

「私、頑張ったよね？」

孫策の泣きそうな表情を見て、先ほどちらりと見せた狂気が彼女の壊れる前兆だったのだと思いついた。

以前話した集団の中にある孤独に彼女は陥ってしまったのではないだろうか。

誰よりも頑張つて、長だからと強がつて、結果本当に誰よりも強くなつてしまった。そうして頼るタイミングを逃したのではないか。

勿論これはただの推測である。

だが少し彼女の剣について気になっていたのだ。別れてから黄蓋や程普が孫策を鍛えたのなら、彼女の剣には誰かしらの色というものが残るはずなのに、それが一切見受

けられなかった。俺は基礎しか教えていないから、彼女は完全に我流で剣技を洗練させていった事になる。

そう考えると推測は進む。

周瑜とは働く役割が違うので離されていただろうし、黄蓋達は孫策に孫堅の姿を重ねて過剰気味な期待をしていた。だから彼女を支える者は厳密にはいなかったのでは、と。

勝手な推測ではあるが、割りと当たっているのでは、と思う。

ともあれそうであったとしても黄蓋達は責められないだろう。彼女達も一杯一杯だったのだろうし、無意識的に拠り所を必要としていたに違いないのだから。

ここまで考え、ならば孫策に今必要な事はなんだろうと改めて考える。

誰にも頼らず天辺に手をかけてしまった少女に必要なのは、きつと孤独からの解放だ。

暗闇の中上へ上へと駆け上がった彼女に、お前よりも上には上がまだまだいるのだと、天辺だと思っていた場所よりも先があるのだと、追いかけるべき背中があるのだと知ってもらおう。

ここで周瑜の言った「叩きのめして上げて下さい」という言葉を思い出した。

そうか、あれはきつと周瑜は孫策の気持ちを理解しての言葉だったんだな。自分では

孫策のテリトリーに至れないと悟ったから、俺にその役割を託したのか。

分かったよ周瑜、俺が孫策を強者の孤独から引きずり出そう。

自分はまだまだだったんだと省みてもらい、周囲を見渡す切っ掛けを作るから、後はお前や孫策を取り巻く皆がどうにかしてくれよ。

やる事は当初から変わらないが、決意を新たにした俺は集中力を増した状態で彼女と向き合う。

しばし斬り合いを続け、自然と鍛錬場の中央へと至った俺達は示し合わせたように一足飛びで距離を置き、互いに剣を構えて向き合った。

「最後は私に合わせてくれるんだ」

「何時だってそうだっただろう?」

「そうだった、得意になつて鼻を伸ばすとすぐに叩き折りに来てくれた」

「今回だつてそうさ、お前の成長ぶりは驚嘆するが、俺はお前の先生だぜ?」

「そう、それじゃあ行くわよ」

彼女は気を全身に巡らせ、地面を蹴った。

矢よりも速い突進、タイミングを誤る事無く振るわれた剣、最高の攻撃に、俺は真正面から応える。

気を最大解放し、振るわれた剣を迎撃する。

ぶつかり合った剣はこの戦い最大の音を響かせ、そして南海霸王だけが跳ね上がった。

俺はそのまま孫策の首元に剣を突き付け、

「……までだ」

終わりを宣言する。彼女は複雑な表情を一瞬浮かべたが、すぐに表情を消した。そして何を言うでもなく肩の力を抜き、顔を隠すように俯きながら一息をはいた。

俺は剣を仕舞い、孫策の頭に手を置き、優しく撫でる。孫策はビクリと身体を硬直させたが、そのまま俺の手を受け入れてくれた。

「俺に本気の片鱗を出させるとはな、本当によくやったよ、お前は」

そう言葉をかけると、彼女の身体が小刻みに震え、ぼたりぼたりと涙が地面に落ちた。

「私、負けたんだね」

「ああ」

「私、強かった？」

「ああ、項羽と光武帝の次ぐらいに強かったさ」

「ふふ、何それ、というか本気の片鱗って何よ。あーもー訳分かんない」

そんな風に涙声での会話はしばし続き、そして最後に、

「ありがと、先生」

と一言零し、孫策は無言になって泣き続けるのだった。俺は彼女の頭を撫でながら、彼女の涙にどれだけの意味が込められているのかを宛もなく考えるのだった。

「もう、大丈夫です」

顔を上げた彼女は目こそ赤くなっていたが、清々しい表情を浮かべていた。

「改めて今日はありがとうございました、先生。ここにいる全員にとって実りのある時間でした」

孫策は改めて礼を言つて場を締め括った。

「一件落着という所か」

周瑜がとても優しい目と表情でやってきて、立っているのもやつとという様子の孫策に肩を貸した。

「ありがと、周瑜」

「ふふつ、しかし随分と派手にやらかしたものだ。鍛錬場はぐちやぐちやで、居合わせました私たちはぼろぼろ、剣戟の音は城の外にも響き渡つただろう。明日には城で何があつたんだと問ひ合わせが殺到するな」

「あはは、ごめんね、途中から興が乗りすぎちゃつた」

「こらこら周瑜、感動したのを誤魔化す為に茶化すのはやめよ。」

謙信殿、此度の戦いは武人にも軍師にも非常に有益なものでした。武人として武の頂きの高さを見ることが出来、軍師として個の戦闘力について新たな認識を得る切っ掛けとなり、臣下として我らが主の強大さを直接感じる事が叶いました。他にも感謝したい点が多々あり、どう礼を尽くせば良い物か考えあぐねております」

「礼などいらんさ張昭、教え子の成長を見て取れた、それだけで俺は十分に満足しているよ」

「あれだけの物を見せて頂いたのです、何も礼なしとはいきませんまい」

「以前言った約束さえ守られるなら、俺はお前達の教師で在り続けるよ」

「……そうですか、ならば約束を改めて厳命する事で礼としましょう」

「しっかしせんせーよう、それだけの腕があるのに何で表舞台に出ないんだ？ なん

つーか、勿体無いぜ」

祖茂が発した十年おきの最もな疑問に、皆が固まった。

「詳しくは言えないが、俺は本来世俗に関わってはいけなないんだよ。個人的に人と接したり、治療したりするぐらいなら大丈夫だが、どこか大きい勢力に直接所属したりだとか、お偉い人間の知己を得たりだとか、一般人の枠を大きく逸脱するのは厳禁なんだ」

お前聞くんかい、あんた話すんかい、という声がどこからか聞こえてきた気がする。

「んーだったら今の状態とか、治療に行脚したりとかってかなりまずいんじゃないの?」
「す、すごいな、儂はここにきて初めて祖茂を尊敬の目で見ておるよ」

「私もよ、無神経もここまで極まれば偉大よね」

黄蓋と程普がこそこそそんな事を話していた。

「治療行脚は今の所大丈夫だ、五斗米道の間人なんかでそういう事をしている人間はざらにいる。だが正直お前達との付き合いは少々不味い所まで来ている。幾人もお前達の所だけに塾生を送り込んだ事を咎められた」

「えっ、咎められたって、大丈夫かよ? つか先生が誰に咎められるってんだ?」

「釘を刺されただけだから俺に何かあったわけじゃない。だが私塾の開講はもう出来ないな。誰か、という問いについては何も言えない」

「そっかー先生にも色々事情つてもんがあるんだな。じゃあさ、ウチらとの関わりってどうなるんだ? もう会えないのか? そいつあちよつと寂しいぜ」

「核心しか突かない祖茂に私は懐いているよ、なんとというかこう、心臓に悪い」

「韓当は特にですが、私達が変に気を回し過ぎていただけなのでしようかね。先生は何時だって聞けば答えてくれる人だったと今思い出し、納得しています」

韓信と朱治がこしよこしよとそんな事を話していた。

「前話した時と変わらないさ、所属を明言しないこと、戦場には連れて行かないこと、こ

れらが守られるなら特に制限はない。診療所で治療を受けに来るのも、話し込むのも大丈夫だ。けどそうだな、城に呼ばれるのはもう不味いかもしれないな、所属の明言に抵触する可能性がある」

「そつか、今ここで派手にやらかしちやつたしなあ。でも診療所まで会いに行けばいいだけなら、まあいいつか。そんじやあこれからも頼むぜ、先生！」

「ああ、お前は他の奴らよりウチへ運ばれて来そうだからな、よろしくしてやろう」

しかし祖茂ばかりが聞いてきたな、もう一人ズバズバと聞いてきそうな人物がいるのに。

と、孫策を探して周囲を見ると、彼女は周瑜に背負われて眠っていた。

まああれだけ気を放出し、肉体を酷使したのだ、眠りに落ちるのも仕方ない。

俺の視線に気付いた周瑜が一步踏み出した。

「我らが君主もこの有様です、そろそろお開きにしましょう。先生、今日は本当にありがとうございました」

「いや、構わんさ。それとさつきの話、孫策に伝えておいてくれ」

「はい、仔細伝えましょう。送りに人を」

「そういう気遣いはいらん、皆疲労困憊らしいからな、さつきとゆつくり休め」

「ありがとうございます、ではまたこちらから伺わせてもらいますね」

「おう、いつでもどうぞ。それじゃあまたな」

一同が頭を下げて送り出してくれたのだが、そういう偉い人扱いはここ最近ではご無沙汰で、先生らしい事をしたのも久しぶりだったので、妙に気恥ずかしくなってしまうた。

俺は気恥ずかしさから小走りに鍛錬場を後にするのだった。

39. 相手もまた傑物

劍を打ち合わせた五日後、華々しい凱旋パレードが催された。

旅をして来たとは思えぬ綺麗な皆、汚れ一つない豪華な衣装、今からでも外を走らせろと氣力十分の馬達。

どこをどう見ても旅帰りではないのだが、民衆はそんな事どうでも良いとばかりに大声を出して歓迎の意を表している。

皆が通る大通りには警備兵が並び立ち、溢れる民衆を押し返しているが、まあそんな者がいなくとも彼女達に近づくものなどいないだろう。

氣を張り巡らす事で、並の人間を一定以上近寄れなくしているのだ。

無意識化に働きかけるものなので、分かりやすい警戒を見せるなどして熱狂に水を差さないよう彼女達なりに配慮しているようだ。

そのまま彼女達は城に入り、しばらくして城の広場に民衆を招き入れた。

こういう場合は何か大きな宣言があるものだ。皆もそれを感じ、声を押し殺して待機する。

すると高台に孫三姉妹が上がり、声を張り上げて話し出した。

母が亡くなる場面から辛く苦しい十年間を話し、十年間迷惑をかけた民衆への謝罪と
労い、ここに至った喜びをそれぞれに謳い上げた。

民衆はそれを黙々と聞き、多くの人間が涙を流している。

最後に孫策が自身の領地を呉と呼ぶと独立を宣言、そして呉を繁栄させる宣誓を行っ
た。

そこで民衆は大いに沸き立ち、張り裂けんばかりの大声で孫家と呉の賛美を叫んだの
だった。

俺はその堂々たる様に、四百年前に劉邦様が中華を統一した際の演説を思い出した。

そこではつと気付いた。

孫策を見ていて時折感じていた既視感の正体が分かったのだ。

孫策は快活で、自信に満ちあふれていて、人を惹きつける魅力を備えていて、まるで
王になる前の劉邦様を見ているようだった。

それに極めつけは周瑜である。

孫策と周瑜の掛け合いに良く感じていた既視感は、四百年前によく見た光景、劉邦様
と曹参さんのやり取りまんまだったのだ。

「来世で会いましょう」

俺の言った台詞だ。けれど俺は本気で来世があるとは思っていなかった。死に行くあの人達に対する鎮魂と、長く生きるであろう俺に慰めとして向けた言葉である。

だがもし本当に生まれ変わりがあるのだとして、彼女達がそうであるなら、再び支え合える人達に出会えた喜びを感じるし、出会えた場がまたもや戦乱の時代という事に残酷さを感じる。

まあ、前世について何かを覚えている訳でもないのは、十年前に一年みっちり付き合ってた分かってるので、この感傷に意味など無い。

ともかく、デジャヴには理由があつたと分かってとてもすつきりした。

それからは万端に準備された祭りが始まった。

建業全体が夜通ししっちゃかめっちゃかの喧騒に包まれ、その状態が三日三晩続いた。

祭りが許された三日間の最後の夜、懐かしいメンバーが俺の診療所へ押しかけてきた。

俺が登城する事が出来ないと云ったので、ならば診療所で宴会だ！ と相成った訳である。

まあ診療所はそこその広さがあるので、詰めれば二十人ぐらの宴会は許容でき

る。

俺は快く受け入れ、酒と料理を用意して振る舞い、小さな宴会が始まったのだった。

ぎやーぎやー騒ぐかと思われたが、三日続いた祭りであつちこつちに付き合われ続けた皆様方は結構疲れ果ててしまつていたので、料理に舌鼓をうち、酒は酔う為ではなく味わう為に飲むという至極真つ当な楽しみ方をしていた。

うん、暴れん坊達は疲れているぐらいが丁度良いのである。

だがしかし、年齢の事もあり、まだ具体的な立場が決まつていない孫尚香だけは祭りを純粹に楽しめており、また子供らしく元氣ハツラツの彼女に付きまとわれ、祭りの間ずっと手を引かれて

そして俺は何故だか元氣ハツラツの彼女に付きまとわれ、祭りの間ずっと手を引かれて過ごしていた。

彼女は先日の鍛錬場での一件に関われなかつた事を酷く恨んでおり、鬱憤を晴らしているとの事だ。寝ていた孫尚香と起こさなかつた面々に責任こそあれ、俺には一切責任がないと思つているのだが……まあ子供心に寂しかったんだらうなーと勝手に納得して甘えさせている。

今も彼女は俺の膝の上である。

ともあれ、改めて真名を交換し、十年間の溝を埋める為にあれやこれや話し合い、どこまで盛つてあるのかもわからない活躍や武勇伝をぶつけ合い、今後の夢をこれでもか

と語り合い、宴は熱く盛り上がった。

しかし一番白熱した話題がずっと後ろに給仕として控えていた管輅についてだったのには苦笑がこぼれた。

管輅には呂華という偽名を用意していたのでそれを伝え、記憶喪失だったので拾ったと説明した。胡散臭い設定だったが、この荒れた時代には無くはない話だったので、皆気の毒そうに管輅を労っていた。

そして何事も無く宴は朝日が昇る直前まで続いた。

何人かが泊まつて行きたくないと駄々をこねたが、風紀取締役である張昭に引き摺られて行った。

それからは平穏な日々が続いた。

朝早くに起き出し、外へ鍛錬に出かけ、朝ご飯を作り、診療所を開け、爺さん婆さんの話を聞き、時たまやってくる患者を診、やってきた子供に絵本を読み聞かせ、気が向いたら水飴などをやり、昼ご飯を作り、やってきた友人知人の話を茶を飲みながら聞き、夕方になれば診療所を閉め、夕ご飯を作り、鍛錬に出かけ、ぐっすり眠る。

俺個人としてはそんな平々凡々としたサイクルを送っていた。

呉の皆は、かなり忙しかつたらしいのだが、それでも誰かしらが診療所に来ては茶を

啜つて話し込み、ご飯を食べて帰っていくのだった。

まあ冬の前後は慌ただしくなるのは仕方ない。

本格的に冬に入る前に食糧事情、民の防寒事情、他国の事情を調べ上げ、限定的な減税、必要物の配布、他領への援助などの対策を練つて実行しなければいけないのだから。本当なら茶なんてすすつてる場合じゃないだろうに。

そうして冬がやつて来ても俺の生活サイクルは変わらなかつた。

担当地区を周つて患者がいらないかを探し、居れば治療、居なくても予防をしていった。逆に呉の皆はやる事をやりきつて暇そうだった。

雪上訓練、集団鍛錬などは勿論行い続けているそうだが、入つてくる情報が減少するので机仕事がばつたりなくなるのだ。

人のやり取りそのものが減るので、情報の漏洩も入手もし辛くなり、整理するべき内容が入つてこない。南との交易関係が時たま忙しくなるぐらいだ。

他者を出し抜くにはもつと情報の入手に奮闘したい所だが、冬の長江に隔てられると難しい。

雪と気候が邪魔して出せる船が少なくなり、出せたとしても非常に目立つ。

こうなると密入国は紛れる人がいなくて見つかりやすくなるし、商人に扮しようにも

人の出入りが少ないので念入りに調べられてしまつてボロが出る。

頼みの綱は既に送り込んである密偵達だが、情報の収集量と持つて帰つて来るリスクが釣り合わない状況だろう。商人として潜り込んでゐる者以外は、人の出入りが少ない中下手に動き回れないし、呉へ帰ろうにもこんな冬に何処に行くの？ と怪しまれる。

雪中であろうと動き回つて怪しまれない商人も、戦争が近いからと検問がやけに厳しくなつていて今冬はあまり動けなくなつていた。

天然の防壁が悪く働く瞬間である。

なので今は南から食料資材を調達し、城壁や砦の建造修復を遅々と進め、兵の鍛錬を行つて自国の富国強兵にひた走るしか無い。

といった訳で、あいつらが俺の所に来る時間がやたらと増えた。

まあやれる事は一応やつてゐるし、俺も暇だから良いんだけどさ、本当に大丈夫なのかねえ。

そうしてその心配は見事に的中した。

長く長江の渡航を妨げていた雪が解ける頃、ある知らせが建業に舞い込んできた。

なんと既に袁紹と曹操が戦いを始めていると言うではないか。

事の重大さにリスクを顧みず明命を直接向かわせたが、明命が情報を持ち帰る間もな

く、両者の戦いは官渡で終わり、あつという間に曹操が冀州を統治する事になった。ここまで来ると魔法のような手際だ。

全てが終わった後、明命がその内情を持ち帰ってきたのだが、驚くべき事に、恐るべき事に、曹操は誰にも気付かれる事無く秋の段階で袁紹の懐に手の者を数多送り込んでいたのだった。

荀彧などの伝を利用し、内部から徐々に食われていた袁紹は、讒言に次ぐ讒言、甘言に次ぐ甘言に惑わされて優秀な人材を失い、組織の空洞化を招いてしまった。

呉の将は冬の内に気付くべきだったのだ。

反董卓連合で本家を空けなくてはいけなかったとはいえ、明命に容易く袁家最重要区画へたどり着かれる程度の情報管理能力しかもっていなかった袁家が、あの冬の間だけは厳しく激しく細作の摘発に力を入れていた違和感に。

戦乱の世が始まるという事で力を入れていたと思うのは仕方ない、そう思うように仕向けられていたのだから。

だがそこで少しでも現状を疑い、曹操と袁紹の緩衝地なども無理して調べてみればすぐわかったのだ。

本来何より厳しく取り締まらなければいけない曹操側よりも、何故か呉への警備体制が厚かった事に。

秘密裏に袁家を侵食していた曹操は、袁紹との決戦のその先、呉との戦に備えていた訳だ。

曹操の恐るべき所は、蝗害によつて手が広げ辛い状態でありながら、長江での呉に対する水際対処を優先した所だ。

人材、情報、物資、様々な箇所を侵食していたとはいえ依然袁家は強大であり、官渡での戦いも薄氷を踏むような勝利だったと聞く。

そこを見極め、情報戦において呉を優先した曹操という傑物。怖気が走るようなバランス感覚、管輅レベルの占い師でも抱えているのではと疑うほどの先見の明である。

曹操について四百年の積み重ねた情報を持つ管輅にその人格や能力を尋ねると、それをやってのけるのが曹操という存在だと言われた。

だとしたら間違いない、曹操こそが三国一の強者だ。

呉の皆が幾ら後悔しようとは戻らない。

これからどうするべきかをこそ話し合わなければいけない。

「で、なんで俺の所でやるのかねえ。世間話ぐらいなら構わんが、作戦会議となると所属の明言に抵触しかねないんだが？」

「申し訳ありません、皆を止める事が出来る者は先生しか居られず、やむなくだったので

す」

「それにこれは作戦会議ではありませんせぬ、結果は既に出ていますからもう。あくまで白様は仲裁役です」

「あーそうかい」

冥琳と雷火を横に侍らせ、俺は目の前の喧々諤々の論争をぼーっと眺める。

主戦派と慎重派に分かれて、己の主張をぶつけ合っている。

主戦派は雪蓮を筆頭に武闘派の面々が、慎重派は蓮花を筆頭に政治にも長けた人間が集まっている。

しかつしあれだ、一時間もこんな不毛な言い争いをしていいのかね。

更に三十分ほど経った所で、そろそろ出張医師活動でも始めようと腰を上げた所で、「先生はどう思われますか?!」

と姉妹から声をかけられた。

あまりの剣幕に少し腰が引けてしまった。取り敢えず俺は周囲を見渡す。

すると皆がこちらに注視し、意見を聞く態勢を取っていた。

冥琳と雷火に目をやると、お願いしますと目で訴えかけられた。

結局俺が口を挟むのか。大丈夫かなこれ。

「あー正直これは事態を客観的に見れば答えが出てくる。今回は戦わない、いや、戦えな

いというのが正しい」

「それは何故なのか、詳しく教えてちょうだい」

「まず満足に軍が送れない事。雪が解けてある程度船は引つ張り出せるようになったが、雪解け水によって増水した川を渡るのは難度が高い。だから軍を送るにしても、もう少し川が落ち着いてからになる。」

そして軍を対岸に渡せたとして、何処に送り込む？ 汝南か？ 許昌か？ 今敵の軍が何処にいるかをちゃんと把握しなければ、挟撃も本拠強襲もやられ放題だぞ。

だが曹操軍の動きを把握しようにも、曹操が掌握した領土は広く、調査にはかなりの時間がかかる。

その間に曹操が攻めてこないとも限らないから、兵は薄く広く、長江を睨む形で展開せざるを得ない。そうなると調査が終わり、さあ攻めようと軍を集中すればそこでまた時間がかかる。

ならば地道に領土を削り取って牽制をするか？ まあ不可能だわな。補給路は長江を挟んでいるから時間が掛かる、輸送費も馬鹿にならない、何より狙われ放題で危険と来ている。補給路が確保できなければ奪った領土の統治などが出来るはずもない。

今までのが万事上手く運んでいて、ここに來ての失敗を認めたくないのは分かる、けれど受け入れなきゃいけない。お前達は曹操との前哨戦で完膚なきまでに負け、後手に回

「……そうね、挽回しなきゃって焦りで目の前が見えてなかったわ」

「でもせんせ！　そういう事は教えてくれても」

「そこから先の発言は噤め。白様は我らと付き合うのは不味いと言いながらも、それでもなお付き合いを変えず、世話をしてくださっているんじゃないぞ。というかお前が一番世話になつとるじやろ。」

むしろ謝らねばいかんのは我らの方だと気付け、もう大丈夫だと太鼓判を押ししてくれた先生の顔に泥を塗った形なんじゃぞ。

正直ここへ来ることを提案したのは、恥を敢えて白様に見せ、戒める為と言っても過言ではない」

雷火が立ち上がり、厳しい口調で言い放った。

「白様、我らのわがままに付きあわせて申し訳ありません」

「そういう意図があったのか。まあでも、お前らなら挽回できると信じてるよ」

「有難うございます。聞いたなお前達！　我らは今窮地に立たされておる、が、まだ反撃の機会はある。ここから挽回するぞ！」

「「「応っ!!」」」

それから議論は着実に進み、しつかりとした道筋が立てられた。

軍は長江を監視、内部の徹底的な洗浄、情報統制の再構築、経済侵略の活性、各地諸侯への曹操の印象操作と繋がり強化、曹操領地の扇動等の計画が綿密に進められ、全力で実行される。

とはいえ、傑物曹操の前では時間稼ぎにしなければならないだろう。

だがその時間が勝利への一手を育てるのだ。

天の御遣い達という奇跡の一手を。

40. 一日休戦

そうして稼げたのは二年という期間だった。

呉がなりふり構わず横槍を入れまくったというのに、曹操はたった二年で広大な冀州を完全に手中へ収めてしまった。

いや、袁家存命の時から内部を侵食していたというのだから、二年も統治の邪魔をした呉の将達を手放しで褒めるべきなのかも知れない。

たかが二年、されど二年である。

呉が富国強兵を推し進めるには十分だったし、蜀がギリギリ国の体裁を整える時間もあった。

正直、二年で蜀を作り上げた天の御遣い陣営の辣腕は凄まじいものがある。彼らもまた歴史に名を残す才覚溢れる偉人なのだ。と再認識する偉業である。

しかしまだ時間が足りない。国の体裁を整えたとはいえ、まだ人を捻出できる程の余裕はない。

後一年、どうにか一年を稼いで欲しいと呉に要請があった。

長江から北を完全に手中に収め、もはや小細工ではビクともしなくなってしまう曹

操陣營から一年を勝ち取るには、曹操の旗揚げした魏と正面からぶつかり合い、痛打を与える他無い。

勝たなくてもいい、当たって一度でも押し返せれば、未だ日和っている諸侯の力も纏め上げて、一年の期間を得る事がどうか可能になる

とはいえ、それが如何な難事であるかは、周泰が手に入れてきた情報を鑑みれば分かる。

魏軍八十万、呉軍二十万。反董卓連合軍と董卓軍の戦いを思い出せばいい、無茶押しで容易く決着がつく絶望的な戦力差がそこにはあった。

現在は厳戒態勢が敷かれ、何時でも戦闘状態に移行できるよう皆がピリピリと警戒していた。

そんな中、曹魏動くとの報告があった。

いよいよか、と固唾を呑んで詳細を聞くと、皆が驚愕の声を上げた。

まさかの蜀方面への侵攻である。軍師との話し合いでも、魏との戦いは恐らく合肥で決まりだろうと推測が立てられ、準備が進められていた。

だがまさかの蜀への進軍。確かに蜀を潰されれば呉は魏に敵わなくなってしまうが、それにしたって侵略中に許昌を取られたらどうするのだ。

孫策達は曹魏の不可解な対応に頭を悩ませるが、とにかく蜀救援のためのすぐに軍を編成するのだった。

次の報告は早かった。

曹魏軍は許昌から蜀方面へ五日程の場所、新野で歩みを止めた。

更なる不可解な行動に軍師一同が頭を悩ます中、真つ先に理解を示したのは孫策だった。

彼女は誘われている、と言った。

どういう事だと話を聞く。

すると彼女は震える声で話し出した。

「本当に蜀を潰したいのなら新野なんかで進軍は止めず、軍を二十万ほど分けてさっさと攻め込めばいい。残った六十万は呉と蜀を隔てる壁として守りに徹する。そうして時間を稼いでいる間に蜀を落せば、もはや私達に勝機はない。

じゃあ何でわざわざこれみよがしに動きながら、進軍を止めたのか。

それはね、あいつは私達に最後の抵抗の機会をくれてやると考えているからよ。

私達と本気で戦いたいのか、蝗害の時に援助したお返しか、妨害工作の意趣返しなのかはわからないけど、舐められたものよね」

孫策は血が滲むほど掌を強く握りこみ、地図の広がった机に拳を振り下ろした。

「しかも新野、襄陽のすぐ近くを戦場として選ぶですって？ 本当にふざけてるわ！」
怒りによって震えていた声が、湧き上がる激情によって次第に金切り声のようになっていく。

「冥琳、全兵力を新野へ向かわせるわよ！」

「馬鹿なつ、守りは」

「もう守った所で仕方ないわ。玉碎する気で行かなければ勝てないわよ」

「お姉様の言う事が本当なら、私もお姉様と同意見よ。ごめんなさい冥琳、貴女が正しいと分かっているけど、これを見逃してしまえば、私達は孫家ではいられなくなってしまう」

「……相手の領土で、我らが本拠から距離もある、罠にはめられたら終わりだぞ？」

「裏では足を引っ張るだけ引っ張ったけれど、表では蝗害に苦しむ曹操領民へ援助してきたわ。もしその上で汚い手を使うようなら、彼女の信用は地に落ちる」

「確かに覇道に重きを置く曹操ならば、信用については誰よりも理解しているだろうな」
「勝算は薄い、けれど皆無ではない。襄陽近辺は周知しているし、袁術の圧政から解き放った事である一帯の人間の心は掴んでいる。中央への通り道で商人の行き来も多くさせていたから、情報は精度の高いものが多く入る。」

戦わなきゃいけない理由があつて、戦える要素があるなら、行かなくや駄目でしょう

？」

「分かった、分かったよ、それで計画を練る。三日後には二十万を引き連れて出立する
さ」

こうして戦いの準備が始まった。

軍を纏め、出立する際、孫策達が凱旋した時と同じぐらいの民衆の波が訪れ、口々に勝利を信じている、無事で帰ってきてくれとの大合唱が起きた。

彼女達、また彼女達が率いる兵達もその様子に大いに奮起し、勝利と再会の約束を声高々に宣言した。

そうして孫呉の軍は一ヶ月をかけて襄陽近辺までやってきたのだった。距離、行軍で
ある事を鑑みても異常なまでの速さだ。

別段飲まず食わず寝ずという訳でもなく、単純にここ何年もの間鍛錬に勤しんできた
成果と、この戦いに勝つのだという強固な意志が結果として表れただけである。

それほどまでに孫呉軍は心技体が充実していた。

新野近郊、そこには既に曹魏軍が展開を終えた状態で待ち受けていた。

さて、戦闘開始か、という所で三人の女性が馬を駆り、魏と呉の丁度中間の地点まで

進み出た。

その馬、装備、雰囲気から、彼女達が曹魏の頂点である曹操、夏侯惇、夏侯淵であると察しがついた。

呉から進み出るのは孫策、黄蓋、太史慈だ。特に目の良い二人が選ばれた。

互いの安全確認が済み、互いに今は手を出さないを確約を結び、二人の英傑が互いに一歩前に出た。

「此度は我らの誘いに乗って来てもらった事を感謝するわ」

それは舌戦を行う声量ではなく、世間話をしにきたと言わんばかりの気軽な口調だった。

だがそんな口調で彼女の持つ気配は誤魔化せない、紛うこと無き覇気が彼女から滲み出ている。

「来ざるを得ない条件を叩きつけてきた人物の言葉とは思えないわね」

しかし孫策も負けず劣らず、尖った鬪気を滲ませながら応える。そのあまりの鋭さに、曹魏の二枚看板が知らず武器に手をかけそうになる。

「あら嫌だ、そんな鬼気を漏らさないで貰いたいわ。うっかり開戦しそうになっちゃうじゃない」

しかし曹操は、抑えきれぬ鬪気向けられてなお平然と、むしろ嬉しそうに受け止め

た。

「何よ、ここでは戦わないのかしら?」

「ええ、ここまで素早い行軍ですもの、きつと孫呉の兵も疲れているでしょう?」

「今ここで疲れを表に出す孫呉の兵ではないわ」

「そうみたいね、鬪気に陰りが一切ない所をみるに、虎の軍隊は私達の精兵と並ぶのでしよう。けれど私は、万全の状態の貴方達と戦いたいので」

「……嫌味になるぐらい余裕ね」

「ええ余裕よ。けれど余裕だからという理由だけでこうしている訳ではないわ。必要だからやっているのよ」

「英雄譚が欲しいのでしょうか? 千年残る国の礎のために」

「……まさかそこまで理解しているとは、やはり貴方達こそが私の最大の敵なのね。そうよ、劉邦には項羽との激戦を勝利し、四面楚歌という夢を見せられたからこそ民衆を纏め上げ、漢建國という偉業を成し遂げる事が出来た。袁紹では作る事の出来なかった幻想を、私は貴方達で作りたいのよ」

「落ち着いて考えればすぐに思い当たることよ。それに劉邦と項羽を例に出すのなら、全く立場が逆じゃない。弱小の私達が劉邦で、貴方が霸王項羽でしょう?」

「あら、それじゃあ私が負けちゃうじゃない」

「ええ、私達が勝つから、間違つてないわよ」

「ふふつ、この状況で強気に言い切るのね、やはり面白い。」

と、そろそろ皆が焦れ出してきたわね。本題に行きましょう。

一日あげる。それで兵を最善の状態に仕上げなさい」

「良いのかしら？ 今の状態でも歴史に残る大戦をしてみせるけど？」

「完璧な状態の貴方達を完膚なきまでに打ち負かす。そうでなければ利が薄い。」

それに必要にかられてというのものもあるけれど、貴方達と戦いたいと心から思っているのもまた事実。

だから素直に受け入れなさい。

約束を反故にして目先の利益を優先する馬鹿ではないと分かっているでしょう？」

「……その提案を受けたとして、私達は手を出すかも知れないわよ」

「私達からは決して仕掛けないと今ここで宣言するわ、その上で手を出すというのなら構わないわよ。奇襲夜襲朝駆け、何でも来なさい。容易く跳ね返してあげるから」

「冗談よ、そんな汚名を残す馬鹿な真似はしないわ。疲れているのは事実だし、夜襲だの朝駆けだの中途半端な真似もしない。兵を徒に殺したくないもの」

「そう、では互いに高らかに宣言しましょう」

「そうね、期間は明日の中天でどうかしら？」

「分かったわ、その時にまた会いましょう」

曹操は距離を取り、声を張り上げた。

「我が望むは歴史に名を刻む正々堂々の大決戦！故に孫呉には休息のために一日の時間を与えよう！」

明日の中天まで決してこちらからは仕掛けないと、我が曹操の名を持って天に誓おう！」

「孫家頭領孫策、その提案謹んで受けさせてもらおう！」

我らもまた貴軍との決戦を望んでいる！明日の中天まで決して仕掛けないと亡き母に誓おう！」

両軍に響き渡る大将同士の宣誓は、驚きを持って受け入れられた。

戻った孫策を皆が無言で迎える。

「あれ、何この空気」

孫策は特に厳しい顔をしている周瑜に気付く。

「あつ、冥琳……あのー、えつとー、ごめん！勝手な宣誓しちゃって！」

「……」

「色々と考えてくれていたと思うけど、ああする他無くて！」

「……」

「だから怒らないで！」

「ん？ いや、怒ってなどいないぞ。勝手は謝るべきだが、お前の選択は最高のものだった」

「えつ、じゃあ何でそんなに厳しい顔してたの？」

「ああ、皆お前をどう褒めたら良いか悩んでただけだと思うぞ」

「えー謝って損した！」

「正直このまま戦いに望むのは厳しいと皆が感じていた、その上であの曹操に一日の猶予を約束させたんだ、褒めるしかないだろうに」

「あー私が一日を奪いとったというか、逆なんだけどね」

「そうだったのか、やはり曹操とは大した傑物だ。」

改めて聞くが、仕掛けなければ良いんだよな？」

「ええ、仕掛けなければいいし、露見しなければ良いのよ」

「ふふつ、戦場外の戦か、腕が鳴る。商人等に先んじて撒いてもらっていたものも余裕を持って実行できそうだな」

「あははつ、悪い顔してるわねえ」

「色々と仕掛けを潰されているからな、かろうじて通った物は悪辣に利用しなければ。」

「そうだ、皆にも言っておくが、何か発想を得たなら何でも言ってくれ。あらゆるものを手を尽くしてようやく戦えるという状況だ、直感的なものでも構わない。亞莎、何かあるか？」

「えっ、あつはい、あのー、で、でしたら、例えばですが……開戦前に我らの糧食を焼き、その罪をなすりつけて糾弾し、曹魏の風評と士気を落とす、我が軍には背水の陣として強制的に死兵を作る、など、ありでしょうか？」

「唐突で無茶な質問からえげつない答えをぱつと出してきたわね……この子が今冥琳が目を掛けている子？」

「そうだ、こういう生臭い作戦も立案実行できる希少な軍師だ。」

「だが今回は敵地の真つ只中、糧食を焼いてしまうと負けた後が悲惨になりすぎる」
「あうう、ですよね、駄目ですよね」

「着眼点と発想は素晴らしい。仕掛けが全て不発に終わればやる価値は出てくるだろう。」

「また何か思いついたらどんどん言ってくれ」

「は、はい！」

「では本格な休息の準備を行わせる。酒を除いて嗜好品は全て解放して構わん。細作は三交代で周囲の探索に回せ。将は全ての準備、確認が終わった後、全員で作戦会議を行

う。以上、散開」

「はっー」

そして夜、孫策は激論飛び交う作戦会議を一言断つて抜け出し、一人孫堅の墓参りに赴いていた。

今回呉の者は皆、墓参りに行くのを自粛していた。

挨拶に来るぐらいなら勝つ為の作戦を考えろと孫堅は言うだろう、だから勝つて勝利の報告をしに行こう、と皆で決めたのだ。

だが孫策はその約束を破った。

強大な敵を目の前にし、改めて勝算の薄い戦い皆を連れて来てしまったと孫家頭領として苦悩し、因縁の地での戦いという事に孫策個人としても苦悩し、様々な重圧に押し潰されてしまいそうになった孫策は母に縋りたくなつたのだ。

足取り重く墓の近くまで来て、気配を感じた。

細作が探りを入れに来たのか？しかしここは戦場から離れているし、人が紛れるには小さな森であり、小川があるぐらいで特別何かある場所ではない。

しばらく気配を殺して待つてみるが、気配は墓前で動かない。

細作にしてはそれがまたおかしい。孫堅の墓と言っているが、知らぬ者が見れば小さ

な岩が置かれただけの場所にすぎない。知る者、つまりは孫呉の極々一部の人間しか、その小さな岩が孫堅を押し潰した岩の破片とは知らない。にも関わらず、その気配は一切動かない。事情を知る人間は全て呉の陣地で明日の準備に奔走している筈だが……。

気分転換と言って抜け出している手前、あまり時間がない孫策は意を決し、墓の前に居る人物と対面するのだった。

「って白？」

「ん、なんだ、誰か隠れてるなーと思つたら雪蓮だったのか。お前も墓参りに来たのか？」

墓の前に居たのは、戦場に一切近付かないと宣言していた白だった。

41. そして戦場へ

皆が魏との戦の準備に奔走している頃、俺はというと、

「行くんですか？」

「んーそうだなー、旧友の墓参りでも行こうかなあ、とか」

「彼女達が心配なのですか？」

「……そりゃあな、とはいえ心配だけじゃないんだ、俺の教え子が実戦で何処までやるのか、二百年ぶりに見てみたいと思ってるな」

「そうですか、別に行くこと自体を咎めはしません。ただ」

「分かってる、戦闘には参加しない、治療も控える」

「正直、患者を前にした貴方が我慢出来るとは思えないのですが？」

「確かに患者を目の前にするると自制できるか分かんが。んーじゃああれだ、秘密裏に行く。それで前日に出来るだけ遠い場所に移動して戦場を観察するってのはどうだ？」

「……本当に戦場には関わりませんか？」

「勿論」

「そうですか、なら私も付いて行って構いませんよね？」

「ん、良いのか？ 逆に助かるぐらいなんだけど。割と真面目な話、曹操とのいざこざがあつてから、向こう方面の薬が切れかかつてるんだわ。襄陽周辺なら色々と手に入る物も多いだろうし、行つときたいんだよ」

「そつちの理由の方が旧友のお墓参りよりもよっぽど受け入れ易いと思います」

「まあそつちも嘘じゃないんだけどな。そんじやあ皆に先んじて、こつそりと襄陽に行きますか」

こんな感じで管輅との二人旅が決まったのだった。

俺と管輅は急ぎ襄陽へ向かった。

二人旅は慣れたもので、かなり良い速度を保つたまま旅路は進み、僅か二十日弱で襄陽に着いた。

着いたのは良かったが、襄陽は死んだように静かだった。人は建物から一切出てこず、全ての商店が店仕舞いをしてしまつていた。

まあそりやそうだ。すぐ近くで大軍が展開していて、大決戦が行われるのは間違いない。襄陽は戦時下であるのに、薬の買い付けをしようなどとは浅はかに過ぎた。

曹操軍も薬を買い付けか徴収かしているだろうし、全く馬鹿だったよ。

なので俺達は慌てて南陽へ向かった。

あそこからも徴用はあっただろうが、都が近く交易が盛んで、今もまだ戦争ビジネスに湧いているだろうから、今から行っても何かあるだろう。

そして急いで五日を駆け、南陽についてからは目ぼしい物を漁りに漁り、五日で舞い戻れば、呉から砂埃が見えるのだった。

マジか、なんていう進軍速度だよ、どんなに急いでも後十日はかかると思ってたんだが……甘く見ていたようだ。

何はともあれ、急いで戻ってきてよかった。

そして俺は二人の総大将の宣誓を聞き、その酔狂に笑ってしまった。

理屈は分かる。

曹魏軍は表面張力に達するレベルで増えに増えた、必要にかられての事だったが、その数をまとめるには戦争と戦功しか無い。

戦の強さは影響力の強さだ。そして戦の噂が印象的であればあるほど国民は安心し、あらゆる流れが活性化する。賊も発生しにくくなり、周辺への睨みも利かせられる。

現二番手である呉との戦鬪は早期決戦にて長引かせたくない。揚州交州はまだ発展途上であるが、冬でも食料が供給できると既に証明しているので、その可能性に恐ろしさを感じている訳だ。

曹魏は孫呉に表立つての大きな借りがある。故に裏の意図などをチラつかせて挑発し、領地に踏み入らせる。攻められたという口実を得、その上正々堂々と応対する事でその借りを消したかった。

もし来ないなら蜀に踏み入って攻略し、外交圧力からの属国化となる等の手段で統一をしていただろう。だけどあの霸王様は呉も完膚なきまでに下し、歴史的な完全勝利を指した訳だ。

しかしすごいな、曹操という女傑は。

自軍八十万とはいえ先頭に立てばその威容は見えない、そして目の前には敵軍二十万が迫る。そんな極限の状況で、勝利の先を見て行動している。

只人であるなら、いや如何な傑物であったとしても目先の戦闘に拘泥してしまう。勝てるなら安全に勝ちたいというのはごく普通の欲求だ。だが常識を捨て、休息を取らせただ事で五万の兵の損害が増えたとして、後に続く十年の損害と比べれば些事だと割りきったのだ。

前線に立つ将でありながら、王であり続けている。その有り様は遠い昔の霸王を思い出す、それだけで曹操がどれだけの怪物か分かるものだ。

総大将の言葉を聞いた後、俺は荷物をまとめて観察ポイントに移動しようとしたのだが、ふと孫策から孫堅の墓の位置を聞いていたのを思い出した。

先日は南陽へ急行したから行けていなかったから、何か酒でも買って土産話でもしてやろうと思いついた。

管輅には先に観察ポイントへ行くように言い、俺は襄陽に戻って医者はいらんかねーと馬を連れて歩きまわった。二件ほど風邪の治療を行い、家族にも整体なんかを施して、対価としてそれぞれ一人分の酒と月餅なんかを頂戴した。

町中を行ったり来たりしていたので、気付けばもう日が暮れそうになっていた。

こうしちやおれんと急いで孫堅の墓に向かう。

聞いていた場所をなんとか探し出し、それらしい物の前で酒と飯をお供えして手を合わせる。

「これが好物かも分かんが、何もないのは寂しいと思って持ってきたよ。だが、持ってきた話は極上だ、それで満足してくれよ」

そうして俺は孫堅との別れからを滔々と語り出すのだった。

気付けば完全に陽が沈み、満面の星空が広がっていた。

あちやー話しすぎた、管輅に冷たい目を向けられて静かーに延々と説教されるなこ

りや。

などと考えていると、人の気配が近付いてきているのに遅れて気付いた。

あちらもこちらの気配を察したようで、瞬時に気配を殺されしまい、気配での判別がつかなかった。

その判断と行動の早さから雪蓮や明命辺りが思い浮かぶが、曹操側の手練細作という可能性はある。

んーどうしようか、と悩んでいると件の人物が飛び出してきた。

「えっ、先生？」

良かった、雪蓮だった。

「ん、なんだ、誰か隠れてるなーと思ったら雪蓮だったのか、お前も墓参りに来たのか？」
気楽に答えると、孫策はないわーといった感じであなだれ、

「なんかすっごい気が抜けた、良い意味でも悪い意味でも。はあ、先生はここで何しているの？」

「北で採れる薬が切れかけてたからな、買い付けだよ買い付け」

「それだけ？心配してきてくれたんじゃないんだ」

「建前はそう言っておかないとな。まあ我が教え子の勇姿を見に来たつてのが本当の所だ」

「……正直負け戦よ？」

「俺は上手な負け方も教えた筈だ、忘れたか？」

「ちゃんと覚えてるわよ。……ねえ先生、先生が参加してくれたら」

「それはどうしたって駄目なんだよ。薄情だと思うだろうが、俺は以前他の皆に話したように世俗に関われない。だから後ろから見る事しか出来ないんだよ。

というかだ、何か今日は随分としおらしいな、全くもってらしくないぞ」

「私が弱気になるのはおかしい？」

「おかしくない、たかが二十年ちよつと生きてただけの小娘が重圧で負けそうになるなんて当然の事だ」

「ありやりや、私の内面ばればれね」

「けどお前は、前に進む術を知っている、前に進む為の強さを備えている、前に進まなきゃいけない理由を持っている。だから俺はお前に

対して、何の心配も抱いてないよ」

「……本当に、私の内面ばればれね。あはは、そうよね、そうなのよね。少し考えれば幾らでも負けられない理由が思い浮かぶし、そもそも負ける理由が思い浮かばないわ」

雪蓮の目が、死んだ目から次第に強い光を宿した目に変化していく。その変容はかつて出会ったばかりの頃のように。

「先生、私は強いのよね。項羽や光武帝の次ぐらいに」

「ああ、間違いなくお前は強者だよ」

「なら負けない。いえ、勝つわ」

「おうともさ、勝ち戦を見せてくれ」

「ええ、それじゃあ母にも勝利を約束しておこうかしら」

そして雪蓮は墓の前で手を合わせ、目を閉じた。

留まるのは無粋だと思い、立ち去ろうとした所で気配を感じた。

今回は気を抜いていなかったので詳細に察知する事が出来た。

恐らく二十ぐらい、明らかな敵意を感じる。雪蓮がここに来ていと知つての蛮行か。

となるとこれは総攻撃の前触れかもしれない、早く雪蓮に伝えて本陣に戻ってもらわなければ。

そう思つて雪蓮に声をかけようとした所で、身体が動かず、声も出ない事に気付いた。

なんだこれは！声なき声で驚き、身体の状態を調べようと気を巡らせるが、気が一切巡らない。思い切り力を込めてみても、微かに動くだけ、声は掠れてまともに発声できない。

ここ四百年経験した事のない事態にパニックに陥る。

だがパニックへの対処は慣れたものだ。今一度強く焦るなど心を落ち着かせ、身体の異変を放つて周囲の状況を再度確認する。

敵は二十人、敵意あり、敵意が隠せないレベルの練度、馬はいない、装備の音もあまりしないから装甲は薄い。

敵の情報に安堵する、雪蓮なら俺という足手まといがいたとしても、二十人ぐらいなら簡単に蹴散らせる筈。

そして雪蓮に意識をやると、その安堵が早とちりだったと知る。

彼女は気を抜いていて、未だ近づく気配を察すること無く目を閉じて母に語りかけている。

それはしようが無い事だった。

雪蓮は凄まじいプレッシャーから精神と感覚を極限まで張り詰めさせてた。隙を突いたとは言え俺の気配察知をすり抜ける程に高まっていたのだ。

だがその張り詰めた糸は俺が断ち切ってしまった。今は弱った心を再構築している真つ只中だろう。俺という絶対的な対象がいる事で油断に拍車がかかってもいる。

つまり、完全に俺のせいで雪蓮が危ないのだ。

そこに思い至り、血が沸騰しそうな感覚が全身を駆け巡る。

ふざけるな、俺の大切な教え子を、孫呉の命運をかけた一戦の前で、やらせるものかよ!!

しかし俺の意志とは裏腹に、身体は動いてくれない。

押し殺した気配は既にかかなりの距離まで近付いてきていた。

そちらに視線だけ向ける。暗がりに浮かび上がる鏃が複数、雪蓮を真つ直ぐ狙っているのが見えた。そして鏃には何かがぬるりと塗布されていた。

毒、あれは毒だ。

この俺が毒を見間違えるはずなど無い!

灯華様に似た雰囲気を持つ雪蓮が! 灯華様の命を奪った毒に冒されようとしてくる!!

感情が爆発する。

身体が動いた。一步踏み出す、すると意識が断たれそうになった。

だがそれぐらいで俺を止められると思うなよ。

脳を直接殴り飛ばされるような衝撃を感じながら、俺は再び一步を踏み出した。すると俺が動いた事に気付いた気配が慌てたように矢を放った。

身体は依然恐ろしく重く、断絶する意識を無理やり繋ぎ合わせているので、放たれた

矢が上手く知覚できない。

なので打ち払う事は諦め、俺は雪蓮の前に身体を投げ出した。

俺が動き出した事で慌てたからか、俺の身体に届いたのは僅か三本だった。だが常人ならば一本だけでも致命傷になるとはすぐさま理解した。

俺は灯華様を亡くしてから毒という毒について勉強をしていた。この身を犯す毒についてでも勿論知ってる。

やべえなーと思いつつ、だけど一応雪蓮は救えたからいいか、と気を抜こうとして、
「白ーなんでー」

倒れる俺を抱きかかえる雪蓮。

「馬鹿、非常時でも気を抜くな」

どうせ無理だと思っていた悪態が小さくこぼれた事に希望を見いだせた俺は、毒によつて朦朧とする意識を奮い立たせる。

俺が意識を途絶えさせればこいつはきつと俺を優先する。だからここで落ちる訳にはいかない。

「阿呆、俺は大丈夫だから、奴らを追え」

「ああ、良かった」

雪蓮が安堵の表情を浮かべる。そして二度目の矢が彼女を目掛けて飛んで来る。

だが雪蓮はその矢を剣で全て切り払った。

「そこか。お前が、お前達が出たのか！ 許さん、絶対に許さんぞ!! 白、待ってて！」
雪蓮は矢が飛んできた方向を推測し、気配を探り、状況を悟った。

一流の将だ、そこからの行動は速い。懐から笛を取り出し、特定の合図を吹き、俺を寝かせて矢を抜き、毒抜きをしてくれる。

敵の気配を読むと、笛の音を聞いた襲撃犯は逃げの態勢に移っている。

運良く近くにいた巡回組がものの数十秒で駆け付けてくる。その姿を確認した雪蓮はすぐさま襲撃犯を追いかけて行った。

俺は朦朧とする意識を繋ぎ留めながら、やってきた兵に俺の馬を取ってくるよう指示をする。

顔見知りだった彼らはすぐに馬を連れてきてくれた。

南陽に行っていて良かった。俺は荷を降ろし、中の葉を指示通りに処方するようお願いする。

すると途端に例の脳を殴り飛ばすような暴力的な意識攻撃が始まった。

だが一度耐えているんだよつ！ と兵に指示を出しきり、もし雪蓮に傷が出来ていたらこれを処方するようにと話して、やる事をやり終えた俺は意識を手放すのだった。

42. 天罰

襲撃犯を尽く転がせ、やって来た巡回兵に襲撃犯を本陣に連れて行くよう頼み、私は先生の元に行った。

するとそこには意識を無くした先生の姿があった。

傍らには先生のことを頼んだ兵士が薬らしきものを片手に佇んでいた。何がどうなっているのかを聞くと、先生は朦朧としながらも彼に薬の処方を指示し、なんとか作り上げた後に意識を落としたらしい。

その後彼は意識が落ちた先生に薬を塗り、携帯していた水に薬を溶かして先生に飲ませたようだ。

薬を塗るだけでなく、水に溶かして身体の内にも入れる、また極力先生の身体を動かさないよう配慮した彼はお手柄である。冷静な対応をした彼に感謝を表すと『これは以前先生に治療してもらった際に教えてもらったことで、本当、たまたま知っていたんです。それと奴らの武器には毒が塗ってあったらいいので、傷を負われたならこれを使ってください』と聞かされた。だとしたら正に情けは人のためにならずである。

彼は薬を私に手渡し、改めて状況を話してきますと本陣へ走っていった。

私はそれを見送り、乱戦で負ったかすり傷に薬を塗り、彼がしていたように水筒に薬を溶かし、飲み込んだ。

苦い味が口に広がる。すると次第に傷口が熱を帯び始め、じくじくとした痛みへと変化していった。

身体が毒と戦いだした証、という事は彼の言っていた毒というのは本当だったという事。

私は先生の傍らに座り込み、膝を抱えて涙を零す。

今回は悔やんでも悔やみきれぬ事が山積みだ。

墓参りに来てしまった事、安易に気を抜いた事、白に言われたとはいえ白より敵を優先してしまった事。

私が皆から先生を奪ってしまった。自己嫌悪で死んでしまいそうだ。

しばらくそうしていると、皆がやってきてくれた。

私は賊に襲われた事、先生が毒を受けた事、賊が転がっている位置、治療は済んでる事を話した。

そこで安堵のおかげか、薬効のせいかは分からないが、急激に意識が遠のき、私は意識を飛ばすのだった。

苦く、怖い夢で目が覚めた。

白が死んでしまい、そして世界の意味が崩壊していく夢だった。

胸が苦しくなり、身体の熱さも相まって呼吸が出来なくなる。

「なんで、あんな夢……ああっ、白!!」

急に起き上がろうとして、身体がついて行かずに天幕から転げ出てしまった。

眩しい太陽の光を感じ、曹操と決めた期限を思い出す。

身体の熱さに心を焼く焦燥が加わり、自身が燃えて死んでしまうのではと思った。

慌てて身体を起こそうとした所で手が差し伸べられた。

「焦る気持ちはわかる、だが敢えて言わせてもらおう、何をやっているんだ、雪蓮」

「あつ、冥琳!白は?期限は?襲撃犯は?」

「落ち着け、今は朝が来たばかりだ、時間はまだまだある。一から説明するからとりあえず天幕に入れ。総大将が朝から泥だらけの姿で焦っているなど、兵達が見たらどう思うか」

「え、ええ、そうね。ごめんなさい、混乱してた」

「気持ちはわかる」

そして私は冥琳の手を取り、引っ張り起こされ、天幕の中に連れて行かれ、あれから

の説明を受けた。

毒が回らないようにと慎重に私達は運ばれた。その後巡回兵が呼び出され、事情を聞くが全てが終わった後の事しか知らなかった。

なので襲撃犯の尋問が始まった。

事の始まりは間違いなく彼らである。我らが師を陥れた彼らは生かさず殺さず執拗に拷問され、その情報を全て吐き出した後には首を刎ねられて首桶に入れられた。

今はその情報を元にどうしようかと会議が始まる。長くなりそうなので冥琳が代表して私の様子を見に来たら、私が天幕から転がり出てきた。という流れだ。

「かすり傷とはいえ毒を受けたようだな。だが動けるようなら会議に出てもらいたい。聞きたい事と話したい事が山程ある」

「ええ、もう身体は大丈夫。会議に行きましょう」

そうして私は冥琳と連れ立って会議室に向かった。

しかし道中、なにやら騒がしい場面に出くわした。

緊迫した状況なので問題があれば逐一把握しておきたいと、二人して向かう。

するとそこには兵士と白の助手である呂華が問答をしていた。

恐らく彼女は白を探しにここまで来たんだろうと察する。

私は足早に向かい、彼女をせき止めていた兵士に交代で対応すると伝えて呂華と対面する。

「……そういう事ですか、孫策様、謙信様の元に向かつても構いませんか？」

「何も話していいのに、何がわかったというの？」

「私にはそういう力があるのですよ。すぐに謙信様について確認しないといけない事が出来ました、お願いします」

「信じられないけど、嘘は言っていないみたいね。……吹聴されても困るから、他言無用を約束してくれるなら構わないわ」

「有難うございます、では、失礼します」

「ちよつと待ちなさい、私も行くわ、冥琳、悪いけど会議室には貴女だけで」

「行ける筈ないだろう、使いをやるから私も先生の元に行く」

決して良い事ではないが、白の事になると互いに優先順位が変わる。

「それでは向かいます」

「つて、待て、先生が何処にいるか分かっているのか？」

「ええ」

そう言つて呂華は迷いなく歩を進める。

先生が居るのは糧食保管所だ。他所からの人間に分からぬよう隠蔽され、密かに守りが厚く、身内といえど出入りが厳しく制限されているので、兵站所は味方にも何かを隠すには最善の場所なのだ。

そのような場所に迷いなく進むという事は、どうやら彼女の力とやらは本物らしい。

「それで何を確認するとうんだ？」

「……貴方達は謙信様から色々と聞かされているのでしたね？」

「ええ、世俗には関われなとか、そういう事は」

「ならば話しても良いでしょう、そして貴方達には身を引いて頂きます」

「何よそれ」

「話す代わりに身を引けとは、また随分な交換条件だな」

「交換条件ではありません、話はします、しかしそれで身を引かぬ愚か者ではないと、ある種信頼しているのですよ」

「……意味わかんない、私が、私達がそう簡単に先生を諦めると思っているの？」

「思っています、けれど、愛しているからこそ諦めるという事もあり得ます。」

あちらの天幕で良いのですね？」

「本当に分かっていたのか……」

私達は天幕に入っていく、そこには衣服が脱がされ、所々に包帯を巻いた先生の姿が

あつた。

先生が怪我をしている、そこには違和感しか無い。

私と呂華は慌てて先生の近くに行き、呼吸を確かめる。

呼吸はしっかりとしているし、身体も少し熱いぐらい。良かった、助かったんだ。

安堵に泣きそうになる。

呂華も強張っていた表情を幾分か穏やかにさせたが、しかし表情には厳しさが色濃く残っていた。

どうしたと言うのだろうか。

「どうやらもう少して目を覚まされるようです」

「えっ、本当?!」

「はい、ですが、お覚悟を」

「何を……」

「ん、う、誰か、居るのか? って、身体いたっ!」

「白! 良かった、本当に良かった! あのまま白が死んじやうんじやないかって、私

……」

思わず私は彼を抱きしめ、涙を流してしまった。

白からうぐつと声が聞こえたが、気にしていられなかった。

後ろで冥琳が、仕方ないな、と苦笑交じりで言ってくれた。淑女同盟を破ってしまったけど、今は許して欲しい。

もう二度と白の前ではみつともない姿を、涙を見せないと誓っていたのに、そんな決心が容易く吹き飛ばすほど安心したんだ。白はおろおろしながら抱きつかれたままだった。

その様子に違和感を感じたけど、私はそのまま抱きつき、深く深く安堵を噛みしめるのだった。

しばらく経って心が落ち着いてきたら、今度は気恥ずかしさが蘇ってきた。

「あつ、ごめんなさい、ちよつとあまりにも嬉しくて……」

「あーえつと、良いんですよ、多分。あの、ちよつとこの状況が分かってないんですが……説明を……つて管輅、あれ、何で管輅がここにいるんだ？ 確か卑弥呼と」

「謙信様、それ以上は」

「あーすまん、不用意な発言だった。ん？ あれ、俺管輅に謙信と呼んでくれって言ってたっけ？」

「……やはり、ですか」

「ちよつと待つてよ、貴女が管輅つて、あの管輅？ ていうか白の様子がおかしいんだけ

ど」

私と冥琳は困惑しきりだ、そしてそれは白も同じ。

この場で唯一状況を理解していいそうな呂華、いや管輅は苦しそうな表情で話し出した。

「お三方、冷静になって聞いてください。謙信様、いえ白様は記憶を失われてしまいました」

「「えっ」」

私達三人は狐につままれたように、ぽかんとしてその答えを聞いた。

「白様、貴方の記憶は私達が別れた所から途切れていますね？」

「お、おう、お前と別れて、襄陽に向かおうとしたんだが……そこから何かあったのか？何か傷だらけだし、襄陽は戦の気配があつたから巻き込まれたか？」

「なんだ、ごく最近の事じゃないか、驚かせないでくれ」

冥琳がほっとした表情をするが、齟齬を感じる。

「いいえ、白様、それは十五年程前の記憶、孫堅様に会われる直前の記憶なのです」

「「なっ」」

再び三人の驚きの声が重なった。

「先に宣言しておきます、これは一時的な記憶の混乱でも忘却でもありません。完全な

る記憶の消失です、十五年間の記憶は一生思い出す事はありません」

「[「……」]

その言葉について私達は言葉を失った。

馬鹿な、とは言えない。先生が驚愕しているのが管輅の言葉に嘘偽りがないと物語っていた。

「毒の、影響か？」

「いいえ、白様には無病息災の神による加護があるので、あらゆる毒に非常に強い耐性を持っておられます。とはいえ何の治療もなされなければ昨日の今日で意識を取り戻す事は無かつたでしょう。治療に尽力してくれた方には感謝を述べなければいけませんね。」

そういった訳で、白様が記憶を失われたのは毒のせいではないのですよ。白様が記憶を失われたのは一重に、戦場に出るといふ禁に抵触したからです」

あつ、と言葉とも吐息とも取れない音が口から漏れた。十数年前に聞いて、つい数年前に再び念を押された先生の言葉。

「吹聴するとは思っていませんが、重ねて他言無用に願います。」

私達は仙人のような者達です。あまりに強い力を持つ私達の行動は、天より監視がされているのです。そして禁を破った白様は天からの罰を受けた。存在の消失もありえ

ましたが、大分軽い処罰だったのは不幸中の幸いでした」

「えっ、そんな事ぶっちゃけちややって大丈夫か？」

「大丈夫です、私には見えていますから」

「なら良いのか？　とうか俺はやっちゃまったのか。当日注意されて即破つたみたいな感覚だからすげーバツが悪い」

白の言葉遣いに違和感を感じる。私達の前では常に先生足らんとしていた部分があるのに、今は一切それを感じない。

そして白は一度も私達と目も合わせてくれない。なんか気まずい、そんな軽い感じで。

「今見る白の状況と反応から鑑みて、管轄が嘘を言っているとは思わない。けどごめんなさい、確かめたいの」

「〔随意に〕」

茫然自失の冥琳を引つ張り、先生の前に雁首揃える。

そして問う。

「私達を覚えていますか？」

簡潔な問い、はいかいいえしかない、誤魔化しようのない問いだった。

先生はしばし視線を泳がせ、唸るようになっていたが、最終的に私達とすっかり視線を

合わせて言った。

「ごめんなさい」

謝罪が答だった。

答えを聞いた瞬間、何かが崩壊しそうになった。けれど歯を食いしばって耐える。

「……私とこの子は貴方に救われた者達です。そして私は貴方をそうさせてしまった者です。ごめんなさい、そして有難うございました。今はゆっくりお休みください」

そこまでなんとか言い切り、私は冥琳を連れて天幕を飛び出した。

43. 望まぬ決戦

愛する人の異常事態、自身の罪の重さ。

泣いて許しを請いたいのが、記憶が消えたあの人には何も伝わらない。それは私の自己満足でしか無い。

頬を伝い続ける涙を気合で止める。

そろそろ朝ご飯の時間で、糧食保管所には人が集まりだしていた、彼らを心配させる訳にはいかない。

呆然としていた冥琳もなんとか持ち直したようだが、その身体は小さく震えていた。

心の整理は全然済んでいないが、とにかく会議に出なければと会議室に向かおうとして、何人かの人間に足止めをされてしまった。

「孫策様、昨晚ここに謙信殿が血まみれで運ばれたとお聞きしたのですが、本当ですか？」

巡回兵などには口止めをしたが、さすがにこれだけ人がいれば完全に隠し通せるものではない。

「ああ、昨晩に孫策様が直接襲撃されたのだが、たまたま居合わせていた謙信殿が孫策様

を庇い、怪我をされてしまった」

下手に誤魔化せば好奇心と猜疑心を煽りかねないし、良い結果に繋がるとも思えない。冥琳は素早くそう判断したようで、流れをこちらから作る事を選択したらしい。

「やはりそうでしたか……くそ、曹操の奴、何が正々堂々だ!!」

「よりにもよって孫策様と先生に手を出しやがって! 反吐が出るぜ!」

「孫策様、御身と先生のご様態はどうなのでしょう?」

「私は謙信殿が庇ってくれたお陰でほとんど怪我もなかったわ。

けれど謙信殿は三本もの矢を身に受け、また毒を受けたの。峠は越えたけどかなり衰弱している状態だから、負担をかけないよう大勢で訪れたりほしくないで」

「そうでしたか、峠を越されたのであれば一安心です。呂華殿もこちらに来たと聞ききました。彼女に任せておけば宜しいのですね?」

「ああ、では今話した事をそのまま皆に伝える。また決して暴挙には出ず、私達の判断を待つようお願いさせてくれ」

「しかし謙信殿の一大事とあらば、暴れる者も多くおりましたよ」

近くに居た全員が白の身を案じ、また曹操に対して激しく憤っている。

ここで実感した、白は皆にこれ程までに愛されていたのかと。

冷静に考えればそれはそうだ。ここ十数年、いや、それ以前から白は各地を巡って治

療行脚を行っていたのだから、彼の恩恵を受けていない者など呉にはいやしない。

なれば彼らの感情も至極当然。

「絶対悪いようにはしないと誓うわ、誰よりも曹操に憤っているのは私達よ。だから、お願い」

「……そこまで言われるのならば、皆にもしかと伝えます。暴動も抑えてみせましょう」
「孫策様、お願いしますぜ！」

「卑劣な曹操に目にも物を見せてやりましょう！」

その声を背に受け、私達は会議室に向かうのだった。

「お姉様、ようやくご無事な顔が見られましたね」

皆が笑顔で受け入れてくれるが、私はそれを素直に受け入れる事が出来なかった。

その様子から何かを感じ取ったのか、恐る恐るといった感じで蓮花が尋ねてくる。

「しかしやってるのが大分遅かったようですが、どちらかに寄られていたのですか？」

「ええ、白の所に行っていたわ」

笑顔の裏でピリピリと走っていた緊張感が表に出てくる。

「まさか！」

「いえ、五体満足で意識もはつきりしてたわ。けど記憶の混濁が少しあるみたい」

「そう、ですか。一安心ですね」

一時的なものと思っているのだろう。私は曖昧に微笑んで、そうね、と答えた。

「今は寝ておられますが、夜通し治療に徹してくれた雷火殿には感謝しなければなりません」

「そうじゃのう、儂らも随分と走らされたが、一番の功労者はあやつじやろうな」

「後で改めて礼に行くわ、それで、これからの事だけ……」

白の無事を聞いて和んだ空気が一変し、鬨気や殺気を超し、鬼気とも言える気配が立ち込める。

「随分と舐めた事をされた訳だが、殿よお、この落とし前どうつけさせるんだい？」

「正直私達、我慢の限界に来てるのよね」

祖茂はまだしも、いつも冷静沈着で泰然としている程普 粹怜までもが気炎を上げる。

「先生がそこらの手練程度にやられたのは不可解じゃが、そこについてはもはや論じても仕方がない。儂らは裏切られ、大事な身内を傷付けられたんじや、これはもうやるしかあるまいて」

「ええ、我らの師であり、孫呉の宝である白先生が傷付けられたのです。代償は曹操の首でもまだ足りませんまい」

いつもは無茶を止める役回りの祭と蓮花が烈火の如く憤っている。

しかし指導者がここで流されては、

「雪蓮も冥琳も、抑え過ぎだよ。そんなんじゃあ壊れちゃうよ。悔しいんでしょ、怒りたいでしょ。だつたらもう良いじゃない、どうせ退けないんだから、我慢する意味なんてないよ」

親友の太史慈 梨晏の心を見抜いた一言で、感情が爆発した。

先生を巻き込んでしまった罪悪感と、先ほど目の当たりにした記憶喪失の衝撃で蓋をされていた感情が、とうとう溢れた。

違う、溢れた等と生易しい表現では全然足りない。理性という器が壊れた。それぐらの感覚。

「そうよ、そうなのよね。あはははっ、我慢する必要なんて、無いわよね」

「そう、だな、今は全てを忘れ、策を練ろう。とはいえ、既に一手打つてあるが」

「さすが我らが軍師、手回しが早い」

「ふふっ、皆を燃やす火は既に放たれ、後は烈火のごとく燃え上がり、曹魏を飲み込むのみだ。仕上げは任せる」

「ああ、あの時口止めをしなかったのはそういう事。分かったわ、それじゃあ頃合いを見て全員を集めてちょうだい」

「分かった、皆に先に伝えておくが、先日亞沙の言ったような作戦を取る。何かあるなら今言ってくれ」

「全て軍師殿に任せる、儂らはそれに合わせて存分にやらせてもらおう」

「そうか、ではまず腹を満たそう。師曰く、腹が減っては戦は出来ない、だからな」

そうして朝ご飯を孫呉の兵達が食べ終わる頃には、我らが陣営は怖気の走るほどの鬼気に包まれていた。

手に汗が浮かぶ。正直、戦いにおいて手に汗握る等初めての経験だった。

母が亡くなった後、長として初めて迎えた実戦でさえ、先生の教えを守っていたら大丈夫と気楽に構えていたのだ。

負ける心配からではない、二十万の人間を率いる重圧からではない、襄陽という場所の悪縁に怖気づいているからではない。

そんな物は完全に捨て去った。

今は二十万の鬼を率いて曹魏に復讐できるのが楽しみで仕方ないのだ。

約束の刻限が間近に迫る頃、私は馬に乗った状態で準備を整えた全軍の前に居た。

鬼気は時をおいても収まる所かより強く、より熱く、より深くなっていた。

常人では数秒と居られぬ圧力を、私は心地よく感じる。

そして私は語り出した。

「まずは皆が気になつてゐる事を話そう。皆の間で噂になつてゐる事は事実である」

その言葉に二十万の兵が全てざわりと反応した。

皆の身体から溢れる闘気、殺気、鬼気が、もはや目に見える錯覚に陥るほどの濃密さを持つて周囲に漂い始める。

「昨晚、私は曹操軍の兵士に奇襲を仕掛けられ、たまたま同道してゐた謙信殿が私を庇つて毒矢を受けたのだ」

私は先生が好んで着ていた白衣、今では血塗られた赤く染まつたそれを取り出し、掲げる。

ざわめきが広がり、所々で怒号が上がる。

「謙信殿は身体の三箇所矢を受けた。常人ならばそこで死んでゐる、が、謙信殿はなんとか解毒薬を処方し、命だけは助かった。

皆の中には見知つてゐる者も多いだろう、あの人はそういう無茶をやつてのける人だと」

その言葉に頷く人間が多数居た。そして憤りは更に熱を増す。

「無茶をやつてのけた謙信殿だが、複数箇所穿たれた傷は重く、今もなお予断を許さない

状態である。

なあ孫呉の同胞よ、こんな無法があつて良いのか？

卑怯な裏切りにより、孫呉の宝が深く傷付けられたのだ、こんな暴挙を我々は許して良いのか？」

否！ と全軍が声を張り上げる。

「ああ、決して許してはいけない。

では何故、今の今まで剣を取らなかつたのか。ああ、当然の疑問だろう。

しかし、そこで手を出しては我らは奴らと同じ罪人、畜生に落ちてしまう。故に約束の刻限まで待つたのだ。

そして今こそ、絶対的な正しさを持つて我らは奴らを断罪するのだ。そう、我らは正義の断罪者である！」

我らは正義の断罪者である！ 彼らは呼応する。

「そうだ、そして必ず復讐を果たす、絶対の復讐者である！」

我らは絶対の復讐者である！ 彼らは呼応する。

「声を張り上げろ！ 我らはなんだ?！」

我らは正義の断罪者！ 我らは絶対の復讐者！

「そうだ！ 正義を振りかざし、罪人の臓腑を地面にぶちまけろ!!」

オオオオオオ!

先生から、出来るなら使うな、と釘を刺された人心掌握術。

いつもは国のため、人のため、家族のために戦えと心を奮わせていた、けれど今回は殺すために殺せと言う。

罪悪感を消すよう、人を人と思わせないような言葉を選ぶ。

そんな人を別の存在に変えてしまい、引き戻せなくなる可能性がある最悪の弁舌を、私は存分に振るった。

兵の気炎は自身すら焼き尽くさんと燃え上がり、最高潮に達した。

私は深く満足し、雄叫びを背に受けるようにして曹操との約束の場へと赴くのだった。

以前と同じ面子、祭と梨晏を連れて会談の場へやってきた。

以前と違うのは、彼女達がそれぞれ襲撃犯の首が複数入った桶を抱えている事だ。

「こんにちわ、孫策。上手く仕上げてきた……というには異常な鬼気よね、何をしたの？」

曹操は優雅に話しかけてきた。

襲撃犯が復讐と手柄欲しさに独断でやってきたというのは、拷問の果てに口を割らせ

て分かつてはいたが、どうやら本当だったらしい。

とはいえそれで許せる筈もない。私が気を張っていないければならなかったように、曹操もあんな約束をするのなら、もっと細部まで気を張らねばいけなかった。

「それを語るには二つ先に話さなければいけないわ」

「ええ、気になるのは是非教えを請いたいわね」

その余裕が鼻につく。だがそれももうじき消える。

「昨日、貴女の所の手の者が私を襲ったわ」

「な、に？」

私は後ろに控えた二人に合図を出す。二人は首桶を曹操の方へ投げる、するとその首桶を夏侯淵が矢の早撃ちにて撃ち落とした。

素晴らしい手際だ。それぞれ十人の首が入った木桶を、ほぼ同時に撃ち落とした。

首桶は勢いをなくし、地面にぶつかり、中に入った首が地面にぶち撒けられる。

「元呉郡太守だった許貢の息子がいるのだけど、分かるかしら？ 百万を統べる貴方は把握できていないでしょうけど」

「……右翼前線、于禁隊所属の百人長、手勢を連れて最近入ってきた人間ね。書類で強く最前線を打診してきたと知っているけれど、顔までは知らないわね」

「そう、そこまで覚えているなら、来歴まで知っているのでしよう？ 奴らが私達につく

「ことはない、こいつらと共謀して貴女を陥れようとしている訳ではない」

「……首を持つて確認をしたい、時間をもらう事は」

「不可能よ、もうそこまで待てないわ。だってもう限界なんだから。ねえ曹操、貴方は謙信という者を知っているかしら？」

「……ええ、傷病癒せぬもの無しと謳われた医聖でしょう？ 国中を回って治療を施し

ていたけど、孫堅と知己を得たここ二十年ほどは呉を回っていたそうね。かの医聖ならば私の頭痛も治してくれたのかしら」

「さすが、良く調べてるわね」

「しかし、それが……まさかっ?！」

「貴方の部下が撃った毒の矢は私ではなく、我らが宝を撃ち抜いた。」

呉に来てもらって二十年、その中で直接助けられた者も多い。村を、肉親を、恋人を、商売相手を救ってくれたと感謝する者は最早数えきれぬほど。我ら二十万の軍勢その全て、いえ、孫呉の遍く民の大恩人を、貴方達は傷つけたの。

我らの怒り、その身を持つて知れ」

もはや抑えることなく鬼気を発する。

その鬼気に圧されるように三人は一步後退した。

「でもそうね、八十万を続べきれなかった貴方に非はあれど、私にも非はあるわ。」

だから百数えてあげる」

そう私は出来るだけ優しげな声で言い放った。

余裕の対応を仕返した、訳ではない。

私達がここで襲いかかれば曹魏は長を守らんと結束する。だが彼女達が慌てて逃げでもすれば、軍は惑うだろう。そこをがぶりと頂く。

抗われるとは思っていない、だつてもはや彼女達に、戦うという選択肢はないのだから。

「春蘭秋蘭、急いで全軍を退かせろ。この戦い、既に勝利はない」

「何を言っておいで」

「此度の失態、勝つ方がより霸道の妨げになるという事だ。だから急げ！ 無駄な命を散らせるな!!」

その言葉を聞いて、夏侯惇夏侯淵はすぐさま転進し、全軍に指示を飛ばした。

さすがは英傑、その判断は果断にして的確だ。

「貴方は尻尾を巻いて逃げないのかしら？」

「逃げるわ、けれど尻拭いはしなければいけないでしょう？」

謝意を表す為、今ここに二つの約束をする。

一つ、于禁は一兵卒に落とし、于禁部隊百人長から下の者の首を刎ねましょう。

二つ、二年は決して外征をしない」

「二年の時間は魅力的ね。けれど両軍への宣言を破った貴女が、今更何をもつて保証とするの？」

「我が真名にかけて誓うわ」

「……ふう、ならば受けざるを得ないわね。この短時間で私達にも自身にも利となる提案を思いつくその胆力と頭脳、ここまで至れば畏敬を感じる。

黄蓋、太史慈、今より五十数えたら突撃の合図を出すわ、準備に戻りなさい」

はっ、と短く答え、二人は陣地に帰っていった。

「我が真名は華琳。此度の失態、八十万を統べる事の出来なかつた私の責である。申し訳ない」

「受け取りましょう。では残り三十よ、きつかり三十数えたら鬼を放す」

「分かつたわ。……こんな事になつてとても残念よ。それではね、孫策」

「私も残念よ、華琳。それではさようなら」

きつかり三十秒、私達は修羅となつて曹操軍を散々に食い千切つた。

その有様は戦いですらなく、狩りという悲惨さで、新野の地は曹魏の兵の血で真っ赤に染まつた。

結果、曹魏軍は十万に近い被害を出し、私達は二万という損害で済む事となる。

歴史的な大勝利と言えたが、私達に勝利の余韻は一切無かった。

復讐を依代とした戦意は長続きしない、先生の様態も心配で、これから二年後に再び強大な敵を倒さなければいけない。

考える事、やるべき事は山積していて、返り血で重くなった身体と心は、言い知れぬ空虚に冷えきるばかり。

ああ、白に会いたい。けれどもう、私は白に会う資格がないのだ。

44. 二度目の顔合わせ

涙を滲ませて去って行く二人の女性を、俺はただ見送るしかできなかった。

何もかもが分からないが、今の俺に彼女達を追いかける資格が無い事だけは分かった。

「なあ管輅、説明してくれ。何がどうなってるんだ？」

俺の疑問に管輅は全て答えてくれた。

管理者たちと別れ、襄陽に向かって孫堅に出会ってからの十数年、俺が何をしようとし、誰と出会い別れたのか、出来るだけ客観的に教えてくれた。

最後は孫策の過去を読み、俺が何をしようとした理由で記憶が無くなったのか、語られて締め括られた。

「そうか、つまり俺は流れを変えようとして記憶を失った訳か」

「意図的に変えようとした訳ではなく、咄嗟の行動が結果流れを歪める事になったようですが、大まかにはそうですね。」

しかし今回は本当に危なかったのですよ。孫策が毒殺される流れを肩代わりしただ

けだったので、記憶の消失程度で済みました。もし孫策も白様も無事、順当に孫呉が潰されて蜀も飲み込まれ……等と完全に流れを変えるものになっていたら、存在の消失、果ては外史の崩壊まで有り得ました」

「重ねて迂闊だったな。すまん、お前達の努力を水泡に帰させる所だった」

「本当に、今度こそ、重々、お気をつけてください」

「感覚的には今朝方しつかりと肝に刻んだ筈なんだがなあ。よし、改めて戒めるよ。と、誰か来たな」

「白様、寝たふりをお願いします。詳しい話はまた後に」

「おう」

俺は促されるまま寝台に寝転がり、目を瞑る。

すると兵士が一人、失礼しますと一声かけて天幕に入ってきた。

「あの、呂華様、謙信様の容態は？」

「呼吸も安定していますので、峠は超えました。謙信様はあらゆる薬を扱っておられたので、毒にも高い耐性があつたのでしようね。」

「それでどうされました？」

「安心しました、皆も喜ぶでしょう。」

周瑜様からお二人の護衛の命を受け、私を含め十人の小隊が付く事になりました。謙

信様の容態が安定しているようなら取り急ぎここから離れましょう。もうすぐここは戦場になります」

「そのようですね。戦場の真後ろに謙信様を置いておく訳にもいかないので、場を離れるのは賛成です。

ですが護衛は要りません。この辺りの賊は狩り尽くされていますし、兵を連れて歩けば軍と誤認されて曹操軍の標的となりかねませんから」

「それはごもつともな意見ですが……」

「それに貴方も治療院を訪れていらつしやるなら分かるでしょう？ 私も相当に強いですよ」

「……確かに治療所で暴れる悪漢を投げ飛ばしていらつしやいましたし、下手をすれば私達十人は足手まといでしょう。ですが怪我人を連れてとなると話は別です」

「ではこうしましょう、ある一定の場所まで結構です。此度の決戦、十人の勇士すら惜しいものなのでしょう？」

「……そこまで仰るならば、呂華様の提案に甘んじさせていただきます。実は我々の小隊も戦闘には是が非でも参加したかったです。私を含め十人の内五人は直接傷を癒やしてもらい、残りの五人は家族を癒やしてもらったそうです。

皆曹操の所業には腹を据えかねております故、呂華様の申し出は渡りに船です」

その後素早く支度を済ませ、俺は馬車の荷台に乗せられて一時間ほど寝たふりをしていた。

長江に続く川辺りにある村まで送ってもらい、船の手筈を整えた所で護衛達は帰っていった。

開戦は正午という話だったで、急いで戻れば間に合うだろう。

俺は密かに彼らを見送り、完全に視界から消えた所で荷台から降り立った。

「さて、船の準備が整うまでの一時間、どうするかね。急いで戻れば戦いを見れたり」
「……」

「冗談です、戦場には近付きません。大人しく荷の整理でもやってます」

「ふう、今回は絶対に建業へ戻ります。白様の身に記憶喪失以外に影響がないのか、また収束率に変化があったのか管理者を集めて調べなければいけません」

「重ね重ね申し訳ない」

「考えようによつては今回の件は良いサンプルになりますので、悪い事ばかりではありません。今は記憶を失つてもいらつしやいますので、もう反省も大丈夫です」

「そうか、そう思うとちよつと気が楽になるな。……なあ、少し気になったんだけど、管轄達がループを繰り返していた時、孫策や孫堅つてどうなつてたんだ？」

「孫堅は九割方亡くなっていますね、孫策は七割ほどですか。孫策が亡くなった場合は周瑜と孫権が多少の確執を抱えながら何とかやっていた、という印象ですね」

「印象ってなんだ？」

「呉は放置していても国として建立している場合がほとんどだったので、管理者も特に手を出さなかったんですよ。外側から適当にフォロワーしたら周瑜が何とかしてくれたので、彼女の能力に頼っていた形ですね」

「おーさすが三国トップレベルの名軍師周瑜だな。しかし孫策は亡くなる可能性が高かったのか」

「史実でも若くして亡くなられていますから仕方のない流れなのでしょう。しかし……」

「ん？しかし？」

「今回の彼女の危機は肩代わりされました。私の未来視通りなら、今回のループで彼女が亡くなる可能性は潰えたと言っても良いでしょう。」

そして重要なのは、今回のループには二人の観測者がいるという事です。今までは一点からの不安定な存在認識でしたが、二視点となると精確さが増します。恐らくこれらが収束率向上と存在確定の大きな躍進となるでしょう。

そういう訳もあり、彼女の生存を観測者二名が最後まで認識出来たのなら、孫策は

死ぬ可能性もあるが、生き残る可能性の高い存在として確定される筈です。

故に彼女が脇役として特に理由もなく亡くなる事態はほぼ有り得なくなりましただ。もし亡くなられる場合は物語がそれを望んだ時に限られるでしょう。

小難しい話を長々としましたが、つまり貴方は自分の記憶と引き換えに、孫策の存在を救ったのですよ」

「そうか、そうなのか、何だ、記憶が無くなる前の俺やるじゃん」

「得意気にならないでください。もう一度言いますが、今回の件は下手をしたら物語の確定失敗から外史の崩壊へと至っていた可能性があったのです。前言撤回、記憶が無くても反省してください」

「あつ、はい、すみませんでした」

その後俺達は用意された船に乗って長江対岸に渡り、大人しく建業を目指すのだった。

さて、あれから二年の歳月が流れた。

二年前、あまりに早く帰還すると不自然だったので、ついではばかりに各地の山や森に入って薬の回収をしてから襄陽へ戻ったら、それはもう街中の人から心配され、お見

舞いされとしばらく慌ただしかった。

だが騒ぎが収まってからは極々普通の医者として穏やかな日々を過ごしていた。

診療所や出張などで治療し、診療所で無駄話をし、子供たちに読み書き計算だけを教え、兵士の健康診断とリハビリを行い、毎朝オリジナルの体操教室行い、鍛錬をし、引つ切り無しに来る將軍様達に好みの飯を作る。

まあ騒がしくも楽しいスロークライフをエンジョイさせてもらった。

しかし気掛かりが一つだけあった。

あれから孫策が一度も会いに来てくれない事だ。

他のメンバーはそれこそ毎日誰かしらが来ていた。彼女達は一時的に記憶が無くなってきていると思っているので、記憶もいつか取り戻せるさと気軽に昔話や馬鹿話をしては帰っていく。昼時夕時となれば飯をねだられるので作ってやったりもした。

記憶を失い、若干の居心地の悪さを建業に感じていたが、皆の気遣いのおかげで心穏やかに居続ける事ができた。

周瑜は泣き顔で別れてから半年程経ってやって来た。

彼女は決意に満ちた表情で、私は今から貴方との関係を始めたい、全部一から積み上げたいと宣言した。

事情を知る彼女は他の皆とは歩調を合わせられないと悟って、そう決断したのでろ

う。

幼少から続く記憶と決別して、改めて俺の前に立ってくれた彼女の意志に、俺は胸をうたれ、救われたのだった。

そうして冥琳との新たな関係を始めて一年と半年、孫策と会えないまま二年が経ち、物語の終盤が迫ってきたのだった。

歴史に残る大戦、赤壁の戦いへの出立がもう明日明後日と迫る中、俺は早朝から荷造りに励んでいた。

旅に出るといふ訳ではなく、戦いへ赴く皆に薬や日持ちのする食料をこれでもかと思いついていたので、それらを積み込んでいたのだ。

管輅の話では赤壁の戦いが終わればあつという間に物語は終わるらしいので、一切の出し惜しみ無しだ。

あれやこれやと積んでいると気付けば馬車三台分ぐらいの荷物になってしまった。まああればあるだけ良い物だし、昼にでも兵を呼んで持って行ってもらうおう。

そんな事を考えていると、そこにぶらりと懐かしい顔がやって来た。

「あら、たまたま朝早くに目が覚めて、偶然ぶらりと街を散策していたら何か不思議な光

景が、近付いてみたらここは巷で評判の診療所じゃないの」

あからさまに不自然で、全然偶然を装えていない孫策がやってきた。

もう少しで荷造りが終わりそうだったので、家の中で待つてくれと孫策に言い、俺は急いで荷を纏める。

十分で仕事を終えた俺は家の中に戻り、適当なつまみと茶を持って居間に行く。孫策は所在なさ気に座って待つていた。

「すみません、お待ちせしました」

どう対応して良いのか分からないので、とりあえず敬語で言ってみると、彼女はとても悲しそうな顔をした。

「それ、やめて。せめて皆と同じようにして」

「あ、ああ、すまん」

それから二人の間に沈黙の帳が下りる。

あーこれどうしよ？ すげー気不味い。何から話そう、きつかけ、きつかけは何か……。と視線を彷徨わせていると、孫策も全く同じ行動をしているのが目に入り、同じ気持ちだったのかと安堵の苦笑いが出る。

「そういえばなんだけど、何か散らかつてるわね？」

「あーそれか。なんか皆が昨日今日と入れ替わり立ち代りやって来ては俺の私物を何か
寄越せと言ってきてな。色々探し回ってたらこの有様だよ」

「そうだったの、ごめんなさいね、はく、いえ、せんせい、違うわね、謙信殿。皆が迷惑
をかけたわ」

「呼びやすい名前で呼んでくれ。それに迷惑になんて思っちゃいない。歴史に名を残す
大戦になるだろうから、俺が出来ることは何でもしてやりたい」

「ありがとう、謙信。」

私もだけど、皆不安なのよ。この二年やるだけの事はやってきた。策を練り、情報を
集め、仲間を集い、皆を高めた。万全の状態に仕上げて、蜀と合わせても五十万を鍛え
上げた。けれど曹魏は私達と同程度にまで兵を鍛え上げ、九十万まで揃えてみせた。船
も多く用意されて物資面での準備も万端と来ているわ。

痛撃を与えた筈なのに、二年で曹操は以前を超える所まで持ち直しちゃうんですも
の。畏怖みたいなものを感じちゃうのは仕方のない事よね」

「そうか、皆おくびにも出さなかつたけど、そういう心持ちだったんだな」

「勿論怖さだけじゃなくて、二年前の決着をつけたって子も多い。謙信の私物を戦場
に連れて行って敵討ちがしたいと思ってるのよ」

「そうか、それじゃあ孫策も何か貰いに来た口か？ 大将がどっしり安心できるなら何

でもやってやるぜ？」

「えーと、私は……必要にかられてというか、今日を逃したら後がないというか……。

あーもう！ それらしい理由がさつきから全つ然思いつかないから正直に言うわ！

なんかこの戦いが終わると先生に会えなくなるって予感がした、そしたら居ても立つてもいられなくて外に飛び出してた、気持ちの整理と先生の挨拶を考えてたけどいつの間にか着いてて、そしてこのていたらしく！

ほんと、意を決して会いに来た冥琳に申し訳が立たないわ」

この戦いが終わると会えなくなる、ね。皆の言っていた通り、孫策の勘というのは常軌を逸している。

「冥琳もお前の事は気にしてたぞ、いつも微妙に暗くて扱い易い、私のせいで孫策が来づらくなってしまうたのでは、とか。ここに来てはお前についてばかり話していた」

「そっか、逆に迷惑かけちゃったのね。というか、もう真名で呼んでるんだ？」

「んー真名つてのは互いに交換しても良いと思ったら交わして良いものなんだろう？」

「そういえば真名の重要性を忘れてるのよね。男女で真名を交わすって事は、良縁結ばれた、と言つても過言ではないのよ？ ちよつと迂闊じゃないかしら」

「良縁結ばれる、うん、別に良いじゃないか」

「……。

…。

あれ？ えつ、あれ？」

「冥琳は公私完璧な良い女じゃないか。何より俺の事情も知っているし、俺の現状を受け入れてくれている。連れ添うのに何の不満があるって言うんだ？」

「……あれ、ちよつと待つて。……そういえばちよつと気になってたの、皆から聞けば聞くほど、謙信と皆の距離感が近いなあ気安い感じだなあつて。それでなんだけど、もしかしてなんだけど、謙信つて、自分の生徒についてどう思つてる？」

「俺の生徒は俺の子供だよ」

「そこからの進展つて？」

「まあほぼないな。一度育てようと思つたら親心が何よりも先んずる」

「あーそつかそつか、そんな感じだったわよねー」。

「……やられた！ 抜け駆け、じゃないけど出遅れにもほどがある！ あの絶対的な距離が無くなつてるなんてっ」

「何をやられたつてんだ？ 冥琳はお前に色々発破をかけたつて言つてたぞ」

「だから抜け駆けじゃないつて分かつてるの！ ああもう、あれが本当だったなんて！

まさかまさよ！ 数年間ずつと一緒にいても結局出会った時とそう変わらなかつた私達の関係が、急に進展したとか言われて信じられる筈ないでしょ!!

さすがね、さすがよ、私の最大の理解者、最大の好敵手、稀代の名軍師周公瑾！先生の記憶が無くなって逆に攻め時と悟っていち早く行動したのね。ああもう、してやられた……」

孫策は頭を抱えながらテンションを乱高下させている。すぐく触れたくないな、怪我しそう。けど逃げ道はない。

「あー孫策さん？」

「今日で取り返すわ。そうよ、何をしよげているのよ孫伯符。もう罪悪感とか、管輅の忠告とか、知った事か。もっと大事なものが目の前に転がっているのよ」

「あの、孫策さん？　なんとというかこう、お話をしませんか？」

その言葉に孫策はがばりと顔を上げた。

「ええ、話をしましょう。この二年間について、消えた十数年間について、そしてもつと以前の貴方について、いっぱい話しましょう」

鬼気迫る表情に気圧されて、はい、と素直に返事をする。正直震えるほどに怖いです。

俺は長くなりそうだと思い、診療所の表に行き、急患以外とらないと札を下げた。

水を瓶に入れ、料理に近いつまみを作り、長期戦に備えて居間に行く。

そこにはそわそわと、わくわくと言った感じで落ち着きない孫策の姿。所在なさ気

だった彼女はもう何処にも居ない。

面倒になったという気持ちと、楽しそうという気持ちが入り交じる。
それじゃあ会話をしよう。

45. そして彼女は笑うのだった

それから本当に色々な話をした。

自己紹介、改めての謝罪、記憶を失ってから二年間の事、記憶を失う前の事、出会いの話。孫策のあれやこれやを聞かされた。

他の皆から聞き及んでいた部分は多かったが、孫策から語られる過去というのもまた面白かった。同じ場面についても、彼女の視点は独特で、より核心をついていたりと違いを感じられて聞き飽きない。

孫策の詳細を聞いていたら、いつの間にか昼になっていた。

昼飯を作ろうと立ち上がると、丁度来客の声が響いた。

何だろう、と思つて玄関に向かうと、良く連絡員として来る兵士さんが居た。

なんでも、孫策様が行方不明なのだがこつちに来ていないか、との事。

おいおい、城に何も知らせず来たのかよ、と溜息がこぼれる。

すると後ろで隠れていた孫策が現れ「私はここにいる、出立の明朝には戻る、他の皆には一切ここへ近寄らせるな」と一方的に告げて兵士さんを追い返してしまった。

面倒にならなきやいいがなーと思いつつ、ほうほうの体で戻る兵士さんの背中に、葉

とか荷物を渡したいから、城から兵を寄越してーと声をかける。

料理を作り、食べながら話を再開する。

今度は俺の二年間についてだ。誰とどんな話をしたのか、管輅とは日頃どうしているのか、診療所について、客の雰囲気や話す内容など、あれやこれやと上手に聞いてくる。

ご飯を食べ終え、次は俺の過去について本格的な話を始める。

冥琳に色々と話して、何が何処まで話せるのか実験済みなので、ループ以外について包み隠さず話す。

孫策は全て本当の話だと信じると言い切ってくれた。

劉邦様について。

「そっか、謙信は大事な人を目の前で失ったんだ。私も失いかけたから、その怖さと無念は想像できるわ」

項羽との出会いについて。

「項羽って本物の霸王だったのね。前に項羽と光武帝の次に強かったって褒めてくれたのは、もっと誇っていい事だったのね」

漢建国の元勳について。

「私塾を開いていたのは元勳達の功績だったのね。うん、それって多分国にとって最大

の偉業よね。

南海霸王が樊カイの武器って事は、彼は私の先祖になるのね。元勳の子孫である私と謙信の出会いには、やっぱり運命を感じるわ。後ちよつと気になつたんだけど、なんとなく曹参は冥琳に、樊カイは蓮花に似てるわよね」

張術について。

「謙信は漢中五斗米道の流れを組んでいると思つてたけど、逆だったのね、医聖のお師匠様だったとは」

銅板について。

「さつき見かけた銅板にはそういう意味が込められてたんだ。……ならきつとあれも、という事はあれは元々謙信の……うん、良い事を聞けたわ！」

光武帝について。

「嘘臭いとすら言える彼の偉業はほとんどが実話だったなんてね。謙信もあまり手伝つていないっていうなら、事實は噂よりも奇なりね」

四百年について。

「人の中にあつても孤独、四百年間一人きりだったって……ええ、けれどももう大丈夫、ここには皆がいるわ！」

そんな感じで、孫策は言葉と相槌を上手く入れて聞き役に徹し、俺は話し続けた。

聞かれた事に答え続け、もう話す事も無くなつてきた頃、気付けば外はとつぷりと日が暮れていた。

「もう大分良い時間だな」

「えっ、もう？　って、外暗っ！」

「晩飯作るが食べていくか？」

「もつちろん！」

「んじゃちよつと待っててくれ」

そうは言つたが、しかし二人分の晩飯を作る材料が手元に無い。管輅は決戦前の管理者の集いに出掛けているので、今日は一人分で大丈夫だと高をくくつていたからだ。

これは積み込んだ荷を少しばかり解かなきゃいけないかーと思つて玄関に向かうと、覚えのある気配が幾つも近づいてくるのに気づいた。

お迎えかなーと思つて待っていると、がっしやーんと無遠慮に玄関扉が開いた。

「せんせー！　ウチの殿と準備してくれてたつてゆー荷物を引き取りに来たぜー！　つて先生じゃん」

「また勝手かつ無意味に力強く戸を開けてからに……あつ謙信殿、失礼します」

突撃大将の祖茂と調整將軍の韓当とばつたり対面。

「おう、いらつしやい」

俺が顔を見せると、後ろに控えていたメンバーがぞろぞろと顔を覗かせる。

「あら、随分早いお出ましね」

「そろそろ晩飯を作ろうと思つてな、材料の調達に行こうとしてたんだ」

「なら好都合じやの、姫のお迎えついでに謙信殿に酒のつまみでも作ってもらおうと思つてのう」

「謙信先生、申し訳ないのですが、私の力では皆を止める事ができませんでした」

呉の宿将メンバーと孫権、その後ろにも呉の高官連中がずらずらという。

「いや、けどお前ら、明日朝早くに出るんだろ？」

「だいじよぶだいじよぶ、明日すぐに戦うわけじゃないんだからさ！ 雪蓮に時間をあげたんだから、次は私達を構つてよ！」

「太史慈、気遣いと我儘を同時に口に出すでない。謙信様、皆で集まる最後の機会かも知れないのです、また場所と時間をお借りしても宜しいですか？」

「あー張昭に頼まれると弱いな。いいよ、材料があるなら大歓迎だ」

「わーい、白は話が分かるから大好きっ！」

「尚香、孫策が真名を交わすまでは真名呼びは慎めと……」

「えっ、気の合う男女が一日過ぎしたんだよ？ さすがにもう大丈夫でしょ？」

「あいつは変な所で弱腰の乙女だからな、踏み切れていない可能性は十分にある」

「ちよつと冥琳！ 聞こえてるんだけどー！」

「つと聞こえていたか、すまんすまん」

とまあそんなこんなで、騒がしい宴が確定した。

宴の様子は語るまい。

晒してはいけないラインを超えた乙女が大勢いたので、彼女達の今後のためにも今日のことは墓まで持つて行こうと思う。

そんな訳で、朝日がそろそろ顔を覗かせようという時間になり、宴は終了した。

黄蓋、程普、孫策といった酒に強い奴らが、俺のまとめた荷の上に潰れた連中を積み込み、持つて帰った。

俺はそれを見送った後、若干ふらつきながら宴の後始末に移る。

うへーと思ひながら一時間ほど掛かって宴の片付けを済ました所で、表に気配を感じた。

なんだろうと出迎えに行くと、そこには孫策の姿があった。

「どうした？」

「あーうん、借りてた物を返しに来たのと、頼みごとをね」

「俺、なんか借りてたっけか？ 記憶を失う前のか？」

「借りてたつていうのは建前というか……ちよつと上がつていい？」

「良いけど、時間大丈夫か？」

「うん、出立まで後二時間ほどあるから」

「お前は大丈夫か知らんが、潰れた奴らは後二時間で再起出来るのか？」

「気合で頑張つてもらうわ、それじゃあお邪魔するわね」

孫策を居間に通し、俺は濃い目の緑茶を入れて持つて行く。

「酔いに効く茶だ。孫策は酒に強いみたいだけど、一応飲んどけ」

「ありがとう、頂くわ」

孫策はお茶を飲み、ほつと一息をついた。

そして彼女は手に持つ湯呑みを眺めながら、ゆつくりと語りだした。

「このお茶のように、私達は色々な物を先生から貰つてきたわね。薬、保存食、民の慰撫、教導、貰つたものは多岐に渡る。しかも二十年近く呉に時間を費やしてくれた。

けど、私達からは何も返せていない。

皆何か返したかつたけど、以前言われた禁に触れるのではないかと躊躇していたの。

献上は良くあるから大丈夫なのかもしれないけど、下賜となるとどうしても目につく。個人的に返そうにも自分達は呉の高官で、物や金を渡すとなればどうしても意図があると見られかねない。

だから皆無理やり用事を作つてはここに足繁く通い、困つてそんな事があれば強引に介入して解決したり、ご馳走になつたらその材料費や手間賃と言つて多めに返して地道な恩返しをしていた」

「皆やたらここに来るなーとは思つてたけど、そういう意図があつたのか。それじゃあココらへんが妙に治安良いのとか、多種多様な店が充実してるのって」

「まあ武官文官誰かの指示でしようね。迂遠なやり方だけど、そうしないと謙信に迷惑がかかると思つてそういう形に落ち着いたのよ」

「そつか、知らず知らずの内に色々してもらつてたんだなあ」

「とはいえ、それだけで大恩に報いているとは思つていないわ。これからも地道に恩は返し続けるけど、とりあえず目に見える形で何かを渡したいと常々思つていたの。だからこれを、貴方に返しに来た」

そうして差し出されたのは二枚の銅板。

「南海霸王と、この銅板を貴方に返すわ。」

南海霸王が戦や身内の騒動で失われても、必ずこの銅板の元に帰つてきたと言い伝えられていて、頭領は南海霸王を、支える者はこの銅板を代々受け継いできたの。

だから孫家の隆盛を支え続けたこの銅板と南海霸王が、孫家として差し出せる最大の宝よ。けれど南海霸王はまだ使わせて欲しいから、役目が終わつてから渡させて欲しい

んだけど。

後もう一つの銅板は袁術討伐時に張勳から受け取った銅板、これはついでね。三つとも元々は貴方の物なんだから、渡しても問題無いわよね？

持ち主に物を返して、恩を返したというのは道理に反するんでしようけど」

「南海霸王は人に渡した物で、それはしつかりと正しい持ち主へと引き継がれている。なら俺がどうこう言う事はないさ。だから銅板だけ貰い受けたい」

「そう、分かったわ。……ちよつと気になったんだけど、ここに描かれているのって誰なの？」

「一つは樊カイさんの、もう一つは呂雉のだな」

「へえ、やつぱりそうなんだ。で、こっちは呂雉、高祖様を病むほど好きな大悪人……あーびつたりな人物の手に渡ってたわね」

「そうか、全ては渡るべき人間の元に渡っているんだなあ。」

しかし、一気に二枚か。俺の宿願に大躍進だ」

「宿願？」

「これは元々一枚の絵でな、昔の仲間達が一堂に会した最後の光景を描いた物なんだよ。だから銅板を全部集めて、元の形に戻すのが俺の宿命だと思ってるんだわ」

「そっか、謙信の助けになれて本当に嬉しいわ。」

借り物はひとまずこれで返せた、次をお願いなんだけど……」

「ん？ここに至っちゃ何でも聞けど」

「真名を交わしたい、です。」

二年前に迷惑をかけてるし、それで会いに来ない無礼者だし、今日も色々やらかしちやつたし、謙信からすれば会って二日目の女が何言つてんだ、つて思うのは分かてるんだけど」

「おう、いいぞ」

「戦いに行く前に心残りを一つでも消しておきたい……つて、あーそうよね、謙信なら簡単に言つちやうわよね。ほんと、事の重大さが分かつてるのかしら？ 一国の王が求婚してるのよ？」

「それを覚悟の上で受けている。俺は白、四百年間変わらない名前だ」

「もう、急に真面目な顔して……。私は雪蓮。大好きな母がつけてくれた名前よ。白、これからよろしくね」

「よろしく、雪蓮」

「ふう、それじゃあ全部やりたい事、言いたい事も終わったし、行くわね」

「そうか。それじゃあ雪蓮、勝つて無事に帰って来いよ」

「あつたり前じゃない。無事に帰ってきたその時には、白への大攻勢に移るんだから！

首を洗って待つてなさいよ！ 後さ、私達全員生きて帰るから、絵も描いてね！」
えへへっと天真爛漫に笑った雪蓮の顔は、とても綺麗で、とても活力に満ちていて、遠い昔の愛しい人が重なった。

「ああ、分かった、準備しておくよ」

そうして俺達は笑顔で別れるのだった。

俺は去っていく雪蓮の後ろ姿を見送りながら、深く納得していた。

記憶を失う前の俺が命をかけた理由が今わかった、愛しい人をまた毒で失うなんて事になれば気が狂うよな。

雪蓮は鋭そうだから、灯華様を重ねているとバレそう。そんでバレたら刺されそう。

でも危険を承知で灯華様との相違点を見つけて雪蓮自身を見出していくのも面白そうだ。それはそれはとても刺激的な付き合いになるだろう。

呉の皆が旅立って数日後、管輅が帰ってきた。

仕込みを全て終えたので、後は他の管理者に任せて帰ってきたらしい。

「今ループはこれにて仕事納めです。上手く行けば後二ヶ月程でループとなるでしょう。」

しかし懸念が一つあります、この物語の終わりに白様がどうなるかは分かっています。ん。

劉備を世に出した事が使命だったとするなら、任を解かれて以後普通の生活に戻るといふ事も有り得ます。

私達と収束率を上げる為、ループに付き合わされる可能性もあります。

普通の生活に戻るのであれば、もう収束率などは気にせず過ごしてください。大丈夫だと思います。ただし私達の事は他言無用に願います。

唐突な切り替えがあった場合はほぼループが起こった証だと思ってください。その場合白様は物語に組み込まれていると思いますので、今ループにて最寄りの都市で孫堅と出会った時のように、必然の流れに乗ってください。

そして天の御遣い降臨の噂が駆け巡ったなら、中央に来ていただいて管理者とのコンタクトを願います」

「分かった。ループした場合は近隣を巡って三国志に関わってきそうな事を探す、しばらく居着いて報が届けば中央に向う、これで良いんだな」

「はい、お願いします。白様に関しては不確定な事が多いので、裁量に任せきりになると思います。貴方なら出来ると信じております」

「俺としては使命が果たされている事を願うが、もしループしたなら管轄の期待に添え

るよう頑張るよ。

それじゃあそれまで、普通に過ごすとしますかね」

そうして一ヶ月と少し時が経ち、管輅が水晶球を何処からか持つてきた。

なんぞそれ？ と聞いてみると、左慈と宇吉が作った映像投影機らしい。

えっ、何そのオーバーテクノロジー？ えっ、呪術、妖術の才能があれば管理者じゃなくても出来る？ マジカ、俺これが終わったらすぐ呪術習おう。

というか何で今まで見せてくれなかったの？ ……傷付いた人を見たら反応して飛び出していくかも？ 否定出来ないですね。最後だから特別に見せてくれた訳ですね。

と驚いている所で、呉蜀と曹魏が対立している最中に荒ぶる五胡勢がやってきた。

三国を纏めるには最適のデウスエクスマキナがご登場したなーと思っていると、バトルが始まった。

声がないので名乗りなども聞けず、どうしてこうなったのか分からないんだが……これって管理者の仕込み？

あつ、違うんだ、煽るんじゃないやなくてむしろ今の今まで抑えてたのね。

そっか、四百年前のしわ寄せがこんな所に来た訳か。俺がずつと目を背けて放置していたから起きた事態、管理者にも当事者達にも迷惑をかけてしまつて罪悪感が湧く。

ループするしないに関わらず、彼らとの付き合いについては今後気に掛けようと胸に刻む。

そして五胡との激戦が始まる。

が、何度も激突してきた三国は、勝手知ったるといった感じで突然の共闘となっても見事な連携を見せる。

呉の連中の実戦を初めて見るが、俺の教えを見て取れてとても嬉しい。

唐突に始まった戦闘は三国の勇士が敵の大将を討ち取り、見事に収束した。

そしてここで三国の戦いも終結する。

劉備と天の御遣い、孫策と孫権、曹操と夏侯姉妹が大戦の終結を宣言した。

良い大団円だった、というか劉備と教えられた子が灯華様にめちやくちや似ててびっくりした。もう少しツリ目な感じだったら本人だと思ってたよ。

なんて終戦を他人事のように見ていたら、感覚が徐々になくなり、そして周囲が一変した。

あーそつちか、そつちだったか。

色々と胸に去来する物がある。

呉の皆との関係がリセットされた空虚感、約束が果たせない罪悪感、いつまでこれが続くのかという恐怖。まあ大体が負の感情だ。

とはいえ、もう慣れていて、慣れてしまっている。

俺は胸の内の一切を殺し、自身を精査する。

荷物等は管理者と会った頃と同じ、最後の私塾を終えて旅立つ時と同じ装備をしていた。

各種薬と道具、簡易テントと毛布、水筒と保存食、鍛えに鍛えた刀。

とりあえず最低限必要な物はあるのが幸い、次いで鍛え直した身体能力がどうなっているのか試してみる。

んー気の巡りは良いが、身体は若干鈍っている気がする。

身体の状態はリセットされて、記憶と感覚だけ引き継がれている感じか。

なんとも残念、いや、無茶をしてもルールすれば元通りになると思えばだいぶ救われるか。

自身の状態が分かったので、次は状況の把握である。

とはいえ、状況よりも先に自分の状態を気にしたのには訳がある。

周りにそれはもう何も無いである。

中国全土に転がっているであろうありふれた光景で、村も立て札も道も特徴的な自然物も、手がかりになりそうな物が何も見られないのだ。

なにか無いかとキョロキョロウロウロと周囲を探索すると、遠くに道つばい轍が伸びているのを見つけた。

「おお、とりあえずこれをどつちかに辿れば村だか街につくはず」

さてどちらに向かおうか、と悩んでいると、道の遥か彼方に人影が見えた。良かった、短慮に跳んでいたら言い訳のしようもなかった。

胸をなでおろした俺は場所を聞き出すべく人影の見えた方向へ進路を取るのだった。

46. 今回はどこに？

しばらく歩き続け、人影の元までやってきた。

そこには三人の女性があり、幼い少女は座り込み、眼鏡の似合う女性は座り込んだ少女の足を診ていて、槍を持った女性は周囲の警戒をしていた。

俺は三人組に普通に近付いて声を掛けた。

「どうかなさいましたか？」

すると槍持ちの女性が身体をこちらに向け、

「いやなに、旅の連れが足の不調を訴えましてな、休憩がてら具合を見ていたのですよ」と朗らかに答えてくれた。

が、こちらを向いたタイミニングで常人なら気付かぬ程僅かに、自然に槍と足を動かし構えを変えた。

ごく普通の対応に見せて、実は臨戦態勢を整えている。

彼女は若く見えて、世渡りの術とそれなりの実力を持つている事が分かった。

「それはお困りでしょう。私は旅の治療師をやっています、彼女を診る事も可能ですが、どうでしょう？」

「ほう、それは正に天の配剤とも言うべき僥倖ですな。少々お待ち下され、仲間と相談します故。程立、戯志才、傷はどうか？」

槍の女性が顔だけ二人に向けて聞く。

眼鏡の女性と少女はしばし見つめ合つて黙考し合い、しばらくして小さく頷いた。

「分かった。治療師殿、お願いできますか？路銀も多少なりともあります故、見てやつて下さる。」

「分かりました、ですがお金は要りません。食料を少々と旅のお話でも聞かせて頂ければと思います。」

「これはこれは、もしかや五斗米道の方でしたか？」

「厳密には違いますが、同じ医聖の流れを汲む同志ではあります。」

「ならば安心でありますな。ですが一応、仲間に関わった場合はそれ相応のけじめを付けて頂く事になります。」

「ええ、当然でしょう。」

「不躰な脅し、申し訳ありません。しかし今までの旅で何度か痛い目を見ておりましてな。」

「分かります、このような世の中ですから、致し方ありますまい。では少し失礼します。」
俺は少女の前にかがみ込み、ほっそりとした足を手に取り、診察する。

こうなる経緯を聞き、触診をし、気を巡らせる。

石で躓き、足を捻ってしまつたらしい。そして捻つた足を庇うように歩いていたら、靴ずれを起こしてしまつたとの事。

具合から見てかなりの痛みだつたらうに、すごいなこの子。

とはいえ治療は容易だ。

「靴を新調したばかりで長旅を計画した私の落ち度なのです。もう半日で村に着くと相談もせずに無茶をした結果がこれなのですよ」

「そうだったのですね」

彼女から深い反省が見えたので、穩便に治療を開始する。

荷物から薬と器具を取り出し、薬をすりつぶして、調剤していく。

その間に色々と聞かせてもらおう。

「薬を塗つて筋肉を解せば、すぐに動けるようになるでしょう。それで暇つぶしに色々とお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「私達が答えられる事なら何でもお話しましょう」

眼鏡のクールビューティーっぽい子が答えてくれた。

互いに自己紹介を済ませて驚いた。

なんと目の前にいる二人はかの有名な程立と趙雲らしい。受け答えの様子からしてとても聡明である戯志才という女性も二人に並ぶ逸材の可能性が高い。偽名か、改名かは分からないが、何れ歴史に出てくるのではなからうか？

だがこの出会いはとても悩ましい。

程立と趙雲、曹操と劉備の将として名高い二人のどちらに付いて行くのが正解なのだろうか？

判断材料が欲しかった俺は場所についても聞いてみた。

どうやらここは陳留に近い場所らしく、彼女達は陳留から出てきたばかりらしい。

んーそうなる目目の前の女の子達について行くより、曹操のいる陳留まで歩いて行くべきなのだろうか。

選択肢を絞ろうとしたら選択肢が増えてしまった。

うーん、こりや悩むなあーと苦悩している所で葉が出来上がり、質問タイムは一時終了。

靴ずれが起きている部分に葉を塗り、葉が馴染んで乾くまでの間に疲労した筋肉へのマッサージと骨格の矯正を行う。

負担がかかった足だけでなく、文官筋が陥りがちな猫背、正しい歩き方を阻害するO脚、座りがちな女性にある骨盤の歪曲もついでに治してあげる。

結構な痛みを伴った筈だが、少女は小さく吐息を漏らすぐらいで最後まで耐え切った。改めてすげーなこの子。

薬が乾くタイミングで施術を終え、靴擦れ箇所にガーゼを張り、立つよう促す。程立は恐る恐るといった感じで立ち上がり、数回足踏みをする。

「お、おおう、痛みも疲れも無いのです！それどころか怪我をする前よりも軽快です」
「おお、良かったな程立。心なしか背が伸びているようにも感じるぞ」

「ええ、それに胸も大きくなっているような？」

「二人共、それはさすがに乗っけ過ぎなのです。逆に落ち込んでしまいますよ？」

「二人が言っている事は満更嘘じゃないですよ。骨を正しい形に矯正したので、指三本分ぐらいは身長が伸びていますし、自然と胸を張るようになっていたので大きく見える筈です」

「なんと、この短時間でそこまでの治療を行っているとは、謙信殿は相当の凄腕だったよ
うで。僥倖ここに極まりですな」

「はい、本当にありがとうございます。これは世界が変わるぐらいに清々しいのです、
近くの村に寄つて是非お礼をしたい所存」

「いえ、今回は感謝お言葉だけで十分です。薬はありふれた材料で作ったもの、整体はこ
の身一つでやった事です」

「まあまあ、その程立を含め、立ち往生していた私達二人をも救って頂いたようなもの、此度の感謝は受けるが筋ですよ」

「ええ、それにちよつと聞きたい事や教わりたい事もありますし、是非とも、いえ、何卒！」

「戯志才は目的が違つてきてる気がするぜ。ともかくお嬢ちゃん、礼つてのは受けなきゃ無礼になるつて知つとくべきだぜ」

「あつ、はい、分かりました。ではお言葉に甘えさせてもらいます」
勢いに負けて三人について行く事にした。

村にたどり着くまでの間、整体や治療術（特に胸と美容）について熱心に聞かれたので、生兵法にならない範囲で色々と教えるのだった。

日暮れ前に少し大きめの村に着くことが出来、宿貸しがあつたのでそこに泊まる事にした。

そこで治療のお礼にとご馳走してもらい、食べながら色々な話をした。

ここ最近の宮廷事情、各勢力の情勢、都や周辺都市の雰囲気といった世情から、三人の旅の目的、俺が男という告白といった個人的な事まで。

そして現状について話をまとめると、今は黄巾の乱が起こる前だと分かった。

既に孫堅が死んで十年近く経っていて、しかも天の御遣いの予言が広がっているようだ。

私塾をやめて二十年、前回のループ開始から十年程の誤差がある事になる。

大分飛んだなーとか、飛んでいるのは何かの理由があるからなのかなーとか色々考えていると、旅に連れ添わないか？と誘われた。

とても魅力的な提案だが、まだ判断材料に欠けていると思つた俺は保留を頼んだ。

「明日一日この村で臨時治療をしようと思つています。何事も無く事が終わり、周囲の村の様子を聞いて危急の用が無いなら、貴方達の後を追わせてもらいます」

「そうですか、門外漢の我々では治療の邪魔になりますから手伝えませんな。ならば私達は明日の朝一で荊州方面へ向かいますので、もし宜しければ合流してください」

俺達はもう一度出会いと旅の無事を祈つて乾杯し、ついでに骨格矯正を施してその日の晚餐を締め括つた。

次の日の早朝、俺は三人の見送りに村外れまで来ていた。

「見送り頂きありがとうございます」

「こんな朝早くに申し訳ないのです、ふわあ、と、すみません」

「出張所の用意の為に起きたついでです、しかしこんな朝早くに出なくても良いのでは

「？」

「そうも行かぬ訳がありましたな、我々に残された猶予も少ないのですよ」

「己の仕える主を探す、でしたか？」

「季節が一巡りするまでにこの世は乱れるのは間違いないです。ですから一刻も早く国を巡り、自身の夢と力を託せる御仁を見つけ出さねばなりません」

「私と戯志才ちゃんをあてを既に見つけているので、大丈夫なのです。けれど趙雲ちゃんはまだ見当もついていないようで心配なのです」

「そうなのですか、しかし趙雲殿は物を見定める確かな目をお持ちのようですから、きっと自分にとって最上の主に槍を捧げる事が出来ましょう」

「そう真面目に言われると少し照れますな。しかしまだ見ぬ主に会えそうな気がしてきました」

「ではそろそろ行くのです」

「はい、皆さんの旅の無事と目的成就をお祈りしています」

「ははっ、謙信殿に祈られると、何とも御利益が高そうですね」

「俗な事を言つて……ではまたお会いしましょう」

「はい、ではまた、です」

そうして俺は三人と別れ、村に戻るのだった。

村での治療は平穩に進んだ。

陳留近くのこの一帯は治安が良いのであまり怪我の類がなく、比較的裕福なので病氣も少なかった。

しかしあまりに暇だったので整体をやってみたら、その効果に村人全員が代わる代わるやつてきしまい、忙殺される結果に。

村人全員に施術を終える頃には日も暮れかけていたが、その分皆から話を聞く事は出来た。

とはいえ、あの三人から貰った情報と大差なかったので、密度が増すだけだった。

治療が一段落ついた所で村長宅に呼ばれ、お礼として一宿一飯の歓待を受けることに。

晩ご飯を待っている間、村長と共に茶を頂きつつ世情などについて聞いていたが、これといって気になる話も出てこなかった。

周辺の顔役という村長が何の情報も持っていないなら、もう新情報はないと確定して良いだろう。

明日三人の後を追うかーと決めかかっていた時、来客が来た。

「頼もう！こちらに身体の全てを知る名医がいると伺い参った者だ、我らとともに陳留

まで同行願う！」

「姉者、突然の訪問過ぎるし、訪いの声が大き過ぎて迷惑だ。もう少し謹んだ行動を」
「しかし秋蘭、事は我らが主の一大事ぞ。疾く聞き、疾く行動すべきだろう？」

玄関で姦しい言い合いが聞こえてくる。

村長はなんじやる？と言った感じで腰を上げ、表に向かった。

しばらくすると村長の驚いたような声が響き、どたどたとこちらに近付いて来る足音が聞こえてきた。

息を切らした村長がやってきて、

「謙信殿、貴方に客人が参られた。何でも陳留まで出向いて欲しいとの事でしたの」

焦った様子で頼まれた。

「んー厄介事の二オイがぶんぶんするが……まあ首を突っ込んでみるか。」

「ふむ、分かりました、伺いましょう」

そう承ると村長はほつと安堵の息を漏らし、申し訳無きそうな顔をした。

「客人は大層お偉いお人での、謙信殿が連れて行かれるとなると儂にはどうしようも出来ないので」

「あーそうなのですね、ならば何もお気になさらずに」

「謙信殿は村の恩人、是非とも歓待したかったです、残念ですのう。念を押すように」

すが、彼女達は決して悪い人達ではないので、ご安心ください」

「分かりました、短い間でしたがお話を聞けて楽しかったです。では」

「また近くに來られた時は立ち寄ってください、村を上げて歓迎いたします。そして彼女達の主の一大事とあらば、何卒力添えを願います」

そう頭を下げる村長と別れ、俺は表に出る。

そこには眉目秀麗で、何処となく似ている二人の女性がいた。一人は赤い服を着ていて何だか気が強い感じ、もう一人は青い服を着ていてクールな感じだ。そして青い服の女性が一步前に出た。

「そなたが村で噂となっていた名医か？」

「身体の全てを知るとは過言ですが、人よりは多少なりとも深う学んでございます」

「強い自負を感じるな。急な話で申し訳無いのだが、陳留まで同行してもらいたい。構わぬか？」

「夜が近付いている危険を顧みないという事は、急を要する事態なのでしょう？ならば一医者として出向かない訳には行きますまい。詳しくは馬上にて聞かせて頂きますまい」

「その信念、話の早さ、非常に助かる。早速馬に乗ってもらおう」

「少々お待ちください、馬は二頭だけでございますか？」

「急いで駆けつけたものでな。二人で乗る事に何か不都合があるのか？」

「はい、この荷物、非常に重くありまして、」

「その程度で潰れる我らの馬ではない！今は刹那の時間すら惜しいのだつ、連れて行く事に否と言わぬなら早く乗ってくれ！」

赤い美人が馬上で焦れたように促してくる。うーん、後で俺が男と言つても斬られたりしないよな？

「……ではお願いします」

「荷物を貸してくれ。むつ、これは、本当に重いな。姉者、人二人にこの荷物では私の馬とて負担が大きすぎる、頼めるか？」

「分かった、任せよう」

「ふう、では行こう、そなたは私と同道してもらいたい。ある程度の事情を話さなければならんからな」

「えつ、あーですが」

「遠慮するな、姉者も言った通り、今は迅速さこそを第一としたいのだ」

「……分かりました、では失礼致します」

そうして俺は青服の女性の後ろに乗って彼女の腰に掴まり、陳留へと馬を向けるの

だった。

馬上にて詳細を聞けば、彼女達はかの有名な夏侯惇と夏侯淵であり、なんと双子の姉妹である事が分かった。

双子の姉妹という事にも驚いたが、彼女達の主、乱世の奸雄曹操を治療するというあまりにも好都合な流れに驚きを隠せない。

管輅が言っていた流れとはこういう事なのだろうか？

ならばこの流れに逆らい、三人について行ったのならどうなっていただろうか？

ループしていたのか、荊州にいるだろう英傑劉備と出会っていたのか、それとも……いや、歴史の流れについて考えても無駄か。なるようにしかならないのなら、現状が最高であると考えるのが楽だ。

ともかく詳細の続き。

昨日の曹操が自ら賊を追っていた際、後もう少しで賊を捕まえられるという所で謎の頭痛を訴えたとの事。

尋常な痛みではない様子だったので、賊は諦めて陳留に戻ったそうだ。すると頭痛はけろりと治ったらしいのだが、念の為に陳留一と言われる医者に見せたが異常は一切診

られなかった。

だが一切の弱音を吐いた事がない主が我慢できない痛み、絶対に何かある筈と陳留中の医者者を当たったのだが、結果は同じく異常無し。

主はもう大丈夫というが、それでも心配だった二人は陳留近隣の医者や薬師にまで情報網を伸ばして探し、夕暮れ前に俺の事を聞きつけたらしい。

朝一から誰かれ構わず治療していたから、陳留に向かう商人とかも診ていたのかもしれない。

事情を一通り聞き終える頃に陳留へ到着し、そのまま城の中に通された。

一刻も早く行かねばと言う夏侯惇に手を掴まれ、ぐんぐんと城の奥に連れて行かれ、とある一室の前に連れて来られる。

おお、着いたのか、手引っ張られすぎて痛いわーと思っていたら、夏侯惇が村長宅で見せた性急な訪いをまんま再現してくれる。

大きな声で要件を言い、そのまま戸を開け放ち中に入って行ってしまった。手を掴まれたままの俺も同時に部屋に引きずり込まれる。

……何というか、祖茂と同類のにおいがする。

つんのめるようにして入った部屋の中には、机で何やら作業中だったろう少女の姿が

あつた。

今は驚いた表情でこちらを見ているが、それまではどうやら書物をしていたようだ。その様子を見て、俺の手を掴んだままの夏侯惇がプルプルと震えだし、爆発した。

「曹操様！今日一日は絶対安静にすると約束してくれたではありませんか?!」

あー面倒になつた、という表情を隠さぬ十四歳前後の可憐な少女。

夏侯惇の言う事を信じるなら、幼さを残した目の前の少女がかの乱世の奸雄である曹孟徳であるらしい。

……マジか、外見詐欺だろ！

外見詐欺の塊である俺は自分のことを棚に上げて、心の中でそう叫ぶのだった。

47. 精密検査

夏侯惇に曹操と呼ばれた少女は、さて、どう対応しようかしら？といった表情をしながら首を傾げてこちらを見ていた。

その様は愛くるしい少女にしか見えないが、感じられる覇気は雪蓮以上だ。

特に力む様子もなく、自然体で人を圧倒する覇気を魅せつけるのだから、これでもし彼女が臨戦態勢になった時、何処までの影響力を發揮するのか想像がつかない。

「夏侯惇、私はいつも言っているわよね？どんなに火急の用であろうと、私に一言断つてから室内に入れと」

「しかし今は緊急事態です！そんな事を気にしている場合ではありません！」
「ぐつ、いつも以上に道理が通じない……」

しかしその霸王曹操も夏侯惇の勢いに押されて覇気に陰りを見せていた。

「曹操様！このような時間にまたお仕事をされて！つい先日倒れたのをお忘れか！」

「今回ばかりは姉者に同意せざるを得ません、今は休養を取るべきです」

後から入ってきた夏侯淵も夏侯惇の意見に乗じた。言葉から察するに、いつもは姉を

諫める立場なんだろうな。

曹操はバツが悪いと言った表情で、二人の言い分を聞いている。

「どうやら絶対安静にするよとの言いつけを破った事には罪悪感を感じているらしい。」

「確かに貴方達の心配も分らないではないわ。この私が弱音を漏らす程の痛みだった事は間違いない。けれど本当にもう良くなったのよ、何処が痛かったのかすら忘れる程にね。」

「ですが、曹操様があのように痛みを訴えるなど、記憶も定かではない幼少より一緒にしている我ら姉妹でも初めて見たのです！何も無い筈ありません！」

「あの時私達姉妹は、身を焦がす程の不安に苛まれたのです。曹操様がおられなければ、この陳留も、私達姉妹も死んでしまうのです。ですから原因が分かるまでの一時、お仕事を抑えて頂きたく存じます。書類仕事等の疲れが積み重なった結果かも知れませんが、」

「はあ、分かったわ、今回ばかりは私に非がある。昨日の今日で無理をするべきではないわよね。」

「それで、その後ろにいるのが頭痛の原因を突き止めてくれる人なのかしら？」

「はい、この者は近くの村にて、村人全員の身体の悩みを解消させ、また患者がいるなら

ばと夜も危険も厭わなかつた信念の持ち主です。腕も性格も信頼できると思い連れてまいりました」

「そうなの。貴方、夜に掛かろうという時間に申し訳ないわね」

「いえ、昼だろうと夜だろうと、救える人がいるならば駆けつけるのが医者という者です」

「そう、貴方達の氣遣いを無碍には出来ないし、貴方の信念にも嘘がないようだし、診てもらおうかしら。しかし陳留一の医者ですら分からなかつた病状が、流れの医者に分かるのかしらね？」

見た目は少女と言つても差し支えないのに、試すような物言いと目つきには常人には耐え難い冷気のようなものが込められているかのよう。

きつとそうやって緊張感を煽り、人の本質を曝け出させようとしているのだろう。

とはいえ、俺にとっては心地の良い緊張感である。

俺は彼女の瞳を真正面から受け止め、自信満々に言い放つ。

「私に分からぬのなら、かの張術にすら分からぬでしょう」

「……合格よ。私の氣を浴びてなおそこまでの大言壯語を吐けるのなら、診てもらおうのも一興。

私は曹操、医聖張術と肩を並べる者の名を聞かせて頂戴」

「はつ、私は謙信。流れの治療師をしています」

そこで彼女は何か、眩しい物を見たように目を細めた。

「けん、しん？何処かで聞いたような、それに、私は貴方を何処かで……」

何か小声で曹操が呟いたが、彼女は目を手で覆い、何かを払うように頭を振った。

「駄目ね、夏侯淵の言う通りどうやら疲れているらしいわ。これは早速診てもらわなければいけないかしら」

疲れた様子でそう零したが、ちよつと待つて欲しい。

「治療の前に一つ申し上げたい事がございます」

「なにかしら？」

「診察には触診などもせねばなりませんから、先に申し上げねばなりません。勘違いされやすいのですが、私はこのような見た目をしておりますが、男なのです。その上で判断願います」

これを言っておかなければいけない。黙っていて後々バレたら斬首とか普通にありえる。

「「はつ？」」

三者同様の反応だった。そしてそれはよく出会う反応だった。

「それは本当の事を言っているの？事ここに至って嘘をついていたら承知しないわよ

？」

「確かめますか？」

「……夏侯淵」

「はっ」

そして青服の女性が俺の傍までやって来て、胸を触る。服の上からぼんぼんと触り、次いで強めに揉まれ、マジか！という表情に。

「曹操様、偽りなく、この者は男です」

「貴様！我らを謀ったのか!!」

「……確かに人命優先という事で言葉を噤んだ事は認めます」

「姉者、馬に乗る前に何かを言いかけた彼を急かしたのは私達だ。責任の所在は私達にもある、だから剣を抜くのは少し待って欲しい」

「そうね、説明を求めずに診てもらおうと宣言した私にも落ち度はある。ならばここは全て不問としましょう。」

ともかく、一度吐いた言葉は戻せぬ。

貴方にはしかと私の身体を診てもらおう、けれども貴方も医聖張術に劣らぬ腕を見せなさい。それでどうかしら？」

器の大きい事だ。狭量な者なら醜態を見られたとか、謀られたとか言つてその場で口

封じをする事態だつてあり得た。

大きな度量を見せられたのだから、この四百年間研鑽を積み続けた腕を披露するのに一切の躊躇いはない。

「万事承りました。では診察は明日からに致しましょう。今日はゆつくりと休養を取り、明日は朝食と昼食を抜いた状態で診察を始めます」

「あら、何だか面倒な事をするのね」

「胃の中を空にする事に意味があります。食事を取るとどうしても気の巡りがそちらに流れますから、出来るだけ身体の中に異物を入れない状態で診察したいのです」

「そういう物なのかしらね、いいわ、ここまで来たのなら全て任せる」

「それでは明日、またこちらに伺います。夏侯惇様と夏侯淵様もお付き添い下さい、診察をしながら聞きたい事もありますから」

「ふん、ならば安心か。もし曹操様に邪な真似をしてみろ、その瞬間に叩き斬つてやるからな」

「〔随意に〕」

「では彼を賓客室に案内しなさい。私も今日は休む」

「はっ」

そして俺は客室に通され、そこで一夜を過ごすのだつた。

翌日の昼、本格的な診察が始まった。

身体を調べるにあたって、俺は何をするにも詳しく説明し、結果も漏らさず伝える事にした。

聡明な曹操にはそちらの方が受け入れ体制を整えてリラックス出来ると思ったからだ。

思惑は当たり、多少専門的な事を言っても彼女は理解し、俺のやりやすいように動いてくれた。

その結果半日掛かりになると思われた診断は三時間ほどで終わった。

俺は曹操の部屋にて、調査項目を総合して診断結果を伝える。

「頭痛の多くの原因である腫瘍もなく、血管の状態も悪いようには見られませんでした。それ所かその他のあらゆる診断から、曹操様には何一つ異常も見られないと判断しました」

「まあ、逐一結果を聞いていたから、そういう総合判断になるのは分かっていたけどね」「何だと！結局貴様も他の医者と同じ事を言うのか！そんな筈はないと言っているだろう！」

「姉者の言う通りだ、納得できぬ。まだ何か調べていないのではないか？」

「現時点で曹操様の身体について私が知らない事等無いと言い張れる程、出来る限り精密な検査を行いました」

「はん、どうだかな。昨日あれだけの大言壮語を吐いておいて原因が分からず仕舞い。後に退けぬと適当に時間を掛け、はったりを通そうとしているだけではないのか？」

「……」
「こういう事を口にするべきではないと思うのですが、お二方に納得して頂けるのなら失礼を承知で口に出しましょう」

そして俺は曹操の身体について一から十まで話してみせた。

身長体重から始まり、月の周期、新陳代謝の活性具合から爪や髪の毛の伸びる速度、食事の好き嫌い、どこそこにある傷は何時どういう場所どうなつてついたのか、二次性徴のタイミング、普段どういう過ごし方をしているのか、どういった服装をしているのか、運動の頻度、運動神経の程度、風呂に入る頻度等等等等、曹操に付きつきりである二人には真実か否か分かる事をこれでもかと並び立てた。

羞恥と怒りで赤らんでいた顔が、途中からは怖さで青くなつていった。

普段の生活から数年前について薄く残っている傷の来歴までつぶさに語られたら、そりゃ物凄い恐怖だろう。

「二人共分かつたでしょうから、もう止めて、本当に……」

「まさか我ら姉妹でも知らぬ事を知っているとは……医者とは恐ろしい存在なのだな」

「謙信殿、先は疑つてすまなかつた。貴殿は噂通り、身体の全てを知り尽くす者だつたのだな」

「ご理解いただけただけで何よりです。ともかく、曹操様の身体は傷病、感染症、細菌、毒等の問題もなく、至つて健康であると確信を持つて言い切ります。

ですがその上で頭痛を感じられたとなると、逆に恐ろしくも感じます。

心因性のものか、はたまた理を外れた何かの影響か、些か気になりますね」

「理を外した何か、ね。呪術等の外道の術の事かしら？しかしそんな物……」

「私も少し前まで歯牙にも掛けない物でした。ですが極めた術式というものを目にする機会があり、考えを改めました」

管理者は曹操にあの手この手で妨害を仕掛けていたというから、管理者がやっている可能性は有り得くはない。

遠くを見通す水晶球なんて代物が作れるのだから、対象が遠くにいたとしても強力な呪いをかける事ぐらい造作もないだろう。

「そちらに対しては要調査とするしか有りませんね。次いで心因性による可能性ですが」

「その心因性、というのは何なのだ？」

「心の病気、とでも言いましょうか。」

例えば、いとも容易く行っていた特技を一度失敗した。すると何故か特技が失敗続きとなってしまう。克服しようと足掻けば足掻くほど成功の兆しは遠のき、いつしかやってみようと思っただけで動悸息切れなどの症状が表れてしまったりするのです」

「ふむ、我らが兵の中にもそんな奴がちらほらいたような気がするな」

「神経質な人間、自分に自信が持てない人間に出やすい傾向はありますが、しかしほとんどの人間が穢る可能性があります」

「私や曹操様がそんな不確かなものに左右される様が想像がつかん。なんかこう、とにかくもつと分かりやすく言え」

「夏侯惇様には縁が薄いかも知れませぬね。」

例えば……貴方は書類仕事をしていました、そして気付かない程微妙に利き手側の肩が凝っていた。

翌日剣を振っていると違和感がありました、いつもの型に納得行かないのです。その時貴方はどうしますか？」

「身体の違和感に気付かぬなど幼少の頃だけだったが……あの時はひたすら剣を振り続けたな」

「貴方は剣を振り続けました。ですが身体の違和感が根本なので、疲労すればするほど違和感は強くなります。ここで一度自身のおかしさを受け入れて休養を取れば、肩の凝

りも取れて剣筋は元に戻るでしょう。

ですがもしひたすらに剣を振り続けたなら、剣に対する自信はどうなるでしょう?」
「疑念に変わるかも知れんな」

「周囲の人間の助言を聞ける強さがあれば問題はないのですが、自分が弱くなったと他人には話したくない、以前は何も言われなくても出来ていたと考えてしまうと、発覚が遅れて手遅れになりかねません。

もし後々ゆっくり休息をとって元に戻ったとしても、悩んでいた時から作り上げた理想が以前はもつと上手く振れていたと思ひ込ませたりして、底無しの泥沼にはまります」

「分からなくもないな、そうか、私はあの時曹操様に言われて無理やり休まされたのだった。そうすると剣も無事に振るえたので、あれは気のせいかと思っていたのだが……。

ふむ、なにはともあれ、私は書類仕事をしてはいけないという事はわかったぞ」

「……あーそうですね、そうかも知れませんかね。」

心因性、精神的外傷についてまとめますと、自分を強いと思っている人間はこういった心の病に罹りにくいのですが、罹ってしまったら気付かない、気付いても無茶をしてしまつて抜け出せなくなる事が多いので注意が必要という事です。

もし心因性のものであるなら再現性があります。頭が割れるほどの痛みというのな

ら、早急の原因の究明と克服をしておかなければいけないでしょう。明日明後日でも頭痛が起こった現場に赴き、似たような状況を再現して様子を見るのが宜しいかと」

「ふむ、何から何まで理に適った診断と有益な助言だったわ。

原因こそ分かんず仕舞いだったけれど、私が健康であり、他に原因があると確信を得たのは大きい。

感謝するわ、謙信。何か礼として望むものはあるかしら？」

「いえ、まだ何も分かつておりません。出来るならば状況再現に私も連れて行って頂き、原因の究明をしたく思います」

「中途半端では終わらせたくないという訳ね。主導できる人間がいるといたないとは大違いでしょうし、連れて行っても良いわ」

「ありがたく存じます」

「今すぐにも向かいたいけれど、もう夜が近い。今日は大人しくしていきましょう。

それでは謙信、一緒に食事でもどうかしら？朝と昼を抜いているから、夜はかなりの馳走を用意しているの」

「そう、ですね。では招待ありがたく受けさせて頂きます」

「では食事まで多少時間があるから、それまではゆつくりと休みましょう。

夏侯淵、以降の段取りを任せる。夏侯惇、彼を部屋まで案内しなさい。案内し終わっ

たら曹仁から今日一日の報告を受けて私の下に戻ってくるように。

謙信は申し訳ないのだけれど、通達なしに城内を歩かれると憂慮の事態があり得る、今日だけは部屋で大人しく待っていてちょうだい」

「はっ」

そして俺は夏侯惇の案内の元、客室に戻るのがだった。

途中、疑って悪かったと素直に謝られた。とても真っ直ぐな御仁なんだと安心すると共に、俺の知る夏侯惇じゃねえなーと思ったりもして胸中複雑な気分になってしまった。

48. 少女の焦燥

三人の背中を見送り、戸が閉まった所で私はため息をついた。

「駄目ね、心が揺れて仕方がない」

動揺という不慣れな感覚に振り回されている。

感情を制御出来ないとは、なんたる未熟。

何故だ、あの時まで簡単に出来ていた物が何故出来なくなっている。

ああ駄目だ、彼が言っていたではないか。

変に意識をすると余計に泥沼に嵌ると。

だがしかし、この感情をどう受け入れろというのだ……。

「ああもう！あの時から全てが噛み合わなくなつた!!」

ほんの二日前まで私は完璧だったのだ。

あの恐ろしき頭痛を経験してから全てが狂ってしまった。

始まりは二日前、城内から宝物庫の盗難騒ぎが起こった時に遡る。

私達の努力が実り、急速に発展していく陳留だったのだが、あまりに事を急ぎ過ぎた

為に人手不足が許容量ぎりぎりまで来ている、そんな折だった。

新たな人員は確保していたのだが、配置に手間取ってしまった、ほんの僅かな時間警備に穴が出来てしまった。

その隙を見事に狙い打たれた。

狙い澄ましたかのように機を狙われたので、私自ら調査に乗り出したのだが……侵入、物色、逃走は何もかもが杜撰で計画性は一切見られず、たまたま忍び込んだら兵もいないくて何故か上手く行った、ぐらいの場当たりの犯行だったとすぐに分かった。

警備に穴を出した自分の不甲斐なさと、たまたま忍び込もうとした時が最善だった盗賊の運の良さに歯噛みしつつ、被害報告のまとめをその場で受けた私は絶句した。

盗み出された物の中に私が最も気にかけていた品があったのだ。

運び込まれたばかりで入り口近くに置かれていた、狙いもなく勢いだけで侵入した盗賊だったので入り口周辺が一番被害を受けていた、そして気にしていた品が好事家に高くで売れる事の多い書籍だった。

一つ違っていたら結果も違っていただろうに、折り重なる不運は見事に私の心を抉ってくれた。

急増し続ける仕事にここ最近ずっと苛々していた私は、この時自身の中で何かがつつんと切れる音を聞いた。

気付けば仕事を放り出し、盗賊が逃げたとされる方向へと馬を駆る暴挙に出ている自分^分が居た。

慌てて追いかけてきた春蘭と秋蘭の二人を引き連れて馬を駆ること数十分。

陳留と最寄りの村の中間地点辺りで人相書きに酷似した三人組に追いつき、さあ後は首を狩るだけ、という状況にまで追い詰めた。

怯える不細工な三人組に愛用の鎌を振り下ろす寸前、鎌が手からするりと落ちた。

取るものも取りあえず馬を駆り、ここまでやつて来たから疲労と汗で手元が狂ったか？

そんな事態起こした事もないが、敵はただ怯えるだけで何もしていない。傍から見たらただただ私の過失だろう。

私は気を取り直して落とした鎌を拾い、再び構えた。

その瞬間、世界が割れた。

自意識が芽生えてから初めて、私の喉から絶叫が迸った。想像を絶する痛みにそこら中を駆けまわる。

春蘭と秋蘭が慌てて近寄ってきて、私を抑えようとする。

だが私の知る中でも最上級の身体能力を持つ二人の怪力を持ってしても抑えきれずに、何度も吹き飛ばしてしまったそうだ。

その隙を見て盗賊達はさっさと逃げてしまった。襲いかかるのではなく逃げ去った所に盗賊の悪運を感じる。

暴れ続けて数十分、頭痛はぱたりと消えた。

唐突に始まり、唐突に終わった謎の頭痛。

今では暴れまわった際に振り回した手足の痛みしか感じられず、あの痛みは幻痛だったのでは？と思うほどで、そこにまた違和感を感じる。

とにもかくにも、春蘭秋蘭は私が頭を地面に叩きつけようとするのを抑えるのに必死だった事もあり、三人とも等しく疲労困憊になってしまった。

逃げた盗賊の痕跡も私が暴れたせいで掻き消えており、捜査する気力と体力を無くした私達は盗賊の追撃は諦め、陳留に戻ったのだった。

陳留に戻った私は疲労感からすぐに寝てしまった。まだ昼と言っても過言ではない内から寝るなど、ここ十年ではなかった事であり、仕事が山積している最近では在り得ない暴挙だった。

そのまま寝続け、夕方に目を覚ました時、違和感を感じた。何かは分からないが、ど

うにも、どうしようもない違和感があった。

言葉にすると、解放感や高揚感となる。普段であるなら良いと思える変化であった。だがあの頭痛となりふり構わず暴れまわった後なので、何か恐ろしい後遺症の前兆なのでは？と強い不安を覚えた私はすぐさま陳留で一番と名高い医者呼んだ。

医の街である漢中出身の老人で、確かな学問と経験を持つて今なお実績を積み上げ続けている名医であり、私自身何度も世話になつていゝ人物だった。

夜も近いというのに、老先生は嫌な顔一つせずに私を診察しに来てくれた。春蘭秋蘭が念を押して頼み込むと、夜遅くになろうとも構わず、詳細に調べて上げてくれた。

だが彼が出した結論は異常なし。

体の至る所に傷はあれど、頭には何の障害も見られないと言われた。

それは受け入れられる、あれから頭痛の兆候すら一切感じていないからだ。

私は礼を言い、それなりの謝礼を渡して老先生を帰らせた。

春蘭秋蘭は不満顔だったが、私はもう大丈夫だからと言って無理矢理に納得させた。とは言いつつ、間違いなく何かがおかしいと私も思っていた。

起き抜けにはそれ程強くなかつた解放感や高揚が、今では胸や腹の奥で異常なまでに高まつている。

天の頂きに座し、あらゆる事象を俯瞰で見ているような、全てを超越した感覚がずつ

とある。

そんなある種の全能感がじわりじわりと身体と精神を侵食していく感覚に恐怖を覚えた私は、傷だらけにも関わらず、夜中にも関わらず急遽湯浴みの用意をさせ、微かに震える身体を芯から温めて疲労を加速させ、寢床に潜り込んだのだった。

翌朝、昨日よりも加速した心情に怖気が走った。

孤独や孤高を感じる全能感に、熱が籠っていたのだ。

全てを超越した感覚を存分に発揮したいという熱意が腹の底で蟠っている。

私の意図しない感情に、段々と私が私ではなくなっていくという恐怖が渦巻くが、しかし安堵する部分もあった。

その熱には覚えがあったからだ。

私を霸王たらしめんとする原動力、幼少より胸の奥に感じていた謎の熱さと同じものだ。だとすぐに気付いた。

だがこの熱をどう発散させれば良いのか分からなかった私は、とりあえず普段通りを実践しようと逃げに近い考えをし、机に山を為している書類を手にとって仕事に没頭するのだった。

日常的に行っていた仕事は熱を冷ますのにある程度の効果を發揮してくれたようで、何とか落ち着きを取り戻すことに成功した。

そこからはひたすら仕事をこなす。

平常時に比べて集中力も欠け、気も散っているのに、何故か何時もより仕事が速い。経験則で三日はかかるだろうと思っていた山を一日で片付けてしまった。

苛々する。

これではまるで今までの私が気と手を抜いて作業をしていたようではないか。苛々しだした気分を落ち着けようと一息つこうとして、扉がバタンと開いた。

この城でそんな事を仕出かすのは春蘭か賊ぐらいの物である。

一応椅子の横に備えてある短剣に手を伸ばすが、予想通り春蘭が入ってきた。

短剣に伸ばした手を引っ込め、机の上で両手を組む。

苛々を抑えるように両手をきつく握りこむ。

他人に感情をぶつける無様だけは晒すまいと、出来るだけ優しく窘めようと口を開いた所で、春蘭が誰かを引っ張ってきている事に気が付いた。

もう夜も近いというのに誰を……。

そこで私は凍りついた。

春蘭が連れて来た者が絶世の美人だったからだ。

その美しさは天から舞い降りた天女と言っても過言ではない。

ああ、これが私の追い求めた美そのものだ。

私が死ぬ間に焼き付けた究極の二つの美、その一つが目前に……。

……

……

はて、死ぬ間際とは何の事だ？ 私は何を考えている？

首を傾げ、疑問を追いかけようとしたが、凄まじい速さで眼前に迫ってきた春蘭に考
えが中断される。

春蘭は私が仕事をしていた事を烈火のごとく怒っており、後ろに控えていた秋蘭も追
従した。

約束していた事でもあり、忠臣からの心遣いでもあったので、私は黙って聞き入れる。
そして彼女について説明を受ける。

医者として紹介された彼女は私の覇気を真正面から受け止め、更にはこちらを楽しま
せるような言葉を吐く。

欲しい、と思った。

何もかもが私の理想で、今すぐ力づくでも手に入れたいと理性が負けそうになった。
だが私は知っている、彼女は力で屈服できるような相手じゃない。

むしろ私が飲み込まれる程の威を持っている。

そしてそれが更に愛おしさを強くする。

だが、だかだが、だかだがだが、問題が一つ発生した。
なんと彼女は男だという。

呆然とした。

けれど、今世の私は女だから、それも良いかと……。

だから、私は、何を考えている？

頭を振って混線している頭の中を空っぽにする。

明日改めて診察をされると言われたので、これ幸いと距離を取る。

春蘭と秋蘭に後の事を頼み、私はさっさと寝処に潜り込み、冷めぬ熱を無理やり抑えこみ、朝近くになってようやく寝入る事が出来たのだった。

朝起きると、涙の跡があった。

胸が苦しくなるような夢を見た気がするが、詳しくは思い出せなかつた。

ただ、私は何かに負けたのだ、という印象だけが残っている。

私は生まれてこの方、負けを認めた事がない。負けても負けても這い上がって全てを上回ってきた。

だが何故だろう、この敗北感だけはとても素直に受け入れられる。

……まあ所詮は夢、先のない話である。

私はさっさとその事を忘れ、彼に言われた昼まで書類仕事に精を出すのだった。

昼が来て彼に診察を受けている間、ずっと胸が高鳴っていた。

恋する乙女のようなように思ったが、そこには少しばかり物騒な感覚が混じっていた。

彼と言葉を、そして何より剣を交わしたいという想いが心の底から止めどなく溢れてくる。

医者に剣を取れなど何を馬鹿な事を考えているのだ、と考えを一蹴し続け、診察は終わった。

結果は異常なし。

老先生と同じ診断結果だったが、彼の方がより理に適い、正確だった。

春蘭秋蘭を納得させる為に並べ立てた全てが見事に的を射ていて、その精密な分析はもはや恐怖を感じた。

しかし身体は健康であっても、心因性による病気という可能性を示唆された。

つい十年前に提唱され、最近ようやく実証結果が出てきた病状にも詳しいとは……この若き医師は何者なのだ？という疑問と、やはりどうしても手に入れたという欲望が

むくむくと湧いてくる。

その後、彼をどうにか引き留めると画策しようとしたが、彼が精神的外傷の再現を手伝うと見事な医者根性を発揮してくれたので、明日明後日ぐらゐまで猶予ができる。

更に時間と好感度を得ようと思ひ、食事に誘う。彼は笑顔で応えてくれた。

最上級の料理による持て成しは功を奏したようで、彼は終始微笑みながら食事を進めていた。

食事の作法もため息をつきたくなるぐらゐに完璧で、話の種として出した料理の話題も思つた以上の会話となる。

特にここ四百年の料理史はまるで見てきたように詳しく、この私が舌を巻き、口も出せずに聞き手に徹する他ない等、驚きと悔しさと喜びの入り混じる有意義な時間となつた。

とはいえ、あまりにそちらの話題が楽しく、また尽きなかつたので、彼が何者かという追求があまり出来なかつたのは不覚としか言えなかつたが。

食事を終えて別れると、より彼を求め欲求が増していると気付かされる。

が、ここで早急に手を出すのは愚策だ。無理強いなどしなくても良いように、地道に好意を積み重ねていかねば。

翌日、私達は頭痛が起きた状況再現を行うために陳留から少し離れた荒野に来ていた。

連れてきた数人の兵を盗賊に見立て、それらしく当時の状況を再現する。

だが何の変化も見られず、頭痛のきつかけは掴めず仕舞いだった。

ならば盗賊に何か仕掛けられたのかも知れないと話をまとめようとした所で、彼がより詳細な情報を求めてきた。彼への信頼を表すため、胸襟を開いて情報を渡す。

彼は何度か頷き、太平要術の書について詳しい説明を求めてきた。

持ち主の望む事が書き記された本、としか聞いたことがなかったもので、そのまま話す。彼はそれが怪しいと思っているようで、強い興味を示していた。

まあ確かに、持ち主が望む事が書いてあるなら、私達を撃退する外法でも書かれています。たのかもしれない。

あれから何の音沙汰も無いという事は、あの時限りのものだったのだろうか？

ともあれ呪いに詳しくない私達は手を打てない。

都か何処かから呪術師を招いて話を聞いてみる、という事でこの件は諦めざるを得なかった。

帰途についている間ずっと私は焦っていた。これで彼を縛る用事が全て終わってし

まったからだ。

彼をどうにか繋ぎ止めておきたい。けれど褒賞には興味が無く、患者を第一にする信念があり、旅をするのが生活の一部という彼に、私は提示できる何かを持っていない。どうすれば、何をすれば彼を繋ぎ止めておける？

もつと会話がしたい、もつと一緒にいたい、彼と一緒に高みを見たい。

焦燥に駆られた私は、気付けば心の底の熱が求めるまま、言葉を彼に投げかけていた。「ねえ謙信、戻ったら剣を交えましょう」

放った瞬間、私自身何を言っているのだと呆れ果てた。春蘭秋蘭、果ては盗賊役として連れて来た兵までが急に何を言い出すんだこの人は？と呆れと疑問が混じった表情をしていた。

けれども彼だけは、

「ええ、真剣を交えましょう」

とても嬉しそうに笑って答えてくれるのだった。

一方その少し前。

「ねえねえ地和ちゃん人和ちゃん！今の見た?!」

「何を？つて、また余所見してたの?!もうすぐ稼ぎ時なんだから早く準備終わらせないとんだだけどー!」

「余所見してたのはちよつとだけだもん!」

「作業自体はしてみたんだけど、何を見たの天和姉さん?」

「人和ちゃん、聞いてよ!今ね、一瞬しか見えなかつたんだけど、曹操様が見えたんだよ!」

「ふうん、確か昨日か一昨日も自ら出ていらしたわね、何かあつたのかしら……」

「それでね、その後ろに白い服を着たすっごい綺麗な人がいたの!もうね、なんかね、びびびーつて来たの!あれは絶対私達の運命の人に違いないんだから!」

「はいはい、何時もの何時もの」

「今回は違うの!間違いないの!」

「けど一瞬だけしか見えなかつたんでしょ?」

「うっ、そうだけど……」

「それじゃあ見間違いかもかもしれないし、信ぴょう性薄いわね」

「うー地和ちゃんの意地悪!」

「はいはい、二人共それぐらいで、それじゃあさ、その人に私達の名前が届くぐらい今日は頑張りましょうっ?」

「うん、そうね、そうよね、お姉ちゃん頑張る！」

「あ、あのー、数え役満姉妹の三人ですよね？」

「あはっ、そうですよ♪何かありました☆」

「ほ、本物の地和ちゃんなんだな！」

「オイラ達皆さんの歌の愛好家でやして、あの、取り敢えずこれ、受け取ってくださいえ！」

「えっ、これくれるの？ありがとー」

「有難う御座います、今後の活動の励みにします」

「ちよつと急いでて今日の歌は聞けないけど、また聞きに来ますんで、そんな時はお願いし

ますー！」

「なーんだ、ざくんねくん←でもでもお、絶対また聞きに來てくださいね☆」

「も、勿論なんだな！」

「それじゃあ失礼しやす！」

……

…

「お姉ちゃんね、今の三人何処かで見たとあるの、何処だったかなー？」

「人相書きが出回ってた三人組ね。はあ、厄介事に巻き込まれたかしら」

「えー悪い人なの？えっと、何か本くれたけど、どうしよう？」

「大人しく曹操様の所に持って行くのが良いわね。褒章も貰えるだろうし、交渉次第では兵や将、高官達の前で歌う許可が出るかもしれないわ。偉い人との縁が出来ると色々都合がいいし」

「そうなんだー。なら私達の運命の人探索計画がいつばい前に進むね！」

「……そんなの必要ないわ」

「地和ちゃん？」

「地和姉さん？」

「この本に書かれてある事を実践したらもつともつと速い！大陸中に数え役満姉妹の名が轟くわよ！」

49. 交わす剣、交わる記憶

彼は真剣でと言ったが、春蘭と秋蘭がそれを許すはずもなく、模擬武器での打ち合いとなった。

鍛錬場から兵を追い出し、私と謙信、そして鍛錬場に誰も近づけさせないよう見張りとして春蘭と秋蘭の二人を置いた。数百人が使える程に広い鍛錬場にたった四人だけ、だがそれでも私達には狭い、と何故か考える。

馬鹿なことを、と頭を振り、戦いに集中する。

そして完全に意識を戦いに切り替え、私は鎌を、彼は剣を手に取り、中央で互いに構えるのだった。

空気が途端に重くなる。

肌が粟立つ感覚に笑みが止まらない。

ああ、やはり私の予想は正しかった。彼は絶対なる強者である。

先手は私が取った。

鎌は先端が極端に重くなる特性上どうしても初速に劣る武器であり、後手になると手が回らなくなつて負けてしまう。

だから先に動き出し、踊るように回つたり、全身を捻つて力を加え、勢いを増し続けなければいけない。

勢いを殺さない程度に左右に身体を揺らして攻撃を交わしたり、足捌きに変則的な動きを取り入れて攻撃の機先をずらしたり、石突きを意識させて動きを牽制し、手足を使つて相手の体制を崩したり、飛んで跳ねて攪乱してと曲芸じみた事をしなければ武器の本領は発揮できない。

更には攻撃を受けた瞬間に流れが止まるので、武器のかち合いをしてはいけない等制限も多い。

だが勢いに乗せて振る事さえ出来れば、鎌の刃先による刺突、両刃となつてゐる刃による切断攻撃が同時に襲いかかる。しかも重心が先にあるから重さも十二分と非常に対処が難しい攻撃となる。

初見で受けるのは自殺行為と言える。

私は最大加速で彼の元まで走る、一息の間に間合いを詰め、鎌を薙いだ。

まるで枷が外れたかのように身体が軽く、今までとは一段階違う身体能力が発揮される。

最高の出だし、最高の加速、最高の振り、生まれて初めてこれ以上はないと思えた攻撃を行えた。

だけれども、

「予想以上の突進速度でしたし、良く練られた攻撃でした。ですが、やはりその武器ですと曲芸の域を出ませんね」

彼は上半身を反らし、最小限の動きで鎌を回避して、剣を私の首元に添える。

私も、春蘭秋蘭も、驚きの表情を隠せなかった。

初見で大鎌最大の弱点、最小限での回避を見事に突かれるとは思ひもなかった。

受けるのは先程も言った通りに難しい。刃先だけ弾いても勢いの乗った柄があるし、柄を狙うなら刃が届く。飛び退るなら更に勢いをまして鎌を振るえる。前に出て来るなら鎌を引けばいい。しゃがむなら石突で脳天を打ち割ればいいし、跳ぶなら鎌を投擲して体ごと分断してやろう。

だが体を逸らすような最小限の回避だけではどうとも出来ない。

勿論回避をさせない為の工夫は幾つも打っている。動きの緩急であったり、変則的な動きであったり、振った瞬間に僅かに手を滑らせて間合いを誤魔化したり、その他細かい対策もしている。

踏み込みから武器を振るうまでの一瞬の間に施した虚実は十数個に及ぶというのに、

それら全てが意味をなさなかった。

「貴方は、私以外の大鎌使いとでも戦った事があるのかしら？」

「農民が鎌を持って薬を奪いに来た事はありましたが、そこまでの大鎌を振り回す酔狂な人物には出会った事はありませんね」

「まあ、それはそうよね。こんな扱い辛い武器を好き好んで振り回す馬鹿な人間がそう
そういる筈ないわよね」

「えっと、あつけらかんとそう言われると対応に困るのですが……では、その武器を選んだ理由をお聞かせ頂けますか？」

「言うなれば象徴とか飾りかしらね。」

この鎌は命を刈り取る形をしていて、見ているだけで不気味でしょう？だから民や雑兵には良い脅しになるのよ。

けれどそれなりに経験を積むと逆に侮ってくる、私の身体でこんな扱い難い物を振れる筈がないってね。侮られたらさっさとその隙について一瞬で首を刈り取る。そうして倒せば武器の不気味さも際立って周囲の不安を掻き立てる事なんかもできるでしょう？

矢も鎌をくるりと回せばある程度対応可能で、振り方次第で広範囲の敵に有効、刺突斬撃打撃が可能、長物も絡め取れば奪えもするわ。

泣き所は勢いを力ずくで止められる夏侯惇のような豪腕を誇る者と、貴方のように一瞬で謙の特性を見抜ける者と相對した時には厳しい、という事かしら」

「ほう、合理化を突き詰めた結果、という事なのですね。

では次にお聞きますが、これは本命でしたか？」

「いいえ、一番自信があるのは剣よ」

私は謙の特性を理解して攻略しようとする強者に対して用意していた秘策、奥の手を簡単に吐露してしまった。

案の定春蘭秋蘭が慌てている。

「何やら側近の方が慌てていらつしやいますよ？」

「放つとけば良いわ。ねえ謙信、一つ賭けをしないかしら？」

医者に喧嘩を売る私を面白そうに受け入れた彼なら、多分乗ってくる。

「賭けですか？」

「ええ、相手を下せば勝ちという単純なもの。そして勝った者は負けた者に一つ命令できる、というのはどう？」

賭けの単価としてかなり悪どい要求という自覚はある。

だけどこれを逃したら彼は何処かに行ってしまうかもしれない。

彼が他の誰かのものになるなど、許せるはずがない。

「さつき見せた私の腕前を踏まえて仰られているのですか？」

先ほど彼が見せた動き、無駄を省いた流麗で軽やかだった。

目に見ても分かるし、体の奥から響いてくる声からも、あれが彼の實力の一端でしか無いと訴えている。

だけど、

「そうよ、私は私を追い込みたいの。私はすごい負けず嫌いでね、今負けて、その上で本命も負けて賭けにも負けるなど、死んでも許せない質なの。だから死に物狂いで勝ちに行くわよ」

これまで私は勝ってきた、だから今回も勝つ、勝つて全てを手に入れる。

「憤死などされたら困りますよ？」

「大丈夫よ、負けないから」

傲岸不遜に言つてのける。

あらゆる天賦を持つ自身をこれでもかと磨き続けてきた、だからそれ相応の自信はある。

「……貴方の有様、正しく霸王です。

受けましょう、少し興味が出てきました」

「ふふつ、言つたわね。ならば私が勝つたら貴方の全てをもらおうわ」

「では私が勝てば、私と共にして欲しい事があります」

「あら、ここでは言えないの？」

「言えません。ですが貴方しか出来無い事ですし、ただの一度きりで構いません」
ほう、この私に何をさせようと言うのか。

興味は湧くが、何にしろ私が勝つのだ、彼の言う事は残念ながら聞けない。

「貴方と共に、と言うのなら命の危険も無いのでしょうか？ならば構わないわ。」

ではどうしましょうか、証人はいるけれど私の身内だものね」

「ならば真名に賭けましょう」

「真名を晒して良いのかしら？」

真名を聞き出すのが一つの目的ではあったけど、随分と素直に受けるのね。

「この国ではこれ以上の誓いも無いでしょう。そしてこの戦いは最上級の誓いを行う価値がある」

どうやら彼も私を買ってくれているようだ。

得意の得物ではなかったとはいえ、あの一振りにそれなりのものを見てくれたらしい。

「それもそうね。では私、曹家当主曹孟徳、真名を華琳が誓う。」

「この戦いを一対一で最後まで戦い抜こう」

「謙信、真名を白が誓う。」

「この戦いを正々堂々と戦い抜く」

頭痛、ではなく、心の奥がずきりと傷んだ。

「……は、く？謙信、貴方の真名は白と言うの？」

「ええ」

「その名は……その名は確か……この記憶は、この感覚は」

血に濡れた私を抱く彼の姿が脳裏をよぎった。

その瞬間、腹の底で蠕っていたモノが咆哮を上げる。何が起こったのか分からないが、それが歓喜の雄叫びだと言う事だけは分かった。

「私の真名に反応されるといふ事は、貴方はやはり霸王なのですな。」

……曹操様、私は貴方の抱いている感覚に心当たりが御座います」

目の前の彼は嬉しそうにそう言った。

「それは何故、どうして貴方が？」

「それは勝つてからお尋ね下さいませ」

「そう悪戯に微笑む彼を見て心が沸き立ち、見たこともないはずの情景が浮かんできた。」

『なあ、私が君にここのも親近感を持っている理由が分かるかい？』

『心当たりはあります』

『そうか、もし私が勝つたのなら、君からそれを聞き出そう』

誰かと誰かが記憶の中でそんな会話をしていたような気がする。

「つ、このやり取りすら何かが頭にちらつく！」

ええ、そうするわよ、元より負けられない戦いに、勝つべき理由が増えただけ。

夏侯惇、倚天と青紅を持って来なさい！」

「いえ、模造刀が良いでしょう。これはあくまで試合です、殺し合いではありません。

それにそちらの方が、きつと面白い。冶金技術、鍛冶技術も相当に上がっていますし、ある程度打ち合えはするでしょう」

少し気になる言い回しだが、言わんとしてる事は分かる。ここは将も使う鍛錬場で、置かれている模造品は刃こそ潰されているが品質自体は一級品と遜色ない。

まあ存分には戦えるか。手に馴染む武器で闘えないのは少し残念だが。

「……貴方が言うなら良いわよ」

自身が使っている倚天の剣に近い重心の武器を選び出し、数度振るう。

掴んだ、行ける。

私は鍛錬場の中央に再び戻り、剣を構えた。

彼も一本の剣を選び、中央にやってきた。

「始めましょうか」

「ええ、ではいざ、参ります」

そうして戦いの火蓋は切つて落とされた。

彼は受ける事を選び、私は攻める事を選んだ。

打ち合つてすぐ彼は私と同種の剣を振るうと理解し、戦慄した。

無駄をそぎ落とし直線で命を狙い続ける、一太刀一太刀に幾つもの布石を込めて常に選択肢を迫る、隙あらば急所を狙つて集中力を消費させる、そんな虚飾を取り払つた合理の剣。

私はこの剣を完成させてから負けた事がない。

気力の充実と型の完成が同時期に済み、それまで負け続きだった春蘭の力も、秋蘭の手数も追い越した。

二人に泣いて喜ばれたのは記憶に新しい。

そうして苦心の末に得た剣理を、目の前の人物は容易く振るう。

何故だ、とは思わない。合理を突き詰めた剣なのだ、誰かが見つけて身につけていたつて不思議ではない。

だが、同程度に使われるとは思わなかった。

つまり目の前にいる存在は、私と同等以上に身体能力、気量、戦術勘がずば抜けており、また厳しい鍛錬を長く行ってきたという事になる。

その事実嬉しくなる。

勉学を学ぶ名目で中央に赴き、そこで優秀な人間がいるという噂を聞きつけてはその人物の元に通つてその程度を見てきた。

そうして中央にいる人間を上から下まで全て見終わつた後、袁紹に近付き縁を得て大陸全土に目と手を伸ばした。

その上で言う。

私と同等という事は、大陸で一二を争う傑物であると。

ああついに私と争える者が出てきたのだ。

……等と余裕ぶつていられたのもほんの一瞬だった。

ぎりりと奥歯を噛み締め、くぐもつた呻きが出た。

悔しいことに、彼の方が一枚どころか三枚は上手だった。

彼の一拳手一投足を見ると、自分の技量が如何に拙いかわかるのだ。

才覚はそう劣るものではないと思う、だが圧倒的なのは経験差だと理解する。

彼の厚すぎる経験がそのまま私にとっての壁となっている。

それでも打ち合っただけでいられるのは彼と私の剣が同種で、何が何処に来るのか感覚的に分かるからに過ぎない。

剣を百合余り交わして、私は大いに成長した。

目の前に最高の教材があるのだ、剣を打ち合わせていけば勝手に技量は上がる。そして技量が上がったからこそ結論が出た。

このままでは絶対に勝てない。

技量はこの短時間で彼の背が見えるまでに育った。けれど急激な技術の成長に身体が振り回されてしまっている。

更に言うなら体格は向こうが上で、体力と間合いと体重で負けているのも辛い。

このままでは体力切れで負けてしまう、何か手を打たねば！との焦りが私を支配する。

何か打つ手は無いのかと周囲を探る。

多少の不利を背負う事を覚悟して、意識を分割する。

迫る選択肢が少なくなったのを感じた彼が攻勢に出る。そして一気に防戦一方だ。早くきっかけを掴まなければ押し込まれる。

周囲を懸命に探るが、何も無い。

一対一の勝負に何者かを介入させる訳にはいかない。
鍛錬場は綺麗に均され、足元を崩したりも出来ない。

駄目だ、周囲にはきつかけがない。

ならば彼には何か無いか。

楽しげな表情、整った呼吸、綺麗な白衣、足運びに乱れもない。

剣筋は私の理想そのもので、強要する選択肢は私よりも遥かに多い。

ああ、彼自体にはどこも隙がない。

けれど強者そのものの彼を見て、何故か強者へ挑む方法を幻視した。

もはや打つ手はない。分割した思考ではもう凌ぎ切れない。そして戦いの勝敗が別

の所に移っていると知る。

今私は彼の掌の上にいる。

ならば幻視した剣を試してみるのに何の躊躇いがあるうか。

私は虚飾を省いた強者の剣を捨て、虚実を混ぜた弱者の剣を振るう決意をした。

剣だけの攻撃手段を捨て、僅かでも隙が出来れば手足を直接振るい、地面に転がる砂

礫を使い、虚を織り交せて挑みにかかる。

彼の向こう側にある姿を見続け、打てる手は何でも打って形振り構わない攻撃を続け

る。

すると形勢が徐々に傾き出し、拮抗した。

彼はそんな私をととても眩しそうに見て、とても穏やかに笑い……動きを早めた。

「貴方、手を抜いていたのね！」

「ええ、ですが、ここからは本気です」

再び押されかけるが、段々と動きが嘯みあい、二人の動きは躍るように激しさと速さをまましていく。

「ずつと答えを知りたかった。あの時互いに持つ武器が同程度であつたなら、結果はどうなつていたのかと」

彼と剣をぶつける度、思い出す。

初めて春蘭秋蘭を下した時の事、初めて剣を手にとつた時の事、曹操として生まれた時の事、私が私じゃなかった時の死に際、愛しき人との別れ、霸王と呼ばれ始めた時の事。まるで人が最期に見るといふ走馬灯のように、私は私の全ての記憶を追体験していく。

そうなのね、全て納得したわ。

今見た光景は、遙か昔に見ていたのね。

先ほどからあつた違和感が消えていく心地よさがあり、しかし彼と私の立場が以前と逆なのがとても癪でもあり、とても複雑。

しかしその光景と結末を見た上で言う。

「白、勝つのは私よ」

「いいえ、勝つのは前と同じ、私ですよ」

劍を交わし、言葉を交わす。

ずつと続けば良いと思えた瞬間だったが、終わりは必ずやってくる。

私は擲り上げるような斬撃を行い、彼の劍を少しだけ跳ね上げる事に成功した。

直接的な攻防には関わりのない程度の僅かな隙とはいえ、それを後退の為に使う。劍と体力を消耗する悪手だが、こうする他もう道はない。

後退した勢いを殺し、直ぐ様全力で前進する。

私の体力を全てかけた突進。踏み込む足は硬い床石を陥没させる程の速度と重みがあつた。

だが意識を極限まで集中させた結果、まるで水中にいるかのような感覚に陥る。ゆつくりと彼の姿が近づいてくる。

改めてその姿に惚れ惚れとした。

美しさの極致だった。容姿、純白の衣、振るう劍、武技の冴え、一切崩れない微笑み。隙など何処にも存在しなかったが、私は劍を振るわざるを得なかった。

完璧な立ち姿の何処かを崩したいと、私は今現状で振るえる最速の劍を彼の首元に

放った。

だが彼は何も崩すこと無く、私の剣目掛けて一太刀を放った。

そして当然の帰結がやってきた。

長く続いた剣戟は、ぱきーんと甲高い音が響く事で終わりを告げた。

首を狙った私と剣を狙った彼。圧倒的に彼の方が早く目標を捉え、限界に来ていた剣は完全に分断された。

結局、経験不足、身長による間合い、体力の不利、武器破壊の狙いを覆す事が出来なかった。過去の霸王と彼の間にあった利点をまんまと押し付けられた形だ。

また経験不足を補おうと彼の動きを見て学んでいた事、突破の鍵を探そうと一時防戦に徹した事も取り返しへの付かない悪手だった。

私は彼の思惑通り、剣の消耗に遅れて気付く事になってしまった。

攻め方を切り替えてから剣の損耗は出来るだけ抑えたが、それでも大きく引き離された分を取り戻すには至らなかった。

更に言うなら、戦い方を切り替えて剣の損耗は抑えられたが、その分集中力と体力を削る事になってしまい、最後の最後はほとんど感覚頼りで綱渡りのような戦いになってしまいう始末。

ちよつと無様な戦い方だったと反省する。

今後の課題は今掴んだ感覚を繰り返す事、そして基礎体力作りね。あと背が伸びる方法を探しましょう。

半ばから折れた剣を鞘に戻し、それを杖のようにして身体を支えながら、私はそんな事を考えていた。

本当は倒れ込みたいが、意地である。

一步も動けなくなった私の元に、白がゆっくりと近付いて来た。

本気と言っていたのは嘘ではなく、彼も僅かながら息を乱し、汗が浮かんでいた。

まあ、あれだけの激戦を経たのだ、多少でも乱れてくれなければ困るといふもの。というか四半刻近く全力で剣を振るって汗を少しかいたただけとか、本当に勘弁してもらいたい。

「結果は見ての通りです。同条件でさえあれば、あの場の勝者は貴方でした」

「……けれど、この場は私の負けなのね。勝者そのものは変わらなかったわ」

「思い出されたのですね？」

「ええ、多分だけど全部思い出したわ」

私が覇道を歩みだした理由、自身と同等の英傑を求めていた理由、美しき者を求めて

いた理由、全てに得心がいった。

私の魂は元より霸王であり、生きる実感をくれた韓信を求め、今は亡き虞をずっと探していたのだ。

「長年の疑問が解消されたわ。けれど今はまだ深く考えるのはやめておきましょう。

賭けの結果が出たのだから、そちらを先に聞く事にする。

「貴方が私に求める物は何かしら？」

確か私と共に何かして欲しい、だったわよね。

私と共に天下統一を果たそう！ とか言われるのかしら。白とだったら夢ではない、どころかかなり現実味を帯びる提案だわ。

私と一夜を共に、とかも十分ありえるわよね。まあ別にそういうのでも構わないわよね。結果大陸も白も私の物になって万事解決天下泰平だわ。

私の予想がどんどん膨らむ中、彼は少し悩んでいる様子だった。

「一つ伺っても良いですか？」

随分勿体ぶる、けれどまあ必要な事なのだろう。

「求める物を決める質問かしら？ だったら何でも聞いて頂戴」

「有難う御座います。天の御遣いという者が最近降臨したと旅の者に聞きました。

その行方はどうなったかご存知でしょうか？」

「一応まだ機密に近い物なのだけど……もうすぐ噂として出回るでしょうから、答えても良いかしら。」

袁術麾下、孫家頭領孫策の元に匿われたそうよ」

「……やはり別の所、しかもあの子の所なのか」

彼は重々しい表情をしていたが、意を決したように言い放った。

「曹家当主曹操様にお願ひ申し上げます、私と共に運命に負けて頂きたく存じます」

「はい？」

なんとも私の予想を大きく裏切る言葉が飛び出してきた！

50. 白き御伽噺

「私と共に運命に負けてください」

謎の言葉だった。

しかし意味こそ分からないが、聞き捨てならない言葉だった。

「運命に負ける？ 貴方は何を言っているの？」

「疑問を呈するのも十分理解できません。ですが、恐らくここから言っていた方が収まりが良いのです。」

今は私がそういう戯れ言を言っていたと、記憶の端に留めるだけで構いません」

「……もう、期待して損をしたわ。」

ともかく貴方の願いは聞き届ける、貴方が負けると言えば、ただ一度だけ撤退もしましょう。

けれど出来れば、事前に言ってもらえると助かるわね」

「ええ、善処します。きつと貴方なら、私よりも上手く負ける事も出来ましょう」

「良く分からないけれど、貴方は約束の履行を見届ける義務がある。という訳で、これからは私の傍にいなさいよ？」

「ふふつ、強引に持って行きますね。ええ、約束を守って頂くまで傍に控えさせて頂きましょう」

そこまで話し終え、私の意地がそろそろ限界を迎えそうになってようやく時が動き出すのを感じた。

春蘭と秋蘭が慌てて寄ってくる。

膝が崩れ落ちる間際、二人に肩を貸してもらってどうにか意地を貫き通す事に成功。ほつと一息である。

「戦闘の終わりからずつと、私は我が一の家臣の助けを待っていたのだけど？」

ここではつきりと、白は貴方達よりも優先する者ではないと序列を明確にしておく。

「申し訳ありません。謙信が曹操様の鎌を避けたあの時から、信じられない光景の連続でありまして」

「私達二人共、思考が停止したままとなっていました。まさか曹操様と互角、どころか上回るとは思いもありませんでした。あのような武の極みを見せて頂き、お二方には武人として感謝の言葉しかありません」

「とはいえだ、謙信！武人としては尊敬するが、それだけだからな！私達こそが曹操様の一の家臣だ、調子に乗るんじゃないぞ！」

がおーつとばかりに吼える春蘭に笑いが溢れる。

謙信は穏やかに笑いながら、

「ええ、あくまで曹操様の傍に控えるだけです。一番になろう等とは思っておりませんのでご安心ください」

とはつきりと言いつつ切られてしまった。

なんか癪ね。けどそれを追求するにはまだ距離があるから、今は仕方がない。

「剣を交え、言葉を交わした。今後は傍に控えるのだから、真名で呼ぶ事を許すわ」

「はっ、有り難き幸せ。華琳様も私の事は白とお呼びください」

今は取り敢えず、真名を交わすだけで良しとしよう。

「では白、何か望む待遇はあるかしら？」

「私は名を挙げる事が禁じられていますので、戦場に出る事と責任ある立場に就く事が出来ません。ですから華琳様の主治医の立場を欲したく存じます」

「謙信よ、それはどういう事だ？あの見事な剣技を戦場で披露する事が出来ないというのか？それは余りに勿体無くないか？」

「私は仙人でありまして、世俗に必要以上に関わると罰せられるのですよ」

「ふざけた事を、と言いたくなるが、謙信殿の並外れた治療術と武術はそう説明された方が納得いってしまうな」

「素性の明かせぬ怪しい者ですが、決して華琳様に仇をなす者ではありません。」

少し時間を置く事にはなりますが、改めて話をさせて頂く機会もあると思います」
「ええ、その言葉信じるわ」

「もし華琳さまと我ら姉妹の信頼を裏切ったら、我が剣の錆にしてやるからな！」

「おや、夏侯惇殿も既に信頼してくれているのですね？」

「あつ、違うぞ、言葉の綾という奴で……ええい、ぽつと出のお前なんて誰が信頼するものか！」

「ああ、嫉妬と尊敬の狭間で悶える姉者可愛い……」

険悪になる心配をしていたけれど、必要なかつたようね。夏侯姉妹と上手くいくなら、他の大体の者とも上手くやるだろう。

「ともかく、白の要望は分かった。貴方には私の主治医の任を与える。

以後城内外での行動制限を外し、街の外への移動は許可制とする。

しかし混乱が起きないように貴方の情報が我が軍に行き渡るまでの間は単独行動を禁止する。出掛ける際は可能な限り夏侯姉妹どちらかをつける。

部屋は取り急ぎ用意する、準備が整い次第客室から移動してもらおうわ。

と、こんな感じかしら」

混沌とした霧囲気をまとめるべく、大きめの声で今後の方針を伝える。

「はっ、曹家当主曹操様の主治医という大任、全うする事をここに誓います」

「それじゃあ今日は疲れた、春蘭、浴室まで付き添いを頼むわ。

秋蘭、彼に城内の案内を大まかで良いので頼むわ。

そして彼には色々と迷惑をかけた、今回は特別に浴室を使う事を許可する。私達が出る頃合いを見て連れてきなさい」

「はっ」

少し回復してきたので自分の足で浴室に向かう。

私が鍛錬場を使う時は浴室を使う時なので、既に準備は済ませてある。

今日は色々あり過ぎた。お湯に浸かって一息入れよう。

春蘭に湯浴みの用意をさせ、二人で入る。

何時もならこちらからちよつかいを掛けるのだが、そんな気力もなく、気分でもなかった。

湯船に並んで沈む。疲れや余計なものが沁み出すような感覚で非常に心地が良い。

しばらくすると春蘭が躊躇いがちに尋ねてきた。

「華琳さま、謙信は一体何者なのでしょう？」

当然といえば当然の疑問に、私は浴室の天井を見ながら思考を巡らせた。

彼の事に関して分かった事は多いが、それ以上に分からない事も多い。

彼が話してくれるまで待つべきだろうか。だが彼についての情報を渡さなければ、今日の戦いに立ち会っていた二人は不審を抱き続ける。

それはきつと軋轢となるだろうが……。

「彼については分からない事が多い。憶測で判断出来る人物でも、判断して良い人物でもない。」

だからここは彼が語るまでは待ちましょう」

「信用、出来るのでしょうか？」

「ええ、それだけは私が認める。だから今は、彼を信じる私を信じて頂戴」

「……分かりました、華琳さまの判断を信じます」

不満顔ね、念を押しておこうかしら。

「有難う。家族たる古参の皆よりも重用はしないし、貴方や秋蘭という目も付ける。」

不安がらないでも大丈夫よ」

「はい！信じております！」

それからは言葉を交わすでもなく、千々切れそうな筋肉を春蘭に揉んでもらいながらお湯に浸かる。

「ふう、しばらくこのままでいたい」

動きまわった疲れと筋肉が解れる心地よさに溺れつつ、湯で温まった頭はだらだらと

思考を続ける。

私は性別から変わっていたというのに、彼は四百年前とほぼ同じ容姿をしていた、とか。

もしかしたら彼は生まれ変わったのではなく、あれから生き続けてきたのかもしれない、とか。

彼の来世でまた会いましょうという言葉は、来世というものがあるかと思っていなければ出てこない、とか。

不老不死、理外の知識、最強の武、最新の医学、全てを兼ね備えた絶世の麗人って何それ、とか。

治療をしながらの一人旅は大変だったろう、とか。
白い衣は汚れやすいだろうに綺麗だったな、とか。

そういえば、白い衣については昔に聞いた事があるな、とか。
疲れるから否定もせずに垂れ流していた思考が、何かに辿り着くのを感じた。

私はその引っかけかりを辿るべく、思考を加速させる。
いつか何処かで聞いたことがある気がする。それは、何時、何処でだ？

あれは……そう、そうだ。確か私が幼い頃に、お祖父様から聞いたのだ。

眩い白衣を着た絶世の麗人が大陸全土の才能ある子供を集めて私塾を開き、全ての生

徒を心清らかに育て上げ、また生徒の望む知識に全て答えてくれる。

最後は生徒が歩みたい道に応じた知識を詰め込んだ本を授けるといふ話。

『なんとも夢物語のようです、本当の事ですか？』

と私はその塾の話をしてくれたお祖父様に正直な所を述べた。

『ああ、その私塾は確かに存在していたのだよ』

とお祖父様は穏やかに笑いつつ仰られた。

『私自身がそこに通っていて、人心掌握術の本をもらったのだ。あれから本は肌身離さず持ち歩いていてね、読んでみたいかい？』

と聞かれたので、私は大きな声で

『読みたい！』

と無邪気に答えたのだ。

昔読ませてもらったその本は残念ながらもう読めない。お祖父様の葬儀でその本はお祖父様に一番近い場所へ添えられていたからだ。

ともかく、そこに書かれていたのは人の心を解明した、とても美しい知識群だったと記憶している。一度見せて貰ったきりで、今では脳裏に薄つすらと残る程度ではあるが、それは今もなお私の知識と知識欲の根幹を為している。

そうして本を読み終えた私は、幼いながらに未知への探求欲の芽生えに興奮が止まらなかつた。そしてお祖父様に自分もこの人にいつばい教わりたい！と強く願つたのだが、お祖父様は困つたように笑つて首を横に振つた。

『割符が無ければ駄目なんだ。私の分は曹嵩を養子にする前に皇甫の家に渡してしまつてね。伝を得る為にやつたのだが、惜しい事をした。もし曹嵩の手に渡つていたら、次はお前の為に使うよう工作していただろうに。』

あの傾国の美貌、森羅万象を語る知識、気高き精神と平等性、剣武の天才を転がす技量、あの人に触れるだけでこの世の広さと高さを知れた。聡明なお前が出会つていれば、きつとお前は龍になれていただろうにな』

遠い昔お祖父様との数少ない会話の中にあつた一幕が、今鮮明に思い出された。

「あはは、何それ」

風呂に入り、思考を伸ばすままにしていたからこそ見えた荒唐無稽な答え。

「お祖父様が語つていたから、もうとつくに老いて隠れてしまっただろう、と勝手に思考から外していたわね。」

しかしそうか、全てが繋がつていたのね。

張良は呂雉によつて貶められ、中央にいられなくなつた。そして彼は中央から飛び出

して国を周り自身を高めながらも仲間達に忠義を尽くした。

そして四百年、各地に民話として残っているように彼は白き正義の味方として過ごし続けてきた。劉邦の意志を受け継ぎ、民を助け、教え、導いてきた。

お祖父様からの割符を受け取ったであろう皇甫嵩が、白の語った精神的外傷の治療を始めた事から、私塾も本当の事だったと知れる。

全ての起点は白であり、赤を支える白い色は全て彼に通じている」

「先程から何を小言で仰っているのですか？」

「彼の正体を勝手に想像していたのよ。けれどまさかのまさか、妄想で答えらしきものに辿り着くとはね。」

宮中で伝わっている与太話であり、民間に広がるお伽話が真実の話だったとはね。

確か春蘭は白い衣をまとった正義の味方のお伽話、好きじゃなかったかしら？」

「ええ、力の振るい方の正しき形だと、今でも思っております」

「白き衣を纏って旅をして、民に困った事があればたちどころに万事解決。」

飢えがあれば米を流通させ、不作があれば豊作になる方法を伝授し、病があれば自ら治療して、日照りがあれば川の治水をやつてのけ、悩む者がいるなら全てに答えを示し、悪人がいれば尽く打ちのめす。

そんな常識からは考えられない事を全てやつてのける正義の味方、それが彼よ」

「も、もしや、謙信は華琳さまが以前仰っていた正義の組織の一員なのですか？」

その言葉を聞いてぼかんとした表情で首を傾げる私に、春蘭は鼻息を荒げて詰め寄ってきた。

「以前白き者についてお伺いした時、そう仰られていたではありませんか！お忘れですか?!」

「えつと……あーそんな話を以前にしたような……」

確か、正義の味方を引き入れましょうと真顔で詰め寄られた時にそう誤魔……推察したのよね」

あれ確か、私達が父から陳留を任された時の話だ。

『華琳さまのお祖父様が仰られ、民間にも噂が囁かれています、絶対にいます！手を広げて探しましょう!』

『今はそんな余剰人員いないし、そもそも老衰でとつくに死んでる。つて全然聞かない……。適当に乗って話を逸らそうかしら。』

えーと、そう、そうね！火のないところに煙は立たない、だから本当にいるのかも知れないわね』

『ですよね！ 私達も腰を落ち着ける拠点が出来、手足となる人員も増えてきましたか

ら、今こそ彼の者を探しだし、我らの力となって頂きましょう!」

『彼の者つて……もし本当に白き衣の正義の味方がいるなら、それは恐らく白き衣という象徴を持つ、救世の意志をまとめた少数精鋭の秘密組織なのでしょね。やっている事は手が広い癖に、噂の出処が散発的すぎる、実行期間から考えてもそれが妥当な推理よね』

『なんと、正義の味方は集団だったのですか?!』

『あくまで仮定よ。つてこんな仮定意味ないわ。』

えーつと、ともかく! 彼らは秘密の存在だからこそ国に縛られず自由に活動できているの。だから無理に探そうとしては駄目。腰を落ち着けたとはいえ私達はまだまだ弱小勢力、今誘つては彼らの邪魔になつてしまふだけよ』

とか言つて誤魔化したのだ。

しかしまさか、そのお伽話こそが真実。春蘭の望みこそ正解だったとは、誰が予想し得るのか。

「なるほどなるほど、謙信の卓越した知識も武技も、かの正義の集団の一員であるのなら領けます!」

「うーん、まあ仲良くなるのなら、そういう受け入れ方でも問題ないかしら?」

「ええ、仲良くしますとも！」

手のひらを返すような態度に頭が痛い……というかそろそろ逆上せてしまいそうだ。

「一応言っておくけれど、確認も取れていない与太話の類よ。それじゃあ話はお終い、長湯をし過ぎたわ」

私は立ち上がり、脱衣室に向かう。

慌てて春蘭が付いて来るが、何やらそわそわしている。

「あの、この話、秋蘭にしてやっても構いませんか？」

「……推論に仮説を重ねた話だから、話半分聞くよう、また他言無用を貫くようにと前もって言うなら、秋蘭にだけ話して良いわ」

「はっ、有難う御座います！」

そして脱衣室で着替えを済ませて外に出ると、水差しを持った秋蘭と白が向こうからやって来た。

「あら、用意が良いのね」

私と春蘭は礼を言つて水をもらう。

「どうだったかしら、私の城は？」

「はい、建築物としての有用性、兵の練度、兵の配置等、素晴らしい点が幾つもありました。格別感嘆の声をもらしたのは資料庫です。蔵書の質も量も素晴らしいですが、編纂

途中の資料には特に目を奪われました」

「そう、そこは今最も力を入れている所だから、褒められると素直に嬉しいわ。

では白、私が設計した自慢の浴室を存分に味わいなさい。春蘭は兵の鍛錬結果をまとめたら謙信を迎えに来て、客室まで案内して上げて。」

秋蘭は私と共に文官の所に行きましよう」

「はっ」

そして秋蘭と共に筆頭文官の元に向かつている途中、白の様子を仔細聞く。

「あら、普通に案内しただけなのね、色々聞き出すかと思つたけれど」

「色々とは聞きましたが、私の理解を超える事を至極まともなように答えるのです。私には何が嘘で何が真か見分ける事が出来ませんでした。結果、途中からはただの会話と案内をするだけになっていました」

「そう、まあ仕方のない事ね。秋蘭、会話をした感じ彼をどう思つた？」

「理知的で、機微に聡く、謙虚である。なんと申しますか、出来過ぎなのに自然体で……正直に言うとは好感触でした」

秋蘭とも上手く付き合つていつてくれそうだ。

この二人に認められるなら、他の部下とも良好な関係を築けるだろう。

良かった良かったと一人で納得していると、秋蘭が足を止めた。私も足を止め、振り向く。

「華琳さま、一つ伺いたい事がございます」

そう秋蘭は切り出してきた。

とても真剣な表情と声に、私も気を引き締める。

「何かしら？」

秋蘭はしばし逡巡していたが、意を決したように切り出した。

「……華琳さま、貴方は何者ですか？」

ああ、やはり私の愛する姉妹には隙がない。

春蘭も気になっていたであろう疑問、しかしあの子はわざわざ聞いてこない。春蘭は良くも悪くも私に対して許容的過ぎ、強くなられたのなら良い、と自己完結したのだから。

その代わりに秋蘭が冷静で客観的な目を持っていて、私と姉を良く補助している。とても良い均衡だと思う。

「あの者の事は分からないと諦め、放置出来ます。華琳さまが信用なさるなら信用もしましょう。彼が自身を語るまで待ちましょう。」

ですが華琳さま、私は姉者と違い、貴方について分からない事を許容出来るほどの器

を持っておりません。

華琳さまが見せた急激な変化、以前よりも強大な覇気、研ぎ澄まされた剣技、彼と通じ合うような言葉、何れも私達には理解できませんでした。

ですので改めて聞かせていただきたいのです、華琳さま、貴方はどうなってしまったのですか？」

どうなってしまったか。正直私はこれといって変わったと思っていない。

霸王の記憶があろうとも、私は私である。そのような些末事で揺らぐような自我ではない。

「……今の貴方に、私はどう見えるのかしら？」

「外見も内面も、先ほど言った以外の何か変わったとは見受けられないのです。ですが、私には測りようもない巨大な何かになってしまわれたと思えて仕方がないのです」

ふむ、秋蘭を持ってして言い知れぬ変化か。これは案外直感的な春蘭の方が良い答えを導き出すかもしれない。

まあ私が言える事は、私は変わっていない、一皮むけて成長した、それだけだ。

過去の霸王の記憶と魂を引き継いでいようと、私は私である。

過去の彼とは夢と力の方向性が全く違うのだから、混合する事もない。

「そう、なら答えるわ。

私は私、曹家当主曹孟徳、真名を華琳。霸道を歩み、霸王へ至る者。幼き頃から何も変わっていないわ。

けれどそうね、彼との邂逅で少なからず成長したのは認めるわ。

お祖父様の言葉を借りるなら、私は究竟を知り、龍と成ったのよ」

51. 運命とは

究竟を知る龍、うん、自分で言っただけだが、少し恥ずかしいわね、これ。

撤回も出来ないの、私はそのまま歩きはじめ、しかし三步目で止まった。秋蘭が付いてこなかったからだ。

私は振り向き、どうしたのかと問おうとして、言葉を飲み込んだ。

秋蘭の瞳から涙が溢れていたのだ。

「しゅ、秋蘭？ どうしたのかしら？」

「華琳さま、私は……私は嬉しいのです。」

剣で私を超えられたあの瞬間も嬉しかったですが、それ以上です。

実力で私を遥かに凌ぎ、常に最高の結果を挙げられ、最短距離でここまでやって来られた華琳さま。ですが私は、我らが主はこの程度ではないのだと常々不満を募らせておりました。

ですがあの一戦で我が不満の全てが払拭されました。

天の頂に至る龍に成長された主に最大限の忠誠を、そして主を導いてくれた謙信殿には最大限の感謝を表したく思います」

秋蘭は私の元まで近づき、跪いて私の手をとった。

私は微かに震える彼女の手をしっかりと握りしめて言葉をかける。

「貴方と春蘭がいたからここまで来れた、そして彼も貴方達が連れて来てくれた。

夏侯姉妹、貴方達こそが私の一番の宝だ」

「有難きお言葉です。私達も華琳さまに置いて行かれぬ様、精進を重ねて付いて参ります」

熱き忠誠心に胸を打たれた私は、改めて二人を大事にしようと思ふに誓うのだった。

それから大過ない日々が一週間ほど続いた。

ここ最近は何も頭痛もなく、普通に仕事をこなしている。

いや、一つだけ悩みの種があった。白の美貌と治療の腕前が城中に広がり、充てがった医務室が連日長蛇の列を為しているのは何とも頭の痛い話だ。

そうして一週間余裕を持って書類仕事を続け、配置した人員が仕事を覚え始めたので政務が安定して行えるようになる、次は外に目を向けなければいけない。

幾つか陳情が上がってきており、その殆どが盗賊の被害を訴えるものだった。

一週間ずっと城内にこもっていたので、そろそろ外が恋しくなってきた私は直々に討伐へ赴く事を決定し、準備を進めた。

そして準備が終わる間際、二つばかり問題が浮かび上がってきた。城に残さなくてはいけない白と準備させていた兵糧の数字が合わないという問題である。

さて、どちらから片付けようか？

白にはここ最近忙しくて会えなかつたから、先に顔を見に行こうか。判断に迷う問題は心に余裕を持った状態で接したい。

そして私は春蘭と秋蘭を引き連れて医務室にやって来た。

そこには薬を擦っている白の姿しかなく、ほっと安堵の息をつけた。

さすがに明日出立するというのに傷をこさえて医務室にやって来る馬鹿はいなかつたようだ。

一安心しつつ、早速用件を伝える。

いつもお目付け役として付けていた秋蘭と春蘭を連れて行くので、代わりに役目を引き継ぐ人間について説明しておく。

白に付けるのは曹洪、私の可愛い従妹である。

容姿端麗、軍才も武勇も侮れない、そして何より眼を見張るのは経済に厚い所である。今では内政要員として無くてはならない存在になっていた。

が、有能さに比例して問題点があった。

軍資金についての遣り繰りだけなら良いのだが、個人の金遣いにまで口を出す。

極度の男嫌いで少女愛好家。

割と残念な幾つかの問題点があった。

今回も本人を連れて来る予定だったのだが、美しいが男性であると知れ渡っている白と会う事をどうしても嫌がり、これでもかと用事を作って面会をそれらしく拒否したのだ。

私の命令には基本従順な子なのに、そこまで嫌がるとは……あの子の偏った性格と性癖には困った物である。有能であるからこそ非常に惜しい。

とまあそんな説明をし終わると、白は何とも微妙な表情をしていた。まあ今の説明だとその表情になるだろう。

だが思惑はある、あの子にさえ認められれば私の軍で白を認めぬ者はいなくなる。

そして何というか、あの子の性癖を白なら制御できそうな気がしたのだ。

「何ですか、気がしたというのは……まあ良いでしょう、少し内政方面で口を出したかったので、丁度良い機会と捉えましょう」

そんな怖い言葉が聞こえたが、まあ良い。

彼の韓信としての力は見た、次は張良としての手腕を見られるのだから、非常に楽し

みである。

次の用事に輜重隊に向かおうとした所、白も調査した薬を納めに行くというので一緒に向かう事に。

ならついでだし見極めに参加してもらおうかしら。

という事で輜重隊が忙しなく動き回っている現場にやってきた。

私が来た事で騒然としかけたが、明日に向けての準備を優先せよと発して場を収めた。

場が元に戻るのを確認し、近くにいた兵を一人捕まえて責任者を呼ぶよう頼む。

程無くして緊張した面持ちの少女が私の前にやってくる。

ふむ、緊張を滲ませるといふ事は故意だったか、では売り込みと工員と患者のどれだろうか。

覇気を軽く滲ませて脅し、少女の言い分を聞く。すると真つ直ぐな目をして売り込みに来たと言つてのけた。

嘘を言っている様子はないので一先ず信じておく。

熱い目をしているし、良い度胸だし、聡明な受け答えだし、可愛い。うん、非常に好ましい。

だが軍の頂点にいる私が易々と彼女を受け入れては双方にとって宜しくない。妬み嫉みは禍根を残す。

なので公の面前で少女を試そうと思ひ周囲を見渡すと、難しい顔をしている白の姿が目に入った。

何かこの少女に思い当たる節でもあるのだろうか、と疑問に思つた私は白を呼び寄せ、何かあるか？ と囁くように尋ねる。

すると彼は、一つ試したい事があると云つてきた。

彼が試したいと言うなら是非もない。

彼に何をするのかを聞き、傍に控えていた春蘭と秋蘭を呼び寄せて協力するよう伝える。

話が終わり、少女に沙汰を伝える。

「軍師として仕えたいならここで資質を問おうではないか。

軍師とは戦場にあつて怯えず、常に客観的な推察を行い、随時的確な策を出す者である。

客観的な推察と的確な策はこの場に私を呼び寄せた手腕から評価しよう。

次いで、貴様がどれだけ臆病風に耐えられるか見せて貰おうか」

「はっ、覚悟は出来ております」

ふふつ、とても良い目をしている。

しかしこれからの試練を聞いてその平常心を保てるかしら？

「ではこれから私、夏侯惇、夏侯淵が殺気を放つ。そして私自らお前に武器を振るう。

戦場に満ちる鬼気と目の前に迫る暴力に対して目を逸らさず耐え忍んでみせよ。

髪を切られようが、腕を切り落とされようが、決して目を逸らすな。

一瞬でも逸らしたなら、手足ではなく首を切り落とす」

「私は貴方様の軍師を志す者。この頭と口さえ残りさえすれば、後はどうなっても構いません」

その眼差しの強さに心が滾る。素晴らしい、見事試練を耐え切って貰いたい物だ。

「良く言つてのけた。では行くぞ！」

そして私達三人はある程度抑えた状態で闘気を解放する。

すると遠巻きに眺めていた兵達の多くが胸を抑えてへたり込んでしまった。中には気を失う者もいる始末だ。

まあ、仕方無い事である。

一週間前に私は覚醒しているし、この一週間で夏侯姉妹は以前より恐ろしく研ぎ澄まされている。しかもこの騒動に二人は少し苛立っているようで、私が想定したものより強めに気を発している。

更に明日の盜賊討伐は新人を戦場に慣らそうという思惑もあり、核となる騎兵隊以外は新人達を多く配置している。だから今ここで仕事をしている輜重隊の多くも新人であり、何の覚悟も無しに私達の気に触れればああなるのも已む無し。彼らを責めるのは酷と言うものだ。

だがしかし、その兵達よりも戦いとは縁遠そうな目の前の少女は私達の鬨気に耐えていた。

目から涙を流し、極寒の地にいるように震え、唇を血が滲むほどに噛み締め、両手で自身を強く強く抱きしめながら、少女は必死に耐えていた。

もし私が気を抜いていたら、顔には嬉しさが出てしまっていただろう。

才能と度胸を合わせ持つ娘と出会えた事と美しい少女が震える様を見られた事で、特級の嗜虐的笑みを浮かべていたに違いない。

だが今は白に頼まれた事がある。曰く本当に殺す気でやってください、との事だ。

私は白の頼みを聞き入れ、一芝居打つ事にした。

私は殺すつもりで鎌を振り、春蘭、秋蘭、白が直前で止めに入る算段だ。あの三人なら上手く止めてくれるだろう。

とはいえ何事にも事故はあり得る、そうなたら勿体無いなーと思いつつ、私は喜びと甘い考えを殺して意識を切り替え、目の前の少女を殺すつもりで鎌を取った。

少女を殺す為に鎌を振りかぶり、世界が歪んだ。

以前よりはマシだが、それでも頭を鈍器で思い切り殴られたような激痛が私を襲い、思わず呻きを漏らしそうになった。

手が震えて鎌を取り落としそうになるが、渾身の力を込めて握り直し、私は鎌を振るった。

キンツ、と鉄の打ち合う音が聞こえた瞬間、頭痛が消え去った。

痛みから掠れてしまっていた視界が澄み渡り、春蘭の大剣と秋蘭の護身用の小剣が鎌の刃を止め、白が柄を掴んで止めてくれた事が分かった。

表には鎌を勿体ぶるように握り直しただけと映っただろうに、心配そうに見つめる三人の表情から何が起こったのか正確に理解していると察する事が出来た。

全くもって得難い三人である。

そしてそれを目の前の少女は全て見ていた。

何が起こったか分からないが、何かが起こったのだと察したようだ。

彼女の瞳と表情には先程よりも強い意志が滲んでいた。

彼女もまた、私にとって得難い存在となるのだろうか。

私は鎌を降ろし、期待を込めてにこりと微笑み、彼女の士官を受け入れるのだった。

少女にはそのまま明日の盗賊討伐の準備指揮を任せ、私と白は医務室に向かった。

謎の頭痛について憶測が立ったと白が言ったので、薬などを保管する為に鍵が備わっていて、患者の悲鳴が響き渡らないようまた病状などが漏れない配慮の為に防音の対策も施してあるので、秘密談義には都合が良い医務室に向かった訳である。

春蘭と秋蘭も来たが、白が止めた。

二人は何故だと強く反発したが、白の「華琳様は二人に話そうとするだろうが、それが出来るのかどうかを確かめたい」と言う発言にぼかんとしてしまった。

何を言っているか理解できない、と二人が言葉を発する前に。

「春蘭、秋蘭。どうせ私から話すのだから、そういきり立つ必要はないわ」

「……むう、約束して頂けますか？」

「ええ、話せるようなら一言一句違えずに話すと誓うわ。だからここは白の実験に付き合いますよ」

そう言って丸め込み、二人には明日の準備の確認に向かわせた。

春蘭は言わずもがな秋蘭ですら不満顔を晒しており、白は本当に申し訳無さそうな顔で二人を見送っていた。

医務室に着き、しつかりと鍵を閉め、二人で神妙な顔を突き合わせて囁くように話す。「早速ですが胸襟を開いて語ります。恐らく、貴方は私と同様に、天の理を外れてしまわれた、または外れかけてしまっているのでしょうか」

それは信じ難い話であった。

要約すると、私は太平要術の書を奪った盗賊を手に掛けようとして天の理から外れてしまった。

天の理とは天の加護であり、また天の戒めでもある。

戒めたる枷が外れた事により私は前世の記憶を思い出し、身体能力や事務作業の限界や制限が外れてしまった。

勿論良い事ばかりではない。枷とはつまり生を歩む上での安全装置のようなものである。

天の加護が無くなって天の敵にも成り得る存在になった私は、天が望む歴史を阻害しようとする天罰が下るようになってしまったらしい。

本当は微妙に異なるらしいのだが、伝えられる言葉で喩えながらの説明をせざるを得ないので、詳細を完全に伝えるのは難しいとの事だった。

彼を十二分に信用し、私自身も前世の記憶覚醒という不思議体験をしている身であるが、そうそう受け止められる話ではない。なのでとにかく踏み込んで聞いていく。

天の望む流れとは？

天の御遣いが創りだす物語である。

貴方が私に願った一度きりの敗北はその為？

そうです。

天罰とは何か？

意識が断絶するほどの頭痛。記憶の消失から存在の抹消までも有り得る。

天の望みに逆らい続けるとどうなるのか？

最終的には間違いなく存在が消失する。

天とは如何ともし難い存在なのか？

自然現象のようなものだから逆らうのも不可能。

「信じ難い話の連続だけれど、それを証明する何かはあるのかしら？」

「……では天の御遣いを孫策から奪い取る計画を立て、それを実行する明確な意志を

持つて実行に移ろうとして下さい」

私は暫し黙考し、現実的かつ綿密な計画を脳内に展開していく。

政治的なやり取り、物理的な実行案も立て、自分が持つ手札でも無理なく天の御遣いを回収する方法を思いつき、それを形にしようと思つた。木簡を取ろうとした所で、ずきりと頭に痛みが走つた。

盗賊や苟彘を殺そうとした時の痛みに比べて微々たる痛みではあつたが、無視できるような痛みではなかつた。

「これは……」

「頭痛が起こりましたか？」

「ええ、貴方の言う可能性は否定できなくなつてきたわね。でもこれが以前盗賊の持つていた書に書かれていた呪術的な物、というのもまだ否定はできないわよね」

「そちらに関しては門外漢なので、可能性は潰せません。」

私もまだ確信を得た訳ではありませんから、盗賊討伐から戻られたら改めて調査いたしましょう」

「そうしましょう。では最後に聞かせて貰いたい事がある」

「何でもお尋ね下さい」

「貴方は記憶を失つたと言つていた、それはどういう状況だったの？」

「それが何時で誰の事なのかは話せませんので抽象的になってしまいましたが、天の望む流れの中で死ぬ定めにあった人を生かし、その結果十数年分の記憶を失いました」

「人一人の運命を変えるだけで記憶が失われるのか……恐ろしい話ね。

けれど希望の見える話でもある。

つまり、運命は変えられるのね？」

「……代償を支払う事さえ出来れば可能です。

ですが決してお勧めは致しません、今でも未遂でありながら意識が飛びそうになるのです、実行したなら死に直結するでしょう。

天罰が貴方だけではなく、周囲にまで及ぼす可能性もあります。

そして何より、貴方に何かあれば悲しむ人は多いのですよ？」

「理解しているし、忠告はありがたく受け取るわ。

けれど座して敗北を待つなんて私には死んでも出来ないのよ。

もしかしたら小さく積み重ねれば天も欺けるかもしれないし、大逆であつても一度なら存在の抹消までは至らないかもしれない。

可能性があるのなら、私は私の持つ全てで運命に抗うわよ」

「華琳様らしい、ですね。ならば私も出来る限り力添えをすると約束いたしましょう」
「心強いわ。」

それじゃあ春蘭秋蘭に今の話が出来るかどうか試してくるわ。あの子達の機嫌のためにも、頭痛がしなければ良いのだけれど」

「もし駄目でも言葉を選べば断片だけは伝わるかもしれませんが。が、決して無理はなさらないでくださいね」

「そうするわ。……白、もう一つだけ聞かせてもらいたいのだけど」

「何なりと」

「白、項羽が劉邦に負けたのは、運命だったのかしら？」

彼は一瞬だけ口を噤み、しかし吐き出した。

「……自身で言う言葉ではありませんが、二勢力の趨勢は私が握っていたと言っても過言ではありません。」

先に出会ったのが貴方であれば、間違いなく志を共にして全てを治めていたでしょう。

ですが、先に出会ったのは貴方と同じ英雄である劉邦様だったのです。

それを運命と言うなら、そうだったのでしよう」

彼の言葉に偽りと気遣いを感じた。

私は偽りを追求する事はせず、気遣いを大事に思った。

「……気の迷いで変な事を聞いたわ、忘れて頂戴」

私は歩き出した。

彼との会話で強い強い決意を抱く。

貴方を得た上での敗北など認められるものか、運命など全身全霊を持って捻じ曲げてくれよう。

52. 強くなり、弱くなる

結局白から聞いた話を春蘭秋蘭に伝える事は出来なかつた。

話そうとした途端に頭痛が襲いかかり、それを察した二人が無理矢理に止めたのだ。言葉を選び、天の御遣いとは本物であると伝える。そこから天の流れというものがあると裏を読んでくれれば良いのだが。

ともかく私が精一杯伝えようとしている事は察してくれて、喋れないのは決して故意ではないと理解してくれた。

渋い表情ではあつたが納得してくれて良かった、これで目先の盗賊退治に不安を抱える事もないだろう。

私達三人に不安がないのなら、盗賊討伐が大成功を収めるのは当然だつた。

一帯に昔から根を張っていた古参の盗賊を狩れたので、結構な空白地帯が生まれる。その周辺に蔓延る盗賊どもを上手く空白地帯に誘導してやれば、次の一狩りで周囲一帯の盗賊を根絶やしにしてやる事も可能だろう。

討伐も上手く行き、更に得た物も大きい。

村々の実情も見て回れたし、何より許緒 季衣という素晴らしい人材を手にする事が出来た。

剛力無双で戦力的にも頼りになるし、実直で皆に慕われる可愛らしさがある。春蘭秋蘭にも懐いたようだし、皆の精神的安定剤として働いてくれるだろう。

しかしあれだけの逸材が埋もれていた事実は看過できない。

泳がせるために逃がした盗賊による被害が村々に出ないよう至るところに兵を潜り込ませようと考えていたが、同時に情報収集も積極的に行うよう厳命するでしょう。

そして一週間で事を片付けた私達は陳留に帰ってきた。

元より荀彧の採用試験として半減させた糧食だったが、彼女の作戦立案能力と機転が発揮され、また私と夏侯姉妹が鍛え上げた核となる兵のおかげで、帰還する間の糧食もぎりぎり確保されていた。

だが途中で拾った季衣がまた食べるのだ、毎食十人前を超える量をペロりと。

十分な食事を与えると確約して雇い入れたので、それを誰も咎める事が出来ず、皆足るを急がせるしかなかった。

後一日遅ければ、糧食は尽きていただろう。

ともあれ盗賊討伐は成功し、新人達の経験を積むことが出来、荀彧の能力を見定め、許

緒という逸材を確保した。

文句のつけようのない収穫であったと言える。

では、城に残した白はどうだろう？

城に着き、出迎えに来たのは白と白の腕を取る曹洪 栄華の二人だった。

その事に全員が驚く。将から一兵卒に至るまで全員がだ。

「盗賊討伐お疲れ様でした。もう一日二日程かかると思っていたのですが、さすが華琳様の手腕、さすが期待の新軍師、さすが精強と名高き陳留の兵です」

「まあ本当ならそれぐらいだったのだけど、急ぐ理由があつてね。」

「ってそうじゃないわ、栄華、貴方が白の腕を取っているのはどういう事？」

「あらいやですわ、お姉様が仰ったのではないですか、お兄様と仲良くするようにと」

「お、お兄様？ ちよつと白！ 何がどうなってるのよ！ あの男嫌いでも有名だった栄華をどうやって手懐けたの?!」

「えつ、謙信殿って男だったのですか？」

「桂花、今説明するのは面倒だから、後でね」

「あつはい」

「えーつと、とにかく兵の皆さんもお疲れでしょうし、一旦解散の号を出しましょう。説

明はそれからしつかりと致しますので」

「そ、それもそうね、こほん。」

聞け皆の者！

新人が多くいる今回であったが、大きな失敗もなく、また戦働きも申し分のないものだった。私は皆を高く評価する。

皆には二日の休暇と十分な給金を与えよう、存分に英気を養うが良い。

では解散！」

解散の号令に皆が動き出すが、なんとも鈍い。皆が皆白と栄華をちらちら見ながら去っていく。

確かに曹軍に従事しているのならあれがどれだけ異常な光景なのか知っている。豪華な褒美すら霞んでしまう程の衝撃だったに違いない。

「新人が多くいるからこそ手厚く褒賞を取らせて人心を掴む、やはり華琳様は良き指導者であらせられる」

「はい、やはりお姉様は完全無欠のお姉様であらせられます！ お姉様も勧めてお兄様も認められるなら、給金もちやんと降ろしますね！」

「！！！！」

「戦働きに対する当然の評価であり対価ですよ？ あれ、華琳さま、何をそんなに驚い

ていらっしやるのですか？」

「そうね、桂花。とりあえず後で全部説明するから、今はちよつと落ち着かせてちようだい」

「あつはこ」

今回の褒美は明確な理由があり、桂花も言った通り妥当な判断だ。

だとしても栄華の追求はとても厳しい。金が必要な理由、金の使い方、得られる効果、金額の正当性、これらを可能な限り詰めに詰める。金額に関しては更に極限まで切り詰める。

そんな金に五月蠅すぎるあの子が、何の抵抗もなく金を出す？何の冗談だ？

「ああそうか、これ、呪術ね。うん、やっぱり呪術つてすごいわ」

「唯一苦手だろう分野を思考放棄する為に使うのは華琳様らしくないですよ。さすがに呪術つてそんな便利な物でもないと思われれます」

「そうですわお姉様、呪術なんて怪しい物で私が絆される訳ありませんでしょう？いえ、恋の呪いには掛かっているのやも知れませんが！」

「貴方の問題点が逆に振り切れてしまっているわ。本当に、何があつたと言うの？」

「単純に、彼女の出した課題を合格しただけなんですけれど……」

「ああ、お兄様の優秀さを見出す課題を出した私を褒めたくもあり、面会を遅らせ課題を

出してお兄様に会えなかつた二日間を作り出した私が恨めしくもあり……けれど良いのです、結果お兄様に会えたのですから！」

段々と別の意味で頭が痛くなりだしたが、根気強く何があつたのか聞いてみた。

私が討伐に赴いていた間のあらまはこうだ。

白は行軍する私達に薬を納めたので、薬の材料を入手する為に街へ買いだしに出掛けたかつた。単独行動が禁止されているので白はお目付け役に外に出たいと陳情した。

しかし伝言を頼んでも返ってくる内容は忙しくて行けないの一点張り。なので直接会いに行くがこれも門前払い。新人に機密情報が満載の仕事場を踏み荒らされる訳にはいかないと断られ続けた。

普通ならここで怒ってもおかしくないが、白は私の言い付けを守り、三日間耐えてくれた。

ここで栄華の分岐点があつた。

私の命令があるので、これ以上何もせずには放置しては命令違反である。

例えばそこで白の欲しい物を書き記してもらい、それを買ってこさせれば問題はなかつた。白はある程度満足しただろうし、栄華は最低限の役目をこなしたとして問題にしづらかつた。

けれど栄華は更なる嫌がらせを企てた。

仕事が大変だから相手を出来ない、もし用事を頼みたいなら仕事が早く片付くような発明でもしてくれ。と扉越しに言ったのだ。

医者に何を頼んでるんだ？という話。仕事ばかりで肩が凝っているから凝りを解してくれ、と言うのなら分かるが、経営学会計学という畑違いの学問の発明をしるなど無理難題が過ぎる。

まあある種の冗談だったんだろう。

無理難題に憤慨してくるならその狭量さを笑い、悄然と去って行くならその無様を笑いたかったのだろう。そして心の内を満足させ、それから部下に薬の買い出しをさせて終わる予定だったに違いない。

けれど白は半刻後、本当に発明品である算盤を作ってきた、

仕事場から適当に一人外にやって、算盤の使用方法を聞かせて回収し、実際に使わせてみる。するとどうだ、算木など使うより余程明確で素早い計算ができるではないか。ぐぬぬ、と思つた栄華は更に課題を出した。機密に触れぬ書類を山ほど預けて処理させたのだ。

私でも三日かかるだろう山を、それが終わるまで外に出さんと言って渡したのだ。

それを白は半日で片付けた。

陳留の人口流入、民草の陳情、備蓄の確認、隣県への贈り物選別、分野の違う各種書類を白は見事に捌ききった。

むしろ専任の者より余程綺麗に片付けてしまい、自信喪失を招かせてしまった。

そしてその自信喪失者の中に栄華も含まれていた。

彼女は自身の分野である経済学を侵された。

複式簿記の使われた帳簿と出会ってしまった。

私が見てもその発明には背筋が凍る。

金の流れを分かり易くする、単純そうに聞こえるこれがどれほど難しい事なのか、私も身を削っていたので知っている。

だからこそこの発明の有用性が怖いくらいに分かる。これが浸透すれば経理における不正は消え去るのだ。

では私よりも経済に明るい栄華がこれを見た時、彼女はもう思っただろうか？

絶対に会わないと決めていた男に会いに行く事ぐらいはやるだろう。

栄華は自ら扉を開け放ち、白と出会った。

全て他人に任せきり、男とだけ聞いていてそれ以上の情報を遮断し拒絶していた栄華に、彼の持つ美はどれほどの衝撃だっただろう？

結果は目の前に出ている、今までの価値観が引つ繰り返った訳だ。

「色々と分かったわ。私の判断は正しかったという事でよしとしましょう。」

白、その知識、色々と引き出させてもらうわよ?」

「お手柔らかに願います」

白への恐ろしさを押し殺し、そう締めくくった私。

これ以降、陳留の発展は怒濤の勢いとなる。

白の献身的な活動、驚異的な発明、先進的な提案をこの地に合った形、速度に調整していくのが私の第一の仕事となった。

まずは既存の枠組みを効率化していく。始めは細々とした変化だったが、一ヶ月もすれば明確な違いが出てくる。

兵が軒並み健康になり、文官の作業効率が上がリ、街の衛生、景観、治安が良くなり、商業の活性化が起きた。

そして既存の枠組みを取っ払うような事業を水面下で立ち上げ始める。

仕事面で順風満帆であるように、生活面でも至極充実した日々を送ってきた。

多方面に万能であり、性格は厳しくも寛容で、教育者としての経験もある白が仲間に入る意味はとても大きい物があった。

仲間達と白が交流すればするだけ人格の尖った部分が丸くなり、逆に能力は尖りに尖る。

そうして一ヶ月もあれば仲間達の信頼を勝ち得、互いに真名を交わすまで仲を深める事に成功していた。

将に良い影響があればその部下達にも影響が出る。雰囲気と能力は周囲の人間に伝播する。

民を直接取り締まる彼らに笑顔と向上心が出てくると、今度は街の雰囲気明るくなる。

奮起した彼らは治安の取り締まりを真摯に行うので、民の評判もだが商人の評判もどんどん上がる。

それが流通を活性化させてまた街を華やかにする。
するとそれが今度は逆に、商人、民、兵、将、私の流れで返ってくる。

こうして街の全体の空気が喜色に染まるのを実感でき、また仕事を頑張ろうと思える。

器たる環境が良くなり、器を満たす人が良くなる。そうなると更に環境も人も良くなる。

とてもわかり易く、素晴らしい循環が陳留に出来上がりつつあった。

だがその良い流れは黄色い布にせき止められてしまった。

水面下で進めていた教育、医療、商業等の再構築を表層へ打ち出そうとした矢先、黄巾の乱が始まったのである。

帝からの勅により私達も討伐に赴かなくてははいけなくなり、陳留発展計画は一時凍結される事になった。

だが内の力は十二分に培う事が出来たので、丁度良いと言えば丁度良かった。

この機に外へ力を喧伝し、飛翔の踏み台にしようではないか。

戦に赴けない白と暫し別れなければいけなくなると皆が気落ちしていたが、白が「留守番も何ですので、一人で中央を見に行つてきます」と言い出した。それを聞いた私達は進路を洛陽へ取る事にした。

彼は洛陽に行く利が薄いと理解しており恐縮していたが、陳留と洛陽はそう離れていないし、少し遠回りになるだけ、情報が手に入るかもしれないと言つて丸め込んだ。こうして洛陽行きが決定した。

道中で賊を討伐して経験や士気を上げつつ、町や村で治療や食糧を施し名を上げる。

そんな事をしていけると、楽進、李典、于禁という面白い逸材も仲間とする事が出来た。

私の領地内にいたので白の洛陽行きがなくても何れ発見していただろうが、何とも丁

度良い機会すぎて怖くなる。

私はその三人を軍に編成して資質を見つつ、経験を積ませる事にした。

そうして散発的に敵を蹴散らしていると洛陽に着いた。

洛陽でやる事といえば、お偉方にお伺いを立てて、十常侍の側仕えの木っ端役人に面会して、そこそこの贈答品を送り、情報収集のために一日滞在するだけだ。

一番の難問である面会が運良く待たされる事もなかったので、滞在期間は一日だけになった。僥倖である。

既に黄巾討伐の大本令は発されている。だから利に敏い者はさつさと賊討伐や本拠の調査に乗り出している。

わざわざここに来る者は皇室、十常侍、大將軍に縁のある者か、余程の田舎者か、情報収集も判断も自ら行わない蒙昧な輩だけだ。

つまり縁を結ぶに足る者は全員出払っているので、洛陽に寄る旨味は情報収集ぐらいしかない。

けれどまあ行軍中ずっと白の手料理が食べられ、一日でそこそこの情報も得れたと思えば悪く無い成果と言えた。

その日の夜、洛陽近郊で駐屯した私達は集めた情報を検分してどう動くかと皆で話し合っていた。

方針は二つ、諸侯の実力調査、賊討伐で名声上げ。

どちらの方針に重きを置くか、どの諸侯を見るか、効率的な進軍路、本拠の推測などをしていると、白が私を呼び出した。

方針を固めておくよう皆に言い、私は天幕を出た。

そこで会わせたい人がいるから一人で付いてきて下さいと言われたので、了承する。

一緒に出てきた春蘭が同行を申し出たが、私は待てと命令する。白が言うならば一人で行く必要があるのだろうか、剣を佩いてさえいれればまず遅れを取る事もない。

春蘭には「貴方の感覚的な発言が必要になる場面もあるだろうから会議室に残って頂戴」と言つて戻つてもらつた。

そうして白と二人、会議室として用意した天幕を離れ、洛陽と野营地の中間地点までやつて来た。するとそこには頭まですっぽりと覆う外套を着た二人の人影があつた。

白が言うには、一人は占い師で、もう一人は呪術の専門家らしい。

顔を隠すという事は恐らく白と同じような、世俗に関われぬ立場にいる人物なのだろう。

「私達に会わせたいという人物が曹操殿とは予想外でした。本当に、白様は私を退屈させない唯一の人物です」

鈴を転がすような麗しい声音。それだけでその覆面に隠された容貌が計り知れようという物だ。

だが気にする所はそこではない、この者は私を知っているのか？

「ふむ、ふむ、白殿、彼女からは呪いの気配は一切せん。そもそもこれ程の覇気では于吉の呪術ですら掛かるか怪しい、安心召されよ」

巨体から響く重低音。これの顔は窺ってはいけないと勘が告げている。

だから、気にする所はそこじゃない。

「そっか、ありがとう。忙しいのに悪かったな」

「いえいえ、お構い無く。白様の動向が知れたのは大きいですから、遅くなったなどとは一切思わなくて良いのです。根を張る為の活動は必要だったのですから、気にする必要はありません」

「だから申し訳ないと何度も謝ってるだろ……次があるなら何はなくても連絡を急ぐから、そろそろ勘弁してくれ」

二人の親しげなやり取りが鼻につくが、状況が分からないので突っ込まない。

「手紙での伝達方法もお伝えしましたよね？次は本当にお願いますよ？」

では用事も済みましたので、私達はこれで。

「仔細は後ほど」

「頼むよ。それじゃあまたな」

「ちよ、ちよつと貴方達は……」

私の制止も聞かず、彼らは一瞬で闇夜に消えた。

後に残るのは白と私だけ。

なんだろう、夢や怪奇現象の類を見たような現実味の薄さだ。

「なんだったの、あれ？」

「言いました通りその道の専門家で、私と同じく表に出てはいけない類の者です。無理を言って連れ出したので、時間も取れず慌ただしいものになってしまいました。

ですが良かった。仔細はまだわかりませんが、取り敢えず呪術的な物に掛かっていないと判別はできましたから」

「ふう、どこまで信じていいものか分からないけど、貴方がそこまで信用しているなら私も信じましょう。」

「それじゃあ戻りましょうか」

私は踵を返し、天幕に戻ろうとするが、白の足は止まったままだった。

どうかしたのかと振り返り、彼の思い悩むような顔を見て嫌な予感がした。

「どうしたのかしら?」

彼は意を決したように口を開いた。

「……華琳様、陳留に戻りましたら、私の主治医の任を一時解いて頂きたいのです」

嫌な予感の中である。

だが慌てず、努めて冷静に問う。

予感があつたという事は、薄々気付いていたのだ。気付いておきながら、見て見ぬふりをしていた事実。

「理由は二つあります。

一つは仲間に内政への口出しを咎められてしまいました。ですので一旦陳留から離れて天の目を誤魔化します」

一つはそうだろう。目立てぬ彼を人に、政治に関わらせ過ぎた。

しかし一旦ということはもう会えないという訳ではなさそうだ。

極度の安堵を表面には出さず、問う。

「必要な措置なのね?」

「はい、貴方の傍にいる為の措置です。それに貴方の元を離れたとしても、貴方の為に働きますよ。」

「一先ずは北方の異民族の元へ赴き、貴方の治世の助力をしようと思えます」

貴方の為に。その言葉は私の心に効く。
だから私は強がる。

「確かに、いずれ私が陳留一帯を飛び越えて領土を持つようになれば異民族の対応は一番の問題になるわね。

任せて良いのかしら？」

「お任せ下さい。そして天の目を誤魔化すほどの活躍をし、私を連れ戻して下さいませ」
「それこそ任せなさい、私を誰だと思ってるのかしら？」

ああ、それと。さつきも言われていたようだけど、離れるのは連絡をしつかり取り合
う事が前提条件よ」

「うぐ、気をつけます。一処に留まらず旅をする人生でありましたので、どうにも手紙を
書くという習慣がないのです」

「四百年の旅路なのよね。けれど、約束よ？」

「ええ、月を見る度思い出すよう、月が新たに変わる日に送らせて頂きます」

「頼むわ。それで少しは……」

寂しくないわ。

自然にそう続けそうになって、慌てて口を噤んだ。

「少しはっ？」

「なんでもない。」

「それが一つ目ならば、二つ目は……依存ね？」

「……その通りです」

「先ほどの私の心情が全てを表している。」

「見ぬふり、知らぬふりをしてきた事実を、私はどうとう突き付けられたのだった。」

53. つまみ食いの代償

華琳と管輅と卑弥呼を引き合わせた夜、俺は皆の好物を作る為に簡易キッチンで腕まくりをしていた。

今後の方針を夜が更けても話し合っている少女達への気遣いと、別れを少しでも良い雰囲気の中で行いたいという思惑からの行動である。

洛陽近くに駐屯しているので大陸中の様々な食材が入手可能だったのは僥倖。豊富な食材を前にして意気揚々と料理を作りを作る。

糧食集積所にて一人でこつこつと作業を行い、時たまやって来る巡回兵の李典と于禁に味見してもらいつつ、一時間半を掛けて料理が完成した。

これから料理を運ぶのだが、持てる皿には限りがあるのでまずは華琳の好物と前菜やお通しのな物を手にする。

俺は寝静まる幕営を抜け、作戦会議室である天幕まで料理を運ぶ。

唐突な夜食だが、喜んでくれるとは思う。料理の腕前は既に披露しており、お墨付きを頂いている。

華琳と出会って一週間ほど経った頃の話。

会話で料理の話になり、話が弾みに弾んでじやあいっちょ腕前を披露してやるかと互いに料理の腕前を披露し、その際に華琳の太鼓判をもらったのだ。

美食家の華琳をお世辞抜きで満足させた、これが存外に嬉しい出来事であった。

俺の料理はあくまで家庭料理や旅路で作る粗食の延長にあるものだ。しかも四百年前から今に至る経験と遙か未来の日本の価値観が複雑に混在していて、これって俺が美味いと思ってるだけで皆の舌にそぐわないのでは？ と常々疑問に思っていた。

仲間達や生徒達や孫策達、色々な人に料理を振る舞ってきた。その中で皆美味しいと言ってくれたが、ひよっとしたら気を遣われているのでは？ と自信が持てず不安に思う事も多かった。

だから、何がどうされてどう調和して、結果ちゃんとして美味しくなっている、ときちんと掘り下げて評価してくれた華琳にはとても感謝している。

閑話休題。

作戦会議室となっている天幕の前について俺は何いを立てる。

「夜食を持ってきたのですが、入っても大丈夫ですか？ 後両手が塞がっているので」

するといの一番で春蘭が飛び出てきた。

「全然構わないぞ！ ああ、少し前から糧食所で何か良い香りがし始めて、すつごく楽しみにしていたんだ！」

「いや、糧食所からここまで歩いて五分ぐらいの距離があるんだが……まあ春蘭だからな。」

「ついでだ、まだ幾らか持つてこなきゃいけないから手伝って貰えるか？」

「すぐ行こう今行こう！」

「待って待って、取り敢えず両手の料理を置かせてくれ」

「むう、早くしろ！」

子供のような催促に苦笑いをこぼしつつ、天幕に入っていく。

「失礼します」

「あら、気が効くわね」

「ああ、またもやお兄様の手料理が食べられるのですねっ！ これだけで洛陽に寄った意味が出てくるというもの！」

「先程まで出費がどうのこうのと騒いでいながら……さすがに現金過ぎないか」

「うぐぐ、すごく美味しそうな匂い……白殿の魅力的戦力が高過ぎて辛い、華琳さまの寵愛独占が遠のく……」

好意的な反応が多い事に安心しつつ、俺は料理を並べていく。

あくまで夜食なので、量はそこまで多くない。それぞれの好物を摘んでいれば腹六分くらいになるだろう計算だったのだが……一つ誤算があった。

俺が料理を作ると誰よりも早く反応する元気っ子の反応がなかったのだ。

「季衣はどうしました？」

「あの子は先日までの盗賊狩りで無理が来ていたから早めに寝かせているわ。ここは洛陽だし、盗賊が蔓延る余地はないからと言ってね。

けれど悪い事をしてしまったわね、何より食べるのが好きなあの子だもの。きつとこれを知らないと拗ねてしまうわ」

「そうでしたか、季衣の分は明日の朝用に何か仕込んでおきましょう。

しかし困りました、あの子がいると計算して作っていたので、量が多いかもしれませ
ん」

「そう、なら追加の料理もあるみたいだし、それを取りに行く際に適当な人間を連れて来なさい」

「宜しいので？」

「少し詰まっていたから、思考の転換も兼ねてね。けれど男は連れて来ちゃ駄目よ」

「承りました。では適当な兵を捕まえて連れて来ます」

そして天幕を出た俺は春蘭を連れて糧食所に帰ってきた。

するとそこには三人の女の子がおり、一人は俺の料理を守るように立ち、二人はあわあわとしながらも視線が料理に釘付けだった。

「二人が糧食所の巡回へやけに行きたがるから疑ってきてもみれば、まさか任務中に食事を取っていたとは……これは立派な軍規違反だぞ？」

「ちや、ちやうて、確かに料理を貰ったのは貰ってたけど、謙信様から味見のお許しがあつたんやで？」

「ほう、しかしさつきは謙信様もおられないのに料理に近付き、あまつさえ料理に手を伸ばそうとしていたな？」

「ち、違うの！ 謙信様がないから、料理を守ろうとしてただけなの！ 手が伸びてたのは……あれなの！ 包丁とかのお片付けをしようとしてただけなの！」

「既に綺麗に片付けられているのに、更に料理へ手を伸ばしていた理由がそれか？」

「うぐっ」

「あうう」

……何か面白いやり取りをしているな。
しばらく見ていたいが料理が冷める一方だし、隣りにいる春蘭が爆発しそうなので早

めに介入する。

「ここらこら、警備隊を任されている三人がこんな所で固まってちやいけないだろ」

ばつと三人がこちらを向く。

「夏侯惇將軍に謙信様?! も、申し訳ありません」

平伏しようとした所を春蘭が冷たい声で呼びかけて止める。

「楽進、平伏は良いから状況報告をしろ」

「はつ、警備任務中にもふらふらとしていた二人が警備隊の交代時間が来ると同時に、再びふらりと何処かに行こうとしていたので、その後をつけてここまで来ました。」

そして二人が糧食所の中に侵入し、そちらに置いてあつた料理に手を伸ばそうとした所で声をかけた次第であります」

「それはつまりだ、ここにいる二人は重要区画である兵站所、その中心にある糧食集積所へ無断侵入し、曹操さまに献上される料理に手を出そうとした訳だな?」

「あう、まさかまさかの曹操さまへの献上品……というか謙信様の料理がどこ行くとか冷静になれば分かる話やろウチ……」

「うぐう、夏侯惇さま烈火の如くなの……沙和死んじやうかな、でもでもさすがにそれは

……」

「さて貴様ら、遺言を聞こう」

「遺言?!」

「規則では輜重隊長もしくは副隊長、または上級士官以上の許しなく兵站所へ侵入した者は棒打ち三十回、兵站到無断で手をつければ死刑。

また献上品への無断接触は軍の追放または死刑だね。まだ手を出していなかったから死刑は無しかな。

まあ三十回も棒打ちにあつて軍から追い出されたらほぼ野垂れ死ぬだろうし、遺言とこの間違つてないよ。完全に故意だから減刑も認められない」

「そ、そない殺生な!」

「つまみ食いで沙和達死んじやうの?!」

「まあつまみ食いで死ぬのは嫌だよな。だから温情として見逃そう」

「おい白! 規則は順守してこそ意味が保たれるのだ。温情など害悪以外の何物でもないぞ!」

「殆どの場合はそうだろう。けどこのまま最後まで処理をしたとして終わるのは何時になる? 罪を告発して晒し、罰を決定し、罰の実行を当事者として確認しなければならぬ。そうしたら全て終わるのに一時間じゃ足りないぞ?」

それが無事に終わったとして、春蘭は冷め切った料理を食べたいのか? 冷めて不味くなった料理を献上して華琳様は喜ぶのか? 作り直すにもそこから更に時間が掛か

るから華琳様の機嫌は悪くなる一方だぞ?」

「うぐ、そ、それはあ……」

春蘭が頭を抱えて悩みだしたので、さっさと話を進める。

自身が美味しい物を食べたい、料理を華琳へ届けた時の感謝が欲しいという欲求で目が眩み、別の人間に料理を運ばせるという簡単な結論に至れない今がチャンスである。

「楽進、他に二人がここに来たと知る人間はいるか?」

「おりません」

「そっか、ならこの場での事は公にはしない。罪を完全に無くすのはまた違うので、軽い罰は二三受けてもらって仕舞いとしよう」

「ほ、ほんま?! 謙信様の優しさが五臓六腑に染み渡るわあ」

「有難うなの! 本当に有難うなの!」

「あの、二人にお情けを頂いて有難う御座います」

「君達のような優秀な人材をこんな所で失いたくない。

だけど改めて注意しておく。軍に入った日が浅いから規則というものを軽視しがちになるのは分かる、だが破ると本当に首を切られるから、次からは気を配るように」

「はいー!」

「それじゃあ第一の罰、この料理を曹操様のおられる所まで運ぶのを手伝ってくれ」

「あいあいさー！」

「現金な従順さだな。白、この事は私の胸に仕舞っておく事にした」

「おお、懊悩の果てから帰ってきたか。

まあ見逃すのがここでは上々の判断だろ。規律は人を縛るのではなく、人を律する為にある。やり直せそんな人間ならばやり直させるのが正道というものさ。

それじゃあ早く戻ろう、華琳様も待つてる」

「そうだな。ほらお前ら急ぐぞ！ しかしまし転けて料理を台無しにでもしてみろ、その場で斬首するからな」

「ひいー、圧掛けるのは堪忍したってくださいー！」

「手と足が震えちやうのっ」

そうして騒がしい三人組をメンバーに加え、俺達は料理を運び込むのだった。

料理を運び終え、皆の会話に混ざりつつ晚餐を大いに楽しむ。

結局士気などの事を考え、俺が一時的にでも陳留を離れるとは知らせない事にした。

黄巾の乱が終わり、陳留に戻るタイミングで華琳が上手く取り成してくれるようだ。幾つかのグループを回り終え、最後につまみ食い組に混ざる。

彼女達は仲間に入って日も浅く、将官とまだ上手く絡めないようで、三人固まってひ

たすらに料理を平らげていた。

来てからずっと美味しい美味しいと三人で料理を頬張ってくれているが、それでも季衣が普段食べる量とんとんというのが恐ろしい所である。

「美味しそうに食べてくれてるようで嬉しいよ」

「あ、謙信様、ご馳走になっております」

「けんふいんはま、これ全部めちやウマでふよ！」

「真桜ちゃん、口に頬張りながら喋るとか、女の慎み忘れ過ぎなの……」

「うっ、もぐもぐ、つと。すみません、ちよつとこれ美味しすぎたもんで」

「気持ちにはわかるの。手、止まらないよねえ」

「なんとも大絶賛で嬉しいね。そろそろお腹は膨れてきたかい？」

三者元氣よく首を縦に振ってくれた。

「それじゃあ罰二つ目と行こう」

「えっ、今からなの？」

「料理運ぶだけで罰ゆーのはさすがに在り得へんかー」

けど命の危機に比べればなんのその、やれと言われるなら何でもやりまっせ！」

「良く言った。とはいえ何をするでもない、ただ立っているだけで良いよ」

「??」

「それで罰になるの？」

「楽進は残りの料理を食べる作業に戻っててくれ」

「いえ、二人を事前に止められなかった自分も責任がありますので」

「んーそうか、ならしつかりと耐えられたら楽進には何かご褒美をあげよう」

「耐える、ですか？」

疑問符を浮かべる三人にやりと笑いかけ、俺は華琳を呼んだ。

俺と同じようにグループを転々として会話を楽しんでいた華琳は、何かしら？ とすぐに来てくれた。

総大将の到来に固まる三人組。

「華琳様、一つこの者達に総大将のお力を見せてあげて欲しいのです」

「また藪から棒に……何かあったのかしら？」

「この者達は逸材であり、将来華琳様を支える柱石となりましょう。」

ですから今の内に高みという者を刻んで上げて欲しいのです」

「させたい理由は話すのに、させたいと思っただきつかけは話さないのね。」

まあいいわ、それで何をさせたいのかしら？」

「殺気をぶつけて上げて下さい」

「えっ、それだけでいいの？」

「なんや、一発殴られるぐらいは覚悟してたんやけど」

「曹操さまの闘気でしたら、村を救って頂いた時に近くで体感しましたが……」

思わず、と言った感じで三人がこぼす。

その罰を聞いたその他の人間は、あー可哀想に……という顔をしていたが、三人は気付かなかったようだ。

「そう、一度経験しているなら本気を出しても大丈夫かしら？」

華琳の口元にとてもサデイスティックな笑みが浮かんでいる。

こりや三人のトラウマになるかも知れん。

「華琳様、程々に願いますよ？」

「ええ、程々に、ね」

あ、駄目だこりや。いざとなったら割って入ろう。

そして五人で天幕を出る。

三人と相対するように華琳が立ち、その間に俺が立つ。

これから試合が始まるかのような立ち位置につき、幾つか条件をつける。

時間は五秒。接触不可。全員が倒れたら終了。五秒逃げずに立っていられたらご褒美。とルールを決める。

つまらないわ、と言わんばかりの不満顔の華琳女王様。いや、貴方に本気で殺気を出されたら大抵の人間が廃人になっちやうから。優秀な若手を潰すのは絶対にNGです。

「では、三秒数えますのでお願いします。では、三、二、一、開始」

瞬間、周囲が濃密な死の気配に包まれる。

「五」

自我を押し潰さんとする圧倒的な恐怖から彼女達の理性は脳を凍りつかせた。

「四」

だが身体に残る生存本能は動けと叫び、逃げたがる。しかし麻痺した脳との齟齬により身体はただ異常なまでに震えるのみ。

「三」

脳の凍結による思考の消失、身体の機能不全による五感の消失、感情の抑制による現実味の消失。それらが嘯みあい絡み合い、彼女達の時は止まる。

「二」

彼女達が体感する一秒は一体何秒に引き伸ばされているのだろうか。十秒だろうか、一分だろうか、一時間だろうか。彼女達は後何時間死に続けるのだろうか。

「一」

最後の一秒、これを希望と捉えるか、絶望と捉えるか。

彼女達が壊れないでいてくれる事を切に願う。

「終了」

と言った瞬間に柏手を響かせる。

一瞬で霧散する死の気配。

三人の身体が崩折れ、地面に転がる。

彼女達は指一本動かさない有様で、意識は朦朧としており、体中の水分が無くなるのではないかと心配になるほどの汗を流し、呼吸器官だけがただ荒く動くのみである。

命を燃やして動こうとあがき続けたのはあの尋常ではない震えから察する事が出来る。

「壊れなければ良いけれど……」

「あら、そこら辺は上手く見たつもりよ？」

「そうかも知れませんが、性悪ですよね。」

彼女達が逃げたり倒れ伏さないよう一瞬で気を練り上げ、彼女達の動きを縛りましたね？

改めて言います、性悪です」

「あら、嫌われたかしら？」

「何時も思ってる事なので、今更です」

「あら酷い、言いたい放題ね」

「言いたくもなりません。やり過ぎでしょうに」

「確かにやり過ぎたかも知れないわね。必要な事だったとはいえ、反省しましょう」

「必要と言いつけられたという事は、意図に気付いていらしたのですよね？」

「ええ。窮地を奇跡的な時機を持つて援護され、兵の練度が高すぎて道中の賊も相手にならない。

戦いというものに対して甘く見ている様子があつたから、私も懸念はしていたのよ。

だから貴方が恨まれ役を買つて出てくれて助かったわ」

「……性悪ですよ、ほんと」

「まあこの子達も逃げたりしない、というより出来ないと言うべきかしら。

私を敵に回す恐怖を知つたからには不用意な真似もしないでしょう。

例えば、いざこざを起こして料理を微妙に冷めさせる、なんて事もなくなるでしょう」

「……はあ、それでは後は自分が上手くやつておきます」

「頼むわ」

そう言つて華琳は天幕に戻つていった。

「罰も兼ねていると理解していたから強くしたのか。

春蘭が話している様子も無かったんだがなあ、察しが良すぎる上司というのも困り者だ」

残った俺はそう零し、三人を抱えて医務所に連れて行く。

寝台に寝かせ、用意されていた経口補水液を飲ませる。

そして適度にマッサージをし、気脈を調整する。

ここまでは単なる医療行為。

ここからは勝手な強化を行う。曲がりなりにも三人は立っていたのでご褒美である。

俺は気脈に変化を加えていく。

死の恐怖に抵抗する為に気脈が全開になっており、疲労の極致にあつて完全に脱力している今だからこそ自由に気脈をいじる事ができる。

なので才能ある者が死に瀕する過酷な修練を長く積み、精神と身体を酷使した先にある秘技、気脈の解放をちよちよいとやってみよう。

「一先ずこれが別れる前の最後の肩入れかな」

管輅と卑弥呼を華琳に合わせる前に会話をした際、色々と言ひ募られた後に俺は曹魏を強くしてしまつた事を謝つた。

前回のループでは左慈と宇吉が必死に調整して弱体化させたと書いていたのに、今回

は強くしてしまったのだ。

かなり怒られる、失望されると思っていたのだが、彼女達は神妙な顔でこう言った。
ある程度までならむしろ強化して下さった事に感謝せねばなりません。

現状では呉が強すぎ、バランスが取れなくなる可能性があるのです。

と、不思議な事を言われたのだ。

54. 唐突な邂逅

何故か今回の流れは呉が恐ろしく強いらしい。

天の御遣いを手中に収めた為か、それとも前回の流れを継いでいるのか、詳しくは分かっていない。

現在は于吉が調査中とのことだ。

ともかく呉が勝利に近づくのは良いが、強大な敵として立ち塞がらなければいけない。魏が弱くては舞台が成り立たない。

だからある程度の強化を施して欲しいと頼まれた。

そしてそのある程度、というのは既に実行されている。

恥ずかしい話だが、落ち度を偶然に救われた形だ。

では何故、先ほど華琳に異民族対策に出るといふ話をしたのかというところ……情けない話なのだが、華琳に話した通りであり、華琳が話した通りなのである。

魏の強化は必要だが、しかし育て過ぎると手がつけれなくなってしまうので重々気をつけて欲しいと念を押された。

だが俺には自制する自信が無かった。

医者と同様に教育者としても長くの時を過ごしてきた。だから人にものを教えるのは最早反射行動となっている。

なので知っている事を聞かれると反射的に答えてしまう。

栄華にそろばんや複式簿記を教えてしまったのもその厄介な性質のせいである。

そしてそんな性質の俺に、華琳の生徒としての有能さ有望さはもはや毒。

華琳は知識が豊富でまた知識の活かし方を知っている、だから色々教えたくなってしまう。そして教えたなら本質をすぐに理解し、知識を反芻して進ませ、しばらく話せば自分と同等に知識を育て上げてしまう。

四百年積み上げた教師としての経験、未来の知識を持つ者としての孤独が、彼女の聡明さに惹き付けられて止まないのだ。

二つ言葉を交わせれば内容が伝わり、四つ言葉を交わせれば解決する。

「議事録を記帳する担当をしていた栄華や秋蘭からは言葉が足りなくて私達には伝わらない！」と良く注意された。

栄華は経済の話、秋蘭は武術の話をするとその状態になるので、書庫に残してあった議事録を後で確認した桂花に議事録の体をなしていない！と皆で怒られたのは笑いの種である。

楽しい、楽だから沢山話し、そして二言で言いたい事が伝わる。そうして一ヶ月会話をし続けた。

それは他の者とする会話に比べて、どれだけの密度になっただろうか。

そして楽しさだけでなく、心構えにも問題があった。

誰も知らない過去を握り合っている秘密の仲、同レベルだと認め合った者同士のシンパシー、彼女の敬愛する祖父との縁、主従とは違う変わり種の関係性、その他諸々色々な感情感覚が複雑に混ざり合い、二人共がなんとというか、互いに意識して良い格好を見せたがる奇妙な空気が出来上がっていた。

互いに落ち度を、無様を、怠惰を、墮落を見せてなるものかと常に気を張り合い、際限なく高め合ってしまう。

相性が良すぎる、というのが問題になるとは思いも寄らなかった。

このままでは病的な依存関係に至るのではという危惧が、互いに距離を置かねばと思つた要因でもある。

とまあそんなこんなで、華琳との会話の結果として、陳留は目覚ましい発展を短期間の内に遂げた。

このまま進めば現在ある漢の常識の範疇を大きく変え、効率化した無駄の少ない運営形態に移行していっただろう。

そして都市を作り変えるノウハウを得た彼女達は、新たな領地を手にした際に効率よく変革させていっただろう。

生産性や流通効率が既存の枠組みとは桁違いとなるのだから、他国とは争いにすらならなくなっていた可能性がある。

もし黄巾の乱勃発があと一ヶ月遅れたら手遅れになっていただろう。

だから変な話、黄巾の乱が俺の落ち度を救ってくれた訳である。

これ以降物語は加速度的に展開していく。

新たな領地を短期間でどんどん確保する事になるから、成功事例がない挑戦的な運営を行う判断は下せないだろう。

だから多少効率化された現状の形態が維持され、想定範囲で魏国は強くなる。

そうなれば天の御遣いが倒すべき宿敵として機能する筈だ。

こうして考えると既にかんりの綱渡りをしていったんだな。

思ってる以上にやり過ぎたので、華琳だけじゃなく春蘭秋蘭も覚醒し始めてるし、武力面でのテコ入れはこの三人だけにしよう。

三人を嵌めたお詫びだし、正しい鍛錬をしばらく続けないと出力が絞られるリミッ

ターみたいのを掛けとけばやり過ぎにはならないはず。うん、きつと大丈夫。

という訳で、翌日の朝。

早朝に料理を仕込み、皆に料理を振る舞った。季衣は殊更喜んで食べてくれたので心が暖かくなる。

ちなみに昨日罰を受けた三人は未だ眠り続けている。

恐怖の受け入れや気脈の強化に脳や体が順応する為に頑張っているのだろう。

三人はそのまま荷台に乗せられて連れて行かれるらしい。

騙し討ちになつてしまった罰に対する謝罪と、リミッター解除に至る正しい鍛錬方法を記した手紙を書き残し、昨日よく食べていた好物の仕込みをしておく。楽進にはプラス俺の特製辛み調味料をつけておく、どうかそれで許して欲しい。

皆との別れも淡白だった。華琳以外は俺が陳留に戻るだけだと思つているから仕方ないのだが、少し寂しい。

最後に皆の無事と勝利を願ひ、彼女達を見送る。

さあ、俺も四百年來の因縁に向い合うとしよう。

最後に管輅と卑弥呼に挨拶をしに行こうと思ひ、宮中へ向かう。

勝手知つたる宮中である。四百年前から多少改修されているとはいえ、秘密通路などはそのままだ。

隠し通路も綺麗にされているからここも忘れ去られてはいないようで、誰かとすれ違わないかという不安もあり、通路を作った本人としては嬉しくもあり、心中複雑である。結局そのまま誰ともすれ違うこと無く、四百年ぶりの後宮へと足を踏み入れた。

気配を探ってみると何やら違和感のある場所がある。

なんとなーく行くのが嫌になるその場所、恐らく結界が張られているのだろうと予測する。

気配を探りつつ隠れつつ、違和感の中心地へ向かう。

途中お盛んな大將軍様や皇后様や十常侍やらがいたが気配だけ覚えてスルー。致している最中に自身の名前や役職を呼ばせたがるのは自己顕示欲の表れなのかね。

そして生々しく毒々しい光景と音を超えた先、後宮の最奥に辿り着いた。目の前には見た目ごくごく普通の扉、だが前にすると圧力のようなものを感じる。

しかし中には良く知った気配があつたので、ノックをして声をかける。

「卑弥呼ー、白だ、開けてくれ」

「ぬおっ、は、白殿?!」

驚きの声が扉越しから聞こえ、しばらくして扉が開いた。

「ほう、白殿に違わなかったか……于吉や左慈はおらんか？」

「いんや、隠形しながら秘密通路を通って一人で来たよ」

「ふむ、ならば単純に私の修行が足りず、白殿の力が優っているという事か。」

では白殿、とりあえず中に入られよ」

「失礼するよ」

妙にファンシーで裝飾過多な室内に、厳ついふんどしマツチョが迎え入れてくれた。

「ここは管輅と私の執務室でな、人避けと感知の術式を幾重にも張り巡らしている場所でもある。まあ白殿には意味のない物だったようだが。」

して白殿、今日はどうぞされた？」

「ちよつと匈奴の土地まで向かおうと思つてて、その前に改めて挨拶をしとこうと思つてな」

「ふむ、異民族に対して興味を示されたと管輅から聞いていたが、また急な話である。しかし丁度良いと言わざるを得ないタイミングでもある」

「ん？ 何かあつたのか？」

「先ほど匈奴より黄巾の乱に対する援軍が送り届けられたのだ。管輅はその対応に向かつて今は席を外れておる。」

しばらくすれば戻ってくるだろうから、それから三人で改めて今後の相談をするのが

良かろう」

「渡りに船、というにはタイミングが良すぎないか？」

「元より黄巾の乱における匈奴の援軍はあった。白殿の行動は私達管理者ですら制御出来んから、白殿以外に意図した行動を取れるものはおらん。故にこれは天運という他ない」

「たまたまねえ、そういうもんか。」

「……まあいいや。それじゃあ管輅が戻ってくるまでの間、ちよつと匈奴について教えてくれないか？」

「お安いご用、任せられよ」

こうして俺は匈奴への渡りと情報を一度に手に入れる事が叶うのだった。

匈奴の情報は多岐に渡った。

四百年前からの略歴、現在の生活水準、文化レベル、単于の性格と考え、これからどうなるのか、ループで見た彼らの行動パターン。

長く中央で活動していた卑弥呼が持つ情報は広く、また確度も高い。

今後活動するのにとても役に立った。今度から情報は卑弥呼から仕入れよう。

管輅は人の未来も過去も見えるからか、はたまた流れの収束が良ければ全て良いと考

えているからか、情報の蓄積を重視していない。過去の情報を聞くとなるとあまり役に立たない面があった。

「それじゃあまとめると、今来ている於夫羅が黄巾党を適当に叩いて手柄を立て、匈奴に戻ったら単于である父が殺され、助けを求めに洛陽に来たら群雄割拠となっていて追い返され、賊に落ち、曹操に討伐されて兄弟共に恭順し、単于の代わりに執政していた老王が鮮卑からの要請を受けて漢を攻める。っていうのがテンプレな訳か」

「そうなる。前回の流れで出てきた五胡の大軍は匈奴と鮮卑の野望が暴走した形だろうな。しかし一つ間違いがある。於夫羅と呼厨泉は兄弟ではなく姉妹だ」

「あ、そうなのね。んーじゃあとりあえず五胡の野望を阻止する方向で動こうかな」
「それで良いと私は思う。」

匈奴の侵攻は物語上あっても無くても良い演出なのだ、無ければないでちゃんと漢人はひと纏まりにはなつて物語は収束するのでな。

だがそれでは」

「演出で死ぬ民や兵が不憫過ぎるな」

「私もそう思うのだ。」

だが管理者一同の大目的は物語の収束であり、それ以外、それ以後の物語については無駄と割り切るのが鉄則だ。

私と貂蟬はその大前提を崩さぬ範囲で少しでも未来が良くなるようにと動いているが、表に出られない故出来ることは限られている。

于吉と沙慈、管輅も苦言を呈するかも知れぬが、白殿が動いてくれるなら私は嬉しく思う」

「そっか、それじゃあ今回でループが無くなるかも知れんし、俺はそっち方面で積極的に動くとするかな！」

「頼むぞ、イイオノコよ」

そうして卑弥呼と初のツーショツトを楽しんでいると管輅が帰ってきた。

俺がお邪魔していると知って驚いた様子だったが、何故か納得もしていた。

「於夫羅への未来視に不確定要素が混じって見えていたのは白様の影響だったのですね。」

しかし残念です。

白様が近々曹魏を離れる未来が薄つすらと曹操から見えておりましたので、私達の謀略に手を貸して頂けると楽しみにしていたのですが」

「期待に添えなくてすまん。でもこれは四百年来の因縁にケリを付ける良いチャンスなんだ」

「白様の無念、見知って理解しているつもりです。なので邪魔は致しません、好きにおやり下さいませ。」

「一先ずは白様を漢からの連絡員兼通訳として派遣する形に致しましょうか」

「ふむ、ならば適当な役職に就けねばなるまい」

「あまり高いと自由に動けないから、侮られない程度に留めてくれよ?」

「はい、こちらで調整致します」

「俺の独断で色々迷惑をかける、すまない。そして管轄、君には特にお世話になりっぱなしだ。改めて礼を言わせてくれ、有難う管轄、いつも本当に助かってるよ」

「あつ、は、はい、お褒め頂き、感謝致します」

「いや、俺が感謝してる方なんだが……えっと、それじゃあどうしようか、調整にはしばらく掛かるんだよな? 何か手伝える事はあるか?」

「今はこれといった手伝いは要りませんね。」

何処に丁度良いポストが空いているのか調査をし、証明書の手配をするとなるとどれだけ術を駆使して無理押ししても一日は掛かります。

匈奴の軍勢は今日明日と漢の持て成しを受ける手はずになっていたので、二日程拘束できます。

ですから今日いっぱい好きにお過ごし下さい」

「んーそっか、ならお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「はい、今日の夜にはおおまかに纏めておけると思うので、改めてその時にお会いしましょう。」

守衛には謙信と名乗れば通れるようにしておきます」

「分かった、それじゃあ街でもぶらりとしてくるよ」

そうして俺は街に繰り出すのだった。

洛陽には光武帝となつた劉秀に招かれて以来だったので二百年ぶりになる。

仲間達との別れの場所、仲間達の意志が腐敗していく場所という念が強く、また医者や教育者も豊富で立ち寄る必要のない場所だったので足が遠かつたのだ。

まあしかし、わざわざここを離れる面倒を行う程の嫌悪感もなく、二百年前から変わらぬ光景があつたりして郷愁に耽り耽りもするし、活気のある町並みに微笑みも零れる。

案内簡単で洛陽を受け入れている自分に気付き、苦笑いが出てくる。

必要な薬等を買って宮中に送つたり、診療所や鍛冶屋に寄つて技術レベルを確認したり、暴漢に襲われそうだった儂げな美少女を保護したり、儂げな美少女が街を見たいといふので喫茶店デートや夕飯の買い物等に付き合わせて楽しんでみると、夕暮れがやってきた。

予想以上に楽しめたのは儂げな美少女という華があったからだろう。

感謝を述べると彼女も優しい笑みを浮かべて感謝をくれた。

しばらく少女の住んでいるという方向をゆっくり歩いてみると、メガネを掛けた勝ち気そうな美少女と腕の立ちそうな数名の護衛が鬼気迫る表情で進行方向からやってきた。

儂げな少女は寂しそうな、嬉しいような笑みで「迎えが来ました、今日は有難う御座いました」と丁寧な礼をしてくれた。

俺も「有難う、楽しかった」と返す。そして少女は綻ぶ笑顔でその人物達の元に歩いて行った。

勝ち気な美少女はほっとした表情をし、そのまま儂げな美少女の手を引つ張って連行していった。

健気少女は貴族か何かで、強気少女はお付なんだろうなーとなんとなくと見送っている、途中事情を聞いたのか、強気少女が振り向いて頭を下げてきたので、こちらも礼を返しておく。

いい娘達だったなーとほっこりしつつ、そのまま帰途についた。

さて、日も暮れてきたがまだ夜というには早い時間。

俺は後宮の調理場にて袖をまくっていた。

皇帝を含めたお偉いさんの為じゃなく、何時も世話になっている管輅と卑弥呼の為に差し入れをしようと思っただ。

管輅の好物は以前過ぎした時に熟知しているし、さっきの会話の中で卑弥呼の好物も聞いている。

なので醤油あんかけ天津飯とパンケーキを作ることにした。

分かりきった話ではあるが、天津飯好きが管輅で、パンケーキ好きが卑弥呼である。

調理場に残っていた宮廷料理人に名前を出すと、渋い顔をされながらも竈を一つ借り受ける事ができた。

彼が渋い顔をしたのは、日が暮れる前に皇帝への料理は作り終え、調理場を掃除し終えた後だったからである。

掃除を終えた調理場に彼が残っていたのは明日使う食材確認のためだった。

俺が後で綺麗にするからと言っても、見知らぬ料理人に何か細工でもされたら自分達の首が飛ぶので、彼は必然的に最後まで監視し、使い終わった後再び掃除する役目を負う事になる。

そりゃ渋い表情の一つもしようものだ。

料理ご馳走するから許してと心の中で思いつつ、さくつと料理を作る。

三十分程でふわとろ天津飯と色彩豊かなパンケーキが完成。

一応天津飯を主食、パンケーキをデザートデザートの計算で、皿は何故か十皿ある。

俺は既に美少女と食べているので要らないので、作るなら管轄、卑弥呼、監視員の料理人の三人分だけで良かったのだが……いやー儂い美少女と一緒に買い物してたら皆が皆すげー出血大サービスをしてくれて、材料が山盛りだったのだ。

そして持つて帰ってきたは良いが、宮廷に残しておいても何処から仕入れてきたか分からない食材なぞ捨てられてしまう。結果もつたいない精神が発揮されて食材を使い切り、皿が二つずつ余計に増えてしまったのだった。

「おぉー良い匂いに誘われて来てみりゃ、何とも美味そうな料理があんじゃねーかー」
やたら威勢のよい女性の声が入り口から聞こえてきた。

振り返って見てみると、得物を見つけた野生動物のような笑みを浮かべる女性が居た。上衣を軽く羽織り、下はズボンという動きやすそうな服装、日によく焼けた肌、しなやかな筋肉、シヨートボブ、容貌としてはとても整っている二十代前半ぐらいの女性が居た。

しかし何よりも目を引くのは、傍若無人豪放磊落という雰囲気と、まるで獲物を見つけた野生動物のような笑みだ。

なんというか、とても存在感がある人だなーと見ていると、彼女は獣を思わせる鞠や

かきで料理に急接近し、お盆ごと掻つ攫おうとした。

余つた分なら勘弁してやるが、お盆ごととなると止めざるを得ない。

ぺしんと手を叩き、同時に頭へデコピンを食らわせて転ばす。

女性はいきなり来た衝撃に素早く反応し、後転をして勢いを受け流した。

「あてつ。えつ、えええ」

まさか私の動きが見えるとは！ と分かり易い驚きの表情でこちらを見る女性に強めの釘を刺す。

「これは俺が日頃世話になっている人に向けて作った料理だ。勝手に手を出されるのは不愉快極まりない」

匈奴の言葉に覇気と嫌悪を込め、威圧する。

彼女は構えを解き、地に伏せた。

「すみませんですはい……って！ 何やってんだオレ様！」

一瞬で立ち上がった彼女は仁王立ちで言い放つ。

「匈奴を統べる羌渠の子、黄巾の乱を収めるべく精鋭一万を率いてやってきたこの於夫羅様に頭を下げさせるなんざあ良い度胸じゃねえか！」

「自己紹介有難う。叩頭はあんたが勝手にした事なんだけど」

「やいやいうるせえ！ とにかくその料理を賭けて決闘だこの野郎！」

あ、これ春蘭の同類かもわからんな。

55. 理を知る女

さて、匈奴軍のトップに喧嘩を吹っ掛けられた訳だが、どうしよう？

「受けるよ、なんでもござれだ」

「良い度胸だ、ならさっさと廊下でケリつけようぜ。ここは廊下一つ取ってみても馬鹿デケエからな！」

そして料理を残し、廊下で対峙する。

「料理が冷めるといけねえから単純な殴り合いと行こうぜ。良いのを二発当てるか、骨が折れる、意識が落ちる、降参で負けだ」

「ではいつでもどうぞ」

「次は本気で行くぜ！」

地を蹴る彼女は確かに早い。獣のような俊敏さ、態勢は極限まで低く、僅かに頭を揺らして頭部への有効打を散らそうとしている。なるほど、素手での戦い方を心得ている動きだ。熟練ボクサーのような合理性がある。

ただいまあ俺の力量を把握しきっていないのに勝負を早く決めようと攻め過ぎた。隙だらけだったし、というかそもそも遅い。華琳や春蘭に比べると馬と牛だ。

俺は引きつけて引きつけて引きつけて、彼女が振るったボディへの一撃を柔らかく掴み、全身を使って流れを誘導するように捻りを入れ、後ろに受け流す。

すると於夫羅は後方10mちよつとぐらいまですきーっつと勢い良く滑つていった。

磨きこまれた床石がよく滑るのもあるが、彼女の突進力が抜きん出ている証拠とも言える。

後ろではなく下に流していたら、下手をすれば殺していたかも知れないな。

後ろに流して転ばせただけなので衝撃も少ない、彼女はすぐに跳ね起きて態勢を整えた。

「人の身体をすり抜けるなんざ初めての体験だ、お前今何をしたんだ？」

そうして警戒心を露わにしながら、開いた10mの距離をじりじりと縮めてくる。

不安を前に出ることと殺すタイプか、面白い。

このまま待つて我慢比べも面白いが、今度は打つて出る。こちらとしても料理が冷めるのは本意じゃないし、先ほどの動きで彼女の身体能力は掴んだ。

一歩踏み出し、二歩まで普通に、三歩目で床石にヒビが入りそうな踏み込みで一足飛びに近付き虚を突く。

微速から急速の変化はよく見ようとしてしまうと罠に嵌ってしまう。

無から急は相手が踏み込む瞬間にすると虚を突けるが、見に回ろうとしている状態では効果が薄い。あえて一歩目二歩目をゆっくり進めて勘違いさせ、観察しても大丈夫だと意識を緩めさせた所で強襲した。

意識の狭間を狙った行動はまんまと嵌まり、彼女はぼかんとした表情をしていた。きつと彼女の目には俺の姿が急に大きく映った事だろう。

そのまま彼女の顎元に一閃、脳を揺らして意識を飛ばした。

崩れ落ちる彼女を抱きとめ、お姫様だっこをして厨房へ戻る。

そこには急展開の連続でどうしよう、どうしよう、と小声で呟く料理人がいた。

そして俺の姿を見てぎょっとした表情を見せる。

決闘だ！　と言われてものの二、三分で対戦相手を担いで帰ってきたら驚きもするだろう。

狼狽える料理人に対して俺もどうすれば良いのか名案が思い浮かばなかったので、取り敢えず料理を勧めしてみる。

「あの、自分の作った料理食べてみてくれませんか？　ちよつと宮廷料理人の意見が聞けたらなーって」

「あ、ああ、はい、喜んで頂かせて貰いますはい！」

彼は大急ぎで俺の料理の元に向かい、天津飯とパンケーキの皿を引つ掴んで食べ始め

た。

急にどうしたんだろうと思ったが、彼の鬼気迫る表情を見て自分の迂闊さを悟る。

彼からしたら俺は目にも止まらぬ動きをする異民族を二三分でのした化物であり、後宮を牛耳る卑弥呼に縁のある者でもある。そんな人間に命令されたら毒だろうと美味いと言つて食わねばならない訳で。

「あつ、すごく美味しい」

という本音から出たであろうトーンの言葉を聞かなければ後ろめたさで死ぬ所だつた。

「それなら良かった、自分の料理の腕にまた自信がつかしましたよ」

「あの、この料理、作り方の詳細を教えて頂けないでしょうか？ 謝礼は多分に致します」

「良いですが、謝礼は要りません、迷惑を掛けたお詫びです。字は読めますか？」

「はい」

「なら詳しく書き記して後で届けましょう。今はこの料理と匈奴の客人を届けなければいけませんので」

「有難う御座います、お手伝いは？」

「いえ、何とか持てますので」

そう言つて俺は意識を飛ばしたままの於夫羅を肩に担ぎ、お盆を持つて二人の待つている部屋まで向かうのだった。

二人の部屋に戻り、肩に担がれた於夫羅に驚かれたが、料理が冷めるので経緯は食べながら話すと言つて料理を食べてもらった。

於夫羅は今部屋に備え付けられた寝台でぐっすりである。

二人が美味しいと言つて食べ終わり、事情を求めてきたので答える。

「……と、いう訳だ」

「という訳で連れて来られても困るのだがな」

「白様は本当に色々な未来を見せてくれますね」

「あのまま放置する訳にも行かないし、何処に連れて行けばいいかも分からない。だからまずは料理を食べてもらいたい欲求を満たす事にした」

「はあ、そうですね。しかし白様の手料理はやはり美味しい。宮廷料理人の飾りばかりの料理とは一線を画します」

「スイーツまで作れるとは驚きだ、貂蟬の奴にも食べさせてやりたいぞ」

「ベーキングパウダーが手元に少量しか無いから、次作れるのは何時になるやら……いや、確かこれは匈奴の地との交易で得たと言つていたな、匈奴との交流が深まれば容易

く手に入るようになるのか、あの便利アイテムである重曹が……これは俄然やる気が出てきたな！」

「ふむ、よくわからんが奮起しているようで何より。して、如何なされる?」「全ての友好は満ち足りねばなされない。取り敢えずご飯でご機嫌伺いかな」

二人が食べ終わると同時に俺もレシピを書き終えた。さてと、於夫羅を起こそうか。「おわ! ちよちよ! ここの何処?!」

気付けをした瞬間に寝台から跳ね起きた彼女。フーフーと臆病な猫のように警戒心を露わにしている。

「おはよう」

「あ、あんたは、呪い師!」
「??」

「呪い師?」

「身体すり抜けさせたり瞬間移動したり、怪しげな術ばつか使いやがつて!」

「いや、あれただの体術だから」

「嘘だ! あんな不可思議な事が体一つで出来るはずないっつーの!」

「だったとして、だ。お前が負けた事に違いはあるのか?」

「ない、けど。勝負は勝負だし、けど、納得いかねえ、けど、うううう、負けは負けだ」
憤懣やる方ないといった様子でorzの形になった。まあ納得はしてくれたいらしい。

「まあまあ、取り敢えずこれでも食って落ち着け」

「あ、これ」

「元より多めに作ってしまった料理だ、遠慮せず食べてくれ。毒味はいるか？」

その言葉を聞いた彼女は少し複雑な表情をした。

「施し、と思われただろうか？」

「ん、そっか、なら有り難く頂くぜ。毒味はいらねえ、アンタ程の呪い師がわざわざ毒なんて仕込まんのだろ」

そういつて彼女はレンゲを手に取り、天津飯をぱくりと頬張った。

!!!

「なんだこれ！ すっげー！ なんとというか濃いのに全然食える！ さつき出された
仰々しい料理が吹き飛ぶうまあげだぜ！ やつべえ止まんねえ！」

そして数十秒で天津飯を食べ終えた彼女はパンケーキに手を伸ばす。

「甘っ、甘い、けど胸がムカつかない甘さだ。後この白いのなんだ？ 甘くて乳の味がする、あーダメな奴だ、ずっと舐めたくなる奴だ」

心底幸せそうな表情でパンケーキも食べ終え、彼女は物欲しそうな目で残りの二皿を

見ていた。

「なんだつたら食べていいぞ」

「ほんとか?! だつたら、持つて帰っていいか?」

「ん、構わんよ。けど日持ちしないから今日中に食べるよ」

「おっしや! 妹に良い土産が出来たぜ! ありがとな呪い師!」

「おう、部屋を出たら右の通路を真つすぐ行けば調理場に着く。食べ終わつたらそこに皿を返すよう誰かに頼んでくれ」

「分かった、いっちょ行つてくるわ!」

そうして彼女はお盆を持つて出て行つてしまった。

何とも嵐のような人である。

「まあけど、退屈しなさそうではあるか」

俺はそう言つて開け放たれたままの扉を閉めるのだった。

翌日、謁見の間。

本来であるなら皇帝と十常侍が控えるその場には、たった三人の姿だけがあつた。

頭を下げる日に焼けた肌の女性、そこそこの身なりをした役人、ずっと頭を下げたまま
までいる俺だ。

「それでは匈奴の長代理、我らは友好の証として渡すものを用意しておる。金はいらんとこの訴えを受け、兵糧等の現物各種を配し、また技術士官を派遣して匈奴の発展に寄与できればと思う次第である。

以上だ、兵糧は外で受け取れ」

「はっ、皇帝陛下のご配慮感謝の至りに御座います」

「では兵達の元に戻れ、技術士官の貴様は女の後を付いて行くが良い」

下つ端役人はそう締め括った。

……なんだこれは。

俺は初めから叩頭して、下つ端役人が遅れてやってきて於夫羅を呼び出し叩頭させる。

そして卑弥呼が綴った木簡を読み上げて一方的に謁見終了である。

匈奴という一つの国に対する謁見がこれで良いのか？ 非礼にも程がないか？ 於

夫羅が怒り出さなかったのが不思議でならない。

於夫羅が先に退室し、俺はその後を歩く。

ちらりと下つ端役人の方を見ると、あからさまな侮蔑の表情が浮かんでいた。

「朝一から気分が悪い」

小さく呟き、俺は謁見の間を後にした。

扉の向こうには於夫羅が待つてくれている。

出てきた俺をぎよつとした表情で見、彼女は頭を掻きながら複雑な顔で言葉をこぼした。

「底が知れたと思つて内心笑つてたけど、アンタみたいなのをぼんと派遣するんだな。やつぱり漢つてのは底が知れねえなあ」

いや、底は知れてる。

だがそれを言う訳にはいかなないので、非礼だけ詫びる。

「……先ほどの謁見は我が国の落ち度だ、非礼を今ここに」

「はっ、詫びなんていらねえぜ。略奪を繰り返すオレらを蛮族と呼んで蔑んでいるとは知つていたさ。だがまあなんだ、漢の頭がオレ達の姿を目に入れたくもないというのは予想外ではあつたがよ」

彼女はにやりと笑つた。氣遣いでも何でもなく、本当に気にしていないようだった。

「まあ何にしろ、だ。これから宜しくな、呪い師兼技術士官殿」

「ああ、宜しく。姓名を謙信と言う、好きに呼んでくれ」

「おう、頼むぜ謙信！」

匈奴の兵が駐屯している場所まで馬で移動する。街の中ではさすがに乗り回す訳にはいかないので引くだけだが。

移動の合間に色々と会話をする。

彼女はそのノリの良さに隠れ気味ではあるが、腹を据えて会話してみれば、その頭の回転はとて早く、考え方に芯がある事に気付かされた。

「オレは利の勘定は下手くそだが、理についてはそれなりに知っている。

妹は両方そこそこいける口だよ。

オレが現場を仕切り、妹が単手として上に立てれば、匈奴をそれなりに榮えさせる自信はある。

「ん？ オレが昨日料理を貰う時に複雑そうだったって？

あれな、あれは単純に理解できなかったのさ。

オレ達は何かを余らせるなんて無駄は一切しない、いや出来ない。

だからなんだろうな、憎らしくもあり、羨ましくもありで表情が曇っちゃったのよ。

料理自体はすっげー美味かったよ、妹もあまりに美味いんで飛び跳ねながら食べていたしな。

妹は慣れない土地だったからずっと塞ぎ込んでたんだけど、飯食ったら回復したぜ。

あんどよ。

「略奪の認識ねえ、ありやオレ達にとって必要な行為な訳よ。

小麦が取れる所、鉱石が取れる所、加工できる所、場所によって作れるものが違う。それを普通に物々交換なりして交易すればいいとアンタらは言うが、それだけじゃあ駄目なのさ。

例えば、オレ達は身内を決して殺さねえ。だから漢で平然とやっているような間引きというのはやらない。けれどどうしても食糧が捻出できない場合、攻め入る。そうすると勝てば食料を手に入れ、負ければ口減らしが出来るからな。

そして人がいれば強姦もするしされる。戦って減った分は生まなきゃならんし、血が濃くなり過ぎないように身内外の血を入れたりもしなくちゃならん。

自然の摂理だとか必要にかられてだとか思惑が絡み合ったりだとかして、オレ達の略奪ってやつは成り立ってんだよ。

まあ、オレ達とアンタらの考え方が大きく違うというのは理解している、これで分かるまいようなら不干渉が最善だろうな。

「漢について詳しく知っている理由か。

単純な話さ、オレ達はずっと昔からアンタらを見ていたのさ。

張奐を恐れる前から、強大な王たる冒頓单于が漢に取り入る前から、秦が興亡する遙か昔から、オレ達は隣人たるアンタらの事を見て、言い伝えてきた。

情報の蓄積と、長年馴染ませてきた情報網はアンタらが持つ物よりもいくらか上等かもしれないぜ？

「何故簡単に情報を晒すのか。」

「負けたからか、胃袋を掴まれたからか、オレの魂は何故だかアンタを素直に認めている。」

妹なら上手く理由を見つけられるんだろがなあ……ともかくオレの中で筋道が立っちゃまったから、理を尊ぶオレとしてはそれに従うまでさ。

アンタが裏切る可能性？ オレの魂が在り得ないと訴えているから、オレの人生経験上在り得ないんだが……まあ口に出すと無粋極まりないが、口先に乗せなけりゃ漢人つてのは満足しないとは理解してる。

アンタがオレを嵌めるならオレはそこまでの女だったって事さ。だけどここまで胸襟を開いてる訳だから、アンタも裏切らないでくれるとオレとしては嬉しいね。

「匈奴の兵は馬を駆るのが上手い？ それって褒めてんのか？ 馬鹿にしてるのか？
いやアンタさ、歩くのが上手いね、息するのが上手いね、って言われて褒めてると受け取れるのか？」

オレらは馬と共に生き馬と共に死ぬ、そこに上手い下手なんて無いのさ。

匈奴の兵が駐屯する場所まで向かう間に色々な話をした。

彼女の語る匈奴像や物の考え方は匈奴という人種を理解する上で非常に為になった。勿論於夫羅から俺に聞いてくる事もあり、彼女はへえほおと聞き上手に徹していた。理を読み取り、聞き上手、確かに彼女は人の上に立つ人間だった。

「さて、アンタについて説明してくるからちよいと待つてくれ」

「ああ、頼むよ」

俺は彼女を見送り、見えなくなった所で深い深い溜息をついた。

強い後悔の念が押し寄せてくる。

四百年前、俺は融和政策を推し進めていたつもりだったが、何が融和だったのかという話だ。

彼女達には彼女達の考え方、信念、魂があった。

俺はその事を一切考慮しなかった。漢の物は良い物だとそれを押し付けていただけだ。

利に聡かった冒頓単于はそれを匈奴に強制させ、理を尊ぶ人間に反発されて殺され、漢と匈奴は戦争になった。

全ては俺の浅慮が招いた事だったのだ。

灯華様を殺した匈奴を心の底から憎めず、強硬手段に訴えなかったあの時点で、実は

気付いていたのだ。

けれど必死に無視してここまでやってきたが、ついに事実を突き付けられた。
「灯華様、俺はどうすれば良いんでしょうか……」

思わず吐いた弱音に答えてくれる人は、もういないのだ。

56. 立て直す為に打ち壊す

後悔と罪悪感で沈む心を殺し、理性をフル稼働させて何が悪かったのか、どうすれば良かったのかを頭の中で反芻する。

既に終わった事なのだから、それを教訓とせねば前に進めない。

彼女から聞いた情報を加味し、最善と最優先を改めて模索する。

「漢、というより呉の皆や魏の皆の安寧を優先させる為、匈奴への裏切りも已む無しと考えていたが、もう簡単に割り切る事は出来ないな。

……結局は於夫羅の言った通り俺は裏切れなくなった訳だ。さすが理を知る女、的を射ていた」

一先ずは匈奴という者達をより知ろう。そして共存共栄の道を見つける。

それがきつと四百年前にしくじりを犯しながらも放置し、奇妙な形で歴史を繋げてしまった俺が成すべき贖いなのだろう。

決意を新たにし、しばらく今後の方針を練る。

大まかな計画を立てた所で於夫羅が苦笑いをこぼしながらやって来た。

「いやー説明してきたんだけどさ、アンタに負けた事を言ったら腕を試させろと皆うるさくなつちまつてよ。」

「いっちよ力を見せてやってくれ！」

「自分が負けた事も言ったのかよ、それは一軍の長としては軽率じゃないか？」

俺は匈奴の慣習も分かっていないので於夫羅に対して何も要求せず、彼女の良いように説明してくれと頼んでいたのだ。けれどまさか自分が負けた事を話すとは思わなかった。

匈奴軍にとって漢は慣れない土地であり、しかも仮想敵国である。そんな神経を尖らせなければいけない場所で良く分からない皇帝に助力しろと言われた。長の命令と言われてもモチベーションは全く上がらない。

そして苦勞して漢のトップに会いに来てみれば、於夫羅と呼厨泉だけが会食に呼ばれた以外は陣に押し込められて、食糧を押し付けられただけ。

そして案内役を一人派遣され、さあ黄巾党を退治しろと言われた。

少しの事で爆発しかねないこの状況で、更に燃料を注ぐような情報を出してどうするんだ？

「オレの胸の内を正直に語る。アンタに手荒い歓迎をする為にアイツラが準備をしている間、オレの話を聞いてくれ。ここが、アンタとオレの選択が、漢にとって、匈奴にとつ

ての境界線になると思ってたんだ」

そう真剣な表情で切り出した彼女を見て、湧いた疑問を押し込める。

聞こう、と目で頷き、於夫羅の話を開始始める。

「今オレ達匈奴は岐路に立たされている。

四百年前のしこりから、学を疎かにした報いから、オレ達は年を追う毎に弱くなっている。それに一族の数は確実に少なくなってるんだ、目を覚ませばすぐに分かる事なんだよ。

だが少し前までのオレ達はそんな事に気付きもしなかったんだ。

漢は肥えていている癖に弱かった。だからこのままで良いんだと、不都合な事に目を逸らして生きてきた。

けどそうもしてられなくなった。

張奐が来てオレ達の心をへし折ったんだ。

ずっと漢を観察してきたオレ達は漢が衰えていると知っていた。けれどその死に体の漢が本気になったら、オレ達は簡単に蹴散らされる程度の強さでしか無いんだって思い知らされた。

しばらくは雌伏の時だ、なりふり構わず国力を増すべきだとオヤジと話し合って、根回ししようとした。

けれど張奐が追いやられ、漢に黃巾賊が蔓延った事で打倒漢の機運が高くなつちまつた。根回しは無駄に終わり、匈奴は死に体のまま立ち上がるうとしている。

馬鹿な話さ、オレ達に余力はないんだぜ？ そんな状況で戦い？ 無謀過ぎるわ。勝つても負けても前のめりに死ぬだけだろ。

それに会食の席で聞いたぜ、黃巾の賊ですりや数十万、百万に届くぐらいいるんだろ？ そしてそれを順調に漢軍は討伐しちまつてるんだろ？ んなの勝負にすらなるかつての。

オヤジとの話し合いは無駄じゃなかったと思つた瞬間だつたぜ。

だからよ、匈奴の奴らには漢の敵情視察だと言ひ包めて、漢に擦り寄る為、無謀な戦を仕掛けぬよう匈奴の戦力を削ぐ為、再び張奐が役目について北を抑えてくれるよう頼む為、オレはここまでやって来た訳だ」

大きく息を吸い、目に強い力を込めて彼女は言つた。

「なあ謙信、アンタが第二の張奐となつて、オレと一緒に匈奴を抑えてくれ。そして漢との架け橋になつてくれ。

頼む。アンタなら、アンタと一緒になら、閉塞した現状に風穴を開ける事が出来る気がするんだよ」

真摯な訴えだつた。自らの国の為、多くの同胞を騙そうという彼女の強い心に感情が

揺さぶられる。

俺は脳内で描いていた計画を一旦白紙に戻し、彼女の話を軸に組み直す。

三十秒ほどで道筋を立てた俺は、空いた間に不安の表情を見せ始めていた於夫羅に強く頷いた。

「於夫羅、あんたの答えは受け取った。二人で漢と匈奴を立て直そうじゃないか」

大望に胸が踊り、気が漲るのが分かる。

於夫羅はその様子を見てとても嬉しそうな顔をして頷いた。

「ああ、アンタとならやってやれねえ事はねえ！」

氣勢を上げる彼女に俺も嬉しくなる。そうだ、なんならもう預けとくか。

「今後、俺の事は白と呼んでくれ」

「おお？ あーあれか、真名、って奴か？ しっかし良いのか、すっげー大事なものなん

だろ？」

「良いさ。これからでかい事やってのけようってんだ、相棒に大事なモノを預けなくてどうするよ」

「そっか、なら受け取らせてもらおうぜ。私に返せる名は無いが、白の為なら命を張ろう」

彼女が拳を突き出してきた。

俺もまた拳を出し、打ち合わせる。

今ここに小さくも強固な同盟関係が結ばれたのだった。

「姉貴ー準備出来たぜー」

匈奴陣営から女性がやってきた。

於夫羅によく似ているが、彼女とは違って長く艶やかな黒髪が印象的な少女だ。

「おお、わざわざ呼びに来てくれたのか。白、コイツがオレの妹の呼厨泉だ。読み書きだけじゃなく、計算も少しだが出来る才女様なんだぜ。しかも個人の勇だつて大層なモンなのよ。」

んで、一応色々と話している数少ない身内だから、重用してやってくれ」

「そうなのか。俺は謙信という、これから宜しく頼む」

「あたいは呼厨泉だよ。……なあ姉貴、こんななよなよした奴で本当に大丈夫なんか？」

「おうともさ」

そう言つてジロジロと俺の全身を隈なく見る呼厨泉。

「んー確かに得体の知れない物は感じるけど……こうなるとやっぱ実際に目にしないと信用出来ないね」

「呼厨泉、オレの目が信用出来ないってのか？」

「姉貴、それとこれとは別。あたいの命を預けるに足るかを判断するのは姉貴じゃない

「よ」

「まあ、それもそうだな。ならこれから起こる事をしつかり目に焼き付けな」

「……なあ、これから何が始まるんだ？ その所の所をまだ詳しく聞けてないんだが」

「あーそうだったね。なあ呼厨泉、中の様子はどうだい？」

「皆やる気になってんよ」

「やる気？ まさか」

「ああ、あんたには今から各部族の腕自慢と素手で戦ってもらおう。」

「姉貴を倒した腕前を今ここで見せて貰おうって訳。」

「決して負けんじやないよ、負けたら軍の長が姉貴からアンタに勝った奴になる可能性があるからさ」

「責任重大ってわけだ。幾つか聞きたいんだが、まず数は？」

「皆が皆アンタの受け入れを大反対してるから、全部族の力自慢代表を相手にしなきゃいけない。大体八十人ぐらいかね」

「ふむ、じゃあ個人の武力について聞きたいんだが、於夫羅と十戦してどれだけ勝つ？」

「んー半数は一度も負けん。二十人ほどは下手をすれば一本取られるか、残りの二十人は二、三本取られる事もあるかな」

「ほう、じゃあ戦闘形式は？」

「二対一。五連戦で百八十秒の休憩あり。試合の制限時間無し。道具無し。原則殺し、目潰し、金的無し。敗北条件は両手足の内二本折る、倒れて十秒立てない、降参、気絶。一応腕試しのていだからこんな感じ。とはいっても、向こうは殺しに来るだろうから気いつけな」

「うーん、そうか」

「なんだい、乗り気じゃない感じだね。怖気づいたかい？」

「いや、そんなに緩くて良いのか？ 各部族の代表がその程度なら、千人ぐらい同時に相手しても構わんけど？」

「は？ 本気で言ってるのか？」

「本気だ。あ、大丈夫だぞ、殺し目潰し金的は一切狙わないから」

「いや、オレらが心配してるのはそこじゃなくて」

「あなたの頭の方を心配してるんだけどさ」

「実力と結果はちゃんと見せるさ。けどそれで皆納得すんのかねえ」

「あたいらは実力こそを尊ぶ、完膚なきまでに叩き潰せば大体の不満も潰えるよ」

「おう、それじゃあいつちよ実力というのを見せますか」

そうして二人に連れられて行った場所には四角い舞台が作られていた。

丸太を腰までの高さに組んで五m四方のリングが作られていたのだ。

色々な罵詈雑言、嘲笑、殺気が四方から投げかけられるが、それに関しては特に感慨も無く、ただ舞台が狭いなーと思うだけだった。

於夫羅は俺に負けているので現状何かを語る資格を持たないとして俺の後ろに控え、代わりにまとめ役をやっているのは呼厨泉だった。

ルールの確認、戦う順番などを説明し、いざ！ という声が発せられたので、舞台の中心に進む。

目の前には2mに迫ろう巨人さんがやってきた。

お互い中央に立つと、巨人の彼は俺を睨みつけ、自分の部族名と自身の名前、得意な事を宣言してくれる。

彼は力自慢だそうで、なら単純に力で潰そうと思う。

試合開始の合図が呼厨泉から告げられる。

巨人君は俺に手を伸ばし、掴みの態勢。握力に自信があるタイプなのだからオーソドックスな戦法だ。ついでに彼の表情から察するに、殴るよりKOが分かり難いから存分に捌れる、とでも考えていそう。

俺は率先して彼の手と組みに行く。

俺の不可解な行動に一瞬間が空く。致命的な隙だが、見逃してやる。

周囲のやつちまえ！ という声に復活した巨人君は俺の手を粉々にしようとい力を含める。

うーん、明らかに秋蘭以下だ。剛弓を容易く引く彼女の握力に比べるとか弱い少女のようである。

巨人ちゃんが顔を赤くして力を込めているので、ここいらが限界かと落胆の表情を見せ、徐々に力を入れていく。

ゆつくりと巨人ちゃんの顔が赤から青に、悔りから苦痛と恐怖に変化していき、最後は降参を絶叫して勝負が終わった。

あれだけ騒がしかった周囲がしーんとする。

呆然とした様子の呼厨泉に続きを促す。

そして彼女ははっとした表情をして次の人物を呼び出した。

だが巨人ちゃんが何もかもが抜け落ちた表情をして動かなかったので、彼を優しく抱きかかえ、リングの外に放り投げた。

彼の巨体を誰も受け止めようとせず、ズシーンと重い音を響かせて彼は背中から着地し、そのまま伸びてしまった。薄情な奴らである。

巨人がいなくなり、舞台上が上がってきたのはスピード自慢だった。

瞬速さんは俺は力だけの奴には負けない、さつき巨人の隙をつけなかったような奴に

は負けないぞと大声で言った。

なので彼にはスピードで勝とうと思う。

巨人よりも二歩程距離を置いてスタートする。

彼は足を忙しく動かしてステップを刻み始めた。

見に戻るつもりだろうか？

一歩踏み出し、力を抜き、一応顎を狙ってジャブを放ってみる。

避けるのかなーと思ったら拳はすんなりと顎に入って彼はダウンした。

瞬速君……。

その後十人程と相手の得意分野で戦い、速度腕力脚力体術柔術を全て叩き潰した。

すると次第に誰も得意分野を叫ばなくなった。

普通に殴りかかってきたので、普通にワンパンで片を付ける。

それが十人続くと、次の者から氏族も名前も言わなくなった。

場が凍りついているのを感じたので、盛り上げようと派手に気を使ったり、高く高く

投げ飛ばしたり、震脚で観客も楽しませてあげたりもした。

それが十人続くと、呼厨泉が指名しても誰も出てこなくなった。

なのでリングを吹き飛ばし、俺は実力を出しきってないので、皆で掛かって来てみな

い？ と軽くジェスチャーで煽ってみる。

これからの事もあるので嫌味や貶すような事は言わない、だがそうなるに燃料が弱いので皆乗り気にならない。

停滞した場にどうしようかと困っていると、呼厨泉が恐怖を滲ませた表情で前に出てきた。

「あ、あたいが相手をする。誰も名乗りでねえなら、これで締めになる」

「そうか、では漢より派遣された下級技師官、名を謙信。お相手願う」

「呼厨泉、単于の娘だ。軍の長たる姉の次に強いと自負している」

周囲が俺の自己紹介にざわつく。

俺が流暢な匈奴の言葉を話し、下級官吏だと告げた事実には驚愕が走ったのだ。

今までの罵詈雑言大言壮語が一から十まで伝わっていて、そして化物のような強さを持っている俺が使いつ走りという事実だ。

えっ、今まで相手にしてた漢民族はなんだったの？ 漢の将兵やばくね？ 俺達後で

殺されたりしない？

そんなざわめきが周囲に満ちる。

周囲とは関係なしに俺と呼厨泉の戦いが始まる。

於夫羅が推したように、少女と言っても差し支えない若さであるにも関わらず、彼女は他の奴らより余程動いていた。

けれどもまだまだ荒削りだったので、教導しながら戦う。

身体の動かし方という根本から、流れの操作方法などの戦術的な事まで。

そうするとどんどん彼女の動きが冴え始めるのが周囲の目にも分かる。

どんどん早く、重く、上手くなっていく彼女だが、それが周囲にとつて絶望を深くする。多少まともな比較対象が出来た事で、匈奴で一二を争う実力者と漢の下級官吏の間には果てしない溝があるという事実が浮き彫りになる。

最後は息も絶え絶えの呼厨泉が転がされ、立っているのは汗一つかいていない化物。

それはもう武器を手にしていたらとか、馬上であつたらとか、そういう理由をつける事すら出来ない実力差に映つた事だろう。

武器を持つていても、馬に乗つていても、自分の知覚できない攻撃をされたらお陀仏だ。馬で押し潰そうにも、馬に近い体格の巨人を軽々と投げ飛ばす剛力に押し返されるかも知れない。

そんな奴が漢のトップではないのだ。張奂も位は低かったと聞く、目の前の化物も下級官吏と言う、つまりこのレベルの奴らが漢にはうじゃうじゃいるのだ。

そんな思い違いを彼らはしたのだろう。

勝てる未来を尽く潰された匈奴の兵達から、何かがポキリと折れる音を聞いた。

皆が一様に絶望に染まった表情をしていた。

仲間である筈の呼厨泉や於夫羅ですら引きつった笑みを浮かべていた。
……やり過ぎたかな？

57. 手にした物

冷え切った場の空気を切ったのは軍の長である於夫羅だった。

「力試しはここまでだ！ 以降謙信は我らが匈奴の盟友となる。異議のある者はいるか？」

力自慢達が尽く敗れたので、結果彼女が復権した形になる。

そして彼女の言葉に異を挟む者はいなかった。

「ではこれより謙信を含めて黄巾討伐の方針を決める。各部族の代表をここに連れて来い。残りの者は戦いの準備をしておけ。以上、解散！」

その毅然とした声に皆悄然とした様子で従い、各方面に散っていく。

その様子を見た於夫羅と呼厨泉が複雑な目を向けている。

「血風吹き荒れる戦場がなにより好きで、強い者こそ畏怖と尊敬を持って迎え入れるアイツらが、強者との戦いを避け、沈黙しちまつてよ。ありや完全に心が折れちまつたな」
「仕方ないよ姉貴。ここにいる奴らは表向き漢への援軍の為に集められたけど、その実最精銳の奴らに実戦経験と行軍経験を積ませる目的があつて集まつてる訳でさ。」

そんな軍隊にいる各部族の代表が尽く負ける、そりや匈奴そのものの負けつて意味だ

ろ。

あたいはそれが利になると分かっているから受け入れられるけど、他の連中がそうそう受け入れられる筈がないよ。というか、あたかも軽く捻られて自信喪失してんだけど」「オレも白の予想以上の強さに慄いたぜ。なあ、白つてば本当に下級官吏なのか？ んで、アンタより強い奴つてのはどれぐらい居るんだ？」

「下級官吏なのは本当だ。」

俺より強い個人つてのはそういないと思う。けどさっきの俺みたいな事が出来るのは何人か知ってるな」

「……アンタが最上と知って安心してたが、似たような事が出来るのは何人もいるのか。漢への突撃は無意味な死に繋がると改めて認識したぜ」

「だねえ、あたかも緩んだ考えを締め直さないと」

顔を引き締める彼女達を見て、良い方に勘違いさせる事が出来たと安堵する。

俺も今後の方針を決めようか。

色々と自信を喪失している今だから、取り敢えず付け込ませてもらう。それで俺が教導しながら黄巾と戦い、強さに対する自信を取り戻してもらおう。成果を挙げて俺が受け入れられたら、徐々に多方面に口出しして行く。

ここで改めて戒める、決して考え方を強制はしないと。

過去のように押し付け、押し潰すのではなく、取捨選択出来るように手だけ差し出す。その上で今後どうするかを選んでもらおう。

最終的に匈奴が無くなったとしても、それが彼らの選ぶ道ならば受け入れ、見届けよう。

それが俺の匈奴に対する償いであり、於夫羅との約束に対する答えである。

さてさてそれで、それからの匈奴軍がどうなったのかというと。

主に洛陽と匈奴の直線上にいる賊を狩りながら、道路工事をやっていました。街道整備は今後の交易の為であり、訓練の為でもある。

街道の整備が進んでいけば、洛陽までの往来が楽になるぞと裏を想起させるよう吹き込み、矢と馬を躲す為の塹壕作りに土木工事は最適な訓練であり、また単純に筋力トレーニングにもなるぞと唆してどんどん街道整備をやらせる。

彼らの身体と戦術的思考を強化するのは鮮卑対策として必須だし、がんがんやらせる。

他の事に関しては、ただ正しい理論に基づいた事を教えたただけだ。

出来るだけ節約しながらの正しい食事、効率的な正しい訓練方法、正しい睡眠、正しい衛生、正しい仮拠点の作り方等等など、手本を見せる。

強き者にこそ続くと真似をしてくれる部族が出てきてくれたので、彼らに何をどうするとどういふ効果が出るのかを説明し、実践してもらおう。すると二三日で分かりやすく効果がでて、彼らは部族単位で高い戦果を上げ始める。

そうなる则ち他の部族も相談に來たりして、割と円滑に匈奴軍の生活サイクルを變える事が出來た。

ここ一ヶ月で訓練と生活の質が上がり、匈奴軍全体の外見が大きく變わつてきた。健康的な肌ツヤ、睡眠も過不足無くお目目ぱつちりで表情にも余裕が生まれ、無駄が削ぎ落とされて全体のシルエットはシャープに、そして何より衛生に氣をつけていたので清潔感がグーンと増した。

本来なら次は戦い方に関して口を出すのだが、今教えて漢の中で調子に乗られるとまずいし、体作りとイメトレだけで十分に満足しているようなので戦術戦略面は今のところノータッチで通す。

次いで略奪についてだが、これは黄巾党の物に限らせてもらつた。略奪したら略奪される、当然の帰結だ。

だが関係のない村に手を出そうとしたら、俺が出て行つて割と強めの可愛がりを發動させる。

しばらくすると普通の村には手を出さなくなった。

そんなこんなで二ヶ月程彼らと行動を共にしていると、何となくではあるが彼らの事が分かり始める。

生活に直結する部分では便利さを取る柔軟さがあり、案外意固地ではない。

だが事が生き方などに及ぶと、まるでそこは魂に刻み込まれているので変えられないと不屈さを見せる。

俺はそこに反発せず、ならばこういう形ではどうだろうかと提案し、向こうが納得できる形を第一にした。

俺と匈奴の兵が割とうまく行っていると確信が持てるようになった頃、黄巾党頭目が討ち取られたという報が届いた。

黄巾の乱が終わり、群雄割拠の時代が始まったのだ。

とはいえ派遣技師官としての任を解かれた訳ではない。

俺はそのまま匈奴軍と共に匈奴の地に足を踏み入れた。

単于に挨拶をし、そのまま単于、於夫羅、呼厨泉と共に今後の方針を決める。

そして出来るだけ匈奴に暮らす人間の生活水準を上げ、戦をしなくても済むようにし

ようという目標を掲げた。

俺は各部族の生活水準を上げるために奔走した。農耕を望む部族には農業を教え、交易を望む部族には文字と数字を教え、医を望む部族には医学を教える。とにかく請われた物をひたすらに教える、そんな教師生活が再び始まったのだった。

そうして気付けば三年程も教師生活に従事していた。

普通に教え、皆が望む方向に伸び始めると、戦いの機運はみるみる内に消え去っていった。

個々の部族は自分達の得意分野を見つけ、各地の産業になりそうな物を見つけ出して整備し、交易によって物の流動が起こって豊かになり、隣国から争いの中であぶれた子供達を買って血が濃くなるのを防いだ。

匈奴の抱えていた問題点が一点を残しほぼ消えたのだ。

そもそも経済的、政治的、外交的な争いや戦いは閉塞の中で生まれる物だ。

皆が一樣に上を見上げ、自由に手を伸ばせる場所があるなら戦いは生まれぬ。つまり、充実し始めている匈奴内に火種は存在しなくなった訳である。

もしあるとすれば大体は外からのものになる。例えば匈奴の地を望む鮮卑、河北を荒らしてもらいたい勢力だとかがちよっかいを掛けて来るのだ。

そうした不穩分子は尽く潰したが、そういつた輩が蔓延りそうになる度に対処法を教えてくれと頼まれた。

要請もあり、二年目ともなれば誰に何をどこまで教えたなら良いのかも掴めてきていたので、色々と教えることにした。

信用のおける者を選抜し、戦術戦略、謀略調略、軍規規範について教導し、軍としての体裁を一気に整えた。

普段は治安維持と情報収集の為に各地に散っているが、伝令が来れば直ぐ様集合して大軍と成す機構を一年で作り上げた。

そんなこんなで匈奴の地に足を踏み入れて三年、俺のやるべき事はほぼ終わったと言つても過言ではない。

ここまでのシステムを作り上げる事が出来たのは、これらが匈奴全体の望みだったからだ。皆が一丸となって変革を進める事が出来たからこそその成果だ。

もはや現状に不満をこぼす人間は異端の目で見られる。

きな臭かった老王の動きもここ最近ではさっぱりである。

色々な思惑があつて新しい考えなどいらないと跳ね除けようと、新しく入ってきた医学のおかげで孫の姿を無事に見る事が出来たなら、一切合切のしがらみを捨てて考え

を改めるのがおじいちゃんおばあちゃんというもの。

こうなると裏で暗躍しようとしていた鮮卑も大人しくならざるをえない。

鮮卑は広大な土地を持つが、匈奴の地よりも北にあるので時期の調整や食料事情が匈奴より難しい面がある。

いざ立ち上がるとなると必勝の形を成してからでないとき大きく動けないのだ。なので鮮卑は急に反応が悪くなった老王達の意図の解明の為に奔走するだろう。

老王にはのらりくらりと鮮卑の追求を躲してもらい、その上で交易で益を上げて欲しいと頼んである。

交易で互いの国力が上がっている間は、そこまで厳しい追求はされないだろう。それで大体五年は稼げると思う。

五年稼げれば赤壁の戦いを終え、天の御遣い陣営が漢をまとめている筈だ。そこで互いに手を取り合つて困難に打ち勝つて欲しい。

皆の尽力があり、匈奴は変わった。

馬と共に草原を駆け、恐れなく戦いに興じ、家族の絆を尊ぶ。そんな根源的な部分は変わらず、彼らは彼らが望む方向へ飛躍した。

俺は良い踏み台になれたと思う。

もう俺がいなくても匈奴は自身で最良を選び、決断していくだろう。

華琳からもそろそろ漢での趨勢が決するから帰って来いと言われている。

別れるには良いタイミングだろう。

単于の家のお隣、我が家にて、何時も通り朝飯をたかりに来た二人の娘つこに告げる。

「という訳で、明日漢に帰るわ」

「いきなり過ぎるっ?!」

「白帰つちまうのか?!」

「もう俺がいなくても匈奴は十分やっていけるだろうし、漢が無くなったに等しい今、俺の役職も意味消失しただろうし、俺の帰りを待つ人が向こうにいる。

帰る理由には充分過ぎるだろう?」

「いやまあそれはそうだけだよお、オレ達はまだアンタに何も返せてないんだよ」

「俺の望みは大陸の安寧だ。漢と匈奴が共存共栄の道を歩んでくれるのが一番の報いになる」

「そーゆーデカイ話はまたで良いんだよ、今はとにかく白個人に何か返したいんだって。つーか分かってはぐらかしてんだろ」

「まあ、面と向かって礼とか言われると恥ずかしいというか……」

「改めると照れるけどよ、別れるなら殊更必須だろうが。ちよつと待つてろ、御礼の品を匈奴中からかき集めてやるから」

「やめてくれ、出来れば別れは単于と於夫羅と呼厨泉にしか知らせたくないんだつて」

「バツカお前、そんな不義理通したらオレたち一族は匈奴総出での袋叩きにあうつての」
「白さんの気性は分かかってるけど、こればかりはね。けど收拾がつかなくなりそうだから、ちよつとだけ穩便に出来るよ、各部族二名まで、御礼の品は一個だけとか。じゃないと送別会場が人と物で埋まるだろうし」

「だな。じゃあ呼厨泉、各所の連絡とか会場での指揮とか頼むわ。オレは匈奴中走り回つて品を探してくる」

「任せてよ、ついでに家の中引つ繰り返してあたかも品物探しとく。そつちは頼むよ姉貴」

「おうともさ！ 恥にならないものを見つけてくるさ！」

そうして二人は脱兎のごとく駆け出していった。

ぼつーんと残された俺はどうしようと暫し悩み、しばらくして静々と帰り支度を始めるのだった。

その夜、匈奴の土地はざわめいていた。

単于の部落には百余りの部族からそれぞれ二名ずつ、総勢二百名が集まって宴会を開いていた。

何時もなら飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎなのだが、今日は皆静かに酒を楽しんでいる。

何の変哲もない大人の酒、だが何とも心地が悪い。

とはいええそれを指摘して雰囲気壊すのは違う。俺も黙って俺が作った料理と俺が作った酒で相伴を……あれ、俺のお別れ会なのに、あれ……。

俺の作る料理は最後だからと思いつく限りの料理を昼過ぎから晩まで山盛りで山程作らされたのだ。

ちよつとわびしい気持ちになりつつちびちびと酒を舐めていると、二人が傍に寄ってきた。

確か農耕を主体に教えた部族の長と奥さんだ。

色々と礼を言われ、最後に差し出されたのは立派な大学芋だった。

それは一つにまとまった複数の成果だった。

彼らは一番根気のいる仕事を任せてしまった人達だ。寒冷地でも育つ作物を左慈に届けてもらい、届いた作物や肥料を使ってゼロから農業を開始した。

さつまいもという作り易い作物ではあったが、寒冷地であり、一切の手入れをしてい

なかつた匈奴の地で丸々としたさつまいもを作るのはそれなりの試行錯誤を要した。

知識にない輪作や肥料作りを嫌な顔ひとつせず実践してくれて、ようやくさつまいもの安定栽培に成功。

ついで甜菜の作成に取り掛かった。こちらは寒い土地に強く、短期間で収穫できる作物だったので比較的安産だった。乾燥対策には多少手こずらされたが、それだけだ。

さつまいもと砂糖。彼らに教え、託した結果が今日の前にある。その苦勞の結晶を見て不覚にも涙が出そうになってしまった。

けれど涙での別れはしたくない。俺は二人の手を握り、よくぞやってのけたと健闘を称える。

そして大学芋を受け取り、二人と一緒にひとくち食べ、甘さに笑顔が自然とこぼれる。互いに笑顔になった所で別れを告げる。彼らは名残惜しそうにしつつ、礼を交わして

席に戻っていった。

次は医学を教えた部族だった。

えっ、もしかしてこれ全員分やるの？

やりました。

一組五分ほどかかって、都合五百分かかった。

最後の一組はもう夜が明けてたよ……。

まあしかしこれで終わりかと思うと感慨深い。

少し余韻に浸っていると、於夫羅が立ち上がり、ゆつくりと歌い出した。

それは歌詞のない歌だった。

「あ」や「お」という音に自分の感情を込め、ただひたすらに声を上げる。

情緒的で、活発的で、寂寥的な、千変万化の歌だった。

呼厨泉が立ち上がり、歌い出す。

感情を込めただけの好き勝手に歌う歌だ、そこにハーモニーなどは無い。

だが訴えかけてくる感情は重なり合って響いてくる。

そして一人また一人と立ち上がり、音が複雑さや煩雑さを増す。

だが俺の心には彼らの感情が一つ一つ伝わってくる。

場にいる全員が立ち上がり歌っている、俺だけが座って彼らの感情を受け止めてい
る。

しばらくすると外から声が響いてきた。

徐々に音が重なって響いてくる。

ああ、分かる。

匈奴中の人間が俺の為に歌ってくれている。

彼らと過ごした記憶と感情が溢れてくる。知らず涙が溢れていた。

俺の三年間は報われ、俺は四百年前の罪をしっかりと受け止める事が出来たのだつた。

三十分程で歌が終わり、宴は解散となった。

その余韻に浸っていると於夫羅と呼厨泉の二人がやってきた。

「オレ達の感謝、受け取ってもらえたか？」

「これ以上ないほどに」

「あたい達の悲しみ、受け取ってもらえた？」

「これ以上ないほどに」

「なら良かったぜ。改めて言葉にすると恥ずかしいが、言わずに後悔したくねえし言つとく。」

オレらは白を忘れない。オレらは白の家族だ。だから何時でも帰つて来い、無茶も言つて来い。オレらはそれに全力で応える」

「ああ、分かったよ」

「それじゃあ白さん、どうする？ 夜通しだったし、一旦休んでから出る？」

「いや、名残惜しくなるから今出る」

「白さんならそう言うよね、それじゃああたい達からのお礼を受け取ってって」

「他の奴らには金品渡すより成果を見せた方が白が喜ぶと言つてそうさせたけど、オレらは単于としてのメンツがあるから物品になる。遠慮せずに受け取れよ、じやなきやオレらが困る」

「そこまで言われたら受け取らざるをえないな」

「おつし、それじゃあまずは匈奴の誇り、馬からだな」

そうして連れて来られたのは年若い、しかし風格と気品を漂わせる偉丈夫のような白馬だった。

「白なら一々コイツについて説明しなくても分かるだろ、オレらが差し出せる最上の馬だ」

白馬はばかりばかりとこちらにやってきて俺の匂いを嗅いだ。

すると何かに納得したように視線をやり、二歩ほど下がって俺と対面する。

自分の前に立つ資格はある、後は力を見せろと言わんばかりの目をしている。……気がする。

能力に見合うほど気位が高いのだろう。

俺は遠い昔、灯華様から教わった馬を御する方法を実践する。

鬮気を解放し、馬が怯える前に一歩踏み出し、頭に触る。

「よろしく、俺の馬」

そう気を込めて首元を撫でてやる。

すると白馬は身体をビクリと震わせ、ゆっくりと傳いてくれた。

俺は改めて頭やたてがみを撫で付け、可愛がる。

心地よい気を感じてか、白馬がヒヒンと可愛い声を上げた。

「驚いたもんだぜ。馬に關しては自分の出る幕はないと馬にはあんまり触れてなかっただろ？　なんでそんな上手くやってのけるかね？」

「昔取った杵柄かな。コイツに名前は？」

「んなもん乗り手が勝手につけるに決まってるじゃねえか。ああ、一応言っておくと女の子だぞ」

「だったら雄々しい名前は合わんかな、んー真っ白いし、吹雪にするか」

お前の名前は吹雪だぞーと言いなながら撫でる。すると分かったわ！　と言うように吹雪がヒヒンと鳴いた。

「吹雪？　また怖い名前を付けるな。」

取り敢えず吹雪が匈奴の代表たる単于からの贈り物になる。次は呼厨泉」

「あいよ、あたい達家族からの贈り物はばつちやが大事にしてた絵の描かれた銅板だよ。綺麗な絵だから向こうで高く売れると思う」

「いや、友好の証を売りはしないけど……ってこれ」

「勿論高く売れるつてのは冗談だから……って、白さんどしたの?」

その品を見間違うはずもない。

四百年前に刻み込んだ盧縮さんの姿がそこにあつた。

これまた数奇な巡り合わせだ。灯華様を殺したと憎んでいた盧縮さんの姿絵を、まさか匈奴の長一族から手渡されるとは。

「有難う、すつごい嬉しいよ」

「……そんなに喜ばれるとは思わなかつた。それさ、あたいに託す最後の最後まで、ばつちやが大事に握り締めてたもんでさ。あたい達家族の一番大切なものなんだ。

けど見た目も古ぼけてて価値が有るのかも分からない品だから、白さんがつかりすると思つてた。だから大事そうに受け取つてもらえてすつげー嬉しい」

「そんな大事なモノを受け取つて良いのか?」

「ああ、それを見た瞬間にビビッときてさ。良いのかとも一瞬迷つたんだけど、なんかばつちやが良いよつて笑つた気がしたから、きつと大丈夫!」

「そつか、なら受け取らせてもらう。大事にするよ」

「次はオレだな。匈奴の代表として、オレ達家族として渡すモンは渡した。だからオレ個人として贈り物を渡す。」

という訳で、オレの名付け親になる権利をやるぜ」

「は？」

俺と呼厨泉の声が重なった。

58. 名付け

「だから、オレに真名つて奴を付けてくれつてんだ」

それが何故贈り物になるんだろう？

俺が首を傾げていると、呼厨泉が厳しい顔で於夫羅に詰め寄る。

「名付けつていうのは家の最上位者からもらうもんだ。単子の長子が家族以外から名を貰う意味、理解してんのか？ 黙つとけばバレないとかだったら姉貴でも承知しないぜ？」

「理はちゃんと通しているさ。白とオレ達の繋がりには深くなつてると思つてる。けど今は白に対する恩義の方が大分勝つちまつて均衡が全然取れちやいない。

だから信頼を形で返さなきゃ面目立たないだろ？ なら何で返す？

信に金で返すのは失礼つてもんだし、そもそも白も望んじやいねえ。

自分の子を預けたりなんだからすれば信頼の証にもなるんだろが、オレもオマエも子が居ない。

だつたら渡せる信頼の証なんぞ自分の身しかねえだろ。

オマエが単子を継ぐのは決まつてる、だから自由の身のオレが差し出されてやろうつ

て話だ」

「……それも白さんが望んでる訳じゃない」

「けど」

於夫羅が短剣を取り、自分の首に当てる。

「なあ白、オレの首か名付けの権利、どっちが欲しいよ？」

「いきなりの展開でついていけない……」

「ああもう！ 白さん、こうなったらもう姉貴の覚悟を受け取ってもらうしか無い。姉貴が宣言し、単手の後継たるあたいが聞いちゃった以上、姉貴の命は白さんのモンだ。姉貴はもう勝手に結婚も出来ねえし子も残せない。断ったら本当に姉貴は自死しちゃう、それだけは勘弁してやって欲しい」

「……受け取らざるを得ない状況を作って迫るって、これ単なる脅しだぞ？」

そう言っても、彼女はとても穏やかに笑うのみだ。

「あーもう、その表情をした人間には昔から勝てないんだよなあ！ 分かったよ、於夫羅の覚悟は受け取るから、剣を仕舞ってくれ」

「へへっ、白は本当にお人好しだぜ」

「それじゃあえつと、理を知る、自由、遊牧民、友好の証、勇敢。こうなると理とゆうの字は使いたいな。」

ということでは読みは決まったな、ゆうり、後はゆうりに何の字を付けるか……。

色々な意味が有る、道理が有るって事で、有理にしよう」

「有理、ね。有り難く受け取らせてもらうぜ！」

「あーあ、姉貴ばっかり美味しい所持って行くんだからホント嫌になるよ。理を弁えてるからより面倒なんだよなあ。

単于の後継ぎの時もさっさと断髪しちまってあたいに継がせる意思表示しちまうし
さー」

ぶー垂れていた呼厨泉だったが、そうだつ、と言つてこちらに向き直る。

「ねえ白さん、あたいが単于の座を誰かに渡したら、そんな時はあたいにも名前頂戴ね！」
「分かった、良い名を考えておくよ」

そうして俺は匈奴全員からのお礼を貰う事が叶うのだった。

吹雪に荷を積み、旅装に着替える。

荷は来た時とさほど差はない。多少増えてはいるが重曹などの生活必需品が数点増えただけだ。

旅装も万能白装束に裁縫してもらった上衣を上から羽織っただけである。

だが三年間にもらった思い出と感謝の念は途方も無く、持つて帰るのは少しだけ涙腺

が難儀する。

ともかく用意も済んだ、そろそろ漢に、陳留に戻ろう。

「それじゃあ二人共、しばしの別れだ」

「白さん、本当に色々とお難う。姉貴も言つてたけど、白さんへの感謝は匈奴の全ての民が忘れない。」

あたいは単于を継ぐから漢に直接出向く事は早々出来ないけど、いつかきつと会いに行く。後会いに来てくれるととても楽だし嬉しいよ！」

呼厨泉のそんな冗談とも本気とも取れない一言多いセリフもしばらく聞けないとなると、妙に物寂しく感じる。

「こつちの成果を纏め終わつて、漢が落ち着いたらオレが友好の架け橋として出向く。会うのはその時になるか」

匈奴と関わるきつかけとなり、豪放磊落な性格と直感的に理を悟る傑物。

彼女との会話はちぐはぐだが真理を突いたりして飽きる事は無かった。

「また二人と会話できる日を心から待ち望んでいるよ。それじゃあな」

「ああ、また会える日を待つてるぜ！」

「またね、白さん！」

俺は吹雪の首を撫で、行こうと言う。

その合図を受けた吹雪は疾風のごとく駆け出した。

「あー行っちゃったなあ」

「だなー。あーやべ、涙出そう」

「泣いちゃえば？ 今は誰も居ないし」

「いや、泣くのは白に会ってからにする。感動の再会って奴だな」

「そっか。あーでも残念だなあ、白さんが残ってくれたら一番だったけど、無理なのは知ってたし。」

「けど誰かに食いついてくれたらちよくちよくこっちに来てくれただろうにさ」

「ああ、匈奴中から選りすぐりの男達を集めて白に教えを請わせたのはそういう事か」

「こそ、表向きあたいの婿探しという理由もちやんとあつたけど、白さんが誰かに食いつかないかなーって下心もあつた。皆もあたい以上に白さん狙いだつたのは衝撃的かつ自信喪失の極みだつたけど」

「ぶぶつ、だよなーあれほんと笑つたわ」

「あのね、笑い事じゃないんだよ？ 次期単于の婿探しは失敗、んで二次目的の白さん籠

絡も失敗で大損こいたんだから！」

「いや、笑い事さ。だって白、男だもん」

「は？」

「まあ傍から見てたら分からんよな。あれだけ綺麗だったら目も眩む」

「ちよいちよいちよいちよいちよいちよい、それ本当？ もし本当だったとして、何で言わない

の？ 馬鹿なの死ぬの？」

「出会った初っ端から気付いてたさ。んで何で教えないかって？」

恋敵を増やしてどうするよ？」

「がーっ！ こんな所で利を覚えやがって！ あたいの今までの苦労はなんだったんだああ！ というかあたいは男に負けたのかあああ！」

「まあまあ深呼吸深呼吸」

オレの奮闘のおかげで、単一一族の中から名付けをするまでに親睦を深めた人間が出たんだから、ここはむしろ喜ぶ所だろ」

「ぜえぜえ。すーうはーあ。

まあ、それだけは褒めたる部分だね。というか、じゃないとあたいが姉貴を殺してた」
「おお怖い怖い。」

白から聞いた話だと、五年以内に漢でのゴタゴタが片付くそうじゃないか。

そしたらガンガン攻勢かけてモノにしてくるから！ だから待つてろよ、白！」

「あーはいはい、期待してるよ。というか、モノにしてこないと殺すから」

「オマエさつきから怖いよ?! 黙ってたのは謝るからそろそろ勘弁してくれ！」

匈奴の地から旅立って二週間、俺は匈奴と陳留の中間地点である冀州の中程、趙の街に居た。

吹雪が本気で飛ばせばもう少し行けたかもしれないが、ここは匈奴と気候も地形も水食料も違う。

なのでゆっくりと環境に慣らすように来たのだが、何故だかもう順応してきている。早過ぎる気がするが、傑物と言えるコイツだからこそなのだろう。

とはいえ慣れない土地だから心細いのか、一時も離れたがらないのは困り者だ。

傑物とはいえ年若いという話だし、まだ寂しさと無縁ではいられないのだろうか。

一晩過ごした宿から出て吹雪と合流し、必要物資を買いながら次に向かう街についての情報を集める。何件か回っても盗賊出没や自然災害等の緊急情報は出てこなかった。ので、のんびり昼過ぎに出向こうと決める。

次は本でも見ようかと街を歩いていると、何やら奇妙な違和感を感じた。

少しその違和感を探ってみると、多くなってきた通行人の幾人かが異常にそわそわしているのに気付いた。

更に詳しく観察してみると、そわそわしているのは男がほとんどと分かる。

邪気は感じない……いや、少し邪念がある？　んーよう分からんな。皆笑顔な点から危機的狀況ではないと思うのだが……。

なんだろうか、この時期に何かお祭りでもやっていたか？　しかし全国行脚をしていた時にそんな話をこの辺りで聞いた覚えもない。男ばかりで、男の中でも三割程しかないという所が祭りの線を消していた。

観察では埒が明かないので、残りの物資を調達するついでに色々聞きこみを始める。

適当な店に入って買い物をしつつ、話を聞いていたら四軒目にてヒット。

店番をしていたおっちゃんが喜々として語りだしてくれた。

何でも今日の夜に三人組の歌姫による歌と踊りの披露、つまりライブがあるのだそうだ。そしてその三人組がいつ一時間前にこの街に着いたそう。

三人共見目麗しい、明るい歌が多くて上手い、踊りが派手で飽きない、皆が個性的、俺っちの推し面子は地和ちゃん、との情報も得た。

……まんまアイドルユニットだよ、そりゃ男ばかりそわそわしてる訳だわな。

まあしかしなんだ、このやり口は以前華琳や雪蓮の所で話に聞いた黄巾党旗揚げの様相を思い出す。

華琳の領地で黄巾党が蔓延する余地も下地も無いだろうが、一応注意して見に行くとしよう。

おつちゃんに聞いたライブ会場予定地につくと、舞台の基礎は既に出来上がっており、黄色い頭巾をした数名の女性が忙しそうに舞台周辺を動き回っていた。

そして舞台袖には大きな天幕が張られており、その周囲には黄色い布を腕章にした警備員がおり……って露骨すぎやしないか？

黄巾巻いて黄巾党のようなやり口って……残党なのか面白半分の模倣犯なのか分からんが、やり過ぎだろう。

真意を聞いて拿捕しよう、そう考えた俺は天幕に近付いていく。

すると数名の女性警備員がすぐに天幕周りを固めた、そこそこ統率の取れた動きに警戒度を上げながら問いかける。

「今回この場で歌と踊りを披露するのに許可は得ていますか？」

俺の問いかけに一人の女性警備員が進み出てきた。

他の警備員にない鋭さを持つ背の高い美人さんだ、彼女が隊長かまとめ役なのだろう。

「この街の長には了解を得ている。更に曹操様より指定された領内での活動許可は下りている。何か問題が？」

生真面目そうな隊長さんは端的に答える。

「では曹操様より許可証などが下賜されているはず。それを見せて頂きたい」
「何故そのような事をせねばならん？」

探るような視線を送ってくる彼女。

だが腹の探り合いをしたい訳じゃない、少し切り込むとしよう。

「もしその許可証が偽物ならば、貴方達を黄巾党残党として処理する」

俺の言葉に警備員達の表情が凍り、その内一人が武器に手を伸ばしかけた。

俺はすぐさま気を当てるその一人を昏倒させる。

何が起こったか分からないままざわめく警備員達に最後通牒を突きつける。

「私は謙信、三年前から曹操様と友好を結んでいる者だ。もし領内で曹操様に仇なす存在がいるならば、討伐して友を助けるのは当然の義務だと思っている。

もう一度言う。胸に疚しい物がなければ、許可証を出されよ」

「……すぐに用意する。しばし持たれよ」

そうして隊長さんが天幕の中に入っていった。

俺は気を緩め、気による戒めを解く。

「ふう、取りに行ってくれたという事は疚しい気持ちは無いという事か。

皆申し訳ない、無理を言ってしまった。昏倒させた子は武器に手を伸ばしてたから止めざるを得なかったが、後で謝ろう。誰か介抱してあげて欲しい」

そう笑顔で謝る。

皆がぼーつと見惚れたようになり、いえ、全然良いんですと小さく返してくれた。

勿論気を緩めたのはわざとである。天幕から武器を持った警備員や毒矢が飛び出してくる可能性は考慮している。敢えて油断していると見せかけて敵を釣り上げようとしたのだ。

しかしこのちよろい反応を見ると本当に警戒すべき者達ではないような気がしてきた。

って、俺の方が油断しかけているな、気をつけないと。

警備隊の一人が倒れた少女を連れて行くのを見守ったり、天幕の中からはぼそぼそ、ごそこそと声と音が漏れてくるのを聞きながらしばし待つ。

しばらくすると天幕に入っていった警備員が戻ってきて、俺の目の前に許可証を広げて見せてくれた。

俺に手渡さず、あくまで見せるに留めるのは俺への警戒を忘れていないからだろう。文章を読み、判を見る。そこには見慣れた筆跡と判が捺されていたが、一応懐から華琳の手紙を取り出し、それと見比べる。紛れも無く華琳が出した許可証だと分かった。俺に許可証を見せている警備員が俺の手の中にある手紙に気付き、そこに書かれた文字と判を見て驚愕の表情を見せた。

俺が本当の事を言っていて、自身の主と手紙をやり取りするような人物であると理解したようだ。

彼女は俺が敵じゃなかったと一先ず分かり、ほっと小さく吐息を漏らす。別の緊張にすぐに顔を顰めた。

「間違いなく曹操様の筆跡と印だ。どうやら私の早合点だったようだ。警務の邪魔をしてしまい申し訳ない」

俺は腰を九十度曲げて謝罪する。

すると生真面目そうな警備員の女性は慌てて、

「頭をお上げ下さい、我らを黄巾残党と見紛うのは仕方のない事です。それにその……」
彼女はそうして言い淀んだ。華琳と手紙を交わすような人物に謝られたとお偉方に知れたら、些か困った事態になりかねない。

「此度の非礼の詫びは必ず報いる。

知識、武芸、顔の広さには多少の自負がある、何か困った事があれば私に知らせをくれ。必ず力になろう。

そしてそれまでは胸に秘めておく、という事で宜しいか？」

「ご配慮感謝致します」

「それで厚かましい願いなのだが、事情を少し話しては貰えないだろうか？」

「それは……正直私の裁量では判断しかねます」

「そうか、済まない、無理を言った。貴君のような忠義に厚い者が曹操様の配下にいる事を嬉しく思う。」

曹操様の策略で働いているとは承知した。後は直接お会いした時に詳しく聞くとしてよう」

「はっ、申し訳ありません」

「先ほど言ったように、私は貴君の実直さを好ましく思っているのだ、どうか謝らないで欲しい。」

しかし残念だ、胸に秘めると言った手前、名を聞けないのだから」

「私のような者の名など……」

「そう謙遜するものでも無いと思うが。」

では私は行く。先ほど言った非礼の詫び、ちゃんと果たさせてくれ。

黄色い空と名乗ってくれば、謙信宛の手紙や言付けは領内で通るようしておく
そろそろ出ようとしたタイミングで、

「あのーそろそろ練習したいんだけど、もう大丈夫？ 仲良くできた？」

と少し間延びしたような声を発しながら、可愛らしい少女が天幕から顔だけを覗かせた。

真面目な隊長さんはそちらに振り向き、ため息をついた。

「ああもう、出てきてはいけないとあれ程言ったのに。」

ですがもう大丈夫です、互いに勘違いだったと和解出来ましたから」

隊長さんがそう言って安心させようとしたが、彼女は固まっている。

彼女はこちらを見た直後に表情が驚愕に染まり、はわわわーと唇を震わせ、固まってしまうた。

……なんだろう、そんな、やってしまったー！ と言わんばかりの表情を初対面でさ
れる覚えがないんだが。

顔見知りだったか？ だが顔を見た覚えは無い筈。いや、誰かに特徴が似ている気は
するが、完全に一致する人物はいない。彼女の親か、もしくは幼い日にでも会った事が
あるのだろうか。

もやもやした感覚と戦っていると、彼女は小さくひいやあーと零して顔を引つ込め

た。

「ちーちゃん！ れんほーちゃん！ お化粧！ お化粧しなきゃ！ 皆今すぐ！ じゃないと後悔しちゃうから！」

「ちよちよ、いきなりどうしたの姉さん?!」

「天和姉さんがここまで困惑してるの党解散以来？ ねえ、本当にどうしたって言うの？」

「い・い・か・ら！ 今流行りの自然系薄化粧で決めるのっ！」

あつ、まーちゃん！ その人引き止めておいてね、一生のお願いだから！」

「えっ、あ、はい」
どうやら帰る流れでは無くなってしまったようだ。こうなると格好良さ気に去ろうとしていたのが何とも恥ずかしい。

俺はまーちゃんと呼ばれた隊長さんと顔を見合わせ、気不味げな笑顔を向け合う事となった。

59. 歌姫三姉妹

待っていてくれと言われ、まーちゃんからも請われたので素直に待つ事に。

天幕内から姦しい声が聞こえてくるのをBGMに、まーちゃんと世情についてなど適当な情報交換をし始める。十分も話をしているとまーちゃんの聡明さに興が乗り始め、匈奴の話題にまーちゃんが食いつき始める。その勢いのまま五十分程して話が一段落着くと、まーちゃんと俺の間に、こいつ、出来る！ みたいな信頼関係が生まれていた。と、そんなこんなで一時間、ようやく天幕からアクションがあった。

「あの、入ってきて大丈夫です」

先ほどの少女の声を聞いてまーちゃんが先に動き出す。彼女は他の者に周囲の警戒を命令し、天幕に入ってしまった。そして改めてまーちゃんが顔を出し、入っても大丈夫です、と言われたので中に入る。

まーちゃんが手前にいて、奥に三人の美少女がいる。美少女と美女が目の前にいる心ときめく場面であるはずなのに、周りがごちゃごちゃとし過ぎていて感動が半減している。

机や椅子に化粧台、衣装ハンガーらしき物、舞台の小道具や装飾品等が多数詰め込ま

れており、外から見た天幕はそこその広さが合った筈なのだが、雑多な様子が中を狭く見せていた。

目の前にいる美少女三人と美女一人が霞んでしまうのだから、部屋の印象とは大事なんだなーと場違いな事を考えてしまった。

女性を前にして周囲を観察するなど失態以外の何者でもない。慌てて少女達に注意をやる、彼女達は俺の事を見ていた。嬉しき、悲しき、苦しき、懐かしき、万感の感情を表情、瞳、溢れる涙に込めて俺をただ見ていた。

その様子に俺とまーちゃんはぎよつとし、慌てる。

「お三方、どうされました?！」

「まーちゃん、急にごめんね。でも大丈夫だから。それでね、ちよつと天幕から離れてもらっても良いかな」

「それは、警護任務上出来かねます」

「まーさん、お願いします。これは私達姉妹にとつてとても大事な事なんです」

「だから外にいる皆も会話が聞き取れない程度に離れさせて、お願い」

そうして三姉妹とまーちゃんが睨み合う事数分、まーちゃんの方が折れた。

「……あーもう！ 分かりました！ ですが昼ご飯の時間までです。朝から何も食べてないですから、昼ご飯はしっかりと食べないと午後の練習と夜の公演に差し支えます。」

後、この天幕は道具搬入の為頻繁に出入りしなければいけませんから会話もし辛いでしょう。今新しく天幕を張ってきますので、しばらくお待ちを」

「ありがとまーちゃん！」

そうしてまーちゃんは天幕を出て行った。出て行ってしまった。

残された俺はどうしようかと頭を悩ませる。

彼女達の反応、はつきりとしれない心当たり、黄巾党関係者なのではという猜疑心、まーちゃんとの詮索しないという約束、見慣れぬ大掛かりな舞台装置。

気になる事が多すぎて完全に気が散ってしまっている。

過去を振り返り、ここまで混乱して流されっぱなしなのは何時以来だろうか。もしかして四百年前こちらにやってきたばかりの時以来ではなからうか？

ともかく、こういう時は下手に足掻くと泥沼に嵌まると相場は決まっているので、俺から積極的にアクションを起こすのは控える。会話も先を促す程度に留めて、主導権は全て彼女達に譲ろう。

彼女達は涙を拭き、アイコンタクトで意思疎通をし、そして一番年長だろう少女が話しました。

「あの、詳しくは天幕に移ってから話そうと思うんですけど、時間も多少掛かると思うの。まずは自己紹介させてもらっても良いですか？」

「ああ、なら私から先に済ませよう。

姓名を謙信、曹操様の命で北との交易を主導していた。

ここには馬を休ませる為に寄ったのだが、何やら街が騒がしいと違和感を感じたので調査をしていた」

名前、曹操軍所属、何用でこの街にいるのかを簡単に明言しておく。

「謙信さん、ですね。わたしは数え役満姉妹の長女、天和だよ……です。

曹操様からは歌と踊りで民を元気付けてあげると、出来れば兵隊さんを集める手伝いをしてと頼まれて、ます」

慣れないけど頑張って敬語を使っています！ という様子が何ともあざとい。うん、嫌いじゃない。

「ちいは次女の地和よ！ 姉妹の中では踊りと舞台演出担当！」

立ち上がり、ビシイと人指を突き付けて言ってきた。

元気な小悪魔ポジだろうか、けど切り替えができていないのか、ちよつと足が震えているのが可愛い。

「私は三女の人和。担当は雑務や交渉といった舞台外の全般。姉妹共々宜しく願います」

この子が一番冷静なのだろう、声の震えもなく普通にしているように思ったのだが、

微かに手が震えているようだ。

何が彼女達をここまで気負わせているのだろう。

「それでね、違くて、そうしまして」

「あー敬語は要らない。互いに曹操様から任務を受けてる立場のようだし、どちらが上という訳でもないだろう。公演前に疲れてしまっても困る、だから出来るだけ気楽に喋ろう」

「あつ、はい、ありがとうございますです」

「天和姉さん、混乱しすぎ」

「う、うん。それで聞きたい事なんだけどね、謙信さんって男の人、だよな？もし間違ってたらごめんなさい」

「おお、一目で見抜かれたのは初めてかな。わざと誤認させてる訳じゃないんだけど、案外皆気付かなくてな。」

しかしそれがどうかしたのか？」

「うん、すつごく大事なこと。やっぱり貴方はわたし達の運命の人だった！」

……あれ、似たような言葉を以前管輅から聞いた事があるような。

管輅には未来視過去視があり、しかも唐突な出会いだったから電波……もとい乙女発言が口から飛び出したのも已む無しと言えた。けれど彼女達からそう言われる謂れがな

い。これはもしや不思議ちゃんや電波の香り？

「天和姉さん、情報を端折り過ぎ。謙信さん困ってる」

「あ、うん、そだね。興奮しちゃって言葉が止まらなかった、てへっ」

「……あたしも聞きたい事があるの。謙信さんは三年ほど前に陳留にいた？」

「ちよ、ちよつとちーちゃん！その話はもうしないって！」

「ちー姉さん、それを聞いたからつてもう何も変わらない。それは後悔するだけの質問」

「駄目、これはけじめだもん。ねえ謙信さん、嘘偽りなく答えて」

「……三ヶ月ほど滞在していたよ。曹操様と街に出ていたりもしたから、多少目立っていたかな」

「そっか、ああ、あたしってほんと馬鹿。」

姉さん、れんほー、ごめん。あたしは二人になんて遠回りをさせたの……。

あの時天和姉さんの言う事を聞いていればっ、こんな事には！

黄巾の皆、大陸中の人達、本当にごめんなさい。あたしの馬鹿に巻き込んだりして

……本当にごめんなさい」

呻くように絞り出されたその言葉を聞いて、彼女達の正体が分かった。

彼女達を可哀想には思う。運命の流れに翻弄され、太平要術の書に操られ、周囲の人間に祭り上げられ、死にかけて。管輅や卑弥呼から裏を聞き、その救いようの無さを知

る俺だからこそ、純粋に同情が出来てしまう。

だが事情を話せない俺が今ここで何を言えるというのか。

結局俺は沈黙に徹する他なかった。

「ちーちゃん、それはもう話し合ったでしょ。」

わたし達三人が悪い、だから皆で大陸の人達を笑顔にするの。

巻き込んだじゃった人達の十倍二十倍の人を幸せにするの。

それで大陸中の人を笑顔にしたら、わたし達もきつと幸せになれるんだって。

わたし達なら出来るの。だから、もう泣かないで」

「て、天和姉さん……ごめん、すぐ、泣き止むから……」

「泣くのもだけど、ごめんももう終わり。謝罪や涙では人を笑顔にできないわ。私はい

つも元気で輝くような笑顔を振りまくちー姉さんが大好きよ」

「れんほー……うん、ありがと！ がんがん頑張つてがんがん皆で幸せになろうね！」

三人が涙を流し、抱き合つて互いを救い合っている様子を涙が出そうになる。

でもなんというか、蚊帳の外感が半端ないなあ。

しばらくその様子を眺めていると、外からまーちゃんの声が聞こえてきた。

「天幕の設営が終わりしました、移動して下さい。後一時間ほどで昼時になりますので、頃合いになりましたら声をかけます」

「うん、ありがと！ まーちゃん！」

そして四人で別の天幕に移動する。

机と四つの椅子が置かれた簡素な室内だった。

「さつきはごめんさい、あまり気にしないでくれると嬉しいな」

「ああ、君達が言うのならそうしよう」

「ありがと、謙信さんはとても優しいね。さつきも色々と気付いたんだらうけど、何も言わずに聞いててくれた」

「言える事が無かっただけだよ」

「んーけどね、わたし達に気付いて反応を変えなかつただけで、大分救われたの。だからありがと」

天和はそう言つて弾けるような笑顔をくれた。

それは何かが満たされるような素敵な笑顔だった。

「それでね、わたし達の話を聞いて欲しいの。良いかな？」

「ここまで来たら否はないさ」

「それじゃあ最初から話すね」

それから彼女達の長い自分語りが始まった。

彼女達は漢中で生まれた。

漢中といえは医者 of 街と言われる医学の最先端を突き進む場所である。

現在では様々な流派、派閥などに別れているが、どの流れにも四百年前にいた医聖の教えが根本にあるのだそうだ。

その中であつて、彼女達の生まれた家は特殊だった。

医聖が知見を広げる為に収集していたと言われる呪術等の知識を管理する家柄だった。

医者 of 街には似つかわしくないが、それも医聖の残した知識であり、四百年受け継がれてきた歴史もあり、公然の秘密のような形で家は存続していた。

だが近年医学進歩の停滞に陥り、彼女達は排斥されてしまった。

医学に呪術は必要ないから、置いておく余裕が無いから、停滞は彼女らのせいなのでは。

そんな理由で彼女の一家は離散させられた。

「あの街にいる必要なんて何処にも無かつたし、呪術師としても、医者としてもやっていくる知識も腕もあつたし、私達は喜んで漢中を出たわ」

人和は冷静にそう言った。

「父さん母さんは知識を深める為に異国に渡ると言つてたわ。西か南、占術で適当に決めて行つちやつた」

地和は面白そうに言つた。

「勿論わたし達も誘われたよ？　けど姉妹三人で話し合つて、わたし達は残る事にしたの。」

わたし達には小さい頃からの共通の夢があつて、それを追いかける未来を選んだの。

したらお父さんもお母さんも残る事に反対しなくて、皆夢を追いかける道を選んだね、やっぱりわたし達は家族だね。つてむしろ笑つて賛成してくれたんだ」

天和は笑顔でそう言つた。

「末っ子の私も十四になつていたし、祝言とか呪いが必要とする遠方に連れて行かれたりもしてて、旅慣れてたつていう理由が前提にあつたからだけだね」

そして彼女達は親と別れて旅に出る決意をした。

「物心つく前から夢に出てきた、とても大事な人に会う為に」

不思議な事に三姉妹は同じ夢を見る事が多くあつたという。

自分ではなく、今ではない。そんな昔の誰かとなつている夢。

その誰かは医者であり教師だつた。見る光景は大抵が医者として人を癒やしていたり、医学を教えていたり、研究をしていたりであつた。

だが時たま二人旅をしている光景を見た。

それはそれは幸せな時間だったという。驚く事に夢で残るのは光景だけでなく、その誰かが抱いていた感情もまた強く残っていたのだ。

人を癒やして笑顔をもたらした時、教えた者が大成した時、研究が進捗した時、どれも喜ばしい思いが残っていた。

だが誰かが誰かと過ごす時間はその喜びの比ではなく、胸を焦がすような強い強い歓感情があつた。

だから彼女達は何時しか共通の夢を持っていた。

夢の人が恋焦がれていた、あの人のような運命の人を自分達も見つけて、夢ではない現実の恋をするのだと。

「それから半年ぐらいいかな、旅医者者の真似事をしながら宛てもなく漢を巡つてたの。

そしたら段々と人がついて回るようになって……旅医者者の真似事も出来なくなつちやつたんだ」

「姉さん達は肉親の欲目を抜いても、とても魅力的。しかも医者者の街で必修とされていた医学を学んでいて、夢のおかげで医者としても教育者としても腕が良いとなれば、評判にならない筈無いの。

何処の街に行つても無理やり引き止められたり、前の街にいた筈の人がわざと傷を

負ってやってきたり、面倒ばかりが多くなって仕事にならなくなった」

「ちいと天和姉さんだけじゃなくて、れんほーもとっても可愛いから仕方なかったの！」

それでね、どうしよーかなーって悩むあたし達だったんだけど、ちい閃いちやったの。だったらこの人気を逆手に取って、演者にでもならない？ って。

付いて回る人達の有効活用、じゃなくて、愛情にも応えられるし、もつともつと目立れば運命の人がちい達を見つけてやって来てくれるかもって！」

「私達はちー姉さんの発案に乗ったわ、正直もうそれぐらいしか道が無かったし。」

幸い私達は演者としてやっていける土台があった。歌と踊りは祈祷に必須で、人の精神に関する造詣は人一倍深かったから。

何をどうすればいいのかはある程度練習すれば簡単に掴めた」

それから一年程漢を巡り、ある程度自分達の名前が売れてきたと実感が生まれてきた矢先、事件が起こった。

陳留で太平要術の書に出会ってしまったのだ。

「そこにはちい達の望むもつともつと自分達を目立たせる術がいっぱい載ってたの。」

あたしはそれを試さずにはいられなかった。呪術と人の精神に人一倍詳しいあたしが魅せられるなんて、本当に笑えない」

「あれは自身の望む物を見せても、本当に必要な物を見せない呪いの書だったの」

そして彼女達は書に魅せられるまま動き、黄巾の乱へと発展していった。

黄巾が盗賊行為をしていると、誰かの悪意によつて遅れに遅れた情報が彼女達の耳に届いた。その時になつてようやく目を覚ましたが、事態は既に手の施しようがない所まで来ていた。

彼女達は訴える事しか出来なかつた。平和な世にしようと大声で訴え、歌にもした。けれど全ては曲解されてしまう。

結局全てが終わるまで、彼女達は踊らされ続けた。

けれど救いの手があつた。

華琳が彼女達に手を伸ばしたのだ。

生きて罪を贖えと。

それは華琳の策略だつたんだろう。彼女達のカリスマ性は捨てるには惜しすぎる。自分ならば彼女達を上手く操り、力にできると。

彼女達はそれを知つた上で手を取つた、自分達が貶めた人達を救いたい一心で。

「だから黄色い布を巻いて行動してるんだ。

盗賊行為をしていた人はもう一度甘い汁が吸えると思つてやつてくるから、まーちゃんに捕まえてもらうの。

純粹に歌を聞いてくれてた人は盛り上げて、元黄巾で更生してる人はわたし達が生き

てると知ると喜んでくれるか恨んでくれるかして、その思いを糧にもう一度生きようって思ってくれるの」

「そんな理由があるから、曹操様には出来るだけ兵として働くよう言ってくれって頼まれてるけど、進んでは出来ないのよね。

まーちゃんに言われた時だけ言ってるって感じ」

それから精力的に方々を巡りに巡った。

紆余曲折ありつつ、なんだかんだと上手く行つてこの街にやつて来て、俺と出会った。そう彼女達の自分語りは締め括られた。

60. 最良の日

「……何でそれを俺に話そうと思ったんだ？」

「貴方が運命の人だから。絶対に、間違ひなく、貴方だから」

「私達は同じ夢を見て、貴方を知っている。三人揃って見間違ひえる筈無い」

「しかしその夢は昔の夢だったんだろ？」

「ええ、姉妹で色々と調べてみたけど、私達が見ていたのは医聖張術様の視点だったので、って結論が出たわ」

話を聞いて、もしやとは思っていた。

「四百年前の偉人が視点者だったのか。ふむ、だとしてだ。俺は四百年前の偉人が見えていた運命の人に非常に似た人物である、ってだけだろう。」

見かけだけで中身も知らない人間を安易に運命の人だ、なんて言うのは如何なものかと思う。

曹操様に仕えている同士に言うのも変な話だけど、俺が極悪人だったらどうする？」「謙信さんには申し訳ないんだけどさ、もうそういう話じゃないんだ。」

ちい達は貴方を運命の人と決めたの。あかし達の魂が、恋心が叫んでるの。絶対絶対

貴方しかいないって!」

「だから全部話したんだよ。

わたし達を知ってもらう為、同情を買う為、なりふり構わず貴方に好かれようとして
いるの」

「天和姉さん! 若干目が病んじやつてるから!」

えっと、大体は天和姉さんの言う通りなんだけど、貴方はそこまで気にしないで。頭
のおかしい三人娘から好意を寄せられてるって頭の片隅に置くだけで良い。

今は恋よりも優先しなきゃいけないものがあるから」

「そうだよね、お姉ちゃんちよつとだけ勢いが止められなかつたや。

えっと、とにかく! 大陸中の人を笑顔にしたら、絶対わたし達に恋してもらいます。

絶対長くは待たせないから、絶対一人にさせないから、期待しててね、白様」

『来世まで待たせない、貴方に追いついて見せるから、一人にさせないから、待つて下
さい』

とても懐かしい、とてもとても大事な人の言葉と姿が重なった。

「あつ、白様って夢の人の真名で、つい出ちやつて。本当にごめんなさい、重ね過ぎだよ
ね。

……謙信さん?」

ついと涙が頬を伝ったのが分かる。

「ああ、そうだ」

不老不死へ到るなど不可能だ。昔そうやって断じておきながらも、しかし心の何処かで信じていた。

来世まで待った、高みにいて待った、だけでもそれらは叶わなかった。

けれど一番大事な約束、俺を一人にさせないという約束を彼女は、彼女達はここで叶えてくれた。

「信じて待っていた甲斐があったよ、喜和」

大陸中の人間を笑顔にするという途方も無く壮大な夢物語であるが、決して不可能な物語ではない。

四百年の時を超えて不可能を可能にした彼女達だ、今度の約束もきつとやってのける。

「今度も信じて待っている、天和、地和、人和」

だから満面の笑みで、軽やかに約束するのだ。

しかし彼女達はその言葉を聞いて、三姉妹で視線を交わし、そして満面の笑顔を見せて頷いた。

「「「やっぱり、乙女の勘が外れる訳ないよねっ」」」

手に手を取り合い、彼女達は立ち上がってきやつきやと喜びを共感していた。気分が上向いたようで何よりだ。

「姉さんの天然に生まれて初めて感謝するわ！　ちいだったら切り出せなかったもん！」

「今日は間違いなく人生最良の日。夢見てた事が現実だったと知れて、夢見てた事が今叶った」

「なんかさ、今だったら空だって飛べちゃいそうじゃない？」

「だよねだよね！　今のわたし達はなんだって出来るよ！」

「今日の公演は間違いなく最高の舞台になるわ、今までにない確信がある」

俺はしばらく彼女達の微笑ましい歓喜を眺めるのだった。

「そろそろお昼ご飯なので、切り上げてもらっても構いませんか？」

しばらくするとまーちゃんの声が外から掛かった。

「えー、まだ話し足りない」

「ぶーぶー、まーちゃん空気読めー」

「ちよつと、後ちよつとだけ……」

「人とさんまでそう言われますか……でもそろそろ食べておかないと練習に響きます。

出遅れると飯店は満員、出前も忙しくて取れず、という事態も有り得るのでお願いします」

「それは困る！　白様、じゃなくて白に最高の舞台を見てもらいたい！」

真名はそのまま呼んでもらう事になったのだが、様付けはやめてもらった。

彼女達に白様と言われると周囲の人間も戸惑うだろうし、何より彼女達の性格的に合わないと思つたのだ。

「善は急げ、店が埋まってしまふ前に行きましょう。姉さん達、すぐ用意して」

「やつぱり何処も空いてない……」

この街はそこそこに大きく、交易の中継地点となる場所なので外からの人間も多い。そういつた街の飯店は昼時でなくても混み合っている場合が多く、昼時ともなれば一時間以上並ぶのは仕方ないし、ここまで出遅れると仕出し屋も当てに出来ない。

「並ぶとしたらかなり時間が食われるな。これだったら俺が作つた方が良いかな」

「えっ、白って料理作れるの？」

「そりゃ旅をしてきた歴だけは長いからな、大勢へ振る舞うような料理も多少慣れてるし、任せてくれ」

「ありがたい申し出です。混雑していると護衛もしづらいので是非にお願い致します。勿論材料費等は全て負担しますので」

まーちゃんにも頼まれたので、劇団二十名分の料理を作る事になった。

皆作業しながら交代で食べるらしいので、作るのは大量の具材入りおにぎりである。

具材は肉味噌や時雨煮、きんぴらや野菜味噌炒め、焼き魚のほぐし身等など種類はやらら作った。

「お、美味しい……」

「なにこれ、乙女の矜持的に笑えないんですけど」

「私達も多少旅慣れてて料理も結構作ってたんだけど……これは自信が粉碎される」

「ああ、美味しいですねえ。肉はいわんや、野菜や米にこれ程の旨味があるとは思っても寄りませんでした。」

むしろ店が満席であったのは僥倖と言えるのでは」

三姉妹は愕然と、しかしまーちゃんと他の二十人は恍惚と俺の料理を高評価してくれた。

洗い物等の片付けは護衛の人達がやってくれるらしい。

時間が空き、どうしようかと思っていると、リハーサルをしながらの企画会議に参加して欲しいと言われた。

「えーっ、せっかくなんだから本番大一番を見て欲しい!」

「そーよそーよ! ちい達最大の魅せ場をババーンと叩きつけてメツロメロするのが良いんでしよう!」

「最高の踊りを見せる為に白さんの意見を取り入れたいの。今のままだと大衆向けの演技しか出来ない。姉さん達はそれで満足しちゃうの?」

「うぐ、確かに白希望の演出なんかも入れてみたい……」

「それに一応模擬でも踊るけど、本番と練習は全然違うでしょう?」

「まああの一体感と躍動感の本番じゃないと味わえないかな」

他二人は大一番をまずもって見せたいようだったが、冷静な人和に説得され、納得したようだ。

異論がないなら意見を言うのも吝かではない。

俺が参加すると言うと、まーちゃんも付いてきた。ある程度俺を信用はしてくれているようだが、護衛は必要だしな。

「じゃあ見る側、踊る側の感覚を掴む為、早速一回踊ってみましょう」

「白が見るなら練習だからって気が抜けないねー」

「本番ほどとは行かなくても、魅力の片鱗ぐらいは見せてあげよーかな!」

土台だけ完成している舞台に三姉妹が立ち、歌と踊りを見せてくれた。

うーん、何というか、歌がPOP過ぎやしないか？

……もしかして俺のせいかな？

以前声や言葉が心に及ぼす影響について聞きに来た生徒がいた。そこで歌についても教えたのだ。

歌は抑揚、溜め、音程が如何に人の情動に訴えかけるのかが良く分かるので、声と言葉の教材としてうってつけだった。

記憶に残っていたクラシックと記憶に微かに残っていたJPOPっぽい曲調で適当に作詞作曲して歌ってみせると、その生徒はいたく歌というものを気に入った。

それからは常に小さく口遊み、オリジナル曲なども色々と作って身内で披露していたのを思い出す。

彼女が表に出て行った後の事は聞き及んでいないが、もしかしたらその流れが連続と繋がってここに来ているのかもしれない。

と考えて頭を振る。……んな訳無い無い。その程度で音楽文化がぶつ壊れるとかナイ。無いよね？

ともかく、歌については問題ない。

人が好む音程と曲調で、歌い上げる歌詞と声もとても良い。

正直歌だけでも人気を博したのではなからうかと思ってしまう程、彼女達の歌は素晴らしい。素晴らしかった。

「なんと言いますか、今までは耳障りの良い歌詞としか感じていませんでしたが、今は胸に訴えかけてくるような、魂を感じます」

まーちゃんが評価した通り、彼女達の歌には魂が込められている気がした。

「しかしそうなりますと……」

なんというか、踊りがとても固いのだ。

武芸の演武や新体操の演技みたいで動きは優雅なのだが、歌いながらだとテンポが合っていない事に目が行ってしまう。

「今までは動きの軽妙さや愛らしさが際立ち、見ていて飽きませんでした。

ですが何故でしょう、今までは気にならなかつた粗のようなものが見えてしまいますな」

恐らく歌が文句無しに成ったからこそ、踊りの粗が目立ってしまう。

これは踊りのレベルも上げないとお客さんも違和感を感じて楽しめなくなってしまうかもしれない。

何かがしっくりこないといった感じで首を傾げている三人娘に集合をかける。そこで踊りのレッスンを行う。

現在の踊りではなく、数千年後のエンターテインメントが飽和した上で発展したダンス。

情報過多な数千年後においても周囲を魅了する洗練された誘惑の美。五感全てに訴えかける扇情的な美しさを観客に魅せつけてやろう。

歌に合わせた踊りを彼女達はすぐに飲み込んでいった。

旅を続けて体幹も鍛え上げられている。

歌い続けてリズム感と感情表現も充分に培われている。

若いから新しい踊りを受け入れる柔軟さもある。

下地はバッチリで、これに才能が乗っかるのだから、彼女達が短時間で習得できないはずが無い。

「何か、すつごい事になっちゃった？」

「ちい手が震えちゃってる。これ、最高の舞台になる所じゃないよ」

「私達の最高じゃなくて、史上最高の物に成るかも知れないって、本能で分かっている感

じ

「謙信殿、貴方は何故かような知識まで持ち得ておられるのだ？」

まーちゃんと三姉妹の視線がこちらに向く。俺は苦笑いしながら彼女達に答えた。

「昔取った杵柄という奴さ。とある人を担ぎ上げる為に、今と似たような事をしていたんだよ」

日本での記憶はもう殆どが消えている。

だがPCで調べた内容とそれは別に必要だろう事は改めて書き出し、覚え直した。その部分の知識は未だにはつきりと残っている。

とはいえだ、テレビでやっていた歌と踊りなんてわざわざ書き出したのか？ と言え
ば否だ。

正直こちらで必要とも思えなかったので、書き出しはしなかった。

では何故覚えているのかというと、劉邦様の魅力強化の為にあらゆる手段を尽くして
いた際、未来の歌と踊りを彼女に仕込んでいたのだ。

演説に歌のような抑揚を取り入れてみたり、演武をより華々しく見せる為に余計な殺
陣演出を入れてみたり、美しい肉体を保つ為にヨガやエアロビを教えたり。

格好良く、可愛らしく、凛々しく、麗しく、雄々しく、綺羅びやかにと、とにかく人
に好かれる為の“魅せる美”について試行錯誤していた時期があった。

最強の敵である項籍殿に挑む為、そうした地道な支持基盤の増強が必要不可欠だったのだ。

どうでも良い知識だが、試行錯誤の結果はまとめられ、劉家の秘技として皇室にだけ伝わっているようだ。

「けど歌や踊りの必要な部分だけを抽出して試行錯誤していたから、実際に歌と踊りを表舞台で披露するのは初めての試みでもあるんだよ」

「そうなんだ、けど心配しなくて良いよ、これは絶対に流行るから。大陸全土が熱狂するって、天和分かつちゃうの」

「そこまで言われると教えた甲斐があつたつてもものだ。後は光の演出とか舞台装置にも手を付けたかったけど、急だし技術的に無理かな」

「光の演出ぐらいなら幾らでも出来るよ?」

「えっ、どうやってだ?」

「ちいの呪術でちよちよいのばっばよ?」

「……そっか、どんな事が出来るんだ?」

「七色ぐらいなら光作れるし、煙幕とか紙吹雪を高く舞わせたりとか、声を大きくしたりも呪術でやってるよ」

「それはどうやってやってるんだ?」

「呪術だよ？」

「そうじゃなくて、やり方というか……」

「ぐーっとやってぱーっとやる感じ。それ以上の説明はめんど……一族の秘伝だから！」

「……そつか、とにかくすごいんだな、地和は」

「えへへっ、でしよでしよ！」

「うんうん。……華琳、不条理がここにあるよ」

複雑な感情を飲み込み、演出や曲順等にも口を出していく。

いつの間にか彼女達から照れのようなものも消え、ライブに向けてのひたむきさだけになる。

踊ってる彼女達も素敵だが、こういう舞台裏での真剣な表情もとても魅力的で引き込まれる。

もしこれを狙っていたのなら、人和という少女は中々の策士だ。

そして夕暮れが間近に迫ってきた。

練習に使える時間は終了だ、徐々に人が集まり始めている。

とはいえ開始時間まであと一時間弱ある。

片手間に食べれるおにぎりなど作り、メンバーに振る舞う。

彼女達は適宜おにぎりを摘みつつ、最後の確認を済ませている。

三姉妹は食事の後なので動き回らせず、イメージトレーニングを行わせる。

三十分ほど暇なので舞台を支える二十人のお仕事を見に行く。

全員が旅、舞台それぞれで重要な役目を負っている。

十人は護衛が占めている。

彼女らは旅では護衛、舞台では警備を取り仕切っている。

そして華琳からの認可状を持っていて、その街の警備隊を何割か借り受ける事が出来る。

今は彼らに色々と指示を与えている。

五人が旅では大道具小道具の作成運搬、舞台では黒子をやっている。

李典隊の生え抜きであった彼女達は舞台のあらゆるギミックを作っているようだ。

今は最終確認の為舞台を見て回り、演目の確認、動き方の確認を行っている。

残りの五人は旅では医師、交渉役、料理人などを担当し、舞台ではバックコーラス兼奏者をやっている。

護衛と大道具組とは違い、彼女達は黄巾党で三姉妹を以前から知っている側近だそう

な。

今は琵琶らしき物、太鼓らしき物、笛らしき物の調整をしている。

皆が皆何時もより気合が入っているようで、まーちゃんが何時もこれぐらいなら良いんですが、と笑っていた。

しかしそう言うまーちゃんも何時もより声が大きく気が鋭いらしい。

うん、皆三姉妹のやる気と上達具合に感化されているようだ。

さて残り十分、皆の準備は既に完了している。

歴史に残る舞台がもうすぐ始まる。

6 1. 最高の舞台

ライブは盛況の内に終わった。めでたしめでたし。

と言って終わってしまうには惜しい舞台だったので、少しだけ触れようと思う。

ライブは全十曲構成だったのだが、その内ダンスと演出を新調したのは三曲が限度だった。

個々のランクを下げて全曲を一新するのは彼女達の矜持が許さなかったようで、特に評判の良いバラード、ラブソング、応援歌を完璧に磨き上げる選択をしたのだ。

とはいえ歌、踊り、アドリブ力がレッスン中かなりのレベルまで磨かれたので、その他七曲も以前とは比べ物にならない完成度に仕上がっている。

俺は素晴らしい曲を会場の最前列で聞き、また観客の声を背中で聞いていた。

七曲が終わった時点で皆の評価とテンションはとても高かった。

何時もより良くな？ やばくな？ と観客が乗りに乗っている中、一新した三曲が満を持して流れだした。

多分、ここで大陸の音楽史が変わった。

三曲の一曲目は家族を思う曲だった。

生まれて出会い、喧嘩もしながら共に暮らし、そして親と死に別れる。今度は自分が産んで出会い、子を育て上げ、子と死に別れる。それは喜怒哀楽の全てが詰まった幸せな歌であり、記憶だった。

彼女達の今生では子を育てる経験はなかったが、遠い昔、教え子を沢山育て上げ、死に別れていった長寿の女性の記憶があった。

それを形にした曲だったのだが、今ではそれが真実だったと知り、彼女達の中で重みが増していた。

この曲はその重みを如何にして伝えるか、その一点を重視してレッスンを行った。派手な踊りはなく、ちよつとした仕草、声の抑揚、表情、吐息で訴えかけ、彼女達の感情が誇張もなく寸分変わらず観客に伝わるよう苦心した。

結果、歌を聞いていた全ての人間が泣いていた。

過去を振り返りつて懐古し後悔し、未来を想起して悲しみと喜びに暮れる。

涙の割合は悲しみの方が多めなのは、今がそういう時代だからなのだろうな。

二曲目はラブソングの筈だったのだが、急遽応援歌に入れ替わった。

応援歌は単純だ。

今日頑張れ、明日頑張れ、自分のために頑張れ、隣の人の為に頑張れ。

自分を、家族を、村を、街を、州を、国を元気にするのは元気になった皆だ。

駄目でも挫けるな、明日があるし、助けてくれる人も私達もいる。だからとにかく前に進むんだ。

そんなひたすら前向きでおせっかいな曲。

ある意味戦争のプロパガンダに使えそうな曲であるが、裏に意図はなく、単純に自分を励ます為に作った曲であるらしい。

これはひたすらに元気よくがテーマ。飛び跳ね、走り回り、肩を組み、マイクを客に向けたたり、アドリブをがんがん入れたりとパフォーマンス力の強い出来に仕上がっている。

最初はバラードとの差についていけない感じではあったが、ワンコーラスが終わる前に彼女達の元気に引つ張られ、観客はノリノリになっていた。

マイクを向ければ続きを歌ったり、好きな子の名前を叫んだり、会場が一つになる感覚があった。

三曲目、トリの曲はラブソングになった。

これは片思いしている人向けのポップな曲だった。

前半は好きで好きで辛い、会いたくて震えちゃう、声が聞きたいと乙女の胸の内を語る。

後半はこのままじゃいけないから好きな人に好かれる努力をいっぱいして、そして一歩踏み出して想いを告げよう、絶対絶対幸せになるんだ！

男が聞けば男の立場で、女が聞けば女の立場で聞けるよく出来たアイドルソングだった。

歌い方や踊りのコンセプトとして、三人娘それぞれの個性を敢えて控えさせ、三人揃って可愛い、を押し出してみた。結果、男は三人娘の華やかさに当てられて何時も以上にもロメロになり、女は可愛いという本質を目の当たりにする事になる。

恋する乙女は可愛いんだ！　そうでしょ皆！　と訴えかけ、こういう仕草なんかは個性と関係なく可愛く映るんだよ皆！　と手本を見せるようなプロモーションは見事に嵌った。この演出で男性より反応の薄かった女性達がつつり三人娘の虜になった。

男に連れられて、または祭りの雰囲気にならされてやってきていた女性達が、軒並みキヤーキヤー盛り上がりつつ楽しんでるのが良く分かった。

……これは女性ファンを掴む為の曲に仕上げたのだが、何か俺の方ばかり見てない？　隣りと後ろにいる男達が自分達を見てるんじゃない？　とめっちゃくちゃそわそわして

るんだが……。

うん、まあ、気持ちは伝わったよ。

そうしてオオトリの曲が終わり、彼女達が終わりを告げようとした所で会場の全員が待ったを掛けた。

このまま終わるのは余りに惜しい、せめて最後に一曲聞きたいと声を上げた。
きつと漢始まつて以来であろうアンコールである。

彼女達はどうしようか？ と顔を見合わせ、頷いた。奏者に二言三言伝え、そして最初に行つた自己紹介ソングが流れ始めた。

最後の曲として最適の曲だった。

正直、最初の段階では乗り切れていない人間が結構いた。

三姉妹の歌を初めて聞く人は勿論、知つていても恥ずかしさから三人娘の名前を呼べなかつたりした人が多数いた。

しかし今では三人娘の名前を大声で呼べない人間はこの場に居ない。三人娘を呼びたい人間しかいなくなっている。

天和、地和、人和。三人娘の名前を全ての観客が声高々に叫ぶ。

彼女達も負けないう観客に応える。

とても熱いやり取りはまるで戦っているかのように昂ぶった。演者も観客全員も思っただろう、これは間違いない、史上最高のライブだったと。

こうして彼女達のライブは終わった。

何時もならば皆で撤収作業をして宿にでも泊まるらしいのだが、全力でやった疲労と余韻が抜けないようで、ガランと空いた大道具用の天幕でだらーっとライブについて話していた。

あれが良かったこれが良かったという感想から、次回からはこうしたいああしたいという要望まで話が広がっている。

そんな和気藹々とした話し声を隣に聞き、俺は料理の準備をし始めた。

俺だけはライブ中何もしないから、料理番を買って出たのだ。

昼に出した具材入りのおにぎりとおつまみの受けが良かったので、結構期待されている。

ふむ、話し合いが弾んでいるので結構本格的なものを作っても良いかも知れないな。

食材はファンからの貢物を使わせてもらう。

本来ならば貢物の類は受け取らないのだが、今回は拒否しても貢物を残して勝手に去って行かれてしまった。

返すに返せないので、金品の類は街の責任者に預けて別途華琳への献上品とし、献上できない食材関係は受け取る事にしたのだ。

今晚の食事として有り難く消費させてもらい、消費しきれなかった食材に関しては明日の朝の食事を炊き出し形式にして街に還元すると決めた。

一応使えるかどうか選別だけしたが、廃棄しなければいけないものは殆ど無かった。なので野菜お肉選り取り見取りである。

調理の準備が整ったので、何でも作れそうだし何か希望があれば言われた物を作るよーと話して要望を聞いて回る。

だが皆気を遣っているのか、何でも良いです、としか言わないので困った困った。

三人娘は、長女が「甘いのが良い！」次女が「お肉が食べたあい！」三女が「野菜かな」としか言わず、これもまた決め手に欠ける意見。

こうなりや満漢全席でも作ってやろうかなと思うが、今から作り始めると朝を回る。というか時間的に女性陣が喜びそうなのを数点山盛りで作る以外に選択肢がない。

何の面白みもなく、八宝菜や炒飯や唐揚げなんかの定番を作ろう。

出来上がった料理を天幕内に持って行く。

そわそわした様子だが皆料理に手を付けようとしなない。首を傾げていると天和が飲

み物を片手に立ち上がった。

ああ、音頭取りがあつたのか。そう納得していると天和がゆつくりと話しだした。

「えっと、何時もなら今日もお疲れ様！ の一言で終わりなんだけど、今日はちよつと語りたいの。」

料理が冷めないようあんまり長くしないから安心してね。

コホン。

今日はね、限界を感じていた演出に光明が見えたし、女性が見に来てくれる舞台の模索も出来たし、歌と踊りの本質とかが見えたりして、とつても有意義な日になった。

皆はわたし達の境遇とか夢とかを理解してくれてるよね。

今日学んだ事を糧にして前に進み続ければ、大陸中の人を笑顔にするって叶わない夢じゃない。わたしはそう実感したし、皆も同じように感じれたんじゃないかなって思うの。

きつと全部ここから始まる、良い方へ向かっていける。だから皆、改めて頑張ろうね！ それじゃあ乾杯！」

おおーつと皆が一斉に杯を空け、料理を食べだす。

美味しい美味しいと料理を頬張ってくれてとても嬉しい。

「れんほーちゃん、お姉ちゃん上手く言えた？」

「うん、完璧だったわ。白さんの好感度もきつと上がったよ」

「えへへ、だと嬉しいな。文章を考えてくれたれんほーちゃんの頑張り分、今度はお姉ちゃんが好感度上昇の支援をばっちりしてあげるからね」

すまん、俺の耳だとかこの距離だったらどんな小声でも聞き取れてしまうんだ。

ちよつと気まずいし、多くの人が話したげに三姉妹の周りに集まっているから、彼女達の元には後で行こう。

天幕内を見渡すと、一人隅で晩酌をしていたまーちゃんの姿があった。

「向かい良いかな？」

「おお謙信殿。三姉妹の方に行かずに宜しいので？」

「今は仲間達と色々と言ひ合っていて忙しそうなので、また後で伺おうと思っているよ」
「そうでしたか。では暫し謙信殿のお付き合いをさせて頂きましょうかな」

「ふふ、頼むよ」

俺謹製の秘蔵酒を取り出し、互いに酒を注ぎあい、杯を上げる。

「今日の出会いに」

「明るき将来に」

「乾杯」

そう言つて盃を空にする。

「かあーっ。これは凄まじき酒ですな」

「秘蔵の酒だから量は出せないが、少量でも料理を引き立てるだろう」

そう言つて二杯目を注ぐ。

「酒は薬、料理の友ですから、量は要りません。この杯だけで十分でありますよ」

「ふむ、やはり貴方はそういう酒の楽しみ方をするお人だったか。気が合う人を見つけ嬉しく思うよ。」

それで気の合う友人よ、もう少し砕けても良いと思うのだが、どうだろう?」

「ふふ、距離の縮め方も面白い人ですね。重畳です。本当に、今日は重畳な日でありました」

彼女は気を緩め、満足そうに言った。

その様子が気になつたので尋ねてみる。

「その心の裡、聞いても良いかな?」

「ふむ、熱い日、良き夜、旨い料理、最高の酒、麗しき華、胸の内を語るには最上の機会でしょうな。貴方は全てを知つておいでのようですから、お付き合い願えますか?」

「幾らでも」

では、と小さく呟き、まーちゃんは語りだした。

「私は真面目さと地道な作業が苦ではない性格を買われ、法の執行官をしていた時期がありました。責任重大ではありましたが、罪以上の罰を望まず、罪以下の罰を許さず、贖いを正しき手順で行う。法律という分かり易い基準があったので、それなりに働けていました。」

真面目しか取り柄のない私は仕事に邁進し、それなりの罪と罰を見て裁いてきました。そんな経緯を買われ、ある時曹操様から辞令が届きました」

チビリと酒を飲み、彼女は語る。

「そこには彼女達三人娘の罪の詳細と彼女達が望む罰の監視を行うようにと書かれておりました。」

辞令を拝領し、いざ彼女達に面会した時、貴方達の望む罰とはいかなるものかと私は聞きました。すると大陸中の人間を笑顔にする事が償いになると彼女達は臆面もなく言いました。

ええ、確かにそれぐらいして見せなければ彼女達の罪と罰の釣り合いは取れないでしょう。

ですが罪と罰を見つけてきた私は、彼女達の大言壮語は実現不可能であると判断しました。ただ大きな目標を掲げて罪の意識から逃げているのだと疑っていました」

しかし、と彼女は嬉しそうに笑った。

「ですが今日、その大言壮語が叶う可能性を見ました。

そうすると、ああ、彼女達は実現可能な贖罪を口にしていたのだと、そしてその巨大な山を登る苦行の道を彼女達は歩いているのだとようやく理解できました。

浅はかだったのは私で、現実を見ていたのは彼女達だったのです。

きつと彼女達はこのまま大陸中の人間を笑顔にし、いつか罪と罰の釣り合いを取るでしょう。

私はそれが嬉しくて堪らない」

一氣に盃を傾け、ぐいと酒を呷る。

「罪は刑を受けて終わりではなく、罰とは人の心にこそある。人の本質は善であり前である。

昔々に持っていた青臭い信念や信条が正しかったと証明する人間が、とうとう目の前に現れたのです。

今ではあの子達を侮っていた己の不明さを悔い恥じらう気持ちも多分にありながら、あの子達を誇らしくも思っているのです。本当、勝手な話ですがね」

顔を赤らめ、「酔って要らぬ事まで語りました。前言を排し、更に酔って忘れたく思います」と彼女は杯を空にし、そう締め括った。

俺は無言で杯に酒を注ぎ、己の杯を持ち上げた。

まーちゃんは新たに酒の注がれた杯を俺の杯と打ち合わせ、

「私に答えをくれた三姉妹のひたむきさ、ここに遣わせくださった曹操様の采配、謙信殿との運命の出会いに、乾杯」

再び今日という日を祝い合った。

「白おそーい！」

「真つ先にちい達の所に来るべきでしょ！ なにやってんのよ！」

「皆の事を気にして来なかったのは分かるけど、少し寂しかった」

「すまんね、まーちゃんとの会話が思いの外弾んだ」

「ぶー、まーちゃんを引き合いに出されたら何も言えないじゃん」

「そうなのか？」

「まーちゃんは恩人だしねー」

「遠征許可が降りてこの一年、一番の功労者は間違いないあの人だから」

「へえ、ちよつと聞かせてもらつていいか？」

「んーちよつと長くなるよ？」

「ホーン、と天和は喉の調子を整えた。

「黄巾党が解散して二年ぐらいいは陳留を中心に舞台をしてたんだけど、功績なんか認

められてもう少し遠くまで行ける事になったんだ。

それで遠征をするにあたって、わたし達に専属の人達が付いてきてくれるように成ったのね。でもほら、わたし達って傷のある人間じゃない？ それを話さない訳にもいかないから、黄巾党と一緒にしてた人達以外はどうしても溝が合ったんだよね。

でね、舞台って空気とかがすごい大事じゃない？ 舞台裏で悪い空気が広がっちゃうと警備、歌や踊り、演奏にも影響が出ちゃって、見てくれる人にも何となく白けた空気が感染しちゃうたりなんかしてね。

だから溝がある内は舞台がどうしても上手く行かなくて、そしたら皆の士気も落ちちゃって、また舞台が上手く行かなくて……って悪循環になっちゃったの。

けどそんな中、まーちゃんだけはずっとちゃんと最高のお仕事をしてくれてたんだ。隊長さんが一番仕事をしてるのに、わたし達は何やってんだろ、って皆思ってたね、とにかくお仕事しよっ！ って空気になったの。

自分の事がしつかり出来たら余裕も出てくるじゃない？ そしたら溝のあった人達とも交流が図れて、わたし達の演奏をちゃんと見て聞いてくれたりお話も出来るようになって、そこからは今みたいに皆仲良くなれたんだ。

全部まーちゃんがきっかけとか流れを作ってくれたの。だからお礼をしたいんだけど、自分は仕事を全うしてるだけでお礼を言われるほど大した事はしていない、って

言つて受け取つてくれないんだ。

けどね、人は体調とか感情とかで仕事の良し悪しつて絶対出てくるのに、それを感じさせない仕事をするのつてどれだけ凄いの！ つて話だよね。

だから、絶対にまーちゃんにはすんごいお返しをするの。だつてわたし達の大恩人なんだもん」

「そうだったのか」

まーちゃんの評価を更に上げつつ、華琳の采配に驚嘆せざるを得ない。

恐らくだが、彼女はこうなると分かつていて人材を配置したに違いないのだ。

「それじゃあ、次はちい達の話をするわよ」

「うん、いっぱいいい話したい事があるんだ」

「夜だけじゃ足りないかもしれないわね」

「ああそうだな、話そう。昔の事、今日までの事、これからの事を」

彼女達の話の聞き、喜和について話す。現在の漢中の話を聞き、四百年前の漢中について話す。アイドルとしての展望を聞き、灯華様にしたあれやこれやの結果を話した。

個人名などはぼかし、周囲に聞こえても良いよう気を払いながらの会話だったが、四人の間だけで伝わる秘密話はとも不思議な感覚でひたすらに楽しかった。

しかも彼女達は非常に聞き上手で、華琳にも話した事のない過去をちよろつと話して

しまったりもした。

夜が更け、空が白み始めるまで話は続いたが、ついに彼女達がダウンしてしまった。
気付けば周囲の誰も、机に突っ伏している。

毎度の事とはいえ、ここでも俺が後始末をするんだよな。

酔えないというのは、存外寂しいものだ。

6 2. 作られた窮地

片付けを済ませ、机や地面に突つ伏している女性達を椅子に座らせる。

そしてその上に旅で使っているだろう寝具等を掛けていき、更に気を調整して疲れが散るようしておく。

この手の作業も慣れたものだ。

さて、次は朝と昼の料理の下準備でもしておこうかね。

翌日の朝、料理ができるタイミングで皆が起き出す気配がした。

匂いに釣られたのか隙間から入る陽の光に誘われたのか分からないが、とりあえず皆に水を配る。

皆が覚醒すると、うー頭痛いー、身体おもーい、でもあまり酷くないかも？ というか良い匂いしない？ とざわざわとした。

とりあえず鶏出汁粥と漬物を配っていく。

美味しい、優しい、水くれーあと嫁に来てくれーとか言う声がちらほらと聞こえてくる。

嫁発言をした奴は、誘惑したね？ はい隊長の言いつけを破ったので料理没収します、と周囲の人に料理を奪われてしまった。奪われた奴は世界の終わりみたいな顔をして、こちらを見てくる。

しかし昨日有り余っていた材料を半分使った料理は炊き出しを既にして周辺の人に配ったので、今ある分しか料理はない。

俺はゆっくりと首を振り、彼女の絶望が深まった。

その様が余りに面白く、また反省もしているようだったので俺の分を少し分けてあげる。

劇的に顔色が良くなったのでそれもまた面白く、俺は声を出して笑ってしまった。

皆は朝食を食べ終わり、そのままになっていた舞台の後片付けに動き出した。

そちらには加われない俺は吹雪の調子を診たり構ったり、旅立つ準備を始めた。

そして昼前に俺の準備は終わり、舞台の撤収も片が付いた。

三姉妹とまーちゃんは街の長達との会食があるらしく、慌ただしく街中に消えていった。

残された一団は昼食どうしようかなーと言いながらも俺をちらちらと見てくる。

露骨な催促に苦笑をこぼしつつ、俺は彼女達の昼食兼残った食材の消費のために街の

人間への炊き出し料理を作り始めるのだった。

俺が作った料理はシチューもどきである。

結構好評で借り受けた大きな寸胴三つ分が瞬く間に無くなった。

食後であり、旅立ちの準備も整っているのです、ゆったりとした時間が流れている。

しばらくすると三人娘とまーちゃんが戻ってきた。

「あーやつぱりもう片付けちゃってるう！ 皆のいけずつ！ ちよつとぐらい残しておいてくれてもいいじゃない！」

「姉さんまだ入るの？ さすがにちいはもう食べれないかなー」

「白の作った料理は別腹だよつ。あーあ、亭長の所なんて行かなきゃ良かった」

「確かに白さんの作った料理は格別だけど、別腹は無理。それにお偉方と縁を繋いでおくのは必要なことだから」

「ぶーぶー」

「ですが天和殿の気持ちもわかりますよ、せめて味見ぐらいはさせて頂きました」

「だよね、だよねまーちゃん！」

「一気に姦しくなったな。とりあえず、

「おかえり、皆」

「「うん、ただいま！」」

荷物の最終確認が済み、皆旅装に着替え、馬にも乗っている。準備万端である。今すぐ出れば夕方に中継地の村に着く事が出来るらしい。

「それで、これからどうするんだ？」

「私達は今までの流れに従って東に向かうわ。外征許可は後三ヶ月ほどあるから、渤海辺りまで行けるかもしれない」

「そっか、自分は曹操様に早く帰って来いと言われてるし、付いていけない。途中まで一緒とも行かないのは残念だな」

「付いてきて貰えないのは残念だけど、すっごい残念だけど、新しい再会の約束をしたんだから満足しなきゃね」

「うん、確かな約束があるから前を、上を向いて進める。後ね、私たちも白が付いてきちゃうと色々任せきりになって墮落しちゃうかもって不安なんだよね……。ちい達の歌はちい達が完成させて、ちい達の罪はちい達の手で清算しないといけないから」

「だから次会う時は三ヶ月後、陳留に戻る時。成長した私達をしっかりと見てもらうんだから」

「ああ、その時を楽しみに待っている」

彼女達との別れは非常に名残惜しいが、また会える日にいっばい話をすればいい。

だから今は再会の約束を交わし、あっさり別れるのだ。

三姉妹との別れが済むと、まーちゃんがやって来た。

「謙信殿、貴方と過ごした時間は非常に面白く、また私達に多くの実りをもたらしてくれました。貴方との邂逅に深い感謝を表したく思います。有難う御座いました」

「私も貴方との会話はとても楽しかった、次会える日を心から待っている」

「私も同じ事を願っております。」

そして一つお願いしたい事があります」

「借りもある、貴方の頼み事なら多少の無茶もしてみせよう」

「有り難く思います。頼み事とはですね、曹操様にお会いする機会がありましたら、私をここに遣わせて頂き感謝しております、とお伝え頂きたいのです。」

直接伝えたくはあるのですが、護衛という任務上何が有るか分かりません」

「分かった、必ず伝えよう」

「お頼みます。では次会う日まで」

そう言つてまーちゃんが隊列に戻り、まーちゃんの号令と共に隊列は進みだした。

他の子達はさよーならーとかまたご飯ご馳走してねーと笑顔で手を振ってくれた。

俺も手を振りながら彼女達が見えなくなるまで見送る。

「それじゃあ行くのか吹雪」

さて、陳留へと帰ってきた訳だが、何やら騒がしい。

話を聞くに、武将が出払っている隙に劉備軍が攻めてきたらしく、華琳は最前線の出城に詰めに行つたそうだ。

出払っている隙に、という時点で華琳の張つた罫だとは分かるのだが、辛すぎないか？

幸いにも一昨日出陣したばかりなので、今から吹雪で駆ければ間に合うかもしれない。

吹雪を飛ばしに飛ばしてやって来ました出城。

そこは既に野戦場と化していた。

……ちよ、これ、兵数とか鑑みても絶望的すぎやしません？ 良く野戦をする決断をしたもんだよ。

李典が後曲で工作活動をしていたので、声をかける。

「謙信様？ えっ、本物？」

「三年前だし、随分な別れ方だったのは認めるけど、顔ぐらい覚えててくれると思つた

んだが……」

「いやいや、そない綺麗なお顔忘れられへんって。ただあんまりにも時機が良すぎて……。」

まあともかく、最高の時機に良い助っ人が来てくれましたわ！」

それから詳しい状況を聞くと、現在のままでは旗色は悪いが、二日保たせれば各地から将が戻ってくるらしい。

そして今李典隊が行っている工作が終われば籠城に移るそうだ。

ふむ、野戦は工作活動の時間稼ぎと隠蔽のためだったのか。

「そんじゃあ謙信様は城の中の把握と負傷兵の治療を頼みます。あつ、これ持つって下さい、謙信様の顔知らん奴もウチの副武装持ってたら言う事聞くと違いますんで」
そういつて短剣を手渡してくれる。

「良いのか？」

「ウチが持つてても、そのの出番があるって時点で負け確定ですから」

「それもそうか。じゃあ有り難く借り受ける」

「結構意匠とかにもこだわってる一品なんで、絶対に返して貰いますからね！」

そういつて彼女は作業に戻っていった。

俺も俺のやるべきことをやろう。

城内の把握と負傷兵受け入れの準備を済ませる。

今はまだ城内に待機している衛生兵だけで十二分に回せそうなので、城壁に登って戦況を見る。

ふむ、李典の工作はそろそろ終わりそうだが……華琳が突出している？

武将二人と対峙していて周囲が見えていないのか！

こりやまずいと思った俺は白衣を脱ぎ捨て、懐に仕舞ってあつた韓信の仮面を取り出して付け、城壁から飛び降りる。

並の馬では乱戦の様相になり始めたあそこには行けないし、吹雪は実戦経験がなく、ここまで飛ばしてきて疲労している。なら俺が駆けるのが一番早い。

低い体勢、発気の抑制、人の影、視線のずれなど隠形の技を駆使して走つてはいるが、速度優先なので直近の者には気付かれる。

気を張っている間合いに入った途端、唐突に現れたように見える俺の姿に皆が皆ぎよつとした表情を見せる。反応しきれぬならその隙に押し通り、直ぐ様武器を振るつてくるような紙一重で躲してすり抜ける。

そうして馬を、人を、剣を、槍を、矢を躲して一直線に走り、追いついた。

対峙している二人の武将は相当腕が立つようで、鎌を使っているとはいえあの華琳が

苦戦している。

よ。というか、あの武器は二つとも見知っている。青龍偃月刀と方天画戟、関羽と呂布か

よ。そりや華琳ですら苦戦するわな。むしろ二人相手にどうにか出来ているのがすげー

しかしこれは下手に声を掛けると致命的になりかねない。

瞬時に地面に落ちている適当な石礫を拾い上げる。激しく打ち合っている相手を狙って当てるのは至難だが、生半可な鍛錬は積んでいない。

それに相手方は練度不足なのか連携が上手く取れていないようで、同時攻撃ではなく連続攻撃のような不格好な連携になっており、小さい隙が多くある。

華琳の予想外の行動になって危ないかも知れないので、一瞬攻撃の手を緩めた方へ礫を飛ばす。

弾く。まあ連携は不慣れとはいえ超一流の武将、青龍偃月刀を持った女性は石礫をなんなく

だが三人の気をこちらに集中させることは出来た。

と三人の距離が離れる。達人同士の高速戦闘に介入する存在がいるという事実は両者ともに看過できず、バツ

「何奴っ?!」

「嘘、恋、気付かなかった」

「貴様、我らが勝負に割って入るなぞ命が惜しくないらしいな」

三者三様のリアクションを貰いつつ、俺はさつきと華琳の傍に寄り、囁く。

「李典の工作活動ももうじき終わる、ここが退き時だ」

「貴方はっ……ぐっ、幾ら貴方の言葉といえど、このまま引き下がる訳には!」

「華琳! 総大将たるお前が大局を見誤るな! どうしてもと言うなら、以前の約束を

ここで果たして貰う」

「……ああもう! 私我儘でそんな無様な真似をさせられる筈がないわ! 退くわよ

! 背中には任せるっ」

そうして華琳は踵を返し、近衛兵達に撤退の指示を出す。

俺はその背を守るようにして立ちはだかり、二人の武将を牽制する。

「曹操の軍に顔を隠した将の話なぞ聞いたことはないが、立ち塞がるのなら切つて払うのみ!」

青龍偃月刀を構え、地を蹴って間合いを詰めてきた。

さすが猛将関羽、積極果敢だね。華琳の背中が見えており、立ち塞がるのは実力不明とはいえ軽装で腰に短剣を差してはいるが徒手空拳の相手。攻める選択肢しかないの

だから決断は早ければ早いほど良い。

「関羽！ 一人は駄目！」

ほう、呂布は俺の力量に気付くか。でももう遅い。

横に薙いだ偃月刀は重装鎧ですら一刀両断できるだろう速度と重さ、気が乗っていた。

頑丈だろう柄がこれ以上ない程に仕上がっているのだから、彼女の膂力と気力が垣間見える。

けど急いだのだろうし、油断したのだろう。

大抵の兵、恐らく大凡の将ですら反応できない速度で放たれた本気の一撃を彼女は信頼しきっていた。次の攻撃動作に対する心積もりが一切感じられず、後ろの華琳にばかり気を取られているのが分かる。

今までの経験から来る確信なんだろうけど、甘い。

俺はやや下段、腰のあたりを狙う彼女の一撃の更に下を潜り、避けるために屈した膝を気で強化し、偃月刀が頭を過ぎると同時に溜め込んだ力を解放した。

関羽からは横薙ぎを払った瞬間に俺の姿が消え、払い終わる直前に俺が目の前にいた感覚だろう。

払い終わりの制動に入っている彼女にはやりたい放題出来るが、両肘を軽くさわって

痺れさせ、武器を奪うだけにする。

片手で青龍堰月刀を奪い、片手で関羽を呂布へと押し出し牽制を行う。

呂布に片手で抱きとめられた関羽は目を白黒させている。

「な、何が起こった？」

「あれは恋と同じで、恋よりもっと上手。一人じゃ勝てない」

「恋と同じ身体能力を持っていて、恋より技術がある？」

「うん、そう言った」

「ならばとんだ隠し玉ではないか。これがあるから曹操は前曲に出てきていたのか。

くそ、武器を奪われては打つ手が無い」

「ここは素直に逃がす」

「致し方ないか。折角上手く誘い込んだというのに、私の油断で無に帰した。桃香様に

何と言えば……」

逃がすというのは賢明な決断だ。

取れるかどうか分からなくなった大将首より、大将首を獲れる人材の安全を優先するのは良い判断だ。

手柄に目が眩むのは力を持っていたとしても二流止まり、悔しがりつつも判断を間違えない彼女達はやはり一流だ。

ともかくここはお言葉に甘えさせてもらおう。

俺はじりじりと後退を始め、華琳が馬を走らせると同時に走って追従する。

同時に矢が降り注ぐが、撤退途中だろうと防げぬ曹魏の精兵ではない。

俺もやばそうなのは礫で撃ち落とし、偃月刀を振り回してフォローする。

適当な所で偃月刀を放り投げ、脱兎のごとく逃げに徹する。持っても要らぬ問題を生むだろうし捨てるが吉である。

結果、曹操包囲網を脱落者無しで駆け抜ける事が出来、華琳と最精鋭の兵を連れて出城に帰還する事が叶ったのだった。

63. 感情の発露

出城に戻った俺は本気で隠形し、仮面を外して誰にも気づかれない内に白衣を回収する。

そして何事もなかったように帰還した華琳の傍にひっそり控え、各隊代表者の報告をこっそりと聞く。

全ての情報を聴き終え、華琳が二日保たせる為の大まかな方策、予測される動きの対策などを伝え、後の細かい指示は都度行うと言つて報告会は解散。

後は敵の出方待ちとなったが、今日一日は間違ひなく攻めてこないだろう。

野戦から籠城戦へと移り変わった。そうなると攻城兵器等を引つ張りだして組み立て作業をしなければいけないし、作戦の練り直し、隊列を組み直したりとかくやる事が多い。

今から準備を行つたとしても確実に作業の途中で日が暮れてしまう。

そんな馬鹿な隙を晒すとは思えないので、今日一日は将は作戦会議に、兵は行軍、戦鬪の疲れを癒やす日として当てるだろう。

勿論少人数で忍び込むなどは試してくるだろうから、決して監視の目を緩めてはいけ

ないが。

ともかく、何とか一段落が着いた訳である。

華琳は一言「付いてきて」と呟き、兵を労いながら出城の奥へと向かっていく。

俺は黙ってその後ろを付いて行く。

とある一室の前に着くと、その前で見張りをしていた二人の兵に一言告げて下がらせた。

彼らが扉の前から相当距離を取ったのを確認し、華琳は中に入っていく。俺も付き従い、中に入って扉を閉めた。

中は一人部屋にしてはそこそこ広く、壁際にベッド、机、椅子が何脚かと必要最低限の家具が置かれているだけだった。

必要最低限ながら質はそこそこ高そうなので、きつと将官用の部屋なのだろう。

華琳は無言で椅子を二脚、中央に対面する形で置き、片方に座った。

俺も用意された椅子に座り、華琳と対面する事になる。

その鋭い眼差しに、滅茶苦茶緊張してきたんだが。

「こんな形でごめんなさい。けれど今、感情がぐちゃぐちゃで殊更冷静に努めないとうにかかってしまいそうなの」

「えっと、良く分からないですが、分かりました」

「それで真つ先に聞いておきたいのだけど、何時合流したのかしら？ あと合流するまでの経緯を教えて貰えるかしら？」

なんだろう、この詰問具合。

「本当についていきすぎですよ。」

匈奴からの経緯をざっと話しますと、こちらが一段落付きそうなので帰って来いという手紙が届いた時、丁度匈奴での政策に区切りがついていたのでその翌々日に匈奴の地を発ちました。

匈奴で良い馬を手に入れましたので、旅はすこぶる順調でした。

途中、趙という街で数え役満姉妹と出会い、少しいざこざになりかけましたね。黄色い布を巻いていたので黄巾党と思ったのです。

ああ、その時護衛の隊長をしていた人物が華琳様にお礼を伝えたいとの事です。自分をこの護衛の任に就けて頂き感謝の極み、だそうです。

そしてそのまま馬を飛ばし陳留へと戻ってみれば、一昨日に出陣したばかりという話。これは馬を飛ばせば間に合うかもしれないと急ぎここへ。

そして開戦まもなくに到着し、李典に状況を聞いて衛生兵の一員として薬の把握と整理を済ませ、終わった所で城内の把握をしようと城壁通路に出たのです。

すると華琳様が誘い込まれている光景が見えたので、城壁から飛び降りて仮面を被り、駆けつけた次第です」

大まかではあるがこれまでの経緯を話していると、華琳はぶつぶつと、整合性は取れてる、匈奴産の良馬、時間的にも大凡合ってる、証言を揃えればすぐ分かる事、彼の目から見ても危なかった？ 等と言っている。

そしてしばし黙りこみ、段々と顔が赤くなっていく。

「白、事情は全部話すから、少しの間部屋の外で待っていて」

「よく分かりませんが、分かりました」

部屋から退出すると、中からくぐもった声と布をばたばたと叩く音が聞こえてきた。

なんだろう、まるで枕に顔を埋めてベッドの上で暴れているような……。

五分ほどで音が収まり、入りなさい、という声が聞こえたので中に入る。

少し息の上だった華琳が椅子に座っていた。

うん？ なんだったのだろう？

取り敢えず事情というのを聞かせてもらおう。

「遅れて申し訳ないのだけど、今ここでお礼を言わせて欲しい。窮地を救ってくれて有難う、曇っていた目を晴らしてくれて有難う。貴方に最上の感謝を」

「勿体なきお言葉です」

「全て正直に話すと、飛び込んできた時機があまりに良くて、実は隠れて近くにいたので
は？」と疑っていたの。全く、我が不明を恥じるばかりだわ」

あーそういう事か。

確かに、未だ遙か遠くにいるだろう人物が窮地をギリギリの所で救ってくれるなんて、何か仕込みでもしていたのか？と疑われても仕方ない事。

もし俺が逆の立場だったとして考えよう。

匈奴の土地で何らかの危機に陥ったとして、本当にやばいと思った瞬間に陳留にいる
筈の華琳が助けに入ってきたらどうだ？間違はなく目と常識を疑うよな。

ふむ、だからさつきは険しい表情をしていたのか。

「そのような趣味の悪い事、さすがにしませんよ」

「冷静になれば貴方がそういう人物でもないと理解しているから、素直に礼を言えたの
だけど、少し冷静ではなかったから」

「何かありましたか？」

「……恥の上塗りだけれど、貴方を疑った後なのだから誠意を見せなければね。」

開戦前に劉備と稚拙な舌戦をして、それに引き摺られていたのよ。

退けるものかと感情的になって、関羽と呂布を本当に倒せないか確かめるのに夢中になっ
て……。

はあ、まだまだよね、私」

陳留一帯を大発展させ、黄巾の乱首謀者の一角を打ち取り、反董卓連合にて実と風評を得、河北の覇者となった偉大な少女は、そう零して天を仰いだ。

その姿が余りに小さく見えてしまった俺は、激しい後悔に見舞われた。

彼女を見ていれば容易に分かる、彼女は三年前からずっと一人で戦い続けてきたのだと。

春蘭秋蘭も彼女の本当に深い位置には立ち入る事が出来ない。だから全てを一人で背負い、試行錯誤し続け、すり減り続けたのだろう。

華琳から離れる判断は間違いではなかった。

以前言ったように、依存関係になる可能性もあった。

向かった匈奴では最上の結果を得た。

管理者サイドとしても寄る辺を失った華琳がこうして弱っている事実は、天の御遣いにとつて都合が良い。

だが結果として正しいからと言って、一人の人間に重荷を背負わせた免罪符には決してならない。

気付けば俺は椅子に座る小さな少女の前に屈み、その手を取っていた。

「これからは自分が傍におります。私に出来る事は限られておりますが、貴方を支えさ

せて欲しい」

彼女の驚いたような表情。それに負けず劣らず俺も内心驚いていた。

四百年ですっかり制御できるようになっていた感情が沸き立つのを感じる。

共依存？ 教師としてのの反射行動？ 天の御遣いの動向？ そんなもの関係なく動いてみれば良かったじゃないか。

四百年前かの王にやったように、何か穴はないかと試しきればよかったのだ。せめて管理者の皆に止められるまでは……。

稚拙な感情の暴走だと理性の部分は冷静に把握をしている。四百年ぶりに深く深く結びついた人物だからこそ、あの時生きていた感情を思い出し、激昂してしまっているのだとも理解している。

だが止められない。

そうして燃え上がった感情を持て余している自分に戸惑ったまま、次なる言葉を紡ぐうとして、俺は頭を抱きかかえられた。

「ふふっ、熱い熱い。珍しく感情的になっっているようね」

まるで母親にされるような優しく柔らかい抱擁だった。

「悔やむような表情が見えたわ。似た表情を四百年前の離別の時に見た気がするのだけ

ど」

彼女はやはり聴かった。俺の感情を表情一つで紐解いていこうとする。

「天に抗いきれなかつた弱さを恥じております。それで貴方に辛い思いをさせてしまい、悔やんでも悔やみきれません」

「まあ確かに、二人で天に立ち向かうと思っていたから、少し裏切られたとも思っていたわ。

けれど致し方ない理由が確かにあつた」

「しかし、もつと何か、出来ていたかも知れませんか」

「貴方は天に抗つて記憶まで消されたのでしょうか？ そんな人物に手伝えという方が傲慢だと後々気付いたわ。

それに私の為にも何もしていなかつた訳じゃないでしょうに。匈奴との国交正常化という快挙を成し遂げてここに来たのでしょう？」

「それは、結局のところ自分の為のものでもありません」

「私の為でもあつたでしょう？」

結果こそ全てよ。

貴方は私を弱さから守り、後背の憂いを断つた。

私は私で天の目を掻い潜りつつ、誰がどんな役割を与えられているのかを炙りだしたわ。

別れてから二人共確かな成果を上げている、なら何を悔やむ理由があるのか」
くそう、まだまだなのは俺だ。

無駄に歳を重ねるばかりで、摩耗するばかりで、すぐに揺れる。頭でつかちの未熟者だ。

「けれど聞き捨てならない事も言っていたわね、さつき言ったのは本当？」

俺の苦悩とは逆に、彼女は何の気負いもなく聞いてきた。

「何がですか？」

「私を一人にしないという言葉よ」

「……ええ、本当です」

「そう。ならあの時私を叱咤した時のように、今からは華琳と呼びなさい。

貴方は何の柵もなく私の友として対等であるように。そしてずっと隣にいなさい」

「ん、分かったよ、華琳」

「改めて宜しくね、白。」

ふふつ、遠い昔とは色々と逆ね。今は私が貴方を抱いているわ」

「ふふ、そうだな。けど、これは心地良いものだね」

「でしよう？ 死に際でもとても安らかになるんだから」

と彼女は優しく笑った。

俺は困ったように苦笑を返すしか無かった。

五分ほどそのままできて、どちらからともなく身体を離れた。

何とも気恥ずかしいが、悪い空気ではない。

「それじゃあ、私と別れてからの三年間の詳細を頼むわ。

私も今まで掴んだ事のおさらいをしたいし」

そうして俺は匈奴での三年間と歌姫三姉妹について語った。

三姉妹に関しては過去のこととは言わず、自分の知っている芸を教えた、まーちゃんは逸材だった、程度の報告に留める。三姉妹が喜和だったと知っても現状メリツトがないし、伝える事で信用を失う可能性があるしな。

華琳からは三年間で天が望む流れを弄れないかを試行錯誤していたらしい。

最初は天の御遣いのいる呉の主要メンバーを嵌める策を頭に思い浮かべ、それを書き出せば殺すか引き込むかしようとしたが、書き出して作戦が実行できたとして不思議なタイミングで阻止されたそうだ。

何度か試しても阻止されるが、段々と深く嵌める事ができているので、これがバタフライ・エフェクトのようになってくれればと継続しているようだ。

呉はどうにも崩せぬので、蜀に対して策略を巡らしてみるのが、これもまた空振りばか

り。

今回の武將を出払わせての誘い込みは、こちらから手を出すのではなく、向こうからやってきた場合の手応えを知りたかったから起こしたそうなの。

結果は散々、関羽の首を落とすタイミングはあったが、実行は出来なかった。頭痛ではなく、呂布、矢、風などが丁度良すぎるタイミングで阻んだそうなの。

ふむ、頭痛は歴史の望む大きな流れを阻止しようとすると思える。

そして不思議な妨害は、以前管輅が孫策の死について説明していた存在の確定が関わっているのだろう。今までの流れで死なないと観測されたから死にくい。

けれど頭痛がしなかったという話だから、明確な理由ときっかけがあれば殺せる可能性もあるのだろう。

とはいえそのまま伝える事は出来なかったの、彼女達に手を出すのは『難しい』とだけ伝えておこう。

そうして会話が一段落した所で廊下から気配がした。

しばらくして桂花、李典、そして華琳と出会う以前に会った程立がいた。

「本当に白殿では無いのですか?! ああまた華琳様の寵愛が遠のくうう!」

「あつ、謙信様、短剣役に立ちました? 後でちゃんと返したってくださいね!」

「おおつ、四年弱ぶりですねー。やはり貴方が曹操軍で幻となっていた謙信殿でしたかー」

彼女は眠たそうな表情を一瞬崩し、目を見開いて驚いていた。だがすぐに納得の表情で頷いていた。

「あら、貴方達は顔見知りだったのかしら？」

「華琳様と出会う直前に会いましたね」

「白？ 先ほどの言葉を忘れたかしら？」

「ああ、いえ、皆の前でもですか？」

「ええ、誰に憚るものでもないでしょう？」

「……春蘭と秋蘭に殺されそうですが」

「上手くやりなさい」

「丸投げか。ともかく、華琳に会う数日前に怪我をしている所に出会ってね、治療をした縁があったのさ」

「ぐつ、敬語をやめた？ 居なかった筈の白殿に私はどれだけの遅れを取っているというの……これは強硬手段も選択肢に……」

「桂花、遠くに居た友と近くで尽くしてくれた忠臣、私がどちらを重用するかは理解しているでしょう？ だからそんな物騒な事を言わないの」

「はっ、はい！ 失礼しました！」

途端にデレる桂花。すげーな華琳、ヤンデレの扱いまで完璧とは。

「えっと、改めて治療と健康法の教授をありがとうございました。以前の時機もそうでしたが、今回来てくれた時機も最高の一言です。名医がいると軍の士気も損耗率も目に見えて違ってくる、籠城戦ではなお顕著に違いますからねー」

「それに関して白殿が誰よりも先に馳せ参じてくれた事を喜ばざるを得ないわね。

本当に、男にしておくのが勿体無い人」

「ええ、白に助けられたのは認めましょう。それで、作戦を統括する立場の人間が揃って自室に来た理由は何かしら？ 猶予があるとはいえ、余り褒められた行為ではないわ

よ」

「ウチは全ての作業が終わった報告と、一の四、二の八、四の五にネズミが幾らか掛かったちゅー報告に来ました。正直ウチが出張る場面はないですし、謙信様に短剣返して欲しかったので直接報告に寄らせて貰いました」

「そう、作業引き継ぎも終わっているなら十二分に休みなさい。今回は貴方が一番の功労者だわ、生きて帰ったら報奨に期待なさい」

「マジで?! おーこれは是が非でも生きて帰らんといいけませんなあ！」

疲れからか少し足元がふらふらとしつつ、更に浮かれてふわふわし始めた李典に短剣

を返し、ついでに疲労回復のマッサージをしてやる。

あわわわーと気持ちよさそうな声を上げ、施術が終わって艶やかな顔になった彼女は部屋を出て行った。

その間に華琳、桂花、程立が損害、備蓄、敵軍行動予測などを改めて詰めていた。

俺は必要なさそうなので部屋を退出しようとする、程立が「そういうええ大事なことをお聞きしたいのですー」と声を上げた。誰にともなく、しかしはつきりとした声量で。「華琳様が突出した時、仮面を被った何者かが救いに来たそうですが、何者ですか？」程立に続いて桂花が詰める。

「軍師である我々も把握しておらず、近衛の者に聞いても誰も答えない、ゆえに華琳様にお尋ねするしかありませんでした。」

関羽と呂布を手玉にする技量、窮状である今でなくとも喉から手が出るほど欲しい人材です。是非ともお答え頂きたい」

「知らぬ」

即答だった。

「……それはどういう意図で？」

「言わねばならない？」

「……いえ、詮索が過ぎました」

「私も桂花、風という得難き軍師との間に不和を招きたくないのよ。けれどそうせざるを得ない事情があると理解して頂戴。

正体の見当もついているでしょうが、確認はしない事。あれは今後一切現れない、いや、現れないように動いて。これは命令ではなく、お願い」

「むう、そう言われると追求のしようもありませんねー」

「今後一切ですか。」

……大陸一番と名高き勇士とそれに迫る万夫不当が相手にならぬなど、何かしらの制限が無くては説明がつきません。

漢中のどこぞの薬師一族には命を削って力を増幅させる秘薬などが伝わっているそうですし、そういった理由から次のない物と理解しておきます。

しかし、向こうが勘違いするのを利用するのは構いませんでしょうか？」

「ええ、存分に振り回してやりなさい」

艶然と華琳が笑い、

「うふふふー」

「うつつつつ」

追従するように二人がとても悪い笑みを浮かべている。

うん、これでここはもう安泰だな。

64. 最後の休息

その後、二日を待たずして現れた援軍に助けられて俺達は窮地を脱した。

あえて華琳が綱渡りをした甲斐があり、広大な領地を治めきれずに劉備軍に攻められたが、それは“見せかけの失態”であり、まんまと踊らされた蜀軍を曹魏は見事に撃退した。曹魏は敵を陣地に誘い込む狡猾さを持ち、寡兵で大軍を破る強大さも合わせ持つ最強の陣営である。という風評を作り上げる事に成功。

袁家の影響が強かった土地もついに華琳を認めるに至り、潜在的反乱分子も火種が潰されて大人しくなり、周辺諸侯もいよいよ打つ手をなくして魏に降る事になった。

領土は再び増えたが、華琳の評価が民草に良い形で浸透して地盤がしっかりした事で華琳と腹心達の忙しさは以前よりも大分マシになった。

諸侯は華琳と民草の目を気にして治世を行うようになり、良い人材が流れてくるようにもなり、意識を向ける相手が減り、更には匈奴が実は味方であるという秘密のアドバンテージもある。

今までずっと気を張り詰めて駆け上がり続けてきた皆に、ようやく一息つく余裕が生まれたのだった。

袁紹の領土を完全に掌握して三ヶ月程経ったある日、定期的に行われている會議の為に玉座の間に皆が集められていた。

普段は参加しない俺も何故か参加させられていたので、何かあるのだろうか。

ある程度の情報が交わされ、そろそろ議題も尽きたというタイミングで華琳が、

「順次三日間の休暇を取らせる。綿密な計画を立てたから三日の間は仕事を一切気にしないで良いわよ」

気を緩め始めていた皆を前にして、唐突にそう切り出した。

突然の休暇宣言に皆ぼかんとしている。

その様子を満足そうに見渡し、悪戯成功ね、と華琳は楽しそうに微笑んだ。

取り敢えず代表して突っ込んでおく。

「随分と唐突だな」

「皆を驚かせたかったというのもあるけど、実際調整が難しく、こんな時期になつてしまったわ」

「予定も組まれているとなると強制か？」

「ええそうよ。ここが頂点に至る最後の休息になるから、少し無理矢理にでも休暇を取らせる事にした」

大筋の未来を知っている俺を除いて、ほとんどの者は再びぼかんと驚きの表情を晒している。

軍務と内政を司る軍師達も風を除いて懷疑的な表情だ。

だってそうだろう、最後の休息を取るには早過ぎる。今はまだ袁紹を降して領土を安定させたばかりで、涼州の馬騰、益州の劉備、呉の孫策と英傑が残っている状況。残る全員が手を組めば如何に曹魏といえど厳しい戦いを強いられる。

故に多くの精銳と広大な土地を持つ彼女達との決着は腰を落ち着けて、外交、武力、交易などを行いなから徐々に力を削り取っていく。それこそが常道であると皆ちゃんと理解している訳だ。

「涼州を降す算段は既につけている、後は機が熟せばすぐさま涼州は我が手に落ちる。そうなれば後は一瞬。」

私達の敵は蜀と呉のみになり、二勢力は私達と戦う為に手を組まざるを得ず、大陸の趨勢を決める最終決戦と相成る」

「おお、流石は華琳さま！ 既に涼州への渡りをつけているとは！」

「涼州を降すその方法とは？」

単純に華琳を褒め称える春蘭と冷静に続きを促す秋蘭。

「もう決定事項だから伝えておく、馬騰は病魔に冒されてもう長くないわ。」

風に任せていた情報部隊が得てきた情報で、周辺の状況を見ても非常に確度は高い。そして馬騰の娘たる馬超は既に一軍を率い得る非凡の存在となつてはいるが、領土を継ぐ器に非ず。そして器を育てる時間も最早無い。

馬騰が倒れた際にすぐさま涼州を突き崩す算段もつけているから、そこが契機となるわね」

「成る程、納得です」

「余程予想外の事態が起こらぬ限り、一年以内に馬騰は没し、それから一年以内に蜀と呉を降す決戦となるでしょう。」

だから今の内に最終決戦への気力を養い、決戦後に続く未来への予行をしておいて貰いたいのよ」

そう言つて華琳は周囲を見渡す。

「久々のまとまつた休日をどうやって過ごすか、皆今から計画を立てておきなさい。議題は以上、では解散」

皆がそわそわしながら玉座の間を退出していく。

はてさて、俺はどうやって過ごそうかね？

張遼の場合。

「そんな別嬪のお兄さん、ちよつと時間ええか？」

そこにはやたら傾いた服装の美女が立っていた。

神速の騎将と名高い張遼だ。

「神速の騎将とか言われとるのは知つとつたけど、面と向かつて言われるとこんな恥ずいんやな。

つて、出鼻挫かんといてよ」

「悪かった、それでどうした？」

「んーちよつとな、謙信に相談事があんねん」

「俺にか？」

「うん、今度ある休日についてなんやけどな」

「今相談事つて言つたらそれだよな、けど俺に？」

張遼は俺が華琳の元から去った後に曹軍に加わった武将だ。

仲良くなるタイミングが掴めず、負傷兵の応急処置や感染症風土病の防止説明会等で顔を合わせた際、軽い怪我をして治療を受けにきた際に少し話す程度の仲でしかないのに、休日の相談？

「相談事つてちよつと距離の離れとる方が良かったりするし、謙信は皆の相談事も結構受けとつて慣れとるやろ？」

「まあ俺は武官とも文官とも程よく距離が離れてるし、医務室は防音も利いてて色々話しやすいし、治療の際の暇潰しに色々聞いたりするかな」

「うんうん、そんな経験豊富な謙信やからこそ相談なんやわ。明後日から始まる休日をどう過ごしたらええか一緒に考えてくれへん？」

「んー俺で良いなら構わないけど」

「ほんまか！ 他にも相談したい事があつてな、今日の訓練が終わった後にでもまた部屋に行つてええかな？」

「何時でもどうぞ、適当につまみでも作つて待つてるよ」

「謙信の料理食べれるんか?! 美味しいって聞いてたからめっちゃ楽しみやわ！ 期待しとるで〜」

そう言つて張遼は手を振つて去つて行つた。

んーしかし、休日の相談をする相手つて本当に俺でいいのかね？

首を傾げながら、あれやこれやと雑多に休日のプランニングを考えるのだった。

そして日が暮れてしばらく経つた頃、部屋にノックの音が響いた。

書類仕事を中断して入室を勧める。

「どいづどー」

「お邪魔するなー」

静々と入ってきた張遼に椅子を勧めめる。

俺も仕事机から離れ、料理の置かれた机を挟んで張遼に勧めた椅子の反対側に座る。

「ごめんな、遅くなつてしもた上にこんな気遣いまでさせて」

「どうせ遅くまで起きてるし、夜食も俺のついでだしな、気にしなくていい。

ただ匈奴との交流で得た食材なんかを使った創作料理が多いから、口にあうかは分からんよ」

「こんな美味しそうな匂いしてるもんがまずい筈ないやん」

「だと良いけど。塩辛いのと甘いのを半々で作ったから、好きに摘んでくれ。

酒も一応用意してるけど、量がないから飲み過ぎると後が寂しくなる、注意してくれ」
「お酒もあんの?!」

「清酒と馬乳酒と果実酒だな、各四杯分ぐらいしかないから」

「清酒って最近市場に出回り始めたやつ?」

「そうだよ。これは店から買ったやつじゃなくて、曹操と俺の合作だけだ」

「孟ちゃん謹製?! それって味の保証付きって事やんつ、今日は最高の酒盛りになるな
!

……つて、ちやうちやう! 休日の相談をしに来たの忘れかけてたわ!」

「忘れてないようでも良かったよ。それじゃあ飲み食いしながら話をしよう」

張遼は俺の作った味噌焼き、油漬け、浅漬、酒蒸し、パンケーキ、饅頭などに舌鼓を打ちながら、その胸の内を語ってくれた。

「ウチな、物心つく頃からずっと戦つててん。武官の家に生まれてずっと技量を磨き続けて、そこそこ育つたら武勇を丁原の義母さんに見出されて、そこからは軍人として色々と転戦してたわ。

そんであれよあれよといつの間にかここにいた、なーんて慌ただしくも寂しい人生やったんやわ。

そんでな、そんな人生を歩んできたウチがさ、いきなり天下泰平になった時の予行練習をしとけと言われた訳よ。えっ、どうすればええんやろ？　つてなるのは仕方ないやん？」

「そっか、そうなるって確かに面食らうというか、戸惑うな。

普段の生活つてどう過ごしてるんだ？」

「早朝に鍛錬と馬の世話して、日が上がったら馬に乗らん訓練、昼にご飯食べて、午後は馬乗つて訓練やったり他部隊との合同訓練して、その後は風呂食う飲む寝るで終わりやな。」

休日は適当に部下連れて酒屋行ったり居酒屋行ったり遠乗りしたりしてたよ」

「ふむ、別に天下泰平になつてもそれでいいんじゃないか？」

「そういう訳にも行かへんやろ。ウチらは騎兵や、戦時じゃない場合は無視出来ひん金食い虫になる。」

泰平の世になつたら騎兵隊は間違いなく大幅に縮小される。歩兵部隊や親衛隊とは比較にならないぐらいな」

「けれど完全に解体される訳ではないだろ？」

「勿論外敵や巡回に馬は必要やから、ある程度は残るやろ。」

けど兵が減るのもそうなんやけど、飼料削減のために練習量も下げざるを得ん。そうになると暇な時間が増えすぎて困る訳よ。」

後な、軍に残されるやろう職業軍人はほとんど結婚しとる。」

そうなると酒には簡単に誘えんやん、そしたらウチ一人やん。一人の酒も好きやけど、そればかりは飽きるやろしなあ。あーウチ天下泰平の世でやっていけるんやるか」

職業軍人は高給取りだし、普段家に居ないし、もし亡くなつても配偶者には国からある程度の援助もある。」

なので結婚相手としてはかなり人気の職業なのだ。」

というか、戦乱の世を生き抜くより天下泰平の世の過ごし方で悩む張遼はどこかおかしい。

張遼は騎馬兵が減らされる事を受け入れている、それは泰平の世つてものをちやんと理解出来てる証拠だ。

それなのに何故か今の延長線上で物を考えてしまっている。

なんだろう、違和感を感じる。

「なあ張遼、視点を変えてみる事は出来るか？」

「視点？」

「軍に居ない自分、馬を降りた自分とかはどうだ？」

「戦わんウチを想像しろって事？」

「そうだ、出来るか？」

「ちよつと待つてな………あー全然出来ひんな。働かずに酒飲む光景しか浮かばん」

「そつか、張遼、お前の人生は本当に戦い尽くしだったんだな」

「まあ確かに戦いはウチの根本になつてしもとるな」

恐らく治安も良く、活気に満ち、子供達の笑い声が仄かに聞こえてくる陳留の街を見て、平和な世の中というものを何となくではあるが想像できるのだろう。

けれどそれが自分の世界であるとは認識できていない。

自分はその世界を外から守っているのだと、そう思っているのかもしれない。だから想像の根本が欠如しているのではないだろうか？

そう指摘しようとして、まずは彼女自身から話を聞かなければと思ひ留まった。

「張遼は戦いばかりの人生を、どう思う？」

「誇りに思うとるよ」

何でもない顔をしながら、彼女は即答した。

俺はそれを聞いて、彼女に別の生き方を言葉で聞かせる事をやめた。

彼女は既に完成している、ならば言葉は揺さぶりにもならない。

「今度の休日はさ、色々な体験をして過ごしてみるか」

だから言葉だけじゃなく、実際に体験してもらおう。

「は？」

「町娘のように可愛く着飾って、ご飯や小物や服を見てきやつきやと騒ぐ。良く行く居酒屋で給仕として、料理人として働いてみるのも面白そうだ。商人っぽい事をして仕入れ、値切り、売りとかやれば普段の生活にも役に立つだろうし。」

とにかくそういう今までやった事のないものを色々と経験してみよう。それで気に入った行動、行為を探してみれば、戦い以外の何かを生活の中心、または一部にする事

が出来るかもしれない」

「んー理屈は分かるし、納得もした。けどいきなりそんな事出来るもんかな？」

「やる気があるなら任せとけ。こう見えても顔は広い、手伝いを申し出れば大抵は受け入れてもらえる自信がある。」

それに俺は今暇だから、隣で一緒にやってみるし、不安がらなくても良い」

今各勢力は自領の安定に必死だ。

蜀は益州をまとめ切れずに涼州は馬騰が病に臥している、呉は大陸南部の平定に忙しい。

なので本格的な戦闘もなくて医者暇なのだ。

「ほな、頼んでみよかな。宜しくお願いします」

「承った」

「あつ、それで頼み事の追加なんやけど、このお酒融通してもらえん？」

抜目のない張遼だった。

65. はじめてのおめかし

そして本番休日、俺は城の前で待ち合わせをしていた。

部屋にでも寄ればいいのだろうが、雰囲気作りの一環でやってみた。

太陽が中点に差し掛かる前という約束で、俺は後四十分もすれば刻限になるというタイミングで待っていた。

十分もするとそわそわした様子で張遼がやってきた。

「おはよう」

「ああ、おはようさん。ごめんな、待たせた？」

「いや、今来た所……って、張遼」

「なんや？」

「出来れば私服で来てくれって言わなかったっけ？」

「言われたな、だから自慢の一張羅で来たやん」

「えっ、張遼ってその服しか持っていない？」

袴、羽織り、サラシという何時もの格好。それはつまり訓練なんかで過ごす服と同じという事。

「いやいや、そんな訳あらへんよ、寝間着とか用途別の羽織りも持つとるよ。基本がこれなだけや。」

あつ、同じ奴、似たような奴はいっぱい持つとるから、一昨日のと同じ服やないで？」
「そうなのか。うん、それじゃあまずはお洒落からだな。今日は町娘のように過ごす日にしよう」

「えっ、ウチのカッコあかんかった？」

「張遼に滅茶苦茶似合ってるけど、普段と違う事をするんだから、普段と違う衣装にしよ
うってだけ。だからさっさと行くぞー」

服装が似合っていると褒められてテレテレしている張遼の背を押し、俺は歩き出した。
目指すは阿蘇阿蘇という情報誌に乗っていた衣服店や化粧品店等がずらりと並んで
いる通称女の子通りにも行くこう。

そしてやってきた女の子通り。陳留随一のファッションストリートである。

華琳を筆頭に曹軍上層部には女性が多く、また美意識の高い者が多い。その手の商品
はかなり売れる。

なのでここは女性向けの商品で一攫千金を狙う商人達にとつての激戦区となつてお
り、良質な商品が価格競争によりそこそこ安価で手に入るのだ。

良品が町娘にも届く値段付けになっていて、毎日黄色い声で盛況なのがこの場所だった。今日日が中点にある昼時にも関わらず、結構な数の婦女子……女の子達がいる。

俺はその人波をかき分け、張遼の手を引いてどんどん進む。

「ここ初めてきたけど凄いな、圧倒されてまうわ」

「そうか、陳留在住の懐に余裕のある女性でここに訪れた事がない人間は張遼ぐらいだろうな。あの風ですらちよっと前に初めての買い物を買ませたし」

「えっ、あの真面目一徹な風も来とるん？」

「友人二人に連れられて仕方なくって感じだったけどな。何着か可愛いのを買わされていたよ」

「へえ、つていうか、なんでそんな事知ってんの？」

「以前不意打ち気味に酷いこととしてしまつて、その謝罪として買い物に付き合つて全部奢つたんだよ」

「ほお、そない事がなー。んで、今どこに向かつとるん？」

「華琳と春蘭秋蘭が鼻屑にしている店があつてね、そこは可愛いの中から格好いいのから質の良い物が総合的に揃つてるんだ。」

「だからそこで色々と試着しながら今日の服を決めよう」

「はあー、ウチにはそーゆーの全く分からんから、ぜーんぶ謙信に任せるわ」

「まあ色彩学なんかの知識もあるし、任せてくれて良いよ。ただ要望とかがあれば随時言ってくれ」

程なくして店についた俺達は、本気の服選びを始めるのだった。

「嫌や！ こんな服絶対似合わん！」

「ぜーんぶ謙信に任せるわ、と言ってくれたのに、舌の根も乾かぬうちに翻すのか？」

「ぐっ、せやけど、せやけど……」

「意地悪な聞き方をしてすまん。んーそうだな、これは実験と思ってくれ。」

あらゆる服を實際に着て、張遼には何が似合うのかを模索していく。それに見るのは俺だけなんだから、そう恥ずかしがる事もないだろ？」

「うぐう、謙信の言葉は正論過ぎて嫌いや……」

「正論結構。反論がなければ強制執行だ。」

取り敢えず極端な方向性で選んで、そこから二人で着地地点を探っていこう。

という訳で、これどうぞ」

「ウチも理屈は分かるんやで、けどその服は……ふりふりで可愛すぎるっ！ ウチには絶対に合わん。分かりきってるのに試着するのは時間の無駄やろ?!」

「取り敢えず着てみれば、フリフリがどう見えて何処が駄目なのか分かるだろ。正直こうして口論している方が時間の無駄だ」

「あーまた正論言ってくれてからに！ 分かった！ 着る！ 女に二言はあらへん！」
こうして一時間ほど着せ替え人形&お化粧人形と化した張遼は、終わつた時にはすっかりぐったりとした様子になつてしまつたのだつた。

「あーあかん、落ち着かん。なあ謙信、これほんまに似合つとる？」
「何自信なさげにしてんだよ、滅茶苦茶可愛いじゃないか。やっぱり地力が良いと服も化粧も映えるし、やりがいのある仕事だつたよ。」

その証拠にさ、すれ違う街中の女達、男達が張遼を見てるじゃないか」

先ほどの一時間で、二人の間にあつた微妙な距離感は見事に無くなつていて、結構好き放題言い合える空気が出来上がつていた。

「そりやウチのカッコが可笑しいからで」

「張遼の観察力なら分かるだろ、女性からは羨望、男からは欲望を向けられてるつてさ」
「羨望も欲望も慣れとる視線やのに、男女逆やとこも居心地の悪いもんなんか」

「普通はそれこそ逆なんだが……まあそれが綺麗な女性に対しての正しい反応つて事だよ」

「難儀や……」

周囲の反応からして、俺のコーディネートが大成を取めたのは間違いない。けれど初めて着る類の衣装に張遼が萎縮してしまっている。

「綺麗になったのは実感できたって、さっきは言ってただろ」

「別人みたいやとは言ったよ、そやけどなあ」

結局のところ、先程言った通りに容姿端麗、背が高い、均整の取れたしなやかなシルエット。文句のつけようのない美人である張遼にはどんな服でも似合ってしまった。逆にどんな方向性で行こうか選択肢が多過ぎて悩むほどに。

似合わないと拒否していたフリル極盛りの衣装ですら、黙っていれば完成されたお人形さんみたいに見える程似合うのだ。

一時間行つた喧々譁々の協議の結果、下はホットパンツ、上は淡い青色でタイトめなブラウスを合わせ、元が良いので最低限の化粧、軽くチークと口紅なんぞ差せば完成だ。肌が艶やかで長く引き締まった足を持つ張遼には絶対にホットパンツが似合うと思つたので強く勧めた。

健康的であり色気がある、というのはこの服でしか実現しない。そしてタイト目なブラウスは敢えてチャイナボタンを上まで閉めて清楚感をプラス。そうすれば最強の張遼の出来上がりだ。

さあ、この最強張遼を連れて何処に行こう？

きつと何処に連れて行っても楽しいに違いない。

はてさてそれで、張遼を連れてどうしていたのかと言うと。

「あ、いや、何処の店で買ったとか聞かれても、謙信、これ何処の……えつ、化粧法？
いやウチに聞かれても……」

女子通りを練り歩かせて自信を持ってもらおうとしたり、

「ちよ、な、ナンパかこれ、ナンパかこれー!」

茶店のテラスでわざと長時間待たせてナンパを経験させてみたり、

「この格好で働くの?! えつ、ほんまに?!」

その茶店で給仕の真似事をさせてアタフタさせたり、

「このカツコで何時もの場所行くのは恥ず過ぎるつて!」

何時もの酒屋や居酒屋にお披露目に行ったり、

「絡み酒つてこんな面倒なんか! くそつ、落ち着けお前らー! 次ウチに触ったら

問答無用でぶつ飛ばすからな!」

居酒屋で給仕をさせてセクハラを体験させてみたり、

「謙信、もう許してーっ」

と泣いて懇願してきたので、今日の所は終了。

「今日はこれで終わり？　ありがとーな……じゃないわ！　全部アンタの差金やないかっ！」

あつ、ごめん、何でもない、何でもないからもう正論突きつけんといて、筋通そう思て身体と意地が反応してまうから、もう許したつて」

俺はにつこりと笑つて許し、翌日再び会う約束をして今日は本当に終了。

そして翌日の早朝、ぐったりとした様子の張遼と合流し、とある商人の家に向かった。「こんな朝早くから何やんの？　あつ、昨日買った服やなくてもええやんな？」

「まあ今日は商人の手伝いをしようかなと思つてるから、動きやすい何時もの服で大丈夫。」

けど折角何着か方向性の違う衣装も買つて送らせたんだから、適当な機会に着てくれ。張遼は美人だから目の保養になる」

「目の保養つて、アンタに言われてもなーつて感じやわ」

「なんだそれ」

「なんでもあらへんよーだ」

そんな軽口を叩きながら、約束をしていた商人の家についた。

「えつ、めつちや大きいとこやん、こんな所で手伝う事つて何かあるん？」
「華琳の御用聞きだからかなり儲けてるのは確かだな。」

まあ今回は手伝いというか、見学するだけ。けど間違ひなく面白いよ」

「まあ、昨日も楽しいといえれば楽しかったし、ここは謙信を信じるわ」

張遼と共に戸をくぐり、待つていた男性の中年商人と対面する。

互いに挨拶を済ませ、早速動き出す。商人の時間は単価が高い、行動の一切を無駄にできないのだ。

俺達はただ彼の後について回り、帳簿のつけ方、仕入れ等の商人としての説明を聞いたり、また商談の席に相席させて貰ったりする。

勿論交渉中は一切口を挟まず、彼と商談相手の激しい舌戦と駆け引きに舌を巻くのみである。

幾つかの交渉を見終わり、次は彼の元で修行しているという若い男性が近くの村に食材の買い付けに行くのに付いて行く事にした。

馬を駆つてとある村に着くと、村長と農家の人間を交えた交渉が始まる。

だが交渉事は大元締めと若い彼とでは練度が違うので、詰めの部分で長引いた。

これ以上見てもしょうが無いと、俺と張遼は農家の見学に出掛けた。

若い商人には交渉が終わっても俺達が戻らないようなら先に帰つて大丈夫だからと

言い残し、村へ行く。

そこでは何人もの人間が野菜を収穫していたり、空いた畑を耕したり、牛を世話したりしている。

俺達は商人の元締めの名前を出し、働いている様子を見学させてもらったり、実際に混じって土いじりをさせて貰ったりした。

農業体験に汗を流し、日が頂点を過ぎてしばらく経った頃に陳留に帰還し、商人に挨拶をしに行く。

張遼が「今日はお邪魔してすまんかった。色々と勉強になった、有難う」と言うと、商人は「張遼様と謙信様の威光を借り受ける事が出来ました。私もですが、修行中のあ奴も意見を通しやすかったでしょう」と朗らかに笑った。

俺と張遼は目を合わせ、「まんまと良いように利用される自分達に商人は無理だな」と笑いあつた。

次に向かったのは寺子屋だ。

張遼は書類仕事も多少出来るので、簡単な授業なら初めてと言えどやってやれない事はない。

だが子供達というのは大人の思い通りには動いてくれない。

武官の中ではかなり温厚な張遼もあまりの脱線具合に切れたり、それで泣かれておろして宥めたりと、見事な新任教師らしい働きを見せてくれる。

休憩を入れつつ一時間程座学を行い、次いで外に出て体育的な授業を行う。

ここでは張遼の独壇場だ、生意気言つてた子供達も張遼の凄まじい身体能力を魅せつけられて目を輝かせている。一気に打ち解けた子供達と張遼は、追いかけてこ等をしながらとても楽しそうに一時間を過ごした。

そうして三十分ほど子供達と外で過ごし、その子達との授業が終わった。

名残惜しそうにしている子供達と手を振って別れる。張遼の目の端に光る物が見えた気がした。

しかし、間もなく次の子供達がやって来た。この時代子供も立派な労働力として扱われている。なので長時間の拘束は難しく、一日二時間弱ずつ時間を割り振って教えているのだ。

えっ、まだやんの?! という表情の張遼に、俺はしっかりと頷いて返した。

二回目の授業を行い、張遼はすっかり子供達の扱いにも慣れたようで、立派な教師として子供達に接していた。

夕暮れになり、最後の子供達と手を振って別れた俺達は城に向かった。

今日はまだやることがある。

66. 仕事人間の休日

張遼は日暮れと共に別れると思つていたようだが、今日はこのまま外に出ると伝える。

「外出するん？ そらまたなんで？」

「極少人数での旅の予行練習。張遼は二三人での野宿した事あるか？」

「えーと、あれ、案外無いんか。野宿は軍とか部隊単位でしかした事ないんやな。けど慣れとるは慣れとるで？」

「大人数の行軍と少人数での旅は全然別物だよ。料理、天幕張り、見張り、火付け、可能な限り自分でやらないといけないからな。

行商とか、商人の護衛とか、単純に旅行とか、経験しとけば何かと役に立つだろうし、やつておこう」

「あー確かに自分で全部やるのは久しぶりやし、料理とかは全部他人に任せきりだからきしや。良い経験になると言えばそうかも」

「そういう訳で行こう。道中色々教えながら行くから、必要と思うものだけ頭に入れてくれ」

「はいよー」

そして荷物をまとめ、夕暮れの中出発する。

この四百年で得た知識を経験談を元に語っていく。

張遼は楽しそうにしつつ、しかし真剣に話を聞いてくれた。

そうして川の近くで馬を止めて荷物を下ろす。

火を起こし、天幕を張る。

「今日はここで寝よう」

「あー自分で火起こししたり天幕張るとか新兵以来やからめっちゃ手間取つてもうた」

「案外自分では出来ると思つても、細かい部分を覚えてなかつたり、使つていた道具が違つていたりで出来なかつたりするからな。」

それじゃあ適当に料理を作るとしますかね」

「やったー謙信のご飯や!」

「陳留の近くだから新鮮な野菜をふんだんに使えるけど、本来はもつと粗食だから注意。」

後、食材も持ち運びやすいもの限定で、器材なんかも少ないからどうしても質は落ちる、あんまり期待しないでくれよ」

「うんうん、分かつとる分かつとる」

「料理の手伝いもして欲しい所だけど、夜の野外で初料理は難易度が高すぎるよな。取り敢えずどんな感じでやるのか、手順だけ見といてくれ」

「はい」

その後、星空の下で食事にする。

料理を食べる音、焚き火が爆ぜる音、虫の鳴く音。少数だからこそ感じる夜の差異がそこにはあった。

「なんや、風情、物寂しき、少しの怖さ。いろんな感情が混ざった不思議な感覚やわ」
「二人だからマシだけど、一人だったら流石に怖さや寂しさが勝つよ。」

後風情というなら、上は見たか？」

「なんやいきなり。上？」

見上げた空には満天の星空がある。

「うわあーなんやこれ、星空ってこんなに綺麗なもんやったっけ？」

油の効率的な精製法は過去の生徒に伝えており、ここ百年程で火のコストは大幅に下がった。

だからそこそこ裕福な街では、街の至る所で煌々と火が焚かれているし、個人宅でも火が扱われている。

だから街の生活に慣れてしまうと、火の光と煙で星がくすんで見えるのだ。

忙しい張遼が夜に街の外へ出るとなれば行軍ぐらいのものだろう。

そして軍として外に出るタイミングでもこれ程綺麗な夜空を見上げる事はほぼない。

夜になれば天幕を張り、将は天幕の中で過ごす。外に出たとしても見張りの為、獣避けの為に盛大に火が燃やされている。

奇襲目的で夜に火を焚かないとしても、上に注意を向けるなんてしないだろう。

だからずっと戦いに身を置いていた張遼が、ここまで鮮明で明瞭な星空を見たのはきつと久しぶりの事なのだろう。

「満天の星空、下弦の月、鈴の音、話の分かる相方、美味しい手料理、最高に旨い酒が飲めそうやわ」

それから色々な話をした。

幼少期の話、丁原の話、董卓軍の話、曹操軍の話聞き、俺は昔丁原と同じ私塾にいたと言い、丁原の格好いい、恥ずかしい、馬鹿馬鹿しい話を披露した。

料理も食べ終わり、酒も見張りに支障が出る手前まで飲んだので、後はもう俺謹製のテントで寝るだけだ。

見張り番はくじを引いて俺が先に寝させてもらう事になった。

少人数での見張り番は張遼にとって初めてかかなり久々の経験だろう。さて、張遼は見張り一番の大敵、退屈をどうやって潰すのか。

その事を気にしつつ、俺は天幕の中にいそいそと入り、寝袋に潜り込んで寝る体勢にしばらく明日のプランニングをしていると、外からぼそりと一言聞こえた。

「さて、飲むか」

「馬鹿言うなっ！」

テントから飛び出て叱ったら、ちゃんと見張りをしてくれました。

翌日の朝、簡単な調理を手伝ってもらいつつ料理を仕上げ、二人で食べていた。

「ウマウマー。なんやウチ、料理の才能あるやん」

「簡単な料理だったけど、捌くのも調味料のさじ加減もすぐにコツを掴んでたな」

「にやは、謙信に褒められると自信つくわ！」

そういうえば、これからどないすんの？ 旅気分も味わえたし、もう帰るんか？」

「いや、そう掛からない距離に寺子屋もどきがある。そこが今日の目的地だ」

「は？ 屋根あるところが近くにあんのにわざわざ野宿したんか？」

「良い経験になっただろ？」

「いやまあそやけどさ……まあええか、そこで何かするん？」

「家族と過ごすように、ひたすらのんびりとした生活をしてもらう」

「のんびりした生活ってのはとんと無縁やったから、経験の一つにはなるんやろけど……何か勿体無くない？」

「時間の贅沢な使い方ではあるな。まあ戦いのない世を想像する土台にはなるだろうから、今後のためって考えてくれ」

「まあ謙信の言う事やし、やってみるわ」

「多分途中で音を上げるだろうけど、それも経験だ」

「何に音を上げるって言うんや？」

「それはおいおいな。それじゃあ向かうか」

「??」

首を傾げる張遼に意味深な笑みを返して話を切り上げる。そして朝食を食べ終わつた俺達は元学び舎へ向かうのだった。

「ありや、結構綺麗に手入れされてる」

学び舎はそこそこ綺麗に保たれていた。

陳留近郊の最後の教え子達は華琳の祖父である曹騰の代になるので、結構ボロボロになつていてと思つていたのだが。

きつと未だに教え子の誰かが直接来るか、教え子に頼まれた人が来て掃除をしてくれるんだろうな。

「はー森の中にこんな立派な建物があるとはなー」

「森の中じゃないと木の仕入れが出来ないから一人で作れないんだわ」

「えっ?」

「いや、何でもない。取り敢えず中に入ろう」

「ええんか?」

「大丈夫大丈夫、注意事項を守ってくれたら誰でも使っている、と壁に彫り込んであるからな」

「あつ、ほんまや。よー知つとんなー」

「こういう施設は国中に点在してて、俺も旅をしていた時に世話になっていた」

「はあ、謙信といると世の中知らんことばかりなんやと痛感するわ」

しみじみと言う張遼に笑みを返しつつ、行動を促す。

「それじゃあまず掃除からやろう」

「使わせてもらう礼やな。いっちょやったるかっ!」

さすがに十数人が使っていた学び舎を二人だけで一気に清めるのは荷が重いので、まずは使う所だけを掃除していく。

一時間近くを掃除に使い、綺麗になった談話室でようやく一息をつく。

「あーつかれたー掃除ってこんな大変なんか。身体の変な所が痛い」

「普段使わない筋肉だろうからな。はい、水」

「ありがとー。ん、生き返る〜!」

「酷いようなら整体もしくか?」

「あつ、頼める?」

一二十分ほど筋肉を解してやると、張遼は違う意味でぐったりとした様子。

「これあかんやつや」

「時間は幾らでもあるから、好きだけぐったりしてて良いぞ」

「うん、ちよつとぼーつとしく〜」

その間に俺は掃除の続きでもしておこう。

三十分ほど掃除をしていると張遼が起きてきた。

「なあ謙信、ウチここで何したらええの?」

「自分のやりたい事をやるか、寝転がって身体を休めるか、どっちかじゃないか?」

「いや、こんな何も無い所でやりたい事って何もないし、疲れも取れとるしなー」

「なら掃除の続きを手伝ってもらえるか?」

「うっ、それは朝の内に大分やったから、もうちよつとだけ勘弁して欲しいかなー。
うーん、仕方ないから得物でも振ってよかな」

「いつてらつしやい。ある程度経ったら昼食の準備を手伝ってもらうから宜しく」

「あいあい」

「後注意、馬の遠乗りとかこの場所から離れるの禁止という事で」

「なんやそれ、まありよーかいや」

そう言つて張遼は学び舎の外に出て行つた。

俺はにやりと笑つてその後姿を見送るのだった。

二時間ほど掃除に集中し、ほぼ全ての場所を綺麗にする事が出来た。

陽も中点に差し掛かろうとしてるので、そろそろ昼食の準備をしよう。

俺は身を清めた後、張遼を呼びに行く。

彼女は体育の授業に使つていた小さめのグラウンドで偃月刀を振つていた。

「張遼、そろそろ昼飯の準備するから手伝つてくれ」

「ん、ああ、もうこんなに陽が高くなつとる。それじゃあ汗流したら炊事場行くわ」

そうして張遼に食事の準備を手伝ってもらう。

料理手伝い二回目だが、要領が良いので教えをどんどん吸収し、それらしい様になつ

ていく。

出来上がった料理を二人で食べ、会話に花を咲かせる。

そして片付けをして、再び張遼が聞いてきた。

「そんじやあウチ何したらええの？」

「言つたら、やりたい事を探す、寝転がる、どつちかだよ」

「えつ、また何か経験を積まず為にここ来たんちゃうの？ 午前中は昼まで時間がないからやらへんのかと思つてたけど……」

「それも言つたら、泰平の世になった時の予行練習をしようつて。今から何もやる事がない日をどう過ごすか、実践してもらおう」

「えつ？」

「という訳で、泰平の世になったら維持以上の鍛錬は必要ないだろうから、これ以上の鍛

錬禁止」

「えつ！」

「それじゃあ平和的な過ごし方を探して練習してみて」

「えええつ」

「こうして張遼の苦心が始まるのだった。

「えっと、取り敢えずごろごろしてみよ」

「……」

二十分後。

「あかん、落ち着かん！」

「狩り、狩りはありますか？」

「良いね。けど無益な殺生は生態系を壊しかねないから、夕食で食べれそうなのを二人で食べれる分だけ」

「任せろっ」

二十分後。

「どや！ 兎と鳥狩ってきたで！ ……あつ、夢中やったから全力でやってもうた。全然時間経ってないやん」

「血抜きとか教えて」

「ここをこうしてこうしてこう」

「はー見事な手際やなー。って、ウチの仕事盗られたっ」

「ちよつと馬の世話して来る」

「宜しくー」

十分後。

「アンタの馬に夢中なウチの愛馬に追い出されました」

「掃除してくる!」

一分後。

「やる所なくなつてた」

「ごごろごごろ」

十分後。

「あかんつ、何かしたい衝動が止まらん!」

「遠乗りは禁止されとる、訓練も禁止された、料理も食べたばかり……ウチ、他に休日になにやつとつたつけ? あつ、酒、酒盛りどや?!」

「昨日の夜にほとんど飲んだから、夕食に飲む分で無くなる」

「なんでやーっ!」

「やる事、出来る事、寝る以外、鍛錬禁止、遠乗り禁止、狩り禁止……あーもう分からん！」

謙信！ 何かやる事無いか?!

ほぼ一時間でギブアップだった。

「やつぱり音を上げたか。まあここには何も無いし、暇つぶしも用意させなかったからちよつと意地悪だったな。」

一応聞いておくけど、本当にもう思いつかない？」

「あかん、考えれば考えるほど泥沼やし、ごろごろしてたら自分の中の何かが崩壊しそうになる。なあ謙信、普通の人は休日って何しとるもんなん？」

「温泉や景観の為に旅行、家の中でごろごろ、裁縫なんかの座りながら出来る趣味、籠編みなんかの簡単な内職、買い物、食べ歩き、家族との団欒、誰かと友好を深める、芸術関係の制作、自己鍛錬、異性との出会い、恋人との睦み事、読書、掃除。」

ぱつとすぐ思いつくだけでもこれぐらいあるかな」

「あー言われればそんなんもあるなー」

「なあ、張遼って趣味ないの？」

「酒、人との会話、鍛錬、武器の手入れぐらいかなー」

「仕事に絡む物ばかりで、休日にしか出来ないって趣味はないんだな。

んー今できる物は……ごろごろ、紙と筆があるから絵、書、詩を描いてみる、短刀があるから彫刻を彫ってみる、後は無難に読書かな」

「ん、本とか持ってたんと？」

「隠し棚があつてね、三十冊ほど置いてあるよ」

「隠し棚つて、よう見つけたな。んーそんじやあ絵と彫刻に手を出して、飽きたら読書でもしよかな。」

あつ、そういえば謙信は何やってんの？」

「俺か？ 今は手紙を書いてるよ」

「誰に？ つて聞くのは野暮か。しかし手紙か……ええ機会かも知れんなあ。」

なあ謙信、ウチにも筆と紙貰えるか？」

「ああ、手紙を書き終えたら医学書をまとめようと思つてたし、紙は束であるよ。これを機にいろんな人に書くといい」

「おおきにー！」

結局その後、張遼は夕飯の時間になるまでずつと手紙を書き続けていた。

故郷にいる人達、育ての親、昔の仲間宛てであーでもないこーでもないと苦心しな

がら、しかし楽しそうに筆を走らせていた。

張遼が狩ってきた兎と雉を使って結構贅沢な料理を食べ終え、さあ陳留に帰ろうと後始末をしている時、張遼が神妙な様子で話し始めた。

「三日間の休日も、もう終わりなんやな」

「そうだな」

「長いようで短かった、けど密度はすっごく濃かったわ」

「おう、楽しめたか？」

「初めての事ばかりで楽しめたし、謙信の思いつきには苦しめられたし、新しい情報の吸収に慌ただしかったし、自分の見識の狭さを知って勉強になったし、総じてやっぱり楽しかったよ。」

ウチ自身の方向性みたいなもんも見えたり、得る物の多い休日やったわ」

「それなら何よりだ」

「ありがとな、謙信。」

……ウチの真名、霞や。アンタにならウチの真名を預けられる。一応、男に許すのは初めてなんやで？」

「そりゃ光栄だ。俺は白という」

「うん、ありがとな。なあ白、天下泰平の世が来たら、また付き合つてや」

「喜んで。俺も霞といた日はずっと楽しかったよ。帰っても宜しくな
うん！ これからもよろしゅうな！」

67. 欠けたるものの無い素晴らしき日々

皆との休日はとても楽しい日々だった。特に真名を交わしていなかった相手との距離がぐっと縮まった事が喜ばしい。

張遼とは何気ない日々を実践させ、いろいろな経験をさせた。そして一緒に小さな旅をし、将来の展望について話をした。

典章とは料理の腕を競い合い、華琳や皆に料理を振る舞って皆の笑顔を見た。そして最後に再戦の約束をした。

程昱とは街を巡り、今後の計画を飲み食いしながら話し合った。そして日が陰るまで日向ぼっこをした。

郭嘉とは華琳自慢の蔵書に埋もれて議論した。鼻血が出そうになる度体調を整えずとずっと話し合った。

勿論それまでに仲良くなっていた人間とも交流を深める事が出来た。

夏侯姉妹とは再会した当初に華琳を一人にした事で怒られてギクシャクしていたが、買い物に付き合ったり、とある人形の関節部などを調整したりしていると、嫌な雰囲気はいつの間にか吹き飛んでいた。

荀彧とは花嫁修業に付き合つてやり、ひたすらに女子力を高める手伝いをした。

許緒とはご飯を食べ、戦い、食べ、戦いを繰り返した。彼女の笑みと才能の開花が止まらぬ日々だった。

三羽鳥とは以前した意地悪のお返しに付き合わされて随分散財させられたし、更には各人の我儘に振り回された。

張三姉妹とは歌に踊りに練習に付き合わされ、また買い物などに連れ回され、彼女達の方アンに追い回された。

曹操とはただ日常を過ごした。十分の一に減らされた仕事をゆつくり片付け、終わつたら料理を作り、酒を作り、詩を作りと、とにかく趣味に埋没する。最後の日にはお墓参りもした。

幸せな日々だった。誰もが輝き、成長した日々だった。

だがそれも今日で終わり。明日には今まで以上の闘争の日々がやって来る。

願わくば、こんな日が無事、この子達にやって来る事を願う。

……見届けられないだろうからこそ、願うのだ。

翌日、何時も通り仕事漬けの日々が始まった。

しかし誰もが心身ともに充実し、効率は増すばかり。国内だけでなく、涼州に手を出

しつつ多面的な作戦を行う余裕が生まれていた。

涼州の取り込みは裏側からゆくりと、しかし着実に進み続け、そしてついに馬騰が倒れた。

そこからは急転直下に一気に成だ、ものの十日で涼州は華琳の手に落ち、馬騰の後継は蜀に逃れた。

……行けるなら後で馬騰の墓参りに行こう。そして酒とつまみを持って昔話に花咲かせよう。

彼女もまた、愛しい教え子の一人だったのだから。

全てが順調、曹魏を止められる者は誰も居ないかに見えた。

だがしかし、天が曹魏に順風満帆を許す筈がなかったのだ。

涼州併呑後の雑多な仕事に皆が忙しく動きまわる中、予想よりも早く終結した涼州併呑に医者たる俺の出番は少なく、五日ほどで部下に丸投げをしても大丈夫になってしまった。

午前中に仕事を終わらせ、寺子屋か街の診療所にでも行こうかと思った矢先、華琳が部屋にやって来た。

俺を呼び寄せるでもなく、開店休業中の医務室にやって来た事に嫌な予感がした。

彼女は無言のまま室内に入つて来ると同時に鍵を閉め、一枚の紙を取り出して俺に手渡した。

なんだろうと受け取つて中身にぎつと目を通すと、それが派兵の計画書だと分かつた。

現状ではただの播さぶりにしか見えぬ消極策、しかし八手先の有利を取る為に放たれた絶妙の一矢。

この計画書がどうしたのかと尋ねようとして、彼女の顔を見た時に気付いた。彼女は痛みを堪えるように表情を歪めている。

鍛え抜かれた鋼の精神力を持つ彼女が痛みを表に出す。その異常事態には見覚えがあり、途端に悪寒が背筋を震わせる。

俺は受け取つた計画書を改めて読む。

計画書には派兵場所が定軍山、担当者は秋蘭と流琉、実行日時は明日という情報が書かれていた。

もう細かい三国志の歴史は覚えていないが、この二人が道半ばで死ぬ将だとは覚えていた。

だから、ここがきつと彼女達の死に場所になるのだらうと予想がついた、ついてしまった。

華琳がここに来て、苦痛に顔を歪めている理由をようやく理解した。

「……どうする？」

俺は端的に聞いた。

「どうすればいい」

彼女は誰ともなく眩き、内心を吐露した。

「私は天の意志を見逃さぬよう、常に思考してきた。天の意志に逆らえば頭が痛くなるという私の特性を存分に活かす為に。」

全ての国の動向を把握し、我が国全ての作戦を決め、在り得ない事態も考慮しながら膨大な作戦を頭の中で練り続け、破棄し続け、全ての可能性を調べ続けてきた。

そうして痛みを見つけたなら、そこを煮詰めに煮詰めて天の意志を探り、自身の被害が最小限になるよう腐心してきた。

そうしてようやく、小さい穴を穿ち始めた感覚があった。天の意志と私の感覚が繋がり始め、どの程度なら許されるかが理解出来てきた。

一度きりならば、大逆であったとしても身の消失まではないだろう所まで塵を積み上げた。

けれど、けれどこれは……」

華琳が天を見上げ、睨みつける。

「どうにか出来ぬかと、何日も掛けて思考を錯誤したわ、そして今日どうしようもなく答えに至った。」

この二人を生かすのは、難しい」

今までにない強い痛みはこの作戦が天の意志を秘めていると華琳は気付いた。

本来天の意志は人という矮小の身では決して覆せないものだ。だが天下の傑物曹孟徳は、思考と試行の果てに積み上げた物によって二人を助ける事が出来てしまう。

しかし助けてしまえば、近くやって来る運命の為に行ってきた全てが徒労に終わり、水泡に帰す。

勝算を、完全に失う。それを理解している。

「天と戦った者などいない、これはあくまでも私の予感。」

けれどももう長く付き合ひ続けた頭痛と感覚が、これは確信に近い予感であると告げてもいる。

運命を曲げられる機会を得ている私は、どうすれば……」

選択を迫られている。大事な身内か、国の将来か。

俺の知る英傑である曹操ならば、身内を切り捨てて国の礎としただろう。

だが俺の知る華琳という少女は、情に厚く、欲が深い。そして何より失う事に慣れていない。

今生において耐え難き別れの経験などは少なく、墓参りをした人物、慕っていた祖父ぐらいのもの。霸王の記憶の中には多く存在するのだろうか、それはあくまで他人の感情と言えた。

だからこそ、どうすればいい、なのである。

勿論失う覚悟はしていただろう。けれどこうして向き合った時、決意が鈍った。

自身の才と努力によって全てを得てきた少女に、失うかもしれないという恐怖は重すぎたのだ。

しかし、

「分かっている。どうにかするのは私で、切り捨てるべき選択肢も分かっている」

その恐怖に屈する程少女は弱くなかった、ただ一人で抱え込むほど強くなかっただけだ。

決断はもうなされている、最後の最後に弱さを誰かに吐き出したかったのだろう。

けれど、

「そうだな、じゃあ秋蘭と流琉を助けに行こう」

俺は身勝手な選択肢を提示する。

「……えっ?」

「何だ、それを俺に頼みに来たんじゃないのか?」

「……馬鹿言わないで、それじゃあ積み上げてきた物が」

「分かっている。けれど天の意が及びにくい俺が手を出せば、何とか成るかもしれない」

「かも知れない、でしょう？ 博打は打てないわ」

「そうだな、博打以外の何物でもないな。」

勝負相手は天で、勝てば身内二人が助かり、負ければ魏が消えるという極端な対価だ。

しかも分の悪過ぎる賭けなわけだが……勝てば全てが手に入るぞ？」

魏の総大将を唆す甘言である。

管理者の一員として、ここで華琳が非情を決断し、運命の赤壁決戦で天の思惑を超えられると非常に困る。

故に天の御遣いの利になる行いを推奨し、大一番でのどんでん返しを厭う気持ちから出した発言……であったのなら、

「恐ろしい甘言ね」

華琳の鋭く重い視線が俺を貫く。

管理者としての立場で発言していたのなら、俺はきつと目を逸らしてしまっていただろう。そして俺は全ての信頼を失い、彼女は非情を決断し、赤壁で彼女の勝利は確定していたかもしれない。

それほどまでに華琳の目は透き通り、窮まっていた。

だが俺は目を逸らさない、熱を持った目で彼女の冷たい視線を押し返す。そう、俺は熱を持っていたのだ。

華琳と再会を果たした際のあの熱を、俺は未だに抱えている。

「前に言った通り、俺は俺の出来る限りを尽くして華琳の傍にある。

だから華琳も、最善を尽くして勝利を目指してみてくれないか」

これは管理者云々ではなく、俺が心の底から望む未来を欲したが故の発言だった。

もしこれで俺の使命が終わり、続きがあつた場合の最善を掴むための言葉。

一緒にいると誓った少女と、その少女の元を集った皆。その誰も失わずに続きを見た
い。

そんな熱が俺の胸の中に存在していたからこそ、華琳の視線を真つ向から受け止められたのだ。

しばし視線を交わし、華琳は何も言わずに目を閉じた。

そして深く深く熟考し始めた。

幾ら揺れていようと、信頼する俺からだろうと、甘言をそのまま通す程に彼女は弱くない。

だから精査する、俺の言葉とその可能性を。

思考の海に沈む華琳と華琳の判断を待つ俺、二人の間に沈黙が重く流れる。

華琳の醸し出すプレッシャーに時間の感覚が狂い、どれだけの時間が経ったのか分からなくなり始めた頃、彼女は決断した。

「……そうね、私は何を血迷っていたのかしら。

白、失わぬまま全てを手に入れるわよ」

彼女は傲然とした声と表情で言い切った。

自身の才能と周囲の人間の才覚を信じて、彼女は分の悪い賭けに乗った。

「ああ、それでこそ我が友だ」

俺の甘言は成った。

天はこちらのミスを見逃すほど甘くはない、一度きりの些細なミスでさえ取り返しの付かないものにしてくる。

けれど彼女を見て思ってしまう。

稀代の天才である華琳ならば、積み上げたものが消え去ったとしても、天への大逆を成す奇跡を見せてくれるのではないかという不安と期待を抱いてしまう。

もし彼女が事を成し、それ故に管理者の仕事が失敗してしまっただとしても、その時は素直に帽子を脱いで彼女を称賛しようじゃないか。

華琳と作戦の確認をする。

天の意志を完全に挫いて積もらせた勝算を完全にゼロにせぬよう、魏の負け戦にする。

敵味方に魏の者だと認識されなければ天の目を誤魔化せるかもしれないので、正体が分からぬようにする。

この二つを決め、俺は出立の準備を始めた。

翌日、秋蘭達の出立を見送った俺は仕事を片付け、闇夜に紛れる装いと仮面で変装し、吹雪に跨って後を追いかけた。

そのまま距離を取りつつ後をつけ、無事に定軍山に辿り着く。

まだ戦闘そのものは始まっていないと確認し、吹雪を適当な場所に待機させておく。吹雪がいると魏軍に俺がいるとバレてしまう。

準備を整え終わり気配を探る、すると定軍山には既に戦場の気配が静かに漂い始めているのを感じる。戦いこそ始まってはいないものの、向こうの兵達の気が漏れ始めているのだ。

その気配にいち早く秋蘭が気付くが、時既に遅し。

秋蘭が兵に指示を飛ばそうとしたタイミングで黄忠と名乗る美女が現れ、戦端は一方的に開いた。

すぐさま激しい戦闘が始まるが、俺はまだ動かない。

魏軍の敗戦が濃厚であると両軍が認識し、秋蘭から撤退の指示が出るまでは齒を食いしばって待機する。

しばらくの攻防の後、隙を見つけた秋蘭は撤退の指示を出した。

だがここまで用意周到に待ち受けていた蜀軍に隙などあるう筈もなく、意図して創りだされた虎口に秋蘭は飛び込んでしまった。

いや、秋蘭はそこが死地と知りながらも飛び込まざるを得なかったのだ。限りなく低いとはいえ、そこにしか勝機は無かったのだから。

そこで俺はようやく動く決断を下す。

最早敗北は確定、ここで暴れた所で大勢は変わらない。

俺は懐から火薬玉を三つ取り出し、火打ち石を打って導火線に火をつける。

タイミングを図り、投擲。

蜀軍の多くの兵が魏軍包囲の為に外から内に向いているので、外から飛んで来た火薬玉に気付いた者はおらず、その大音量と衝撃を油断の中で浴びた。

馬が暴れ、また多くの兵が倒れ伏し、撤退の道ができる。

あまりの混乱に場は混沌と化しているが、追い詰めて油断していた蜀軍と追い詰められて神経を張り巡らせていた魏軍では意識が全く違う。混乱具合は蜀軍の方が遙かに

上だった。

姿勢を低くして走ればそれだけで見つからずに渦中に飛び込む事が出来た。

目立たず、しかし動き回る。敵味方問わず、しかし蜀の兵と指揮官を多めに狙い、兵や馬の背を蹴ったりして、ひたすらに混乱が大きくなるように行動する。

混乱が大きくなる中、意識を最も早く切り替えたのは魏軍の将である秋蘭だった。自身に残っていた戸惑いを全て払拭して芯ある声で指示を出した。

将が惑えば兵も惑う、将が進めば兵も進む。

秋蘭と流琉の部隊は誰よりも素早く立ち直り、戦線を離脱した。

次いで早く立ち直った黄忠が魏軍の背を剛弓で射ろうとするが、致命的なものとは出来るだけ飛礮などで逸らす。磨き続けた隠形でもさすがに居場所がバレそうだと焦れつつ、その場を後にする準備をしながら必死にさり気ない邪魔をしまくる。秋蘭達が完全に敵の包囲網を抜けたのを確認した瞬間、形振り構わず走り出す。追手の気配を背後に感じつつ、吹雪を呼び寄せて何とか場を離れる事に成功したのだった。

作戦を成功させた安堵はあったが、そこで立ち止まる訳にはいかない。

俺は吹雪を酷使して駆け、追手を振り切った事を確認し、魏領にある昔使っていた学び舎まで至り、倒れた。

天の流れに逆らった事で起きていた意識の断裂を無理矢理に無視していたのだが、華

琳の元に戻る前に限界が来た。

意識が浮上する感覚と共に、近くに誰かがいると気付いた。

俺は慌てて跳ね起き、自分や荷物に変化がないかを確認し、特に変化がないと知ってホツとした。

次いで誰がいるのかを確認しようと気配のある場所、以前は教室として使っていたスペースへと足を向ける。

扉一枚挟んだ状態で気配を探ると、完全な一般人だと分かる。

俺は扉をノックし、ゆっくりと開ける。

中には一人の妙齢の女性が掃除をしていた。

その人物に話を聞くと、彼女はとある生徒の孫らしく、定期的にここを清掃するようにとその生徒に頼まれていたようだ。

一室に鍵が掛かっているのを不審に思っていたが、鍵を持っているという事はこの卒業生の誰か、またはその誰かの子なので放置していても大丈夫と判断したらしい。

俺は彼女に今が何時なのか、陳留はどうなっているのかを聞いた。

そうして今が定軍山の戦いから十五日程経っていて、魏が呉を攻めていると知った。女性に礼を言い、慌てて外に飛び出す。

草を食んでいた吹雪は俺の姿を見るなり駆け寄ってきて、首を擦りつけて甘えてくる。

心配をかけた彼女に撫でながら謝り、もう一走りを頼む。疾く疾く駆けるが、それでも間に合わなかった。

魏軍は敗走していたのだ。

魏と呉の折衝地、その近くで敗残兵たる魏軍の姿を見つけた。

俺は運ばれる負傷兵達の治療をしつつ、軍の中心へと向かう。

中心には険しい表情で馬を進める華琳がいた。

俺が傍に駆け寄る前に彼女が俺に気付いた。

目を見開いた後、きつく瞑り、齒を食いしぼるような仕草をした。

俺は彼女の前で跪いた。

「駆け付けるのが遅れてしまいました。申し訳ありません」

彼女は小さく、

「心配したんだから、馬鹿」

そう零した。

68. 天意、失意、決意

陳留に舞い戻った俺達は離れてからの経過を話しあつた。

俺の報告は秋蘭と流琉が無事に戻ってきた事で成功したと知れていたので、端的に済ませる。

そして華琳から何故呉を攻めなければいけなかつたのかを、何故負けたのかを聞く。

『天の流れのままに進み、孫策が死に、戦う事もなく逃げ帰ってきた』

事細かに説明されたが、事態の推移を簡潔に表すところなる。

つまりは以前呉にいた時と同じ事態が起き、俺という身代わりが居なかつた孫策は討たれた訳である。

……胸に去来するものは、ある。

孫策はかつての仲間で、間違いなく大事な人だつた。その彼女が死んで何も感じぬはずがない。

ましてや、俺が彼女の死に関与している可能性は大きい。

俺が二人の宿将を助けたから、彼女は死んだのかも知れないのだから。

初めは寂しさや申し訳無さよりも、怒りが勝つた。

自身の身勝手さに九割、そして八つ当たりが一割。

誰でも想定できるような結果を想像できなかった事、自覚のないままに雪蓮よりも華琳を選んだ事、そしてそれを自覚した今激しい後悔に苛まれている事。

自分の甘さ、あまりの身勝手さに憤死してしまいそうになる。

そして未熟な事に、天の御遣い君はどうにも出来なかったのか？ と、心の中で八つ当たりをしてしまった。

その事に対しても心が沈む。四百年生きた俺が子供相手に何を逆恨みしてるんだと大いに凹み、雪蓮を、いやもう俺に彼女を真名で呼ぶ資格はない。孫策を殺す原因を作った俺が何を言ってるんだと更に凹んだ。

そして理不尽な怒りが過ぎ去ってからは、罪悪感と無力感が襲ってきた。

天の流れを変える事が出来なかった事に強く打ち拉がれたのだ。

以前身を挺して庇い、管輅から孫策という存在の持つ流れを変えられたと聞いたが、結局孫策は死んでしまった。

無力感が心身を蝕み始めていると自覚しつつ、しかし明確な意志を持ってそれを跳ね除ける事が出来なかった。

そんな懦弱な俺の内心を知らず、華琳は強く拳を握りこみ、声を荒げて続けた。

「天が御使いを勝たせる為に何らかの方法で猶予を与えとは思っていた。けれどその

やり方が恐ろしく気に食わない。

私の落ち度が発端ではあるけど、決して納得出来ない。

私が関羽を手に掛けようとした時は何度も防いだのに、建国の英雄を、偉大なる武人を路傍の小石如きに討ち取らせるの？」

華琳は憤怒の表情でそう言った。

彼女は自身の落ち度が発端と言うが、今回無断先行して首を切られる事になった許貞部隊は此度の戦闘には参加しない筈だった。

孫家との因縁と確執から逸る様子を見咎められて防衛に残されていた彼ら一味はしかし、他の部隊に散り散りに潜り込んだのだ。

規律の厳しさ正しさは他軍よりも頭二つ抜けている曹操軍だ、平時通りであればすぐに企みは発覚し、すぐさま防衛に戻れと命令され、従わなければ首が飛んでいただろう。だが曹魏の勇名にあやかりたい、またなし崩しに軍に入れてもらおうとする輩が進軍路の村々から勝手に合流して来たりと想定外のハプニングが多かった。

それ自体もおかしな話で、今回の戦は温暖な揚州に冬の間力をつけさせる訳にはいかない、さっさと決着をつけようと強襲したのが始まりである。

つまり今は冬入り前であり、多くの村は越冬の準備に大わらわな時期。何処もかしこも人手不足な筈にも関わらず、命を失う戦場に出てくる人間が山ほどいた。

幾ら魏が数において優勢で勝ち馬に乗れる可能性が高かったとしても、不自然な人の集まり方と言わざるを得ない。口減らしの為との理由が多かったそうだが、そもそも魏は農業改革も進んでいて口減らしなどしなくても大丈夫な程度には豊かだった。

何かが異常なのだが、だが個々に話を聞くと道理はそこそこ通っているのがまた奇妙だった。

何かがおかしいと思つていても、数は力であり、軍に併呑しないリスクを考えると否とは言えなかつた。

義勇兵の手綱を手放す道理は傍目に全く無い。拒否するならば強権を発動しなければならず、身内の不和をも招いただろう。

故に華琳は天の意志を感じながらも彼らを吸収せざるを得なかつた。こうなると華琳の目は不自然に集まつた義勇兵に向く。

そうして許貢一味は自身達の意図しない所で色々な偶然を味方にし、己の首を犠牲にしつつも恨みを持つ孫家に一矢報いた訳である。

「邪魔者の手勢が一人でも捕まれば芋づる式だったでしょうに。」

まるで太平要術の書が盗まれた日のように、不自然なまでの偶然の重なりで見逃してしまつた。

そして今回奪われたのは紙切れじゃなく、何物にも代え難き好敵手の首。

ああもう！ 本当に苛々するわ！」

自身が不甲斐ないゆえに好敵手を奪われ、まんまと天の望む流れに陥っている現状が腹立たしいようだ。

一頻り天に向かつて罵声をかけ終わり、表面上は冷静な表情に戻った華琳は展望を語った。

「結局今回の戦いは凌がれ、我が軍の兵力と風評のみが落ちた。

本格的な冬の到来で我が軍の兵と兵站は減る一方、対して呉は冬にも関わらず利があり、呉と繋がっている蜀にも利が生まれる。

冬の間私達の差は大幅縮まる事になる。時が経てばこちらが有利になるから、春の迎えと同時に彼女達は攻め入ってくるでしょうね」

「春に迎え撃つとなると兵站、士気、状態の不利が目立つな」

「ええ、だからせめて呉の態勢が整わない内に攻めなくてはいけない。

ふん、先に休日を取っておいて良かったわ。今後休んでいる暇は一切ないんだから」
憎々しげに天を向いていた目は何時しか前を向いていた。

華琳は既に次を見据え、瞳と心に強き意志を灯すのだった。

そして二ヶ月間曹魏は休むこと無く動き続けた。

呉は孫策が討ち取られた混乱を曹魏への憎しみを基に素早く収め、国力を高める為に二ヶ月の時を費した。

蜀は魏にちよつかいを掛け続けて兵に経験を積ませ、隙あらば人と領地を取り込みつと、魏にとつて的確に嫌な事をしてきた。

徐々に領地は削られたが、華琳は最低限の防衛を行うだけに留めた。

将来の利を捨てる行為に蜀の軍師だけではなく味方の軍師をも混乱させたが、華琳は断行した。

天の流れを読みきり、次の決戦こそが全てを賭する場だと理解していたからだ。

だから兵を極力温存しながら強化し、将を鍛えて高め、作戦会議を幾度も交わして二ヶ月を過ぎ、とうとうその時が来た。

春の気配はまだ遠く、冬の気配が色濃く残るそんな時期。

呉は兵こそまとめたが魏に意識を傾注しすぎて南の不安を除き切れなかった。

蜀は無傷で国力を高めたが、魏から奪った領地を上手く捌けずに動きが悪い。

だがもう一ヶ月もすれば優秀過ぎる両陣営は態勢を完璧に整えるだろう。

故に攻めるなら今だ、これ以上の待ちは彼女達に利する時間が多くなる。

「攻めるわよ」

華琳から短くも万感を込めた号が発された。

ついに来たかと魏の総員が動き出す。

今ここに最後の決戦が始まる。

……

…

のだが、俺の役目はもうないので、すごい手持ち無沙汰です。

対蜀呉の諸々の準備は既に完了している。

周囲の人間はいざ赤壁！ と気炎を上げ、適度なトレーニングなどしている訳だが、ここまで来ると医者の仕事はない。

俺が医者以外に出来る事なんて料理、教育、訓練相手ぐらいのものだが、本職の料理人も一大決戦前に凄く張り切ってる訳で、趣味として時たま竈を借りている程度の身分としては今から手伝わせてとはとても言い出せない。

教育も今更誰に何を教える時間が有るというのか。

将の訓練相手を買って出ようにも実力を晒しても良い相手は俺と訓練すると本気以上を出す脳筋ばかり。事故が怖いのでやれない。

華琳から貰ってきた仕事も先程全て終えたので、彼女達が出立するまでの二日をどう過ごそうか今から頭を悩ませている。

不測の事態を懸念して医務室での待機を命じられているが、時間を無為にし続ける辛

抱が出来なかつた。

「桂花の所にでも行くか」

桂花の担当である兵站管理などは既に最終確認も済ませている。

だが俺と同じように、何か問題が起つた場合に迅速に対応できるように待機場所に一人で拘束されている筈だ。

荀彧の元に居ると文を書き残し、俺の待機場所になつてゐる医務室から出る。暇を潰すちよつとしたお土産を用意し、桂花のいるだろう場所に歩を進める。

「それで治療班の頭である白殿は私の所にやって来たと」

「そういう事」

「万が一に備えて私と貴方は持ち場で常時待機と厳命されていたでしょうに」

やれやれといった表情でこちらを見る桂花。

「それが現状良くない方向に響いててな。」

訓練をやり過ぎて俺が何とかしてくれと思う馬鹿が結構な数いて困つてるんだわ。

だから書き置き残して避難して来た」

「私を盾にする気満々という事ですな。」

しかし、白殿の美貌に惹かれる馬鹿がまだ居ますか。戦争が始まるというのに本当に度し難い事です。全くもって男というのは……」

「女性も結構いるがな」

「恋する乙女は応援します」

「……そうかい。とにかく医師たる俺が無茶を誘発している可能性があるから逃げた訳だ。」

俺がいないと分かれば無茶はなくなるだろ」

「ふむ、そういう訳があるなら已む無しです。ならここに持ってきたおつまみと遊技盤は悪事から匿う為の賄賂ではないという事ですよね？」

「ああ、俺はちゃんとした理由を持ってここにいます。これは仕事仲間に対する純然たる好意だよ」

「なら頂きましょう。暇を潰しながら摘むとしましょうか」

それから数人ばかり突き指やかすり傷を拵えてやってきた馬鹿野郎達を治したが、その後桂花にめちやめちや説教されていた。

すると俺が桂花と一緒にいると広まったのか、怪我人の来訪は直ぐ様パタリと止んだ。

それからは誰もここには来ておらず、平穩な時間が流れていた。

決戦二日前、流石に皆気を引き締めているので桂花の出番となるような問題等は早々起こらないようだ。

俺と桂花は戦略将棋をプレイしながら、適当におつまみをつまみ、適当に話を弾ませていた。

「弓兵を下げます」

「うん、良い判断だ。なら騎馬を動かそう」

「こんな序盤に？　また戦略を変えてきましたか」

なんてやり取りをしながら二時間、桂花が真剣な表情で口を開いた。

「一つ、聞きたい事があります」

「一つで良いのか？」

「……一つで良いです。」

どうしてこれ程多彩で緻密な戦略を練られる人が軍議に参加しないのか。

脳筋連中の誰にも引けを取らない所か圧倒する武威を持っているのに戦闘に参加しないのか。

何故あれほどまでに華琳様と親しいのか。

折れた骨ですら半月で治す治療術は何処で会得したのか。

貴方について聞きたい事は山程ありますが、ここに至ればそれはもう良いのです。私
は貴方を受け入れた。

だから華琳様についてののみ聞かせて欲しい」

それは、懇願するような声だった。

「あの人の苦悩を私は知りたいたいのです。

何時も何かに急かされるように生きておられる華琳さまですが、ここ数ヶ月は特にそ
れが顕著です。

そして二ヶ月前にあつた敗戦後、何をどうしても理解できない方針を打ち立て、私達
軍師を悩ませました。

領土とは国の身体です、蜀にほぼ無抵抗で差し出す理由は全く持つてありません。そ
れなのに華琳様は防衛を放棄された。

確かに次に勝てば大きな流れとなるでしょう。ですが領土をやつた蜀との対戦も此
度の戦ほどとはなりません、それでもまた大きなものになる。

それは合理を尊ばれる華琳様が取られる選択として些か奇妙に過ぎる。

何故次の大戦にだけ注視しておられるのか。何故華琳様から何も話して頂けないの
か。何故貴方にだけは話されるのか。

と、あの人についても色々聞きたい事はあります、しかし答えては頂けないと重々理

解してもいます。

ですがただ一つだけ、答えて頂けないでしょうか？ 華琳様は、何と戦っておられるのですか？」

「……さすが、あの華琳に我が子房と評されるだけはある」

「華琳様には幾度と無く聞いていますが、決して口にはなさいません。

胸襟を開き、弱音などを聞かせて頂いた事もあるというのに、その事については断固として譲って下さらないのです」

「華琳は君を、君達を信頼している」

「ええ、知っています。信頼だけではなく、深く愛しても下さっている」

「ああ、けれど立場が話を許さない」

「総大将たる立場が？」

「違う、君達の立場だ。君達は影響力があり過ぎる、もし国政に関わりのない市井の人間であつたなら、話せた可能性はあるが」

「……何ですか、それ。いえ、だからこそ貴方には話せた？ 決定権がないから？」

何よそれ、華琳様の側に有りたいと努力したのに、だからこそ話して頂けないと言うの?!」

「そういう事だ。そして華琳が戦っているものだったな。それはな、天だよ。天の御遣

いを遣わした天そのものが華琳の敵だ。

「……これ以上は言えん、すまん」

これが俺の話せるギリギリだった。

桂花は他の者より周囲との軋轢があり、影響力が他の軍師よりも低い。だからこそここまで話せた。

「天？ それは一体……つて白殿！ 鼻から血が！」

「気にするな、これ以上喋らなきや次第に治まる。」

ともかくさつききの情報が戦場に赴けない俺の最後の手土産になる。上手く使つてくれ」

鼻血を拭い、そう言う。

上手く使えとは言ったが、この情報を有効活用する事は出来ないだろう。

周囲に知らしめようにも、天の采配がそれを許さないだろうから。

だが桂花にだけでも事実を伝える事が出来たのは大きい。

「……まだわからない事は多いですが、色々と理解しました。」

先程の白殿と同じ苦痛の表情を華琳様は時折されていた、天との戦い、書の編纂を急がれていた、その他様々な点と点を繋いでいけば見えてくる事もあります。

白殿、有難う御座いました。相当なご無理だったのでしょうか？」

「ただ痛いだけだ。痛みが霞むほど尊いものは山程あるし、戦場に出る皆の苦勞に比べれば些細なものだよ」

「鼻から血が出るほど、唇を噛み切るほどの苦痛が些細なものか、さうでもないでしょう。」

華琳様も貴方も、今までどれほどの苦痛を噛みしめてここまで来たというのですか」「俺の苦勞なんて、華琳の苦勞諸々に比べれば微々たるもんさ。」

表に立ってない俺は華琳の手足として動くことが叶わず、聞き役や癒し手として隣に居てやるのが精々だった」

「……貴方は、私達とは別の方向で華琳様を支えてくれていたのですね。」

今私が抱いている歯痒さを、私達とは違って常日頃から感じてこられた」

強く拳を握りこみ、唇を噛みしめる桂花。

「正直、次の大戦で負ける理由が思いつきませんでした。」

水軍で後塵を拝するとはいえその他で負けていません。そして曹魏四十万対蜀呉十二万という圧倒的兵力差がある。

負ける筈がないとの油断がありました」

「桂花の判断は百戦あつて九十九戦において正しい。」

相手が何をしてこようと、全ての策を圧倒的兵数をもつて傲然と押し潰す。それは正道だ、常道だ、決して油断じゃあない。

むしろ相手が無駄に恐れて寡兵相手に策を弄する方が失敗する、これも歴史が示してきた。

だが、この、戦いは、ぐうっ

頭を割るような痛みが来た。

再び鼻から血が滴り、目の前が明滅する。

「白殿っ」

くらりと床に倒れそうになった俺を桂花が慌てて支えてくれる。

そして仮眠用に置かれていたベッドまで連れて行ってくれた。

しばらくすると痛みが引いていき、なんとか会話できるまでに回復した。

以前はすぐさま引いていた痛みがここまで後を引くということは、もう何も喋らせてはくれないのだろうか。

とうとう何も出来なくなった、あまりの悔しさに知らず歯がぎしりと鳴った。

「……白殿、大丈夫です。貴方がわざわざ私に話された意も汲みました。

次の決戦、戦場に出られない貴方に代わり、私が、私達が責任をもって華琳様を勝たせますから」

そして目に強い意志の光を灯し、彼女は言い切った。

まるで二ヶ月前の華琳を見るかのようで、そこには確かな頼もしさがあった。

「期待しているよ、
我らが子房殿」

69. 最後の晩餐

出陣の前日、俺は一人で宴の準備をしていた。

将官の皆は出陣前という事で担当箇所の最終チェック並びに兵への労い、景気付けの為に朝から城内街中を巡っている。

戦場での死を恐れるから、大事な人との別れを恐れるから、その恐れを払拭しようとして陣前には兵も住人も大いに騒ぐのだ。

あくまでも出陣前。普段なら兵をしつかりと休める為に昼過ぎには騒ぎも鳴りを潜め始める。

普通なら、そうなる。

しかし今回の戦いは兵も民もほぼ全員が勝ち戦だと認識している。前回の手痛い敗戦があつたにも関わらず、どこか楽天的な空気がそこにはあつた。

だから昼を過ぎて空が赤くなりだしても城内外のざわめきは止まらなかつた。

規律に対する意識の高い曹魏の兵がそうなるのだ、今現状は異常である。けれどそれを異常と知覚している者は少ない。

そして異常だと理解していてもどうしようもない。ここで変に水を差せば士気は目

に見えて落ちてしまう。

きつとこうした抗いようなない小さな歪が積み重なり、決定的な破滅に繋がるのだから。

華琳が運命に抗う為に小さく積み立て続けていた逆の事が今まさに起こっているのだ。

きつと華琳や桂花は齒噛みしながら対策を講じているに違いない。

対策を練っている、兵に混じって士気を高めている、騒がしい街に繰り出す、騒ぎを収める、仲間達は個々に自分の成すべき事をやっているだろう。

皆が忙しく動き回っている中、医者の仕事も無く、会議に参加する事もなく、鍛錬に付き合う事も無く、俺は暇を持って余していた。

今の俺は将達を料理と酒で労う事ぐらいしか出来ないのです、華琳が作ってくれた将官専用の調理場で食材と自作した酒類を準備している訳である。

暇だったら来てくれ、程度の誘いだったので正直何人集まるか分からない。

通常よりも長く続く前夜祭のような騒ぎに疲れてしまい、明日に響かないようにと部屋に戻る者もいるだろうし、晩ご飯に付き合う者もいるだろう。

このまま誰も来ないという可能性は十分にあるのでまだ料理は作り始めず、準備だけ

をして待つている状態だ。

もし誰も来なくても、明日管輅と卑弥呼がこつちにやつて来るので彼女らと居残る侍女達に料理を振る舞う算段である。

器具などの準備を済ませた俺は調理場に併設された食堂で一人お酒を嗜みつつ、窓の光景が徐々に赤み掛かる様をぼーっと見ていた。

街の人や兵の様子から、今日は城内外のざわめきは中々止まないだろうと予想はついていたので、特に焦る事もない。

ただ仕込みに時間がかかりそうな料理は既に作り始めているので、それらは作りきつて食べてしまわないと食材を無駄にしてしまう事になる。

なのでもう少し待つて人が来なければ、俺が食べる分だけ別け、後は一般兵用の食堂にでも寄付しようと思つて決める。

腰を上げ、今日中に作り上げなきゃいけない汁物なんかを仕上げる。

もし誰も来なかつたら、このカレー、シチュー、豚汁等の汁物は食堂に寄付する事になる。仕方ないとは理解はしていても、食べて欲しかった人達に食べてもらえないというのは少し寂しいものだ。

大きめの寸胴から小さい鍋に汁物を移したり、保冷所の食材を見に行つたりしている、窓から差す赤色が闇色に変化しつつあるのに気付く。

さすがにここまで来ると城内外のざわめきも小さくなり始めている。城や街で騒いでいた者達が帰るべき場所に帰り始めたのだろう。

徐々に小さく、遠くなるざわめきに、この場の静寂がより一層強くなったのを感じる。俺はその感覚を厭い、少し大きめに声を発した。

「そろそろ持つていくかね」

街や家で夜を明かす兵も多いだろうが、夜に待機を命じられている兵は一般兵用の食堂を使うだろうから、夜食として食べてもらおう。

何人に行き渡るかは謎だが、ここに置いていても仕方がない。

それじゃあと食堂に持つていく為に寸胴を持ち上げ、

「美味しい匂いの所に許緒一番乗りっ！」

「こら季衣！ 廊下は走らないのっ！」

元気いっぱい笑顔いっぱいの声とともに、少女二人が現れた。

のだが、二人の顔が俺の持つ寸胴に向けられ、途端に表情が曇ってしまった。

「あれ、お鍋どうするの？ えっ、壮行会もう終わっちゃった?！」

「そんなあ、白様の料理すつごく楽しみにしてたのに……」

息を切らしてやってきた季衣と流琉は、とても残念そうな顔でその場にへたり込んでしまった。

「急いで仕事片付けてきたのにつ！ 隊の皆の二次会を断つて来たのにつ！ こんな事って無いよつ、酷過ぎる！」

この世の終わりのような表情をしながら床を叩く季衣。おいおい、床石がひび割れるつて。

「あー大丈夫だ、まだ始まってもないから」

「えつ、じゃあその寸胴は？」

「一般食堂に寄付しようと思つてな」

「そうなんですか？ けど今日は一般食堂に人は集まらないと思いますよ。」

華琳さまが街の料理店なんかには兵や文官の方達が飲食する分を先払いしているんです。だから皆さん遅くまで街で食べてくると思います。

夜勤の人達も交代で街に出掛けるそうなので、わざわざ一般食堂で食べる人はいないんじゃないですかね」

「そうだったのか、それは知らなかったな」

「今日の朝に発表されましたからね。指揮系統が独立している白様は知らなくても仕方ないと思います。」

そういう訳でして、食堂も一応開いてはいるんですが、作りおきの物が適当に置いてあるから勝手にどうぞ。つて感じですよ」

「ならこれを持って行っても持て余すかな」

「そうだよ！ だからそのすつごい良い匂いの豚汁は置いていくべきつ、そして今から三人で壮行会をしようよつ」

「誰が食べてくれるかも分からない所に料理を出すのは確かに気が乗らないな。」

そうなると三人での壮行会も悪くないか……けど二人は色々誘われたんじゃないか？」

「はい、親衛隊の酒盛りにも呼ばれたんですけど、辞退しました。上役の私がいると皆さん心の底から楽しめないでしょうから」

「つていう建前だよね、白さんの料理が食べたいからさつさと抜けてきちやった」

「まあ、季衣の言う通りだけど」

二人とも俺の料理を優先して来てくれたのか。なら最大限の礼でもって持て成そう。

「それじゃあ、三人で始めちゃうか」

「はいつ」「うんつ」

「白殿、少々お待ちをー」

「流琉と季衣の食べる速度と食べる物を調整する人員がいないと料理が無くなってしまう」

「いかなお兄様といえど、この二人の勢いを抑制するには厳しいでしょう。」

ですからこの栄華めに、可愛らしい二人のお守りを御任せ下さいませっ」

「白さんの料理がいくら美味しいからって、そこまで無茶に食べたりしないよ！」

親衛隊二人だけじゃなく、文官勢の皆も来てくれたようだ。

「本来ならもつと早く来れたのですが、桂花ちゃんに策の練り直しを頼まれて、今まで掛かってしまいました」

「悪かったわよ。けどここまで話してもまだ足りない気がしてならないの……」

「さすがにもう話すべき事も尽きた気がするのですよ。もしかして何か気がかりがあるの？」

「……私は完璧を求めたいの、それだけよ」

「準備にも戦場にもこれをもって完璧などという事は有り得ませんが、その考えには私も賛同しますよ。」

どうにも華琳さまも此度の戦には入れ込んでいるようですし、念には念を入れるべきでしょう。

ですが我々が二ヶ月も考え尽くしたのです、机上では最早語ることはないと言言できましよう」

「そう、だけど」

「お姉様の様子を見るに、今回ばかりは戦費にも糸目をつけるべきではないと理解して

おりますから、血反吐を飲み込んで戦費に口出しはしておりませんのよ。

お金の心配もなく、兵の質も問題なく、将官の士気も意識も高い。何をそこまで心配する事があるのか、私めには分かりかねますわ」

「と、こういった感じで議論が白熱したのですよ。遅れてしまつて申し訳ないのです」
「魏の勝利のための会議だったんだろ、だったら何を謝る必要があるんだ。

ともかく来てくれたのはすごく嬉しいよ。それじゃあ中に入つて待つてくれ、料理を仕上げてくる」

「はい、心よりお待ちしておりますわ」

そうして皆が食堂に入つていく。

その一番後ろ、険しい表情をする桂花に礼を言う。

「ありがとう、桂花」

彼女は口惜しそうな表情をして立ち止まった。

「貴方が何を伝えようとしていたのか、華琳さまが何と戦つておられたのか、微かながら、臆気ながらに理解しました。

ですがその程度の理解では、何かが足りていないと分かつていても、何が足りていないかが見えてこないのです。

それが、とても悔しい」

唇を噛み締めて言う彼女だが、

「現状話せる事は話し尽くし、打てる手は打ち尽くしました。

後は戦場で対応する他ありません」

この子は悔しさに沈むだけの柔な少女ではない。

「ですから、天の思惑は戦場にて打ち払って見せましょう」

悔しさをバネとし、毅然と天を睨む少女。

本当に、どんどん華琳に似てきたな、この子は。

ちびっ子二名と文官四名が料理に舌鼓を打って三十分ほどが経ち、お腹も落ち着いてきた頃、外はもう暗くなっていた。

料理を食べる時間から会話の時間へと流れがシフトしていく。

ちびっ子二人は文官に可愛がられ、あーんをされ、たまに少し真面目な話をしてと、本ほんわか時折締めるみたいな感じで見ていてとても和む。

そのまま少しの間会話に参加せずにぼーっと六人を見ていると、新たな参加者が走りこんできた。

「えらい遅れてもうてすんません！」

「お菓子残ってるっ？ あっ、あるっ！ という事は間に合ったのっ」

「どうしても部下の誘いを断りきれず今まで掛かってしまいました。申し訳ありません」

慌てて入ってきたのは三羽鳥。

「いや、強制と言う訳でもないのだし、謝られると逆に困るよ。

何か食べたい物はあるか？」

「ウチは餃子！ 水餃子はさつき食べてきたんで、次は焼餃子で！」

「沙和は果物いっぱい洋風月餅！」

「おい二人共、遅れてきてるのにそんな注文……というかさつき結構食べてなかったか？」

「前に警備を担当した役満姉妹曰く！」

「白様の料理は別腹っ！」

「……まあ腹を壊さん程度の量にしような。凧も要望があるなら気にせず言うといい、その方が俺は嬉しい」

「そ、そう言われると断り辛いです……あの、でしたら、麻婆豆腐を」

「分かった、凧仕様で作るよ」

「有難う御座いますっ！」

こうして三羽鳥が輪の中に加わったのだった。

三人はバランスが良いのか、親衛隊組とも軍師文官組とも上手い具合に会話が嘯みあう。

凧は真面目で遠慮しがちな気性から居ても決して邪険にされない。意見を求められたら正直に答えるのも好かれるポイントだ。

沙和は女子の好きな話題を多く持つてるし、持ち前の明るさと実は割合空気が読めるので場が華やぐ。

真桜は勢いの良さと各種ギミックの話など、話題が尽きない。

言い方は少し悪いかもしれないが、どのような隙間にも入り込むような気軽さと隙間を埋めてくれる安定感によって周囲に溶け込んでいる感じだ。

女子特有の飛んでは戻る会話を聞きながら、俺はその様を面白可笑しく眺めるのだった。

「舞台疲れたー、白う抱っこして食べさせてー」

「今日は一段とちい頑張ったんだから、だっこであーんはちいの物だと思っただけどっ」

「えーわたしだよー、もう一回の声で二人よりも一曲多く歌ったもんっ！」

「歌ってる間もちい達は舞台の上を大きく踊ったり呪術で演出したりするんだから、大

変さはこつちの方が上!

それに天和姉さんは十箇所ぐらい歌詞間違えたり踊り間違えたりでちいも人和も埋め合わせが大変だったんだから!」

「あれはアドリブ? だっけ。即興性の流れを大事にした演出だったのっ」

「白の言葉を借りたつて言い訳できないから!」

「あつ、白さん、次はその練乳がけのぷりんが食べたいです」

「ん、これか。はい、あーん」

「あーん、はむ。もぐもぐ……すぐく美味しいです。やっぱり大陸中のどの料理より、貴方の料理が一番美味しい」

木のスプーンを握ったままの俺の右手を優しく包み、人和は蕩けるような笑顔でそう言った。

うーん、あざとい。しかし嫌いじゃない。

「あー人和ちゃんずるいつ! 抱っこされてないけどその新婚さんみたいな雰囲気作りは卑怯だと思いますっ」

「人和それ抜け駆けし過ぎだからっ、あーんと好感度上げを両方達成するとかあざとすぎー!」

「天和姉さん、ちい姉さん、そういうのは当事者だろうと観客だろうと分かかっていても言

わないのが礼節よ」

なんというか、また姦しいメンバーが増えたものである。

三姉妹は城に呼ばれる事が多く、一応全員とは顔見知りである。

だが軍師や文官は顔見知りであるというだけで、人和以外はあまり会話した事がなく、そちらの輪にはあまり入っていけないようだ。

その分ちびっ子と三羽鳥との仲はとて良好で、話の弾み具合が五割増しになっている。

70. 愛するいつもの光景

皆が楽しく歓談する様を微笑ましく眺めていると、遠くに気配を感じた。

少し感覚を強化して探ってみる。

「孟ちゃん早くっ！ 白の料理が無くなってまうっ」

「霞っ、華琳さまをそう急かすな！」

「華琳さまは出陣前の最終確認と調整で方々を巡られてお疲れなのだ」

「霞、そう急がなくても時間もまだあるのだから、なんなら新しく作ってもらえばいいじゃない」

「ちやうねん、今回は熟成料理つてのに初挑戦したらしくてな、長い期間下準備しなあかんけどこれがもう旨味の最高潮とかなんとか聞かされとって」

「それをつ、何故っ、早く言わないのかっ！ 白が初挑戦した料理？ なにそれ、それつてつまりこの世の誰もまだ食した事のない料理つて事でしょう？ ならそれをまず一番に食べるべきは私でしょうっ?!」

「いや、白から口止めされとって。あいつに知らせると仕事を投げて来かねないから、とかなんとか」

「ぐつ、否定できない。ええい、春蘭秋蘭！ 急ぐわよ！」

「はっ」

俺の研ぎ澄まされた聴覚がそんな遠くのやり取りを聞き取った。

そして恐ろしい速さで食堂に接近する気配が四つ、そして入口から約二十歩程の距離で速度を緩め、彼女達はゆっくりと食堂の戸口をくぐってきた。

「あら、皆勢揃いのようね」

息を切らした様子も見せず、華琳は食堂内を見渡し、そう言つて艶やかに微笑んだ。

うん、勢揃いだと言つて皆を見たように思えるが、少し視線がずれていた。実際は料理を見渡していたに違いない。

けれどそれに突つ込むのは無粋だろう。

「ああ、華琳も来てくれたのか。忙しいだろうから来れないものだと思つてたから、嬉し
いよ」

さも今気付いたと言わんばかりの言葉を投げかけ、歓迎を表す。

「貴方からのお誘いだもの、来るわよ」

「来てやったのだから、美味しい料理を要求する」

「姉者、その言い様はさすがに突つ慥貪過ぎる。」

だがまあ私達も昼食を慌ただしく食べてからは飲み物以外口にしていなくてな。

出来れば極上の物を最初に腹へ迎えたくはある」
特製熟成料理へ至る完璧な連携だった。

うーん、これはさすがに例のあれを取り出さざるをえない。

ローストビーフ、熟成牛肉のお寿司、レアステーキ等を用意した。

そう、この時代では再現できないと思っていた牛肉の半生食である。

俺が今まで行ってきた私塾での畜産授業の成果が実った瞬間でもある。

この時代の肉は正直言つてあまり美味しくない。勿論食材としては最上の素材ではあるが、俺の舌からしたら不出来に過ぎる。

野生の肉は正しく血抜き等の下処理さえ出来ていればそこそこ美味しいのだが、畜産の物は未だ発展途上なのである。ただ死なないようにするのが精一杯で、飼料や育成方法は試行錯誤する余裕が無いのが現状だ。

だがごく一部の例外がある、それは畜産の道に進んだ我が生徒達の牧場だ。

彼らは彼らで試行錯誤を繰り返し、そして俺が私塾を起す度に育て上げた家畜を預けていたから、いつの間にか寄生虫の排除や掛け合わせの厳選やあらゆる研究が何百年単位で進んでいた訳である。

しかしそれらは表に出ることはなかった。皇家や極々一部の豪族や商人に囲い込まれ、独占されてきたのだ。

だが華琳が支配領域を増やしたことで、一部牧場が解放された。

俺は喜々として彼らと手紙のやり取りをし、様々な事を試してもらい、更に肉質を極化させていった。

赤身の方は割りと早いお目見えをして華琳からも高評価を頂いたのだが、霜降りについては良い肉質のものが見当たらずに、今日の今日まで披露できなかったのだ。

華琳も脂の旨味に関しては半信半疑で興味が薄く、今まで忘れていたようだ。

まあそれも仕方ない、赤身肉を披露してから一年ほど間が空いてしまった。

だがついに先日納得の行くものが育つたと連絡があり、送られてきた。

解体し、調理を試みたが、日本で食べた一般的な牛肉レベルに至つたと確信できた。

さすがにブランド和牛程のものは後数十年以上掛けなければ届かないが、十分だ。

今回は脂に慣れない者も多いと思うので、旨味成分が増すよう熟成料理に挑んでみた。

一番食べてもらいたい人も来た事だし、そろそろ皆にお披露目しようじゃないか。

既に下準備は終わっているのです、簡単に調理をすれば直ぐに完成する。

「白様、これ、本当に食べれるんですか？ まだ半分は生ですよ？」

出来上がった料理に華琳に次いで最も食材、料理に精通している流琉が不安げな表情

をした。すると物珍しきから覗き込んでいた皆が顔を顰める。

まあ生食なんてよっぽどの窮地じゃないと食べないだろう。

「これは生で食べても大丈夫な肉なんだ」

「白殿、この赤身の間走るキメの細かい白いのはなんなのですか？」

「脂だよ」

「脂ですか？　うう、ならそつちは遠慮するのですよ……」

風が何か嫌なことを思い出したのか、そんな事を言い出した。

少し勿体無いとも思うが、脂はそもそも食べ慣れないと戻す可能性があるので無理には勧めない。

皆が逃げ腰になる中、華琳だけは目の前に出された料理をしっかりと見つめている。

「白、これは食べられるのよね？」

「ああ、勿論だ。とはいえ、これに限ってだけだな」

「なら頂きましょう」

「華琳さま、明日は大事な出陣の」

「白が大丈夫というのなら大丈夫なのよ」

そう言って彼女は赤身のローストビーフをぱくりと食べてしまった。

そうして数度咀嚼して、彼女は蕩けたような笑みを浮かべた。

「未知の味、未知の食感、未知の熱ね。以前食べた物はただ焼いたのみだったけれど、こっちの料理の方がより肉の甘みというのを感じたわ。

調味料を入れずとも、肉とはこれ程までに美味な物だったのね」

華琳はそう言つて水を口にし、矢継ぎ早に次の料理を口に運ぶ。

一口一口しっかりと味を確かめ、違う料理を食べる時は熱めのお茶で口の中をリセットし、勢いを衰えさせること無く赤身を平らげた彼女は、そのまま霜降りに手を出した。

口に入れた瞬間、彼女の動きがぴたりと止まる。

「肉が解けていく?」

ゆつくりと十数度咀嚼して、彼女は目を閉じた。本当に上質な物なら一口サイズで十回も噛まなくても良いのだけど、そこまで行くのはまだ待つて欲しい。

とはいえ彼女の驚愕の表情を見る事は叶ったので、十分な物を作ることは出来たのだろう。

「飲み込んでいないのに、口の中に美味だけを残して消えてしまった。これは本当に肉なの?」

そう不思議そうに首を傾げる姿がすごく愛くるしい。その姿に春蘭、秋蘭、桂花、凜が涎を垂らし、その言葉にその他は涎を垂らした。

—そうして肉食女子達の宴が始まってから一時間後、食堂には死屍累々の惨状が広がっていた。

原因を作ったのは季衣だった。

脂質は食べ慣れていないと喉に絡みつく感覚が不快だ、しかも水を飲むだけでは流れにくいと来ている。流すには熱い飲み物が最適だが、皆同じ感覚なので用意していた熱い飲み物はすぐになくなってしまった。

丁度欲しくなったタイミングでお湯を沸かし始めた俺の姿を見て、季衣は周囲を見渡し思案した。

場に出ているのは水や華琳が飲んでいる赤ワインのような酒類だけ、他は全部飲まれてしまった。水は脂が流れにくく、酒は酔ってしまうと料理の味が不鮮明になってしまう。

なので出来れば果実や乳系の脂を押し流せそうな味のついた飲み物が欲しい。

確か暗室に飲み物が置かれていた筈だ、取りに行こう。

そう季衣は考えたに違いない。

俺は肉の試食を繰り返していたので既にこの身体でも脂に慣れてしまっており、脂の厄介さを失念していた。なので季衣は単純に冷えた水を取りに行ったのだと思い、目の前の料理と薬缶に意識を集中するため放置してしまった。

季衣は調理場の暗室に入っけいき、数種類の液体を発見する。

水、果物の匂い、酒の匂い、乳の匂い、調味料の匂い。

まあ選ぶのは果実と乳の匂いのする飲み物だ。

乳の匂いのするものにはそこそこ強めなアルコールの匂いがする、果実の方は微かに……しかしこれは熟しているからこういう匂いの可能性もある。

そこまで考えて季衣はもう面倒になった。久々に満ち足りた腹に血が行き、頭がぼーっとしていたからそれ以上考えるのをやめた。

そして美味しそうで危険も少なそうな果実酒を食堂に持ち帰り、放出した。

飲みやすく、またアルコールを感じさせないそれに皆飛びついた。俺が新しい料理を作り、湯を沸かし終わって戻った時には半数が呑まれていた。

何故だろう、皆とのお別れには絶対に酒が絡んでしまう。

今回の酒は牛肉に合わせた赤ワイン以外、暗室の奥に隠しておいたのに。

本当ならあれらも移動させておきたかったのだ。

だが華琳と俺の共同制作品であるあれらを俺の独断で勝手に移動させる訳にはいかず、奥に仕舞って隠すほか無かった。

それをあの子は天性の嗅覚で的確に探しだし、生来のうっかりで間違えた。

……

まあしめやかな終わりも悪くないがこの展開も嫌いじゃないし、こういうのが俺の本質らしくて良いのかもしれない、という事で。

それから飲んでくつちやべってして時間が経ち、残ったのは遅れてやってきた華琳、春蘭、秋蘭、霞だけになってしまった。

しかし華琳を除いた三人はへべれけの酔いどれになってしまっており、半分正気を失っていた。

この三人は酒で判断を鈍らせる事の出来ない華琳に代わり、確認や鼓舞のために行った先々で振る舞われる酒を飲んでおり、既に結構な量の飲酒をしていたのだ。

彼女らがいかな酒豪といえど、ちゃんぼんをすればそりや悪酔いもする。

吐くまではいかないが、それでもタガが外れかけている三人からお酒を取り上げ、水を飲ませる。

ぶーぶー文句を垂れるが、しばらくすると三人は互いに寄りかかって眠ってしまった。

そうして華琳と二人きりの静かな夜になった。

字面は良いが、そこは酒臭い死屍累々が転がる食堂であり、優雅さの欠片もない。

けれど、

「けれど、それが良い」

俺が心中で続けようとした言葉を、華琳が言った。

「大人になってもこうして馬鹿をやれる、酔って弱っている様を見せても良いと思える、潰れても後を任せられる人がいる。

とても素敵な事よね、そんな仲間がいるって。

だから私は孤独では無かった。優秀で温かい彼女達に支えられ、私の先を行っている筈の貴方が隣りにいる。

積み上げた結果の全てがここにある。だからこれが良い、これこそ我が最上」

彼女は儂げな微笑みを湛え、そう心情を吐露した。

幼き見た目の少女が、その外見相応の弱さを見せた事に、胸を激しく締め付けられる。

胸の苦しみは後悔からだろうか、哀れみからだろうか。彼女が最も向けられたくないだろう感情の正体を見つけそうになってしまおうその直前、

「……らしくない事を言ったわ」

しかし儂げな微笑みはすぐさま消え、凜々しく引き締まった何時もの表情に戻る。

そして、

「これが最上なんて満足するのは私らしくない。だから今度の戦いも勝って、更に上を

行くわよ」

傲岸不遜にそう言つてのける華琳。

一人で何でも出来てしまうからこそ、支えてあげなくなる我らが主君がそこに居た。

「付いてきなさいよ、白」

「仰せのままに、我が君」

71. 出陣式

侍女たちの力も借りて皆を寢所に移動させ、俺は医務室に戻って皆の分の二日酔いの薬や整腸薬を作る。そうして全てを作り終えた時には朝日が登り始めていた。

皆との一時になるか、今生となるかの別れの日がやって来たのである。

俺は盛大な出陣式を行っている華琳達の元には行かず、医務室で時が過ぎるのをぼーっと待っていた。

皆は見送りに来てくれと言ってきたが、戦場に向かわない者がその場に居ては士気向上に陰りを差してしまうと固辞させてもらった。

それなりに長く城に常駐して怪我人の世話をしていたからこそ俺に世話になった人間は多く、しかも居残り組も殆どが出陣式を見に行っていたので理由としてはかなり弱かったが、華琳は納得してくれた。

まあなんだ、正直に話すと、華琳の話を聞いて皆の姿を見てしまうと、俺は泣くかこつそり付いていくかしてしまいそうだったのだ。

更に自身を拘束するため、中央での仕事を終えた管輅や卑弥呼に直ぐ様来てもらうように連絡もしてある。

俺は目を閉じ、無心を心掛ける。

しばらくすると一際大きな歓声が遠くに聞こえてきた。

「ああ、行つてしまふ」

無心の心掛けなど一瞬で吹っ飛んだ。

俺の大好きになつた人達が、強大な運命に立ち向かいに行く。

焦燥、心配、不安、後悔、多くの負の感情に、そして少しの期待。

俺は歯を食いしばつてざわめく心を抑えつける。

今からでも見送りに行けば、この胸中も多少落ち着くのだろうか。

だが……。

俺が思い悩んでいると、医務室に近づいてくる気配が一つ。この気配は城に残つた侍女長のものだ。

彼女は医務室の前で止まり、声を掛けてきた。

「失礼致します、謙信様にお手紙が届いてございます。お目通りを願います」

手紙……こんな時に誰からだろうか？

俺は侍女長を通し、手紙を受け取つた。

では、と静かに退室していく彼女にありがとうと言ひ、気配が遠ざかつたのを確認してから手紙を調べる。

差出人は書かれていないが、封蝋の部分に呪いの文様が描かれていた。

見覚えこそ無いが、覚えのある気配。以前卑弥呼の部屋で感じた気配にそっくりだ。恐らく人避けの応用で、手紙を決して読まれないように卑弥呼が術式を編んだのだろうと見当をつけ、封を切る。

中に入っていた手紙に目を通すと、それが管輅と卑弥呼からのものであり、近くに来てはいるのだが、出陣式の異様な熱狂ぶりと警備体制の厳戒さから城に近づくことが出来ないという文言が書かれていた。

外から聞こえる大歓声に納得する。

今日明日は軍の精鋭達から警備を少なくない数出さなければいけないほどの盛り上がりなのだ。警備を担当した者達は後日急いで本隊と合流する手筈で、手間が増えたと出陣前に桂花が愚痴っていた。

このような状況ではさすがの卑弥呼の呪術も形無しのようなのだ。

しかし、こうなると、枷が一つ外れてしまった訳で……。

「二目、一目だけ、行列の中から見送ろう。絶対、それだけ」

俺はそう強く念じ、白い装束を脱いで町人の変装をし、駆け出したのだった。

勝手知ったる路地裏を超スピードで走り抜け、どうにかこうにか門近くにて主役達の

最前列までやってこれた。

俺は大通り脇の人垣の前の方、こちらからは向こうをよく見れて、向こうからはこちらが紛れて見難いという絶好の位置をキープした。

主役達の最前列は騎兵、弓騎兵達。霞、春蘭、秋蘭の部隊だ。最精鋭たる彼女達は門を出た後、赤壁までのルート確保の為に先陣を任されていた。

大歓声、人。動物にとつては脅威以外の何物でもないそれらの大波を、馬達は何事でもないかのように整然と進んでいる。

それだけで騎手達の力量や練度が分かるものだ。

粛々と進んでいく兵達の中で、三將軍だけが得物を振ったり声を上げたりして、歓声に込えている。

彼女達は士気や民衆への影響力などを熟知しているからこそ丁寧に対応している。

また他の兵が馬や人に気を使わなければいけないと分かっているのです、余裕のある自分達が役目を負わねばと大げさに対応していたりする。

「ほんと、素敵な女性達だよ。勝てよ、皆」

小声でそう漏らし、俺は周囲に紛れながら彼女達に大きく手を振るのだった。

次いで歩兵達を纏める三羽鳥と軍師達。

先んじて駆け抜けていく騎兵達の通った道を固め、拠点を構築するのが彼女達の役目だ。

歩兵は民衆と目線も一緒に進む速度も騎兵よりは遅いので、行軍を乱さぬ程度に兵達は民衆にアピールしている。

先程の騎兵隊とは打って変わり、將軍達が彼らを抑える場面が多い。

軍師達は多少のアピールだけして欠伸を隠れて噛み殺している。

あまり飲んだりする場面に居ない軍師達には昨日の酒宴は堪えたみたいだ。

「將軍達の中でムードメーカーやつてる三羽鳥ばかり見てきたからしつかり隊長やつてゐるのは違和感あるな。けど、しつかり務まつてるじゃないか。

軍師達も無理せず、生きて帰ってきてくれよ」

そして最後の最後、親衛隊とちびっ子二人、そして華琳がやって来た。

胸を締め付ける感情が高まるのを感じる。

俺は胸を抑え、乱れそうになる気配隠蔽を強く意識して保たせる。

彼女にバレるのは一番格好悪い。

なので殊更強く気配を隠蔽する。気配を消すのではなく、気配を薄めて周囲と一体化させるといふより高度な気配隠蔽を行使している。

だが何故か、彼女はこちらとの距離が近付くにつれ、急にキョロキョロと周囲を眺め始めた。

それまでは鷹揚に手を振ったり、彼女の象徴たる鎌を掲げたりして周囲の望むパフォーマンスをしていた彼女の変化に、隣にいた季衣と流琉が首を傾げている。

彼女の一挙手一投足に周囲は狂騒と熱狂を強めている、そんな中で高度な気配隠蔽をしているのだから、俺の存在などバレる筈がない。森の中から一本の木、いや、一枚の葉っぱを探すような無理難題。

けれど、彼女と目があつてしまった。

一瞬だけ目が合い、小さく小さく彼女は表情を緩めた。

すると彼女は鎌を季衣に渡し、するりと帯剣していた剣を抜き放ち、掲げた。

彼女が象徴たる鎌を手放し、剣を抜く姿を見る民衆は少しぼかんとした。けれどもそれが初めて見る姿だと理解が及んだ瞬間により強い騒ぎとなる。

その様子を艶やかに見渡した彼女は剣を鞘に収め、毅然とした表情となつてただ前だけをみた。

俺はそのまま通り過ぎる彼女の横顔を眺め、後ろ姿を眺め、門の向こうに彼女の姿が消えるまで見送った。

そうして彼女の姿が見えなくなつた瞬間、駆け出す。

何もかもを置き去りにして医務室へと駆け戻った俺は、人知れず涙を零した。

華琳の抜剣、その仕草に感動して泣いている訳ではない。

彼女からしたらただ単純に、頑張ってくる、道を切り開いてくるといった意図以上のものはないだろう。

その意味は伝わってきた。

しかしあの姿を見て、このループには続きがないと、確信してしまったのだ。

ひたすらに前を向くあの姿こそ、俺にとっては永遠の別れの姿、別れの象徴。

灯華様、漢建国の元勳達、光武帝とその仲間達、私塾の生徒達、呉の皆。

俺が別れてきたのは前向きな姿がとても良く似合う人達だった。

だから、華琳達にはもう会えないのだと、この時俺は強く実感してしまった。

それまでは使命が終わる可能性は三割、別のループが始まる可能性は七割ぐらいに考えていた。

呉、魏と来れば、恐らく次は蜀のループが来る可能性が高いとは予測していたし、別ループが始まればこのループが上手く完結したとしても俺にはこの先がないという事も理解していた。

だがそんな懸念があったとして、これで本当に終わる可能性は無くはないのだから、やり遂げなければいけない。

そう考えて使命が終わる可能性を三割と残していた。けれど、そんな甘い希望が絶たれた。

まだ分からない筈なのに、理解してしまった。

遠い昔の鴻門の会の時、これはもうどうしようもないのだという絶対的な確信と同質の物を感じ取ってしまったから。

だから俺は当時と同じく、膝を屈し、無力感と虚無感にただただ涙を流す他なかったのだ。

しばらくその状態だったのだが、医務室に近付く気配を察知して居住まいを正す。

すると先程手紙を渡しに来た侍女長が扉の前に立ったのを感じた。

「何度も申し訳ありません。曹操様よりお預かり物がございます。式を終えたらお渡しするよう命じられておりますので、お目通りを願います」

今度は華琳から？

なんだろうと思いつつ、俺は彼女を招き入れた。

侍女長から手紙と布と紐でしつかりと巻かれた何かを受け取る。そして彼女は一礼をして素早く退室していった。

気配が遠ざかったのを確認し、俺は手紙の方を先に読んだ。

そこには短く『曹家と夏侯家の家宝を預ける。帰り次第返してもらおう』とあったので、俺は預かったもう一つの品を紐解いた。

そこには二枚の銅板、曹参さんと夏侯嬰の描かれた二枚の銅板があった。

俺に対する紐付けの為なんだろうが、このタイミングで家宝を渡されるとなると、どうしてもお別れの品のように思えてしまう。

華琳にはそんな気は全く無いだろうに。

二日後、卑弥呼と管輅がやって来た。

俺はそれを喜びを持って迎える。

一人になると色々と考えてしまうから、話せる相手が出来るのがとても嬉しかったのだ。

再会を喜び、そして改めて仕込んでいた食事を振る舞い、大変に喜ばれる。それだけで心の中の何かが少し回復した。

今日はそのまま休んでもらおうと思ったのだが、出陣式の合間にゆっくり休めたとの事で、そのまま話し合いを始める事に。

「いやしかし、遅れてしまつて悪かった。些か予想よりも大掛かりな式となつていたよ
うでな、私とした事がぬかつたわ」

「出陣式という事で城の方は空いているだろうと勝手に思い込んでいました。直前で占い、中に入るのには危険だと知らなければ少し面倒になっていたかも知れませんが」

「俺は出陣式が盛大になるから警備がいつもより厳重になるとだけしか聞かされてなかったんだ。しかしまさかのまさか、出兵と式の騒ぎの隙を狙う輩を誘い込んで一網打尽にする空城の計が発動していたとはなあ。知らせる事が出来なくて申し訳なかった」

実はあの日の警備体制はただ厳重なだけでなく、巧妙だったらしい。城の警備をあえて手薄に見せ、そこかしこに兵を仕込んでいたそうなの。

おかげで幾つかの盗賊団を秘密裏に処理できたそうで、良い成果を得られたと警備の隊長さんが誇らしげに言っていた。

二日もすれば目ぼしい盗賊が消えたので、今では通常時の警護に戻っている。多めに配置されていた兵は後追いで合流するそうだ。

「それであれば仕方あるまい。勝手な思い込みで準備を疎かにした我らに責任がある。ともあれ、開戦前に無事合流を果たせた事は喜ばしい事だ」

「ですね。さすがに観測者である白様に赤壁での戦いを見て頂かない訳にはいきませんが、間に合つて良かったです」

「いやいや、まだ開戦には時間がかかるだろう?」

「そうとも言えんのだ、蜀の対応が恐ろしく早くてな、道を切り開いておる魏軍騎馬隊は

既に幾度かの迎撃を突破しておる」

「……まじか？」

「管理者の手引きではないぞ。我らは主だった主要人物達とは強く関わられぬ、情報を流せたとしても市井の噂程度しか操れん」

「つまり、今の時期を読んでいたのが向こうにいる？」

あくまで華琳が今攻めると言ったのは、赤壁のみに焦点を当てているからだ。

そうでなくては魏軍出陣は有り得ない。

そもそも国力で勝る魏がこの時期に勝負を急ぐ意味は無く、時を置けば置くだけ敵両陣営とは格差が開く。

だから魏としては攻められても適度にあしらいつつ防衛し、内政を整えていけば、五年ぐらいい蜀呉が何をしようが最早どうしようもない位置にまで持つていける。

時間がもたらす勝算の増加を無視する形はデメリットが多く、メリットは戦争の早期決着における将来的損害の軽減以外にないのだ。

一ヶ月から二ヶ月後に最も差が縮まる蜀呉は無理攻めをしなくてはいけない。

だが今の段階でも十分に差は縮まっているので、あちらからすればこの時期の戦闘が開始されても悪い話ではない。戦闘の準備も万端とは言えないがそこに整えていけるし、初動こそ遅れるだろうが迎撃できないわけではない。

つまりだ、この時期に魏が攻めるなど愚の骨頂。攻められると思っていない蜀呉は必ず初動に遅れる、筈なのに。

「それが神算鬼謀と謳われる臥龍と鳳雛よ」

華琳という万能の英傑も化け物だったが、三国志における知の代名詞もまた化け物だった訳である。

7.2. 軍師はとにかく眠りが欲しい

私は困惑の中で様々な対応に追われていた。

「どれもこれもが一步間違えれば奈落の底に墮ちる類の重要案件で、一切の気が抜けない。」

「しかもここ数ヶ月に渡ってそんな状況なので睡眠も中々取れず、私も雛里ちゃんも限界に近い……というか限界を突破している。」

「ああ、それもこれもあの曹操という怪物のせいである。」

「朱里ちゃん、これもお願いなの」

「雛里ちゃん、さすがに、さすがに死んじやうの、寝かせて……」

「ここで私と朱里ちゃんが寝ちやったら、多分蜀も呉もやられちやうから、駄目」

「またそんな重要案件なの?!」

「攻めてきたんだよ」

「……誰が?」

「魏が」

「………何で?」

「分かんない。領地の無抵抗解放と一緒で本気で分らない」

「あれを無抵抗って言って良いのかな？ まあいいや。でもこれで勝ち目が出てくる！」

「うん、私達の睡眠時間を勝ち取る為に、話し合おう？」

「うん、ここで勝てば確実に寝れる時間がいっぱい取れるからねっ」

「ここ最近の睡眠時間二時間の日が続いてたから、頑張ろっ」

こんな風に励まし合いながら、ずっとずっと寝れない日々が続いていた。

始まりは確か、定軍山での戦い。

全ての予定が狂いだしたのはあの日からだった気がする。

定軍山の戦い。私達の策が完全に嵌り、全てが思惑通りに進んだ筈なのに……結果、骨を絶たせて肉を切るような作戦に成り下がった苦い戦いだ。

あの時点で蜀と呉が手を組むのは既定路線だった。でなければ両軍ともに強大な曹操に対して打つ手が無く、仮に手を組んだとしても勝利は困難という状況だったから。

しかし既定路線に乗ったとして、あの状況のままでは蜀陣営は呉陣営から侮られ、利用されるだけ存在になっていただろう。蜀と呉の間にはそれだけの国力差があり、手を

組むというよりは取り込まれるというのが正しかったからだ。

けれどそれを受け入れてしまつては私達の理想は潰えてしまう。

それだけはなんとしても避けたかった私達は、自身の価値を見せ付ける為に賭けに出た。

曹魏の様々な行動を読み、割と高い可能性に賭けた私達。もし読み違えていたら別の場所から防衛線が瓦解していたかもしれない、そんな賭けを強要させられる程に私達は追い詰められていたのだ。

あらゆる偽装工作を施して、定軍山という穴を演出した。

ここで苦心したのは、明確に穴だと思われると策謀を感じ取られるかもしれないので、上手く調整しなければいけなかった点だ。

向こうの情報網などを予測し、動きに応じて作戦を随時変えなければいけなかったのだ、あの時は寝ている暇なんて無かった。

しかし渾身の策略は成り、予想通り魏の柱石の中の柱石である夏侯淵を引つ張り出す事に成功した。

最精鋭の情報支援部隊から、率いる将と兵の規模が予想の範疇であり、作戦実行に一切の支障が無いとの報がもたらされた時の喜びは人生で一番だったかもしれない。

そして待ち望んでいた報をきいた瞬間、私と雛里ちゃんはその場で睡魔に負けた。

泥のように眠った二日後、まさかの報が入った。

精鋭部隊の多くを討ったが、夏侯淵と典韋を打ち損じたという。

有り得ない話だった。

あそこに張り巡らせた策は二人の将でどうにか出来る物ではない。

将、兵、地理、罨、あらゆる物を詰めに詰めた必殺の地。

それを凌がれた？

私と雛里ちゃんは同様の表情をしていた。

怖気、だ。

策が見破られたのなら分かる、しかし策にかかった上で食い破られたのだ。

あまりに理解が及ばず、怖くなった。

理解できぬ事がこんなに怖い事なのだと、私達は同時に知った訳だ。

背筋を這う恐怖を殺すため、詳しく事情を聞く。

すると正体不明の人物が介入した為という話だった。

なんだそれは、たつた一人の介入で罨がご破産？ そんなの、策謀の意味が無くなる。

不条理過ぎるっ！

いつぞやの曹操を追い詰めたあの時を思い出す。

一人の仮面の人物によって愛紗さんや恋さんが退けられた時のような……もしかしてその存在がっていたの？

いや、それならば最初から出てきていた筈だ。負けが確定した段階で出て来る意味は皆無。

何故策を読まれた？ 何故策を破られた？ 何故介入を遅らせた？

何故、何故、何故……

私は生まれて初めて理解が及ばない事態を目の前にしてしまった。

今までは頭の中で全ての物に辻褃を合わせ、理解してきたつもりがあった。

けれど想像だに出来ない事態に頭がこんがらがり続け、あまりの気持ち悪さに吐き気がした。

起きたばかりで胃の中に何もなかったのは幸이었다。

私の頭では理解できないと判断した私は考える事を止めた。

ともかく事実だけを見て、以降の策を練らなければいけない。

仕損じはしたが、魏の精兵を大敗させ、柱石たる夏侯淵を追い返し、曹操の知略を上回ったのは紛うことなき事実。それなりの成果は上がったと言っている。

呉に良いように利用されるだけ、という事態は避ける事が出来るだろう。

けれどこの時から、私の、私達の何かが変わった。

呉と共闘するという公然の密約を交わしたその一週間後、魏が呉を攻めた。

いつか来るとは思っていたが、あまりに唐突の事態に蜀からは何も手が出せなかった。

これで終わりだと蜀の陣営は、いや恐らく呉の陣営ですらも思っていたに違いない。けれど奇跡は起きた。

孫策という稀代の英雄を犠牲にして、呉は勝利を得た。

正直、私はこの事に納得が出来ていない。英雄の死に対して不敬かもしれないが、どうしても疑問が過ぎってしまうのだ。

あの曹孟徳が、そんな不手際を晒すだろうか？

私は情報部に調査を頼んだ。わざわざ終わった事態にそれなりに人員を割くのは愚挙と言えたが、それでもやるべきだと思つた。

呉の陣営からの協力もあり、詳細が分かった。

それは奇妙な偶然が折り重なった末の奇跡だった。綱渡りとか薄氷とか、そんな程度のものじゃない。

こんな偶然、曹操だけじゃなく、私や雛里ちゃんを束にしたって想定不可能だ。

私の胸に以前感じた気持ち悪さが再び去来する。意味不明である、理不尽である、不可解である。

しかしここから何も読み取れなかった私は、これもまた今の私には荷が重いと判断し、気持ち悪さから逃げるようにして考えるのを止めるしかなかった。

しかし、それから気持ち悪い日々の連続だった。

魏が小さく負け、呉とついでに蜀が小さく勝つ、という構図が続いた。

どれもこれもが不思議と上手くいく。策も、戦も、重要な場面で賭けに勝ち続けている。

少なからず分の悪い賭けにも、何故か、勝ち続けているのだ。

この気持ち悪さは、思考を生業とし、様々な情報を得られる立場であり、大局を見通す第三者の視点を持つている者でなければわからないだろう。

策を講じ実行している呉は勿論、策を破られている魏ですら気付いている者は少ない筈だ。

大戦を避け、小競り合いが続いていて勝負の規模が小さいので気付きにくいのもある。だが何よりも魏は多くの局所で勝っているのに、勝負が決するような要所でだけ負けているのだ。だから気付かない。

気付いているのは、魏の軍師の一部と曹操だけだろう。

本当に勝ちたい所でだけ絶対に負けるのだから、何かの意図が介在しているのではと疑っているはずだ。

けれど呉の味方をしている私が断言する、そんなものを仕組んで実行できる人間など居ない。

戦場に絶対はない。歴史上のあらゆる軍師が辛酸を舐め続けて至った結論だ。

戦術の天才である雛里ちゃんですら読めない戦場はある。

けれどその絶対が、今ここでは起きています。

言いたくないもやもやが頭と胸に蟠る。

私は頭を振った、これについては答えが出ないと今まで悩んでできてわかっていたからだ。

完全に頭の中から消し去るのは無理なので、出来るだけ頭の片隅に追いやる。

相手は霸王曹操、二つの事に考えを割いて勝てる相手じゃない。

私達が賭けに勝つには、最善の手を打てば、という前提があった。

ほんの少しでも甘い策を講じれば、曹操は一瞬でそれを見抜いて撃ち抜いてくる。

下手をすれば将が一人二人討たれていても可笑しくない状況が幾度かあったが、そこでも何故か私達に物事が有利に働き、最小限の被害で切り抜ける事が出来た。

それがまた、物事を知で図ろうとする軍師として、何とも言えない気持ち悪さを感じてしまう。

そうしてまた思考停止のような考えが頭を巡り、それをまた頭の隅に追いやる。

私に出来る事は最善手を考え続け、曹操に隙を見せないようにする事だけなのだ、強く深く念じ続けた。

頭を働かせ続け、睡眠を削り続けていたある日、有り得ない事が起きた。

私達のちよっかいに対して魏が何の反応も示さず、結果領土を削られる愚を犯した。

領土とは人、物、流通といったあらゆる力の源泉となる最重要要素。それを削り取られるのはよほどの事情を抱えていない限り悪手である。

私達はその理由を懸命に探したが、答えらしいものには至らなかつた。

これもまた最近多い思考停止に類する案件だ。

抵抗しないのなら、頂けるだけ領土を奪っておこう。

私達の手の及ぶ範囲で領土を掠め取っていると、しばらくして毒がまわってきた。

無抵抗で手に出来たのは敵味方の誰々將軍の手引きだった、という情報が各地から挙がり始めてきたのだ。

蜀は桃香さまの元、将兵の結束が固い。

けれども、こうも容易く領土が入ったとなると、疑わしきは疑いたくなってしまう。

しかも敵の手引き情報だけじゃなく、味方の誰々が敵に兵を潜り込ませて手引させたという情報もまた面倒極まりないものだった。

本来であれば褒められる事態だ。その手引きをさせた者は褒賞に値する。

けれども荊州の地を治めて間もない事が枷となった。

まだまだ桃香さまに心酔しきっていない民も多く、私達の統治を不安の中から厳しい目で見つめている段階。一枚岩である事を示さなければいけない時期だったのだ。

仲間達の仲は非常に良好なのだが、付き合いの期間で言うなら他国の柱石や宿将に比べて極々短期間のものに過ぎない。

だから精査しない訳にはいかなかった。でなければ民が納得しない。

実はあの將軍は桃香様に隠れて部隊を囲っているとか、勲功欲しさに勝手をしたただとか、桃香様は将を取めきれていないだとか、妙な噂が立つ。そうなれば王と将、将と兵、兵と民、それぞれの乖離は大きなものとなってしまふ。

それだけは避けなければならず、味方に示すように厳しく調べなければいけない。

しかし人の心とは難しく、仕方ないと理解していても、痛くない腹だろうと、あれや

これやと探られれば誰だつて気分が悪い。

それが不仲に進展せぬよう、またその類の噂が立たぬよう厳正かつ公正に、緻密に計算しながら作業せねばならず、これが非常に手間であり面倒であった。

領土を切り崩す利はない、曹操のした事は戦略的に言えば愚挙である。けれども、嫌がらせとしては最上であつたと言わざるを得ない。

73. 天意の証明

数カ月の間、心と頭の休まる日は一日たりとて存在せず、夢か現かを彷徨うような有様で魏の対策を固め続けた。

そうして今、あらゆる手を尽くし、今から二ヶ月程でやってくるだろう大決戦の準備の最中、雛里ちゃんへの報告を受けた訳だ。

頭を回転させ続けた甲斐があり、初動は多少遅れた程度でどうにか食い付けた。

この時期に進軍してきた理由は分からないが、やるべき事はもはや一つ。
今こそ決戦の時。

……

寝不足のボケた頭で考える。

今魏が攻めてくる理由が無い、それは確実だ。あらゆる軍師が魏が放つ一手としては大間違いの一戦だと断ずるだろう。

けれども、一ヶ月から二ヶ月後を想定していた戦だけで見るとすれば、少しだがこちらの方が勝算が薄いのだ。

とはいえ元よりこちらにとって百の内二十あった勝算が十二になっただけで、勝算

が薄いのは変わらない。あちらからしたら誤差の範囲である。

……まさか僅かな差の為に？

いや、それこそまさかか。たかが一戦の僅かな勝率の為に大局を捨てるなど、あの曹孟徳が選ぶ筈ないのだから。

そうして決戦前当日、あらゆる準備が整い、赤壁にて己の数倍の軍勢を前にしている。「ついに来ちゃったや」

あまりの戦力差に身体が震えそうになる。けれど、幾重にも巡らせた策がこちらにはある。

幾つかは早過ぎる開戦に間に合わなかったが、それでも十分だ。渡り合えはする。

「やっぱり、怖いな……けど」

五十万を超える大軍勢、恐怖がない訳なかった。

けれど私は歯を強く食いしぱり、大親友との別れの光景を思い出す。

数週間前、私は魏軍に潜り込みに向かう大親友の背を見送った。

適任が私か彼女しかおらず、また軍学に特に秀でた彼女が最終的に選ばれた。

小さい背にあまりに重い物を背負いながら、氣丈に敵陣に向かっていった彼女。

私を心配させないよう冗談を言いつつ、笑顔で向かっていった彼女。けれどその手は

小さく震えていたのをしつかりと覚えている。

……絶対に生きて帰らせる。あの子を無事に平穩に帰すんだ。

私は強く意志を持ち直し、本陣から指示を飛ばすのだった。

そして幾ばくかの時が過ぎた。

戦況は刻々と変化をしていく。

まるで寄せては返す波のように、有利不利は振れている。

敵の大軍勢に太刀打ちできているのは呉軍の水軍が強力である事、仕込んでいた策が上手く発動した事、直前に合わせた苦肉の策が嵌まり始めているからだだった。

だが数々の策が上手く発動しても、的確な対処によつて最小限の被害に抑えられている。

こうまで策が通るのに、少し崩れる程度の敵陣營の強固さが恐ろしい。

少し崩れて揺らいだ程度ではすぐに持ち直され、また拮抗状態が作り出される。

そうして今、徐々に不利に形勢が傾きだしている。

敵が船に慣れだしている。たかだか数時間の実戦で、彼らはもう適応し始めているのだ。

さすがは魏の精兵、敵ながら天晴と言わざるを得ない。

「けれどその慣れ、連環の計にてひっくり返る」

発動の令は私に一任されている。

既に各指示を出し終え、判断の多くを現場に委ね始めた私は、その時をじっと待ち続けていた。

「しかし、最善の可能性はほぼ潰えている」

連環の計が最も効果を発するには波と風の相乗効果が必要だった。

波だけじゃなく風でも船が揺れば、連環による船の安定への依存は絶大なものになる。もし連環が外れた場合の落差はまさに天地がひっくり返るが如くだったろう。

けれど今は風が凧いでいる状態だ。

「これが二ヶ月後であつたのなら……」

悔やんでも仕方ないが、それでも思つてしまう。

敵を襲う数々の不運が私の想定を良い方向に大きく乱し、希望が見えてしまった現状だからこそ、私はそんな未熟を晒してしまふ。

もしもこれが二ヶ月後であつたなら、風も私達の味方をしていた可能性が高い。

地元の人間から聞き出し、また風土記にも記されていた情報が正しければ、長江の流れ、水温、気温、時間、地形、様々な要素が絡み合い、二ヶ月後のごく短い期間だけ大風が吹きやすい時期があるらしかった。

けれど今はまだ時期が早過ぎるそうで、風が起る可能性は皆無だそうだ。勿論二ヶ月後だったからといって風が丁度良い頃合いに吹くとは限らない。

このもしもという言葉には甘さしかないのだ。

風が吹いたら作戦を発動させたら良いという甘えは許されず、私は次善の好機を見極めなければいけないかった。

私は身を蝕む緊張と恐怖から歯を食いしばって耐え、じつと戦場を見つめ続ける。

小康状態がしばし続いたが、ようやく苦肉の策が完全に成つたのを確認する。

そして、

「今ですー」

私は魏を滅ぼす火を放った。

風は起こらぬという想定の前、その分多くの燃料を用意した。

火は燃え上がり、怒号と悲鳴が上がり、形勢は傾いた。

が、やはり足りない。

通常の作戦よりも燃料を多く用意したとはいえ、冬の直後であり、急な開戦に想定よりも量を確保出来なかった。

火を巻き上げる風が無ければ今一步届かない。

形勢は傾いたが、このままでは持ち直される！

「えっ」

背が小さく押された感覚、そして何かが私の頬に伝う汗を拭うようにして撫ぜていった。

始まりはそんな小さな始まりだった。

けれどそれを契機として、風が、大風が、戦場を蹂躪した。

水軍を任せていた呉の兵はなんとか風をいなしているが、不慣れな魏軍はそうはいかない。

彼らを繋ぎ止めていた連環は既に無く、船上では火が荒れ狂っている。

船から振り落とされる者、火に巻かれる者、遁走する者、もはや魏軍の戦線は崩壊していた。

「やったっ！」

有り得ない筈の風が吹いた事を喜ぶ。

周囲に居た兵も多いに沸き立っている。この勝負、間違ひなく蜀呉の勝利である。

私は隣にいた桃香さまと抱き合って喜び合う。

「さすが朱里ちゃんだよねっ！ 言ってた通り、風が吹いたよっ！」

その言葉に我に返る。

確かに冬が来る以前に、ここが戦場となる予測を立て、その予測を元に作戦を皆の前で披露した。

今現状はまさしくその作戦通りに事が進んでいる。

だがそれこそ有り得ぬ事態。話したそれはあくまで二ヶ月後の想定なのだから。

不可能を覆し、作戦を成功させた原動力、それは何？ 不条理な戦場を見渡し、答えを得ようとした私の目に少し違和感のあるものが映った。

「あつ」

巻き上がる大火を受け、光り輝く白き衣に目が止まった。

「天の、御使い殿？」

その存在を認識した瞬間、脳髓が震えた。

天という荒唐無稽な答えに私は至ったのだ。

そして今までの気持ち悪さの正体に気付いた瞬間、喜びが削ぎ落ちた。そして恐怖と虚無感が心身を蝕み始める。

心臓を締め上げるそれらに膝を抱えて泣き出しそうになるが、そんな事はしてられない。

戦場は既に追撃戦に移行し始めている。

私は喜びの声を上げる皆に新たな指示を矢継ぎ早に飛ばす。

すると皆は張り切つて了解の声を上げ、各所に飛んでいった。

桃香さまに後の事を任せ、私は一人作戦本部である天幕に戻つた。

そして誰も居ないのを確認し、私はくたりと地面に座り込んだ。

「人の身で操れるのは人の行動まで。気候まで操るとなると、それはもはや神の領域。

……ええ、ここまで来ては認めてしまわざるを得ない。それが策と謀略によつて軍を率いる軍師としてはただの敗北宣言だったとしても、知に生きる者だからこそ無知を認めぬ愚者となつてはならない。

誰も彼もが、ただ天の掌で転がされていただけだったんだ」

違和感の始まりは定軍山。

負けるはずのない場面がひっくり返されたあの戦い。

それは人知を超えた何かが生じたからであり、先程起こつた神風のような何かが生きた。必殺の陣は破られたのだと仮定する。

そしてあの戦いで得をしたのは誰なのかを考える。

私達は実績を得たが、決定的な瞬間を逃した。

ついで曹操。精兵こそ失つたが、大事な忠臣を二人失わずに済んだのだから利はあつた。

だが彼女が天に選ばれたのではないのは、今までの奇妙な敗戦と目の前の光景からして有り得ない。

なら答えは一つ。

天の御遣いを擁する呉である。

呉の方が地も人も多く有してはいるが、魏の将を討った事はなく、魏に対しては小競り合いで敗戦が続いていた。

そのような状況で私達が魏の柱石を討ったとしたらどうか。

今のように対等と言いつつも結局は呉が主導している現状とは違い、完全に対等な立場となっていたのは間違いない。

そして私達が呉と手を組んでからは、私達も天運を招来させたかのような勝利を掴み出した。

常識という壁を排し、有り得ない事態を天に押し付けるといふ軍師として有るまじき行為こそが正しかったのだ。

絶対のない戦場において要所で必ず勝つという不可能を可能にし、圧倒的不利を孫策さんという一人の英傑を人柱にする事で覆し、人にはどうしたって干渉できぬ自然現象を都合よく操る。

こんなの、天にしか出来ない。

「天の御使いとは一体……いえ、これ以上の考えは天下二分の味方である呉の不信に繋がりがねない。だからこの考えはもうここで終わり。」

天下の傑物である曹孟徳はとんでもない存在とぎりぎりまで競い合っていた。それだけを胸に刻んで身と気を引き締めれば良い」

此度の戦は制したが、まだまだ戦いは続く。

追撃戦の内容は事前に詰めているし、後は各將軍が最善の判断をしてくれるだろう。

しばらく指示が必要な事態は起こらないだろうから、今だけは気を抜いても……ああでも、一応最後に外を確認しておこう。

そして天幕の外に出た私は、想像だにしない光景を見た。

「嘘……」

燃える戦場を切り裂く一騎の影。

黒馬を操り、橋で繋げた船から船へ、橋が無ければ飛び移り、行く手を阻む炎を鎌で切り払い、兵も壁もあらゆる障害を吹き飛ばし、それは本陣のすぐ近くまでやってきた。

連環こそ繋がっていないが、本陣たる旗艦と最も近い大型船に降り立ったその存在は、少女だった。

噂に伝え聞く可憐な絶世の容貌、包圍網の隙を見抜く戦術眼、超一流の武将でも可能

か分からぬ芸当を難なくやってのける人物など、かの万能の英傑たる曹操だけだ。だから目の前に立つのは曹操、不倶戴天の敵である。と誰もが理解しているのに動けない。あまりにも見事な一騎駆けに、誰もが目を疑いつつも見惚れてしまったのだ。まるで物語的一幕を見ているかのよう。

そして彼女が船の最後尾、私達と最も近い位置までやって来てようやく私達は動き出した。

「親衛隊で前を固めよつ！ あれは怪物である！」

甘寧さんの鋭い声で皆の意識が切り替わり、本陣に残っていた兵が集結する。

そしてあちらの船に乗り合わせていた守備隊が彼女を囲む。

本陣に居たのは桃香さまと孫権さんと天の御遣い殿、そしてその守護を任された紫苑さんと甘寧さんだけだ。

他の皆は追撃戦に向向っており、直ぐ様戻ってくるのは不可能だった。

だがこことあちらはそこそこの距離があるし、あの船と繋がっている船からは続々と兵が集まり始めている。

その隔たりに安心しそうになって、

「ふむ、邪魔ね」

そうやって彼女は馬首を返し、船上をぐるりと回って、すぐに戻ってきた。

彼女はその僅かな間に船と船を繋いでいた橋を崩し、船に残っていた兵を全て長江に叩き落としていた。

あまりに自然体で戻ってきた彼女に、それがどれだけ異常な光景なのか分からなくなってしまうそうになる。

彼女は自然体のまま、口を開いた。

「丁度良い。ここには三人の王と、裁定人が集っているな」

桃香さまと孫権さん、そして天の御遣いを見て、彼女は言葉を続けた。

「私、魏王曹操は此度の戦、ひいては大陸の趨勢を担う戦いにおいて負けた事をここに認めよう。」

戦いは終結である」

その言葉を聞いて、全ての音が止まった。

「故に、この場での無益な武力行使はやめておく事を勧める。」

まあ私の首が欲しいならご随意に。不可能でしょうけど、試したいというのならやってみるといい」

挑発にも似た言葉を聞き、甘寧さんが弓兵部隊に合図を送った。

途端に雨のごとく降る矢が曹操を襲う。数多の矢を前に彼女はやれやれといった表情をし、鎌をぐるりと振るった。それだけで矢の雨は彼女に一掠りもせず落ちてい

た。

「無駄と分かつて貰えたかしら。またやつてもいいけれど、周囲に落とした貴方達の兵が、貴方達自身の矢に貫かれて終わるだけよ？　というか、彼らを回収しなくて良いのかしら？」

桃香さまがはつとしたように号令を出す。

「弓兵部隊は一切の攻撃を止めて！　そして小舟を出して兵を救うのっ」

「ふっ、直ぐ様指示を出せなかったのは減点ね」

彼女はくすりと嘲るように笑った。

ことここに及んで、何たる余裕。

その様に皆が気圧されて口を噤む中、私が一步を踏み出して彼女と相對する。

「あら、貴方は確か、諸葛亮だったかしら？　まさか軍師が前に出てくるとは思わなかったわ」

「……貴方が負けを認めに来たという言葉、信じただけです。

貴方がどうしようもなく負けたのだという事実を、ここで唯一人理解していますから」

「あれをただの偶然と受け入れるだけの愚物ばかりでなくて良かったわ。

そう、私は負けた。貴方達にはなく、天に負けた」

それを聞いて兵達が色めき立つ。

多くの犠牲の果て、自分達の努力が実ったからこそこの決戦まで漕ぎ着け、そして強大な敵に勝利したと彼らは信じている。

それは一側面としては正しいが、もう一つ上の視点から見ると、不条理の塊であったと理解できる。

私は周囲を見渡し、皆の感情の色を見る。

……やはり私だけのようだ。桃香さまも孫権さんも天の御遣い殿も、顔を紅潮させて何かを言い募ろうとしている。

しつかりとした教養を持っており、民と兵の上に立つて多くの情報を得ている筈の彼女達ですら、分からなかったのだ。あるいは気付いていても信じたくないのか。

「私達はっ」

桃香さまが反論をしようとするが、私は彼女の袖を強く引く事でそれを遮る。

何でっ！ とその表情が訴えてくるが、私は強い意志を視線に込めて、頼み込む。

彼女は眉間にしわを寄せ大きく口を開こうとしたが、しかし強く目を閉じ、一歩下がってくれた。

主たる彼女の言葉を遮るのは苦しく、また主従の常識からも乖離しているが、ここで曹操と舌戦を交わすべきではないと判断する。

余計な情報を漏らされたり、舌戦で打ち負かされたりすれば士気に多大な影響を与えてしまう。

私は引いてくれた桃香さまに代わって一步を踏み出し、彼女に答えた。

「それについてここで言及する気はありません、もはやここに至つては過程をどうのこのと言及しても無意味です。結果も後の歴史が勝手に語つてくれるでしょう。」

ここで語るべきは戦いの過程でも結果でもなく、貴方が何故ここにやつて来たのか、です」

「……憎くなる程に冷静ね、さすがは私を最も苦めた人物の一人か。」

二人の王たる覚悟を試したくはあったが、時間が無いのもまた事実」

この窮地にあつて、敗戦後にあつて、なお悠然とした様を見せる彼女。

後背にある大炎も相まって、恐ろしくも神秘的に映る彼女。

美しさ、強さ、気高さ、賢さ、全て噂に違わぬ万能の英傑に褒められた事実が、私の脳と背を震わせる。

「では早速語ろう。」

二人の王に言つておく事は三つ。

一つは願ひ。我々は匈奴と親交を結んでいる、その国交を勝者たる貴方達に引き継いでもらいたい。その旨は既にあちらへ届いているから、後は貴方達次第。とはいえ四百

年の因縁を乗り越えた交わりである、無碍にする事はしないで欲しい」

「なっ」

彼女の声の届く範囲の全ての人間が、あまりの驚きに声を漏らした。

しかしその驚きを意に介さず、彼女は続ける。

「二つは教え。我らの叡智を我が城の書庫に詰め込んでおいた。

そのこの天の御遣いがもたらした恩恵を超える知識と規模である事は実証済みである。まあ信用できないでしょうから、文官と吟味しながら有効活用しなさい」

それもまた驚きである。

呉は彼の持つ天の知識で市井の治安維持、商業全般、各種法制度、教育等、ありとあらゆる分野に大きな変革をもたらした。勿論曹操がそれを知らぬはずがないだろう、かの国の情報収集能力は群を抜く。

なのにそれ以上の叡智と言い切るの？

幼い頃から知を学び、今ではそれを生業としている程に知というものが好きだ。知的好奇心は人の二倍も三倍も旺盛な私が、そんな事を言われて反応しない訳がない。もはや本能に根付いていると言っても過言ではない知的探究心が、とても強く疼くのを感じる。

「三つは脅し。もし人道、天道に悖る行いをしたのなら、私は直ぐ様この地に舞い戻り、

全てを頂くわよ」

紅蓮を背景とし、艶然と笑いながら私達を見下ろすようにして彼女はそう言った。知的好奇心を疼かせていた私は冷水を浴びたように心根から全てが震えた。

桃香さまや孫権さんを見るに、それは覚悟を試した発言と感じたようで、毅然とした表情と目で曹操を見つめ返していた。

けれど違うのだ。

あれは真意から出た発言であり、私達にとつては本当に脅しなのだ。

私達が驕り、民意と神意を失った状態で彼女と相對した時、私達は絶対に勝てないと確信できる。その二つだけが曹操に勝っていた部分であり、その二つだけで勝ったようなものなのだから。

私は氣を引き締める。

その心情を読み取られたのだろう、曹操は私にだけ微笑みかけた。

そして、

「最後に、孫権」

「……なんだ？」

「孫策の事は私の本意ではないとはいえ、部下をまとめきれなかった私の責任である。

改めて謝罪する。すまない」

「……我ら孫呉の民は未だ罪を許さず、憎しみの火はこの戦場の火を持ってしてでもまだ足りぬと憤っている。

だが、あの姉様の結末が、過去から追ってきた我らの罰であると、少なくとも私は理解している。

……これで最後だと言うなら、私からも一つ良いか？」

「なんなりと」

「最後、貴方は我が姉と話していたな。あの時、何を話していたのだ？」

「互いの手で殺し合えなかつた無念を話し、最期は自分の家族自慢よ。」

私の愛おしい家族達が後は全部やってくれるから、先に休んでるってね。

そこには悔しさもなく、ただ誇らしさだけがあつたわ」

「……そう、そうね。とても、姉様らしい最期だわ」

孫権さんはそう言つて劍の柄をぎゅつと握つた。

「さて、言いたいことも全て伝えたいし、そろそろこの舞台から退場しようか。

再び相見える機会が訪れないことを祈っているわ。

では、さらばっ！」

彼女は見事な手綱捌きで馬の踵を返し、背を見せると同時に走り出した。私達が反応しようとした時にはそのまま船外へと飛んでいた。

唐突で突飛な行動に驚き、意識に一瞬の空白が生まれた。はっとして船ばたに走り、彼女の姿を追えば、彼女は水面に立っていた。

いや違う。

そこには闇夜に紛れる黒の迷彩が施された、見た事もない特殊な形をした中型船が用意されており、そこに彼女は見事に着地をしていたのだ。

「回収完了なの！」

「よっしゃ、後は華麗に去るだけやっ！ 皆必死で漕ぎまくれえ！」

「全力全開だあつ！」

気合の入った声と共に船に取り付けられた車輪のようなものが回り出し、とんでもない速度で船は離脱していく。

驚愕しつつもあれを追いかけられる手段を模索している内に、夜闇と混乱に紛れて彼女の姿は完全に見えなくなってしまった。

その事に人知れず胸を撫で下ろす。

今の人員では彼女を捕縛する事も殺す事も多大な犠牲をもってでしか実現できる気がせず、どう決着をつけようか思索していたのだ。

多くの兵は逃した事に口惜しさを感じているようだが、これで良かったのだという確信が私の中にはある。

技量などを見抜く目は持ち合わせていないが、彼女がなんの臆面も無く此処に姿を表した事から推察できる。

「えっと、私達、勝ったんだよね？」

「だろう。敗北宣言は受け取ったし、眼前の光景からしても間違いない」

桃香さまと孫権さんの言う通りの筈だ。だが曹操の態度と去り際があまりに格好良く、あちらが負けたのだと思えない。

「勝った事に間違いはありません。ですからここは勝鬨をあげましょう」

そうして勢いでこの変な雰囲気や誤魔化すしかない。

「お、おお〜」

桃香さまが首を傾げながらも握り拳を天に掲げて声を上げる。

周りも彼女に倣い拳と声を上げる。

すると何も知らぬ遠くの仲間から呼応するように勝鬨が上がり始めた。

ここに来てようやく奇妙な雰囲気も晴れ、声に張りや喜びの感情が入り始めた。

ふう、なんとか士気を崩さずに済んだ。

全く、霸王様には最後の最後まで煮え湯を飲まされる。

74. そして彼女は負けるのだった

こうして霸王曹操の戦いは終わった。

これからはただの曹孟徳の話が始まるのだろう。

そしてそこに俺は……。

「して管輅よ、収束率はどこまで上がった？」

「今回も大幅に上がりましたね。現状全体の八割まで到達した所です」

「一周で一割も上がるとはな、重畳重畳」

全体の八割という事はつまり次がある。故にこれで、ここで、魏の皆とはお別れなのだ。

「……卑弥呼、ここから曹操達の元へはどれぐらいの距離がある？」

「……ふむ、少し待たれよ。ほう、左慈が彼女達を監視しておるのか、これは好都合。

私と左慈の力を用い、左慈を座標とすれば白殿一人ならばすぐさま飛ばせるぞ。

がしかしだ、さほど時間は残されておらんぞ？」

「ええ、このループでの収束は確定しました。役目を終えた我らが転移するのは一瞬後か数時間後かわかりませんし、これまでの経験から猶予は多く見積もって一日あるかな

いかです。

それでも会いに行かれますか？ 名残惜しさが増すだけなのではありませんか？」

「それでも、行かないやいけないんだ。

約束を果たしてくれた彼女にお礼と謝罪を伝えなければ、あまりに不義理だ」

「そう、ですか。ならば我らに止める言葉はございません。悔いのないようにしてくださいませ」

「ごめんな管輅、君の助言はいつも正しいし、何より俺の事を案じてくれてるのが分かるんだ。けれどもいつも俺のわがままに付き合わせてしまっている」

「いいのです、私が好きでしている事ですから。白様は後悔なきよう真つ直ぐに行動してくださいませ」

「本当に、ありがとう」

「向こうの準備は整ったそうだ。白殿、準備は宜しいか？」

「ああ」

「そうか、では私からも最後に白殿にお願いしたい事がある。白殿、次のループこそはず第一に中央へと連絡を下され。管輅のソワソワとイライラのとばっちりを受ける私の身についても考えてもらいたいのだ」

「なっ、卑弥呼っ！」

「ではその所よろしく頼むぞ、転送！」

赤ら顔で卑弥呼に詰め寄る管輅としてやったり顔の卑弥呼の姿に笑みが溢れた瞬間、視界が切り替わった。

仲睦まじいやり取りに心が癒やされつつ、俺は華琳達が待つ場所へと飛ぶのだった。

次の瞬間、仏頂面の極みと言わんばかりの表情をした沙慈が目の前にいた。

先ほどのとの空気の落差に驚く。

「久しいな左慈」

「ふん、挨拶などいらん、目標はここより……と言わずとも貴様なら気配で察しているか。さっさと行け」

「なんだ、随分な感じじゃないか」

「人大の物を転送させるのは流石に力を消耗する。使命の為の消耗だったら本意だ、だが茶番の為に使えと頼まれて、笑顔で応える事は出来ん」

「茶番、だど？」

その言葉に心がざわつく。

「そうだろう？ 収束率から考えても次回のループは確定している。

俺達はこれ以上このループに関われない。ならばこれ以上の干渉は茶番と言っても

良いだろうか」

「……そういえば、卑弥呼が左慈や于吉はそういう考えだと言っていたか」

「ああ、それが数十回のループを繰り返して続けた俺の考えだ。」

必要なものだけ抱えて、無駄じゃなかったかもしれないものも無駄と割り切らねば、やってこられなかった」

ああそうだった、彼らは俺とは違う時間の悲劇を経てここにいる。

こうして会話していても分かるが、彼らには人間大の感情と思考が存在している。

管理すべき人間と世界を理解し、物語の収束を主導するために残されただろうその人間性は、想定外の四百年に及ぶ繰り返しに耐えられる物ではなかったのだろう。

想定外の四百年という年月の前では、何もかもが摩耗する。

いつ救いがくるのかという不安を抱いた経験は同じだろうが、続くのと繰り返すのでは、きっと彼らの方が辛い境遇だったろうと、俺はそう思う。

「なら、この茶番は反対か？」

「要らぬ労力、つまり無駄だと断言する。……だがそれを好むというのなら勝手にやれ。」

収束率を上げにきた貴様には一応恩義がある。数度ならば多少無駄な労力を割くぐらいはしてやる」

「そうか、ありがとう」

「……ふん、無駄口が過ぎたな。もはや奴らの監視もいらんだろう、俺は管輅達と方針の再確認の為に戻る。」

あと幾らあるかもわからん残りの時間、精々好きに過ごすといい」
そう言つて左慈は苦い表情のまま消えてしまった。

彼の心情を汲むなら、この事についてはもう何も触れるべきでは無いのだろう。わがままに付き合つてもらつた感謝の気持ちだけ残し、先程のやり取りは忘れる事にする。
「さて、早く華琳達に会いに行こう」

気配を探れば、数十メートル先で馬を休ませ、何かを相談している皆の気配があつた。
「しかし、何を言われるか、何を言おうか、何も考えず覚悟も決めずに来てしまった。はてさてどうするか」

思案に思案を重ねつつ、俺は彼女達の気配がする方向へ歩を進めるのだった。

森の中の拓けた場所に彼女達はいた。

疲労困憊という様子が伝わってくるが、しかしそれでも誰ひとりとして欠けることなく彼女達はそこにいた。

華琳は切り株に座り、皆は所持品の確認、怪我の治療、馬の世話にあたっている。近付いた事で彼女達の無事が分かり、立ち止まってしまふ。

例えそれがどうしようもない敗残だったとしても、彼女達全員の命が助かった事に対して感極まってしまった。

眦の端に溜まりそうになる涙を堪え、俺は一步を踏み出す。

「遅かったわね、白。貴方は私を待たせるのが好きよね」

背後から近づく形だったというのに、華琳は何でもないようにそう言った。

疲れ果てているだろうに、俺が本来はいる筈もない事は知っているだろうに、俺の氣配を察した時点で彼女は背筋を伸ばし、まるで俺が来るのは分かっていたと言わんばかりの態度で言つてのけた。

本当に、この子は筋金入りの負けず嫌いだ。

「酷い言い様だな、無理をして駆けつけたというのに」

その姿と言葉に涙と満面の笑みがこぼれてしまいそうになるが、我慢だ。

そして彼女の前まで行き、跪いて頭を垂れる。

「此度の敗戦、私が負う責任は多大であります。如何様な処断も」

覚悟している、と続けようとして、彼女がくすりと笑った事に気付いて言葉を止めて頭を上げる。

「ふふ、皆が皆同じ事を言う。ならば私が返す言葉もまた同じ。」

此度の敗戦は全て我が責なり。我が民、我が兵、我が将のその全てに責は無い。故に

貴方が負う責もなく、罰はない」

全てを悟ったような優しすぎる声と内容であった。

だがそう言われて納得する皆ではないだろう。

俺が来たことに驚き、近付いてきていた皆がその言葉を聞いて華琳に詰め寄る。

「華琳さまっ、それはあまりに自責的に過ぎます!」

「華琳さまの剣として働きが足りなかつたとは、誰よりもこの身が知っておりますっ」

「私も何かが足りない」と理解していたにも関わらずこの体たらくであります。自覚できる確かな罪があるならば、罰もまた必要でございます」

そして夏侯姉妹と桂花の一言を契機に、一同は膝をついて華琳を見上げる態勢になる。

それを見て華琳はやれやれといった表情をして一息をつき、言った。

「罰を与える、罪人を裁くというのは基本的に上位者から下すものでしょう? でもね、

ここにはもう上下関係なんて無いのよ」

「は? それはどういう」

疑問の声は、

「恐らく、数日後にでも魏国は陥落しているでしょう。私は亡国の王、という訳」

「なっ?!」

すぐさま驚愕の声に変わった。

「此度の外征は勝てば全てを得て頂点へ、負ければ全てを失い舞台から降ろされる、そういう類の戦いだつたのよ」

「しかし、防衛に残した兵の数も多くつ」

勿論軍師達は激しく反論しようとするが。

「ええ、従来ならば防衛に残した精兵が私達の帰還までもたせてくれたと確信しているわ。けれど今の防衛拠点には多くの義勇兵が割り振られ、古参兵は急に膨れ上がった兵の対応に追われている事でしょう。平素ではありえない状況に浮足立ち、混乱する皆の中に小さな油断が育ち始める。きっと私達が勝っているだろうから、大丈夫だろうという普段ではあり得ない思考の逃避がまかり通る。

そこに天の加護を受け、貪欲に勝利を求める彼らがぶつかれば……想像に難くないわね」

華琳は淡々と説明する。

推測であるはずなのに、まるで確たる事実を突きつけられたかのように言葉に窮する一同。

軍師達には見えてしまったのだ、その光景が。

「た、確かに有り得る話ではありません。けれど彼らもこの大戦で大いに疲弊しているは

ず、そこまでの強行軍を行えるとは思えません！」

しかし稟は果敢に反論する。

「義勇兵、その中にはどれだけの細作がいるでしょうね？ 天の御遣い達はもう戦う必要もないの、拠点の前に行って旗を掲げて大声で叫ぶだけでいい。我が兵は混乱し、敵兵は蜂起する。」

さすがに許昌は易易と落ちないでしょうけど、そこまでに落とされてはいる拠点によって私達も許昌まで辿り着くのは至難。まあ分かりやすく八方塞がりよね」

「しかし、それはあくまで可能性の話なのです。本当にそうなっているとは限らないのですよ」

風も疑義を呈するが、

「私ならばそうしている、そして貴方達でもそうしているでしょう？」

そう言われてしまえば終いだ。

光景が見えてしまった、想像出来てしまったという事は、どれもこれも想定の内であるという事。自分達に置き換えれば確実にやっていると理解してしまう。

「……ぐう」

「寝るなっ！ 疑問は数多くありますが、一応筋の通る話でもあります。ならば何故今攻めたのですか？ 防衛に徹すればそれだけで勝利は私達のものでした。亡国の王と

なる可能性のある戦いを何故望まれたのですか？」

「ここから盤面を覆す手がないと再確認した所で、ならば聞くべきはその始まり。

「最もな疑問ね。確かに国力差を考えてもそうするのが私達にとっての最善手であり、何も知らなければ私も疑義を抱く事なく実行していたでしょう。

けれどそれをしなかったのは、私が知っていたから」

「何を知っていたのですか？」

「……稟、貴方は最後に吹いた風をどう思ったかしら？」

華琳は思わせぶりに質問を質問で返した。そこには若干の稚気が滲んでいるように見える。

「勝負を決したあの大風ですか？」

「そう。あれは天の御遣い達に都合の良い時機に吹いたとは思わない？」

「ええ、何故今に吹くのかと理不尽を感じ、思わず唇を噛み締めました。しかし自然現象に何を言っても仕方がないではありませんか」

その言葉を聞いて華琳はにやりと笑った。不条理だが、仕方がない。それこそが答えであると言わんばかりに。

「仕方がない、ええ確かに仕方がない事。けれどね、もう少しその不条理と不自然について考えてみるべきよ。」

自然現象というのは発生する条件がある。雨が降るには雲が必要なように、霧が出るには気温の変化が必要なように、何かしらの発生条件が必要よね？ けれど今回の大風はどうだったかしら、ここの風土記なんかと照らし合わせても明らかに発生条件が足りていないわ。

風土記やここ数年で密かに重ねていた検証に穴があるのかも知れないけれど、それでもこの時期に風が吹いたなんて記録は一切なかった。

そして何よりあの風は一度切りしか吹かず、しかもあちら側にとってこれ以上無い好機に吹いた。

ここまで来れば何かしらの因果関係が無い方が、むしろ不自然だとは思わないかしら？」

「まさか、天候を操る者がいたとでも？ そんなことは人の身では不可能です！」

「歌姫三姉妹は不可思議な力、呪術でステージを盛り上げているわよね？ 皆も一度は舞台を見た事があるでしょう？ 霧を生み出したり晴らしたり多少なりとも気象に干渉できる術の存在を貴方達は見えてきているはず。ならば彼女達以上の術者がいて、天候を操る存在がいるかも知れないとは想定できなかつたのかしら？」

「そう言われますとぐうの音も出ませんが……しかし」

「ごめんなさいね、意地悪な言葉だったわ。貴方達がそれを思考から除外していても仕

方がない。

常識的に考えても有り得るとは思わないし、彼女達以上の術者など聞き及んだ事もないし、天候まで操れる存在ともなれば実戦にもっと投入されている筈だから。

とはいえ、天候を直接操作した術者というのは存在していなかったでしょうが」
迂遠な表現に一同の表情が険しいものとなる。

「では、何の因果が私達の敵をしたのですか？」

「本題ね。今宵あの瞬間、私達の敵は明らかになった。天、またはそれが生む運命こそが敵だったの」

桂花を除き、皆一様にぼかんと呆けた表情になる。

一気に弛緩した空気に苦笑を零しながら、華琳は続ける。

「皆一様に呆けているわね、まあそれもまた仕方のない事。

しかしこの天が齎す運命という物は案外身近に存在していて、皆も知っている筈なのよ」

気になる言い方で再び皆の注意と関心を引く。

「二つ例を紹介するとね、袁紹という女がこの説明に完全に一致する。あいつの存在がなければ私もそう易易とは受け入れられなかったでしょうね。

私と袁紹は一時期同じ学び舎で過ごしていた。あらゆる能力で私は彼女を上回って

いた、けれど私の目と知識と才覚を持ってしても解明できず、敵わなかった唯一の力を彼女は持っていた。

あの政争の怪物である袁隗が、他の能力が足りずともその能力だけで彼女を次期当主に据えようとした程の能力。

豪運という名の天与の才よ。

遊技盤などで彼女が負けそうになると、誰かが呼びに来たり、何かが飛んできたり、果ては軽度の風巻きや地震という自然現象すら起きた。何度も何度も、それはそれは不自然なほどに」

「袁家の強運、そしてその中でも袁紹はその能力が飛び抜けていたとは聞き及んだ事がございますし、桂花からも詳しく聞かされました。

つまり華琳さまは、その運が我らの敵をしたと仰られるので？」

「そうよ。しかもそれはただの運じゃあない。運の極致、天運という物が彼には味方をしていた」

「彼……天の御遣い、ですか？」

「そう。そして貴方達も運というものに歪みを感じる事が数多くあったのではないかしら？」

軍師は少しでも運が絡む作戦を立案すれば尽く悪い結果を引き寄せ、運を排除して徹

底的に理詰めをした作戦であったとしても、綻びが生まれる。

将は敵将が目の前で畏にかかり、無防備になっていゝ所でその首に剣を走らせたとしても、首を挙げられない。

敵の悪足掻きがたまたま通つたり、敵の誰かがその時だけの確すぎる助け舟を出したり、普段なら有り得ぬ味方の不備不幸が重なつたり、全ての積み重ねを押し潰す理不尽な自然現象などで幾度も決定的な好機を逃しはしなかつた？

私はここ最近ずっとそんな戦場ばかりだったわよ？」

「……」

華琳の発言を聞いて、皆が顔を見合わせ、一瞬の間を置いて青褪める。

自分に心当たりが有り過ぎて周囲の顔を見れば、皆が同じ表情をして見つめ返してくるのだ。

戦場ではありとあらゆる要素が複雑に絡み合う。その中でも運の占める比重は大きく、運が良かった悪かったと受け入れざるを得ない事態は多い。

戦場の識者である皆はそれを十二分に理解している。だからこそ最近の戦で運が異常なまでに悪過ぎたとしても、そういう物だと自分の中で折り合いをつけて消化してしまっていた。

だから気付かなかつた、その運の悪さをここにいる全員が感じていた事に。

ここまで来れば運という偶然に、何らかの作為を感じざるを得ない。「ふむ、やはり皆思い当たる節はあるようね。

偶然もこれ程に積み上がれば必然。

その共通の認識を持った所で、何故負ける可能性のある戦いに挑んだのか、だったわね。

ここで勝つて天運を捻じ伏せなければ、その後どういふ動きを見せるか分からなかったからよ。

勝ちを確定させずに戦争を引き伸ばした結果、彼を勝たせようとする天運は何をするかしら？

自然災害、蝗害、疫病、異民族の思いつきのような侵略、小さな不満の奇妙な時期での爆発、身内の不幸、何の悲劇が起こるのかしらね？ 私は自然災害と蝗害の可能性が高いと思うわ。他は他勢力よりも余程気を配ってきたし、どうにも対処できないのはその二つだけだもの」

運に見放された、言ってみればそれだけの事。だがそれを体験した者からすれば恐怖以外の何物でもない。

「……それが私の見逃していた違和感、他の者なら有り得ないと切つて捨てる運という概念が正体だったのですね。ああつ、白様に示唆してもらつていた私こそが見つけなけ

ればいけなかった。軍師や役人以外の他人とも交流して話をしていれば、あるいは気付けたかもしれないのにつ、私は！」

「そう、桂花は私達の敵について聞いていたのね。けれど桂花の後悔は不要よ。彼が示唆できたって事は天が話すのを許したという事。天が許すという事は、それは障害足り得ないという証左だもの。むしろ違和感だけでも持てた事に私は敬意を表したいわ。桂花、さすがは我が子房ね」

華琳はそう小さく呟き、ぽんぽんと項垂れた桂花の頭を撫で、後悔の念を優しく包み込むように慰める。

「ううう、華琳さま」

しばしその光景を眺め、心の保養を行う。

そしてある程度の事を既に察しており、他の皆よりも受け入れが早く済んだ秋蘭が立ち上がった。

「しかし華琳さま、天運という真なる敵を皆で認識できた今こそまさに好機なのではありませんか？」

「つ、そうです！ 敵が分かれば後は叩き切るのみつ、天だろが地だろが私の剣で一刀両断にしてみせましょう！」

その言葉に春蘭が追従し、ぶんぶんと愛用の大剣を振り回す。

「……こうまで話しても上を目指す貴方達姉妹の気骨と忠誠心は何物にも代え難き宝だけど、もう遅いのよ。今まで話せなかつた天という存在について語れたという事は、勝敗は決し、私は舞台に立つ資格すらを失つたという事だもの。」

それにね、私はもうこの国の頂上、頂点という物にあまり惹かれなくなつてしまつて
いるの。

本拠地で七日間籠城し、それでも私が戻らなければ降伏しなさいと信頼できる将兵には言い含めてあるし、街がどうしようもなく荒廃するという事も無いでしょう」

「えっ?」

いつもの華琳からは出てくるはずのない言葉の群に、皆が再び息を呑んだ。

75. 惜別

漢統一を諦めると華琳は宣言した。

急速に沈み始める皆の表情とは裏腹に、華琳は笑顔で軽やかに続ける。

「だってこの国で一番の都市って許昌でしょう？ 学問、医療、技術、法制度、教育、商業、流通、あらゆる分野で最も進んでいて、更には人口、活気、出生率、流入率だって洛陽や長安をとくに追い抜いているのよ？ それってもう国の頂点を取ったって言っても良いじゃない。」

負けてそれを譲り渡す形になったのは癪だけど、街を見て、資料を読んで、彼女達も私達の成し遂げた偉業に大いに懐いてくれる事でしょう」

「でしようけど、それで、本当に」

「終わりなんですか？ ここで諦めちゃうんですか？」

流琉と季衣が泣きそうな顔で聞く。

皆も同じような、捨てられた子犬のような表情。

失意、失望、絶望、後悔。そんな皆の表情を見回し、しかし華琳は傲岸不遜に言つてのけた。

「それは違うわ。さつき私はこう言った筈よ、この国の、と」
「えっ、それじゃあ」

華琳は大きく頷き、その身に宿る覇気を解放した。

ただそこにあるだけで周囲を圧する程の気力。気を抜いてしまうと膝を折り、頭を垂れてしまいそうになる感覚。

脳髓を、心臓を、呼吸器を驚掴みにされるようなそれはしかし、恐怖を生むだけの物ではない。

全てを預けてしまいそうになる圧倒的な安心感と信頼感がそこには存在している。

それは真なる覇気。全てを引き連れ、全てを守り、全てを切り裂く王者の気配。

全てを得て、その殆どを失って成長した彼女だからこそ放てるその気配を持って、彼女は告げる。

「私、曹孟徳、真名を華琳が語らせてもらおう。

まずは敗北を認める所から。

私は負けた、貴方達というこの国で最も優秀な者達に支えられていながら負けて墮ちた。我ながら情けなくもあり、しかし天とぎりぎりまでせめぎ合ったという自負を誇りにも思っている。

ついで謝罪を。

私を信じて付いてきてくれた貴方達の信を裏切つてしまい、心の底から申し訳なく思う。頂点という高みこそ見せたが、そこに君臨し続け、見下ろす大陸の全てを手中に収める事が出来なかつた事はこの国における唯一の心残りである。

次いで約束を。

負けてこの国の未来を別の者に渡してしまつたが、けれども私は懲りずに別の場所でも高みを目指そうと思つている。もし付いてきてくれる者が居るのなら、次こそ高みに至つて全てを得てみせよう。

しかし無理強いはいはしない。この国の将来を見据えるならば、貴方達は残つて未来を作るべきだ。覇者となつた彼らは高みというものに慣れおらず、道を誤るかもしれない。

だが貴方達の誰かが傍にいて導き示せば、道を違ふ可能性もなくなるだろう。彼らも貴方達を邪険にはしない、少なくとも諸葛孔明を筆頭とした軍師や内政に関わる役人は無碍にはできないと理解している筈だ。

最後に願う。

これで私が語れる物はもう何も無い。最後に皆の意見を受け入れるだけ。

失望したなら唾を吐き捨て罵倒して欲しい、殴つてくれたつて構わない。私は何もせずただ受け入れる、周りにも手は出させない。

だからその心根を素直に見せて、聞かせて欲しい」

そう亡国の王は彼女達に問いかけた。

華琳の呼びかけに真つ先に応えて立ち上がったのは春蘭と秋蘭の姉妹だった。

「最早我ら姉妹がここに来てどうのこうのと言葉を重ねるのは無料」

「姉者の言う通り、ここで改めて言葉にする方が野暮という物でしょう」

言葉こそ少ないが、しかし目だけで色々な会話をしているみたいで、五秒ほどしたら三人でくすりと笑いあっていた。水魚、断金、刎頸の交わりと言える確かな絆がそこにはあった。

その間に挟まれ、頭を撫でられ続けていた桂花は堪らずと言った様子で立ち上がる。

「私は貴方の子房ですよ、付いていくに決まっていますではありませんか。心根を正直に？ 愛しています以外に何があるうと言うのか！」

高らかに、当然のように声を張り上げて心情を吐露する。

季衣と流琉が立ち上がる。

「何か華琳さまの空気、軽くなったというか、丸くなったというか、澄んだというか、えつと、ボク馬鹿だから上手な例えが出てこないんですけど、白様みたいにほつとするような空気を感じます。」

あつ、ボクは絶対ついて行きますよ！

」

「平和の世になればもう盜賊が蔓延る事もなく、私達の出番はもうないでしょう。ならば季衣と私の望みを果たしてくれた華琳さまに恩を返さないとです。それに別の地方に行くのなら、その料理も研究したいですし！」

朗らかな声には絶対の信頼と役に立ちたいという強い気持ちが込められていた。稟と風が立ち上がる。

「こちらに残つても治世という名の現状維持に尽力しなくてはいけないのですよね、それは発展を推し進めていた身からすれば些か退屈そうにも見えてしまいます。また別の知見を得られるのでしょうか、性に合わないでしょう。……それに心根を素直にというなら私も桂花のように愛の告白をぐによぐによ」

「日輪がまた登ろうとしているのです、ならばそれを支えるのが昱の名を頂く私の役目なのです。ご安心ください、今度は決して落日などさせないのです」

稟は理屈っぽく、風は直情的に親愛と決意を込める。

霞が立ち上がる。

「ウチは太平の世つてのはイマイチ合わんらしいし、元より旅する気満々やったし、この面子が揃つとって面白い筈があらへんし、ならもうついて行くしかあらへんわな」
「しゃあないなーと言いなながら、その瞳は猫のようにららんと輝いている。」

風と真桜と沙和が立ち上がる。

「私達を見出して頂いたご恩を返せたとは一欠片も思えておりませんから、まずはそのご恩を返したく思います」

「固い、風の言葉は固すぎるて。もー顔がわくわくしてるのバレバレやから。ウチは勿論ついて行きますよ。新しい土地で新しい技術を身に着けて、将軍人形を更なる高みへ……あ、最後のは聞かんかった事にしてください」

「二人が行くならアタシも行くかな、後は華琳さまに付いていけば間違いないしつ。みーんなに付いて行って楽しく姦しく、これからもその生き方は変わらないの！」

噛み合った空気から、三人の意志もまた同様なのだと感じさせる。

さて、

「皆の心、見させてもらった」

いやいや、俺の番じゃないのか?!

「俺の思いは聞いてもらえないのか?」

「だって聞く必要はないわよね。白には約束を守ってもらわないと」

「ん、華琳を一人にしないという約束か?」

「違うわ。今までの言葉を聞いて、私は孤高で孤独である、なんて言える訳ないじゃない。

それよりも前、貴方と出会ってすぐに交わした言葉よ。

私とともに運命に負けて欲しい、と貴方から言ってきた約束」

「ああ、記憶にはあるが、それは今まさに果たされて」

「さつき私は言ったわ。先の戦いは私一人が負けたと。だからまだ貴方との約束は果たされてない。

私と貴方が隣に並んで戦いに負けるまで、貴方は私の傍にいななければいけない訳」

そう彼女はドヤ顔で手を伸ばしてきた。

「言っておくけど、今の私が、私達が何かに敗北するなんてあり得ないわ。

……だからまあ有り体に簡潔に分かりやすく言おうと。

ずつと一緒になさい、白」

頬を微かに染め、少し視線を泳がせ、こちらに手が伸ばされる。

伸ばされた手、俺はその手をすぐさま取る事が出来なかつた。

頬を涙が伝うのを止められない。もはや何の感情から流しているのかわからず、ただ心が生み出す巨大な想いに翻弄される。

皆がぎよつとしてゐる。

俺と華琳がここまで感情を露わにする事が珍しいから、皆が皆あたふたとしている。

俺は唇を噛み締め、漏れそうになる嗚咽を殺して声を絞り出す。

「その言葉がどれだけ嬉しいか、表現する言葉がない程に心が震えている。気の利いた

台詞一つ出てこないが、人前で晒す四百年ぶりの涙に免じて勘弁してくれると助かる」ああ何故俺は、この手を取れないのだ。

ループは確定している。以前のように視界が切り替わり、俺は新たに課された役割を果たさなければいけないのだろう。

ずっと傍にいてやれない俺にこの手を取る資格はないのだ。

けれど手を取れずとも、その小さな体躯を抱きしめ、感情の全てを伝え、謝りたい。

その為に一步踏み出そうとして、けれど俺はもう動けなかった。

気付けば足の感覚が無くなっていた。

「良いから早く手を取りなさい。そして貴方の本心を伝えるの、全く、女心の分かっている奴……白？」

切り開かれた森の中、夜闇を照らすのは月明かりのみ。

だから彼女はそれに気付くのが遅れた。

「華琳、君が運命に抗い、後一步の所まで天の御遣い達を追い詰める様には心が踊った。君が俺の教えをどンドン吸収し、街を大都市に変えていくのは教師生活の集大成を見られているようで楽しかった。

君との会話はなによりも価値があり、昔の記憶を慰めてくれたのは君だけだった。

君といった時間のその全てが尊く、輝いていた」

もはや足は向こうの光景が透けて見えるほどで、感覚もない。透明化はゆつくりと確実に進み、今は指の先が透け始めている。

ああ、天も空気を読んでくれたのか。以前は視界が暗転するだけだったというのに、まさかこんな猶予をくれるとは。

「やめてよ、なんで」

「大陸の趨勢は決まった。千変万化の戦国絵巻は終りを迎え、観測者たる俺の役割もまた終りを迎えた。

元より俺自身に期限があつたという事だが……とはいえ今この瞬間とはな」

俺の手を迎える為に差し出された華琳の手が、俺の手を掴まえる為に更に伸ばされる。

「ただど彼女は何も掴めなかつた。

もう手の感覚も消えている。

「身体が、透けてっ」

「あーくそ、勿体振らずにすぐさま抱きつけば良かったかな。

華琳、俺の愛した人、君が君のまままで幸せになるのを願う。

「皆も末永く息災でな。あとはこの可憐で気高き王様を俺の分も支えてくれ。この子はすぐ無理をする上、それを誤魔化するのが上手いから、よくよく見てやってくれよ」

「何一方的に言ってるのつ、私はまだ貴方に何も返せてない！ 私達はこれからじゃないのつ!? 白っ！」

「すまない、約束を守れずに去る。それじゃあ、さようならだ」

皆が俺の名を呼ぶ声が聞こえる。

悲痛に響くその呼び声に、ああ、俺は愛されていたのだと、嬉しくなってしまう。

すぐにやって来るだろう視界の変化を嫌い、俺は目を閉じる。

相変わらずまぶたの端からは延々と、だくだくと涙が流れている。

ああ、涙とはこんなにも温かく、色々な物を流しだしてくれるのだと、何百年ぶりに再認識した。

勝手な自己満足に浸っていると、唇に何かがぶつかる感覚。

思わず目を開けると、そこには視界いっぱい広がる泣き顔の愛しい人。

「馬鹿つ、嘘つきつ、薄情者！ 好き、愛してる、浮気は絶対に許さないからっ！ だから天に帰っても私だけを見守り続けてなさいっ！」

もう残った時間が無い事を悟り、短い言葉に全てを込めて感情をぶつけてくる。

子供が癩癩を起こしたような愛らしい姿を、自分にだけしか見せてくれないだろう特別な姿を目に焼き付ける。

もう何も話せない、だから彼女に向けて俺は精一杯の笑顔を作る。

もう何も聞こえない、だけど彼女はずっと言葉を叩きつけているだろうから、頷き続ける。

もう何も見えない、けれど彼女は可愛い醜態を見せ続けているだろうから、目は開き続ける。

幾ばくかの時が過ぎ、消え去った感覚が歪みを感じ取る。

そして新たなループが始まるのだった。

76. 第一村人発見

消失していた感覚が蘇る。

耳は木々のざわめきを、目はまぶた越しに光を、鼻は甘い桃の匂いを、肌は優しく吹く風を、口は目から溢れる涙の味を感じ取る。

目を閉じたまま感情の整理……などすぐさま出来るとは思えないので思考を放棄する。今は胸中と眈にだけ温かいものを満たし、頭は空っぽにして考えない。多分それこそが最善。

そう結論づけてゆつくりと目を開くと、そこは見渡す限りに桃色の花が咲き誇る桃園の中だった。

濃い桃の香りから桃樹が近くにあると予想は付いていたが、まさかこれほど立派なものだとは思わなかった。

「木々の間隔も完璧、数の厳選もしてる、実も袋掛してある、剪定もきっちりしてあるのか。これは相当良い桃園だな」

ぱっと見ただけでも手入れが行き届いているのが分かる。

「これだけの数を丁寧に入手入れているとなると、村全体で管理しているだろうな。とい

う事は近くに人がいるはず……と、早速引つかかった」

周囲の様子が何となく分かった所で、一人こちらに近付いて来る気配があった。

ふらふらと彷徨うようにして近寄ってきているので、俺の気配に気付いてやってきたという訳ではなさそうだが……。周囲を見回した所でここには桃の木しかないし、捜し物でもなさそうだが……。

人や獣の気配は他にないので危険は少なそうだが、ふらふらしてて危なつかしいのですぐさま気配の元に向かう。

気配を消して近付き、目標の様子を木陰から伺う。

するとそこには愛くるしい容姿の幼女が下を向きながら何かを探すように歩を進めている姿があった。

その様子は真剣というよりも必死な様子で、幼い子供がするには重々しい雰囲気を感じさせた。

しばらく幼女を観察していたのだが、余裕が無く、集中しすぎているのだろう、見始めた時よりも木を避けるタイミングが段々ぎりぎりになっている。

幼女の服装や独り言の抑揚から大体ここがどこらへんか、どの程度の生活水準の村なのか目処は立ったので、そろそろ桃の木の回避が出来なさそうな幼女に声をかける。

「お嬢ちゃん、木にぶつかっちゃうよ？」

幼女は俺の声に反応して立ち止まって顔を上げ、間近に迫った木を見て驚いた。

「えっ、あつ、あぶなかつた！ おねーさんありがとう！」

幼女はこちらへ向き直り、元気にお礼をしてくれる。

……おねーさん呼びはすぐに訂正したいけど、同性だと安心するだろうから少し騙しておこう。

「どういたしまして。ねえお嬢ちゃん、一つ聞きたいんだけど、ここって何処かな？
ちよつと迷子になって困ってるんだ」

「そうなんだ、えつと、たしかたくけん？ のはしつこだった気がする」

琢県、少女の方言から大体の場所は分かっていたが、また良く分からない場所に飛ばされたなあ。

今が何年なのかも知っておきたいが、それを直接聞くのはまずいので後々探ろう。

「そっか、ありがとう。それでお嬢ちゃんは何でこんな所にいるの？」

「あのね、おかーさんのたいちよーがよくないの、だから元気になるかんぼー？ をさがしてたの！」

「おー偉いなー、だったら任せて、私お医者さんだから。ここが何処か教えてくれたお礼に診てあげる」

「ほんと?!」

「ほんとほんと、だから村まで連れて行ってもらえる？」

「えつと、んー、おねーさん、ちよつとあたしと目をあわせて」

ん？ と首を傾げながら、幼女に言われた通り目を合わせる。

幼女の瞳はとても深かった。何がと言われるとはつきりとは分からないが、こちらの全てを覗き込まれているような感覚があった。

「なんか心があつたかくてうれしくてかなしくなるの、こんなの初めて……」

「どうかした？ どつか痛い？」

「ううん、大丈夫！ よくわからなかったけど、おねーさんがすつごくきれいなのは分かったの！ だいじょうぶだからつれて行くの！」

何か分からないが合格したらしい。

幼女は俺の手を引いてこつちこつちと言つてはしゃいでいる。どうやらこのまま村に連れて行つてくれるらしい。

とかうかいつまでも幼女呼びびじゃ都合が悪い。

「私の名前は謙信つて言うんだけど、お嬢ちゃんの名前を教えてください？」

「あたし？ あたしはりゆうびだよ！ よろしくね！」

ああそうか、つまりはそういう事か。

何故この場所に飛ばされたのか、その名で全てがわかつた。

「よろしくね、劉備ちゃん」

「うん！」

とても元気に返事を返してくれた劉備ちゃん。

どうやらそこそこの信頼を勝ち得たらしい俺は、劉備ちゃんに手を引かれて村まで案内されるのだった。

案内された先、そこには何処にでもありそうな、しかしかなり裕福そうな村があつた。家の作りはどれもしつかりしているし、ちらほら見える村人に痩せ細った人がいない事から、桃の事業で相当儲けているのが分かる。

「劉備ちゃん、その人は誰だい？」

水桶を持っていた恰幅の良いおばさまが問いかけてきた。

劉備ちゃんに見せる表情は柔らかいが、誰かと聞いた時にこちらに向いた視線は鋭かった。

うーん、もし劉備に手を引かれていなければもつと荒々しい対応をされていたかもしれない。

「おねーさんはおいしやさんなんだって！ おかーさんを見てもらうのっ！」

「こんな所にお医者様がねえ。劉備ちゃん、他に誰か居なかつたかい？」

「んーん、よく見たけどいなかったよ」

「そうかいそうかい、劉備ちゃん目は良いからね。ねえあんた、こんな何も無い所に何
用で来たんだい？」

かなり不躰な視線と言葉にこの村の現状を知る。

このご時世に旅医者はとても貴重だ、医者や薬師と名乗るだけでもかなり対応が柔ら
かくなる。

それが無いという事は常駐の医者か薬師、または近隣にいる医者にすぐさま診てもら
えるという余裕があるのだろう。

そして医者や名乗る者をすぐさま疑うという事は、この村は外界と交流が相当に乏し
いと推測できる。

ちなみに医者や名乗る者が高待遇を受けたにも関わらずその分の治療などを行わない
と、期待させた分それ以上のしつぺ返しを執拗に食らう。なので医者や詐称はかなり
命懸けである。

「私は漢中出身の医者でありまして、謙信といいます」

「医術と薬師の国家認定上級試験合格の証である医術上級免許を懐から取り出して見
せる。」

「ああ、確かに隣村のお医者様が持つてるのと同じ……じゃないね。もつと上等な……」

えつ、こりや上級つて書いてないかい?!

二枚とも正式に発行された物で、しかも特に偽造が難しいとされている医術免許を見せた事でおばさまの目が明らかに柔らかくなる。

特級の免許も持っているが、俺の外見年齢からしてそつちを見せる方が疑われるので、旅途中はあえて上級免許を見せる事の方が多い。

そして上級という字が読めたという事は、この村の識字率も悪くはないようだ。

「これはこれは、上級のお医者様なんて初めて見ましたよー!」

「現在特級資格合格の為に国中を回つて修行をしております。特級資格試験には治療の実績を積む事は勿論、各地の風土病についての見識も必要なのであちこちを彷徨うように旅しているのです」

「それでこんな桃以外何もない村まで辿り着かれたんですねえ。

免許も持つてて、劉備ちゃんが信じるなら大丈夫ですかね。

村長は今出てるから、戻ってきたらちゃんと話を通しておきますので、劉備ちゃんのお母さんを診てやってくださいな」

周囲で徐々に包囲網を狭めて話を聞いていた人達の表情から幾分かの險が取れる。

俺は頼みますと一言添えて劉備ちゃんの家へ向かうのだった。

「阿備、誰だいそいつは？」

俺を出迎えたのは青い顔をして横たわりながらも覇気を滲ませて威嚇してくる妙齡の女性だった。

寡れているが、それでも分かる美貌の持ち主だった。

「おいしやさまだよ！ おかーさんを助けてくれるつて！」

「医者？ こんな辺鄙な所に何用だい？」

先ほどのおばさまよりも鋭い視線。ふむ、これは嘘を言つても見抜かれそうだ。

「私の名は謙信、医者をしています。」

特級試験の為に流浪の身でして、ここにはたまたま、迷い込むようにやって来ました。

桃の香りに誘われて彷徨っている所に劉備ちゃんと出会い、貴方を診て欲しいと頼まれてここに来ました」

「……嘘は言つてないみたいだね。しかし私の家に差し出せる物は何もないぞ」

「いえ、お金などは特に要りません」

その言葉に女性の眉が上がる。怪しく感じたか？

俺は懐から免許を出して見せる。

「先程も言いましたが特級資格合格の為に修行中ですから、病気を診る、治す事自体が目的です」

「ふん、資格の為とはいえ今時金を要求しない奴なんて有り得ない……いや、もしかしてアンタ五斗米道の者かい？」

「五斗米道の者ではありませんが、共に医聖の教えと志を汲む同士ではありません」

「ははっ、なんたる僥倖だい。」

「どうやら身体だけじゃなく、気脈関係にも異常があるらしくてね、並の医者じゃあ太刀打ちできなかつた。」

色々と回つて金も尽きちまつて、後は死を待つばかりだったつてのに、そこに必要以上を求めず、そして気術に長けた医者である五斗米道の同士たるお医者様が訪れるとは「
や」

彼女は無理矢理身体を起こし、叩頭した。

「是非に治療を願います。差し出せる物は限られています、恩義には必ず応えます故」
「承りました。しかし治せなかつた場合は平にご容赦を」

「お医者様としての腕前は分かりかねますが、研ぎ澄まされた気と体術を持つておられる貴方が並の医者ではないとは分かります。」

もし失敗して私が死んだとしても恨まぬようにと劉備に言い含めますので、何卒お願い致します」

「任せられました。まずは診察からですが、気脈の損傷が特に酷いと思われるので、自然

体で私と向き合ってください」

「自然体とは？」

「楽な態勢、楽な姿勢、楽な心の在りよう、楽な口調、とにかく楽をしてください。でなければ気の同調は難しいのです」

「ああ、分かったよ。私の名前は劉弘、この命、謙信殿に預ける」

「しかと承ました」

そうして診察を開始して愕然とする。

彼女の病状が気脈の欠損だと氣を操る者として察していた。だがここまで酷いとは思わなかった。

彼女の言っていた通り、並の医者には太刀打ち出来る症状ではなかったのだ。

体中に細かく、そして子宮を中心にして甚大な気脈の欠損が生じていた。

病氣の原因は劉備ちゃんを産んだからだろうと予想がつく。

劉備ちゃんが持つ巨大な氣の器に母体が持つ氣の多くが吸い込まれて衰弱し、その上産む段階で劉備ちゃんに氣を引つ張られて氣脈が引き千切られるように傷ついてしまったのだ。

普通の女性なら産後半年もせず衰弱死しているが、この女性はかなりの際物だったから死にまでは至らなかった。

とはいえ恐ろしい勢いで衰弱していったのは想像に難くない。

正直数年間もたせた事に感嘆せざるを得ない。

俺は慌てて方針を変える。

衰弱している様子ではあったが、しかし出会い頭に鋭く威嚇してきた彼女には多少の余裕があると思っていた。

でもこれは幾ばくの猶予もない。半月は絶対に越せないだろう。

今なお命はこぼれ落ちているから、今すぐに大手術をしなければ可能性は低くなるのみだ。

俺はそれを劉弘さんに伝え、今から手術を行う事に了承を貰う。

「注意してもらいたい事があります。今回の治療は長時間の辛い施術になるでしょう、先程言った楽な在り方をしてもらいながら我慢を強めます。また寝られてしまうと淀んだ気が予想外の反応をする可能性があるのです、決して眠らないでください。相当難しい対応ですが、出来ますか？」

「ふむ、子を産む痛みに耐えた女ならやってやれない事はないね」

「心強いお言葉です。では準備に入ります」

そして劉備ちゃんに向き合い、頼み事をする。

「劉備ちゃん、これからお母さんと先生は長い時間手術をしなくちゃいけないんだ。そ

「ここでちょっとお願いがあるんだけど良い？」

「うん、何？ あたしなんでもするよ！」

劉備ちゃんは正座して、その手を強く握って応えてくれる。

その様子に心強さを感じる。

「私はこれから治療に入るんだけど、多分一切動けなくなる。

お母さんの病気はすごく重いから、私もすごく慎重に手術しないとイケないんだ。

失敗したら手術する方もされる方も只じゃ済まなくなるからずっと集中しなくちゃいけない。

だから絶対に邪魔しないで、それに邪魔をさせないで」

「えっと、良く分からないけど、おかーさんとおねーさんを守ればいいの？」

「うん、頼める？」

「うん、ぜったいのぜったいのぜったいに誰にもじやませないよっ！」

「有難う」

多分、俺が来なければ彼女は死んでいた。彼女を治せる腕前を持つ者はこの大陸に数人しかいないからだ。

こんな状態にまでなってしまうと彼女は動かさせないし、彼女を治せる腕前を持つている者は旅などしない。

何か奇特な理由でたまたま大陸に数人しか居ない腕前をもった医者がここ数日中
やって来る、という奇跡が起きない限り彼女は死んでいた訳である。

準備を終えて本格的な治療に入る前に、こつそりと様子を伺っていた表の人達に彼女
の様態と施術の方法を説明し、また長時間の治療に入るので心配をしないよう、邪魔を
しないようにと頼んでおく。

「では治療を開始します。お母さん、劉備ちゃん、頑張りましょう」

「おうともやい」

「うんー」

二人の強い返答に気合が入る。そうして俺は治療を始めるのだった。

気を極限まで細くしてゆつくりと気脈に通し、彼女と俺の気を同化させる。

欠損が一部だけならばその箇所だけ治療すれば良いが、彼女の場合は全身に傷があ
る。

しかも彼女はかなり衰弱しているので、普段なら気にする必要のない気の反発による
些細な気力の消費が命取りになる。

なので治療に俺の気を使う為、また気の反発を招かぬために彼女と俺の気を中から
ゆつくりと、完璧に同調させていかなければいけない。

恐ろしく繊細で遅速な作業に集中力がどんどん削られる。

だが数百年で養った技術と集中力は数時間程度の手術でブレたりはしない。

俺の長きに渡る医者生活においてトップクラスに難しい治療だったが、五時間に渡る
大手術の末に無事治療を終える事が出来たのだった。

77. 長期滞在の始まり

劉弘さんは手術が終わると同時に眠りについた。復調した身体と気脈を無駄なく整理する為に脳が眠りを欲したのである。

隣で手術を見ていた劉備ちゃんが手を叩きながら大きな歓声を上げた。

「すごくきれいだったの！ とーめいな気がゆつくりと進んで、終わりはパーツとなっておかーさんの身体がきれいになったの！」

「すごいな、劉備ちゃんはその年で気を見られるのか。けど流石に五時間も暇じゃなかった？」

「んーん、すつごくおべんきようになったよ。あたしにもあれ、出来るかな？」

「練習すればきつと出来るよ。それじゃあ劉備ちゃん、村の人を呼んできてもらえるかな？ 私はちよつとすぐには動けないや」

手術を始めて二時間後くらいに村長や村人が来たのだが、俺は施術に精一杯で対応できなかつた。

しかも問題が二つ程あり、今回の施術がただひたすらに手を当てているのみという普通の医者ではあり得ない方法だった事、また俺と劉弘さんが微動だにしていけないのに滝

のような汗を流している事が皆の不安を煽ってしまった。

途中で村人達が俺と劉弘さんを心配して休ませようと動き出したが、劉備ちゃんがしつかりと止めてくれた。

村人達も劉備ちゃんの只ならぬ様子に一旦様子を見るとして引き下がってくれた。

もし強引に引き離されたのなら、その時点で劉弘さんは死亡、俺は殺人の罪に問われていただろう。

泣きながら大人達を止めてくれた劉備ちゃんの奮闘で俺も母親も救われた。本当に有難う。

しばらくは見張りが立っていた筈だが、いつの間にかいなくなっていた。

五時間も動きがないし、夕飯の準備などがあるからそつちを優先したんだろう。

「うん！ わかったのっ」

そう言って劉備ちゃんは走って外に出て行った。

治療前は日が昇り切ってもいなくなかったのに、今ではすっかり夕暮れ。

「あーなんか作るか、でも動きたくねえ……とも言つてられないか。劉備ちゃんの為に米を炊く準備だけでもしておこう」

だるい身体を叱咤し、道具箱から米と火打ち石を取り出して台所に向かう。

米を洗い、釜に米と水を入れて蓋をする。そして傍にあった薪や小枝を空気が通るよ

うに組み上げ、火を点ける。

ぼーっと火を見てみると、人の気配が近付いて来た。

俺は居間に戻り、座って彼らを待つ。

「失礼するぞい」

「おねーさん、そんちよーさんつれて来たの！」

そう言つて劉備ちゃんと白髪の老人が居間に入つてきた。

劉備ちゃんは俺の隣に座り、村長さんは対面に座つた。

「劉備ちゃん、ありがとね。」

村長殿、今回は唐突の来訪申し訳ありません」

「謝るような事じゃあなかる。儂としてはこの閉ざされた村に人が来訪することは歓迎するべき事じゃと思つておるでな。」

しかも来訪者が医者とあつては村をあげての歓迎をするべきじやろうて。今日は色々あつて出来なかつたが、劉弘の調子が戻ればそれと合わせて宴を開こう。

して、劉弘の調子はどうじゃ？」

「治療は成功しました。現在は体力、体調を戻すために寝ていますが、明日の朝には目覚めるでしょう」

「近隣で最も大きな都市の名医に密かに診てもらい、しかしお手上げと言われた難病が

一日で治ると言うか。

すまぬが、確かめても構わんか？」

「ええ、どうぞ」

そう言つて村長さんは劉弘さんの元に向かい、顔色を見る。

「血色が大分良くなつておる。これは本当に本当じゃつたか？」

小さく呟いた声が入る。

まあ俺の見た目は十代後半から二十代前半で止まっているし、普通は侮るよね。

村長さんが戻ってくるが、座る前に声をかける。

「村長殿、よろしければ貴方の事も診ましようか？ 実際に腕を確かめるにはそれが一

番でしょう？」

村長さんは難しい顔をしたまま逡巡し、しばらくして頷いた。

「もし腕前の確認が取れたのなら、劉弘の治療費は儂が出そう。

とはいえ出荷時期を大分過ぎとるから、貯蓄に余裕がある訳でもなくての、幾らかの

特産品を渡すという形にしてもらえんか？ 皇室専属で卸しとるものの一部じゃ、価値

はかなりのものじゃよ」

「お金で渡されるよりもそちらの方が有り難いので、特産品で構いませんよ」

「助かるわい。建前上は皇帝陛下以外口にできん事になつとるから、一応内密に頼むぞ

い」

「分かりました、誰にも漏らしません。

では治療を始めましょう。多少痛みがあるかもしれませんが、決して悪くはしませんので」

そして村長さんはずいっと近付き、診察開始。

体内には特に異常なさそうなので、曲がった背骨と腰を治療しよう。

村長さんに寝転がってもらい、施術開始。

患部に気を流し、周辺を揉みながら圧しながら肉と血管と神経を解し、ゆっくりと骨を矯正していく。

三十分ほどで悪い部分の大体をやったので、最後に大物たる骨盤を正位置に戻すためパンと強めに叩く。

「終了です」

「おおお、気持ちよかったが、最後のは響いたわい」

そう言つて腰をさすりながら起き上がる村長さん。

四十五度傾いで固定化されていた背が地面と垂直になっている。

「おお、起き上がつても腰が痛くならんわい。それに何時もより目線が高いような？」

「目線が高くなったのは気のせいではありません。」

骨の矯正と神経系の調整を行いましたから、無理をしなければ以前のよう動けますよ。

とはいえ一日二日で完治するものでもありませんので、何日か続けてゆっくり治していきましょう」

それを聞いた村長さんは確認するように小さく動き、次第に大きく腰を回したりする。

しばらく身体を伸ばしたりと実験し、徐々に疑いを晴らしていつて本当に治ったという実感を得た瞬間、彼は小さく震え、泣き出した。

「奇跡じゃ」

何をするにも痛みを伴う症状を患って数十年。

しょうが無い、老いれば当然の事と受け入れつつ、しかしずっとストレスに感じてきた苦痛、それが綺麗サツパリ消え去った。

それは同じ年を生きた老人にしか分からぬ感動がある筈だ。

「医師様、有難う御座います。これで後二十年は戦えますじゃ」

いや、さすがにその前に確実に寿命が来ると思います。

とは言わず、良かったですね、と微笑んでおく。

「宜しければ同じような年寄り共にもご慈悲を賜ればと思いますじゃ。対価は払います

故、何卒何卒お頼み申しますじや」

村長さんの対応が変わり過ぎて困る。

村長さんにとってはそれだけの事だったんだらうけど、俺にとっては三十分ほど整体をしただけなのだ。

数十年の苦痛と二十分の施術が気持ち的に釣り合う筈もないのは分かるが、気まずいっただけだ。

「私としては全然構いませんよ。しかし今日は劉弘さんの施術もあつて疲れていますので、日程の調整は後日という事で」

「おお、そうでしたな。それでは我が家には是非とも」

「いえ、劉弘さんの経過も見ておきたいので、こちらに泊まります」

「そうですか、ならばせめてもの礼に馳走を持ってこさせますぞい」

「それは助かります」

村長さんと別れ、劉備ちゃんとお米が炊きあがるのを待つ。

そして炊きあがつたタイミングで村長さんがおかずを色々と持ってきてくれた。

ご飯を食べていると劉備ちゃんに旅の話などをせがまれたので、光武帝の話などを聞かせてあげた。

それにテンションを上げた劉備ちゃんは寝るといふ段階になっても話をせがんでき

たので、灯華様の話をしてあげた。

最期を話してしんみりさせるのも何なので、皇帝になる所を大団円とした。

途中で寝るだろうと思っていたのだが、彼女は皇帝になる所までしつかりと話を聞き終え、電池が切れたかのように寝てしまった。

随分と楽しそうに聞いていたと思っていたが、寝てしばらくしてから悲しげな表情で涙をほろりと零していた。

灯華様の話は有名なので、もしかしたら最期を聞き及び、それを夢に見たのかもしれない。

翌日早朝、俺は朝食と病人食を兼用した雑炊を作っていた。

昨日村長さんが色々と食材を持ってきてくれ、またその中に卵があったので混ぜる。

病人食なのでドロドロになるまで弱火で煮込み続ける。

ご飯の匂いに釣られたのか、二人がほぼ同じタイミングでアクションを起こした。

「うにゅーう、ぐう」

「んんーつと」

劉備ちゃんは一瞬意識が浮上したが寝ぼけ眼で再び微睡みへ。

劉弘さんはすっかり意識が覚醒している様子で、いつもの癖だろう寝起きの身体伸ば

しをしている。

するとそこで身体の異変に気付いたのか、首を傾げる。

「軽い、何だこれ、痛くもないし」

「おはようございます、調子はどうですか？」

「絶好調さ。つてアンタ誰だ？」

あれ、寝惚けてる？

「いや、ちよつと待て、昨日見たような……駄目だ、最近の記憶が朧気になってるな」

「そうですか、それも仕方ありません。貴方はもう少しで死ぬ所まで行ったのですから」
「あー大分前にそんな覚悟を決めたような気がする……ああそうだ、思い出してきた。

死ぬ覚悟を決めて、阿備に色々教えて、そろそろ死ぬと思った所でアンタが来たんだ。

それで治療を……つてアンタ凄いな。意識こそほとんど無かったが、身体はアンタの
絶技を覚えてるようだ。

ともかく、状況は理解した」

彼女は姿勢を正し、叩頭した。

「感謝します。貴方のおかげで私は生きています」

「感謝は受け取ります、ですので叩頭はやめて頂きたい。劉備ちゃんが起きた時に誤解
されますので。」

それとまだまだ身体も気脈も弱ってますので、出来るだけ自然体でいてください
「そうか」

劉弘さんは身体を起こし、娘の方を愛おしげに見て、真摯な瞳をこちらに向けた。

「死ぬ覚悟は出来ていたが、それでもやはり未練だった。貴方のおかげで未練を残す事は無さそうだ。

貴方に最大の感謝を、そして最大限の礼を尽くす事を劉弘、真名を瑠花がここに誓う」
「私、名を謙信が劉弘の真名を受け取らせて頂きます。ですが礼も感謝も程々に願います。

医者が人を救う事は当然であり、救ったから礼を尽されるのが当然と思えば医者として資格を失います」

「恩人の考え、承知した。

だが私の心の中では常に感謝を抱き、恩を返したいと思っている事を知っておいて欲しい」

「はい、何かあれば遠慮なく頼らせて頂きます。

ではそろそろ二度寝を起こしてあげてください、朝食は準備出来ていますので」
「世話になる。

ふう、ここ一年は私より先にこの子が起きていたから、久々だな。

こほん。阿備！ 何時まで寝てんだいっ！」

「あふっ！ ねてましえんよ！」

微睡みに居た劉備ちゃんが言い訳をしながら跳ね起きる。

その様子を見て瑠花さんが微笑みを浮かべている。

そしてそれを見た劉備ちゃんが一瞬、ぼけーつとし、現実と受け入れると同時に満面の笑みを浮かべる。

「ごめんなさいおかーさん！ わたしねちゃつてた！」

「この馬鹿者め、これは久々に怒ってやらないと駄目だね」

多分瑠花さんはとても厳しい人で、普段から良く怒っていたのだろう。しかしここ一年は怒る事すら出来なかったのだろう。

だから劉備ちゃんは嬉しくて仕方ないのだ。大きな声で正しく怒ってくれる大好きな母がちゃんと戻ってきてくれたという実感がそこにはある。

こつりと劉備ちゃんの頭を小突き、そのままわしゃわしゃと強く頭を撫でる。なすがままの劉備ちゃんと撫でる瑠花さんは共に涙と笑顔があふれていた。

ある程度の時間が経ち、台所に引つ込んで頃合いを伺っていた俺はそろそろと準備を始める。

釜に入った雑炊を土鍋に移し、土鍋の蓋の上に茶碗を乗つけて居間に移動する。

今回作った料理は雑炊に卵と滋養のある数種の薬を混ぜたシンプルな物だ。

豪勢な料理を振る舞いたい所だが、朝だし瑠花さんは身体が出来てないしでこれぐらいしか食べさせられない。

「失礼します、ご飯できましたよー」

「おう、すまないね」

「あ、おねーさんおはよーございますー！」

「はい、おはようございます」

元氣いっぱい劉備ちゃんに挨拶を返し、茶碗によそった雑炊を二人の前に出す。

「もつと凝った料理を出したい所なんです、数日はこの手の料理で我慢してください」
「まだ身体が起きてない感じがするから、こればかりはしょうが無いね。」

「けどただの雑炊にしては良い匂いがするじゃないか」

「色々手は加えましたけど、それだけです。あつ、劉備ちゃんも食べられるように苦くしたりはしてないから、一緒に食べようね」

「うん、おかーさんとおねーさんと一緒にが良い！」

「そっかそっか、それじゃあ召し上がれ」

「感謝する」

「いただきまーす！ もぐもぐ……もぐもぐもぐもぐもぐ！」

おねーさんこれすつごく美味しいよ！ おかわりっ」

「はいはい、消化に良いとはいえゆつくり食べてね」

土鍋から茶碗に雑炊を移し、手渡す。

「はい、もぐもぐ」

ぱくぱくと食べる劉備ちゃんと、ゆつくりと胃に慣らすように食べる溜花さんの対比が面白い。

溜花さんが二杯、劉備ちゃんが四杯食べた所で土鍋が空になる。

「ぶはーっ、久々に物を食べたって感触があるよ。今までは何を食べても土を食べてるみたいで空虚だったからね」

「おいしかったよーっ、おかーさんの料理の倍はおいしかった！」

「阿備い？ そんなに私の料理は不味かったのかい？」

「あわわわっ、ちがうよっ、おねーさんの料理がおいしすぎたのっ！」

「……まあ確かにね。こんな簡素な料理で腕前が知れるんだから大層なものだよ。」

それで、謙信さんはこれからどうするんだい？」

「治療者の責任として、溜花さんの術後の経過を最低でも一ヶ月は見させてもらいます。」

ですので一ヶ月はこの村に滞在する事になりますね」

「そうかい、一緒に居てくれた方が恩を返しやすいし、村長には私から頼んでおこう。」

しかし一ヶ月というのは短いね、なんならこの村に骨を埋めてくれても構わないんだよ。」

「それは流石に。ここに居られるのは長くても一年といった所でしよう」

一年、というのは方便だ。劉備がいる時点で俺の役目はこの子の育成となるのだから。」

だが旅の医師と言っていたのに、いきなり十年ぐらい居着きますとは言えない。

「まあ修行の身と言っていたから、それぐらいかね。」

とにかく、この村にいる間はウチを使うと良い」

「えっ、おねーさんもいっしょに住むの?! やったあ! かぞくが増えたよっ」

「いえ、それはちよつと……」

「えっ……いやなの? わたしの事きらい?」

「いやいやいや、決して嫌な訳じゃないよ。」

ただ私は薬師でもあるから、危険な薬の取り扱いなんかがある。誰かと一緒に住むには色々と不都合があるってだけだよ。」

瑠花さん、この村で使われてない家屋等はありませんか?」

「そうなんだ、きらわれてないのは良かったけど、いつしよに住めないのはざんねんなあ」

焦らせてくれたお礼と可愛い事を言ってくれたお礼に頭をぐりぐりしてやる。

あうーと嬉しそうな声を上げる劉備ちゃん。

「使われなくなつた家屋ならあるにはあるよ。五年ぐらい前に桃の世話をしている最中にぼっくり逝つちまつた人の家がそのまま残つてる。」

けど村の主産業である桃園から正反対の位置にあつてね、倉庫としても使えずに放置されていたからかなりガタがきてる」

「ガタが来ている程度なら大丈夫ですよ、こう見えて一から家造りをした経験もありますから」

「ほう、旅の医師様つてのは経験豊富なんだな。」

なら交渉の際に村長が洩るようなら私が仲介して言い添えよう。それで家の補修が済むまではウチに泊まると良い」

「厄介になります」

劉親子との出会い、それが俺の第三のループの幕開けとなるのだった。

78. そして彼女は語るのだった

数十万の人間が対立している。

相手側は四十万人程で、私の後ろには十五万人程だったか。まあこの数には最早意味がない。大勢は決し、私達は負けを半ば認めているから。

だがこの対立には意味があった。

「劉玄德、私の最後にして最強の敵。人中の王よ、ついに追い詰めたわ」
前と後ろの兵士達、ひいては将すらも関係はない。

私はこの世で二番目に話をしたかった人とようやく言葉を交わす事が出来た。

「曹孟徳、王の中の王である貴方にそう呼ばれる事を光榮に思います」

目の前にいるのは完全無敵の霸王様。

小さな体軀、可憐を絵に描いたような美貌、圧倒的な覇気。

人のある種の到達点、完成品とも呼べるような存在がいる。

「ねえ劉備、事ここに至れば最早数のぶつかり合いは無意味でしょう？ ならば王同士の一騎打ちと洒落込まないかしら？」

「貴方ならそう言ってくると思つた。人的資源を無駄にしない為、また気高く尊い優

しき本質から」

「……全く、貴方にはそこだけが敵わない。私は人の上に立ち、人を使う。貴方は人と共に立ち、人を動かす。人誑かしの頂点、本能と理性からなる人心と、物事の本質を見抜いて射止める目と言葉に何度肝を冷やした事か」

「天をも抱いた霸王様に褒められるとは、これまた恐悦至極。

拙い腕なれど、精一杯最後の戦を彩ってみせましょう」

「言っておくけれど、油断や慢心は無いわよ？ 戦働きこそ注目されていないけれど、私は貴方の計算高さも把握している。戦闘での奥の手も一つや二つあるのでしょうかし、その殊勝な態度も仮面なのでしょう？」

「……嬉しいな、私の本質を分かってくれているんだ。うん、奥の手の三つ四つは用意してるから、存分に使わせてね？」

「存分に使いなさい、その上で踏み潰してあげる」

「ふふつ、それじゃあまずは剣で語って、それが終わったら言葉でも語っても良い？」
「ならまずは死なないように頑張る事ね。それから貴方の事を聞かせて頂戴な」

さて、そんな会話の後、それなりに頑張った死闘を経て、どうにかこうにか自分の命だけは死守する事に成功した。

全ての手を尽くしたというのに彼女には敵わなかった訳だが、けれど悔しさよりも清々しさが気持ちの前面にくる。ここまでやって駄目だったんだからしょうがないのだ、と素直に負けを認めて諦められる凄さが彼女にはあった。

「なんかその清々しい顔、むかつくわね」

未だ戦場には二人きり、大の字に寝転ぶ私を彼女は明らかな不満顔で睨みつけてきた。

「あはは、敗者を見下ろしてるのに、その表情はないんじゃないかな」

「剣術、体術、発勁、暗器各種、小弓……引き出しの数は片手で足りない所か、そのどれもが一流に扱えるとか有り得るの？　しかもそれを私の情報網が捉えられなかった？

それってつまり前哨戦では負けていたって事よね？」

「頑張つて隠し通してきたんだけど、届かなければ意味がないよ」

「その切っ先、私の喉元までは届いていたわ。最後の余興と思つていたものが、まさか戦場に華を咲かせる寸前まで行くとはね。全く持つて迂闊だった」

「やっぱり初撃を外したのが痛かったなあ。とはいえもうこれ以上は言つても仕方のない事だね。もう戦いの中で晒せる手札は無い、生殺与奪は貴方次第だ」

「言つたわよね、勝負が終わつたら今度は言葉を交わすと。」

貴方に持つていた興味が計り知れない勢いで膨らんでいるから、今度はそれを満足さ

せてもらうわ」

「そっか、なら敗者らしく、包み隠さず全てを話させて頂きます」

「ふふ、それじゃあ劉備、貴方の真名を差し出しなさい」

「仰せのままに、私の真名は桃香と申します」

「私の命に最も迫った貴方に敬意を表し、私の真名も預けましょう。

「これからは華琳と呼びなさい」

「光栄の極みに存じます。華琳様、これからも末永くこの命をお使いくださいませ」

「……慇懃無礼を絵に描いたような態度ね。いえ、貴方は真面目にやってるんだらうけど、不自然だし、私と互角に渡り合った人間にやられるのはなんとも微妙ね。いいわ、周圀に私が気を許せる人間だけの時はもっと砕けた態度を取りなさい」

「御意」

それから十数日を戦後処理に奔走し、一息つけるようになった時機に華琳から呼び出しが掛かった。

呼び出された場所はとある城の一室だった。

「失礼します」

一言断って入室すると、そこには華琳、夏侯惇、夏侯淵がいた。

とても豪華な作りから、対外用の応接室のような場所なのだと思う。

「止まれ、まずは持ち物検査をさせてもらう」

強く切り出したのは夏侯惇。まあ当然の警戒だと思ったので、素直に受けようとして、

「私が真名を許した相手にそんな無礼を許す筈ないでしょう。春蘭、どうしても言うから同席を許したけど、勝手を許した訳じゃあないわよ？」

「あ、や、しかし……」

「その者は単体で華琳さまの脅威となりますし、華琳さまは今現在この大陸で最重要人物になりました。警戒を露わにするのも致し方なしと判断します」

「おお、そうです、秋蘭の言う通りでございますー！」

「華琳さん、私も別に失礼と思ってないから」

「これは私の矜持の問題だ。桃香、席について」

華琳がそう強く言い切った事で、二人は引き下がった。

私は華琳と机を挟んで対面に座り、夏侯惇は華琳の後ろに控え、夏侯淵はお茶を淹れてくれた。

「二人の気遣いは有り難いわ。」

けれどそもそも桃香は気術に長けているから暗殺に持ち物の有無はさほど重要では

ない。

なら椅子に縛り付ける？ 安全は確保されるかも知れないけれど、それでどうやって腹を割った話し合いをしると言うのか」

感謝の言葉とそれをしない理由に納得したのか、彼女達にあった僅かな隙が取れる。

一応信頼してもらう為のもうひと押しをしておくか。

「もしそれでも心配なら、夏侯惇さんか夏侯淵さんのどちらか私の隣に来ますか？ さすがに予備動作を止めれば発砲も何も打つ手はありませんから」

「なら秋蘭が」

「姉者、私は給仕を任されている。やるならば姉者だ」

「しかしいざという時に華琳さまの盾に」

「盾になる前に止められる位置に来ないか？ と桃香は私達を氣遣つて言つてきてるのよ。という訳でこの話の最中、春蘭は桃香の隣にいる事、決定」

「あぐ、うう、決定に従います」

そして夏侯惇が隣に移動してくる。

憎しみの視線が横から突き刺さるけど、良しとする。

夏侯惇からしたら自分はここに至るまでの最大の障害となつた奴で、主を殺しかけた奴で、武を扱う者の風上にも置けない奴で、華琳が二人っきりの話し合いを求める奴な

ので、最初から視線が厳しかったのだ。

視界内のほぼ正面から憎しみを受け止めるのは精神安定上よろしく無かったので、視界外に移ってもらった事で精神的圧迫が大きく軽減された。

「秋蘭、無礼のお詫びに貴方の手作り菓子を用意して。春蘭、無理だろうけど視線をもつと柔らかくする努力をなさい」

「はっ」

「は、はい、頑張ります」

夏侯淵が部屋を退出する。

「本格的な貴方の話は秋蘭が戻ってからしようと思うけれど、その前に世間話でもしましょう。春蘭、長くなるだろうから座って良いわよ。」

それで、蜀の運営はどうかしら？」

「あはは、本来ならそっちの話の方が本題になるんだらうけどね。」

運営は恐ろしく順調だよ、元々私達は山ばかり、海も遠いという地理が枷だったけど、平和になった事で商人の行き来が楽になったから不足しがちだった物資に目処をつける事ができた。後は人が行き交えるというのも大きい。他所の文化と教養を得られるのは学問の発展に……」

全部報告に上げてるから、これは本当に世間話のようなものだ。ただ報告書に載らな

い所見を彼女は聞きたいのだろう。なので事実を伝える事よりも私の主観と構想を主軸に話す。

しばらく熱いやり取りがあつたのだが、微かに隣からすーすーと音がする。

気になつたので隣を見てみれば、夏侯惇がとても穏やかな顔で寝ていた。

何やつてんだこの護衛、と思つたが、華琳の方に顔を向けるとにこやかに返された。

多分狙つてこの話題を出したのだろうけど……すごいなこの主従、色んな意味で。

「失礼します」

外から聞こえてきた夏侯淵に華琳が入室の許可を出す。

入つてきた夏侯淵は寝入つた夏侯惇を見て、やれやれ、しょうが無い姉者だ、という

ような優しい表情をし、そのまま給仕を始めた。すごいなこの姉妹、色んな意味で。

皆が気にしないようなので、そのまま私も何事もなかつたかのように話をしようと思つたけど、夏侯淵の持つてきた変わり種の月餅が夏侯惇の前に置かれた瞬間に彼女は

跳ね起きた。

「この匂いは月餅の練乳仕立て！」

さすがに驚いた。二人は苦笑しているの、よくある光景らしいが……華琳がきりりと表情を引き締める。

「春蘭、今すぐそれを持つて出ていくか、ここに居て良いけれど話を終えるまでそれに手

を付けないか。どちらか選びなさい」

「あれ、私は……えっ、あの、それはっ、いい、居させてください」
流れが読めた。

私は捨てられた子犬のように月餅を見つめる夏侯惇さんの肩にそっと手を当てる。こちらに半泣きの顔を向ける彼女に微笑み、そして華琳の方へ顔を向け、
「私への無礼というのなら許して上げてください。私が気にしていないのに罰を与えられては、私への罰に成りかねません」

「ふむ、それは頂けないわね。」

春蘭、今回は桃香の優しさに免じて許すけれど、次は無いわよ?」

「はっ、寛大な裁定を」

「感謝をこちらに向けるのは違うと、貴方も分かっている筈よね?」

「あう、はい。劉備殿、心遣い感謝致します」

「良いよ。美味しい物は大勢で食べた方が美味しいしね」

「ええ! 秋蘭の料理の腕前は華琳さまや流琉にも負けぬほどで」

「姉者、さすがにそれは言い過ぎだ。それと料理は出来たてこそが美味しい、箸を付けるなら早めに願う」

「そうね、それじゃあ皆で頂きましょう」

そうして先程の空気から一転、とても和やかな雰囲気の中で食事会が始まった。満面の笑みを浮かべる夏侯惇に合わせて私も朗らかに笑うが、これ、明らかに狙ってましたよね？ という視線を華琳に送ると、彼女は優しい笑みを浮かべながら視線を逸した。

美味しい月餅を頂き、口直しのお茶を頂き、夏侯淵にお礼を言って、さて本題。

「それで華琳さんは私の何が聞きたいの？」

「全て」

「具体的なんだか抽象的なんだか分からない表現が来ちゃったな。

えっと、私の記憶の全てってなるとかなり膨大だよ。

私は自我が芽生えてからの光景を全て映像として記憶してるから、全部話せと言われてたらそれこそ私の人生分掛かるよ？」

「それもまた大概凄まじい能力ね、だけどまあそこまで微に入り細に入る必要はないわ。ただ生まれてから今までをざっくりと語って欲しい」

「分かった。でも記憶の総量いと要点の抽出の同時進行なんて初めてだから、説明が足りなかったり過剰だったり、まとめるのに時間がかかったりと不備が目立つかも」

「気になった所は適宜突っ込むからそう神経質にならなくても良いわ。」

長くなるのも覚悟と準備の上」

「そこまでする事かな？」

「そこまでする事と私は判断した。」

今貴方を知っておかないと大変な見落としがありそうだから、腰を据えて聞くと決めたの」

「そこまでされたら、こつちも覚悟を決めて全部話さなきゃだね。」

きつと貴方は私を変な奴と思うだろうし、嫌な奴と思うだろうけど、それでも話すよ」
「そんな事は思わない、なんて早計な返事はしないわ。けれど絶対に最後まで聞くから、話して」

彼女の深い探究心には感銘すら覚える。だから私は話そうと決意を固めた。

深呼吸を幾度か行い、お茶を飲んで喉を潤わせ、私は私を語り始めた。

79. 劉玄德の始まり

私自身は面白みのない人間である。

生まれは閉じた村だし、私塾に入れたのは縁故だし、義勇軍を成してここまで来られたのは周囲の力が大きい。多くの他人からすれば波乱万丈なのだろうが、曹家孫家の登り詰めた人達からしたら凡庸で、もっと劇的と言える人生を送っている人は多い。私の調査報告なんかは受け取つてると思うんだけど、貴方から見ても多くの面で普通だと判断するんじゃないかな。

でも私、劉玄德は他の人間と決定的に違う点が一つだけあった。

生を受けてから母と恩人の薫陶を受け、塾に通つて見識と友を得、何物にも代え難き義姉妹を得、志を共にする将と兵と出会い、私に付いて来てくれる民達を率いて国を成し、比類なき霸王と剣を合わせた。

濃密な人生経験をなした上での理解なので、間違いはない。

私、劉備玄德は世界に馴染んでいない。

ふふ、口まで開けてポカーンとしている。まあ私も何も知らずにそう言われれば同じ反応をしたに違いないけど、霸王様の良い表情を見られました。

ああ、からかうつもりで言ったんじゃないよ、これは完全なる事実。

ともあれ、まずは私の始まり、齢五歳の時から話していこうか。

ある人に出会い、ある人に母の病を治して貰い、ある人に学び始めた年だ。

それまでの私は始まってもおらず、ただ母の期待に応えようとする童でしかなかった。あまりにも普通の子供で、そのある人と出会わなければ自身の持つ異常にも気付かなかったかも知れない。

まあこういう話し方をすれば、そのある人って言うのが私の人生の根幹っていうのは分かるよね。

名を謙信。白いお伽噺の原点だとか、私達の一世代上の偉人を育てた人だとか、色々逸話はあるけれど、まあそんな事はどうでも……良くないって側近の人は思ってるみたいだけど、逸話の詳細についてはここではあまり関係がないから省くね。

大事なのは、その人もまた世界に馴染んでいなかった人だという事。

謙信さんに出会っていないければ『他の人間ほど』等と比較すら出来なかったに違いなく、そして謙信さんという同類、同胞と出会えたから、私は世に馴染もうと思えたのだ。

あはは、顔が赤いって？ 謙信さんの事はずっと先生と呼んでたから、姓名で呼ぶのはすごく照れくさいんだよね。あーうん、あれだよ、恋する乙女だよ。

こほん、話が逸れたね。

ともかく、貴方が聞いてくれると言った私の物語は、世界に馴染んでいなかった私が如何にして始まり、世界に馴染もうとどんな努力をしてきたか、それに尽きる。

では最初から全て思い出しつつ、その中から要所だけを抽出しながら話していこう。

私が私を始めたのは五歳の時。

私の記憶には父がいないが、その分大好きな母が居た。

母は私を産んでからずっと肥立ちが悪く、私はそれを何とか出来ないかと身体に良いとされる薬草や虫を探して集める事を日課にしていた。

薬集めは一年近くやっていた日課だ。

一年もやっていたので見回る順路は大まかに決まっていたのだが、その頃は母の様態が目に見えて悪くなる一方で焦りが募り、禁止されていた領域にも足を踏み入れてしまっていた。

私の行動範囲内で立ち入りが禁止されていた場所、それは村の大事な収入源である桃園の中だった。

桃園は大人の同伴無しで子供が立ち入る事を禁止していた。当然の処置であり、破れば厳しい罰則が適応されるのだが、居ても立ってもいらなかった私は桃園中を探索し

まくつていた。

よくよく考えれば桃園は毎日手入れがされていたので何かが残っている筈もなかったのだが、幼い私には分からなかったのだ。

だから私はその日も大人達に隠れてこっそりと桃園に入り込んでいた。

ありもしない漢方を探している最中に声を掛けられた。

気付けば目の前に桃の木があり、私は口と目を見開いて驚いた。

お礼を言わなきゃと思つて声の聞こえた方を見て、桃の木が目の前にあつた時の百倍驚いた。

こんな綺麗な人が存在するんだ、という単純な驚き。

私の認識は村の中で完結していたから、基準は狭かつた。

だが彼女（正確には彼だけどこの時は女性だと思つていた）を見て私の認識は拡大した。

私は彼女の事が気に掛かり、村の外の人であつたにも関わらず、普通に話していた。

外の人間を見つけたら村に戻つて大人に言う事。そんな母からの言いつけに背いた事に罪悪感を抱きつつ、しかし話さずにはいられなかつた。

その絶世の美しさに当てられたのではなく、心の奥底から溢れたその人と話したい触

れたいという願望が私を突き動かしたのだ。

まずは彼女が誰なのかを聞いた。

謙信と名乗った彼女の名に聞き覚えはなかったが、その声には聞き覚えがある気がした。

次いで彼女の目的を聞いたが、彼女の答えに明瞭さはなく、迷子である、医師であり薬師であるという言葉だけが信じるに値すると思つた。

私の感覚は彼女の言葉を信じていたが、大の大人が迷子という不可解さに疑問を感じた私は彼女の懐に一步踏み込んだ。

私の感覚が正しいという確証が欲しかった私は彼女の目を覗き込んだ。

元より嘘等を見抜く力に長けていた私だったが、目を見ればほぼ外れなく人の感情を見抜けたからだ。

目を合わせ、その瞳を見通そうとして、理解した。

私の感覚は全て正しく、この人は嘘をついていないと明確に理解し、私の心の奥底から溢れた感情もまた正しかったのだと理解した。

この瞬間から私という存在は始まったのだと、今になって思う。

その時に抱いた感情の名前を私は知らなかったが、胸の奥に大事に仕舞いこんだ。何かは分からないが、それがとても大切なモノだとは分かっていたから。

とにかく『この人は大丈夫』という確信を得た私は彼女が医師であるという情報に食いついた。

この人なら母を救ってくれるのでは？ と思い、その手を強く引く。彼女はされるがままに付いて来てくれた。

彼女の手を引き、母と対面して貰う。対面してもらうまでは気にならなかったが、二人の気を対比出来る余裕が生まれた途端に愕然とさせられた。

その頃から気が色として見えた私は淀んだ気が普通だと思っていた。母の気は病からとても淀んでおり、村の人達も高齢が祟って気が淀んでいる人達ばかりだったからだ。

だからおねーさんの真っ白な気を見て驚いたのだ、健康であるならこんなにも気とは光り輝く物なのかと。

彼女は治療を始める前に私に頼み事をしてきた。

母の病状はとても酷く、今すぐに治療を開始しなければいけない。村の人に説明はしたが、信頼してもらおう時間も無かったから万が一がある、もし村の人が治療を中断させようとしたら追い返して、と。

こんな子供に真剣に頼み込むんだ、きつとそれはどうしても必要な事なんだと幼心に

理解できた私は大きく頷いた。

そして治療が始まり、彼女と母の気がゆっくりと重なり、母の気がゆっくりと白くなつていくのが見えた。

この段階で、ああ、本当に母は助かるんだ、と実感した。

だから大人達がやってきて彼女を引剥そうとしているのを必死になつて止めた。

大声を出して体当たりをし、涙を流して鼻水をすすりながら説明した。

私の必死な様子が伝わったのか、村長さんが様子見の判断を下してくれて本当に助かった。

私は村長に感謝をし、彼女の治療の続きをじつと見続けたのだった。

その治療がとても重要な物だと感覚的に理解していた私は、長時間の治療にも関わらず無心の集中を続ける事が出来た。

お蔭でそれまではぼんやりとしか分かっていなかった“気”というものの本質を理解する事ができた。

気で何が出来るのか、何に影響を及ぼすのか、使い方、使った時の反応などなど、超高等技術から見て学んだ事は私の人生において非常に役立つのだが、この時の私はそれを知らない。

母は治療終了と同時に意識が落ちたが、淀んだ気が真つ白になったのを見て治療が成功したのだと知り、特に混乱もなかった。

私は溢れだす喜びに居ても立ってもいられず、大きくお礼の言葉を言おうとして、母を起こしちや駄目だと気付く。

この感情をどうしようかとあたふたするが、彼女が用事をくれたので、感情の発露の為にも外へと駆け出すのだった。

心の高まりは収まることを知らず、ご飯の用意をし始めていた村長を無理やり連れ出す暴挙を躊躇いなく行う。

村長は仕方ないという様子で私に引つ張られ、すぐに家に着いた。

村長と彼女がしばらく話し、何故だか彼女が村長を治療する事に。

村長が治療を受けている時も私はひたすらに彼女と患者である村長さんを見続けた。

彼女の白くて美しい気が村長の身体中を細く長く伝つていき、淀みを駆逐していく様子は見ていて面白かった。

治療はもの数十分で終わり、村長の身体から淀みがほぼ消えていた。

その後すぐに村長の態度が変わったので、少しぽかんとしてしまった。

大人の急激な変容に驚いてポカーンとしていた私だが、気付けば彼女と一緒にご飯を食べていた。

そのご飯の美味しさに意識が戻ったのだ。

先ほどの事は一切忘れて、彼女の料理に舌鼓をうつ。

そして気付けば布団に入って彼女の話を聞いていた。

遠い昔の、けれど何処か他人の話とは思えない物語だった。

皆が幸せになった所で話が終わり、私の気力も限界を迎えた。

今日は良い夢が見られそうだと思っただけれど、その日見た夢は悲劇で、悲恋の内容だった。

翌朝私は怒声で目が覚めた。一年前に完成されていた反射神経で言い訳と共に身体が跳ね起きた。

焦りを感じながら目の前に立つ人を見上げて、それが母だと気付いて、私は目頭が熱くなつた。

母は良く怒る人だったけれど、ここ一年の間は怒られなかった。

母の教育方針が叱るから褒めるに変わったからだ。

それは最後の最後は優しくしたいという母の願望と、最早怒る体力も無くてそうせざるを得なかった母の実情があつた。幼かった私ははつきりと分からなかったが、何となくもう大声で怒られる事はないのだろうなあと思つていた記憶がある。

だから今ここで怒られているという事は、最後が最後では無くなり、怒る体力が戻ったんだと理解できた。

怒られるのは好きではなかったが、怒れる母を見て嬉しくならない筈が無く、泣かない筈が無かった。

その後彼女の今後について話をしていたが、どうやら一ヶ月ほど居てくれるらしい。私は出会った当初から彼女の好感度は最大だった。最大だったのに、母を救ってくれたからもう大変。好感度は最大を超えて振り切っていた。

家に泊まってくれろと思ひ、喜びの声を上げた私に待ったをかけた彼女。驚き泣きそうになるが、ちゃんとした理由があつて一安心。

彼女は母とのやり取りの後、村長の家に小屋を貰い受ける許可を取りに向かうとした所、丁度村長が私の家にやってきてくれた。

母の様子を見て来てくれ、また改めてのお礼をしに来たと話す村長。その手には快方祝いの桃が入った籠が握られていた。

私達は礼を言い、皆で桃を食べた。生産者の私達でも食べる機会はない甘味であり、皇帝への献上品に選ばれる程の品質に間違いはなく、皆が蕩ける笑みを浮かべる。

桃を食べ終え、彼女は改めて村長に話を通した。

村長としては守護役の治療と村人の治療による報酬及び待遇がその程度で良いのかと逆に渋っていたが、彼女は煌めく笑顔で領いた。

けれど最後に『ああそうだ、物を教えたいのですが、生徒を募集してよいですか？』と付け加えた。

訝しがる村長に彼女は『上級と特級資格者は後進を育てる事が義務付けられているのです。一時的とは言え一箇所に留まるのですから、その義務を果たそうかと。とはいえ薬の知識は門外不出なので、教える内容は算術などの一般教養になります』と言う。

明確な理由を述べられて渋い表情のまま深く悩む村長。

生産者として労働力が取られるのは困る、しかし学があれば商人との交渉が有利になるかもしれないと悩んでいるようだ。

彼女は『報告の義務等がある訳ではないので、あくまで形だけで構わないんです。暇な人が話を聞きに来るなら開講するとか適当で構いません。なのでとりあえず教室を開く許可だけ下さい』と言った。

村の皆も一日中働いている訳じゃないので、良い暇潰し、鬱憤ばらしになるかも知れないし、学が増えるのは基本的に良い事であると村長は首を縦に振った。

危険思想を教えない事、村の外へ出る扇動をしない事だけ確約し、彼女が塾を開く許可が降りた。

80. 出会いは続く

彼女は許可が貰えた事でやる気を出したのか、ものの二週間で小屋をそれなりの学び舎に進化させてしまった。

建材はどうしたのかとか、本当に私と二人でやったのかとか疑問はあったが、そこで始めた治療所兼教室は大好評で、村の皆が抱いた疑問はすぐに雲散霧消した。

物珍しさにやって来た村の人が一人治療を受けるとその効果は絶大。

狭い村でその効果が知れ渡ると三日目にして村人全員が診療所に押しかける問題が発生。

村長が症状の重さで順番を決めなければあわや大騒動になっていたかも知れない。

全員が治療を受けて診療所は大分暇になったが、時折怪我の治療や美容の相談なんかには人は来ていた。

それに比べて学び舎の方は基本的に閑古鳥が鳴いている。

そして一番教育の必要のある子供のだが、既に労働力として桃園で働いており、やって来る事はなかった。

皇帝への献上品に選ばれ独占されている桃園は働き口としてはかなり優良だ、親は勉

学なんぞ教えて外に憧れを持たれるのを嫌がって子を寄越さなかつた。

大人の受講者も全然いなかつた。村人の半分は平穩を退屈と思つて一度は外に憧れて出て行くのだが、外の悲惨な状況を知つてほとんどが戻つてくる。そして残つた村人も話を聞いて外への興味を一切失つてゐる。そして殆どの村人が最低限の学だけあればいいと割り切りが済んでしまつていたので。

それでも文字や算術を興味本位で習ひに来た大人が数名いたが、この人達は半年ほど基礎を学んでそれから来なかつた。

明確な意志を持つて一年以上習ひに来た村の人は村長のお孫さん、近隣の村にいた中級医師の次男坊さん、私ぐらいのものである。もう一人先生の生徒と呼べる人がいたけど、それは後述。

村長のお孫さんも医師の息子さんも私に良くしてくれたけれど、残念な事に二人ともそこまで長い期間授業に出る事はなかつた。

村長の孫である十三才のお兄さんは村長の後をついて回らなきやいけなくて、ちよくちよく空いた時間に学びに来るだけで不定期。医師の次男坊さんは一年と少し学んだ後は中央に行つてしまつた。予想以上に賢くなつた次男坊に親が期待をかけ、縁作りの為に私塾に通わせるようにしたようだ。

馬鹿な事をしたと思う。二人共平均よりも賢かつたから、後三年も先生の元で学ばせ

ておけば望む榮達を手にしていただろうに。

そんな中、用心棒として街に駐在している母の子である私だけは桃園での労働に縛られる事無く、また母の意向もあつたので毎日教室に通う事が出来た。

母は二ヶ月で完治宣言をされたが、先生（教室に通うようになってはおねーさん呼びから先生呼びに改めた）はここは居心地が良いと言つて結局六年ほどは桃花村に居着いた……違うな、居着いてもらった。

その間、私はほぼ毎日毎時間先生に引つ付いてあれこれを教えてもらつていた。

一日を共に過ごす時間は母よりも長くなつていて、私の生活は先生一色になつた。

先生の授業の一幕はこのような感じ。

「せんせー！……さんじゅつって生きているのにひつよーですか？」

「無いとお金で困る事になるだろうから必要だね。大丈夫、数学的思考は劉備ちゃんにとても合うと思うよ」

「せんせーが言うならまちがいない！ がんばる！」

……

「なにこれすつごくおもしろい。なんにでも答えがあるつてすつこい」

「せんせい！ れきしって生きるのにひつようなない気がします」

「何も知らない状態で未来を見通すのは難しいけど、歴史という過去を知っていればそこから推測出来る事が多々あるんだ。瑠花さんに怒られたらその怒られた事はもうしないでおうって考えられる。それでしばらく怒られる行動について積み重ねが出来てきたら、まだやった事のない行動でもこれをやったら瑠花さんに怒られそうだなあつて推測が出来るようになる。そんな感じで知識と経験は予測を生める。そして歴史を知る事はその知識の部分を補えるんだ、先人の積み重ねを頂ける訳だからね。」

「数学的思考、特に確率計算なんかと組み合わせるととても役に立つし、劉備ちゃんにはきつと必要になるよ」

「せんせいが言うならまちがい無いね！ がんばります！」

……

「うーん、知れば知るほど、なんで人ってこんなに同じ事をくりかえすんだろ。……あれかな、太るって知っててもおかわりしちゃう、みたいな？」

「先生、母のような用心棒か先生のようなお医者様になりたいという希望から色々教わらせてもらってますけど、誘惑術と詐術って必要ですか？」

「両方共知って身に付けておくとそれで防御になるからね。それに劉備ちゃんとしては

不服かも知れないけど、君とそれらの人心に作用する術はとても相性が良い。心理学関係は学べるだけ学んでおこう」

「先生が言われるなら間違いないのでしようが……とりあえず頑張ってみます」

……

「あーこれは役に立つなあ、人の考えが透けて見えるみたい。用心棒としても医者としても交渉する上で絶対必須だ。やっぱり先生の言う事に間違いは無いなあ」

私が始まってからの六年間、そうやって生活のほとんどを生徒として過ごしていた。

六年の間に学んだ事を詳らかに全て列挙しようとすると日が暮れるので割愛する。

変な話だが、学ばなかった事の方が少ないのだ。

算術、文字の読み書き、歴史、科学化学物理学、薬学、医学、軍学、礼儀作法、人付き合いの仕方、自然の中で生き残る方法、人心掌握術、誘惑方法、騙し方騙され方などの座学。

身体の育て方、効率の良い動かし方、整体術、体術、各武器術、暗殺術、馬術などなどの実践。

自身の非才はすぐに自覚したので、狭く深くではなく広く浅くを重視し、覚えたと思っただけの次の事に取り組んで六年間新たな事を学び続けた。

五感が鋭いお蔭で手先が器用だったり人の変化を見逃さないという少し変わった才能こそあれ、ずば抜けて優れた才能が無かった自分。一時は自身が特別ではないと落胆したが、身体の作りも頭の出来も悪くはなく、また努力も厭わない性格だったので先生からは生徒としてとても優秀だったという評価を貰う事が出来た。その評価は私の誇りであり、自信の源である。

さて、幼少時の私の事は語り終えたので村について少し触れる。

とはいえあの村は完結していたから、特筆するべき事は片手に収まる。

皇帝が独占する為に地図には載せず、物資補給も専属の商人にさせていたし、正規兵の見回りはそこそこの頻度であって、腕の立つ用心棒である母を雇い入れるお金も国が払っていた、しかも街道に程近い隣村はこの村を隠す為に作られていたり、桃花村は世界から完全に切り離されていたのだ。

ただそんな平穏過ぎる村でも三つばかり事件が起こった。

一つ目は先生の来訪と母の治癒。二つ目は謙信さんがやってきて一週間ほど、まだ教室が始まっていないので先生とは呼ばず、おねーさんと呼んでいた頃に起きた。

母が治ってから先生が教室を開くまでの間、私は時間と感情を持って余していた。

普段は桃園の手伝いや内職の手伝い等をしていたが、ここ最近母の看病が忙しくて何も出来ない状態だった。

幸いな事に病が完治し、看病の必要が無くなった私にはやる事が無くなっていった。

桃園の手伝いは母が治っても皆から今は母に付いてあげないと諭され、内職は母が体力作りに鍛錬を始めた事で監督する人がいないので出来なかった。

なので私は母の鍛錬を手伝っていたのだが、母はとてもやり辛そうだった。

その時に自覚は無かったのだが、私は辛そうな顔で鍛錬をしている母の隣でここにことしっぱなしだったと後から聞かされた。

母の辛そうな所を見て笑っているのは薄情過ぎると思われるが、正直これは仕方無いのだ。ちよつと前まで母は死ぬのだと本能で察していたのに、それが奇跡的に覆された。母が調子を取り戻そうとするその行為は生の証明である訳だから、それを感じ取った私は顔がにやけて仕方がなかったのである。

水いる？ 汗を拭う？ なんてとにかく何か手伝わせてという空気を出して声にも出して、とにかく母の傍にいた。

母も私の心情が分かっていたから、一時間程は私に付き合ってくれた。

そして私がある程度満足したと思ったら、

「今日はもうそろそろ切り上げるから、次は謙信さんの所に行って何か手伝っておいで」

と言つて先生の所に行くように促す。

「うん、わかった！ おかーさんはゆつくり休んでよ！ あたしががんばつて恩返ししてくるつ」

と言つて先生が改築している家まで走り出すのが私の午前中の日課になっていた。後になつて気付いたんだけど、一時間で体力作りを切り上げるのは私を氣遣つた方便であり、穩便に追い出してから本格的な鍛錬を始めていたんだろうなあ。

先生の所に走つて向かつていた最中、村長が話しかけてきた。

「おお劉備ちゃん、謙信殿の所に行くのかい？」

「うん！ おいえを直すおてつだいしてくるよつ！」

「ほうそうかそうか、なら一つ伝言を頼まれてくれんか？」

「うん、いいよ！」

「実はまた旅の者が訪れての、その者らが上級資格持ちの医者という事なんじゃ。この村に旅の者、しかも旅医者が立て続けに来るといふのが何というか……出来すぎていて。謙信殿に彼が本物の医者かどうかを見極めて欲しいんじゃ」

「そーなんだ、こんなに人が来るなんて珍しーね」

「じゃろ？ 旅人は二人おつてな、今日一日は旅の疲れを癒やしてもらう為に儂の所で

逗留してもらおうと思つとる。なんで謙信殿には時間が空いたら儂の家まで来て欲しいと伝えておくれ」

「うん、わかった」

そんなやり取りをしてまた走り出す。

母を治してくれた、とても綺麗な気を持っている、ずつと見ていたくなる美貌、何でも知っている聡明な頭脳、私に対して気を許してくれている。そんな大好き過ぎる人の元に向かうのだ。私が先生に会いに行く時はいつも全速力だった。

そして大好きなおねーさんの所に辿り着くと、

「劉備ちゃん、いらっしやい。また全速力で来たね、お水いる？」

そう言つていつでも笑顔で出迎えてくれた。

全速力で来た私を家に通してくれて、水までくれるのが一連の流れ。

いつもはそこから手伝いっぽい何かをし始めるのだが、私は忘れない内にと村長から聞いた話を早速するのだった。

「けんしんおねーさん！　なんかねっ、旅の人がまたきたの！」

「旅の人つて言う事は、商人でも近隣の村の人でもないのかな？　桃花村つてあんまり

他所人が来るような場所じゃないって聞いてたけれど？」

「遠くからくるよーなしらない人なんて三年に一回くるかこないか、つて前にそん

ちよーさんが言つてた」

「ならやつぱり珍しい事なんだね」

「そうなの！ それにね、その人もおねーさんと同じでおいしやさまなんだつて！」

そう言つた時、先生の目がとても鋭くなつたのに気付いた。

雪の日に感じるような冷たさが背筋を走つて、私は思わず上を見上げながら背筋を触つてしまった。

そんな感覚は初めてだったから、晴れてるのになんで雨漏りがしたのかな？ なんて不思議に思つて首を傾げたのを覚えてる。

「その人もおねーさんと同じじよーきゅーごーかくしよ持つてるらしいんだけど、あやしいかも知れないからおねーさんにたしかめて欲しいんだつて。今日はずっとそんちよーさんの所にいるらしいから、いつでも良いから来てねつて」

「へえ、しかも上級資格持ち。これはつまり……いや、その判断はまだ早いかな」

先生はそう言つて頭を振り、すぐ初めてみた時の優しい目に戻つてくれた。

「ごめん、少し怖い目をしてしまつたね。取り敢えず村長さんの気を揉ませ続けるのは忍びないから、午前中に伺おうかな。それまでは昨日の続きをしようか」

「がんばるよつ！」

それから家の裏手に回り、昨日目一杯消費した筈の木材が家の裏でまた山積みになつ

ているのを不思議に思いつつ、切つて組み立てて建てて貼り付ける作業に没頭するのだった。

一時間ほどで一区切りが付いたので、私と先生は村長の所に出掛けた。

私を帰らせなかつたのは、家に帰らせると母の邪魔をしてしまうと先生が判断したからだろう。

それに子供がいると何がしかの反応が出やすいからだと後々学ぶ。

村長の家につき、奥さんに連れられて行つた部屋には村長と二人の客人がいた。

一人はがっしりとした体躯に白い着流しを着て、髪の毛を全て後ろで束ねている精悍な男性だった。歳は見た所四十前後ぐらい。

もう一人は私よりも少しだけ年上の男の子で、快活で意志の強い目が印象的だった。

「おお謙信殿、来てくださいましたか。どうぞどうぞ」

「ええ、劉備ちゃんから話を聞いて堪らずやって来てしまいました。」

お客人方、急な来訪申し訳ありません。私も旅医者をやっている身でして、同業者として是非とも交流を深めたいと思ひここに来ました。少し話をさせて頂いても構いませんか？」

村長と二人の客人にそう言つて頭を下げながら、見かけとても優しい笑顔で語りかけ

る。

村長は何故だかこほんと咳払いをし、男の子の顔は真つ赤で、男性は無表情を崩さなかつた。

「構わない。情報交換が出来るならば歓迎する」

「感謝します。私の名は謙信、医術と薬術の上級免許持ちです。私の隣りにいるこの子は劉備ちゃんと言って私がお世話になっている家の子です。家主から預けられているので連れてきました」

「りゅーびですー！」

「俺の名前は華陀。医術は上級、薬術は中級、五斗米道の流れを汲む旅医者だ。隣のこいつは阿陀、俺の弟子だ」

「あ、阿陀です、よ、よろしくお願いします」

「ほう、五斗米道という事は氣と鍼の専門家ですね。五斗米道は氣術の扱いの難しさから術師が減っていると聞いていますし、教義に沿って旅をされている方は更に少ないと聞き及んでいます。出会いの奇跡に感謝ですね」

「はい！ 師匠は本当にすごい人むぐつ」

「俺は非才だ。氣術での才能はお前にすら劣るのだから、あまり誇張してくれるな。」

それにお前はまだ触らないと氣の流れが分からんから大口を叩けるが、謙信殿を前に

して俺如きを誇ろうなど烏澁がましいにも程がある」

「医学は才覚ではなく経験と努力の積み重ねです。華陀殿の気は量こそ並ですが、研ぎ澄まされていてとても美しい。長年真摯に患者と自己に向き合ってこられた証でしょう。と、些か上から目線過ぎますね、失礼しました」

「いや、俺よりも余程の才と経験を有するであろう謙信殿から言われるのなら喜びだ。

あーしかしなんだ、最早一子相伝とまで揶揄される程に数が少なくなつた五斗米道を良くご存知で」

「旅の中で幾度か邂逅してますからね」

「ほう、俺以外にも旅なんぞに出る偏屈がいたのか。数十年旅をしてきたが、俺の師匠以外の五斗米道の者を見たことがない。謙信殿は余程巡り合わせが良かったのだろうか」

「此度の出会いもまた巡り合わせ、大事にしたいものです。とはいえ、巡り合わせとは必然が重なりあつて起こるもの。華陀殿はどういった用向きでこちらに参られたのか、良ければ教えて頂けませんか?」

「別に隠す必要もないから構わん。俺はある人に頼まれてその人物の友人の様子を伺いに来ただけだ」

「ほう、そうでしたか。大体の者は夕方に仕事を終わらせて戻りますが、名はなんと?」
「確か劉弘という者だ」

「あつ、おかーさんだ！」

「むつ、なんとという巡り合わせ」

「まさしく巡り合わせですね、ならば私達が案内しましょう。一息つき、昼食を食べてから再びこちらに伺いましょうか」

「いや、様子を見るよう頼まれただけなのでな、早急に用事を済ませて戻ろうと思つてゐる。」

「だからそちらが良ければ今からでも案内を頼みたい」

「私達はこれと言つて火急の用などありませんので構いませんが、しかしそちらのお弟子さんは疲れていませんか？」

「あ、いえ、全然大丈夫です！ 今すぐにも動けますよ！」

「との事なので、大丈夫だろう。正確な自己管理も医者として必要な要素だと常々教えてゐる。ゆえに言つてのけたのならやつてもらわねば」

「う、いや、大丈夫です」

「ふふ、ではすぐにも向かいましょうか」

優しげに男の子に笑いかける先生と、その笑顔を向けられてどぎまぎしている男の子にもやもやした気持ちを抱えながら、私は三人を先導するようにして家に帰るのだった。

81. お別れと第三の事件

家についた私は勢い良く戸を叩いた。

「おかーさん、おきやくさんだよ！ はいつてもらつていいーい？」

「私に客だつて？ ちよつと待つておくれ」

「がさごそという音がして少し、母が戸を開ける。

「待たせたね。ふむ、見ない顔だが……まあいい、上がつておくれ」

「失礼する」

「失礼します」

「ただいまです。自分はお水とお昼の用意をしますね」

「あつ、あたしもよーいてつだうよ！」

「いや、水は劉備に用意させて、謙信さんには傍についててもらいたい。まだちよつと身体が言う事きかなくてね」

「そうですか、では付き添わせてもらいます。劉備ちゃん、お水頼めるかな？」

「まっかせてよ！」

聞かせたくない話の可能性を考えて私の席を外させるのと、知らない人物に対しての

警戒の為に先生を同席させたんだろうけど、この時はそんな事気づきもしなかったなあ。

しかし五感の鋭い私はお客さんをもてなす準備をしながらでも母達の会話が筒抜けだったし、先程の会話で華陀先生達が悪い人ではないと確信していたから無用の気遣いだったのかな。

「それで、用向きはなんだい？……ああ、この人は私の命の恩人で懐の広いお人だ。聞かせても大丈夫だよ。謙信さんも大丈夫かい？」

「ええ、医者として個人情報管理はばっちりですよ。それに付き合いは短いですが、瑠花さんも劉備ちゃんも家族のように思っていますから、聞かせて頂けるなら是非同席させて貰いたいです」

「有り難い言葉だよ。という訳で、話をお願いするよ」

「そちらが良いなら構わない。」

まずは自己紹介だな。俺の名は華陀、五斗米道の旅医者だ。こっちのちっこいのは俺の弟子になる。

それで用件だが、俺の恩人である盧植という人物からあんたの様子を見に来るようにと頼まれた。あんたの友人という事だったが、間違いないか？」

「はあ、良かった、あいつだったか。友人という事で間違いないよ、厄介事を抱えてた私

を地元であるここに隠す提案してくれた恩人でもある。盧植が頼んだというのなら本当だろうね」

安堵の息を聞いた私は安心して、お水を持っていった。

「どーぞー」

「ありがとう。劉備ちゃん、悪いんだけど、お米を炊く準備をしておいてもらえるかな？」

「わかったー」

「出来る範囲で良いからね」

「うん！」

私は台所に行き、お米を釜に入れて、水瓶と釜の間を小さい杓を持って往復し始める。そして居間の会話が再開される。

「用件としては先程言ったように様子見だけだ。子供が生まれそうだという報告以後全く連絡がなく、大層心配だったそうだ」

「無事であれば何で連絡を寄越さないのかという文句を伝えておいてくれ、と頼まれた」

「そうか、連絡を怠った私の尻拭いをさせてしまった訳か。済まなかったね」

「さつき身体の自由がきかないと言っていたからな、なにがしかの理由があったのだろ

うう？」

「まあそうだね、私は死ぬ一歩手前まで行っていたから、もう連絡はしない方が良さだろうと思うてね」

「何と、そんな事が……原因を聞いても？」

「生きる希望が見えた時から改めてあいつには報告しようと思っていた、その手間が省けるから説明するのに否はないんだが……ここで詳細を話すのは少し勘弁してもらいたい、聞かせたくない相手がいる」

「む、何か理由が」

「瑠花さん、この方は五斗米道の上級医師です。その身に触れるだけで事情を察してもらえるはずですよ」

「それもそうか。なら背中とかで構わないかい？」

「ああ、服越しでも大丈夫だ」

「そりや助かるね」

「では失礼する……これは、つまりそういう事か……いやしかし、これほどの規模の治療など……」

ふむ、委細把握した。確かにここでは言いにくい話だ。

しかしこの治療、謙信殿が行われたのか？」

「ええ、数日の猶予もないとすぐさま掛かりました」

「謙信殿はもしや……いや、詮索が過ぎるか。」

謙信殿、恐らく私では身命を賭したとしても劉弘殿を完治まで持つていけたかも分かんらん。恩人の友人を助けてくれた事に礼を言いたい」

「礼は本人から頂いていきますから必要ありません。それにそうかしこまらないでください、きつと貴方なら同じように彼女を救えていたはずです」

「そう言ってくれるか。……とかく俺の用件は終わった。盧植に伝言があれば伝えておくが？」

「ならそうだな。とりあえず心配してくれてありがとう、お前も早く子を産め、ぐらいだろうか」

「それは……ほぼ確実に激怒すると思うぞ？」

「はっ、だからいいのさ。一頻り怒った後に、私らしいと言ってくたびれた笑いをする。いつものやり取りさ」

「ふむ、ならありのままに伝えておこう。では用事も済ませたから俺は中央に戻ろうと思うのだが、謙信殿、一つ頼まれてくれぬか？」

「はい、私の出来る範囲の事であれば」

「俺は報告の為に盧植の元に戻らなければいけない。役目を終えたら再びここに戻って

くるが、その間阿陀を貴方に預けたい。そして医術と薬術をこいつに教えてやって欲しい」

「ああ、そんな事ですか、私は一向に構いませんよ。後進の積極的な育成もまた医聖の教えの一つですしね」

「往復の時間や旅の準備に掛かる時間を諸々含めて二ヶ月ぐらい掛かるが、宜しいか？

勿論それなりの対価は払わせてもらいたい」

「はい、大丈夫ですよ。対価については……私の頼み事を一つ聞いてもらうという事でどうでしょう。とある人の治療をしたいのですが、自分は訳あってその患者に会いに行けないのです。ですので私の代わりにその人物を治療していただきたい」

「受け入れ非常に助かる。俺以外の医者術も学ばせなければと思っていた所でな、謙信殿程の名医ならばこいつの知見と器も大いに広がる事だろう。」

しかし、謙信殿に治療できない患者を俺が治せるだろうか？」

「自分がその患者に会いに行く事が出来ないだけなので、華陀殿の腕前ならば十二分に完治させられるでしょう。時間に関してもそう気にする必要はありません」

「自分に果たせると謙信殿が言われるなら、その条件で頼む。では阿陀、そういう事だ」

「分かりました、精一杯学ばせてもらいます！」

「うん、短い間だけ宜しくね」

話が終わった気配を感じ、私は居間に向かう。

とつくに準備は済んでいたが、私は空気が読めたのだ。

「ひをつける前までできたよー」

「そっか、ありがとう。それじゃあそこからは私がやるよ」

「ん、いつしよにやろう?」

空気を讀んでずつと我慢していたけれど、だけど仲間外れにされているような寂しさを完全に殺せる訳でもない。だからぎゅつと先生の袖を掴んでしまった。

すると急に視界が高くなり、先生の顔が間近にあった。

一瞬の間にだっこされたのだと気付く間もなく、先生は私の目をしっかりと見返してきて、

「それじゃあ手伝ってもらおうかな」

と言つて優しく微笑んだ。これだけでもうね、寂しかった気持ちとかぜーんぶ無くなった。

けどそれだけじゃなくて、台所までできた先生は私を降ろして目線を合わせ、

「ごめんね、ありがとう」

優しい声と頭を撫でる温かい感覚に、私はもうこれ以上なく満たされてしまった。

私の感情を全部分かつて、必要な言葉をかけてくれたのだと心が察した。

それまでであった蟠り、阿陀という少年に先生が取られるのではないか、という不安が洗われた。だってこんなに私の気持ちを知ってくれている人が私を大事にしてくれない筈ないし。

「それじゃあ美味しいご飯、作ろっか」

「うん！」

それから二ヶ月程はごくごく普通の生活だった。

阿陀兄さんは既に完成していた先生宅の居住空間に住む事になり、学び舎部分の改築の手伝いをしながら医術の勉強をしていた。

初日で蟠りが無くなっていったけれど、彼に負けたくなかった私は競うように先生の手伝いを頑張った。

学び舎が完成して授業が始まるようになって、私が一番弟子だと言わんばかりに学んだ。

彼は妹分が出来たと普通に喜んでいて、先生は優しく微笑んでその様子を見ていた。

とても平和な日常が過ぎ、そして期限がやって来た。

本当にあつと言う間だった。私は日々に夢中で、二ヶ月の期限が迫っているという意

識すら皆無だった。

期限の前日、授業の終わりに阿陀兄さんが今までお世話になりましたと畏まって言った時によく思い出したのだから。

「二ヶ月というのは存外に早いなあ。これ、餞別に書いた本と予備の鍼。大事に使ってやってよ」

「はい、ありがとうございます。ずっと、俺、先生の教え、絶対に忘れません。

勉強がこんなに楽しいものなんだと教えてくれた事、辛ければ辛いと言わなきやいけない事、他にも色々な事を教えてもらいました。その一つ一つが俺の宝です。

あくまでも俺が目指す医者とは師匠です。けど先生という見習うべき人が一人増えたのは俺の人生の中でも最上の幸運になると思います。

本当に、今まで有難うございました」

「うん、短い間だったけど、君の面倒を見られて良かった。君は生徒としても医者としても稀有な資質の持ち主だ、これからもその資質を真つ直ぐ伸ばしなさい」

「はー」

そのやり取りを見て、ああ、本当にこの人は行ってしまおうんだと理解した。

私にとっての最初の別れ。感覚としてはまだよく分かっていなかったけれど、何かをしなくちゃと思って私は学び舎を飛び出した。そして家に帰り、先生に渡そうと溜めて

いた漢方類を引つ掴んで学び舎に戻る。

「突然飛び出して行つてどうしたんだよ？ 劉備にもお別れを言おうと思つてたのに」

「これ、あげる！」

「ん、これつて……先生に渡す筈の」

「いいのっ！ せんせーはせんせーでちゃんとお薬もつてるけど、阿陀おにいちちゃんはもつてないでしょ、だからあげる。せんせーにはもつと良いものわたすからだいじよーぶー！」

「そつか、ありがとな。今後病気とか怪我とかしたら、俺に言え。全部無料で治してやるから」

「いらない、せんせーにみてもらうから」

「うっ、そりや先生が傍にいりや俺なんていらないうけどさ、こういう時は素直に受け取るもんだろ」

「知らないもん、それにあたしは阿陀おにいちちゃんよりもずっとながくせんせーに教えてもらえるから、けがもびよーきも自分でなおすし！」

「それは素直に羨ましいんだよな。先生は医学以外の学問にも明るいから、学べる事はいっぱいあるし」

「ふふーん」

「なんでお前が得意気なんだよ。」

まあだからさ、俺の分も賢くなつて、劉備は劉備にしか出来ない事を見つけてろよ」

「うん、分かった」

「お別れは済んだ？ 一応お別れ会として夜はご馳走を用意しようと思つてるから、楽しみにしててね」

「「やったーっ！」」

そしてその翌日、華陀さんが迎えに来て、先生と会話を交わし、阿陀兄さんは去つていった。

短い付き合いだったけれど、彼の真つ直ぐな姿勢は私の中に手本としてしつかり残されるのだった。

これが二つ目の大きな出来事。

次いで三つ目の事件はこの二ヶ月後に起きた。

三十人程のはぐれ盗賊団に村が襲われたのだが、母と先生がいとも簡単に撃退してしまつた。以上。

……本当にこれについては語る事がないのだ。家に隠れてなさいと言われて、数時間後には処理も何もかもが終わつていたのである。

余りに容易く盗賊を蹴散らしてしまつたから勘違いしそうになるが、馬を持ち、武器

を整え、場数を踏み、そこそ腕と頭の良い親玉がいた盗賊だったらしく、普通ならこんな長閑な村で対処できるほど彼らは弱くなかった。

つまり彼らを蹴散らした母がそれだけ強かったという事なのだが……もし先生がおらず、母が完治していなければ？ と考えた時、身が竦む恐怖を感じた。

先生がおらず、母が全快していなければ、この村は盗賊達に乗っ取られて好き放題にされていただろう。悪辣に、辛辣に、村人達は苦しんで死んだ事だろう。

その恐怖に押され、母が村の皆からの賞賛を受けいている隣を抜けて、私は先生に会いに行った。

先生は母を補佐するように陰で偵察や警戒にあたっていたそうだ。それも賞賛される行為なのだが、先生はそれを誇ろうとせず、皆の輪から外れた所に佇んでいた。

何かを考えている素振りの先生の元に走り寄り、私は頭を下げてお礼を言った。

私は何もしていないよ。賊は戦力の分散もさせてなかったから、偵察なんかも結果的に意味がなかったよ。と言っていたが、それを知る事も重要な戦略の一つだと学んでいた。そう先生に反論しようとして、

「もはや運命は形作られているという事か。私はここに、必要なかった」

そうぼつりと、視線を上にして先生が零した言葉に私は凍りつかされた。

その言葉の何処に私が凍りつく部分があったのか、その時の私は知るよしもなかった。

た。

ただ私は先生が必要なかつた等という言葉があまりに悲しくて、先生に抱きつき、そんな事無いと否定の言葉を発しながら泣くことしか出来なかつた。

先生は泣きじやくる私の頭を優しく撫で続けてくれ、私は安心感からそのまま寝てしまった。

しかし今なら分かる。先生の手からは私への気遣いしか感じ取れず、きつと先生の顔は悲しいままだつたんだらうって。

この第三の事件、何事もなく収束した話ではあるが、これこそが私に運命という存在を認識させた最初の一件だつたのだ。

82. 引き伸ばした門出

絶望的と言われていた母の命が救われた、短期間に旅医者が二人来た、村に数十年ぶりの盗賊が襲ってきた。私が村にいた期間で特筆する三つの事件後、私達家族を含め村全体でごくごく平凡な日常を送っていた。

私は毎日を先生の元で学び、先生と母と共に鍛錬をこなし、日が暮れば部屋の灯火を頼りに内職をする。

時折桃の収穫を手伝い、近隣の村に筵や草鞋を売り歩いたり、けが人を治療したりと、変わりない日を過ごしていた。

そんな折、一通の便りが届いた。差出人は盧植先生、内容は入塾のお誘いだった。母の友人である盧植という人がとても高名な人だとは知っていた。

商人の人や見回りしている兵士さんの話を聞くに、帝の側近に意見を求められる程の人物らしい。

その時の私からしたら雲の上の話で、とりあえずすごいって事しか分からなかった。

そしてそんなすごい人から私塾に入らないかと誘われた私は実感のないまま母と先生にどうしようかと相談をした。

母も先生も私塾入りには大賛成といった様子で、私が領けばすぐにでも村を出られてしまふような雰囲気だ、思わず私は大声で待ったをかけた。

そんな反応をした事に驚かれた。

盧植先生は世間的にも有名な人で、その私塾には毎年大勢入塾の希望を申し入れる。そして私は誘われた側なので、審査など無く入れる。

母の古くからの友人で、その人となりも善良だと分かっている。

母のような用心棒か先生のような医者か私が志している以上、外に出て経験を積む事は必須。

この四年で十分に学び、十分に鍛えた。年齢的にはまだ早い、もう村を出て独り立ちが出来る実力は備わっている。

と、ここを出る理由は数あれど、出ない理由が皆無な状況だったので、二人の反応は当然と言えた。

正直に言くと、覚悟がまだ出来ておらず、甘えていた。阿陀兄さんが出ていった時から何も成長していなかった。

だから準備がまだ出来ていない、まだ先生から教わりたい事があると言ひ、駄々をこねたのだ。

そうして私はわがままを受け入れてもらって村を出るのを先延ばしにし、更に二年を

村に留まるのだった。

が、四年という年月が一瞬だったのだ、二年間など瞬きの間よりも短い。

平穏で温かい、先生漬けの日々もとうとう終わりが来た。

もう教える事がないというお墨付きを貰った翌朝に、そろそろ資格試験でも受けに行きます、と最後通牒のような別れを切り出された。

本当は二年前に一度別れを切り出されている。盧植先生からの誘いが来た時、私が決断を下しやすいように、もう十二分に劉備ちゃんを鍛えたし、村の周辺にある街や村に患者は一人もいなくなったからそろそろ旅に戻ろうかと思う、と言われたのだ。

だけれども、私は教わりたい事がまだまだあると言つて無理やり引き止めた。あれもこれもと言つて、しかし二年で本当にもう何も無くなった。

二年引き止めて、それでも別れを思うと悲しかったが、もう打つ手が無い。

二年前から精神的にも成長した私は、好きな人を前にして無様に駄々を捏ねる事も出来なくなっていた。

村の人は告げられた別れに対し、とても穏やかな反応だった。

先生を惜しむ声は多かったが、近隣の村にも医者が常駐してくれるし、恩人の未来を

閉ざすような無理な引き止めなどは一切行われなかった。

一週間後に送別会の日取りが決められ、村人は準備に奔走した。

村の皆が先生から受けた恩は多大だ。

村人を健康にしてくれた、村人を美しくしてくれた、赤子の出生率を上げてくれた、草木の管理方法を教えてくれた、桃の品種改良方法を教えてくれた。他にも数えきれないほどの恩義があった。

だからその分盛大に送別会を開こうと村人一同の考えが一致し、あれもしようこれもしようといろいろ規模が膨れ上がり、一年に一度開かれる豊穰祈願の祭り並の準備となつてしまった。

送別会当日、『これ、私を理由に騒ぎたいだけでしょ』と言って先生は苦笑いをしていった。

勿論それもあるが、基本的には先生への恩返しです。

この恩返しのお祭りに私は参加できなかつた。

私が行ったら、きっと泣いて和やかな雰囲気壊してしまう。

その日は祭り囃子を遠くに聞きながら、ずっとずっと覚悟を固めていた。

早い時間に帰ってきた母にその覚悟をぶち撒ける。

母は私の覚悟を知っていたかのように、笑って受け入れてくれた。

送迎会翌朝、私は先生の家の前に居た。

先生は早朝に出るといふ事で見送りを固辞したらしいが、私は無理やり見送りに来た。

日が昇る前から先生の家の前に陣取って待機する事三十分、空が白み始める頃に先生が出てきた。

荷物を背負い、白い上衣を着込んだ先生は六年前と変わりない姿だったけど、私の視点が高くなった事で時の経過を知る。

私が外に待機している事は分かっていたようで、先生の顔に驚きはない。ただ苦笑だけ浮かべ、おはようと挨拶をくれた。

私もおはようございますと返し、しばし見つめ合う。

先生からは授業の最終日に別れの言葉も何もかもを貰っている。だから先に切り出すべきは無理やりやってきた私からである。

だから先生は黙って待っていてくれる。

だけど私は中々言葉を発することが出来なかった。私の覚悟を拒否されたらどうしようかと頭の中で考えてしまった。

怖くなって喋れない、喋れなくて間が空いてしまうから感情が零れそうになる、感情

が零れそうになるから喋れないと、悪循環が続く。

先生は根気強く黙ってくれている。

ああ、ここに来て先生は先生でいてくれている。そう理解すると深い喜びと、何故か少しの寂しさもこみ上げてきて泣きそうになる。

けれど泣けない。二年間引き止め続けた負い目があるのに、ここで涙を流すのは無様
が過ぎる。

私は意を決して言葉を発した。

「母を救ってくれて、村を良くしてくれて、多くを教えてください、先生が居たから私の人生はとても豊かになりました。

そしてそんな恩人である先生を長らく拘束してしまい、申し訳ありませんでした。

今までいっばい有難うと御免なさいでした」

私はそこで頭を深く下げる。

そして体を起こし、先生の目を見つめ、話す。

「そしてお願いがあります。

先生の旅に私も連れて行って貰いたいです」

私の決意を込めた言葉を聞いて先生は、

「私も瑠花さんも何時切り出してくるのかと思つてたよ。ここ迄ぎりぎりとは思つてな

かった。

「良いよ、断つても無理やり付いて来るだろうしね。二つばかり条件を飲んでもらうけど」

と少し苦みの混じった笑みで答えてくれた。

えっ、と驚くが、当然の事だった。私を私以上に知っている二人だ、こう言い出すなんてどうの昔に知っていたのだろう。

私は気が抜けて膝から崩れ落ちそうになるが、これから旅に出るのだ、ヘタっている時間はない。

「ちよつと物を取ってくるよ。」

劉備ちゃんが来なかつた場合に書き留めた手紙が部屋に置いてあつてね、処分しなくちやいけない」

「えっ、捨てちゃうんですか？ 私貰つていいですか？」

「駄目、別れないのに別れの手紙を渡すとかおかしいだろうに」

そう言つて先生は家に戻つていった。先生が私の為に書き残してくれた手紙は非常に名残惜しいが、先生の言う通りなので仕方がない。

そして数分ほどして先生が表に出てきた。

「お待たせ、じゃあ行くこうか劉備ちゃん」

「はい！ あの、けど、私はいつまで劉備ちゃんなのでしょう？」

「言ったでしょ、私の生徒でいる間はお子様扱いなの」

「ううー」

不満気な顔を隠さないと、先生はわしやわしやと私の頭を強めに撫でる。

子供扱いは気に食わないが、こういう親愛表現が嫌いじゃないので板挟み。

「条件について言わせてもらおうと、期限は半年。これ以上はもう無い。そして期限が来たら盧植の私塾に入ってもらおう」

「半年……ですか？」

「もう教える事はないが、旅の中で実践し経験を積む事は多い。それを教え終わるのが大体半年になる。」

塾に通わせるのは人間関係の構築の練習」

「それは必要ですか？」

「絶対に必要。以前劉備ちゃんの将来を聞いた時、母のような用心棒になるか、私のような先生または医者になりたいと言っていたけど、今も変わらない？」

「はい、誰かを守る立派なお仕事だと思いますから」

「教師や医者になるには近隣都市の役人と顔を繋げておく必要があるし、用心棒なら交渉術が必須だ。」

それらを補うのに塾というのは都合が良い」

「先生が仰るなら、そうなんですな」

「まあ今は私の言う通りになっているだけでいい。旅の中で、塾に通う中で自己を確立していきなさい」

そう言つて先生は優しく頭を撫でてくれた。

私が家に戻ると、全てを悟つたような母がいた。

「塾を卒業したら一度戻つておいで。そしてあんたがしっかりと大人になっていたら、私がこの村に来た理由を話して、家宝を渡す」

と言つて大きな旅行鞆を渡してくれた。

「あんたが裏でこつそり準備してたのは知つてるけど、あんなのじやまだまだ足りないよ。本当に必要なものも含めてこれに詰め替えおいたから、持つてきな」

「お母さん……うん、ありがとう！」

「あんたの夢が叶うかどうかは分からない。けれど失敗して挫けても、あんたには帰つてくる場所がある。それだけは忘れずに、行つてこい」

「うん、行つてきます！」

多く語る事はなかったが、それで全ての思いが伝わった。

ああ、絶対にここに帰ってこよう。胸を張って帰ってくるのだと、固く誓うのだった。

二人の旅はとても面白かったし、全く面白くない物でもあった。

知識と経験は別物であると知れたのは非常に為になったし、先生と二人きりで毎日を過ごすのは気分が高揚した。

けれど世間という物を知り、これ程までに世は荒れているのかと愕然とした。

悪が蔓延り、悲鳴が遠くに聞こえ、罵声が飛び交う。

先生は手の届く範囲でそれらを排除し、救ったが、誰も褒めてはくれなかった。

私はその事を抗議しようと思ったが、先生に黙って首を振られた。

何故だと思い、彼らを観察して気付いた。そんな余裕が無いのだ。

礼を言えば見返りを求められるのが普通だと思っているから、誰も弱みである感謝の言葉を発しないのだ。

ここに来て私は桃花村は綺麗な場所だったのだと、その綺麗な場所を村長や母は懸命に守っていたのだと知った。

世界の荒廃、桃花村の尊さ、母達の努力を知って泣きそうになる。

そうして私は決意した。

この状況は絶対に間違っているから、正さないといけない。

だから私は守るためじゃなく、正すための道を選ぼうと。

半年間、私は先生から学んだ知識を最大限活用して経験を得た。

先生の手解きや補助を受けながら、失敗した時は泥を被ってもらいながら、なりふり構わず成長した。

先生には色々と迷惑をかけたが、私は君の先生だから、と言つて全てを受け入れてくれた。

本当に先生には頭が上がらない。何時か必ず恩をお返ししますから。

そして全てを修め終わった半年後、私は盧植先生の弟子となった。

そこで私は知る。正すべきは民ではなく、人の上に立つて率いる人間達こそなのだと。

83. 運命の出会い

私塾に入った私を待ち受けていたのは小さな政争だった。

盧植先生の私塾はとても有名であり、地方の大豪族から政事や軍事に深く関わる名家名族と、多種多様な人物が各所から来ていた。

特筆すべきは家柄の良い者達だけでなく実力のある者は平民でも入れていた点で、對比としては家柄六に平民四ぐらい。勿論私は平民枠。

家柄枠の者は格付けと取り込みにはかり精を出し、平民枠の皆は誰の派閥につくのかを蝙蝠しながら見ている。大変な割に実入りが少ないやり取りばかりで、しかし流れに乗つとかないと排斥されたりするから非常に面倒だった。

家柄勢は基本的に嫌な奴らで、変に優秀だから手に負えない者が多かった。

盧植先生の言う事は聞くが、裏では先生の陰口すら平気で言い放つ。

まあそれぐらいなら子供らしい兇戯と言えるが、あいつらは平気で家を引つ張り出してくる。

威を借るぐらいなら可愛いもので、親を実際に介入させたりするので手に負えない。親もまともなのは少数で、我が子可愛さで実力行使すら辞さない。

先生が言うには、ここにゐる者の家は多少ましだそうで、もつと酷い連中は実力行使の規模と陰湿さ、問題行為の頻度が違うらしい。権力を握っていられるような奴らつて、いうのは心底腐つてゐると思つた。

とはいえまともな者も少しだがいた。

公孫賛という少女はとても真つ直ぐで優秀であり、さほど時間を要さず真名を交換するまでに仲を深められたのは幸運だつたと言える。

さて、私塾に入つた私が取つた行動はというと、本気を出さず、ひたすら見に回る。

貴方とは丸つきり逆の方策だけど、後ろ盾を持たない私の唯一取れる選択肢がそれだつた。

人を正すには上流の人間達と同じ舞台に立つ必要があるのだから、家柄が取り柄の奴らに謙つて懐に潜り込むという選択肢もあつた。

けれどそれは悪手だと、歴史について学んでいた私は知つていた。

どうせ長くない国の家柄や資格は中途半端に持てばむしろ重荷になるし、対等で無ければ飼ひ殺しか埋没させられそうだとも思つた。だから友と呼べる人物で、いづれ涼州で頭角を現すだろう公孫賛の伝だけで構わないと割り切つた。

だから勉強はそこそこ程度の評価を取り続けた。周囲からは出来れば味方に欲しいが無理にとは言わない、という印象を持つて欲しかつたからだ。そして性格も天然で昼

行灯を気取つて警戒心を解かせ、心の隙間については誑し込み、各人とその家が持つ情報を抜けるだけ抜いた。

その他に熱心にやったのは化粧、音楽といった趣味の分野の流行を調べては身に付け、鍛冶や冶金という専門色の強い技術を見て回つた事か。こればかりは知識だけ持っていては仕方のないものだから、積極的に学んでいく必要があつた。

そうそう。貴方はその時の私を知らないだろうけど、私はその時から貴方の事を注目していたよ。

ああ、絶対にこの人は最後まで立っている人だつてね。

ふふ、少し怖い顔になつてる。けど貴方も言つていたし、私も言つたよね。

私は計算高くして自己中心なの。皆が思っている以上にね。

そんな訳で、私塾に通つた三年間に得たものは公孫贊という友、盧植先生の私塾に通つたという経歴、各地方と中央の情報、体験して深みをました知識群。

成長した物は元々鋭かつた五感への確信と清濁併せのむ器。

人の表情、視線、言葉の選び方、抑揚、汗、匂い、仕草、癖、体温等を読んで人の嘘や悦に入る部分を探つてはこつそりと真実を知る。

私塾の外に出て、私塾の子に宮廷の中に秘密に入れてもらつて、漢という国と人がど

れだけ荒んでいるのかを知った。そこでのやり口と結末の悪辣さ、非道ぶりは筆舌に尽くし難く、それに対処するには同じ道を知らねばならず、また同等の行為を持って報いさせなければいけないと理解した。

特に感動も感慨もなかった卒業式後、私は野に下った。公孫贇から誘われていたけど、自分にはやるべき事があると断つて断つた。

戦乱の世が来るのは理解していたから、私がまずやる事は戦闘の経験を積む事、指揮官の経験を積む事だ。次点で民衆の慰撫と統率に関して経験を積む事、その次に仲間を探す事。

大徳と言われる私にしては意外な選択で顔だね。

私がまず戦闘に重きを置こうと思つたのにはちゃんと理由があるんだ。まあ単純な理由なんだけど、私の人心を練る術は先生も太鼓判を押す程の得意分野だったからだ。若い内に苦手を潰す方が良いだろうって考えたからこそ戦闘を第一に置いた。

そういう訳で野に下って幾つか賊を潰して経験と評価を得、縁と風聞でもって公孫家に客将として迎えられようっていうのが私塾卒業後二年以内の目標だった。

目標が決まっていたので即行動！ と行きかけたかったけれど、まずはちゃんと私塾を出た事と夢を見つけた報告をする為に桃花村に帰る事にした。

そしてその道中で運命の出会いが私を待ち受けていた。

運命。

そう、今になって思い返してみてもね、まるで決められていたかのような出会いだったと思うよ。

桃花村に帰る道半ばのそこそこ大きな都市にて、私は二人組の少女に出会った。

少女達は商人に護衛の依頼はいらなかと声を掛けていた。しかしその見た目から完全に侮られている様子で、素気無く断られ続いていた。見目こそ麗しいが、一人は十代半ば、もう一人は十前後とあまりに幼い。これが扇子片手の春売りであれば引つ切り無しだったろうが、武器片手の護衛希望とあればそりや断られるって話だ。

だが私の目には彼女達が宝石に見えた。

あどけなさを残す少女達だったが、その使い込まれた武器と桁違いの気は既に磨かれた宝石のように私の目には映ったのだ。

私は迷いなく少女達に話しかけた。

「こんにちは。護衛希望らしいけど、私の護衛をしてくれないかな。商人達に比べれば依頼料は低くなっちゃうけど、どうだろ？」

商人達に搦め手無しで売り込みに行っていた様子から、この子達が真っ直ぐでそういった物が苦手なのだろうとあたりをつけ、虚飾無しで頼み込んだ。

「ふわー綺麗なお姉さんなのだー」

「た、確かにこれはすごいな鈴々……と、すまない、少し見惚れてしまった」

「あはは、お世辞でも褒められて喜ばない子っていないし、全然構わないよ。それでどうかな、日程的には半月前後、途中まで商人さんの馬車に乗せてもらって、後の七日間ぐらいは歩きになるかな。ここらへんの護衛料の相場はこれぐらいだから……こんな感じはどう？」

「ふむ、相場的にも妥当な依頼料だとは思うが……良いのか？ 自分達で言うのもなんだが、こんななりだ、もっと低くても否とは言えん。そもそも一人に対して護衛が二人という状況は宜しくないだろう」

「それを自分から言っちゃうんだね。損な性格だと思うけど、私は好きだよ」

そう言つて微笑む。好意を前面に押し出されると弱い人だとすぐに分かったので、実際に試してみる。

隣にいた子がじつとこつちを見てきた、それで勘の鋭い子だと予想を立てる。だが好意は本物なので笑顔は続行しながら交渉する。

「もし貴方達が私を騙そうと、それは私の見る目が無かったという事。命があるなら今

後の勉強とすただけだよ」

これは本心から言っている。私の五感は宮廷で働く百戦錬磨の役人にすら通じると既に実証済みだけでも。

それと私は殺気も闘気も誤魔化しているし、実力を隠せているだろう。だから万が一この子達が襲つてこようと、隙をつければどうにかなるだろうという楽観的な余裕もある。

「愛紗、大丈夫なのだ」

「うむ、鈴々も感じたか。当然ともいえる忠告に予想以上の答えを返してくれ、しかもそこには余裕すら感じる。これは素晴らしき出会いかも知れん」

「あはは、なんだかすごい過大評価を受けちゃってる」

「貴方からの依頼、受けさせてもらいたい。しっかりと目的地まで送り届けよう」

「そっか、ありがとう。私は劉備、道中よろしくね」

「私は関羽、こいつの腕前には自信がある」

「りんり、えつと違って、張飛なのだ！」

「関羽さんに張飛ちゃんね、宜しく。それじゃあ商人の人に連れが増えたって言いに行くな」

「急な増員だが、大丈夫だろうか」

「大丈夫大丈夫、もし駄目だったら乗り合いの馬車か歩いて行くから。それじゃあ行ってくるね」

そうして私は私塾時代に縁を結んだ商人に頼みに行き、快諾をもらうのだった。

馬車が十台、専属の護衛を二十人雇っている結構な商隊だ。なので人が二人増えたぐらいは誤差だと言ってくれた。

荷物の積み下ろしを手伝い、私達三人は荷車部分に乗り込む。

道中は関羽と張飛と適当な話をして時間を潰す。

天気の話、何処から来たのか、好きなもの嫌いなもの、最近の事、そんな当たり障りのない会話。

まあ出会って一日も経っていないのに深くまで立ち入れないし、心地よい距離を探す為の会話だ。

その時、うつらうつらとしていた張飛が勢い良く顔を上げた。

「嫌な予感がするのだ」

そう言っただち上がり、武器を掴む。

「ほう、まさか初日で出るとはな」

彼女達の反応に戸惑うが、しかし私の耳に警笛が聞こえてきた。

それは事前に盗賊の襲来を告げる物として聞き及んでいたもの。

「都市を出てからまだ半日、普通の街道なのに……どれだけ世情が安定してないか分かる話だよ。というか張飛ちゃん、警笛が鳴る前に良く気付いたね」

「何となく分かるのだ、肌がぴりぴりしたり、嫌な匂いがする時は大体危ない何かが迫ってるのだ」

「そっか、すごく頼りになるや」

「えへへ、りんり、違くて、張飛はすごいのだ！ それにしても劉備のお姉さんは偶然だとか、たまたまだとか言わないのか？」

「たまたまだろうとなんだらうと、言い当ててすぐさま準備を整えたんだから、褒めるべき所でしょ？」

そう言つて張飛ちゃんの頭を撫でる。

きっとその見た目から侮られ続け、感情を爆発させようものなら大層恐れられたのだろうなあ。

こんな才能の塊のような子、普通なら調子付いて傲慢になつていてもおかしくないのに、こちらの顔色を怯えたような目で伺うようにしている様を見るのは辛い。

「ありがとなのだ」

「こつちが褒めてるんだから、ありがとうはおかしいよ。それじゃあどうしよつか、私は

一応商隊の護衛も任されてる身なんだよね」

「ならばその身を守るためにも、私達も戦おう。……というよりも、これこそ私達の目的の一つでもある。各地の盗賊なんかを退治していくのに、護衛というのはとても効率が良くてな」

「ああ、そういう事。二人は正義の味方だったんだね」

「そう言われるのはむしろ痒いな。目的の為の手段だから、誇れたものではない」

「謙遜だと思っけど……んーじゃあとりあえず三人で出ようか」

「私は構わないが、劉備殿は剣をどの程度使われるので？」

「鍛錬はしてたけど、私塾にいた時は滅多な事で抜けなかつたからなあ。まあでも大丈夫だよ、一応護衛が出来るかと認められてここにいる訳だし」

「一応、か。ならばまず私達が前に出させてもらおう。劉備殿には下がっててもらい、いざという時に職務を果たしてもらおう形で」

「そうだね、経験豊富そうな二人にまずは先鋒を任せようか。それじゃあ気配が近付いてくるから打って出よう、自慢の腕前を存分に披露して見せて」

「任されよ」

「任されたのだ！」

二人が荷台から飛び出し、そのまま気配のある方向へ凄まじい速さで走っていく。

「……まっすぐ行っちゃったけど、戦力分析とかしないのかな？ まあ並の盗賊程度でどうにか出来る二人じゃないだろうけど、ちよつと心配だなあ」

剣と弓を掴み、外へ出る。そして木箱が一際高く積まれた荷台を見つけ、するりと頂上に登って全体を俯瞰する。

商隊は交戦の構え。まあ今回はかなり大きな商談らしいから、ここで捨てたらどつちにしる首を括らなければいけない。付き合いの長い護衛の人達もそれを知っているから、恐らくぎりぎりまでは粘ってくれるだろう。

「ふむ、これは最悪だね。後味が悪くなりそうな戦いになるなあ」
敵は六十人もおり、しかも馬乗りがその半数はいる。

夜でもなく、森でも何でもない平原の街道で襲ってくる訳がわかった。

まあしかし、弓騎兵つぼいのはいないのが幸い。

「まあ殲滅は簡単だろうけどねー」

敵はそこそこ手慣れている感、統率出来ている感こそあるが、それでも長年護衛を生業にしているこつちの者より個々の熟練度は低いと推測。

つまりは馬さえなんとかすればどうにでもなる感じ。

とはいえ馬をどうにかするのがどれだけ難しいのかという話。古今東西、騎馬をどううまく使うか、または対処できるかが戦争を左右する。

「とはいえあの練度で三十だったら、私一人で正面から対処できるけど」
先生と過ごした半年で殲滅した盗賊団は二十を超える。

もつと大規模で練度の高い奴らも相手にしてきたから、戦力を測る眼も自身の力量の把握も土壇場での胆力も死線の上で鍛えてきた。だからこの程度の状況は平時と変わらず、何を見誤る事もない。

「けどあの二人の力量は知っておきたいよね、弓で適当に援護するかなー」

私は一人で考えをまとめる時、独り言が結構多い。並列思考の一環で、最初は口と目と脳を分離するとやりやすいよという先生からの助言が今も微妙に残っているのだ。

私は木箱の山から降り、弓士がいる馬車の荷台を改造した高台へ準備を整えながら向かう。

先に準備を完了していた弓士に挨拶をし、早速矢を弓弦につがえ、引き絞る。

騎馬兵と歩兵が戦うには統率の取れた精兵が対策を練った上で罠に掛けなければ撃退は難しい。

だがそれはあくまでも正規兵の話。

素人の運用ではそこそこの戦果しか挙げられない……いや、そこそこの戦果を挙げられしてしまうと言った方が良いか。

馬の突撃というのは横一列で行うか、前後の間隔を開けるなどしなければ、

「どれだけ巻き込めるかな」

敵は速度を上げて近付いてくる賊にニヤリと笑いかける。

一団の一部が膝下まである石を避ける為に隊列を微妙に崩した所を狙い撃つ。矢は予測通りの軌道を描き、賊は予想通りの速度と進路で進み、ぶつかつた。

84. 知識と経験

放たれた矢は馬の首元に突き刺さった。

馬が痛みと混乱から前足を跳ね上げ、そのまま暴れだす。

「殺ったのは一頭、躓いたのは二頭、動きを止められたのは四頭。そこそこだね」

躓いたのはもう使い物にならないだろうし、動きを止めたのも馬の興奮を宥めるのに時間がかかるだろう。

再び矢を放ち、一頭削る。しかし相手も警戒していたので他は巻き込めない。三射目、回避行動を取ろうと馬の首元に矢が刺さる。他の弓使い達がもう二頭仕留めた。

「うーん、予想以上に弓で減らせなかった」

馬は速くて筋肉の塊で汗をかく生き物だ。速さは当てにくさに繋がり、筋肉は鎧、汗は鏝を逸らせる。

更に馬は大きいから当てやすいと思われがちだが、正面から見たら存外に狙いにくい。足は細いし、激しく上下するし、胴体は筋肉の塊でしかも曲線を描いている。

上に乗っている盗賊は更に的が小さく、また倒せても馬を直接倒すより混乱が引き起こしにくい。

そういった理由があり矢による有効打を狙うにはかなりの実力者でなければ厳しい。それを補うには数を撃てば良いのだが、護衛に実戦練度の弓使いは私を含めて四人しかないので無理。

とにかく三分の一の馬が戦力外となったが、盗賊達の突撃は止まらない。まあもう止まれる距離じゃないしね。

さて、馬の正面に立つ関羽さんに張飛ちゃん、君達はどうするのか？

馬対策に長槍を構える護衛達、その前に陣取る二人。

密度は減ったとは言え、馬が面となつて突進してくる様は恐ろしいだろうに、二人共飄々としている。

「関雲長、推して参る！」

「張益徳、やつてやるのだ！」

気の籠った声が響く。それだけで一瞬、馬も人も動きが鈍る。

ああ、怖いよね、生き物としての格の違いに気付かされちゃったよね。馬は感覚の鋭い動物だ、その声を聞いた時点で目の前にいた小さな標的が大山に見えただろう。

だがそれを悟っても恐怖で脳は麻痺し、惰性で走り続けるしかない。

さて、馬も乗っているだろう賊も一瞬だけ気を飛ばしたのだ、その隙を突けない彼女達じゃない。

関羽と張飛は瞬時に間合いを詰め、一閃。

それだけで二頭の馬の首が落ちた。

相手も高速で動いてるんだよ、それを横合いから一刀両断つて……いやー非常識だよ
ね。

呆気にとられる敵味方だけど、彼女達の攻撃の手は休んじやいない。

跳躍して馬上と視線を合わせたら関羽は横に一閃、それだけで二人の首が落ちた。

張飛は跳躍後、盗賊を蹴りつけ、他の盗賊にぶつけて馬から落とす。

もうあんな動き見せられたら戦いじやないって分かる、一気に戦意喪失。二人が暴れまわって私が弓で援護してすぐに戦闘終了。敵は馬含め六十で、味方は歩兵ばかりが二十という絶望的な戦力差の中、私達は見事無傷での勝利を飾った訳である。

捕縛され、身包みを剥がされた盗賊を十二人、無傷な馬八頭を前にして商人さんと話し合う。

「討ち漏らしはなく、他は全員野ざらしだ。

「それで商人さん、賊はどうします？」

「うむ……この場で処断したく思っている。馬はありがたく頂いて行こう」

「色々考えてもそれが一番ですよね」

「ちよ、ちよつと待つてくれ！ 命だけは、命だけは助けてくれつ！」

「その言い分は通らないよね」

するりと剣を抜いて護衛の人達と囲みながら近付いていく。

「ちよつと待つてくれ！」

前からではなく、後ろからの声に皆の動きが止まる。

「どうしたの関羽さん？」

「護衛の護衛が差し出がましいようだが、引き渡しという選択肢は無いのだろうか？」

「この辺りで引き渡しが可能なお場所となると君達と合流した都市まで戻るしか無いのだ。連れて戻る労力と危険を考えると実行し難い」

「……そうか」

「報奨金が気になる、わけじゃないみたいだね？」

「違う。その、だな、命乞いをしている者を殺すという状況が、どうにも慣れないだけだ。すまない、ただの甘えだ」

「その甘えはとても尊いものだけど……あー今これを言ってもしょうがないか。

とりあえず甘えと理解してらつて事は、決定に抗いはしないつて事で良いよね？」

「護衛の護衛が意見を言うだけでも非常識だとは理解している」

「うん、なら今回は依頼者の意志を優先させてもらおうよ」

「友の護衛であり、今回の最大功労者である人物の意見を汲みたくはあるが、すまない」
「いや、こちらこそ余計な口を挟んでしまい、申し訳なく思う」

「うん、仕方無い事なのだ。愛紗、行こう」

そうして張飛は消沈した様子の関羽を引つ張り、元いた荷台に戻っていった。

「劉備殿も戻ってゆつくり休んでいてください。本来なら護衛は一応という形であるのに、私の護衛達よりも活躍していただきました。後始末は彼らに任せてあげてください」

「有り難く受けさせてもらいます、が、賊に聞きたい事があるので、少しだけ時間をください」

「ええ、分かりました」

「では失礼して」

情報を得る為に賊に対して幾つか質問を投げかける。

面に出やすく、また駆け引きも下手だったので、知りたい情報はすぐさま抜き出せた。まあそつちの方が互いに手間なく済むので有り難い。

情報の共有のために商人さんに近づく。

「もう宜しいので?」

私は小さく頷き、小声で報告する。

「ええ、十分です。彼らはあの都市と繋がりのある情報収集隊で、今回は私達の情報を持ち帰ろうとしていました。ですが護衛の規模を聞いて自分達で全てを得ようと欲を出したようです。」

私達の情報の持ち帰りを阻止した形ですが、本隊がこの近隣を根城にしているのは間違いないので、とり急ぎ通過しましょう。後、出来れば死体は埋めるか、街道から離れた位置まで移動させてください。

そして一応、身内に裏切り者はいないようですよ」

「盗賊は口も開いてもいないのに、そこまで詳細に情報を得られるとは……やはり劉備殿は読心術でも会得されているのでは？」

「そんな便利な仙術など持ち合わせていませんよ。ただ人の顔色を伺うのが得意なだけです」

「顔色伺いは商人の命綱とも呼べる技ですが、劉備殿を前にしては脱帽せざるを得ませんな。」

なにはともあれ情報感謝致します。ゆっくりお休みを」

「はい、失礼しますね」

私が荷台に戻ると関羽が張飛に膝枕をしながら髪を手櫛で梳いていた。張飛はとて

も安らかな顔をして眠りこけている。

「さつきはお疲れ様、獅子奮迅の活躍だったね」

「劉備殿の正確な援護あってこそだ。しかし剣を佩いているからそちらが本命かと思っ
ていた」

「こつちも弓と同程度には使えるよ」

「その年であれだけの弓術を修めているだけでも凄いのに、同等の剣術を修めていると
は驚きだ」

「あはは、器用貧乏なだけだし、関羽さんと張飛ちゃんを前にしたら自分の技量を誇る気
にはなれないかなー」

「それは少し謙遜が過ぎるのではなからうか。しかし……」

そう言つて関羽は言葉を切り、しばらく逡巡した後、切り出した。

「少し、踏み込んで聞いても良いだろうか？」

「うん、良いよ、私も踏み込むからお相子という事で」

「……劉備殿は私塾を出たばかりと聞いた。ならば何故、そのように朗らかにしてい
れるんだ？」

先程盗賊に襲われたんだ、怖くは無かったのか？ 人の命を奪ったんだ、後悔は無い
のか？ 命乞いを聞いたんだ、迷いは無かったのか？」

「答えは全部一緒かな、怖くも後悔も迷いも何も無かったよ」

「何故、そこまで平然としていられるのかっ」

「ううう」

「関羽さん、張飛ちゃんが起きちやうから声を抑えて。大きく息を吸って吐いてー」

「うっ、す、すまない。すうーはあーすうーはあー」

「落ち着いた？」

「ああ、少し興奮してしまった。改めて伺いたいのだが、劉備殿は私と年も変わらず、私塾を出たばかりで経験も少ないだろうに、何故平然としていられたんだ？」

「そうだね、年は同じだし、私塾に通つてる内に盗賊退治なんて出来ない。けど私塾に通う前に多少の経験があつたんだ」

「どういう事だ？」

「私塾に入る前だからもう三年前になるのか。その頃の私は先生と慕っている人と半年間ぐらい盗賊退治をして回つてたんだよね。期間は短かったけど、大小合わせて数十は潰したかなー。まあ殆どは先生がやつつけた感じだけだ」

「十歳の頃に、だと？ それが本当なら壮絶と言えるが」

「効率的な討伐方法、逃して良い人と逃しても良い場合、数人逃した方が良い場合、誰も討ち漏らしちゃいけない場合、逃して得られる効果と結末、逃がさないで得られる効果

と結末、討伐した後始末とか、色々教えてもらったよ。

私には教えてくれた人がいて、貴方達にはいなかった、それが違い。私は運が良く、貴方達の味わった苦しみを知識としてだけ知っている」

「……」

「貴方の性分ならさつきと似た場面で逃した事もあつたんだらうと予想できる。そしてその結果、貴方達は報復されたか、その行動が原因で何処かの村が壊滅したりしたかもね。

それで次は引き渡したりしたかな。きつと普通に殺すよりも残酷に殺されただろうね」

「……」

「先生から教わった事を並べ立てただけなんだけど、全部当たってたみたいだね。

今回引き渡しを提案しようとしたのは、まさにその方が穩便にいったからじゃない？でもね、今の時代、犯罪者を見せしめにはないって事は後ろ暗い理由があるからだよ。今回の場合、引き渡せば見た目上穩便に行くよ。ケチな報奨金が手渡され『あいつらは奴隸として売り飛ばされる』とか『監視付きで奉仕活動をさせる』とでも言われるのかもね。

けどそんな事にはならない。あいつらの本隊はここら一带の権力者と癒着関係にあ

るってさつき確認できたし、裏で解放されて終わり」

「っー」

「真実を知りたがるだろうから先に話したんだけど……その顔を見るに、話さない方が良かったかな」

「……いや、感謝する。学のない私は自身の行動から学んでいくしかないんだ。どんなに辛かろうが、知らなければ前に進めない」

「そっか、関羽さんは強いんだね」

「強いかどうかはわからん。だが今の世は間違っている、何かせねばならんのだと覚悟を決めて村を出た時、弱さは捨てたつもりだ」

その迷いのない透き通った言葉に、私は心底惚れ込んだ。

「うん、やっぱり貴方達の在り方はとても尊いものだ。ねえ関羽さん、もし良かったら私も世直しの旅に一緒させて貰えないかな？」

「劉備殿の腕前と気性ならば大歓迎だが、良いのだろうか？ 貴方ならもつと良い場所で活躍できそうな気がするが」

「ううん、貴方達じゃないと駄目。貴方達と一緒に遥か高みへ、そして何よりも道を誤らずに行けそうな気がするんだ」

「そうか、そこまで言ってくれるのなら、是非お願いしたい」

「うん、これから仲間って事で！　と言いたいけど、一応契約はちゃんと果たしておこう。」

故郷の村までは依頼者と護衛って形にしておいて、その期間中に互いをちゃんと見極めよう」

「それもそうだな。会ってまだ半日しか経っていないのだから、ここで判断を下すのは性急すぎるか。」

「……まだ会って半日しか経っていないのに、何故だろうか、ずっと長くの時を過ごしてきたような気がしてしまう」

「あはは、私もだよ。」

という訳で張飛ちゃん、そういう事だから」

「はうつ、ば、ばれてたのだ」

張飛が驚いた声を上げて目を開けた。とはいえ起き上がる事はなく、頭は未だに関羽の膝上にあつた。

「ほう、劉備殿はすごいな、私でもこやつ寝たふりは分からないというのに。私が声を荒げた時に起きたのか？」

「えへへ、もう少し前の」

「私が荷台に上がった時に起きたんだよね？」

「うわ、すごいのだ、その通りなのだ！」

「ふふん、私の感覚もやるものだねっ。と、御者の護衛さんが戻ってきたね」

御者の人がこちらに一声掛けてきて、ゆっくり馬車が進み出す。

振動がここで止まる前よりも激しいのは、私の助言を聞き届けてくれたからだろう。

周囲の警戒も強くなるだろうし、少し気を抜いても良いかもしれない。

「それじゃあまた何か起きるまで、会話を楽しもう」

「何かなど起きて欲しくないが、それが起こりやすい世情だからな」

「だねえ。それで会話の種なんだけどね、関羽さんが旅して見て聞いてきた事を聞かせて欲しい。私も私が見て聞いて感じた事を全部話すから」

「そうだな、劉備殿と私達では見てきた物は大きく違うだろうから、情報交換をすればよりこの国を詳細に知れる」

「それと知りたい事は学問でも技術でも何でも聞いて。経験は少ないけど、知識だけは豊富だから。」

仲間になるかどうかの判断はまだ先だけど、志を同じくする人が賢くなつて強くなるのは喜ぶべき事だと思うんだ」

「有り難い。もし依頼が終わって道を違える事になったとしても、この恩は必ず返すと誓おう」

「ふふ、期待してるね。それじゃあ……」

幸いな事にあれから盗賊に襲われる事もなく、私の故郷である桃花村に最も近い村まで私達は長く穏やかに言葉と感情を交える事が出来た。

商人さんとはそこで別れる事になったのだが、その際に護衛料として盗賊から奪った馬を三頭貰う。

護衛料は馬車に乗せていってもらう事としていたので一度は断ったのだが、命の借りとしては安すぎるからこれは前金のような物、貸しはまた徴収しに来てください、と言われたので受け取るしかなかった。

商人は借りを残したままなのを誰よりも何よりも嫌う。そんな商人が借りを残しておいても縁を繋いで置きたいと言ったのだ。私はその期待に最大限応え、大きくならなければいけない。

だからここはふてぶてしく一番良い三頭を貰っておく事にし、商人さんと固く再会の約束を交わして別れたのだった。

その後は馬を手にした事で旅支度を改めて整え、周辺の情報を集め、ご飯を食べる。

「やる事もやったかな」

「ああ、劉備殿の故郷、楽しみだ」

「桃が特産なだけの長閑な村だから期待しないでね」

「ももっ?! それは少し食べたりできるかもかも?」

「あー今の時期だと無理かな。数ヶ月後の収穫時期になら分けてもらおう事も出来ただろうけど」

「そっかー、残念なのだ」

「けど今は花見の時期だから、花びらの雨が見られるかもね」

「ふむ、それは少し楽しみだ」

「うん、楽しみにしてて良いよ。あれは記憶に焼き付くぐらいの見応えがあるからね」

「張飛は花よりも実に興味があるのだ」

「ふふ、まあ張飛ちゃんならそうなるよね。桃は出せないけど、家で精一杯の歓待をさせて貰うから、それで我慢してね」

「えへへ、それは楽しみなのだ!」

「ふふつ、それじゃあそろそろ行こうか」

「うん! また劉備お姉さんのお話を聞かせて欲しいのだ!」

「劉備殿の話は何もかもが為になる。道中また教授願いたい」

「教授と言える程立派なものじゃないけど、そうだね、まだまだ一杯話そう」

そうして私達は私の故郷、桃花村へと馬を走らせるのだった。

85. 変わり続ける変わらぬ故郷

最寄りの村から四日と少し、私の嗅覚が桃の香りを捉えた。

多分もう三十分ほどで着くだろうと関羽さんと張飛ちゃんに伝え、馬の歩みを少し早くする。

出会ってからここ数日、私達は多くの言葉を交わした。

内容の多くを占めたのは彼女達への授業と時代の推移予測と私達の展望だ。

授業の内容は様々。直近で必要なのは字と計算、護衛の旅をするなら礼儀作法も必須だ。

関羽さんは学べる全てに興味を示して貪欲に知識を吸収し、張飛ちゃんは興味のある事はするりと覚える。学がない、武一辺倒だと言っていたが、才能はとても豊かだ。まあ関羽さんは礼儀作法を教えた途端、私に対してとても堅くなってしまうたし、張飛ちゃんは興味の引かないものに関してには触れようとも思わない、と少し懸念する部分もあるが、概ね良い成果を得られたと思う。

ここまでの歩みを振り返って満足をしていると、桃の香りがより強くなる。

そして、

「あつ」

一枚の桃の花弁が私の元までやってきた。

まだ桃園には遠いが、その色のはつきりと映る所までやって来られた。

桃色に染まる視界に私は嬉しくなり、気付けば馬の腹を蹴っていた。

「やあつ」

そのまま飛ばして家屋の近くまでやって来る。

桃園から最も遠いその家屋、桃園から遠い立地にも関わらず妙に立派な家屋、実家の次に長く過ごした……いや物心ついてからというなら私が最も長く過ごした家屋だ。学び舎部分も居住場所もどちらもが思い出深い。

馬を降り、居住用の家の前に立つ。それだけの事なのに私は急激に胸が締め付けられ、涙が出そうになる。

村での思い出や郷愁、大きかった学び舎が思ったよりも小さい事、いつも綺麗にされていた学び舎が少しくたびれている事、何よりも先生との全てが鮮明に思い出される。

もう誰がいる訳でもないだろうに、私はその郷愁に突き動かされて扉を開けようと歩を進めて、耳に微かな音を聞き、目の端に真新しい足跡が残っているのを捉えた。

心臓の鼓動が跳ね上がる。

元々ここは桃園から最も遠く、倉庫としてすら使えないと判断されていた家屋だ。先生が色々と改築していたとはいえ、誰かが住むなどして再利用している可能性は低い。物盗りという可能性も低い。先生が引き上げる際に家具類は村の人に、薬の類は最寄りの医者にて配ったのだ。それに村の方も長閑な気配しかせず、盗賊が村を襲つてゐる訳でもなさそう。

という事は……という事は！

「先生っ?!」

バタンと扉を開け放ち、中に入る。

中には一人の人物が仁王立ちで待ち構えていて、にやりと笑つてこう言った。

「謙信さんじゃなくて残念だったねえ。にしても阿備、五年ぶりに会う実の母に対して何故そこまでがっかりした表情が出来るのか、その所を詳しく教えておくれよ」

「あ、あはは、えつと、ごめんなさいお母様。壮健な様子で何よりでございます」

「ああ、病氣の一つもなく壮健そのものだったよ。

それで馬鹿娘、あんたはどうだったんだい？」

にやりとした顔のまま、しかし母の視線と気配が恐ろしく鋭くなる。私は今試されているのだとすぐさま理解した。宮廷にて権謀術数で殺し合う奴らのような考えを見透かすやり方とは違う、武官特有の違和感を見抜く事に長けた眼が私に向けられている。

それを感じた私は心胆から気を練り直し、母の目を見返して応える。

「多くの人から多くを学び、心身ともに成長したと確信しています」

言葉を尽くして多く語るより、本当にそうだと思える一言に感情を込める。

そして返ってくる沈黙と重圧を、身動きも揺らぎもせずに受け止める。

「うんうん、ふむふむ、なるほどなるほど、見栄えだけ良くなった訳じゃあ無いようだね。気も研ぎ澄まされてるし、動作も仕草も洗練されている。我が恩人と我が友は、大事な娘を上手く育ててくれたようだ。」

我が家では無いのが格好つかないが、あんたの成長と帰郷を誰よりも嬉しく思うよ。

おかえり、桃香」

自身の真名を教えられてから、母に初めて真名で呼んでもらえた。

それは認められた証。本当に真名を呼んで欲しい二人の内一人に呼んでもらえた嬉しさと、母が健康でいてくれた喜び、尊く美しき故郷に帰ってきたのだという実感が生まれてとうとう頬が濡れる。

「ただいま！ お母さん！」

母に抱きつき、母もしつかりと私を受け止めてくれる。

「成長したとは言え、まだまだ甘えん坊だねえ。しかしまあ、今だけは良いかね」

それから一分ほど、私は母に思いつきり甘えるのだった。

外に気配を感じ、そつと母から離れる。

先を急いだ私を追ってきた関羽さんと張飛ちゃんだろう。

「お母さん、今回はとても素敵な二人が付いてきてくれてね、紹介しても良いかな？」

「うん？ お仲間さんかい？」

「きつとそうなる人達」

「そうか、桃香が言うなら大丈夫かね。なら精一杯おもてなししなきゃだね」

「うん。二人共、入ってきて良いよ！」

「む、それでは失礼致します。劉備殿、帰郷が喜ばしいのは分かりますが、護衛である我らの立場も少し考えて頂きたい」

「あはは、ごめんね、ちよつと感情が極まっちゃつて。二人共、この人は私の母で、この桃花村で用心棒をしてるんだ」

「名を劉弘と言う。娘が世話になつたね、感謝するよ」

「いえ、護衛という立場にありながら、逆に世話になる始末でした。三人でいる時には盗賊なども出ませんでしたから、仕事をしたと言つて良いのか分からない有様で……」

「劉備お姉さんな、すつごく賢くていっぱい物を知つてて、道中ぜんぜんつまらなくなかつたのだ！」

「ふふ、そうかい。まあ護衛つてのは何かあった時の備えだからね、何がなくても居てくれるだけで心強いもんさ。ともかく野宿と馬上の生活は堪えただろう、今日はゆつくりと休むと良い」

「泊まる所つてどうしよう？ 家に来てもらう？」

「ここに泊まってもらうさ。謙信さんの住居は来客用の住居として、学び舎部分は村の会議場として再利用させて貰ってるからね。ああ、勿論謙信さんの許可は貰ってるよ」

「そっか、ならそうして貰おっか」

「こんな立派な家を貸して頂けるとは……忝ない」

「かたじけないー」

「ふふつ、なんだか堅い言葉遣いをする子達だねえ」

「本人の希望で礼儀作法を教えたばかりだから、早く馴染ませるために練習してもらってるの。もし気になる所があったらお母さんも指摘してあげて」

「気になる所があったらね。と、勝手に話を進めたけど、ここを使う許しを村長に貰わないとね。桃香、挨拶がてら村長の家に行つてきな。私はここの掃除を終わらせて、家でご馳走を用意しておくよ。」

用事を済ませたら……その子らに村の案内でもしてやりな。そうしたら丁度良い時間になつてるだろうさ」

「うん、そうする。それじゃあ行つてきます！」

「失礼致します」

「行つてくるのだー」

そうして私達三人は村長宅に向かうのだった。

昔と変わらない一切変わらない様子で……いや、今ではあらゆる物が昔よりも小さく見える。村長宅に着いてその感覚が正しいと確信する。昔はあれほど大きく見えた村長宅だが、身体的成長ともっと大きな建築物を知った私にはとても小さく見えてしまふ。

そんななんとも言えない感覚を引き摺りながら、私は伺いの声を上げた。

「劉弘の娘、劉備です。帰郷の挨拶に伺いました」

「はい、少々お待ちくださいー」

返つてきたのは若い女性の声。

しばらく待ち、扉を開けてやってきたのは声の通りの若い綺麗な女性。

「お待たせしましたあ。あら、見たことのない美人さんが三人も」

「お初にお目にかかります。劉弘の娘で劉備と言う者でありまして、本日は帰郷した折

にご挨拶に伺いました」

「これはご丁寧にどうも、私は村長の妻です。劉備さんとは初めましてなんですよね、劉弘さんに娘さんがおられてもうすぐ帰って来られるとは聞いていたので、お会い出来るのを楽しみにしてました」

邪気もなく、笑顔での対応をされるのだが、私は少し不安な表情になる。

きつと村長が代替わりしたんだらうけど、つまりそれは、

「……あつ、違いますよ。前村長様は二年前に息子であり私の夫であるあの人に家督を譲られて、今では桃の新しい育成法をつきつきりで研究をしてらっしゃるんですよ。謙信さんという方にご指導頂いた方法を色々試しているらしいです」

「あ、そうだったんですね、良かったあ。あのそれで、村長は……」

「夫も今の時期はお義父様と付きつきりで実験をしています。夕方には帰って来ると思いますが、呼びに行きましようか？」

「いえ、この後久しぶりの故郷を散策しようと思っていたので、行先で出会った際に挨拶します。しかし入れ違いになる可能性もありますので、帰ってこられた際に一言だけ私の事を話しておいてくださると助かります」

「分かりました」

「では失礼します」

そうして村長宅を離れた私は二人を案内する為に桃園へ向かう。

一応その前に衣服と靴についた付着物を出来るだけ落としておく。花園や果樹園に入る際の常識として叩き込まれた事だ。

「何というか、圧巻ですね」

「すつごいのだ、甘い匂いがあるのにお腹が鳴らないぐらいすつごいきれいなのだ」

「改めて見てもとても綺麗。うん、やっぱり、すごく綺麗なんだよ。ああ本当に、何て……何て尊いんだろう」

遠くに見えていた時から綺麗だとは思っていた。

けれど中に入り、四方八方に澄んだ桃色の美しい空間に入り込んだ時の感動は途方も無い。

世界に私達だけしかいないのではとか、この世界の外までもが綺麗になったのではとか、そんな錯覚を感じてしまう程の非現実感。

私は涙を流す。ここに来てから涙の大安売りだが、これはもう仕方のない事なのだ。郷愁だとか、想い出の想起だとか、そういう個人的な物もある。

だがこの素晴らしき光景が村の皆の努力の結晶であり、奇跡の積み重ねで生まれていると、今の私は知っている。その尊さに、世界との乖離に、涙が流れてしまう。

「劉備殿？」

「大丈夫か劉備お姉ちゃん！ お腹痛いのか?!」

「ううん、大丈夫、大丈夫だよ。ただ、覚悟と決意を据えただけ」

私は涙を流しながら、固く誓った。

「それはどういう……ん、誰か来ますね」

「ああ、この気配は村長さんとその息子さん、じゃなかったや、代替わりしたんだもんね。

……関羽さん、張飛ちゃん、明日、私の話を聞いて欲しい。一緒に旅をする仲間として、同じ志を持つ同士として、私の理想と決意を知ってほしい」

「……分かりました。その時には私も私の全てを話しましょう」

「二人がするなら張飛もするのだ！ 何を話せばいいか分かんないけど、とにかく頑張るのだっ！」

「うん、それじゃあ今日の所は村長さんに話をして、お母さんの手料理を食べて宴会だね！」

「ご飯っ！ 目一杯ご飯食べれるっ?!」

「あーうん、何分いきなりの帰郷だったから、張飛ちゃんに本気出されると食料が足りないかもしれない。お母さんも見た目の容量分で作ってるだろうし……けど旅の時よりは豪勢だろうし、お母さんの料理は美味しいからそこに期待しておいて！」

「わかったのだっ」

そして張飛ちゃんはるるんで家に帰っていきこうとしてたけど、挨拶がまだだからと引き止めた。

その後は村長達に挨拶をして、一帯の案内を続ける。そして念のために道中で食べられる野草や野生動物を探しながら歩く。しかし野草は山ほど取れど、母が巡回しているであろう場所に動物の類が出てくる筈もなく、全体の収穫としては今ひとつ。

女の子三人だと考えれば十二分、けれど張飛ちゃんの胃袋の許容量からすれば心許ない。

張飛ちゃんはその小さい体の何処に入るのかと言う程に食べる。盗賊と戦った後の食事は私の三倍の量を食べていた気がする。とはいっても平常時なら私や関羽さんと同程度か少し多いぐらいなのだが……まあ身長差体重差を考えればそれもまたすごい量なんだけど。

ともかくそんな脅威の食欲と胃袋を持つ張飛ちゃんがここ最近粗食しか食べておらず、先程宴会などと私が口走ったものだから、それはもう楽しみにしてお腹を鳴らしていらつしやる。一応前置きはしておいたが、きつと食事の量を見たらがっかりするに違いない。

とはいえ出せるものには限りがあるのだから、もし満足出来ないようなら謝ろうと思いつつ家に帰るのだった。

「お母さんただいまー」

「おかえり、準備は大方できてるよ。仕上げはあんたも手伝いな」

「うん、それじゃあ二人は居間で待ってて」

「いえ、私も手伝います。劉備殿だけに負担をかける訳には……」

「護衛の仕事は村に着いた時点で終了、今の二人はお客さんなんだから、ゆつくりしてて。それに家族で料理を作るのも久しぶりだから、少し楽しませて欲しいかな」

「それも、そうですね。では居間でゆつたりと待たせてもらいます」

「居間には先生から貰った本が沢山置いてあるから、暇ならそれで潰すと良いかも。字は読めたよね？」

「はい、簡単な物を少しだけです」

「なら絵本を張飛ちゃんに読み聞かせて上げると良いかな。関羽さんの勉強になるし、張飛ちゃんの暇も潰せるし」

「ご助言感謝します」

「あはは、さすがに家の中までやるのは疲れない？」

「慣らさなければ、というのもありますが、なんでしよう、劉備殿にはこうして接したい。貴方は知れば知るほど魅力的で、もつと距離を縮めたいと心の底から思うのです。け

れど格好つきたいという訳でもないのに、こうして礼儀を弁えたいとも思うのです。距離を縮めたいのに距離を置くような事をしたいとも思う自分の気持ちが不思議でならないのですが……」

「あはは、面と向かつて魅力的と言われると照れるね。まあそれじゃあ関羽さんのやりたいようにやっつて、関羽さんの気持ちに無理やり干渉するのも変な話だしね」

「愛紗！　これ、これが良いのだ！」

張飛ちゃんは早速本を物色しており、気に入った物を見つけて関羽さんに催促している。

「分かった、ん、白き者の物語か。お前はこればかりだな」

「間違いなく格好いいのだ！　愛紗も好きでしょ？　私達の目指す姿だなんて格好つけていつも言ってたのだ」

「確かにそう思っているが、格好つけて言っただけおらん！」

そんな賑やかなやり取りを後ろに聞いて笑みをこぼしつつ、私は母の手伝いに行くのだった。

86. 家宝相続

宴会、という程豪勢ではなかったが、とても楽しい食事会は穏やかな内に終わった。張飛ちゃんの食欲は母の想定を大きく上回ったが、運良く熊の燻製肉の備蓄が大量にあり、それを出してくれて事なきを得たのだ。

何故燻製肉なんてあるのかと聞いてみると、何でも先生から桃の木を使った燻製を教えてもらい、最近ようやく桃と並んで出せる品が安定して作れるようになってきたのだ。そうだ。

今では桃と一緒に献上しているらしく、宮廷内の人にも好評でここを以前よりも眼にかけてくれるようになったと村長が喜んでいたらしい。

そしてこの燻製熊肉は失敗作。熊肉は献上品としては敬遠されてしまったらしく、作つたは良いが処分に困ってしまい、村中に大量に配られたのだと言う。

この肉は駄目だったが、試行錯誤を怠らない村の人達の努力には頭が下がる。

しかし今回の宴会で母の取り分である物は殆どが無くなってしまつて申し訳ない限り。娘が初めて連れてきた客人なのだから、丁重にもてなせて何よりだつたとお母さんは言っていたが、私の目には少し残念に思っているのが見て取れた。

母の為に買ってきていたお土産があるので、夜にでも渡して機嫌を直してもらおう。

そして夕食も終わり、後は寝るだけとなったので関羽さんと張飛ちゃんと別れる。

二人は先生の家に泊まるので送っていこうとしたが、さすがに迷うことも危険も無いだろうと固辞された。

連日野宿だったので『今日はゆっくり休んでね、明日の昼頃に迎えに行くよ』と言って夕食の残りを包んで持っていってもらおう。

関羽さんは何から何までありますがどうぞいまずと恐縮した様子だったが、張飛ちゃん目が爛々と輝いていた。なので『朝食用だから今日食べたらメツ、だよ』と笑顔で釘を指しておく。ブンブンと頭を上下する張飛ちゃんが可愛かった。

さて、母と二人きりの空間になる。

昼の段階では色々急だったので素直な甘えが出してしまつたが、今はそうはいかない。
い。

取り敢えず淹れてくれたお茶を二人でゆっくりと飲む。

成長した姿を見せたいという欲や見栄があるのに、しかし心が落ち着き、深く安らいでいるのを感じる。両立し難い感情なのに、とても自然だ。気の置けない友人とも違う

心の有り様に、ああ、これが家族なのかと納得する。

一杯目のお茶が無くなったのを頃合いに、都から持ってきたお土産を渡す。

外套として使える美しくも丈夫な羽織と母が使いそうな刃物の詰め合わせだ。

「いっちょ前の手土産を持つてくるじゃないか。

へえ、しかもかなりの逸品ばかり。感性も目利きも伝手もしっかり育つてるって訳かい」

嬉しそうな声に一安心。実はこの二つ、私塾時代にお世話になった人達のものなのだ。母の目利きに適つて二つの意味で嬉しい。

母はお土産をしばし眺め、うんうんと頷く。

「あんたは、桃香は本当に一端の大人になったんだねえ。

後は……桃香、剣を振りな」

「えっ、立ち会うの?」

「いいや、そこに立つて剣を一振りするだけでいい」

母は居間の中央に置かれた座卓をずらずと端に寄せ、そのまま壁に背を預けた。

「一振り、ね。分かった」

それ以上は何も言わず、何も聞かず、私は立て掛けておいた剣を手にとつて居間の中央に陣取つた。

天井の高さと周囲の広さを確認する。そして踏み込み、抜き打ちから横払い。

母に良い所を見せようだとかの気負いもなく、自身の技量を見せようと限界に挑んだ訳でもないごく普通の、戦場で命を預けるに足る一撃を放った。

「……非才の剣だね」

「あはは、うん、先生にもそう言われた」

残念ではあるが、才能が無いのはもう認めて受け入れている。

その事実を受け入れた上で腕を磨いた。そして今見せた一流程度の剣が私の限界点間近だった。

後はほんの少し残った伸びしろを極めるだけだ。まあその僅かな伸びしろを鍛えるのには今まで積んだ経験の数倍の努力が必要になるのだろうけど。

だがその紙一枚の技量差で生死を分かť事もあるのだから、磨き続けるに越した事はない。

「ふふつ、先生は正直者だね。本当、教師の鑑だ。

元より二流、極めて一流の腕前。私と一緒に凡夫の腕前。

けれどその若さでよくぞここまで高めたもんだよ」

元より一流の人間には敵わないと言われても、母と同じだと言われて少しだけ嬉しくなつてしまった。私はどれだけ母親が好きなのだ。

と、少し脱線してしまった。

実際の所、母は凡夫の腕前と言ったが、私や母程度の腕前でも数百万数千円が生きる
広大な大陸において千人といたない腕前なのは間違いない。

だがこれから台頭してくる人間と渡り合うには圧倒的に足りないというだけの話。

しかし私の真骨頂は多彩さである、剣だけで勝負するつもりは毛頭ない。

「桃香の足りない所を補ってくれそんな良い仲間も見つけたようだし、あんたに関して心配する所はもうないんだね」

「うん、武の腕前も人格もこれ以上無いってぐらいで、私と出会ってくれて本当に感謝だよ」

逆に言うならば彼女達にとつても幸運だったに違いない。

私を過大評価している訳ではなく、現状上流にいるような人間の多くは悪質で悪辣なのだ。そうなければ生きていけない世の中になってしまっている。

彼女達は今まで年齢で侮られ、他に頼るものがないという困窮している人間からの要請でしかその実力を見せてこなかった。そして彼女達も弱き人々の為にならと喜んで盗賊を狩り、満足を得ていた。

だからこそ生き抜いてこられたのだ。

だがこれからはその美しい容貌に磨きが掛かり、強さにも拍車がかかる年齢になる。

何かしたい、何が出来るだろうかと模索のために伸ばされていた手が、何かを掴み取るうとする為の手になる。

そうした意識と環境の変化は彼女達に活躍の場を与えるだろう、そして彼女達ならば機会を物にしてすぐさま目の目を見る。

そうなれば様々な人間が彼女達を求めるとは違くない。人に認められるというのは勿論良い面もあるが、意識的に活用しなければ悪い面の方がむしろ多い。数日間一緒に過ごしてきて分かるが、純真なあの子達が悪意の手だけを見抜き、対策を打ち、巧みに躲していくというのは不可能だろう。

だから私という好意だけを抱き、彼女達を助けようと思う人間と出会ったのは幸運だったと言つて良いだろう。

関羽さんは勤勉で真面目、張飛ちゃんは感と勘が鋭いので、何かきつかけがあればこちらの方面でも頼もしくなる可能性はあるので、無用の心配なのかも知れないが。

と、意識が関係のない方向へ飛んでしまった。修正。

剣を鞘に仕舞い、壁に立てかける。

座卓を中央に戻し、再び母と向かい合つて座る。

「ならこれで最後だ。桃香、あんたはこれからの世をどう生きる？」

母はこれまでと違ってとても優しい目をしている。

どんな答えであろうと受け入れる、そんな懐の深さを感じさせる母親の目。

「お母さんの子供に生まれて、この村で皆に育ててもらって、先生に出会って、私塾に通わせてもらった。」

これがどれだけ幸福な事なのか、外に出て初めて知ったんだ。外はとても怖くて、厳しくて、辛い事ばかりで満ちていたから、この村の人達の努力、この村の奇跡のような在り方がとても尊いと感じたんだ」

「そうか、それを知れたなら外に出した甲斐があつたつてもんだ」

「それでね、私はこの恵まれた環境を大陸に広げたいと思ってるの。この村のような光景を大陸の普遍としたい」

「……あんだ、それは」

「最初はね、この周囲一帯の亭長、頑張って県令ぐらいになれたら良いな—と思ってたんだ。けど私塾在籍中にこの国全体の惨状を見て、それじゃ駄目だと思つた。頑張れば県令じゃない、州牧かそれに並ぶ官吏になつて国政に影響を及ぼせる立場にならなきゃやつて奮起して、色々と準備をしてきた。」

でもね、帰郷してあの桃園を見て、それも考え直した。

私は大陸の頂点に行くよ。

この奇跡の光景を見て知っているからこそ、私は誰よりも前に、上に行かなきゃならない。

私自身は非才ゆえに道半ばで倒れるかもしれないけど、頂点に向かうからこそ出会う人達に私の理想に触れて貰いたいんだ。仲間だろうが敵だろうが関係なく、私の想いはきつと皆に影響を与えられる筈だから」

「夢に溺れる理想家の妄言、という訳じゃあないんだね？」

「うん、目標の方向転換をしたばかりだから理想が先立ってるけど、勝算はちゃんとあるよ。」

元より州牧になる為にある程度の実力行使を想定して準備していたから、その延長線上なんだ。遥かに厳しく険しい道のみになるだろうけどね」

「そうかい、なら私からあーだこーだと言う必要もないね。」

それじゃあちよつと待つてな」

そう言つて母は居間の脇に向かい、置いてあつた柵の上に乗し、そして天井板の一部を外して一振りの剣を取り出した。自分が長く過ごしてきた部屋にそんな隠し場所があるとは露知らずで驚いたが、取り出してきた剣を見て驚き……いやそんな生半可な感情じゃないな。毛穴という毛穴が開くような感覚がした。

母は私の対面に座り、剣を私との間に置いて話し始めた。

「これからの話は詳しく話すだけで枷になるような厄介話だから大まかにしか話さないよ。私はね、劉という姓に恥じない程度のお家柄に生まれたお嬢さんだったのさ。

家は派閥争いや裏切りやら、まあ良くある理由で没落した。最後は炎上する家を背景に、これともう一つの家宝を父母に託された一人ぼっちの私が出た。

その後は友人だった盧植の伝を辿り、彼女の故郷であるここに匿われる形で過ごし、良人と出会ってお前を産んだ。まあ基本的に運は悪かったが、最愛の人とお前に出会えたのだからとんとん、という所か。

と、少し筋が逸れたな。

この剣は宝剣靖王伝家と呼ばれていてね、剣も鞘も裝飾がとても美しく、また歴史的価値も高い、そして剣としても有用で切れ味と頑丈さはどんな名刀にも劣らない。

これを桃香、立派になったあんたに譲る。

父母から受け継いだ物ではあるが、家宝を持つような家格では無くなってしまったから、どう使おうがもはや自由だ。売り払って金にするなり、身に付けて使うなり、好きにすると良い」

「……その話を聞いて売り払うなんて出来ないと思うし、何より、これは私の剣だって見た瞬間に思ったの。

すごく不思議な感覚でね、なんだろう、懐かしい、のかな。桃園を見た時に似た郷愁

を感じたんだ。

あはは、初めて見るのに、変な事言ってるね」

「……いいや、謙信さんの言つてた事が本当だったと確信したよ。お前は本当の英雄になるのかも知れない」

「先生？ 英雄？ なんの事？ 詳しく聞かせて！」

「ああ、がつついちやつて、さつきまでの淑女然とした雰囲気はどこへやら」

「あつ、こほん。あはは、先生に關してはまだ駄目みたい」

「まあ、あの人は特別だろうさ。で、謙信さんの話だったね。」

謙信さんと桃香が村を出る前日にあの人と色々話したのさ」

母は少し遠い目をして話した。

「村にいる間に命を助けて貰つたお礼をしなきゃと思つてたけど、あの人に手助けなんてむしろ邪魔になるし、細々と食糧援助、内職で作つた物品を渡すぐらいで命の借りには到底足りない。そして借りを返す所か娘に超高等教育まで施してくれて借りは増す一方。旅立ちの前日になつてもとうとう借りの一割も返せずじまいと来たもんだ。」

焦りに焦つた私は何か無いかと考えながら家中のものをひっくり返して探して、そうしてようやく村に来てからはずっと隠してた二つの家宝を思い出したのさ。過去を忘れたい、決別しようと思つてたからすっかり忘れてたんだね。

一つはこの宝剣、もう一つは剣と対になると言われた人物が描かれた銅板。

もし家宝が相応しくない人物の手元に渡った時、何故だか相応しい人物の元に二つの家宝は辿り着く、なんて逸話も思い出してね。だったらこれは私の命を偶然救ってくれた謙信さんに渡すべきだと思つたのさ。

だから二つ差し出して『我が家の家宝です、どちらかを謙信さんに渡します。残つた方を桃香にやります』と、桃香が家宝を受け継ぐに相応しく育っているなら、片割れを持つ謙信さんと引き合う事もあるだろうと考えて、そんな提案をした訳さ。

そうしたら謙信さんがつうと涙を流してね、いやああれには慌てたねえ。何か失礼なことをしてかしてしまつたのかと震えながら理由を聞いたんだ。

するとね、謙信さんはその剣と銅板の製作者である蕭何様の子孫で、言い伝えられていた物が無事だったのが嬉しかったから泣いたんだと言うじゃないか。

いきなりの信じ難い話にぼかんとしたよ。謙信さんは呆けた私の目の前で剣の柄部分をいじり始めて、刀身を取つちまつたのさ。継承した私ですら知らない解体方法にも混乱しっぱなしだったんだけど、その刃の茎にね、愛する劉邦様へってしつかりあつたのさ。

そこで謙信さんの話は本物だったのだと気付かされた。

運命を感じる話だろう？ 製作者の子孫が所持者の子孫にこんな寒村で出会つたん

だ。家宝の存在を思い出して並べた私を褒めてやりたかったよ。

そして謙信さんは言ったのさ『私は銅板を頂きます、剣は劉備ちゃんに上げて下さい。きっと彼女はその剣を振るうに相応しい女性になって帰ってくるはずですから』ってね。

さつき桃香が大言壮語、誇大妄想と言われても可笑しくないような事を言った時に驚いてたけど、私は夢の大きさに驚いたんじゃないよ。あんたがそれをやり遂げる姿を幻視したからこそ驚いたんだ。

桃香、この剣とこの剣を振るつた人に負けない大人物になりな。そうすればこの剣はあなたの愛おしい先生に引き合わせてくれる筈さ」

母の言葉を受け、私は目の前に置かれた剣を手を取った。

何故か身体が震えだす、しかし気にせず柄に手を伸ばし、掴んだ。

柄を握ると怖いぐらいに手に馴染むと気付かされ、そのまま導かれるように刀身を引き出していった。

冴え渡る白刃に背筋がゾクリと震える。

そして導かれるように上段に構える。

「お母さん、ちよつと離れてて」

母が部屋の隅に寄った事を確認して、振り下ろした。

技量も覚悟も何も変わらない一刀、けれどそれで、

「ちよつとだけ受け入れてくれたかな？」

劍の輝きが少しだけ柔らかくなり、背筋の震えが少しだけ収まった気がした。

受け入れてくれたけれど、まだまだ完全に認めた訳じゃないと言われているような気がする。

劍に意志なんて無いんだろうけど、私は確かにそう感じた。

刀身を鞘に収め、壁に背を預けてこつちを見ていた母に言う。

「我が家の家宝、私、桃香がしかと受け取らせて頂きました」

「ああ、これで私の肩の荷の殆どが降りちまったよ」

「家の歴史とか全然知らないし、再興とかに興味もない薄情者なんだけど、良いのかな？」

「十数年も家宝を腐らせてた私よりもマシだろうさ。ともかくこれで家長の役目は果たしたね。」

後はのんびり、家族水入らずで気楽に喋ろうじゃないか」

「うん！ 私ね、お母さんに話したい事がいっぱいあるんだよ！ 大人になったからこ

そ聞きたい話もあるの、お父さんとお母さんの話とか沢山！」

「ふふ、今日は何でも話してやるさ。桃香、酒は飲めるようになったのかい？」

二人で端に寄せていたちやぶ台を再び真ん中に置きなおす。

母がどこからかお酒を持ち出してきたのでチビチビと飲みつつ、私達親子は過去の話や恋愛なんかの下らない話をして夜を楽しむのだった。

87. 桃花村の価値

翌日の朝、昨日豪快に呑んでいたツケを処理中の母には休んでいてもらい、私は卵と薬草の雑炊を作っていた。

母が私の前で体調不良を見せたのは遙か昔、先生が来る以前の一年間だけだ。

先生が母を治してからはすぐさま快方に向かったし、先生がいる間は村の人含めて体調が悪い人なんて出なかったから、なんか久しぶりの姿だった。

決して良い思い出ではないが、今ではそんな事もあったね、と笑い合える話になっている。

「お母さん、出来たよー」

「んーありがとう、あー情けない姿を見せちまつてるねえ」

「あはは、むしろこうしていると色々実感できて嬉しいよ」

厳格な母がハメを外すほどに嬉しかったのだとか、強い母が見せる弱さにちよつとどきどきしたりだとか、同じ立ち位置だけど以前とは状況の重さが違うだとか、色々と感じるものがあった。

「あとちよつとで動けるようになるだろうから、そうしたら昼ご飯の用意をしよう」

「うん、分かった」

母の体調が戻るまで少しだけ看病し、その後は昼ご飯の材料の調達と仕込みを行う。笑いが絶えないこの状況に深い喜びと感謝を抱いて団欒を楽しむ。

この温かさを抱いたまま、私は仲間となるだろう少女達の元に向かうのだった。

元先生宅の扉を叩くとすぐさま反応が返ってきた。

「劉備殿、お待ちしておりました」

「おにぎりの匂いがするのだ！ お漬物の匂いとお肉の匂いも！」

「すごいね、おにぎりの具まで当てちゃうなんて。という事で、お昼ご飯持ってきたから一緒に食べよ」

「何から何まで有難うございます」

「良いの良いの、気にしないで。お米はいっぱいあったから、沢山作ってきたよ。遠慮しないでがんがん食べてね」

「やったのだっ！」

家上がり、食卓に風呂敷を広げる。

私の手の大きさを二十個程作った。私三個、関羽さん六個、張飛ちゃん十個ぐらいの計算。

お茶を淹れ、歓談しながらおにぎりを食べる。

張飛ちゃんはおにぎりを両手に持つてぱくぱくと食べている。その様子がとても愛らしく、すぐに食べ終えた私はずっと張飛ちゃんを見ながら微笑んでいる。

私は今、遠い昔に先生が私に向けてくれていた表情をしているに違いない。

「劉備殿は、年下の子の世話などをされていたのでしょいか？」

「え、してないよ。旅に出るまでこの村では最年少だったし、私塾に入った時も同年代か年上の人とばかり過ごしていたけど」

「そうなのですか、それにしても張飛を見る目が柔らかかったような気がしますし、年下の扱いに長けておられるような気がするのですが」

「私がいかに小さい子と触れ合っていた訳じゃないけど、小さい子と触れ合う時の見本になる人がいたから、その人のおかげかな」

「ほう、そのような人物が……私塾時代にお世話になった学者先生ですか？」

「違うよ。盧植先生にも沢山の事を教わったけど、それでも謙信先生には敵わない」

「謙信先生？」

「私の根幹になった人だよ。難病を抱えていた母を癒やし、村の人を癒やし、私を含めた村の人達にいっぱいものを教えてくれた人。」

人の病気から木の病気まで何でも見抜いて治療して、お肉の燻製方法なんかの料理の

知識を教えてください、桃の品種改良方法を手伝ってください、数学から医学からあらゆる学問を教えてください、馬術から剣術から呪術まで教えてくださいれたんだ」

「……その方は仙人様か何かですか？」

「あはは、多分そうだと思う。十年弱付き合ってもらってたけど、ものすごい美貌は一切衰えず、盗賊を百人切っても真つ白な衣には汚れもつかなかった。なんというか、説明すると現実味のない人になっちゃうんだけど」

「すごいのだっ、やっぱり白い服を着てる人は違うな！」

「ふむ、確かに話を聞くとお伽噺に出てくるような人物です」

「そだねー」

張飛ちゃんと関羽さんの言葉を曖昧に濁す。

都で様々な伝手を頼って先生について調べてみたが……恐らく先生は……。

「どうされました？」

「あはは、何でもないよ……というか張飛ちゃん食べ終わるの早いね。けどちゃんと嘯んで食べてるのは偉いぞー」

「飲み込んで食べちゃうと勿体無いからちゃんと味わって食べる、これすつごく大事」

「あはは、味わってもいるんだね。何にしろ良く嘯むのは良い事だよ、摂取効率が全然違うしね」

「せしゅこーりつ？ うん、良く分かんないけど良い事なら良かったのだっ！」

「うん、良いものは良い、今はその理解で十分。それじゃあ張飛ちゃんも食べ終わったし、ちよつと腹ごなしに行こうか」

「あれ、そつちの風呂敷に入つてる桃の匂いの何かは食べないの？」

「あはは、本当に鼻が良いなあ。これはもうちよつと待つてね」

「うん、分かつたのだー」

「張飛ちゃんは素直で良い子だね。それじゃあ昨日の場所……よりも少し奥まで行こうか」

「分かりました」

そうして私は二人を連れ立って花咲き誇る桃園へと向かうのだった。

均一に並んだ桃の木の森をしばらく進み、止まる。ここは私が生まれ直したとても大事な場所だ。

桃の花びらを絨毯にして座り、風呂敷を広げる。露わになる顔ぐらいの大きさの徳利と小さな盃。

徳利の木栓を抜き、中身を桃の木から削つて作られた盃に注ぐ。

途端に周囲を満たす花よりも濃い桃の匂いが鼻孔をくすぐる。

「桃の果実酒なんだけど、二人は飲めるかな？」

「私は問題ありません」

「飲む！ それ絶対美味しいやつだから絶対に飲む！」

「あはは、お母さんに内緒で持ってきた秘蔵の奴だから、バレないようにちよつとずつね」

「それは、大丈夫なのですか？」

「大丈夫大丈夫、昨日結構飲んでやられてたから、お酒はしばらく見たくないだろうしね。それにこれについても知ってもらいたい事があるし」

「何かの意図があるんですね。ならば一献」

「頂きますなのだ！」

「私も改めて」

そう言つて三人同時にお酒を呷る。

口に入れた瞬間に桃の香りと甘さが口に広がり鼻を抜け、喉元を過ぎる液体はかつと身体を温める。

「これは、すごいですね。私の持っていた酒の印象が真逆に変わる品です」

「甘くて良い匂いがかつとしてふわつとするのだあ、もういっぱい！」

「良いけど、次の一杯で終わりだよ？」

「分かったのだー」

そして張飛ちゃんはずちびと舐めるようにお酒を飲みだす。

その愛くるしい姿を微笑ましく見ていると、少し強めの風が吹いた。

すると桃の花びらが風に舞い、視界を桃色の優しい色が覆い尽くした。

桃の木、桃の花びら、澄み渡る青い空、見目麗しき無垢な少女達。

目に映る全てが美しい。

「昨日も思いましたが、この美しさはあまりに圧倒的で眩い。桃源郷とはこのような場所を指すのでしょうか」

関羽さんが少し惚けたようにそう言った。

「私もそう思う。これ以上綺麗な景色は大陸中を探してもそうはないんじゃないかな」

一言呟き、景色に見入る。無言の空間となるが、そこにはとても温かな空気が流れている。

景色と雰囲気と堪能してしばらくの事、張飛ちゃんが舐めていた果実酒が無くなり、顔を上げたと思ったらそのまま仰向けになって倒れてしまった。どうやら酒精にあてられてしまったらしい。

「世界が回るのだー」

「阿呆、駄目だと思っただらすぐやめないか」

「途中からぐらぐらしてたけど、美味しくて止まらなかつたのだ。全部は美味しいあれが悪いのです」

「あはは、二杯目をあげちゃった私が悪いね。お腹もいっぱいだし、良い気候だし、そのまま寝ちやつた方が良くないかな？」

「んーん、寝ない、寝ちやうの怖い。昨日よりもっと怖いのだ……」

「寝るのが怖い？ 昨日何かあつたの？」

関羽さんが少し表情を曇らせ、ええ、と続けた。

「こやつは昨日、ここ最近の全てが夢幻なのではないかと怖がつて一人で眠れなかつたのですよ。」

今はお酒も入り、夢と現の境がより曖昧になつてしまつたのでしよう」

「えつと、ごめん、ちよつとよく分かんないや」

「ええ、劉備殿には分からない感覚でしょうな。私は……少し分かるのです。劉備殿との出会いから今の時まで、全てが眩しくて優し過ぎる。まるで現実味がありません。」

ここは死後の世界で何かの間違いで天国に来たとか、貴方が天女で気まぐれを起こして私達を桃源郷に連れて来たのだと言われても信じてしまいそうです」

冗談のような言葉だが、雰囲気は異様に重かつた。

何故だろうと少し考え、思い至る。

少女達の境遇からすれば、今の状況は恵まれすぎているのかも知れない。

尋常ならざる使い手とは言え年端もいかない少女二人が旅をするのにはそれ相応の理由がある。

そして旅に出た後も苦勞しただろう。旅など熟練者たる先生と共にした経験しかない私には想像がつかないような事も多々あつたに違いない。

しかし今はどうだ。この国をどうにかしたいという同志と出会えて、学問を教えてくれる人がいて、しっかりとご飯を食べられて、家に呼ばれて歓迎されて、桃源郷のような光景の只中にいる。それはきつと二人の人生で数少ない経験であるのは間違いない。

「張飛ちゃん、ちよつと頭を拝借」

私は張飛ちゃんの倒れ込んだ方へ移動し、彼女の頭を私の膝上に乗せる。

「柔らかいのだー」

「ふふ、大丈夫、これは夢じゃないよ」

「そうなのかなーなんか余計にふわふわしちゃってるのだ」

張飛ちゃんの頭を撫でながら、私の決意を話そうと思つた。

「私の夢と決意を聞いて欲しい。少し長くて退屈かもしれないけど、私の熱に触れて欲しい」

そして私は話し始めた。

「外に出て情報に触れれば触れるだけ、この世の中の惨状を知った。

天は恵みを忘れ、地は血と涙で荒れ果て、人は僅かな実りを奪い合って生きている、そんな辛く厳しい世の中が今の普通なんだって。

ほんと、この村との差異に驚かされっぱなしだったよ。中でも人の差については驚きを通り越して怖くなった。

天候不順は村にいても何となく知ってたし、土壤が荒れてしまっているのも問題にされてた、けれど村の人達に悪い人なんていなかったから。

村を出て謙信先生に都まで連れて行って貰う間の半年間、盗賊を討伐して回っている間に愕然とした。

人っていうのはここまで落ちられるのかってね。けどね、それは仕方のない事なんだって思いもした。誰かから奪わないと生きられないんだ、貧しさが人を貶めるんだって。

でもそれですら間違った感覚だった。

盧植先生は有名な人で、その門下生っていうのは結構な名声を得られたの。だからそこに通う人の大半は豪族や名家の間ばかりだったんだ。その中で私は庶民だったけど、盧植先生自ら塾に招いた人物として一目置かれててね、人材確保の為に格上の人が家に招いたりしてくれたんだ。

あつ、盧植先生が私を塾に入れてくれた理由は私の母親と知り合ひだったからで、私がつんでもなく優秀だったからという訳じゃないから、その所よろしくね。

と、少しずれちやつた。

まあ半分は豪華な家で後ろ盾たる家の力を見せる為、豪勢な晩餐と一緒に頂いたりしただけだったんだけど、数件終わつてる所があつてね。いやー人食い虎に少女を食べさせている場面を見ながら食事を取らされるとは思わなかつたなあ。しかも私以外の顧客が笑いながら食事をしてるのが本当に終わつてた。

そこで人が落ちるのは貧しさだけじゃないんだと知つたよ。

だから私はこの世界は変わらなきやいけないって強く思つて、私自身は心技体を改めて鍛え直して、後は信頼できる人を選びすぐつてはそこから人脈を切り開いて準備を整えた。私が少しでも世界を変えられるように、州牧やそれに比する官位を得られるようになってね」

「それが、貴方の決意ですか？」

関羽さんの真摯な言葉と眼が私にぶつかつてくる。

私はそれをしっかりと受け止めて言う。

「官位と領地を得、法をもって民を変える。その為には権力も武力も必要で、貴方達も良ければそれに力添えして欲しい」

「……それは」

「と思つてただけ、その決意も変わっちゃった！」

「えっ」

「この村に帰つてきて、初心を忘れてたつて気付いた。

皆の弛まぬ努力と献身によつてここは悪意を遠ざけている、それが外に出て一番感動した事だつたと思ひ出したんだ。

ここの桃は年を経る毎に美味しくなつてゐるの。品種改良を続け、美味しくかつ他よりも安定した収穫が出来る。

桃の他にも付加価値の高い物を作つてる。桃を香木として使つた畜産牛の燻製とか、酒精を強めたり熟成させた桃の果実酒を付けたりと常に工夫もしてゐる。

一度村を出た人達は私財を払つて外との伝手を繋いで情報を集めてるし、ここに来る商人や衛兵の口止め料を払つたりもしてゐる。

この場所が割れないように街道近くにはわざわざ隣村を作つて貰つて、そこでここら周辺には何も無いとか盗賊が根城にしていると欺瞞情報を流したりもしてゐる。

自分達がやれる最高の行動をして、それを認めさせる努力も欠かさない。村人同士を繋ぐのはこの村を皆で守ろうつていう基本的な思ひ。

行動、交渉、信頼、たつたそれだけを突き詰めた結果が目の中の最高の桃園。

そして私はこの村に誇りを持つてゐる。それを思い出したからこそ目標を変えた。

私の中にあるこの理想を皆に知つて貰う。それがこの素晴らしい風景と、この風景を作つてゐる仕組みを知つてゐる私がやらなきゃいけない事なんだ。

私は理想を語つて理想の国の基礎を作る。その道中には味方となる人も敵となる人もいるだろうけど、あらゆる枠組みに関係なく、皆には私の理想に触れて変わつてもらふ。そして私が途中で倒れたとしても、誰かが私の理想の一欠片でも形にしてくれる事を願うんだ。

長々と話したけれど、この桃園を大陸の普遍の光景とする、要約すればそれが私の決意と目標、嘘偽りなき本心だよ」

傲慢で独善的な宣言で、しかも熱がこもり過ぎて上手く言葉に出来ていない部分もある。

けれどこれは私の本心だ。この本心を貫けるなら、私は決して屈折する事も屈服する事もないと断言できる。

後はこの心に二人がどう反応するかだ。

押し付けがましいと言われるだろうか、意味がわからないと言われるだろうか、ついて行けないと言われるだろうか。

少し怖いけど、彼女達の言葉を待つ。

88. 桃園の誓い

私の言葉を受け、関羽さんは少し遠い目をしながら言葉を紡ぐ。

「私と張飛は幼馴染でして、貧しく活気のない寒村に生まれ、大人も子供も今日一日を生き抜くのに精一杯な風景の中で共に育ちました。

大変ではありませんでしたが、幸運な事に私と張飛は腕力に秀でており、幼い頃から小さい猪程度なら仕留める事が出来たので多少生活は楽でした。将来は腕を頼りに軍人になり、立身出世をするのだと思います。

成長して猛獣すら狩れるようになったある時、私と張飛が大きな熊を仕留め、村に還元した際に最年長のお婆さんに言われたのです。ああ、まるであの時の白き衣の人のようだと。

興味を引かれた張飛が詳しく聞きたいと頼むと、お婆さんはお伽噺になつてゐる白き衣の人の話をしてくれました。そしてその話をした上で、白き衣の人は実際にいて私の小さい頃にこの村を助けてくれたのだと言いました。罾や動物の習性を教えて狩猟の効率を上げてくれて、薬草毒草の見分け方を教えてくれて、農耕の方法を教えてくれたと。その御蔭でなんとか今までを生き延びてこられたのだとお婆さんは微笑みながら

教えてくれました。

そこでようやく私達は色々な事を知ったのです。

生き抜くのに精一杯なこの村が寒村の中ではむしろ恵まれていた事、外がもつと酷い惨状にある事、人々を救う気高き人が居る事等です。

そこで私達は決意しました。軍人になるよりも素晴らしい事がある、だったらそれをしてしようじゃないかと。

しかし……」

昔を懐かしむ目が閉じられ、眉間にしわが寄る。

「思い立ったが吉日と私と張飛は勸善懲惡の為、志を同じくする者と出会う為に旅へ出ました。

しばらくは困っている人を助ける為に盗賊狩りなどをして満足を得ていましたが、次第にそれだけでは駄目だと気付かされました。個人が振るう武力だけで解決できる事の少なさに気付いたのです。

目の前の暴力以外には本当に無力で、病気の者を前にしても、貧しい者を前にしても、私達は手を差し伸べる事すら出来ない、希望を見せる事が出来ない。更にはそんな弱者たる人々から私達は盗賊討伐の報酬を貰わなければいけないがなかった。私達も人間だ、食べられなければ死んでしまう。盗賊を倒して継続的な被害が無くなったのだからマシだ

ろうと思ひ込み、自身の不甲斐なさに蓋をして日々を過ごしていました。

何時か聞いた白き衣の人は村の人が食べていけるだけの何かを無償で授けていたのに、私達は対価を得て限られた事をするのみ。何かが違うと思ひ、しかし他に何か出来るの旅を続けていました」

苦悩の表情は消え、再び開いた目には希望が見えた。

「そんなある日の事、私達とはある噂話を耳にしました。天の御遣いの降臨の噂です。

私はこれだ、と思いました。学のない私でも天の御遣いに仕えれば何かを変える事が出来るのではないか、少なくとも天の御遣いが良い存在であれば、救いを求める者に天の御遣いの庇護を勧める事が出来ると考えました。だからここ数ヶ月は盗賊討伐ではなく、護衛を主にして各地を巡って天の御遣いの噂を集めていました」

そして目線が私と合う。

「そんな中で、貴方に出会いました。

初めはただただ綺麗な人だと思ひ、羨望と嫉妬を抱きました。

話してもまだ負の感情はありましたが、それよりも凄いなだと単純な憧憬が強くなりました。

盗賊を射抜いた後に手を見せて触らせてもらった時、その手に積んだ修練を想つて頭が下がりました。

貴方の故郷に辿り着いた時、私は再び羨望と嫉妬を抱きました。

そして今、貴方の理想を知った。羨望と嫉妬は畏敬に変わり、確信を得ました。

私が仕えるべきは天の御遣いではない。この大陸を深く知り、辿り着くべき未来を見せってくれた貴方こそ、私が、大陸の民草が仕えるべき人だ」

無垢で真摯な目だった。

ああ、この目があるなら、私は道を誤る事もないだろう。

そう思わせる芯と熱が彼女にはあつた。

そして視線を下にやれば、とても穏やかな寝顔を晒した張飛ちゃんの顔があつた。

「あらら、退屈だったかな」

「退屈とは違うでしょう、安心したのだと思います」

「安心?」

「貴方の熱が本物だったから、今ここが本物の世界だと理解し、温かさに任せて寝てしまったのだと思います。」

難しい話は分からないけど、本質を理解する子です。ちゃんと伝わっているはずですよ」

「そっか、私の理想に触れてこうして安らいでくれているなら、私も本望だよ」

張飛ちゃんの頭を撫でる。

くすぐったそうにしながらも、手から彼女が逃げる事はなかった。

「昨日は眠れなかつたつて言つてたから、このまま寝かせてあげよう。」

「あつ、関羽さんもどう？ 張飛ちゃんがちっちゃいからぎりぎりだけど二人いけると
思う」

「え、あ、いえ、自分は」

「張飛ちゃんが眠れないと言つた時、関羽さんは張飛ちゃんの気持ち分かるつて言つた。」

「という事は関羽さんも深く眠れなかつたんでしょ？ なら遠慮せずにごぞ」

「あう、その、では、失礼します……」

「うんうん、素直で宜しい」

張飛ちゃんの頭の位置を調整し、関羽さんの頭も太ももに乗せる。

心地より重みが増した事で微笑みが強くなる。

関羽さんは恥ずかしさから頬を赤らめつつ、こちらをちらちらと盗み見る。視線がぶつかる度にもぞもぞと頭が動く。

私は関羽さんの綺麗な髪を撫でつつ、先程の続きを話す。

「関羽さんは私が仕えるべき人間だつて言つてくれたけど、それはまだ保留にして欲しいんだ。」

私は私がまだまだ未熟だと知っているし、私よりも優秀で五常に通じ、和をもって統べられる人がいたらその人にこそ率いて欲しいとも思っている」

「……劉備殿以上の人物はそうおられない気がします」

「噂とか人伝の情報ではあるけど、私よりも凄い人なんてそこら中にいるよ。少なくとも全てにおいて敵わない存在を私は見て触れて知ってる訳で、私を上には置くっていうのは早計だと思う」

「全てにおいて敵わないというのは謙信先生と呼ばれている人の事ですか?」

「そう、だから主とか先生とか呼ばれるのもまだ重たいんだよね。私はそう呼ばれるに相応しい人物には至ってないんだから。」

「というかね、二人とも、これから出会うであろう同志とも、私は対等でありたいんだ」
「現状からして同等ではありません。様々な事を教えて貰っていますし、目指す場所も示して貰いました、これで対等だ同等だと言うのは恥以外のなにものでもないでしょう。それに関係性をはっきりしておかなければ、いざという時に対応が遅れてしまします」

「それもそうなんだけどね、これがまた難しい所なんだ。」

誰かが先頭に立って皆を引っ張って、そしてその誰かが頂点へ至って王政へ。昔つから変わらない下克上の基本形だよね。

けどそれじゃあただ歴史をなぞるだけになる。成し遂げた瞬間だけが平和になり、数十年、数百年後にまた今と同じ状況に陥る。

それじゃあ駄目だからこそ、私はここを理想として掲げたんだよ。平等ではないけど公平公正に近く、一つの目標に一致団結して挑み、困難も皆で助け合つて解決を模索し、富は頑張りに相応しく分配されるこの村の在り方を国の普遍としなきゃ、世界は永遠に良くならない」

「……劉備殿の理想はあまりに高い。私は半分も理解できませんでした、けれど」
「けれど？」

「心の奥に火が灯ったとしか思えないほどに熱い。貴方の理想の礎になれると考えると、無意識に手をぎゅっとしてしまうのです」

「ふふっ、そう言つてくれると嬉しいな。ならこれから一緒に頑張ろうね」

「はい、劉備殿！ ……あの、二つほどお願いがあるのですが、宜しいでしょうか？」
「ん、何？」

「一つは貴方と真名を交わしたいと言う事」

「うん、喜んでだよ！ 張飛ちゃんが起きたら皆でしょう！」

「有難うございます。二つ目は……私と義姉妹の関係を結んでいただきたいのです」

「えっ、関羽さんみたいな綺麗な姉妹が出来るのは嬉しいけど、またなんで姉妹？」

「私達の関係性をはつきりとさせたいからです。先程も申した通り私達と劉備殿は実質対等ではありませんが、対等であるべきだと劉備殿はおっしゃいます。

それに対する折衷案であるとか、貴方の特別になりたいとか、そのあれやこれやをまとめてですね、貴方を姉とすれば解決と言いますか……。

貴方が姉であれば私達が貴方に物を教わり、行動を示唆してくれるのも自然。そんな賢い姉を守って支えるのも妹の役目として自然。この村の在り方の中にあつても自然。何も矛盾しないでしょう？」

「まさかの姉と来たか。二人の素敵な妹が出来るなんて無条件で受け入れちゃうのに、ご丁寧な理由まで作ってくれちゃったら歯止めがきかないよ？」

「私のような至らぬ妹で宜しければ、是非なつて頂きたいです」
関羽さんの綺麗な瞳が私の心を射抜く。

「なら今日この時から、私は貴方の義姉になる」
「今日この時から、私は貴方の義妹となります」

二人でしばし見つめ合い、穏やかに笑い合う。

心の奥、魂の部分で繋がったかのような感覚。

理想を掲げた熱とは違う温かさが身体の中に灯った気がした。

「それじゃあ早速妹を可愛がっちゃおう！」

近くで見ると色々気付いちやうなー関羽さんまつげ長いよね！ 肌きめ細かい！
髪ツヤツヤ！ というか全体的に綺麗！」

「あのつ、えつと、急過ぎませんか?!

それにそこまで褒められるものでは……髪も肌も先日頂いた物を使わせてもらったお蔭ですから」

「薬効成分を含んだ石鹸だけど、元が綺麗じゃないとさすがにここまでの艶は出ないかなー。ああ、これでお化粧を覚えれば絶世の美人さんだつ」

「私など劉備殿に比べれば十人並みです」

「いやー関羽さんに比べられると厳しいかなー。お化粧してこれだもん、お化粧取ったらお察しつて奴だよ」

「化粧は元が良くなければ映えない物ではないのですか?」

「それがそうでもないんだよねえ、お化粧次第で本当に二十歳は若返つて見えたりするんだよねえ」

「二十も?! それは、恐ろしい話ですね」

「だねえ、あそこまでいつちやうと呪いの類」

そう言つて二人が吹き出す。

「なんでしよう、こうして穏やかな会話をするのは随分と久しぶりな気がします」

「私は昨日母親としたばかりだけど、私塾時代には出来なかつたなあ」

そんなこんなで、私達の会話は張飛ちゃんが起き出すまで華やかに続くのだった。

「んがっ、世界を黒仮面の好きにはさせないのだっ！」

良く分からない寝言を言つて張飛ちゃんが飛び起きた。

あまりの勢いに私も関羽さんも驚き、皆起き上がる。

張飛ちゃんが恐ろしいほどに気を研ぎすませている。寝惚けて襲いかかられると大事になりそうなので私達二人も気を張る。

そして敵も居ないので臨戦態勢で向かい合う三人が出来上がった。

「武器つ、武器はどこなのだ！」

「……つて、ここはどこなのだ？」

ようやく張飛ちゃんが夢を見て呆けていたのだと気付いてくれ、緊迫した空気が弛緩する。

「ここは桃花村。張飛ちゃんはさつき桃のお酒を飲んで寝ちやつてたんだよ」

「あれ、そうだったつけ。んあーそうだったような？」

「まだ寝惚けてるのか？」

「なんか夢がすつごく現実で、だからまだ頭がこんがらがってるのだ」

「すごく鮮明で本物みたいだったんだね、明晰夢ってやつだ。ねえ、どんな夢を見たの？」

「……忘れちゃったのだ、何かすごく大事な場面で、いっぱい強い人がいた気がする」
「そつか、大事な場面で強い人がいっぱいいる光景か。もしかして国を統一する時の場面だったのかも知れないね」

「そうかもしれないのだ。ああー覚えてないの、何か悔しいのだ！」

「ふむ、お前が寝惚けるのは珍しくないが、そこまで拘るのは珍しいな。」

何にしろ、驚いたぞ」

「あう、ごめんなさい」

「まあ何事も無かったからいいじゃない。それじゃあ張飛ちゃんも起きたし、今まで話してた事を要約して伝えるね」

そして関羽さんと話し合った事を伝えると、張飛ちゃんは飛び跳ねて喜んだ。

何よりも私が姉となる事を喜んでくれて、すぐに受け入れてくれた。

故郷が綺麗なままだった、母に真名を呼ばれて認められた、深く母を知った、決意を新たにしたら、姉妹であり同志が出来た。何をとつても素晴らしき慶事であり、何か特別な事がしたくなった私は二人に聞いてみた。

「今日という日は本当に特別な日だから、何かやりたいんだ。二人はしたい事ある？」

「確かに今日という祝すべき日に何もしないというのは些か勿体無いですね」

「同じご飯を食べて、一緒に寝て、互いを思いやれば家族同然だつてばつちやが言つた。だからもう二人は家族なのだ。けど何かするなら大歓迎なのだつ！」

「あはは、家族つて特別な事をしてなる訳じゃないって言われちゃうと、確かにそうなんだけどね。」

「だつたら盛大に宣言と乾杯だけしよつか。私達は家族だつて大陸中に響くぐらい高らかに謳おう」

私は三つの盃に桃の果実酒を注ぎ、その内一つを取つて立ち上がる。

「私、劉元徳、真名を桃香が宣誓する。」

私は私の理想を全大陸に広げる！　そして姉妹の姉として折れず曲がらず、姉として受け入れてくれた今の自分を忘れずに飛躍する！」

次いで関羽さんが盃を持って立ち上がる。

「私、関雲長、真名を愛紗が宣誓する。」

私は私の夢を託した人を全力で守る！　そして姉として毅然と、妹として凜然と、文武を極めて全てにおいて二人を支えよう！」

最後に張飛ちゃんが盃を持って立ち上がる。

「鈴々は張益徳、真名を鈴々が大宣誓するのだ！」

鈴々は皆が幸せになる世の中にしたいのだ！　そこで大陸一番の妹になって、お姉ちゃん達を守って、お姉ちゃん達の敵をばったばったと薙ぎ倒すのだっ！」

「我ら三人、生まれた時は違えども！」「姉妹の契りを結んだ今この時から心は同じ！」
「死ぬ時は三人一緒なのだ！」

三人で盃を掲げ、

「乾杯！」

89. 旧友との再会

桃花村で姉妹の契りを結んだ私達はその翌日に村を出、私が立てていた計画に沿って行動を開始した。

盗賊を狩り、人を癒やし、糧をもたらす。分かりやすい徳を積んで正しき勇名を馳せる事に尽力し、結果二年で個人が持てる最上の風聞を得る事に成功する。

白き衣の意志を継ぐ三姉妹、それが二年の内に手に入れた私達の評価である。

民との繋がりだけでなく、商人との繋がりも強め、役人は下級官吏の正義感の強そうな人だけ繋がりを持ち、薄く広く人脈を広げた。

妹二人の教育もかなり進み、鈴々ちやんが苦手としていた礼儀作法と算術は商人見習いが修める程度に上達し、愛紗ちやんは清濁併せ呑む器が育った。私が一番懸念していた部分の潰しが出来て嬉しい。

二年の間に私が旅を通してやりたい事は大体済ませる事が出来た、さあ、そろそろ白蓮ちゃんの所へ行つて一旗あげよう。

と思つていた矢先、天の御遣い降臨の噂が大陸を駆け抜けた。

想定外、ではない。むしろ想定に組み込んだ上で私達は動いていた。

あまりに噂が広がりすぎて、噂の中心が洛陽と長安という国の中心地である事から非常に確度の高い情報だと推測できていたからだ。

本当に天からやって来たとは思わない、地獄に舞い降りた救世主という演出をされた人物が政治の中心にいる誰かに担ぎ上げられたのだろう。天子を交代させ、自分の都合の良いように事を進めたい急進派の十常侍あたりが発端だと私は考える。

ともかくこれで世はかき乱されるように動く。

まずは天の御遣い降臨で皇帝の権威は失墜に歯止めが効かなくなり、途方も無い規模の一揆が起こる。

そこで私達がどう動くか、どこまで動けるかで今後の展開がおおよそ決まってしまう。

理想を理想で終わらせないため、この大波は確実に乗り切らねばいけない。

更なる成長を求めた私達は旧友公孫賛の所へと向かっていた。

自由と自己責任の元に活動していた私達だが、次は組織の一部としての動き方と働き方を覚えようと考えたのだ。

白蓮ちゃんの元に辿り着いた私達は歓待を受けた。

幸い勇名は届いていたようで、客将として結構な高待遇で迎えらようと確約をくれ

た。

そして客将として一人先立って迎えているので、顔合わせをしておこうという話になった。

「あつ、あの人白い服着てるのだった」

「あいつは桃香達よりも先に客将として招いている趙雲だ。槍術では大陸随一……と呼ばれる予定の女だそうだ」

「ご紹介に与った趙雲と言う者だ。白馬長史殿は自称扱いされているが、これでも大陸を広く渡り歩いた知見から出した結論。槍働き出来る舞台にさえ上がればすぐさま実力に名が追いつく腕前だとは、貴殿達なら分かるだろう？」

「んー確かに気力もふいんきもあるし経験も豊富そうなのだ。だけど」

「ふむ？ だけど、なんだ？」

「あつ、思った事をすぐ口に出すなって桃香お姉ちゃんに注意されてたんだった。

白い人、さっきのは気にしないで欲しいのだ」

「いやいやいやいや、そこまで言われたら気になるだろう！ あと私は趙雲だ！」

「趙雲、子供の稚気にそう目くじらを立てるな。まだ自己紹介すら終わっていないんだぞ」

「鈴々ちゃん、そう中途半端な言い方だと気になって当然だよ。あとふいんきじゃなく

て雰囲気だから。

趙雲さんごめんなさい、多分大した事じゃないと思うから流しちやってください。

改めて自己紹介させてもらいます。私は劉備、白蓮ちゃんとは私塾の同期でその頃から親しくさせてもらってました。ここでは貴方の方が先輩だから、ご指導ご鞭撻をお願いします」

「私は関羽、劉備の妹です。戦働きならば任せて頂きたい」

「りんり、違って。わたしは張飛！ 三人姉妹の末っ子！ 身体動かす事なら何でも来いなのだっ！」

「ふむ、元気があつて宜しいですな。しかし、姉妹にしてはあまり似ておられないのだな？」

「義理の、だから似てないのは仕方ないですよ」

「そうであったか。しかし、貴殿が長姉とは……ああいや、決して侮っている訳ではないのだ。」

白き衣の継承者の噂と劉備殿の容姿が重ならなくてな」

「あはは、関羽ちゃんの方が長姉っぽいとはよく言われますから、どこかで三姉妹の特徴がごっちゃになっているんでしょうね」

「白き衣の意志を継ぐ三姉妹だっけか。桃香も大層な肩書を付けられるようになったん

だなあ。私塾時代は目立つのを嫌がってた節があったのに」

「私塾時代は目立つと消される可能性もあったしねえ」

「それもそうだな。あの変態達の魔の手を本当に上手くすり抜けてたよ」

「白蓮ちゃんも影に日向に色々助けてくれたからだよ、本当に感謝してる。」

けど白き衣の意思を継ぐ三姉妹っていうのはちよつと重荷なんだよね。お伽噺程の活躍は出来てないから、もつと精進しないといけないっていつも思ってる。

早く風聞に恥じない力をつけて、目標に近付きたい」

「州牧を目指してるんだつたな、だったら白き衣の噂は良い追い風になるよ」

「それなんだけどね、今は少し目標を変えたんだ」

「へえ、聞かせてもらっても良いか？」

「うん、ひたすらに上へ前へ。時代の最先端で全てを相手取ろうかと思ってる」

「随分過激な事を言うようになったな、その根本も変わったか？」

「人々の安寧を願う気持ちには変わらない。けどそうするには私が上に立つ人間になって私自身の手で変えなきゃ、っていう考え方を変えたんだ。」

これから群雄割拠の時代になる。長い長い闘いの時が続いて、いつか時代の覇者が生まれる。

私はその覇者になる為に動く。勝者になれなかったとしても、勝ち残った人間と最後

まで戦い抜いて、私の理想に触れて、感化させる。そして私の考えが少しでも未来に反映されるなら、野に屍を晒そうが一向に構わない」

「……くくくつ、お前、本気だとそんな顔をするのか。良いな、そその表情をするじゃないか」

「……伯珪殿、子飼いにするには器量が宜しすぎるようだが」

「良いさ、私塾時代から私の所で経験を積ませて欲しいと頼まれていた。私を踏み台にして桃香が高く飛べるのなら、桃香の志と理想の共感者として、また友としても本望だ。何より私自身に益が無い訳ではないしな。

それにだ、器量が良すぎるのはお前もだよ。分不相応を扱うのも慣れたもんさ」

「その内容の言葉を自信満々で言い放てるのが白蓮ちゃんの格好良い所だよね」

「なんだよ、褒めたって何も……いや、褒めてんのか？」

「伯珪殿にとつては至上の褒め言葉だと思うよ。して、桃香殿にはどのような役回りをして頂くので？」

「そうだな、三人はまとめて行動させた方が良いか？」

「私と関羽ちゃんは一人で大丈夫だけど、出来れば張飛ちゃんが何かする時はどつちかが付いていたいかな。

軍略も算術もそれなりに出来るようになったけど、加減がまだ分かってないんだよ

ね」

「へえ、ちっこいのに色々な分野に手を出してるんだな。とりあえず分かった、張飛は基本的に関羽と共に軍事関係に関わってもらって、関羽一人で軍を回せる時は桃香と共に内政に関わってもらおう」

「うん、それでお願ひ」

「二応念を押ししておくぞ。あくまで三人は客将扱いだ、ここでは私が上になる。だが拒否権は残すから、無理なら無理だと言ってくれ。」

事前について離れると言ってしっかりと引き継ぎをしてくれるなら強引に引き止めはしない。

前提としてこの二つ先に約束しておく。

そしてこちらから頼むのは一つ。

ここで得る経験分は貢献してくれ」

「白蓮ちゃん優しいよね。普通はいきなり客将扱いしてくれないし、いつ離れても大丈夫だなんて他では有り得ないって分かってる。だから全力で学ばせてもらうし、最大限の手助けをするよ」

「そうか、なら安心だな。それじゃあ線引も済んだし、早速働く場所の紹介と面通しをやってしまおう。それが終わったら今日は歓迎の宴だな」

「宴?! 料理いっぱい出る?!」

「おうともさ! 連絡を受けた時に厨房の奴らに手配しておいたから、結構凝った料理も出してくれると思うぞ!」

「やったーっ! 伯珪のお姉さんありがとうなのだ!」

「……白蓮ちゃん、張飛ちゃんへのお給金は少なくていいからね」

「はあ? 何言ってるんだ、ちゃんと払う物は」

「良いから。その分ちゃんと食べさせてあげて」

「お、おう、分かったよ」

そして一年弱を勤め、今まさに門出の時を迎えた。

黄巾賊討伐の头号令が発されたのだ。

此処こそが漢という国の歴史の変換点である。

それを感じ取った私は急いで白蓮ちゃんに辞職の旨を伝え、引き継ぎを行った。

大きく飛躍する絶好の機会というのを白蓮ちゃんも感じ取ってはいたようだが、彼女には太守としてこの地を守る義務がある。もっと上位の官位であれば何かと理由を付けて自前の兵隊で戦功争いに参加できたのだろうが、一地方領主では難しい。治安維持に努めて真つ当な評価を得るのが精一杯だろう。

対して私達は蛮勇にて戦場を駆け抜け、一足飛びに力を得る博打に出る。

吉と出るか凶と出るかは分からないが、分の悪い賭けではないと私は考えていた。

民は金や権力では縛っていられないと表層化した結果が今回の黄巾賊が結成だ。

皆が変化を望んでいる今だからこそ、国に仕えている体制側よりも勇名を持つ個人勢力である私達と共に立ち上がるとういう人は多い筈。

そんな理性も合理も効率も無視した狂騒状態の人々を集め、上手くまとめ上げれば私達は舞台上に上がる資格を得られる。

そして私は人心を掌握する術に長けているのだ。

先生に学び、先生からお墨付きも貰った。あらゆる知識を得て実践してきた。上から下から右から左から人も多く見てきた。やれる事は全てやってきた自負があるからこそ、分の悪い賭けじゃないと思えるのだ。

勿論不安は大きい、だがそれ以上に期待感が大きい。

自分がどこまでやれるのか、仲間をどれだけ増やせるのか、仲間といつまでいられるのか、先生とはいつ会えるのか。

それを早く確かめに行きたい。

「準備できたか？」

「うん、大丈夫だよ。改めてありがとね、白蓮ちゃん。貴方のおかげで私達は大きく成長

できた」

「そうか、なら良かったよ。私の所も色々改善に尽力してくれて助かったよ。

私の手の届く範囲ならほぼ全ての案件を無理なく処理できるようになった。

桃香様にはくれぐれもお礼を！ 後出来るなら引き止めを！ と文官達から強く念を押されたよ。

関羽達もうちの兵を鍛えてくれて助かったし、鍛錬方法なんかを子細に資料化してくれたのも有難かった」

「一年間不自由なく学ばせて頂きましたし、給金も相応に頂きました。それをしっかりと返したに過ぎません」

「相変わらず隙のない答えだな。

張飛は賊退治と治安維持に一番貢献してくれたな。私の権力圏ではほぼ一掃されたから、これからが楽になった。有難うな」

「やりたい事やってただけなのだ。それにおねーさんはしっかりとご飯食べさせてくれたから大好きなのだ！」

「まあその分給金は相応って感じにさせてもらってただけだな。

いやー桃香が最初に助言をくれて助かったよ」

「最初に言っておかないと後から言い出しにくい事だし、公平を期するなら言つとかな

いとね。

それでなんだけど、本当に連れて行って良いの？」

「ああ、正直給金以上の仕事をしてくれたと思ってるからな。

というか、本当にそれだけで良かったのか？ 百人ぐらいなら引き抜いて行っても大丈夫だぞ？」

「うん、十分過ぎるよ。その分才能のある人達を連れて行っちゃうけど大丈夫？」

「うーん、本当ならお前に付いていきたいと言う奴ら全員を預けるべきなんだろうが、それを言うとは本気で人材が居なくなるから勘弁してもらいたいのが本音ではある。

お前もそれが分かってくれるからそう提言してくれているんだろうが、それじゃあ全く釣り合っていないよ。

お前達は今後数十年の労力と無駄を省いてくれたのに、こちらが差し出すのは周囲と同じ給金、少々の物資、実働三年以内の奴ら十人ばかりというのはなあ」

「もう、私達が納得してるからいいの、報酬に関してはもう終わりね！」

「分かったよ。で、あいつの事なんだけど……」

「あーうん、曹操の所まで行くらしいから、途中まで同道させて欲しいって」

「そっか、大変だな。ちよつと面倒くさい奴だけど、根は良い奴で能力も高い。道中は存分に使い倒してやれ。」

それじゃあ名残惜しいがお別れだな」

「そうだね、けどそう長くない別れになると思うよ。」

歴史は傑物を求めている。白蓮ちゃんは大陸に百といたない力を持つてる人だから、きつと今よりももつと大きな舞台に招かれる」

「……桃香が言うならそうなるんだろうな。なら今度会う時は互いにもつと強く、大きくなつていような！」

「うん、その時が来るまで壮健でね」

「お前もなー」

そうして白蓮ちゃんは眦に涙を溜めながら送り出してくれた。

私も釣られて泣いてしまいそうだったが、送り出してくれた先にはこれから運命を共にする仲間がいる。

だから涙をぐつとこらえ、先に待っていた十人ともう一人に笑顔で向かっていく。

白蓮ちゃんの所から引き抜いた十人、実は白蓮ちゃんが人材を分けてくれるという事を言い出す前から目をつけて密かに鍛えていたりしたのだ。白蓮ちゃんが言い出さなかつたら頭を擦り付けてでも「この娘達ください」と頼み込む予定だった。

全てにおいて優れているとか、飛び抜けて秀でた部分があるという訳ではないが、個性がありつつもそれなりの能力を持っていて、私の理想を解し、私の命令をすぐさま実

行に移す器量と信頼……心酔と言っても良い物を持っている面子だ。

そしてもう一人というのは、

「白蓮ちゃんへの挨拶は本当に良かったの？」

「ええ、先日済ませているので差し支えなく」

「そっか、なら行こっか」

曹操さんの元に行ってみたいと言う趙雲さんだった。

90. 趙雲の槍

彼女、趙雲さんとは少しだけ関係が拗れていた。

私ではなく愛紗ちゃんと鈴々ちゃんとの間、もつと詳しく言えば彼女側の問題ではある。

私は文官として使われていたので趙雲さんとの直接的な繋がりは薄く、妹二人と周囲の人達からの又聞きになってしまふのだが、順を追って語っていこう。

白蓮ちゃんの所に勤め始めて二ヶ月ほどが経ったある日、趙雲さんから愛紗ちゃんと鈴々ちゃんに一对一で実戦形式の試合をやるうという申し出があった。

鈴々ちゃんも愛紗ちゃんも腕が立つのは一目見た時から気付いていたが、二ヶ月待ったのは幾つかの配慮があったからだと思う。

状況が落ち着いてからでないし実力が発揮できないだろうし、早々に腕試しを申し出て芳しくない結果を残させた場合、幼さの残る二人のやる気を削ぐ結果になり、周囲の者に負ける姿を晒しては軍でやっていくのが難しくなる。そんな年長者らしい気遣いだったに違いない。

そうして誰もいない昼下がりの訓練場で行われた試合。初戦はわつくわく顔で自分

の名前を連呼し続けた鈴々ちゃんに。そして試合の結果は趙雲さんの敗北だった。傍から見ればほほ拮抗していたそうだが、本人は惨敗だと言い張ったらしい。

しかもそうして勝敗が決した後、鈴々ちゃんが言ってしまったのだ。

「やっぱり初めて会った時のいんしょーと同じだったのだ。趙雲お姉さんの槍は軽いのだ」

それは初めて会った時に言い淀んでいた印象だったらしい。武器を交えて確信したからこそほつりと溢れた一言。何気なく、悪意なく出た言葉。しかしだからこそ本心の言葉であると気付いた趙雲さんは烈火の如く闘志を燃やした。

続いて愛紗ちゃんに挑み、これもまた惜敗。似たような試合内容であり、これもまた本人曰く惨敗の出来だったそうだ。

そして趙雲さんは聞いた。

「関羽殿から見て、私の槍は軽かったか？」

圧を感じる視線で問われた愛紗ちゃんは、同じ武人として嘘偽り無く簡潔に答えた。

「貴方の槍は軽いです」

それから一週間、二人は空いた時間がある毎に趙雲さんから試合を申し込まれたそう
だ。

それに二人が喜んで乗るものだからついには三人の仕事に支障をきたし始めてしま

い、白蓮に怒られて一日一回ずつという制限が設けられる始末。

それから一日一回という約束を守ってくれていたが、彼女は仕事と生活習慣以外を鍛錬に打ち込み始める。

しかしそれだけ鍛錬に勤しんで対策を練っても、勝率は一年を通して三割程度にしか上がらなかった。

趙雲さんは問題や困難を自分一人で抱え込む性質で、しかも今までは全て一人で解決してきたそう。なので誰にも頼る事無く、ひたすら自己鍛錬を積み重ねては二人に挑みかかった。

だが結局別れの日まで満足な戦いに行き着かず、彼女は私達の出奔に合わせて無理矢理に理由を付けて同道を頼んできたのだった。

これにて彼女が今目の前にいる現状説明は終了。

今までは仕事場も離れていたので深く関わる事も無かったが、一緒にいる間は私に出る範囲で手助けしたいと思っている。

白蓮ちゃんも言っていたが、この人は真っ直ぐで清廉だ。迷いを抱えたまま戦乱に突入し、道半ばで朽ちる所など見たくはない。

だけど難しい事に彼女から頼ってくれなければ、関わりの浅い私の助言など鼻につくだけだろう。

今は一日一回妹達に挑む様子を見守りながら機会がやってくるのを待つしかない。問題が拗れ続けて彼女の心と槍が折れない事を祈りつつ、私は門出を迎えるのだ。た。

それからの私達はずっと黄巾討伐と村々の慰撫に精を出していた。

襲われている村を助けては義勇兵を募って選別する。選別するなんて随分と余裕があるな、と思われるかもしれない。

だが長子や幼子や男女数の偏った村での少数側など、連れて行かれると村や家が困りそうな人は弾かねば禍根を残してしまうから致し方ない。

とはいえこの時代に立ち上がる民は多く、始まりは十数人だった仲間は何時しか百人を超え、しかも勢いは止まらない。

その勢いに比例して狙う賊の規模を大きくしていったら倒して行き、影響力は飛躍的に増していった。

しかしそれも限界が来る。

義勇兵が減って軍の形態を維持できなくなるのではなく、名を高めすぎて希望者が増えすぎたのだ。

私達はあまりにも不足している物が多い。物資諸々、名誉権威、経験、そして何より

指揮官級の人材が足りていない。だからはっきりと適正人数が決まっており、今の段階では兵五百人が限界だった。

無理をすれば倍の千人はいけるだろうが、完全掌握が出来なくなつて規律を守らせる事が難しくなる。

今は戦力確保と秩序維持の天秤を気にしつつ、表面張力めいっばいの器を皆で成長させている状態なのだった。

そんなこんなで昼は戦い続け、夜は方針などを話し合う日々。

今も妹二人と白蓮ちゃんから引き抜いた数人とで話し合いをしつつ、方向性を決めればかりである。

「それじゃあ今日は解散、皆ゆっくり休んでね」

私の号で皆それぞれの場所に散っていく。

私はそれを見送つた後、軍のど真ん中に設置された就寝所近くに灯された焚き火に当たりつつ決定の再確認を行っていた。

するとそこに趙雲さんがやってきた。

「劉備殿、少し宜しいか？」

「趙雲さんが私に用とは珍しいね。何かあったのかな？」

「まあそうですね、一杯付き合ってもらいがてら相談の一つでもと思ひまして」
「そっか、なら付き合わせてもらおうかな」

趙雲さんが持ってきたお酒だけじゃ寂しいと思い、私はすぐそこにある自分の天幕からメンマの入ったツボを二つ持ってくる。

「これ、趙雲さんが来たら一緒に食べようと思つて取つてたんだ」

「む、この匂いは……メンマ、ですか？」

「お見事」

「なんと！ メンマは手間隙がかかつて流通しづらい上に今の世情で更に入手は困難を極めるといふのに……」

今日この時に相談をしようと思つた自分を褒めたい。

なによりも劉備殿に感謝を。有難うございます」

「あはは、鈴々ちゃんに気付かれないよう頑張つて死守した甲斐があつたつてもんだ」

「それでは酒とメンマと相談事を肴に、しばしお時間頂戴します」

相談の内容は予想通りで自分の槍について。少し予想外だったのは二人の妹には何の確執も抱いていないという事。

「二人は自分の至らなさを気付かせてくれたいわば恩人。羨む事はあれど恨む事など出来ずまい」

普段の様子からそこまで強い確執はないだろうと感じ取ってはいたが、全く無いとは思わなかった。

趙雲さんは飄々とした雰囲気は一切崩さないから感情の読みにくい人ではあるが……少し自分の感覚を過信していたかもしれない。

「そつか、それを聞いて安心したよ。でも羨むつて?」

「己が武器を預けるに足る人物を見出し、その元で十全に力を奮っている。それは武人として一つの到達点です。真なる主を見いだせぬまま根無し草で放浪する者、主を妥協して仕える者の多い中、幸せな事だと思ふのですよ」

「あの子達は私の理想の共感者だから、主従という関係性とは少し違うんだけどね」

「それもまた羨ましい。武器を預けながら手を携え合える関係なぞ、そうはありませんよ」

「そうだね、得難い二人と理想の関係であれているのは凄まじい幸運な事だと思う。

でも主従つていうなら、趙雲さんは天の御遣いに会いに行く為に白蓮ちゃんの所から出奔したんだよね?」

「……敏い劉備殿は気付かれていますでしょうが、あれは名目や建前の面が強い。

あそこは居心地が良過ぎてついつい長居をしてしまった。槍を預けるには足らぬが、肩を並べるにも背を預けるにも足る人がおりましたからな。

しかし劉備殿達を見て、ここは我が本望の果たせる場所では無いのだ、と思い出す事が出来ました。

だから早急に飛び出す必要があったのです、あそこは理由をかこつてなければ出られぬほど良き場所でしたからな」

私と同じ考えだった。

白蓮ちゃんは仲間や友とするには最上の人だけど、戦乱の主とするには物足りない人だ。白馬長史と呼ばれる程の資質があるのだから乱世向きの人である、はずなのに何故だか治世向きの気質をしているのだ。

「彼女を至上の主と仰ぐ人間がいるのは不思議ではない。だが私の求める理想ではなかった、それだけです」

「そっか。白蓮ちゃんの事は納得したけど、主を探してはいるんだよね？ 天の御遣いを建前と言ったのは何故？」

「天の御遣いを困ったのが曹操だったからですよ。」

あそこは一度見に行つてますからな、私はこれっぽちも曹操に仕えようとは思つておりませぬ」

「なんで？ 噂を聞くに曹操は傑物の中の傑物だよ。陳留での施策、陣営の戦力、時流の見抜き、あらゆる能力がずば抜けてる。まさに時代の寵児、今生の上限たる人物だ」

「劉備殿は彼女を随分と買っているのですな。確かに纏う雰囲気も尋常ならざるものを持つておりましたな。」

「ですが彼女は私の理想とは違うとはつきり感じ取りました」

「何を感じ取ったの？」

「彼女の元では我が槍が必要になる場面が生じぬのですよ」

「うーん、趙雲さん程優秀な人なら必然的に必要な人材になると思うんだけど？」

「私もそう思っていたのですが、彼女は彼女が優秀過ぎるゆえ、私よりも一段二段劣る才覚の者だろうが采配によつて等しい結果を生み出させるのですよ。私がいるかいなかで変わるのとは結果ではなく効率だけなのです。」

それは安定ですから、悪いとは言いません。むしろそれこそ最高の環境と言う者は多いでしょう。我が友も曹操の覇気とその組織運用に惹かれておりました。

ですが私は腕の振るい甲斐がない場所と思えて仕方がないのです。

あそこは曹操が作る世界を見たい者しかいらぬ場所。例えるなら曹操という画家が仲間や部下という筆を使って世界を描く場所なのです。そして彼女は筆を選ばない。

と、少々熱くなつてしまいましたな。漠然と抱いていた印象を元に語つたので伝わり辛かつたでしょう。

ともかくそんなこんな理由がありまして、天の御遣いが余程面白き人物であるか、天の御遣いによってあの場所の有り様が変わっていなければ彼女に仕えようとは思えぬ、という結論に至った次第です」

「そっか、話が聞けてよかった。趙雲さんの心の在り方も聞けて嬉しかったけど、曹操の考察の参考にもなったからすごく助かったよ。

でも曹操の元が駄目なら後は何処だろうね。戦力的には涼州馬騰、袁家、劉家かな。個人的資質なら孫家が熱いって聞いたかな」

「ふむ、孫家は聞いた事がありませんな。各地を渡り歩いた私が知らぬを知るとは、劉備殿は凄まじい情報網をお持ちですな。ともあれ、目星は付けておりますのでそちらの気遣いは無用です」

「そうなんだ、誰って聞いて良い？」

「それは今しばらくお待ちを」

「ちよつと残念だけど、しばらくしたら話してくれるって言うなら待つよ」

「それですな、本題に戻りますが、劉備殿から見ると私の槍は軽いですか？」

あつ、その事について相談を受けてたんだっけ。

91. 心技体

「そうだった、趙雲さんの感じている壁について聞くんだったね。」

趙雲さんの槍が軽いかどうか何だけど……本当に私が何か言っちゃって良いのかな？」

「劉備殿は敏い人であらせられる、私の試合を見て何か感じ取った事があったのではありませんか？」

そしてあの二人からも劉備殿に聞けと言われております。

ですから些細な事でも構いませんので、気付いた、気になった、もしかしてと思われる点があるならば指摘して頂きたい」

「分かった、門外漢な部分もあるから頓珍漢な事を言ったらごめんね。」

えーじゃあ早速本題、趙雲さんの槍が軽いかだけど、多分二人の武よりは軽いかも知れない」

「……理由は？」

「簡潔に言うのと積んできた経験が違う、量ではなく質が全く違うんだ。」

趙雲さんの槍は肉を切る術、つまり人を無力化する為の技を磨いてきただろう事は見

てすぐ分かる。

自身が如何に疲れず傷付かず、如何に相手の動きを阻害したり武器を落とさせたりするかという安全圏から勝利する技術なんだよね。そういう対人試合や集団対集団で必要不可欠な技術を趙雲さんは極めてる。

試合なら武器が落ちた時点で終わりだし、集団戦闘でも腕一本武器一本落ちたらまず逃げるし、そこで終わり。安心安全安定の戦い方」

「ええ、まあ言われればそうですが、それが良くないかと?」

「いやいや、否定するつもりはないし、それは正しい戦い方だ。義勇兵の皆に見習えというなら趙雲さんを手本にしてもらうよ。」

ただ二人が磨いてきたのはそんな無駄のない高効率な戦い方じゃないって説明したの。

二人、まあ私もだけど、私達が三人で七百人ぐらいた盗賊団を討ち取った時」

「な、七百を討ち取った?! ああ、いや話の腰を折って申し訳ない」

「あはは、まあ三対七百は嘘っぽいよね。けど本当の話。」

勿論平場で討ち取ったんじゃないやなくて、策を練って罠を張って相手の力を極力削いで成し遂げたんだだけだね。

まあそれでも五十人ぐらいを何回かに分けて正面から戦わなきゃいけないくてさ、そん

な時の戦い方って趙雲さんの戦い方じゃあ圧殺されちゃうんだ。

武器を落としても相手は数が多いから徒手空拳でも挑みかかってくるし、多少不利になっても三人相手に逃げられないって面子みたいのが邪魔して多少傷を負ったぐらいじゃあ逃げないの。

そんな中で磨かれる戦い方って骨を絶つ戦い方なんだよね。

一撃で素早く相手の意識と命を刈り取る戦い方をしないと他に負担がいつちゃう。

だから見切りは天稟があつて経験を積んでいたとしても稀に失敗しちゃうような紙一重の深さで行う。足や手を切り落としても無事な方で何かされちゃうから攻撃は頭部破壊や首や胴体の切断に偏る。平場で戦うのを嫌って屋内では壁を、外では岩なんかを背にして戦う事が多いんだけど、そんな場所で武器を振るうのに慣れちゃうって曲芸みたいな戦い方も覚ええんだ。

まあそういう訳で、軍で行うような真つ当な集団戦闘では無駄な技術ばかりなんだけど、歪でも戦闘技術ではあるから完全に無駄にはなっていないんだよね。

だからあの子達の攻撃は、無駄に重いでしょう?」

「……ええ、確かにそうですね」

「二人が貴方の槍が軽いと言ったのはそう言った面があつたと思うよ」

「ならば二人と同じ経験をすれば」

「不測の事態に対する備え程度に訓練するのは良いけど、本格的な鍛錬とするのはやめ
とした方が良いかな。」

織細さと荒々しさを共存させるなんて無理難題だし、間違ひなく試行錯誤中は槍が鈍
る。二兎を追えるほど武つて浅い物じゃないでしょ？ っつて、私が言えた義理は無いん
だけだ。

そもそも優劣がある訳じゃないしね。

趙雲さんの戦い方は戦闘終了が早い上にこっちの損害が減る。妹二人の戦い方は相
手に精神的な恐怖を与えて心を折りやすい。どちらにも有効な点があるから強制する
必要もないし」

「理屈は解りました。ですが、それだけでですか？」

「試合を傍から見ている分にはその程度かな」

締めくくろうとして、しかし彼女の目線は鋭い。私は少し気合を入れて続きを話しだ
した。

「……これからは推測なんだけど、多分あの二人から見ると趙雲さんの槍つて宙に浮
いてるように見えてるんじゃないかな」

「宙……」

「その事についてはもう趙雲さんも分かっている筈」

「それは、どういう」

「貴方は主に我が槍を預けたいと言った。それは槍を自分の命と同等と言つて事だよ。」

「なら何で槍が軽いと言われて恨まず、羨む心境になるの？ 命の軽重を問われているんだよ？」

貴方の気質からして間違つた事を言われたら強く反発する筈なのに、許した。

それは槍をどうでも良いと思ひ始めているからか、自分の痛い部分を突かれたからか、どっちかしかない。その後には勝負を挑み続けたんだから理由は明らかに後者だと思ふんだけど……まだ分かつていない振りをする？」

「……いいえ、大丈夫です。劉備殿の言は全て正論だ、反論の余地はない。

認めねばなりません。私はあの少女達よりも心が弱いのだと。

半ば認めていた事実をまさに突きつけられた訳だが……それを受け入れて、私は壁を越える事が出来るのだろうか」

「出来ると断言する。趙雲さんは素養は大陸屈指だと思ふ。良く強さの指標として心技体の充実つていうけど、その内の技と体は既に極まつてる。後は技と体を引き出す心の部分の隙を無くせば、絶対二人と対等かそれ以上になれる」

「断言までしてくれませんか。ならば、その期待には応えねばなりません。」

劉備殿に相談して良かった、光明が見えましたからな」

「力になれたのなら何よりかな。それじゃあお酒もおつまみも無くなってきたからそろそろ」

「それは少し待つて頂きたい、最後にお聞きしたい事があります」

「えっと、何？」

「伯珪殿の元から出奔して今まで劉備殿を見ておりましたが、少し気になる事があります、それについて尋ねたいのです」

聞きたい事がある、そう言った趙雲さんだけど、逡巡するように口ごもった。しばらくして思案するようになっているが、諦めたように口火が切られる。

「失礼にならぬように何と聞けば良いのか、上手く思いつきませぬゆえそのまま問わせ頂く。」

劉備殿はその、本気を出しておられますか？

……改めて口に出すと無礼千万にしか聞こえませぬが、悪意は無いのだと信じて欲しい。

皆が少しでも良い結果を得る為にあらゆる面で奮闘しておられ、寸暇を惜しんで常に動いておられる。

それを間近で見ているにも関わらず、私は何故だか無性にもやもやするのです」

「えっと、私は常に最善を尽くしてゐるつもりだよ。確かにまだまだ甘い、詰め切れてない部分があるけど、経験を積みあげばもう少しマシに」

「いいえ、そうではないのです。貴方が才学非凡なのはその働きを見ても明らか。

練った作戦は総じて外れず、陣頭指揮を敢然と行い、不測の事態があれば誰よりも先んじて動いて解決してみせる。戦場での貴方は大将としてまさに完璧だ。

そして戦場外での働きぶりも素晴らしい。糧食が尽きた事はない、団内の諍いの頻度は著しく低い、悪人以外に狼藉を働く者はおらず、また人数制限であぶれた者にも村で実践出来る戦術と鍛錬法を教え、別の軍へ行くと決めた者にも幾許かの糧食と基礎訓練を施して送り出す。

まさに五常の体現者であると私は思っております」

「あはは、人の嫌がる事はしない、人の喜ぶ事をする、今の時代はそういう当然の事をやつても五常の体現者とか、白い衣の継承者なんて名前が付いちやうんだから、困つたもんだね」

「それをそうやつて平然と話される事こそが貴方の本質なのでしょう。

更に腹を割つて話しますと、私は貴方に惹かれています、この槍を捧げたいと思う程に。

今までの貴方を見て理性も本能もこの人だと叫んでいる。ですが今一步が踏み出せ

ず、宣誓が出来ない。

貴方の本質は見た筈だ、貴方の本気も見ている筈だ、なのに何故か貴方を見足りない
と何処かで思っている」

「そっか、そこまで私を買ってくれてるんだ、すっごく嬉しいよ。

けど趙雲さんが買ってくれてるほど私は才気煥発という訳でも清廉潔白という訳で
もない。

私は私の理想の為なら不仁、不義、不信、無礼、無知である事を厭わない。

計算高く自己中心的、私の自己分析はいつもそこに落ち着く」

「そう卑下なさる必要もありますまい。理想を貫く為なら悪評も厭わないほど全身全霊
を賭けて進んでおられるという事でしよう。

ともあれ、私は私の何処かの何かが納得するまで貴方を見ていたい、という事を最後
に伝えたかったのです」

「うん、気が済むまで存分にどうぞ。途中で失望しちゃうかも知れないけど、そうなた
らそうなたで諦めるかな」

「可能性は低いとは思いますが……そうですね、その時は天の御遣いの顔でも拝みに行
くとうしましょう。

では今宵はこれにて」

こうして私と趙雲さんの初めてののちやんとした会話は終わった。

再度本心を晒して言葉をかわすのは一ヶ月後、二人の軍師との出会う所まで飛ぶのだった。

一ヶ月後、私達は黄巾党の集積所となっている場所へと襲撃を仕掛けていた。

皆がある程度指揮に慣れ、また十人長なんかを任せられる人員の育成と配置が済んだので、私達は兵数千人を無理なく作戦通りに動かす事が出来るようになっていた。

集積所に現在本隊である五千人程が既に出払っており、残った兵は私達と同数である千人前後。

しかし集積所近辺に罨もなく、残った兵の練度が総じて高くないと調べはついている。幾つか布石も仕込んであるので余裕を持って倒せると踏んで行動を開始した。

練った作戦が無事に成り、被害も時間も最小限で集積所を奪取する事に成功したのだが……想定外の事態が起きた。

放っていた騎馬斥候が集積所から出ていた本隊の帰還を持ってきた。

更にはその本隊から逃げるようにして民人がこちらに向かってきているという。

偽報を撒いてこの集積所に屯ろしていた黄巾賊本隊は正規兵のいる場所に誘導して

いたのだが、いくら何でも決着が早過ぎる。

交戦方向から来ていることから別部隊とも違うようだし……賊の規模を聞くと二千程、装備はボロボロ、追い立てられるようにしてこちらにやってきている。

推測、追い立てられるようにしてここに向かっているという事は辛くも勝利して、という事はないだろう。ならばここを見つける為に泳がせたのか。

そしてその道中にあつた村の人達が追われた賊に追われてこちらに向かつてきているのだと考える。

「森にある廃村を半砦化した集積所、こつちは賊の戦闘後の流れを総合的に読んでようやく掴んだのに、力技で簡単に見つけられるんだから、ずるいなあ

でも村の人が追われてるってのもおかしな話だね、この一帯は避難勧告が出た筈だけど……偽装？」

聞き返すと、賊が変装している可能性は皆無であり、村人は残り四人だと返答がきた。「残り？」

実は十人ほどいたのだが、斥候の人がその内半分を頑張つて連れて帰ってきたのだと言ふ。

騎馬斥候は二人一組で行動させているから五人は何とか運べたが、残りの者は置いていくしか無かつた。その際こちらの方角に来れば助けられる可能性が増えると言つた

らしい。

今から向かえば余裕で合流できる筈なので、是非とも向かわせてくれ、と頭を下げられた。

「そっか、ならもう見過ごせないね」

戦略的に迎えに行くのは悪手、けれど私の作り上げた風評が大きく墮ちるのではや手を打つしかなかった。

私は集積所にあつた地図を広げて周辺の確認を行う。

しばし考え、結論。

「よし、ここに誘い込んで燃やしちやおう」

腕利き五人ばかりを連れて迎えに行く。

「しかし短時間によくあそこまでの作戦を考えつきますな」

「元々燃やす算段だったし、作戦を少し修正しただけだよ」

「くく、面白い出来上がりになりそうで楽しみです」

「でも良かったの？ 結構大変な役割だけど立候補しちやつて」

「私は未だ客将ゆえ、関羽殿や張飛殿と比べると義勇兵達と打ち解けてはおりません。

あの場に残っているのは浮いてしまいますよ。というよりですな、救出任務に総大将が向

かう方がおかしいでしょうに」

「こっちの方が状況判断を要する事態が多そうだから将級の誰かが向かわなくちゃいけない。」

愛紗ちゃんや鈴々ちゃんはまだ即興に乗れるほど柔軟ではないからね。これで趙雲さんが客将でなければ完全に任せてたんだけどなあ」

「ふふ、私も買われているようだ。」

ならば貴方の露払いは全て任せて頂きましょう」

「うん、頼りにしてるよ」

そんな会話を交えつつ、私達は救助を待つ人達の元に向かうのだった。

92. 軍師二人

集積所から一直線に向かうと賊に見られた時に不自然さが出てしまうので、偶然を装う為迂回しつつ向かう。そして要救護者達が見える位置まで移動してきた。

「大事なものは距離だから、皆逸らないでね」

「むう、作戦は理解しておりますが、やはり酷だ」

老人が二人、幼子が二人。後ろからやってくる黄色い津波から懸命に逃げている。

彼女達を感じる恐怖は相当だろうし、私達も相当の我慢を強いられる。

幸い黄巾賊は馬に乗っている者は少ない。恐らく正規兵が念入りに騎馬を潰したのだろうが……そこまでの力量がある隊を率いているのは一体誰だろう。

「劉備殿、まだか？」

考え事が今の場面と少し離れはしたが、機を見る事を休んでいた訳ではない。

注目すべきは黄色い津波より先行した数十の騎馬。集積所にいち早く戻って安心を得たいだろうに、速度は歩くよりも少し早い程度、人馬共に相当な疲労が溜まっているみたい。装備はまちまちで一応弓持ちもいるが数は少ない。

まだ気は抜けないが、策が成る可能性は高そうだ。

「劉備殿」

馬も驅る私達を目視すれば速度は上がるだろうが、それでもまだまだ距離には余裕がある。

「もう少し待って。大丈夫だよ、弓の範囲や四人が歩みを止めた場合でも大丈夫なように見計らってるから」

しかしこの光景を見て思う。

懸命に走り、生きるのに必死な四人の善人。

懸命に走り、生きるのに必死な数千の悪人。

どちらも同じ生命なのに、前者は救おうと息を巻き、後者は殺してしまおうと息を巻く。

「こんな状況を生み出す現状をこそ早く改めなければいけない、命の優劣をつけなくても良い世の中にしなくちゃいけない。平和な状態だったのなら、あの中の何人が人を害する者になるというのか」

「劉備殿、何か仰られましたか?」

「ううん、何でもないよ。それじゃあそろそろ向かおうか。私が先頭を走るから、速度を合わせてね」

「ようやくですな!」

そうして私達は要救護者の元に走るのだった。

「警戒しなくても大丈夫、助けに来たよ」

待機していた事など微塵も感じさせぬ笑顔で出会い頭にそう言う。

四人は惚けたように安堵の息を漏らし、腰砕けになつてしまった。

そりやそうだ、ここは平場で遠くまで見通せる。徐々に近付いてくる二千人の賊の姿がはつきり見えていたのだから相当な恐怖だったに違いない。とはいえここで止まっていたら飲み込まれる、早急に動かなくてはいけない。

賊数十騎も私達が要救護者と合流しようとしていると気付いてからは速度を上げていた。

「それじゃあ一人ずつ馬に乗せて早速動こう。私と趙雲さんは女の子を乗せて、手筈通りに」

「任されよ」

老人組は連れてきた人に任せてさつきと砦方面に逃げてもらおう。

「二人には悪いんだけど、私と趙雲さんの馬は少し怖い目に合うかもしれない。でも私達を信じて」

「はわわ、ここまで来れば全てお任せします」

「あわわ、これでも軍師を志す者です。耐えてみせます」

小さく震えているが、その目と声はとても強い意志を感じる。

「そっか、じゃあ任される」

胸をぽんと一つ叩いて、気軽に言う。少し危ない橋を渡るので、今のうちに少しでも恐怖を取り除いてあげたい、と思っていたのだが。

「ぼよんって」

「ゆれたね」

凄まじい目で胸を凝視された。

緊張感が無くなったのは良い事だけど……

「えっと、とりあえず乗ってくれるかな？ はわわの子、手を掴んで」

「ならば私はあわわの子ですな。さあ、もう百数えない内に追いつかれる、早く」

二人を馬上に引き上げ、私も趙雲さんも二人を懐に抱えるように固定し、一気に加速する。

ここに来てもう一つ確信を持たた、この距離で撃つてこないと言う事は精密に騎射できる手練はいない。何から何まで僥倖だ。

私は速度いっぱい出している風を装い、集積所近くの森に入るまでは適当に矢を放つ。

懐から「あの、矢の無駄では」と聞こえるが、こんな可愛げのある子と話したら表情が緩むに違いないので無視無視。

そして無事に歩兵集団とかなりの距離を離しつつ、騎馬隊を森へ連れ込む事に成功したのでここからが本番。

私は懐にしまつてあつた笛を取り出し、強く短く三回吹く。

すると後ろからぎやつ、うわあ等の声が響き始める。敵の注意が逸れた所で今度は真面目に弓を引く。

前に乗せたはわわの子が少し邪魔だけど、後ろに撃つのは難しいけれど、それで精密射撃が出来なくなるような軟な鍛錬はしていない。

浅く蛇行して、撃つ瞬間に態勢を変えて、狙いやすい敵を選別すれば、騎手を撃ち落とすぐらいなら余裕だ。

「お見事」

蛇行している私より先を進んでいる趙雲さんが振り返つてにやりと笑っている。

集積所近くという事で適度に間伐はされているが、さすがに前を見ないと危ないと思うんだけど。

「あの、これって」

もう必死さを装う必要もなくなつたので普通に答える。

「術中の内つて事だよ」

「という事はもうこちらの集積所では決着が付いていて、二千の賊を潰す算段も整っているという事ですね？」

「へえ、そこまで分かっちゃうんだ？」

「軍師を志す者ですので」

「軍師、か。今の私達に一番必要な人達だ、ねえもし良かったら私達の義勇軍を見に来ない？」

「……貴方ほどの逸材がこのような役割を与えられるほど、ここの義勇軍は人材は豊かという事ですよね。少し興味を」

「ああ違うよ、集積所を奪取した義勇軍の責任者は私」

「はえ？」

「逆逆、全くの逆、私以外の適材がいなかったからここまで来たんだよ」

「総大将が村人救出の為に、賊二千の前に出てくる？」

「口約束とはいえ、私の預かっている兵が約束してきたんだから守るのが責任者たる私の役目でしょう」

「しかし大事の前の小事では」

「責任者が知ったら、周囲が知ったら、もうそれは覆しちや駄目な契約になる。」

それに貴方達はその約束を糧にこちらに向かつてたんでしょう？

これだけ近くにいれば分かる、足の筋肉も痙攣してるし、靴から血の匂いもするし、衣服は乾ききつているのに塩の強い香りがする。

それにきつと貴方達だけだったら逃げられたでしょう？ けどお爺さん達がいるから逃げなかった。どうにか一緒に救われようとここまで必死に頑張ってきた事も分かるよ。

なら報われないと」

「あう、あ、あの、ちよつとだけ、すみません」

そう言つてはわわちやんは俯いてしまった。

ぐう、こうなると作戦とは言え一刻も早く救わなかつた事に罪悪感が！

「おや、人誑かしが人を泣かせているではありませぬか」

集積所に近づくにつれて木々の間は整理されて走り易くなっている。すると趙雲さんは速度を落として私達と並走し、したり顔で話しかけてきた。

「ああもう、ややこしくしたがる人が来ちやつたな」

「邪険にしなさいますな。これでも胸を打たれているのですよ、私もこの子も」

「はい、貴方様はこれからの世に決して充足しない大事な資質をお持ちです。」

それはあの曹操ですら持つておりませんでした」

「えつ、何でここで曹操の名前が出て来るの?」

「それは」

「あつ、ちよつと待つて、そろそろ森を抜ける」

徐々に強くなる光が森の終わりを知らせてくれる。

後ろからの音はもうせず、振り返つても騎馬隊はすっかりその姿を消していた。待ち伏せでの奇襲が上手く行つた、後始末も済んでいる事だろう。

「あわ、まぶしつ」

森を抜けた先、廃村を改造した集積所が見える。

そして、

「あつ、あれは先に行つた!」

森と集積所の中間地点には矢で貫かれた馬と死体が五つずつ置いてある。

「ああ大丈夫、あれは賊の死体を偽装させた奴だから」

私は見張り台に立っている黄巾に手を振つて合図を送る。

すると見張りの一人が右手を上へ挙げ、左手を横に伸ばして振つた。

「変更なしか。それじゃあ集合地点に向かう」

そして趙雲さんと連れ立って集合地点に向かう。

森を駆けて五分ほどするとそこには集積所から奪った物資が山のように積み重ねられてい

て、奥には先に行つたお爺さんとお婆さんが即席の寝台に横になり、医術の心得のある義勇兵に診察を受けていた。

私達に気付いたようだが、疲労困憊と緊張の糸が切れた事で動けないらしく、頭だけ何度も下げて謝意を伝えてくる。私はそれに応えて笑顔で頭を下げる。

それを見てはわわの子はほっとした表情になり、すぐにはっとしたような表情になる。

簡易集積所を見渡して何かを吟味し、そして私に視線を向けてきた。

「持ち出すにしてもこんな中途半端な位置に捨て置くように……これはもしかして、火計の準備ですか？」

「あはは、すごい、さすがは軍師志望……いや、その敏さはもう軍師としての領域にあるね」

私は馬を降り、少女を地に下ろす。趙雲さんも同じようにしてもう一人の子を連れてきてくれた。

そして片膝をついて二人の少女を見る。

「ここは安全で、敵歩兵集団が畏にかかるまでは時間がある。

だから自己紹介をしておこう。私は劉備、理想の為に戦う事を選んだ者。

心優しい軍師達のお名前を聞かせて貰えるかな？」

「はわわ、あの、私の名前は諸葛亮です。水鏡塾で多くの勉強を修めました。

この荒れ果てた世を少しでも良くしたいと思い、塾を出ました」

「あわわ、私の名前は鳳統です。諸葛亮と同じく水鏡塾の出です。私は主に軍学を学びました。

私は私の才能がこの世にどこまで通用するのかを試したく思い、塾を出ました」

馬に乗せる前に強い意志を感じた。

馬に乗せている最中に深い洞察と温かい優しさを感じた。

馬を降ろした現在、その在り方の尊さを感じている。

「良いな、すごく良い、私は貴方達が欲しいと心の底から願う。その才覚、人格、夢の全てに惚れ込んだ。貴方達の持つ輝きを余す事無く世に出したいとも思う。

だから私達と一緒に来ない？ しばらく私達を見て駄目だと思つたら、一時の止まり木だつたと思つて忘れてくれて構わないから」

「あの、その、私は貴方には助けられました。だから貴方の理想の一助となるのに何の躊躇いがあるでしょう」

「有り難い言葉だけどその言葉は受け取れない。恩義から私の理想を叶えたりしないで、貴方は貴方の理想を叶えて欲しい。

私だけの理想なんて独り善がりな物に過ぎないし、王を立ててその人の理想を叶える

今までのようなやり方じゃあまた破綻する。

誰かを先頭に置いて、その人の背中に夢を預けて押すんじゃない、皆が隣にいて、同じ方向にあるだろうそれぞれの理想を叶える為に手を取り合つて頑張るの。

だから一助なんかじゃない、私と共に来てくれるなら、一緒に理想に向かって歩んで欲しい」

そして両手をそれぞれの方へ差し出す。

私の全身全霊の勧誘である。もしこれで共感も信頼感も生まれぬのならきっぱり諦めよう。

……ああでも機会があれば後二回ぐらい勧誘しても……いや、未練が過ぎるかな。

「はわわ、はわ、ああ」

すると少女はさめざめと泣き出した。

「これほどまでに求められたのは生まれて初めての事です。それが仁義に寄り添う人であるのが何よりも嬉しい。

私は貴方の隣で自身の理想を叶えます。預けて支える等と楽はしません、貴方にも楽はさせませんので、どうぞ宜しくお願い致します。

私は諸葛亮、真名を朱里と申します」

「私達の身なりを見て、それでもなお膝を付いて歓迎を示してくださる方が今の世にど

れだけおられるでしょうか。

貴方の理想にも、理想との向き合い方にも共感致します。

ですがまだ私は真名を預けられません。この戦いの行く末を見て判断したく思います」

「ふふ、ならば私もこの作戦の是非を見てから真名を預けるか決めるとします。私の勘が此処こそが決め所だと囁いておりますゆえ」

「ありや、これは緊張しちゃうね。しかも結構悪辣な作戦だから諸葛亮ちゃんも言葉を翻しちゃう可能性もあるかもなあ。

だからすぐく失礼なんですけど、諸葛亮さんの真名も今はまだ受け取らない。この作戦が終わるまでの間に私についてももう少し考えて、改めて決心がつくのならそこで受け取らせてもらうね」

「早々に受け取っておけば縛れたものを。本当に貴方はお人好しだ」

にやりととても趙雲さんらしい笑顔を頂いたので、ちよつと意地悪を言ってみる。

「それじゃあ向こうがざわめき出したから決行の時間だ。

趙雲さんが残ってくれば二人も心を落ち着けて待っていられると思うから、居残りね、決定」

「おおつと冗談ではありませんね。先程も言いましたがここが貴方の見極め所なのです、

「ここで行かねば何処に行くというのですか」

「はいはい、けど私に付いて来るといふのなら、もう何処へも行かせないよ?」

「ほう、大した自信ですな」

「あはは、そういうのはちよつと違うんだけどね。じゃあ行こう。

火を使つたり乱戦になるから二人は守備を厚くしてここで待つて。

後、古参の信頼できる人を付けるから、今回の作戦とか私の事とか仲間の事とか、聞きたい事があればその人に聞いて。全部正直に答えるよう言つておくから」

「ここからはただの殲滅戦、軍師志望とはいえ少女達には些か刺激が強いので待つてもらう。」

そして話を聞いてもらつて、そこで判断してもらおう。

「分かりました。あの、ご無事で」

「有難う、気を引き締めて向かうよ」

負ける気どころか傷付けられる気も一切しないが、少女を安心させる為に笑顔で氣遣いを受け取る。

では久々の盗賊狩り、存分に勤しむとしよう。

93. 噂の真相

馬で再び元集積所の近くへ。

潜ませていた兵に状況を聞けば、もうすぐで森から賊の先頭が出てくるようだった。

私達は隠れながら時を待つ。

雑多な音が徐々に大きさを増していく。人が地を踏みしめる音、怒号に悲鳴、木の揺らめく音にぶつかる音。

そして森からにじみ出るように人が溢れてきた。

先頭集団は集積所前に放置された馬を見てぎわめくが、少し気にした程度でそのまま集積所に入っていた。

作戦成功を確信する。

四人を助けた私達の姿は歩兵にもしつかりと見られていたから、すぐに死体と私達を結びつけたのだろう。そうして視線と思考が偽装死体に行き、修復しきれなかった柵や見張り台の一部に気付かれる事は無かった。

多少の違和感はあるかも知れないが、自分達が追われている状況、集積所に辿り着けた安心感、後ろから来る人の波に押し流され、立ち止まる所までは行かなかった。

そして前が行けば後ろは何の考えもなく追従する。どんどんと集積所に人が流れ込んでいく。

二千人の内三百人程度が中に入ったのを確認した私はすぐさま見張り台にいた人物に合図を出した。

するとすぐさま煙が上がり、次第に煙の黒より火の赤が周囲を染めていく。

もつと中に入れて燃やす事は出来ただろうが、違和感の音が大きく上がる前に火をかけたかった。

一瞬でも冷静になる時間があれば芯が座ってしまう。もう数百人敵を多く屠って死兵を作るより、数が多かろうが心が折れた弱兵を蹴散らす方が被害は少ないと判断。

火が瞬く間に集積所を嘗め尽くし、怒号ではなく戸惑いと悲鳴の音が上がったのを確認した瞬間、笛を強く吹いて潜ませていた兵を一斉に襲いかからせる。

集積所前で呆然としていた賊は完全に心が折られてしまい、ただ右往左往して逃げ出すのみ。

私はそんな集団の中で一直線に逃げ出す賊を見つけ出し、奴らが向かう方角を随時記憶していく。

奴らが向かう先はきつと臨時の集合場所になっていると当たりをつけ、集合先を知っているという事は賊の中でも古参か中心に近いという事だと推測する。

そういった輩は積極的な排除が必要だ。

私は義勇兵の中でも熟練した二百人を六個の隊に分けている。

その内の四つを集合先となっているだろう方向へ差し向ける。

分隊一個で三十人ばかりだが、疲弊し困惑して訓練も行っていないだろう相手など百人いても無傷で制圧も可能だ。

とはいえそれ以上となると危険なので、負傷者を出す可能性がある数がいれば場合は動き出すまで待ち、向かった方向だけ確認して戻ってきてもらう。

残りの二隊は愛紗ちゃん和鈴々ちゃんと共に集積所近辺の掃除と集積物資の護衛をしよう。

ここまでは元より決まっていた作戦なので事は迅速に進む。

私も定位置に向かう振りをしつつ、逃げた賊を追おうとして、

「演技からの奇襲に火攻めとは悪辣至極な作戦をこうも表情も変えずに的確に指示なきとは……いやはやさすが。」

で、貴方は集積所から奪った物資を守る役回りではありませんでしたかな？」

私が動いたのを目敏く見つけた趙雲さんがにやにやとした表情で声を掛けてくる。

「そつちは別に手配してるから大丈夫だよ。」

腕が鈍らないようにそろそろ鍛錬をしようと思つてたから、丁度良い機会なんだ。趙雲さんも一緒に来る？」

傍に控えていた信頼する古参兵の一人から変装道具をもらい、準備を整える。

白い頭巾を被り、白い手ぬぐいで口周りを隠し、髪型を変え、衣装を変え、武器と道具を服に仕込む。

「それは勿論ですが……それは何を？」

「私と知られたくないから変装してるの。だから趙雲さんも私に付いて来るなら内緒にしてね、味方にもだよ」

「劉備殿がそう仰られるならばそうしますが……しかし、この少人数で向かうのですか？」

「義勇兵の皆には残つて軍師の二人について貰うから、二人きりかな。それじゃあ向かおっか」

最後に黒い上着を羽織り、馬の腹を蹴った。

賊が向かった方角と地図にあつた地形から大体の当たりを付け、少し迂回しながら進む。そして目的地が近くなつたので馬を近くに待機させ、気配を探りながら進む。

「言われた通りの場所でしたな。地図に印が合ったわけでもないのに、良くお分かりになられた」

「地図に直接的な印はなくても、目印になる地形や物つていうのは必要だからね、目星はつくよ」

「しかしこれは……」

趙雲さんも気配を巧みに読める人だから分かる。

「二百人ぐらいかな。一番集まる所に来ちゃったか」

賊の持っている武器、負傷の度合い、持っていただろう役割を観察して計算する。

武器は短剣が多くちらほら長剣が見られる、誰も彼もが満身創痍、十人ほどは経験を感じるが、他はその十人に付いてきただけの雑兵。

群れとしても個としても実力は低い、が、

「ならば作戦通りに待機して、逃げる先の確認ですな」

「それは無い、あの人達は此処で全員叩く。」

出来るだけ散らすように追い立てたけど、ここは人が集まり過ぎた。

集団になったから変に落ち着いてしまってるし、気も大きくなつて荒れてる。

あれは見境を失くした手負いの獣。人に仇なすだけの存在だから、解き放たれる前に「ここで狩ろう」

「なっ?!」

「二人なら向こうも逃げ出す事はないでしょ。趙雲さんは運が良いね、こういう状況を経験したいって言ったばかりですぐに機会が巡ってくるんだから」

「三姉妹と同じ経験を積みば槍の軽さが無くなるかもとは言っていましたか」

「自信ないの?」

「っ、ええい、分かりました! やってやろうではありませんか!」

「相手は疲労困憊で満身創痍、けど興奮して精神が身体を上回ってる状態。まあ頭は煮詰まってるだろうから、そこを突きたい……けど時間をかけてやりすぎちゃうと興奮が冷めちゃって逃げちゃうから、頭に血が上ってる間にささつと片付けちゃおう」

「つまり速攻以外の作戦無し、と」

「そういう事になるね。私が矢を撃つて敵がこちらに気付いてから攻撃、後は臨機応変に」

「そこは混乱に乗じて奇襲する場面でしょう?!」

「それだと混乱しきつちゃってすぐに逃散する可能性が高くなる。せめて三十を切るまでは数を減らしたいから粘って貰わなきゃ」

周囲を見渡し丁度良い木の枝を見つけて飛び乗る。

ここは集積所からも離れているので間伐されず手付かずの木々が生い茂っているの

で、丁度良い物が多い。

そして弓と矢を三本取り出し、構える。

一呼吸、そして一射二射三射。

中央付近で頻りに会話をしていた三人の首に矢が生える。

途端の事に一瞬間が空く。その間に再び三本取り出して三連射。

これで指揮官級と思われる敵が一人二人しか居なくなる。

賊は一齐に立ち上がって喚き散らして、周囲を見渡す。

そして私は木から飛び降り、下で待機していた趙雲さんと共に姿を現す。

するとすぐさま混乱が収まる。追撃もないので私達が二人だけという事、顔を隠して

いない趙雲さんがとびきりの美人である事が分かって興奮が戻ってきたのだ。

戸惑いの声はすぐさま雄叫びに変わり、狂奔に空気が染まる。

二百対二の戦闘が始まった。

もうそろそろ日が赤くなりだす時間に始まった戦い。

服も装備もボロボロで、鬼の形相となり、猿叫を上げる賊の集団が面で押し寄せてく

る。

「これはさすがに気圧されますな」

「そうっ？」

趙雲さんは飛び出す機会を伺っているようで、突撃する姿勢を取ったまま隣りにいる。

私は特に気負う事無く矢を番えて放つ、放つ、放つ。

正面から来ているので顔が狙いやすくて良い。残り十数本も全部使い切る勢いで放ち続ける。

一射一殺とまでは行かないが、少しだけ勢いを落とす事に成功。

「では行きます」

そして趙雲さんは駆け出して疾風のごとく先頭集団とかち合い、槍を水平に薙ぎ払った。

胸から上を狙った攻撃で三人が致命傷以上を負う。そしてその後ろに居た賊は顔に血を浴びて勢いが落ちる。

正面の勢いが無くなり、次いで右横の対処。

二人はなぎ払い、一人は首を突き、一人は石突で吹き飛ばして後ろを巻き込ませる。

左横、趙雲さんからは後ろになる所から剣が突き出されるが、彼女はそれを見る事もなく避け、右横の対処が終わったと同時に振り返り、そのままの勢いで横に薙ぎ払う。それで三人の胴体が別れ、一人の腕が落ちる。

これで後ろを除いた死体の垣が出来たから対処が楽になった、上手いものだと感じる。

と観察をしていた私だが、勿論何もしていない訳ではない。

矢を全て使い切ったので白兵戦に移行しなくちゃならない。

趙雲さんの背を守るように戦おうかなとも考えていたが、彼女が思った以上にやるので私は独自で戦う事にする。

私は手近にあったそこそこ大きな木を背にして彼我の距離を測る。賊の間合いに入る直前、私は飛び上がって木を蹴り、先頭の頭上を越し、集団の中へ一気に切り込む。唐突に降ってきた私に周囲は驚き、動きが止まる。

なので剣を抜き打ちぐるりと斬り払い、すぐさま反転しようとしているだろう先頭に向かって斬り込んでいく。

態勢が整わない所への強襲は上手く崩り、勢いは完全に死んでいる。

あらゆる戦闘集団は勢い、整然とした動きがなければ価値が地に落ちる。

止まった時点で九割の働けない人員を抱える鈍重さを生み、訓練も行っていないから前進以外の行動からの切り替えも遅いし、互いの意思疎通にも時間がかかる。

だから内から外へ向かうのも非常に容易で二十近くの敵が無抵抗のまま散っていった。

二十人分の空間がぼっかりと空き、私の姿が晒される。

薄暗い森の中、返り血で赤黒く染まった私はとても不吉な物を想起させたようで、皆が皆後ずさり。

だがまだ減らし足りないので逃げないように調整しなくては。

私は一瞬屈んで足を溜める。私が動作した事で賊の警戒心が上がるが掛かつては来ない。近付いて無意味に死にたくないと思うのは仕方ないが、それで先手を譲ればもはや先手を取る機会は存在しなくなる。

飛び上がり木を蹴り、他の木の枝に着地してまた跳び、忘れない程度に暗器を飛ばし、また跳ぶ。そしてついには集団の最後尾を飛び越した。

人垣によってこの辺りの賊は何が起こったのか何も分かっていない。なので唐突に現れた私に戸惑いしか生まれない。

隙だらけだから首元を狩らせてもらい、立ち直りかけた敵は胴元を切らせてもらう。

剣が良すぎるので首の骨、肋骨、脂肪と断ち切りにくい筈のものがするりと切れる。私の拙い技量と膂力でもなんとかなっているのはこの剣の存在が大きい。

さて、再び十数人の命を絶った所で賊の人数は三分の二にまで減っていた。

私が四十、趙雲さんが三十といった所なのだが、賊が突撃してから百秒程しか経っていない。

ここまで来てようやくやくも賊も気付きだした訳である、ああ、こいつらは向かっていつては駄目な存在だったのだ、と。

そして今は前後を挟まれた形。前門の槍、後門の獣である。この状況、賊はどう動くか。

私の方へは来ないだろう。意味不明な軌道で襲いかかる血塗れの獣に誰が向かって来るといふのか。

なら左右の内、左という選択肢はない。

私達は迂回してきたのだ。北から南へ向かっていた敵の西から攻撃を仕掛けたので、西を向いている賊からしたら左は戻る道になる。

だから残る道は右の南か前の西しかない。そして前には洗練された槍手が立ち塞がり、死体の山を築いている。

ならば結局の所、南に逃げるの一択。

集団の動きとしては無様ではあったが、流れは一致して速かった。……速かったのだ、簡単に予測出来る事だったので私の動き出しはもつと速い。

私はもう何も考えずに敵に突貫する。

心が折れて逃げに意識を向けた人間は抗えない。撤退戦は精兵が群れとして訓練と経験を十分に積み、本番においては個々の機転と覚悟を持ってようやく体裁を成すの

だ。もはや彼らには何の脅威もない。

とはいえだ、この場に置いて抗わぬ敵に成り下がった賊ではあるが、それでもまだ数が多い。当初の目的通り、小さな村が襲われても撃退可能だろう三十までは数を落としたい。

剣を振るい、暗器を使い、自然を利用し、体術で潰してがむしやらにひたすらに数を減らす。

そうして再び百秒を数えた所で、

「片付いたね」

私は変装の為にしていた手ぬぐいを取り払い、死体の人垣に囲まれながら座り込む趙雲さんに近付き、話しかけた。

「……そのようですな」

白い衣を真っ赤に染めた趙雲さんと真っ黒な私。

趙雲さんの周囲には死体が山と積まれ、また周囲の木々にも死体が張り付いている。死体を積んで距離を稼ぎ、それを越えようと、崩そうとする者には死体を蹴りつけてぶつけていたのだ。

「ねえ趙雲さん、貴方は望みの物を得られた？」

「……得られましたとも。」

三姉妹がどのような経験を積んで今に至るのか、実際に経験できませんでした。

三姉妹の噂が食い違ふと思っていました。が、実際に見て長女の噂は本場で、むしろそれ以上だと知れました。

貴方の本質が善だけでないのだと、実際に戦いぶりを見て感じられました。

間違いない、貴方は乱世を駆け抜ける主役の一人だ」

「望みが叶ったのなら幸い。それじゃあ帰ろう」

「そうですね、帰りましょう」

「ああそうだ、念押しなんだけど、来る時に言つてた事は守つてね」

「人に話さぬ、でしたな」

「それと私の元を離れない事。私のこの戦い方を知っている人は外にやれない」

「用心深い事で。出来ましたら疑問に二つお答え願いたい」

「何かな？」

「一つ、貴方の獣の如き戦い方を見て失望を感じた私は曹操の元に向かう、等と言ひ出したら？」

「私に失望するのは勝手だけど、曹操の元に向かわれるのは困るな」

私は笑顔でそう言う。

「……恐ろしい笑顔をなさいますな。とても自然なのに、読めない。」

もし貴方を見限ると言えば、私は今ここで殺されるのですかな？」

「ご想像にお任せするけど、一応そんな事したくはないと言っておくよ」

「ふふつ、底が知れませんか。なに、私はむしろ貴方をより好きになつた。実力と清濁を併せ持った徳高き理想家、こんな奇跡のような存在に巡り会えるとは僥倖以外の何者でもありませんよ」

「ありや、嫌われるかと思つたけど」

「人の深い、暗い部分を見た所で印象を変える程、私は初心ではありませぬよ。にしても貴方は人の感情を読むのは得意でも、自身へ向けられる感情には些か鈍いようすな。

次いで疑問なのですが、何故その力をお見せになられない？」

「都合が良いからだよ。」

強い指導者が民を導くなんてこれまでと一緒に何の進歩もない、期待と責任だけ負わされて潰されるのが落ち。

弱い指導者だと周囲が強くなる。子を守る母が強いように、幼子を守る兄妹が強いように、人は守りたい物があると強くなれるでしょ。

そして最後は、来るべき一騎打ちの為に、かな」

94. 天涯孤独

過去を詳細に思い出しながら、しかし必要な所だけ抜き出して伝えるこの話も終わりが見えてきた。

「そして賊を討伐して戻って来たら」

「私達が居た」

「最も貴方は関羽に首ったけで私の事は目にも入っていないなかったけどね」

「話を聞くに、その時点で私はとても大きな失敗を二つ犯しているのね。」

「気配を消して膝を付いていた貴方の輝きに気付かなかった事。」

「そして二人の軍師を門前払いしてしまっていた事」

「諸葛亮と鳳統の事ね。二人は元々天の御遣いを保護したという貴方の元に向かっていた。」

「けれど取次を頼まれた兵が外見から二人を侮り、賊を追い立てるからここら一带は広く戦場になる、さっさと何処かへ行きな、と作戦を漏らした上で追い返した」

「まさかそんな兵がいたなんて……ああ我慢ならないっ、本当に腹立たしい！」

「あの辺りが戦場になると知った二人は前日世話になった老夫婦がいる村の話をしたけ

ど、避難勧告は出ていないはずと取り合つて貰えず、作戦決行前に自分達が走つて老夫婦の元に駆けつけた、と。

兵士からしたら戦功を挙げられる大規模な作戦を、数名の村人のせいで遅延させたくなかつたのかな」

「教育が行き届いていなかった証ね。そのせいで私は二人の得難き人材を最も強大な相手に送る事になつた」

「あの二人がいなかつたら最も強大な相手と言われなかつたのは確かだね。

ともかくこれが貴方と出会うまでの私の人生の大部分。そこからは関羽の動向を知る為に私達も張つてたから良いでしょ?」

「ええ、そこからの概要は必要ないわ。

でもここままで分かるのは貴方そのものだけ。最初に言っていた世界に馴染んでいない、という疑問の回答にはなっていない」

「そうだね、それを感じたのは貴方達と出会つた少し後の話。

あまり面白い話でも無いし、私の主観でしかないから、今までよりも掻い摘んで話すね」

最初に違和感を感じたのは黄巾の乱が終わり、平原の相として領地を監督し始めた直

後の事だった。

仲間達は誰もが忙しく走り回って仕事をし、私もご多分に漏れず睡眠時間まで削って仕事していた。私の主な仕事はその地域で根を張る豪族や貴族、役人、業種のまとめ役なんかと顔合わせをして話をする事。

その内の一人、鍛冶の長との会合が終わった際にこんな会話をした。

実は鍛冶師を目指していた息子さんがとある事情で鍛冶師を断念せざるを得なくなり、それを機に元々興味があつて腕も確かだった料理の仕事に就こうと修行に行き、最近帰ってきて料理屋を始めたのだそう。

結構な有名店で修行をし、料理長にお墨付きを貰つて凱旋したのだが、彼は奥手で人前に出るのも宣伝を行うのも苦手な積極的に行えず、そのせいで売上が芳しくないのだと言ふ。

なので私に料理を食べて宣伝して欲しいと頼まれた。

ただ公的な役職に就いている私が一個人の店を大々的に宣伝するのは宜しくない。けど立場ある人の相談をきけばりと断るのも支障が出そうだから、一度私が食べに行つて納得すれば仲間を誘つてみますね、ぐらゐに留めておく。

それから間を置かず紹介されたお店の近くで別の会合があつたので、帰り際にちよつと寄つてみようと考えた。

お店は大通りから二本三本外れた道にあったけど、鍛冶長さんが丁寧かつ熱心に分かりやすい道筋を教えてくれていたので、紆余曲折ありながらも何とか辿り着く事が出来た。

戸を開けて愕然とした。鍛冶長が言つてたように、繁盛するはずの時間帯ですらから、どうでも哀想になつてしまふ。お店の場所が悪いな—と思ひながら私は中に入り、とりあえず自信のある料理を出してもらふ事にした。

あまり期待していなかつたのだが、予想に反して料理はすごく美味しかったのだ。宣伝力さえあれば瞬く間に繁盛すると確信した私は別日のお昼に仲間を誘つて再びこの料理店に来ようと決めたのだつた。

それから何日後かのお昼の事。

御飯時すら不定期になつていた慌ただしきも落ち着きを見せ始めていたので、私は皆を例の料理店に誘つた。

しかし指示を出せる者が皆向かう訳にも行かないので、私達は別の日に一緒させて貰います、と諸葛亮と鳳統が辞退した。最もな配慮だったので、私は埋め合わせはちゃんとするからと言ひ、関羽、張飛、趙雲の四人で行く事にしたのだ。

お店に行つた経緯、外観、どんな料理があり、その時に自分は何を食べたか等、お店

の情報を話しつつ、私は大通りを先導して歩いていった。

非常に楽しく道のりを消化していたのだけど、お昼時でお日様が中天に座っているのだから、大通りの往来はまあすごくて、ふとした拍子に三人と逸れてしまった。

周囲を見渡して、少し歩いて探してもみただけ見つからなかった。

人がごった返していたし、これ以上探しても見つけれないだろうなと思い、私はお店に行く事にした。

三人は私の強さを知ってるから、心配はするだろうけどすぐには大事にしないだろうと思つたから割り切りは早かつた。

そうして私は大通りを進み、以前と同じ道筋でお店に辿り着いた。

そして私は驚愕する。

なんと三人がお店の前に居たのだ。

三人は逸れた事に対する謝罪と心配をしてくれたけど、私はそれ以上に三人が何故ここに来られたのかが知りたかつた。私は三人を探す為に少し時間を割きはしたが、大通りには居ないと確信してからは真つ直ぐ進んできた。だから三人が私よりも先に来ているのが不思議でならなかつたのだ。

そこを追求しようとして、張飛のお腹が盛大になった。

その音を聞いて気が抜けた。そして奇妙なほど焦っていると客観視が出来たので、深

呼吸をしてからお店の中に進むのだった。

相も変わらず貸し切り状態の店の中、私達は席に座って菜譜を広げて見ていた。

私は以前来た時に次は何を食べようかと決めていたので、すぐに注文する事は出来た。けどそれだと皆を急かしかねないと思い、悩んでいる振りをしていた。のだが、三人は菜譜をちらりと見ただけで即決してしまった。再び違和感が強くなるが、とりあえず注文してから色々と聞こうと思ったので、店員さんと呼んだ。

私と関羽はごく普通の定食を選んだのだが、趙雲は炒飯メンマ大盛りという追加を当然のように頼み、張飛は六品頼んだ内の二品は菜譜に載っていない物を頼んだ。

店主は少し慌てたが、なんとか対応できるものだったのか、結局何も言わず料理に取り掛かった。

この時点で私の違和感は限界を突破しており、同時にとても強い恐怖を感じていた。だが私はそれを顕わにする事無く、何気ない様子で聞いてみた。

何故ここが分かったのか、という問いに対しては、気付けば道を曲がっていて私を見失っていた。そして話に聞いていた大通りはあつちだろうと適当な所で曲がって進んでいたら話に聞いていた外観と名前の店があり、その前で待機していたとの事。

あり得なくはない話、けれど可能性の低い話だった。

次いで菜譜に乗っていない品を頼んだ件について尋ねる。

すると趙雲は何となくあると思つて頼んだ、もしなければ普通の炒飯と適当な副菜を頼んでいたと言ひ、張飛に至つては自然と頼んでいたと言ふ始末。

この店に来た事があるかと聞くと、三人共聞いた事もなかつたですと答える。そこに嘘偽りは全く見られず、私の困惑は深まるばかりだった。

これ以上追求しても答えらしい物は得られないだろうと思つた私は無理矢理に料理に意識を切り替え、美味しい料理に舌鼓を打つ事にした。

一応確認の為、会計の時にこつそりと店員と店主に三人の来訪を聞いてみたが、来ていない、あんな美人で目につく人が来たら忘れる筈もないと言われた。

何もわからぬまま店を出る。

そこで私は三人が来た順路を辿つてみようと言つてみた。

三人は分かりましたと言つて私を先導してくれる。してくれたのだが、これが非常に難解な道だった。言つてみればその道は路地裏も路地裏。計画された道、場所ではなく、建物が無秩序に立ち並び、人と物と動物が雑多に雑然と乱雑に入り乱れているのだ。

しかも時間によつて人や物が移動するので通れる道が刻一刻と変化する。

進もうとしていた道が目の前で塞がれたのに、三人は焦る事無く、恐らくこつちですな、多分こちらでしょう、きつとあつちなのだ、とするすると私を案内してくれた。

そして気付けば行きよりも大分早い時間で勤め先に帰つてくる事が出来た。

三人はいやゝ勤が冴えてましたな、方角さえ分かっていたれば何となくで分かるものです、やっぱり鈴々はすごいのだ等と言っていたが、そこら辺の感覚は鋭いと自負している私でも、初見で最短経路を行くのは不可能だと言い切る。

だけど三人が平然と言うものだから、私はそれ以上口に出せず、煩悶とするしかないのだった。

貴方に追いやられたり、仲間が増えたり、領地を得たりと色々とあつて、その中でも私は時折先のような現象とちらほら出会っていた。先の出来事よりは大きくないが、小さな違和感は積み重なり、徐々に恐怖は大きくなり、解決されぬ謎は増えていった。

そんな得体の知れないものとの付き合いにも多少慣れ、しばらく経ったある休みの日の事。

私はとある書店にいた。

本が欲しかった訳でも、誰かの付き合いで来た訳でもない。ただそのお店の前を通りかかった時、お店の中に積み荷を運んでいた初老の男性が腰をやってしまったのだ。

私は医学の心得があつたので、その男性を治療したのだが、初老の男性の代わりにえつちらおつちらと積み荷を降ろしていた若い女性が危なっかしくて見ていられず、ついでに積み荷を降ろしてあげた。

二人はとても恐縮した様子で感謝してくれたが、日頃の鍛錬のおかげで荷降ろしは苦でもなく、すぐに終わったので気にしないで、と言って去ろうとした所、せめてお茶でも！ と強く勧められたのでお邪魔する事になった。

二人は親子である事、別の街で書店をしていたが戦火を逃れてここに移転した事、今は娘さんが店長である事、蔵書はここらで一番であり、流行りの物も積極的に増やしている事など、多くを聞く事ができた。

まあ書籍と言えば諸葛亮と鳳統だ。あの二人は知識の収集だけでなく、文字そのものを読むのが好きな乱読家でもある。なので新しい書店が増えればそれだけで喜ぶだろうと思つて城に帰った時に話してみた。二人共とても良い食いつきだったので、明日にでも案内してあげると誘うと、すぐ喜んでくれたのだった。

この時私はふと思った。以前三人に対して感じた異常を、この子達も抱えているのだろうか。

思い至つてしまえばそれは呪いのように私の思考を容易く塗り潰した。

そして翌日、私は二人と護衛数人を連れて書店の近くの場所まで来ていた。

後はすぐその道を左折して、右側二本目の道入ってしばらく進むと目的地という所までやってきた。

私はそこで、所用を思い出したから急いで帰らなきゃいけない。後はその道を左折

して、確か四本目か五本目の道を曲がってしばらく行けば目的地な筈だから。道案内を買って出たのに先に帰ってしまふし、道も最後はうろ覚えだしでごめん。と申し訳ない表情を作つて言つた。

二人は少し残念そうな表情だったが、護衛も居るし、時間もあるので、心配しないで大丈夫です。気をつけて戻ってくださいね。と優しげに言つてくれた。

ごめんね！ ともう一度謝つてもと来た道を引き返し、視線が切れた所で気配を消して軽く変装し、再びもと来た道を引き返した。

もし何事もなければ所用は別日だったとして謝つて合流しよう、そう思いながら歩きだした二人と護衛の尾行を開始した。

声がぎりぎり聞こえる位置取りをしつつ、皆を観察する。

護衛も二人もこの近辺には来たことが無いのは確認済みだ。護衛は少し堅い表情をしているので本来に来た事がないのだと推測できる。自然を装いつつ、気を引き締めて二人の周囲を固めている。

一団は道を曲がり、右側を見ながら進んでいく。

一本目を過ぎ、二本目を過ぎようとした所で二人が足を止めた。

小声で何かを話し合い、その道を曲がろうとする。

すると護衛が静止の声を掛ける、劉備様は四本目か五本目と仰つていた筈ですが、と。

二人は、劉備様はうろ覚えと言っていたので、確認しながら進みましょう。と言つて護衛を引き連れてそのまま真っ直ぐに進んでいった。

確かに二人の言い分は正しく、二人の性格なら有り得る行動。

だがそれならば何故一本目を通り過ぎたのが分からない。

後で聞いてみようとは思うが、だけどもまあ予想はつく。何となく、勘で、そんな不確かな言葉が続くのだろう。

私は諦観が混ざつた表情で彼女達に背を向け、そして城に着く頃には完全に表情を作り変えていた。

それからまた小さな違和感が積み重なる。

例えば新しく入ってくる武将達の馴染む速度が異常に早すぎるだとか、知らない筈の情報と共有して知っていたりだとか、嫌な予感が正確過ぎるだとか、そんな有り得ないの連続。

しかもこれが周囲だけでなく、自分にも当て嵌まるとききた。なのにそれが何処から来ているのか、どういった原理が働いているのか皆目見当もつかない。不思議というよりも不気味なものを私は感じていたのだが、それはどうやら私だけのようで、周囲は違和感にすら気づいていない。

それもそうだと思う。さつきは私も当て嵌まると言ったが、頻度、精度が全く違う。私の何となくは他の仲間と比べて頻度も精度も二割か三割といった所。私は武器にも薬にも薬にもならないから受け入れられず、彼女達は恩恵を強く受けられるから無意識に何らかの理由をつけて受け入れられるのだ。

そんなもやもやする物を胸に抱きながらも、私達は手を携えて駆け上がり、全てが決したあの戦いへと突入する。

違和感の極限、赤壁の戦いである。

「……までの話で気になった事はある？」

「無い、訳ないんだけど、自分の中で整理したい。気になる部分があまりに多すぎる」「存分にどうぞ。けどその前に一つ言いたい事と聞きたい事がある。」

赤壁は今まで通りかそれ以上の違和感が付き纏う戦いだっただけは間違いない。

けどそれは今までのように不確かで何とも言い表せない曖昧な何かが原因じゃない。皆が魂魄までも削りに削って編み出した作戦が尽く失敗した裏には明確な理由が存在していると私は睨んでいる」

「……」

「今回の戦いの中心は私でも孫策さんでも貴方でもない、天の御遣いこそが中心にいた

のだと私は推測する」

「?!」

「そして聞きたい。

彼は戦の後、何処に行ってしまったの？」

95. 天の御遣い

私の言葉の白刃は、彼女の喉元まで迫る事が出来たようだ。

「突飛な推測だったけど、貴方の反応からして私は二つの確信を得た。

一つは私の感じていた違和感が本物であり、それに近いものを感じていたのが私だけでは無かった事。

二つは天の御遣いが消えた理由を貴方は知っているという事」

「何故、それを？」

「……これ以上持つていても意味のない物だし、最後の手札を切るよ。

ねえ、貴方が信用し、信頼する兵に大まかな順番を付けるとしたらどうなる？

ああ、性格とか性質じゃなくて、領地の人、古参の人とかで言っただけ」

「……必要なら答えるわ。

まずは主だった将たる者。素性も何もかも洗い出してるし、長く接しているから機微も読める。

次は最古参の兵達。旗揚げ当時から付き合いの者は全ての苦労を分かち合ってるから裏切る者はいないと断じられる。

次は難しいわね、僅差で旗揚げ後からの兵、次いで黄巾討伐で名を上げた後に来た自領の兵かしら。

次は

「次は大丈夫、答えは出たよ。」

私が当初予想していた展開通り、貴方は旗揚げと黄巾討伐の間に入った兵を三番目に挙げた」

「それになんの意味が……っ、まさか?!」

「貴方が三番目に挙げた兵は黄巾討伐中に徴兵したその土地の人達だよね。」

あの時はあらゆる有力者が好き勝手に人と物を取り込んでいた。

それは当然の事。地元の民を案内役として取り立てるのは常識だし、大乱の戦時下では漢の目も制約も緩んでいたし、戦功を上げるために戦力は少しでも多い方が良いし、将来敵になるだろう別領地の人間を取り込むのは戦略として正しい。

ただど所詮は別の領地を故郷とする人間、裏切る可能性は無きにしもあらず。だから普通なら信用できる順番は低いはず、けど」

「彼女らは誰も彼もが優秀で忠誠心も高く、なにより旗揚げ直後で私の名が高くなかったにも関わらず、諸侯の中から私を選んだ。だから私は登用し、重用した」

「私は学生時代に各有力者から多方面の情報を抜きに抜いていた。」

そして私は黄巾討伐中に別の軍に行く者を支援していた。

ここまで言えば側近の人も分かるかな、私の情報網はそこで完成したの。

特に最後まで立っている人間だろうと予測した曹孟徳には格別気を遣ったよ。公孫賛の所から引き抜いた優秀な仲間を筆頭に数多くを送り、情報は各人から一度か二度しか引き出さず、直接的には決して手を出させなかった」

「……はは、計算高く自己中心的とはよくぞ言ったものだ！ この曹孟徳をして感服する他無いとはっ！

一つ聞く、直接的にと言ったわね。なら間接的に手を出す事は許可したのかしら？

例えば、門番をやっている時に登用を願う人物が来たら、適当に追い払ったりさせたのかしら？」

「さあどうだろ、貴方の元に向かわせた後はほとんど彼女らの判断に任せていたからね」

「はあ、まさかそこまで貴方の手が広いとはね……私もまだまだ未熟だわ」

「正直そこまで読まれてたら勝負にもならなかったよ。」

という事で、これが貴方に施した策の全て。本当に全てを晒した、だから遡及して罰を与えないで欲しい。

先は各人から一度か二度しか情報を引き出さずと言ったけど、あれはそうするしか無かったとも言えるの。多くは貴方を心酔して、ただ一度きりと言って過去の恩と誼につ

「け込むしか無かったんだから」

「そう、それは少し救われる話ね。ともかくその情報網を活用する必要はもうないのだから、今更見つけ出す事はしないと誓いましょう。引き継ぎをしつかりしてくれるなら、望む者は貴方の元へ送ってあげても良いわ」

「寛大な心遣い感謝します。」

と、そういう訳でね、私は貴方が思うよりも貴方を知っている。

「ただど天の御遣いが消えて行方知れずだと知っていても、何故消えたかは分からなかった。だから私は、そこが知りたい」

心を揺さぶり、白刃を突きつけた。

「ここまでやれば、彼女が秘中とする事も語ってくれる筈。」

「そう、ね。ここまで来て、いえ、そこまで至った貴方を前にして、もはや偽る必要も隠す必要もないでしょう。」

その違和感の正体もはつきりと言及しましょう。

それはね、不可思議で超常的でとても理不尽な不可逆の力、天運や運命と呼ばれる不変の流れよ。

天の御遣いが消えたのは、それに逆らったからに他ならない。

「そうね、貴方の事を多く聞かせてもらったのだもの、私の事は知っているだろうから、

彼の話をするのも悪くはないかしら」

運命、ようやく華琳の口から出てきたその単語に、私の脳は凄まじい勢いで働き出す。そうして彼女は天の御遣い、北郷一刀との出会いと別れまで、その全てを語ってくれた。

……

…

天の御遣いの事を聞くにつれ、自身の中にあつた漠然とした何かが明確な形となつていく感覚があつた。

天の御遣いと運命。この単語を中心に私が持つ情報の破片が嵌り、積み、組み、成り、作り、収束していく。

そうして天の御遣いの事を全て聞き及んだ時、

「ああ、やつぱりそういう事なんだね」

深く、納得した。

私がつつ運命という情報の最も古い記憶が、言葉が、知らず溢れた。

「もはや運命は形作られている。私はここに必要なかつた」

遠い昔、先生が放つた言葉だ。

「先生は、あの場になくても良かった」

有り得ない言葉だ。けど感情を排して客観的に見るならば、そういう結論に行き着かざるを得ない。

先生は私の母の命の恩人である。

先生は私の教育者である。

先生は私の村の恩人である。

先生は私の未来を示してくれた恩人である。

けれど、そのどれもに代わりが存在した。

私の母の命の恩人は華陀さんだけに成り得たし、私の教育者は盧植先生だけに成り得たし、私の未来を決めてくれた人は母だけに成り得た。

つまり、先生は私の人生で必要なかった人、とも言えてしまう。

まあ先生という人を知った上では絶対にそんな事言わないし、言わせないけど、そういう見方が出来てしまうという事だ。

そして今、その言葉は私にも当て嵌まる。

「それはつまり、何か掛け違えていたら、私はこの場になくても良かったという事なんだね」

「いきなり何を言うの？ 貴方が周囲に与えた影響は多大であり、勿論私もその中の一人よ」

華琳が言ったその言葉。最後まで立っている人に影響を与えるというのが最終目標の一つである私からすれば、念願成就の言葉に違いないのだ。

けど、もはや純粹には喜べない。

私はその言葉に対して曖昧な笑みを浮かべながら、

「私の人生の話は終わり、だから一先ずこれで終わりに」

終わらせる為の言葉が続けようとして、

「終わりになんてする筈がないでしょう？ 貴方が世界に馴染んでいないという話、私はそれを信じる。貴方は天命の恩恵のような物を受け取れていなかったというのは大凡理解したわ。

けれどね、貴方はここで北郷一刀の話聞いて、何かしらの答えを得たのでしょうか？
ならばそれも合わせて話さない」

とても強い語調で命令された。

「けどそれは蛇足だよ。

運命は決した。あれから違和感を感じる事もなく、世界はごくごく普通に回っている。あれらが私と貴方の人生に今後関わってくる可能性は低いと思う。

それに話も気分を害する類の内容で、そもそも推測ばかりで実際合っているか否か

も」

「貴方は全て話すといい、私は全て聞くと言ったの。

前言を撤回するつもりも、撤回させるつもりもない」

あまりに強い瞳に気圧される。

何が彼女を強硬にしているのかは分からない、だけど心の折れかけている私はその押し強さに抗えない。

「あはは、うん、なら話すよ。

もし間違っている部分があるなら容赦なく反論して欲しい」

私は胸中に溜まった澱のような物を少しでも吐き出す為、大きく深呼吸をする。

勿論そんな事で吐き出せる物は空気だけだ。

だが吸って吐いて吸ったのなら、喋る準備は完成する。

「まず始めに言うべきは、私と天の御遣いは共通点が多いという事。

理想として持つている風景が似ている。

五常において最も徳を重視する。

人との繋がりや大事にし、将や一兵卒や民と広く交わる。

周囲から助けられる立場にいるにも関わらずよく前に出る。

自分の意見を押し通さず、基本的に和を以て貴しとなす精神。

私と彼とでは計算と天然でやっている部分は違うけど、姿勢のような物はとても似

通っている」

反論はない。

だから続ける。

「この点を鑑みて言えるのは、私の代わりは彼でも務まっただろうという事」

華琳の目が鋭さを増す。

だが反論はない、続ける。

「彼は私の位置にいてもおかしくなかった。

彼は貴方と会う前に三人の人物に会っていた。二人は魏の将だけど、一人は蜀の将である趙雲。つまりそこで三人に付いて行けば公孫賛の元にいるか、もしくは趙雲と仲間を探す旅にでも出ていたかも知れないし、そもそも二人の智将は魏に行つてなかったかもしれない。

そして私の仲間の多くは、元々は天の御遣いを求めて旅をしていた。私に似ている人なんだから、きつと皆との相性は良かったに違いない」

「郭嘉と程昱は彼と出会った当時、既に華琳さまを主にしようとしていた。その可能性は低いだろう」

「そつか、名を上げきる前にあんな有能な軍師に見初められてるんだから、華琳さんは本当にすごいや」

「ならばそのまま郭嘉や程昱について我らの元に来る可能性はある筈だ」

夏侯淵の話は最もだ。

けれど、

「二人は軍師で身体能力はさほど高くない、そして天の御遣いの身体的な能力もあまり高くない。天の御遣いは旅慣れていない。天の御遣いは趙雲の名前に反応した。」

話にあつた事を鑑みて、もし三人に付いて行き、しばらくして軍師二人と趙雲が別れるとなつた場合、彼は趙雲に付いて行く可能性が高いし、趙雲は荷物に成りかねない彼を連れて行く器量と余裕がある」

「しかも郭嘉と程昱が彼を天の御遣いだと知つても、私の元に連れて来る可能性は低い。」

天の御遣いは不確定要素が強すぎるし、一度私の元を訪れた時に二人は私が大の男嫌いであるを知っている」

納得してくれたようなので続ける。

「彼と魏の相性は悪かった。」

貴方も赤壁の戦いは勝つ可能性は低かったと言っていたし、天の御遣いが戦いに関与して勝利した結果、彼は消えてしまった。それはつまり魏があそこで勝つのは天意ではなかったという証のようなもの。

魏が勝利する為に彼が遣わされたと言うのなら、流れを変えようとした時に彼の意識

が途絶える理由はないし、流れを変えた結果として彼が消える理由もない筈」
隣からひりつくような気が立ち上る。

だが、

「夏侯惇さん、手にかけてた剣で私を斬っても良いけど、それは私の言葉を正論によつて斬り伏せてからにして欲しい」

「春蘭、怒りを正しく言葉に出来ないのなら、今すぐ気を収めなさい」

「……はっ」

「結論、本来は現蜀こそ彼が居るべき存在で、貴方を打ち倒して天下二分を成し遂げる事が天の望む終わり方だったと私は推察する。けれど何処かで何かが掛け違い、彼は魏に行つてしまい、貴方達と彼の奮戦により、運命に勝つてしまった。結果生じた歪みは彼を呑み込み、今の歴史が残される事になった。」

そう私は考えている」

さて、反論は。

「反論は、無いわ。」

貴方の推察は不可思議の塊だけど、筋が通り過ぎている。

反論をするにはもつと運命や天の御遣いに対して深く知る必要があるけれど、もはやそれらは知る事すら不可能と来ている。

いえ、一人だけ運命について知っている可能性のある人物がいる」

「そう、謙信先生がいる、筈なだけどね」

私の情報網は完成している、けど私達の陣営に先生はいない。

話は最後と言った、話せるなら先生について語らない筈がない。

それが答えだ。

「私はずっと前からあらゆる手段を用いて搜索をした。

広い大陸だもの、人が紛れるのは簡単。けど先生の容貌、能力、性格は乱世の中でより輝く。だからすぐに見つかると思ってたよ。

けど私と別れてからの先生の足跡は一切追えなかった。数年を費やしても先生の影すら掴めない。そんな長い間、全ての痕跡を消して隠れきるなんて不可能だ。

だから最近是这样思うようにした。先生は私を育て上げた後、天の御遣い同様に何処か遠くへ行つてしまったんだろうって」

「それは……」

「もう割り切った事だから、良いの。

ともかくこれで私の話せる事は本当にお終い。後味の悪い終わり方でごめんね」

「いいえ、話を聞けて良かったわ。

私は彼をいとも簡単に手に入れたものだから、その出会いについては深く考えてこな

かった。けれど出会いにも関門があり、一つ掛け違えば今は無かったのだと知る事が出来た。

現在と未来をより愛おしく思えるし、天命に背いてまで自分の意志を貫き通した彼をより尊敬できる。

これで良かったのか、もつと上手く出来たのでは等と思う事自体が烏滸がましいのだと確信したわ。

有難う桃香、貴方の話が聞けて良かった」

「華琳さんは、強いね。」

話せば後悔すると思ってたけど、今では話せて良かったと思ってる。

貴方を知り尽くしていると思っただけ、貴方は私の想像を超えて大器だった」

「当たり前よ。私を誰だと思ってるの？」

形式では私達は完膚なきまでに負けた。本拠地まで押し込まれるような戦争に平和的解決なんて求めるべくもない。普通の決着ならば今頃私の首は飛んでいて、曹操さんに影響を与えただけで私の目標は止まってしまっただろう。

目標は達せたが、理想は叶わず、最期は未練を胸中に残して逝く筈だった。

けど彼女は私達に機会をくれ、生きて理想の礎を成せと言ってくれた。

これほどの器量人なのだ、頭を垂れて膝を屈するのにどれだけの躊躇いがあると言う

のか。

「うん、そうだね、さすが自他共に認める霸王様だ。

送った皆が貴方に忠誠を誓うのも分かるよ。私も心の底から貴方に仕えようと」

「あら、貴方がそんな樂をしちやうのかしら？」

「えっ……ああ、そっか、そうだね」

朱里に言つた言葉そのままだ。

その背に預けるのではなく、自ら背負つて一緒に進むのだ。

「皆の理想を作り上げるといふ私の理想を叶える為、これから私は邁進する。

その機会をくれた貴方に無上の感謝と友愛を捧げます」

「それならば受け取りましょう。

これからは手を取り合つて、けれども競争をしながら、平和に騒がしく未来へ進みましよう」

きつと私は生きている間に自分と皆の理想を成し遂げるだろう。

それだけの人材が三国にはいる、それをできる天の知識がある、成すための平和な時間もある。

私達は立ち上がり、約束と握手を固く交わし、長い長い話し合いを終えたのだつた。